GOVERNMENT OF INDIA

ARCHÆOLOGICAL SURVEY OF INDIA

ARCHÆOLOGICAL LIBRARY

ACCESSION NO. 27101

CALL No. 913.005P/Z.P.

D.G.A. 79

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

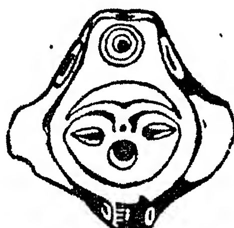
Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA

913.005 P
Z.P.



5. BAND 1. HEFT

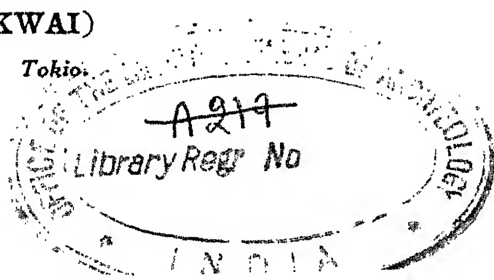
TOKIO

March 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



CENTRAL ARCHAEOLOGICAL
LIBRARY, NEW DELHI.
Acc. No.
Date.
Call No.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama, Isamu Kohno, Keisuke Ikegami, Sueo Sugiyama, Kingo Tazawa

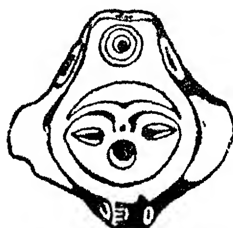
Jahresbericht

der

Japanischen Praehistorie

(SHIZENGAKU-NEMPO)

1932



4.Jahrgang

Tokio

Janual 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9. Onden Aoyama Tokio

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Sueo Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

兒玉郡古墳分布調査　金鑽　武城　埼玉史談　四　一

(四)

靜岡縣史　靜岡縣　第一、二卷

埼玉縣史　埼玉縣　第二卷

群馬縣史蹟名勝天然紀念物調査報告　群馬縣　第二輯

考古學研究法　オスカル・モンテリウス著　濱田耕作譯　單行本

考古圖錄　東大文學部考古學研究室蒐集品　第六輯

人類學論文集　京都帝國大學清野研究室　第六册

考古學に於ける隨筆問題　森本六爾　考古學　三ノ四

三宅米吉博士考古學關係著作年表　同　三ノ四

考古學時評に就て　森本六爾　同　三ノ七

(五)

膽振國千歳村火山灰下の竪穴遺蹟　河野廣道　人類學雜誌　四七　五

熊の紋様ある土器　杉山壽榮男　同　同　一七

(六)

奄美大島群島徳之島貝塚に就て　小原一夫　史前學雜誌　四ノ三、四

琉球崎樋川貝塚　島田貞彦　歴史と地理　三〇ノ五

(七)

朝鮮感鏡北道雄基近郊で發見された石器時代人々骨に就て　今村豐　人類學雜誌　四七　一二

朝鮮先史時代土器概説　及川民次郎　朝鮮陶磁　一

朝鮮滿洲の磨製石器に就て　鳥居龍藏　上代文化　八

(八)

石器時代の東西蒙古　江上波夫　考古學雜誌　二三　四

北支那の新石器時代の問題　水野清一　同　二三　一

牧羊城　東亞考古學會編　東方考古學叢刊第二册

歐米に於ける支那古鏡　梅原末治　單行本

支那古代銅利器に就て　梅原末治　東方學報　第二册

師比並に郭落帶に就て　江上波夫　同

玉璧考　水野清一　同

(九)

國際的研究の一分課としての日本史前學使命　ヴヮン、スタイン、カーレンフエルス　史前學雜誌　四ノ三、四合

日本舊石文化存否研究　大山柏　同　四ノ五、六合

東亞の舊石器時代　エミール・リサン著　山口隆一譯　人類學雜誌　四七ノ

極東考古學の諸問題　徐永深著　樋口清之譯　考古學　三　附錄

歐洲舊石器編年の過程　大山柏　史前學雜誌　四　二

エジプトの舊石器　―セーリーグマン氏寄贈の石器研究―　大山柏　同　四　四

Mohenjo-Daro 及び Happa の遺蹟と古代印度の Indus 文化に就て　白井長助　史觀　第二册

佛領印度支那の石器時代　―パット氏、ミンカム新石器時代洞窟墳墓の發掘―　アグノーエル述　史前學雜誌　四　一

ロシア考古文化史圖説　平竹傳三　單行本

筑前遠賀郡水卷村立屋敷の遺跡	田中幸夫	考古學	三	四
播磨國吉田史前遺蹟の研究	直良信夫 小林行雄	同	同	五
諏訪天王垣外發掘の彌生式土器及び石器(上、下)	藤森榮一	同	同	六、七
大和中曾司の石器時代遺跡	崎山卯左衛門	同	同	六
遠賀川遺蹟の土器紋樣一覽	田中幸夫	同	同	七
子母口出土の小型彌生式土器	齋藤房太郎	史前學雜誌	四	一
世田ケ谷鶴岡出土の彌生式土器	齋藤房太郎	同	同	三、四
青銅文化傳播に對する一考察	島田貞彦	大和考古學	第二年ノ二號	
新澤村發見の二三の彌生式土器	小林行雄	同	同	同
耳成村坪井發見の遺跡遺物出土報告	下村正信	同	同	同
上代から視た丹波市町の遺蹟遺物(下)	乾健治	同	同	同
大和唐古彌生式彌跡發見の土製丁字勾玉に就て	下村正信	同	同	同
醍醐池出土土器	島本一	同	同	同
大和發見の彌生式土器に就て	樋口清之	同	同	三號
有孔土器殊に底部又は其同線に穿孔せられたものに就て	仁科義男	同	同	同
大和高取稲村山發見遺物に就て	島本一	同	同	同
符坂氏祕藏の銅鉾と鑑鏡に就て	吉田宇太郎	同	同	四號
大和竹之内遺蹟發見の石器に就て	樋口清之	同	同	同
信濃の青銅文化	八幡一郎	信濃		三

(三)

武藏國橘樹郡宮前村梶ケ谷古墳調査概況	石野瑛	考古學雜誌	二三	一
石槨内より和鏡を發見せる遠江の古式墳墓	西郷藤八	考古學雜誌	同	一
信濃國小縣郡の岩窟古墳	小山眞夫	同	同	二
和泉陶器村窯跡發掘概要	末永雅雄	同	同	三
庖丁形石器に就て	栗山一夫	同	同	同
所謂消火器形埴輪に就て	後藤守一	同	同	七・八・十二
攝北特種構造古墳二例	太田陸郎	同	同	八
伊勢國桑名郡柚井貝塚に就て	島田貞彦	同	同	一〇
火葬骨壺の一型式に就て	齋藤忠	同	同	一一
大和菖蒲池古墳出土鏡と銅鉾に就て	吉田宇太郎	同	同	同
尾張國羽黒石棺の文樣に就て	長谷川惠二 森徳一郎	史蹟名勝天然紀念物	七	一
神奈川縣金澤町大塚調査報告	赤星直忠	同	同	一一
ふた ―其の發生を稽へ甕棺の編年理論に及ぶ―	山口麻太郎	考古學	三	一
大和發見銀釧の一新資料	島本一	同	三	三
播磨國飾西東山古墳	島田清	同	三	七
大和に於ける前方後方墳に就て	田村吉永	大和考古學	二	三
小石室を有する北今市の一古墳	田村吉永	同	二	四
河内國藏之内の火葬墳墓	淺田芳郎	同	二	同
大和に於ける形象埴輪に就て	島本一	同	二	同
一つの婦人土偶に就て	相川龍夫	上毛及上毛人		一七八
西大室の前二子古墳	諸田八百七	同		一八二
鞆の埴輪	相川龍夫	同		一八三
日吉臺古墳發掘報告	柴田常惠	史學	一二	一

關東に於ける繩文式土器の一新型式	甲野　勇	史前學雜誌	同	三、四
下總姥山に於ける石器時代遺跡	松村　瞭 八幡一郎 小金井良精	東京人類學教室研究報告第五編		
近畿地方發見の繩文土器に就て	大場　磐雄	大和考古學	二	二
石槍に關する二三の問題	八幡　一郎	同	三	同
三輪遺跡と其の遺物の研究(一)	樋口　清之	同	四	同
女大原出土の先史時代遺物	江口　善次	信濃	五	同
木崎湖畔先史時代遺跡及び遺物	江口　善次	同	七	同
諏訪郡下諏訪町久保小字土田遺跡	兩角　守一	同	十一	同
甲斐國の史前大觀	仁科　義男	都留史前研究所發行		
入間郡高萩村の先住民族民住阯	清水　嘉作	埼玉史談	三	四
先史原史時代調査(山梨縣北巨摩郡)	北巨摩郡研究部編			
北海道上磯町發見の繩文式土器	甲野　勇	史前學雜誌	四	一
北海道網走町出土土器に就て	米村喜男衛	同	同	三、四

(二)

再び東京府下久ケ原の遺跡に就て	中根　君郎	人類學雜誌	四七	一
東京府久ケ原發見の遺物追加その他に就て	德富　武雄	同	同	五
磨製片刄石斧の意義	山内　清男	同	同	七
大阪市東成區森小路發見の有棘石槍	島田　貞彦	同	同	十
飛驒國再度發見の彌生式土器	笠原　烏丸	同	同	同
信州諏訪郡長地村榎海戸遺蹟	兩角　守一	考古學雜誌	二三	一
石見上府村發見銅鐸の出土狀態	直良　信夫	同	同	二
御床字松原の貨泉發見地	中山平次郎	考古學雜誌	同	二
兩系統彌生式民族の石斧製作法に現はれたる民族性	中山平次郎	同	同	四
繩文式土器を發見せる伯耆地方の彌生式遺蹟に就て	倉光　清六	同	同	四・五・七
福岡地方に分布せる二系統の彌生式土器	中山平次郎	同	同	六
飛驒國初發見の彌生式土器に就て	笠原　烏丸	同	同	七
九州地方出土の有紋彌生式土器	山本　博	同	二三	九
筑後三潴村の遺跡に就て	山本　博	同	同	一一
考古學上より瞥見したる淡路の遺跡遺物に就て	鍛治　利夫	同	同	同
一種の有孔小土器	中山平次郎	考古學	三	一
彌生式櫛目式文樣の分布	小林　行雄	同	同	同
因幡國濱坂砂丘遺蹟	直良　信夫	同	同	同
肥後國下益城郡隈庄町出土の彌生式土器	小林　行雄	同	同	同
遠賀川遺蹟の土器と銅鐸と細線鋸齒文鏡	中山平次郎	同	同	二
九州彌生式土器の一樣式	板本　經堯 小林　行雄	同	同	同
神戸市の史前遺跡	太田　陸朗	同	同	同
伯耆國彌生式土器の二三の文樣	倉光　清六	同	同	三
名古屋市西志賀町貝塚	林　魁一	同	同	同
彌生式土器窯址の新發見	仁科　義男	同	三	同
彌生式土器聚成圖と彌生式時代地名表	森本　六爾	同	同	四
安滿B類土器考 ―北九州第二系彌生式土器への關聯を論ず	小林　行雄	同	同	同
古墳發見の伯耆彌生式土器(上・下) ―特に高麗村長田の方墳發見品―	倉光　清六	同	同	四、七

昭和六年　考古學論文并報告資料

（一）

下總國結城郡富塚遺跡	八幡　一郎	人類學雜誌	四七	一
福島縣藤原川流域石器時代遺跡と年代	八代　義定	同	同	四
特殊型打製石鏃	赤堀　英三	同	同	同
千葉縣安房郡神戸村大塚貝塚に就て	大場　磐雄	同	同	一一
常陸國眞壁郡伊讃村女方の土器	徳富　武雄 中根　君郎	同	同	一二
武藏國南多摩郡南村「ナスナ」原發見の土器に就て	八幡　一郎	考古學雜誌	二一	一
相模中川村遺跡	赤星　直忠	同	同	三
鹿兒島縣大口盆地の遺跡	木村　幹夫	考古學雜誌	二一	一〇
飛驒國再度發見の注口土器に就て	笠原　烏丸	同	同	一一
信濃國下高井佐野の土器	八幡　一郎	考古學	三	三
山梨縣石器時代概觀（上）	仁科　義男	同	同	同
飛驒發見の環狀石斧に就て	笠原　烏丸	同	同	四
楕圓捺型紋土器	八幡　一郎	同	同	六
異形の石製品	倉光　清六	同	同	同
日本石器時代硬玉渡來傳播私考	樋口　清之	上代文化	八	八
磐城國棚倉町岸上石器時代の遺跡	神林　淳雄	同	同	同
磐城國曲竹發見の土偶に就て	片倉　信光	同	同	同
久ケ原庄仙遺蹟に就て	佐野　又治	同	同	同
武藏國宮澤村縄文式遺蹟	宮崎　糺	上代文化	同	同
薩摩國西市來貝塚	横山將三郎	史蹟名勝天然紀念物	七	四
九段坂下牛ケ淵の貝塚	鳥居　龍藏	武藏野	一九ノ一	
福島縣新地貝塚	文部省	史蹟調査報告第六輯		
神奈川縣寸澤嵐石器時代遺跡	文部省	史蹟調査報告第六輯		
新潟縣佐渡郡福浦石器時代遺跡城貝塚、三宮貝塚	新潟縣	新潟縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第三輯		
關東に於ける奥羽薄手式土器（下）	大場　磐雄	史前學雜誌	四	一
下野國河內郡本村野澤の土器	山內　清男	同	同	同
貝塚餘談 ―筑前國遠賀郡香月村楠橋貝塚―	甲野　勇	同	同	同
横濱市三澤貝塚の土器	池上　啓介	同	同	同
武藏國殿袋發見の磨石斧	八幡　一郎	同	同	同
陸前國稻井沼津貝塚に就いて	大山　柏	同	同	同
陸前國稻井村沼津貝塚出土の一部骨角器	大山　柏	同	同	同
下總飛ノ臺貝塚調査概報	杉原　莊介	史前學雜誌	四	三、四
武藏國北足立郡春岡村小深作遺跡	甲野　勇	同	同	同
江古田御嶽の石器時代遺蹟に就て	堀野良之助	同	同	同
下總上新宿發見の紡錘形土製品	中根　君郎	同	同	同
縄紋ある土器片（二）	中根　君郎	同	同	同
李王家御貸下の石器類	大山　柏	同	同	同
武藏久ケ原庄仙出土の土器片	中根　君郎	同	同	同

本名	略號
Mitteilungen der Anthropologie. Gesellschaft in Wien.	Mitt. d.Anthr. Ges. Wien.
民俗學	民俗學
民族	民族
N	
日本研究	日研
Natural History.	Nat. His.
P	
Praehistorische Zeitschrift.	Praehis. Zeitschr.
R	
歴史地理	歴地
歴史と地理	歴と地
Revue anthropologique.	Rev. d'anthr.
Revue mensuelle de l'Ecrle d'anthropologie de Paois.	Rev. mens. d. Ecol. anthr. d. Paris.
S	
社會學雜誌	社雜
宗教研究	宗研
史學	史學
信濃考古學會誌	信考
埼玉史談	埼史
史學雜誌	史雜
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名
史前學雜誌	史前雜
史苑	史苑
史林	史林
T	
東北文化研究	東文
東洋學藝雜誌	東學誌
東洋學報	東學報
Z	
Zeitschrift für Ethnologie.	Zeitschr. f. Ethnol.

遺跡記號例（再錄）

地上標式の一例

貝塚	鹹水	▲
	淡水	▲̄
	鹹淡	▲̇
	未調査	△
住居跡	竪穴	▼
	平地住居	⌂
	洞窟	凸
單なる遺物發見地		×
繩紋式を示す場合		↑
彌生式を示す場合		＋

備考

1 本標式は私共研究所で主として遺跡を標式する爲に作出したもので、會員諸君の御參考までに掲出したのであります。
今後私共ではこれによつて標式してまいりますから、本標式と御對照を御願します。

2 標式は猶不足のものもありますが、漸次增補を加へて行きたいと思ひます。

3 標式の樣式は必ずしも、本標式のみとも限らず、更に色々の考案もあることゝ思はれますから、これ等に對し、諸君の御考案を御知らせ下さい。

雑誌名略稱一覽（再錄）

1 論文中に屢々引用せらるゝ雑誌名を、一々記載する煩を避け、或は本名未詳の略稱等を統一する爲、本覽を設けた。便利であるなれば御使用を願ふ。
2 雑誌の種類も、手近にあり、且つ比較的多く引用せらるゝものと考へらるゝ範圍に止めた。特に外國雑誌に於て然りである。
3 本覽は、本年度の試みに過ぎない。次年度に於て、改正增補も期して居る。

本名	略號
A	
American Anthropologist.	Americ. Anthr.
Aarböger for Nordisk Oldkyndighed og historie.	Aarbög. f. Nord. Old. o. His.
B	
Bulletiues ef Mémoires de la Société D'Anthropologie.	Bull. et. mém. Soc. d'anthr.
C	
地理學評論	地評
地質學雑誌	地質
中央史壇	中央
D	
動物學雑誌	動物
E	
Eurosia Septentrionalis Antipua.	Euras. Sept. Antip.
G	
現代の科學	現科
J	
上毛及上毛人	上毛
人類學雑誌	人類
上代文化	上文
人性	人性
Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Irland.	Jour. Anthr Inst.
K	
考古學雑誌	考雑
國學院雑誌	國雑
考古學	考古學
科學知識	科知
考古學會雑誌	考會雑
考古界	考古界
考古學研究	考研
Korrespondenz Blatt der deutschen Gesellsochaft für Anthropologie, Ethnologie und Ugeschichte.	Korr-Blatt d. deutschen Ges. f. Anthr Ethnol. u. Urgeschichte.
L	
L'Anthopologie.	Anthr.
M	
民俗藝術	民藝
Man.	Man.
Mannus.	Mannus.
Memoires de la Société Royale des Antipuaires der Nord.	Men. d. l. Soc. Roy. d Antiq d. Nord.

仙臺市東北帝國大學解剖學教室　山内清男
東京市澁谷區代々木三谷町二八三　柳澤保承
東京市外砧村成城學園前　柳田國男
秋田市川口下裏町　鑓野目条藏
長野縣諏訪區永明村　矢崎源藏
東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一四五三　矢崎芳夫
長野縣南安曇郡豐科高等女學校　安間清
東京市王子區岩淵町下村一四三三　八幡一郎
東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町豪德寺前一〇九五　横山健堂
朝鮮京城府東四軒町五〇　横山將三郎
北海道北見國網走町　米村喜男衛
奈良縣高市郡金橋尋常高等小學校　吉田宇太郎
兵庫縣西宮市社家町一〇　吉井太郎
横濱市神奈川區神奈川通六丁目一八一　吉川菊藏
福岡縣築上郡友枝村　吉村鐵臣
大分縣西國東郡高田町宇佐神宮　吉成安親
東京市本郷區駒込蓬萊町五八清林寺內　吉野巖成
長野縣上伊那郡赤穗町下平　吉澤正男
東京市牛込區神樂町二ノ二五　依田雄甫

合計　二八〇名（退會者二七名、死亡者二名／入會者一八名）

東京市淀橋區上落合四五六　高島徳三郎
東京市四谷區花園町三五　竹下次作
神戸市西灘町上野八二　田村文雄
東京市牛込區矢來町九二　田村壯次郎
東京市南葛飾區金町一〇七四　田邊孝次
石川縣金澤市騎兵第九聯隊　田中春雄
北海道函館市谷地頭町八六　谷徹一
東京市杉並區上荻窪町五八六　田澤金吾
兵庫縣西宮市鞍掛町七九　辰馬悦藏
東京市澁谷區穏田町二丁目八　田原鎮雄
仙臺市　東北帝國大學附屬圖書館
靜岡縣掛川町城內　鴇(トキ)田忠雄
東京市大森區山王二、八三二　徳富武雄
臺灣臺北市東門町五條一一三　富田省吾
大阪市港區八雲町四丁目三一　遠山潔雄
新潟縣高田市高田病院　外山哲二郎
東京市牛込區市ヶ谷町一一二　塚越卯太郎
東京市芝區白金三光町一一九　塚本壽一
東京市澁谷區代々木本町八三七　筑波藤麿
東京市赤坂區高樹町三　岡本方　恒松安夫

U之部

京都市左京區下鴨中川原町三四　梅原末治
東京市世田ヶ谷區羽根木町一七一五　宇宿捷
東京市大森區新井宿二丁目木原山一六一八　上田恭輔
香川縣香川郡安原村　上原準一
大阪市北區中之島三丁目　終身會員　上野精一

W之部

東京市小石川區林町九五　和田千吉
京都市左京區高野清水町二六　和食和
福島縣雙葉郡請戸村請戸　渡部晴雄
東京市麻布區富士見町二八　渡邊泰三
東京市本郷區駒込林町一　別所弘三方　渡邊鶴松

Y之部

長崎市紺屋町一八　山田清
横濱市中區本牧町箕輪下三九二　山本磐彦
仙臺市東二番町八六虎岩方　山本桝藏
京都市中立賣通烏丸西入　山本行範
長崎縣南高來郡加津佐村　山崎醫院　山崎重長

東京市世田ヶ谷區代田鶴岡六三二　齋藤　弘
東京市四谷區愛住町一六　齋藤庄太郎
高田市高田師範學校　齋藤秀平
東京市中野區住吉一七片桐方　坂口保治
東京市小石川區高田老松町四三　酒井忠一
臺灣臺北市龍口町三ノ一八　坂元軍二
熊本縣菊池郡泗水村字住吉日吉神社　坂本經堯
奈良縣高市郡眞菅村大字曾我眞菅小學校內　崎山卯左衞門
Köln, Hansaring 32 a Deutschland　Dr. Alfred Salmony
兵庫縣津名郡廣石村　佐野淡一
東京市澁谷區若木町九國學院大學　佐野文治
靑森市榮町　佐々木新七
横濱市神奈川區靑木町神奈川高等女學校　佐藤善治郎
北海道稚内町中通リ三　關　正
東京市板橋區練馬向山町四一　柴田常惠
東京市牛込區市ヶ谷仲之町三八　志賀三亥
東京市淀橋區柏木町三四八　鹿野忠雄
關東廳旅順博物館　島田貞彥
奈良縣高市郡八木町新道　島本　一
東京市豐島區池袋四丁目五〇一　島村孝三郎
東京市世田ヶ谷區池尻一五五　下村作次郎
大阪市住吉區駒川町八丁目一七　下村正信
東京府北多摩郡小金井村一四二八　品川　潤
三重縣宇治山田市古市町　篠田良二
山形縣酒田市山王臺　白崎良彌
仙臺市東北帝國大學理學部地質古生物學教室　竹根　廣
東京市澁谷區氷川町五三阿部方　鈴木　一
三重縣津市縣立女學校　鈴木敏雄
東京市四谷區南寺町五〇　菅沼秀助
滿洲國奉天浪速通三〇大滿蒙新聞社內　菅崎三文
東京市牛込區河田町一一　杉山壽榮男
東京市日本橋區小舟町三ノ一　杉原莊介
東京市外砧村喜多見一〇四六　角田文衞

T之部

横濱市鶴見區東寺尾町一五一二　多田純二
東京市四谷區仲町學習院　高橋一凱
東京市大森區東調布町田園都市第八四號　高橋正人
東京市下谷區上野帝室博物館　高橋直一
群馬縣前橋市紅雲町　高橋照之助
熊本縣鹿本郡山東村　高群清太
茨城縣新治郡石岡實科高等女學校　高野修正

東京市中野區打越町中野驛北口松下政治方　中川德治
東京市神田區三崎町二ノ九東京齒科專門學校　中井武一郎
奈良縣吉野郡下市町大字下市　中村幸之
東京市品川區大井町四七三八　中根君郎
東京市本郷區西片町一〇ろノ九號　中澤澄男
大阪市大阪毎日新聞社　中島秀雄
長野縣埴科郡坂城町農蠶學校　中島惣左衞門
大阪市外布施町菱屋西二七ノ四　中谷治宇二郎
愛媛縣北宇和郡吉田町　長山源雄
福岡市荒戸町四　中山平次郎
兵庫縣明石市大藏谷山崎　直良信夫
東京市芝區田町二ノ一八川崎鐵網工場內　那須章（アキ）彌（ヤ）
京都市室町通中立賣下ル　西村保太郎
東京市小石川區小日向臺町一ノ七五　新渡戸稻造
東京市中野區東中野九二六　野間清六
東京市赤坂區氷川町三四　額（ヌカ）田年（ミノル）

O之部

東京市外砧村成城學園前　小原一夫
北海道上磯町　落合計策
橫濱市神奈川區北幸町三四九七　尾形順一郎

岡山市醫科大學衞生學教室　緒方益雄
朝鮮釜山府釜山中學校　及川民次郎
神戸市楠町七丁目神戸日々新聞社　岡田定信
神戸市荒田町四ノ五六　小野楠雄
東京市外武藏野町吉祥寺一七六ノ三號　大場磐雄
東京市小石川區小日向臺町二丁目一六　大口喜六
長野縣埴科郡松代町　大平喜間多
和歌山縣日高郡御坊町大字島一六九　大地原寛龍
京都市伏見桃山大谷邸三夜莊　大谷光瑞
東京市本郷區森川町七九　太田天洋
東京市麴町區有樂町東京日々新聞社　大塚虎雄
東京市豐島區長崎東町一ノ一二八五　大塚彌之助
岩手縣江刺郡岩谷堂町　小田島祿郎
神奈川縣小田原町本町　尾崎亮司
東京市澁谷區穩田町一丁目九　大山柏方　大山梓
東京市澁谷區穩田町一丁目九　特別幹事　大山柏

S之部

東京市世田ヶ谷區代田五〇七　齋田平太郎
京都市左京區田中樋ノ口町六二　大澤方　齋藤忠
東京市杉並區馬橋町二九八　齋藤房太郎

東京市芝區三田慶應義塾大學寄宿舍　前原光雄
東京市澁谷區若木町九國學國學院大學　丸茂武重
栃木縣足利市通五丁目三一九五　丸山互全
東京市牛込區矢來町　正木直彥
東京市麴町區有樂町東京日々新聞社　增田
東京市淺草區馬道町八ノ一　松田蟻
臺灣臺北市臺灣博物館　松倉鐵藏
東京市目黑區紅葉ケ丘一二七九　松宮左京
東京市芝區白金今里町三九　松本信廣
埼玉縣北足立郡浦和町鯛ケ窪　松本與三郎
東京市本鄕區曙町一六　松村瞭
富山縣立礪波中學校　松承安道
大阪市東淀川區豐峰町南濱一ノ一七松下別莊內　松下胤信
東京市小石川區丸山町一一　明治聖德記念學會
東京市本鄕區駒込神明町五四　水谷泰夫
東京市澁谷區代々木富ケ谷町一五〇二有爲寮　三木文雄
石川縣江沼郡大聖寺町寺町一　三森定男
富山縣氷見郡氷見町上伊勢　湊嘉平次
兵庫縣川邊郡川西町加茂　宮川雄逸
京都市馬町通東山西入　三宅宗悅
東京市杉並區大宮前五丁目二三六　宮坂光次

東京市本鄕區彌生町三　香取方　宮內悅藏
中華民國、北京東華門、內、北河沿五六號　Dr. Herbert Mueller
東京市品川區下大崎二四九　藤田藤吉方　桃井秀治郎
東京市大森區馬込町原丸三八五〇　森潤三郎
東京市澁谷區羽澤町九六　森本六爾
新潟縣高田市横町一四　森成麟造
東京市澁谷區若木町九國學院大學　森貞次郎
岐阜縣大垣市東長町一〇四一ノ一　森俊雄
京都市東洞院丸太町南入　守屋孝藏
長野縣諏訪郡上諏訪町　兩角守一
福岡市春吉三軒屋四三三　許山通齊
宮城縣石卷町住吉町　毛利總七郎
横濱市中區南太田町一七五五　村田重義
横濱市中區南太田町一七五五　村田重義方　村田義夫
秋田縣河邊郡豐岩村　武藤一郎
秋田縣仙北郡神大村小松村本町　武藤鐵城
兵庫縣明石郡垂水町西垂水字舞子ケ平二〇天ノ二　武藤留之助

N之部

東京市世田ケ谷區若林町一一　內藤政光
横濱市神奈川區青木町東輕井澤一、八五七　中川直亮

東京市神田區小川町五〇	賀古　明
東京市澁谷區若木町國學院大學	神林淳雄
大阪府堺市三國ヶ丘四七〇反正帝陵前通東端	神田徳明
栃木縣足利郡御厨町福居五三三	神山美太郎
京都市帝國大學醫學部解剖學教室	金關丈夫
京都市木津屋橋通り堀川東入	金高勘次
東京市大森區入新井四ノ七四四	簡野　啓
青森縣弘前市弘前女學校	神崎　正
關東廳旅順市松村町二〇	關東廳圖書館
神奈川縣鎌倉町由井ヶ濱一〇六	片野貞明
東京市品川區西大崎一丁目向原一一二	川合貞一
東京市牛込區揚方町一三	川村眞一
石川縣金澤市高等工業學校機械工學科	桒野藤二郎
東京市深川區東平井町一	菊池山哉
宮城縣宮城郡多賀城村市川	菊池三彌
仙臺市東二番町八六	喜田貞吉
秋田縣秋田市中龜ノ丁上丁一三	桐生和夫
京都市左京區田中關田町二二	清野謙次
Institut für Vorgeschichte Köln, Ubierring 11. Deutschland.	Dr. Herbert Kühn
東京市芝區三田豊岡町三〇	桑山龍進
東京市澁谷區永住町二七	小林胖正
大阪市西區小堀江上通四丁目	小林林之助
神戸市平野雪御所町一五二	小林行雄
東京市豊島區巣鴨町二ノ二四	小堀治平
東京市江戸川區小岩町下小岩四四八	小金井一郎
東京市本郷區駒込曙町一六	小金井良精
京都市左京區北白川小倉町五〇	小牧實繁
秋田縣六郷町	小西宗吉
京都市上京區寺町廣小路上　終身會員	小島勇之助
東京市澁谷區若木町九番地	國學院大學圖書館
東京市牛込區横寺町五七	甲野　勇
札幌市北十八條西六丁目	河野廣道
兵庫縣西宮市鞍掛町七	紅野芳雄
東京市澁谷區若木町九國學院大學	久米本幸種
東京市中野區沼袋南一丁目下沼袋一九三	九島勝太郎
神戸市林田區大丸町三丁目一番地井上靜太方	楠目勝俊
大阪市北區芝田町一〇一高橋鶴義方	栗山一夫
東京市品川區大井町五二八〇	倉本彦五郎
富山縣上新川郡大久保町	栗山邦二
熊本縣熊本醫科大學解剖學教室	忽那將愛

M之部

京都市左京區田中野神町一八　濱田耕作
大阪府堺市神明町西二丁一七　原田博
新潟縣佐渡郡河原田町　原田廣作
横濱市吉田町中區六二　原田久太郎
東京市杉並區下荻窪町三丁目四七　橋本增吉
仙臺市北六番町一二三　長谷部言人
東京市品川區北品川町三丁目御殿山七六 中村方　服部清五郎
富山市清水町五八　早川莊作
滋賀縣彦根町勘定人町　林田芳太郎
岐阜縣加茂郡太田町　林魁一
東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室　林禮
愛知縣清洲町　林良幹
東京市澁谷區代々木富ケ谷町一五〇二　樋口清之
鹿兒島縣大島郡伊仙村面繩　廣瀨祐良
福島縣安積郡福良村中町　本田七郎
東京市神田區田代町二 中村方　北條憲政
東京市中野區江古田九三五　堀野良之助
埼玉縣北足立郡六辻村大字沼影　細淵寅象
和歌山縣西牟婁郡三栖村　細尾榮一

I 之部

青森縣三戸郡八戸町　泉山岩太郎
東京市深川區冬木町一一　池上啓介
茨城縣西茨城郡笠間町　生沼豐彥
新潟縣長岡市殿町三丁目　今井楢三
茨城縣新治郡美並村南根本　今宮新
富山市外稻荷三四　石淵三郎
岡山市南方鐵道官舍　石田憲吾
東京市四谷區大番町一九　石川千代松
大阪府豐能郡麻田村大字麻田一七三一　石川文彥
横濱市神奈川區岡野町一三一　石野瑛
長野縣埴科郡松代町六二九　石坂福治
東京市麻布區龍土町五八　伊丹信太郎
仙臺市土樋一五四 渡邊方　伊東信雄
三重縣桑名郡七取村大字香取　伊藤富太郎
東京市杉並區田端七二六　岩井貞麿

K 之部

Ponorogo Java.　終身會員　Dr. P. V. van Stein Callenfels
千葉縣香取郡良文村貝塚區豐玉姬神社社務所內　貝塚保存會
仙臺市本柳町七一 佐藤彰方　海法
北海道岩見澤町空知支廳內　加藤要

史前學會々員名簿（昭和七年十二月卅一日）

A之部

東京市品川區大井水神町二二一六　阿部武義
群馬縣伊勢崎町西町　相川之賀
横須賀市公郷町二七九六　赤星直忠
京都市山科町厨子奥若林三五　明石國助
石川縣石川郡出城村字北安田　曉烏敏
東京市芝區愛宕町慈恵會醫科大學解剖學教室　新井正治
奈良市林小路四〇　新井和臣
東京市目黒區下目黒九六六　有賀智
京都市左京區北白川平井町二二　岡村馬市方　有光教一
東京市世田谷區駒澤町大字上馬引澤八四　有坂鉊藏
東京市品川區南品川町淺間臺　有阪與太郎
東京市本郷區向ケ岡彌生町三　淺野長武
兵庫縣尼崎市竹谷町二丁目四七　淺野隆

D之部

盛岡市仁王小路三三　終身會員　大坊善章
關東州大連市　大連圖書館

E之部

東京市世田谷區上松澤町八七七　江上波夫
宮城縣石巻町裏町　遠藤源七
51 rue de Lévis Paris (17e) France　Eugéne Pépin

F之部

朝鮮京城府崇三洞九九松下四郎方　藤井誠一
長野縣上諏訪町本町　藤森榮一
朝鮮京城府景福宮朝鮮總督府博物館　藤田亮策
3 Square Montsouris, Paris.　藤田嗣治
横濱市關東學院中學部　福田正作
神戸市五番町二丁目二　福島義一
大阪市西成區南海道一ノ三五　船越政一郎方　船越章
東京市外吉祥寺一九〇一　布施安昌

G之部

東京市杉並區阿佐ケ谷五丁目五二六　後藤守一

H之部

東京市澁谷區若木町九國學院大學　祝（ハフリ）宮（ミヤ）靜（ヒトシ）
c/o Ecole Nationale des Langues Orientales Viantes 2 Rue de Lille Paris France.　Haguenauer
北海道函館市　函館圖書館

史前學會昭和七年度會計報告（昭和七年十二月卅一日締切）

收入之部

總計金　一、七三四、三七錢也

內譯

一、前年度より繰越殘金　金　一〇七、五〇錢也

一、昭和七年度中會費收入　金一、〇三四、〇〇錢也

內譯　金三八九、四七錢也

一、終身會員一名分　金二〇〇、〇〇錢也

一、通常會員會費收入　金八三四、〇〇錢也

一、史前學研究所より補助金　金　二六五、〇〇錢也

一、雜誌、小報、パンフレット等賣上金金　三、四〇錢也

一、史前學雜誌第四卷第五、六號代册不足高著者よりの補償金　金二〇〇、〇〇錢也

支出之部

總計金　一、六一五、九四錢也

內譯

一、雜誌製作費　金一、一七八、六四錢也

內譯

一、昭和六年度年報及目次索引　金　八六、八八錢也

一、第四卷第一號雜誌　金一五〇、三四錢也

一、第四卷第二號雜誌　金一八〇、六六錢也

一、第四卷第三、四號雜誌　金三四六、四〇錢也

一、第四卷第五、六號代册雜誌　金四一四、三六錢也

備考　本年度は定規の如く第四卷第六號分を刊行し決算しましたが昭和八年度に於て定規の第五卷第一號乃至第六號の外第三卷別册を含んで發行する豫定であります。

一、史前學會に於て拔刷
寫眞代金等未受領の分　金　一五、二一錢也

一、諸印刷費　金　四〇、三〇錢也

一、雜誌發送料郵便切手購入及通信費金　一〇七、一七錢也

一、事務委託手當　金　二〇〇、〇〇錢也

一、振替貯金諸手數料及用紙代　金　三四、一〇錢也

一、諸雜費　金　四〇、五二錢也

差引殘額（次年度へ繰越金）　金　一一八、四三錢也

史學	三田史學會
史苑	立教大學史學會
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名勝天然紀念物保存會
上毛及び上毛人	上毛郷土史研究會
科學知識	科學知識普及會
考古學雜誌	考古學會
雜誌索引	雜誌索引發行社
大和考古學	大和上代文化研究會
歴史と郷土	神奈川縣中等學校歴史研究會
吉備考古	吉備考古會
上代文化	國學院大學上代文化研究會
考古學	東京考古學會
Mémoires de la Société Royale des Antiquaires du Nord	La Société Royale des Antiquaires du Nord.
Furasia Sepetentrionalis Antiqua.	La Société Finlandaise d'Archéologie.

て年六冊分刊行の意味として左記の特殊の編輯方法をすることゝした故本誌を益々發展せしめる意味で奮て御寄稿を御願ひする。即ち論說、資料何れにても結構なれど特に興味ある長論說の場合は特輯號又は單行本の形式をとつて發表し本誌の一特色として諸君の期待に沿ひ度い考へである。猶昨年度御約束致した「東京灣沿岸地方の繩紋式石器時代の編年學的研究」は本年度に於て出版を見られなかつた事は殘念であるが八年度前半期までには諸君の御手許へお屆け出來る事と信ずる。又第四卷第五號及第六號は前記の主趣に從つて大山柏氏の「日本舊石文化存否研究」を單行本の形式で發表することゝした。

六、講演會其他に就て

大山史前學研究所主催で五月二十二日「カーレンフエルス」氏の「國際的研究の一分課としての日本史前學使命」なる講演會を開催せし事は既報の通りであるが當日の盛會に鑑み今後機會ある毎に此の種の催を開き度い。

七、遺物寄贈者

本年度に於ては大山史前學研究所に左記の史前學會員諸氏より多數の遺物の寄贈を得た事は誠に感謝の至である。特に會員大坊善章氏は永年苦心の結果聚集せられた樺太地方の遺物を多數寄贈せられた事は本研究所の光榮である。依つて研究所と姉妹關係にある本會は幹事會の結果、同氏の御好意に報ゆる爲終身會員に推薦致した。又遺跡遺物の發見を御報告せられたり、研究調査上種々御盡力を賜はつた多數の會員諸氏の御厚情に對しても、深く感謝の意を表し度い。

大坊善章氏　樺太地方發見土器及石器
中市謙三氏　異形土製品
原田靜作氏　埼玉縣眞福寺貝塚出土土版殘缺
齋藤　弘氏　岡山縣出土磨製石斧
落合計策氏　北海道上磯町發見の繩紋式土器、同龜屋發見石劍
保條華廣氏　彌生式土器（出土未詳）
ヴワン・スタイン・カーレンフエルス氏　ジヤバの石器
簡野　啓氏　岩手縣獺澤貝塚出土土器
山崎重量氏　長崎縣貝類標本
新納賴堯氏　茨城縣五霞村貝塚出土熊の犬齒
野澤正次氏　三河國岩井出土環石及び保美貝塚出土矢筈形角器

八、寄贈交換雜誌

本年度に於ける本學會への寄贈及び交換雜誌は左の如くである。

人類學雜誌　東京人類學會
民俗學　民俗學會

史前學年報　昭和七年

昭和七年度史前學會事業報告（創立第四年）

一、序

本會はこゝに本年報を以て創立第四年を送り、遅まきながら第五年の春を迎ふる事になつた事を會員諸君と共に喜びたい。幹事として先づ第一御詫びしなければならないのは、幹事一同各其の研究に追はれてゐる上に、且又菊名貝塚の長時日の調査等の爲、より以上多くの澁滯を來たした事である。

然るに會員諸君に於ては御寛容なる態度を以て今日に至つた事は全く感謝の至りである。本年度に於ては會員諸君の御期待に沿ふべく幹事一同可及限り努力して昨年度の分を取り戻す所存故、昭和八年度の活躍を刮目して見てゐただきたい。

本年報に於ては細目に亘る報告をなし、一つに幹事の責を明かにすると共に、これに基き會員諸君の忌憚なき御意向を伺ひ、以て昭和八年度に於ける會務を律し、史前學會々員相互の研究機關たる實を益々發揮して行きたいものと考へる。又、便宜上、此際申し出でなき場合は、これ亦例年の如く御賛同を得たものとして會務に從事する故、御遠慮なく御意見を寄せて戴きたいのである。

二、會　則

從來と別に變更はありません。

三、會　員

現在會員二八〇名、本年度退會者二九名 入會者一八名

卷尾ではあるが別記二名の死亡會員に對し會員諸君と共に弔意を表し度い。

會員數に就ては幹事の責任の存する所であるが、本會をして充分發展せしめ其使命を發揮せしめる爲には幹事一同不斷の努力を必要とする事は勿論であるが、會員諸君に於かれても多數の新會員の御誘導を御願ひしたい。

四、幹　事

本會創立以來熱心に會務を執られた宮坂光次氏は此の度御都合により幹事を辭任せられ、池上啓介氏に幹事を御願した他は變動がない。

五、史前學雜誌に就いて

本誌の發刊を遲滯せしめた事は重々御詫び致し度い。八年度に於ては發行日を出來得るだけ確實を期し度いが、大體に於い

會　告

一、本年度雜誌刊行豫定に就いて

本年度に於ては定期刊行に恢復する爲め、目下取急ぎ印刷並に編纂中であります、近く第五卷第二號は配付し得る事と信じます、亦目下第三號は編纂を完了し、印刷所に送付してありますから、四月下旬には配付の運びが出來るものと考へます、引續き第三號並に第三卷第六號「東京灣沿岸地方の繩紋式石器時代の編年學的研究」は目下編纂中でありますから、少くとも本年夏迄には定規に恢復したいと感じ一同努力中でありますから暫く御赦しを願ひ度いと存じます。

二、以上の計畫を實施するには一時に多くの費用を要る事となりますから近々昭和八年度の會費拂込の手續きを致しますから何卒遲滯なく御拂込被下樣御準備を御願ひします、又此際前年度分未拂の會員諸君は何卒同時に御拂ひ被下樣御願ひします。

史前學會々則

一 本會ヲ史前學會ト名付ケル

二 本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三 本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査並ニ研究旅行、隨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四 會員
本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五 本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル）

六 會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、
本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七 本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八 本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所內
史前學會
電話青山一二五番

幹事 大山柏　甲野勇　杉山壽榮男　田澤金吾　池上啓介

會計 岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年三月二十五日印刷
昭和八年三月三十日發行
第四卷附錄
定價十五錢

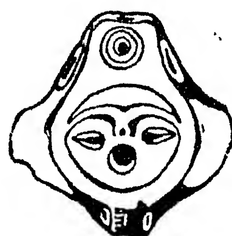
編輯者 東京市澁谷區穩田一丁目九番地 大山柏
發行者 東京市澁谷區穩田一丁目九番地 岡田義一
印刷者 東京市神田區表猿樂町二 株式會社開明堂東京營業所 中村修二

發行所 東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內 **史前學會** 電話青山一二五番 振替東京五八九六九番

發賣所 東京市神田區駿河臺町一ノ八 **岡書院** 電話神田二七七五 振替東京六七六一九番

史前學年報

昭和七年



史前學會

索引

文　　献

餘　白　錄

會　　報

資料

目次

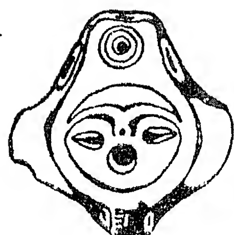
圖版

論説

史前學雜誌

第四卷

目次・索引



昭和七年

史前學會

SONDER NUMMER

ZUM GEDÄCHTNISS

AN

HERRN HIKOICHI MOTOYAMA

INHALT

Herrn Motoyama gewidmet

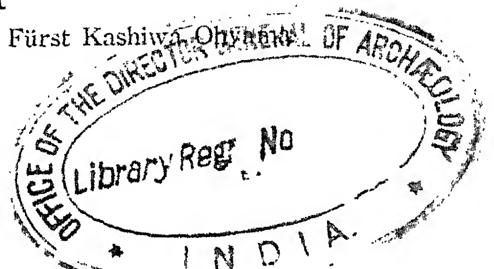
I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Nachrufe

Am 30. Dezember 1932 starb der grossen Beschützer unserer praehistorischen Wissenschaft im 80 Lebensjahre. Herr Motoyama war eigentlich Besitzer der Zeitung Ohsaka-Mainichi sowie Tokio-Nichinichi, aber er interessierte sich besonders für die Archaeologie und er hat selbst mehrere Forschungen gemacht, die ihn als echten Archaeologen zeigten. Auch half er längere Zeit unseren praehistorischen Forschungen durch finanzielle Unterstützung, wodurch er nicht wenig zu unserer Praehistorie beitrug. Als Dank widmen wir ihm dieses Heft.

SHIZENGAKU-KWAI

(Japanische praehistorische Gesellschaft) Fürst Kashiwa Ohyama


OFFICE OF THE DIRECTOR GENERAL OF ARCHAEOLOGY
Library Regr No
INDIA

編輯後記

故本山彦一翁が斯學の後援者として我が考古學界に盡された功績の絶大であつたことは申迄もなく實に空前と稱すべきでありました。この翁の偉大な功績を想ひ、志を同うする諸先生并に同學の諸士と共々に追悼錄を編纂して哀悼の意を表したく本年度の第一號をこれに充てること丶致しました。而して本號は二月中に印刷完了の豫定でありましたが、翁と最も深き關係を有せられた某氏に豫め追悼錄の編纂を談じ、これ又快諾を得て居りましたが、豫定の原稿締切期日をこえましたにかゝわらず原稿が到來しませんため、更に交渉を致しましたところ多少延引するも寄稿するとのことでありました故、學界一方の長老であり且つ翁との特殊關係を思ひまして、特に發行期日を遲延せしめたのでありましたが、遺憾ながら遂に約束の原稿を受領するに至らなかつたのであります。それと一方本號と相前後して前年度の第五六號の代册となるべき特輯本「日本舊石文化存否研究」百六十頁に餘る大册本と昭和七年度年報が印刷中でありまして、この三者の印刷が同時に行はれましたから常よりも多少印刷に手間取りまして、漸く四月に入つて配本するの已むなきに至りましたことは、編者とし洵に申譯なく一つに讀者諸賢の寛恕を乞ふ次第であります。

本年度は如斯第一號が特輯號として刊行が甚しく遲延しましたが、第二號は目下大方の編輯を終りまして印刷に附しつゝあります。從つて本月中には引續き第二號を配本出來ること丶思ひます。而して第三號も亦旣に大半編輯濟みとなつて居ります故、更に引續いて五月中に刊行して從來不定期的であつた甚しい遲延を取返しすること丶致します。

挽歌

西村眞次

木山彦一大人をしぬびまつる歌二首

火の國の大阿蘇山の燃ゆる火の消えたるがごとく
君逝きましぬ

君逝きてわれぞ寂しき燃ゆる火の消えたる後の
心地のみして

査終了後には、濱寺に赴いて蒐藏の遺品を拜見するなど、一方ならざる懇遇を蒙り、懷抱せらるゝ所見の一端をも併せて伺ふを得たのである。

其後も兩三回は翁に面謁したが、大森貝塚の建碑式の樣な會合の場合とて、殊更に云ふべき程のことなく、御目に掛つたと云ふに過ぎぬが、一昨年の春、雛節句に近い折、大山公爵の招を受けて來つた席上で、翁に久し振に面會したのが、遂に最終のものと爲つた。此時には左程に人數が多からざる上、主として豫て知合の人々であつたから、心置きなく愉快に談笑が交へられ、陳列の古代雛などを拜見しつゝ遂に夜の更くるを忘れる程であつた。翁とは丁度椅子を並べたので特に色々の高話にも接したが、欄間に上がれる額面に、筆者の年齡が八十二？とあるを見られ、自身が其歲に爲るには二三年を待たぬ樣なことを漏された。併し翁の元氣は益々旺盛にして矍鑠たるものあつたから、愈々考古學上の研究に幸ひせられんことを期待したが、遂に八十二歲をも迎へずして卒然として逝かれた事は、誠に感慨に堪えぬ所で、惜みても尚ほ餘りあるが如何とも致し難い。

云ふ迄もなく翁の活動の範圍は廣く、感化の及ぶ所は甚大なものがあり、此等をすべて除外した考古學方面に於ても、多大な功績を擧げられて、其全貌を窺ふが如きは別に其人を待たねばならぬ。此處には自身の極めて狹き範圍に於ける事項のみを述べ、せめては學界の恩人たる翁を偲ぶよすがと致したい。

の深いことを察した。

此頃までは翁の研究主題が尚ほ古墳關係であると想像して居たが、石器時代の方面にまで延び居り、地理的には大阪毎日の分野である關西以西のみならず、廣い範圍に亘つて全國的に及ぼされ、東北地方の石器時代などに就いても注意されるを知つた。また專門家の研究を輔けて其達成を計らるゝと共に、一部の間にのみ限局され勝ちな此方面の知識を、廣く社會に發表して普及に力めらるゝなど、單に古墳に限らずして考古學の一般に對する有力な保護者であり關係者であると思はれた。固より親しく翁に接して知つた事柄でなく知友などより聽き得た點が多いので、僅々一部を窺つたに過ぎぬと思ふが、それにも關らず翁に對する觀察を再三ならず訂正せしむるに至つた。

大正八年の四月に、小金井先生が河内道明寺の國府遺蹟を調査されたことがある。申す迄もなく此遺蹟は多數の人骨を出せるのみならず、遺物の埋藏狀態が特に注意を要するなど、種々の點に於て大なる衝動を學界に投ずるに至つた。翁は即ち其調査の重要なるを認め、廣い地域に亘れる該遺蹟の地上權を求めて其攪亂を防ぎ、自らも調査に當られたが、各大學の學者をして調査の自由を計り、便宜を與へらるゝに至り、小金井先生の調査が行はれたのである。此時に先生は先づ名古屋の高倉貝塚を調べられ、此處では最初から御手傳を致したが、之れを終へて直ちに道明寺に向はれた。其處で自身は豫て道明寺の實査を希望せしに、恰も名古屋まで來て居る上に、先生が調査中とあれば最好機會と思ひ、跡始末などに二三日を過ごし、河内方面の古社寺をも併せて見學する心構えで道明寺へ赴いた。然るに遺蹟の調査が甚だ興味あるので一兩日滯在する内、計らずも先生は發病の爲め大阪へ引上げの餘儀なきに至り、代つて豫定の地域だけを調査する樣なことゝ爲り、古社寺の見學を見合はせた。此際に屢々翁に面接せしのみならず、種々の便宜を與へられ、調

は石器時代よりも古墳關係の方面に趣味を有せらるゝ樣な話で、當時の翁が果して然りしや否は知らざるも、兎に角草村氏をして斯く解せしむる點があつたと思はれる。人類學と云へば世事には最も遠い學究ならざれば、一部の閑人の關係するものと見做されて居つた際に、著しく反對の方面に立つ新聞社、しかも夫れが大阪に於て翁の如き理解者の存在を知つたは、如何にも頼もしく感じたが、之れ以上に深く知るべき機會なくして其儘に打過ぎた。

併し其後は知友などより翁に關する事柄を追々と聞込み、遺物の蒐集に力めらるゝのみならず、古墳の調査にも考慮を拂ひ居られ、自ら此等の事に當り得ない忙しい身分とて、時には其道の者に爲さしめらるゝと云ふのであつた。甚だ斷片的であるが、此等の點から綜合した所では、最初に印象づけられた翁に比すれば大分に變化を來たさゞるを得ないことに爲つた。翁は單なる理解者として外部に在つて援護する程度ではなく、更に突き進んで研究者の城内に踏込み、古墳の考古學的研究に就いては一方ならざる關心を有せらるゝことであつた。

大正元年の十二月に、宮崎縣の西都原へ東西兩大學を始め宮内省の諸陵寮や博物館から古墳調査の爲め出掛けたことがある。西都原と云へば我國神代の由緒に富んだ土地で、二百基程の大小の古墳が群集して居り、此時の調査は縣の主催する所で大規模の計畫であつた上、關係者の範圍が多方面に亘つて居た點など、少くとも空前の出來事であつた丈け、考古學的に世間の視聽を惹いた。西部日本に覇權を握る大阪の毎日・朝日兩新聞は共に記者を特派されたが、翁は其報道を以て滿足するを得ず、調査の實際を觀る爲め態々來會して、此處に數日の滯在を爲された。此時始めて翁の聲咳に接し得たのであるが、滯在中の行動に依り如何に古墳の研究に熱心で、それが娛樂的の興味より來るものならず、根底ある主張に基くことを知つたと共に、造詣

國府の發掘と共に翁の三大發掘として擧ぐべきで、その他翁が社務の爲め全國各地を歷巡せられた際、石器時代遺跡の小發掘を試みられ又は遺物を採集せられたこと等は恐らく枚擧に暇ない程で、かの翁が設立せられた濱寺の農民博物館の一室に陳列せられてゐる多種多様の遺物は、これ等上述の翁の功績を如實に物語つてゐる。

私は翁の偉大なりし學界への功績を追想して、再びかゝる斯學に理會ある、而かも社會的實力ある人士の出現を、姿を變へた翁の再現を念願しつゝその冥福を祈る次第である。

本山松蔭翁を懐ふ

柴田常惠

本山翁を始めて知つたは明治も末の四十三四年のことである。今も同樣であるが、其頃は一向に世情に通ぜずして、殊に關西方面のことなどは不案内であつたから、大阪毎日が大新聞であることも、之れを主宰さるが翁であることも、全く知る所が無かつた。然るに東京人類學會に幹事であつた關係から、當時その發行を引受けて居た隆文館と屢〻交渉の機會を有し、何日かの會談の際、翁と同鄕である主人の草村松雄氏から翁が人類學に理解を有せられ、學會發展の爲め特別會員たる快諾を得た旨を聞いたのが最初である。其時に

易々として蒐集し得らるゝ結果を導き、又一方一般社會に遺跡遺物の貴重なる由縁を知らしめ、且つ又考古趣味を普及せしめたことは實に甚大であつた。後年史蹟保存法の制定を見、一般地方と亦郷土愛好の爲め郷土の歴史とその記念物を保存することに注意するに至つたのも、畢竟これ等がその遠因をなしたものである。猶大阪毎日紙に倣つて各新聞紙も次第に同種の記事を錄載し今ではこれが普通に見られる樣に至つてゐる。

この考古學的記事を價値あるニユースとして取扱つたのは上述の如く翁の卓見によつて、先生の歿せられる大阪毎日紙が我が國で最初である計りでなく、英國に於てこの種記事を最もよく錄載し、一般も亦この種ニユースを求めてゐるデリーメール紙が、そのニユース・バリユーから遂に一つの財團を組織して、かのローマンブリテンの發掘を擧行したのは、たしか大正末年の頃であつた。然るに我が國に於ては既にこれより早く大正六年に、當時新歸朝の濱田博士指導の下に京大考古學教室の手によつて河内國府の石器時代遺蹟の發掘が行はれたのを契機として、以來大正九年迄前後九回に亘つて學術的大發掘が行はれ、斯學の一期劃をなしたのも、翁が私財を投じたとは云へ大阪毎日新聞社長としての翁の事業の一つであつて、正に新聞界に於ける世界最初の試みと云つてよい。猶當時以來大阪毎日新聞社の發行する地圖には必ず全國的に重要なる古墳や石器時代遺蹟等が記入されてゐることも、一般の地圖に從來見なかつたもので、翁が如何に一般社會に斯學への關心を抱かしめることに努力せられたかゞ推知せらるゝであらう。

晩年我が窯業の發達史の研究に着眼せられ、北九州唐津系統の古窯址を發掘せられ、或は尾張美濃に於ける瀨戸・多治見附近の古瀨戸の窯址を發掘せられて有益なる資料を多數發見して（これ又我が國に於ける陶磁器研究學上最初の學術的大發掘である。）我が窯業史上の研究に重要な偕與をせられたことは、かの河内

料が何等の調査研究が行はるゝことなく散佚し且つその遺跡も消滅しつゝあるを知られ、これをこの儘放置することは學問的にも思想的にも洵に遺憾に感ぜられこれに就いて種々攷究せられた結果、畢竟かゝる結果を來たす原因は法令上より古墳墓の發掘が禁示されてゐるが爲めであつて、全國に幾千となく遺存せる古墳は必ずしも全部が陵墓に直接的關係を有するものでない故に、皇室と全く無關係の古墳は發掘を一般に許可し、その發掘に際しては學者の指導と調査によつて充分研究を盡さしめる方法を執るならば、一方學界を稗益する點の多大であると共に、又土地の開墾等に便宜を得て土地の經濟的にも摘好のことである點等を力説せられつゝあつたが、遂に翁はそれが實行の手段として、大正五年二月貴衆兩議院に「古墳の發掘と共埋藏物の處分に關する請願」を提出同年の議會は兩院共これを採擇せられたが、その後何等の施設改正を見なかつた爲め、大正十二年一月再び同樣の請願を貴衆兩院に提出され同年の議會に於て又同じく採擇せらるゝに至つてゐる。

又翁はその董せらるゝ大阪毎日新聞紙に於て遺跡遺物の發見等に關する考古學的記事を錄載することに實行努力せられ、これを價値あるニュースとして取扱ふことを一般新聞界に認識せしむることに成功せられてゐる。このことは一つは同社内にあつて岩井武俊氏の如き斯學に造詣深き士が翁の意を帶して、よく翁を援けて活動せられた結果一層この成功を齎らされた爲めでもあるが、その當初にあつては翁の卓抜せる高見を關知しない一般讀者には、單に先生の好古趣味の如く考へてゐたが、これ等の記事が陸續ニュースとなつて現はれた結果、我が考古學界は——學徒はために全國各地の遺跡遺物の發見を直ちに知ることが出來て充分これを調査研究する機會を得たことであつた。又それ等の遺物もよく學界に知られて散佚を防ぐことが出來、學界はために從來とは比較にならない程新資料が

の調査を行つてゐた私は一先歸京に際して京の街に出てた時、畏友岩井懿南氏から翁が病篤き裡にも猶人は死まで働かねばならないと社務を執られつつあることや、今直ぐに異變はあるまいとの主治醫の話等を傳へ聞いて、その再起を念じつゝ歸京したのであつたが、着京の翌朝にははからずも翁の訃が諸新聞紙に報ぜられてゐた。洵に思ひ掛けないことで、嘗て私が斯學に志して間もない頃、翁から受けた恩義が河内國府の大發掘や何かゞ、走馬燈の如く腦裡に閃めいて翁の存生中に國府の發掘報告を完成し得なかつた私の怠慢を思はずに居られなかつた。さうして遙かに翁の冥福を祈りつゝお詫びを致した次第であつた。翁に對して又學界に對して今後近き期間内に河内國府の報告を纏めること考へて見たが、これに就いては時日を要する問題であり又種々これに關係ある方々ともよく相談の上のことである故、不取敢翁が我が考古學界に盡された功績に對して學界全般的にも哀悼すべきものと考へ、翁との關係を有せられた大山公と相談しその結果史前學雜誌が摘好である故本年の第一號に本山翁追悼錄を編纂することゝして、その計畫を進むることゝなつた。恰もそれと前後して私と同樣翁と關係深く且つ志を同くする梅原末治君から翁の爲めに或る記念計畫(國府發掘報告)を試みたいから入洛の際相談したとの知らせを受けたので、私は洵に心うれしく感じた次第であつた。

嘗て私が翁に知遇を得るに到つたのは大正六年の夏期、鳥居博士が畿内地方の石器時代遺跡の調査旅行を試みられて、大和一圓を調査し終つて更に紀伊・河内・和泉の諸地方を歷巡されんとせらるゝ際、岩井氏の慫慂によつてこの行に加つた時に初まつてゐる。以來河内國の石器時代遺跡の大發掘に際して翁側の一人として、殆んどこの地の發掘の大部分に關係したり、大串博士岩井氏と共に備中津雲貝塚の發掘を三度行つたり等して學術發掘の研究基礎を遺憾なく學び得たのは、實に翁の賜であつた。後年東大文學部の事業として黑板博士薫率の下に樂浪王盱墓の發掘に成功を擧したのも、畢竟翁によつて與へられた河内國府に於ける遺跡に對する充分なる學術發掘調査の基礎がその根幹をなせるものであつて、この大發掘の經驗がなかつたなら到底かゝる好結果を齎らすことは出來なかつた次第である。以上は前書として翁と私自身の私的交渉を主として述べたが、翁が學界に盡された功績として、學界周知の河内國府發掘事業以外の二三に就いてこれを追想して哀悼の意を表したい。

本山翁が考古學に深き關心を抱かれゐられたのは私が未だ斯學に志す以前のことであつてその詳細を語ることは出來ないが、かねて皇室崇敬の念厚き翁が大正初年の頃以來皇陵巡拜を試みられつゝあつた際、各地に遺存せる古墳が我が上代文化の闡明に有力なる遺蹟であり、その副葬遺物が亦重要なる資料であることに注目してゐられたが、偶々當時古墳の盜掘が盛んに行はれてゐる事實を見聞せられ、この重要なる學術的資

建碑式が擧行されたものでありました。碑の位置は是川村字中居と字一王寺の境の一王寺山の山麓にあり、新井田川の流を前にして、中居一王寺、堀田の三遺蹟を一眸の內に收め、遠く階上嶽まで望み得らるゝ好地域であります。當時先生は既に御不快であつて青森地方の各新聞紙を御覽になつて態々私に御手紙を下さつたものでありました。以來半年程お會ひしないので虫が知らせたか昨年十二月十三日當方から御病氣見舞を兼ねて伺がつた處、幸ひお安じ申したより御丈夫に見えたので、まづ安心して歸京したのも束の間、十二月卅日夜漸く御無沙汰した大山公を訪問した時にその悲報に接した事も何にかの因緣のやうに思はれます。一月廿日東京から來られた上田恭輔氏とお通夜をして、翌朝雨に烟る濱寺に松陰先生の靈柩を天王寺に送つた時は高師の濱の仇波も靜かに庭前の巨大な羽衣の松も露重たげに枝を垂れて居りました。

先生の御存命中に出來上つたこの一つの碑が、土地の爲にも松陰先生の爲にも喜ばれた有意義な記念となつた事と今更喜ぶものであります。

本山翁を悼む

川澤金吾

我が新聞界稀有の偉才であり、考古學界の絶大なる後援者であつた本山彦一翁は逝かれた。恰度逝去の前數日入浴して洛外の某寺で或る種

究に關心を持つて居られた爲めか、晩年には他の所藏品は孰れ處分しても、石器時代の遺物だけは後學者の研究の爲めに一纏めにいたしたいとの御話であつた。その爲め三四年前から御所藏品の整理に時々濱寺のお宅に伺ひ昨年夏やつと富民協會の農業博物館が出來上つたので、先生の古墳時代に關するものと石器時代の遺物等をその三階の一隅に本山考古室が出きました。遺物の多いのに室が狹いので一時は丁度昨年の暑中でもあり、當時は壁が生乾きの爲め今後の整理を約して秘書の大宅經三氏と京都の末永雅雄氏の努力によつて、農業博物館の開會までに間に合ふやうに陳列されたものであります。

この陳列に當りて本山先生は先に喜田博士と私の共著日本石器時代植物性遺物の圖版に示された是川木製の出土品に非常な興味を持たれて居つた爲めに、泉山岩次郎氏が先生を御宅に訪問した節に泉山氏にその一部の割愛をお願した處幸ひ快諾されたので、私がその使して泥炭層の一部とその殘片を本山考古館に收めたのであります。

私は是川遺蹟の研究に當つては永い間泉山氏並に八戶鄕土會の小井川、三浦氏又は淸水寺の御住職に何時も御世話のなりばなしであつた爲め本山先生に御願して當遺蹟地の爲めに記念碑を建てゝはとお願ひした處、早速題字を下さつたので、茲に八戶鄕土會が主となりて喜田博士に碑文を依賴し階上岳から大理石を運び、碑文を銅版にして下部に收め、碑の周圍を小公園の如く敷地まで買つて前記の皆さんと八戶鄕土會員の日當村の方々の御盡力で昨年十一月二十一日に盛大な

最近に於ける本山先生の考古學的方面は、紀伊の鳴神貝塚の調査と、一方和泉河内に於ける、陶窯跡の研究と、二つが計畫せられつゝあつた。そのどちらも少しは著手せられてあるから、今後別な關係を以てでも續行したいと思ふ。勿論私個人として進めて行つてもよいとも考へるのである。

是川遺蹟記念碑と本山松陰先生

杉　山　壽　榮　男

松陰先生が河内國の國府の石器時代遺蹟の發掘を初め、其他我國の考古學界の爲めに直接又は關接に御盡力を下つた事は未だ私等の今更申上ぐるまでもない事であります。

　私は原始文樣集の刊行から松陰先生の知遇を得て以來十年間色々御指導御鞭韃を得たものでありました。先生は私の孤立無援を御同情して下さつた爲めか、先生御所藏品の研究には特に自由を赦され色々便宜の與へられたものであつた、其間河内の陶器村や多地見の窯跡の發掘にまでお作させて頂き、大山公と東京の高嶋屋で催した日本原始文化展覧會、又は大森貝塚記念碑の建設に就いても御相談に預り時々東京にお出になられても、あの御多忙の内を寸暇をさいて芝の丸山公園の古墳の見學や東京の所藏家を訪づれる時はよくお件をしたものでありました。

　先生の色々お研究の内でも取分け我が石器時代のす

そしてその時、自分は考古學的遺物と共に刀劍類をも蒐集してあるから、時々來て研究することは勿論差支へないのみならず夫々一部分は從來の人々の資料として提供したことはあるが全體としてはまだ自分も知らないものもある位だから、この際一切を開放して研究を許容すると、云ふ風なお話しであつたから、一應濱田先生の許可を得て、全體の數量から見て、大體一年半位の豫定を以て、一ヶ月のうち一週間位づゝの計畫で、研究と同時に整理して行くこととし、且つそのうちから若干づゝを隔週にサンデー毎日に掲載し、及び自分の資料としてノートをすると共に一部を松陰堂に留めた。

斯くして豫定の一年半、卽ち昭和七年六月末には、大體終了し、松陰堂に殘すべき記錄も、我々は悉く淨寫を終つて、呈上し、サンデー毎日の掲載も、十二月初めを以て一旦擱筆することとした時に、幾何もなくして逝去されたのである。

話しは今より十數年の昔に溯る、丁度私の少年時代、小學校の五年生位であつたと思ふ、當時刀劍や武器の事を教へて頂いた、故高瀨羽皐先生から、京阪地方で居て刀劍を研究するなら、是非神戸の武藤氏、濱寺の本山氏の藏刀を見ねばならぬ、紹介をするから行く様にと、云はれたけれども、當時私はまだ訪ねて行く勇氣が無かつた。

さうして二十年近くの年月を經過した今日、遂に本山先生が蒐集三十余年の最後の一年半に於て、殆ど自分のものゝ様に自由な研究の機會を與へられたのは、まことに奇しき因緣があり、而もその研究中、刀を入れた箱の中から、恩師高瀨先生の手紙が出て來て、ひとしほ私の懷しさを增したのであつた。

のみならず不思議の運命は、高瀨先生が本山先生と同時に紹介をしやうと云はれた神戸の武藤氏とは、知人の武藤誠氏の父君であつた事をも、十數年の後に知らしめた。

追憶

末永雅雄

今より七年以前、私の郷里河内の狹山池が、耕地整理の爲に豊臣秀頼が修築して以來の大工事に著手したので、多少の考古學的な發見があるかも知れないと思ひ、且つはこの池の樋は、天平三年に行基が作つたと云ふ傳說があるので、夫々の係員に注意して貰つてゐた所、果して多數の凝灰岩の樋管や石蓋が發掘された。

之等の石造物は、或は古墳の石棺を利用したらしいものもあり、又は全然樋管として製作した事を信じて差支へない狀態のものもあつて、ともかく珍らしい考古學的遺物として當時の大阪府史蹟調査報告に詳細を記述したことであつた。

所がこの時その噂が近所の村々に傳へられて、遂には新聞の地方版にも掲載せられたので、ある夜濱寺の本山邸から明日發掘物を見に行きたいからと云ふ意味の通知があつてその翌日現地へ見へられた。これは丁度昭和二年の冬であつたと思ふ。それから三四年を經て、吉野の宮瀧の發掘地を御見學されたとき、自分の所にも考古學關係の資料を蒐集してあるから、そのうち一度來る樣にとのお話を伺つたが、併しまだ暫く忙しかつたので機會を得なかつた所、神田孝平男の石器を展觀せられた際初めてしみ〴〵とお話を伺ふことが出來た。

に無限の包懐力を藏する先生の全人格を感じた事であつた。

その後御目に掛つたのは大正十一年十二月の初めで大阪毎日新聞社三階樓上で開かれたアイヌ土俗品展覽會の際で、鳥居先生は一泊、私は二泊、濱寺の御邸に御厄介になり私は仁徳天皇御陵に就いて御高見を直接伺つた事が記憶に存して居る。

長野縣飯田町の考古家、伊藤兵三氏は古く曾て先生が社の支局巡廻のため同地に來られた砌、先生のために附近の古墳等を案内したと云ふ人であるが伊藤氏は當時未だ面識のなかつた鳥居博士を本山先生に紹介した人であると云ひ、その伊藤氏と私は昨年十一月十七日の朝高野山金剛峯寺本坊前で出會し奇遇に驚き、話は蒐寶館の陳列品のことから先生の事に及んだが、月餘にして忽ち先生の訃報に接するとは思ひもかけぬ事である。

これより先き、昨年十月中旬、濱寺に先生の創立せられた富民協會の農業博物館を訪ふたが、日本案内記の私の書いた農業博物館の項には校正の時に故の一字を本山先生の御名前の上に書き加へねばならなくなつたのはまことに哀しきことの一つであつた。

終りに徴せられた儘に書き綴つたこの拙文中に萬一故先生若しくは關係諸先生に禮を失した點あらば偏に御寛容を乞ふ次第である。

農民博物館本山考古室の一部

學生等を隨へ出張し、昨年四月發掘の地續きの一部を發掘一方本山本社長發掘隊田澤氏等は同じく地續きの一部發掘に着手し、連日作業に從ひつゝあるが六日には東大文科助教授黑板博士、奈良女高師教授水木要太郎氏、大阪醫大教授大串博士等參觀發掘品につき研究せり、小金井發掘隊は五六兩日面積約六坪地下約二尺乃至三尺の所にて頭蓋手足等略完全なる仰臥屈葬の人骨四體と、腐蝕甚だしきもの約四體分を採掘し、外に多數の遺物中より未だ曾て發見されたることなき珍奇の裝飾具と思はるゝ牙製品一個發見せり、又一方本山發掘隊は地下約一尺餘の所より三角模様を施せる紡錘車一個、地下三尺乃至四尺より鐵鏃一個、アイヌ式に似たる模様の土器片を發掘せり。

とあつて、これで見られる通り私（小松學生）は小金井先生の發掘隊の一員に成つて居るが、私は特に本山先生の御好意によりてその發掘隊の宿營であつた道明寺天滿宮の南坊城良興氏方に宿泊さして戴いて岩井武俊、田澤金吾兩氏に御面倒を毎日御掛けしつゝ、當時烏打帽、詰襟服の可憐な姿であつた私はこの重大な發掘事業を十二分に實地見學をする事が出來、又とない貴重な色々の體驗を得た事は、この行を慫慂斡旋して下すつた鳥居先生の外に本山先生の深き御厚意による賜であつたのは今だにひたすら感謝の念を禁じ得ない滯在十餘日間、門齒に鋸齒狀の加工變型を施した珍奇な人骨の出土したのもこの際である。發掘の第何日目かに白衣の作業服を着け長い杖を携へて現場に見えた長身、元氣に滿ちた老紳士、松蔭本山先生その人であつた。遺跡に擴がつて存する深い穴、その內部から彌生式やその他の遺物が出る。深い穴、何？―それは遺跡のもつ一つの謎である。先生のこれに對する御高說、又、その頃喧しかつた高井田横穴の事に及んで其壁畫に關して色々と親しく私に語られたのが記憶に遺つて居る。片言隻句をも苟もしない謹嚴そのものゝ裡

外らす樣につとめて居つた。翁の献上した勾玉は皇太子殿下のいたく御感に召されたものであるが、翁の訃報を耳にせられた皇太子殿下も定めし、翁のあの贈物に思出でをつゝられたであらう。

〇

最後に翁の考古學上の業績として永久に其名を止めるべき河内國府の調査報告が何かの形式で刊行せられんことを翁を追悼するの切なると共に益々希望して止まない次第である。（昭和八・二・十一日紀元節の日記）

本山彥一先生の憶ひ出

川村眞一

私が本山先生に始めて御目に掛つたのは大正八年四月である。それは大阪府下國府の石器時代遺跡の第五回目の發掘の折であつて、それは同月八日の大阪每日新聞に左の記事があるのを書き拔くと

河內衣縫の遺跡發掘　前年來數回の發掘によつて數十體の古人骨と、珍奇の遺物を學界に提供し、我考古學上の一大秘庫を以て認められつゝある、府下河內國南河內郡道明寺村字國府小字衣縫の石器時代遺蹟は、本月三日より帝國學士院より東大醫科大學教授小金井良精老博士は、柴田人類學敎室助手、小松

博士のサイダー論やA博士の潔癖振り、さてはO博士の痛飲振り、或はM邸にて人骨を火鉢火にて乾し、又は第何次かの發掘終了に際し翁を始め參加員一同の隠し藝のあつたなどこの永い發掘期間を通じての種々な追想は走馬燈の様に眼前に展開される。凡ては朗かな夢である。

○

翁の濱寺の邸へ伺つたのも數度ある。私として物質的に助力を願つたのは一度ある。それは筑前須玖遺跡の發掘費に外ならない。昭和三年前後、翁は一切の考古的の調査や蒐集を擲して一意、富民協會の事業に沒頭せられて居つた頃に當る。大毎福岡支局長のN氏を通じ當初心よく承諾せられて居つた若干費の支出がとにかく面倒となつた。計畫を進めて居つた私として翁を濱寺に訪れると、心よく面會し心よく私の言分を容れて呉れられたには寧ろ意外であつた。あの須玖發掘の業績は深く翁に感謝するものである。

○

翁は晩年、故神田男の蒐集品を一切網羅して購入せられ、其の展觀が濱寺の邸で催された。私も一員として加はり、濱田博士が翁の業績を河内國府を中心として其の所感を述べられたに對し、翁は心からな感激を莞爾として受けられ居つたのは忘れがたい印象である。今一つ忘れがたいのは大正の末年、瑞典國皇太子殿下の御來遊に際し、大毎本社へ行啓さるゝ際、翁の考古遺物を濱寺から運搬した。其の展陳の助けとして私が三日間を京都から通つた。大毎社長として絕對的な翁も考古品の前では頑是ない小供である。社員の誰れ彼れをつかまへて天孫降臨や神武東征を盛んに話しかけられるので、陳列係りの若い社員などは翁の鋭鋒を

本山彦一翁を憶ふ

島田貞彦

○

去る一月六日、翁の告別式が大阪の天王寺本堂で營まれた時、私は丁度歸省中だつたので親しく式場に臨むことが出來たことは渡滿後第一次の歸省中の忘れることの出來ない印象である。始めて翁に御目にかゝつたのは今から十六七年前であり、爾來何かと御目にかゝる機會が多かつた。が當初から最後まで京大考古學教室の一員として持續し、私的に亙ることがなく極めて朗らかな印象を數々殘してゐる。

○

翁の考古學上の業績中著明なものは河內國府の石器時代遺跡の究明であらねばならない。大正六年以降數歲に亙る翁及各方面の研究者を網羅しての發掘事業は今にして思へば半ば國家的な調査事業だつたと云へる。畏友田澤金吾君の終始の努力を最とし京大二次の發掘は元より私も比較的多くの機會に惠まれて參加したものであつた。道明寺天滿宮門前の梅の屋旅館は恐らく生涯を通じての最も多い滯在旅館であらう。故S

聞紙の効力のみでは無く、一般教育が進んだ結果でもあるが、石器位の事は小學兒童でも今日は知つて居るそれで僕の中學校高等學校在學當時には河内の國府や東京近郊の遺跡地に行けば、石器の十個や二十個は苦もなく採集出來たものだが、今日では樺太へでも行かぬ限りは石器の地上採集は困難となつてしまつた。

啻に社員の採用計りでは無い。學者に種々の金品を寄贈し、又種々の便宜を與へて遺跡の發掘やら探究に助力せられた。之れは隨分永い年月に亘つて多くの學者に便宜が與へられたらしい。僕も隨分澤山の例は聞いて居るが之を一々列擧するのは止めにする。河内國國府遺蹟の發掘の如きは其最たるものである。

尤も此場合に多少の弊害はあつた。それは新聞紙が之を宣傳方法の一つに利用した事であるが、之れは果して本山さんの本旨であつたや否や疑はしい。本山さんは其晩年に於て遺物所有慾は淡白であつた。それが爲めに田澤君等が苦心して採集した遺物の一部などをおしげもなくお土産として報告前に人に贈つたりした。然し新聞社の用事の爲めに絶へず旅行して居られた結果、隨分度々人から遺物を贈られたり、義理合上の都合で買はねばならなくなつたりしたものらしい。其結果として濱寺には可成り多數の標本が集まつて居つて、之れは今日散逸せずして農業博物館上に陳列されて居るのは學徒に取つて幸福である。又遺物の一部分は他にも寄附せられたものらしい。山陰道淀江町の徵古館の如きも本山氏寄贈品が隨分あると聞いて居る、いづれにしても本山さんの在世中には個人としての僕には非常に好意を寄せて下さつた。恰も何か頼んでくれゝば直ぐきいてやると云はぬ計りであつたが、僕は何も頼まなかつた。僕には有力者に頼まずともやる丈けはやるぞと云ふ意地と張りがある。然し本山さんの好意は常に感謝して援助を受けたと同樣に感じて居る。

然し色々の機會で吾々は何十度となく面接した。そして其度毎に淡白な學問上の話をした。隨分意外な場所で意外に顔を合せた。例へば時としては青函連絡船中でお目にかかつたし、時としては關釜連絡船上でお目にかゝつて、有名なる女流運動家故人見絹枝さんを紹介された事もあつた。恐らく本山氏も自分も旅行す事が多かつた爲めに意外なる船車に同時に乘り合はせたのだと思ふ。

それだから僕は個人的には本山さんは大新聞の社長として好適なる紳士だとの感じを受けた以外には、深い性格的の關係を結ぶ事無くして過ぎた。然し考古學人類學方面で本山氏と深い關係のある諸氏に各所で接するの機會を得たし、又本山氏の深く此方面で世話される事實をも色々の機會に知る事が出來た。

本山さんは晩年に於て考古學が好きだつた。然し其好きになる道程は吾々とは逆であつたらしい。即ち初めは書畫や道具類の骨董趣味であつたものが、漸次に基本的原始文化に興味を感じて行つたものだと思ふ吾々の行程は之に反して原始文化から興味を感じ初めて、漸次に歴史考古學に到りつゝある。此道程は今日の若い考古學徒に多い傾向であつて恐らく時勢の差異に因するもので小兒時代から考古學を好んだ結果である。之に反して中年時代から好きになつた人は本山氏の道程が多いらしい。

本山さんほどの考古學好きは我邦には到る處に在る。然し本山さんが大新聞の社長であつた事は社會に考古學を宣傳する上に大なる効果をもたらしたし、又之れが色々の關係に於て此方面の學問を進歩せしむる原因ともなつた。勿論此場合本山さんは考古學者では無い考古學のファンの大なるものとして役立つて居る。

考古學好きの記者が可成り數多く大毎及東日新聞者に登用された。そして此記者は自然考古學方面に注意して此方面の報道を取扱つたから、社會大衆にも自然此方面の知識が普及する樣になつた。勿論之れは唯新

れたのであつた。其の碑の文、

奥羽北部ノ地由來石器時代遺蹟ニ富ミ、其ノ土器ニ現レタル工藝ノ進歩、實ニ世界ニ冠タルモノアリ。就中此是川遺蹟ハ、中居、一王寺、堀田相接近シテ、各系統ヲ異ニスル遺物ヲ藏シ、特ニ中居泉山氏邸内ヨリハ優秀ナル多數ノ植物性遺物ヲ發掘シテ、從來知ラレザリシ當時ノ文化ノ一面ヲ學界ニ紹介シ、又堀田ノ遺蹟ヨリハ、古錢ヲ發見シテ絶對年代ヲ推定スルノ好資料ヲ提供セリ。八戸郷土研究會其址ノ湮滅ヲ虞レ、本山翁ノ揮毫ト捐資トヲ請ヒ、碑ヲ樹テテ之ヲ後世ニ傳ヘントス。

而して翁は多年御希望の其の遺蹟遺物とも、又其の碑をも見るに及ばずして、永遠に逝かれたのである。悲しい哉。

本山彦一翁を想ふ

清野謙次

何年前から本山さんと近附きになつたか、又何の縁で近附きになつたか、僕は明瞭に記憶しては居らぬ。唯いつとはなしに知り合ひになつて、其れから後も隨分永い時間がたつた。然し此永い年月の間に格別之れぞと取り立てゝ云ふほどの頼み事もしなかつたし、又同時に頼まれ事も無かつた。從つて僕と本山翁との間柄は折りにふれて御馳走になつた外に長くはあるが淡白なる知己だといふ外はない。

せられた。奥羽地方に於ける石器時代遺蹟遺物に就いても甚深の關心を有せられ、あの御多忙の餘暇を割いて、嘗て親しく其の東海岸地方を踏査し、遺蹟を發掘調査せられた事もあつた。水澤の故青木禎二郎、鈴木貞吉兩氏に囑して、奥羽各地の遺物をも蒐集せられた此の「是川遺蹟」に就いても、一度實地に臨んで親しく其の狀態を視察し、泉山氏の藏品をも一覽せられたいとの意向を度々漏らされた事であつたが、何分平素多忙の御身柄とて、生前遂に其の機を得られなかつた事は、翁御自身に取つても、亦「是川遺蹟」の爲にも遺憾千萬の次第である。昨年一月植物性遺物圖錄の出版成るや、當時貴族院議員として上京せられ、木挽町なる客舍に病床に居られた翁を訪うて之をお目にかけた所が、翁は非常に之を喜ばれて、其の際にも親しく實地を見たいとの希望を繰りかへされた事であつた。其の後更に宋錢の發見があり、翁の此の遺蹟を重んぜらるゝの念は一層の重きを加へて、之を永遠に傳へんが爲に、昨秋杉山氏を介して資を投ぜられ、當時病氣御靜養中であつたに拘らず、「是川遺蹟」の四大文字を書して與へられた。蓋し此の揮毫こそは、恐らく揮毫としての翁の絕筆となつたものかと思はれる。翁は實に多年憧憬の此の「是川遺蹟」に於て、其の最後のものを遺されたのであつた。かくて自分は命ぜられて僭越ながら左の碑文を草し、八戶鄉土硏究會同人諸氏によつて、碑は中居、一王寺、堀田三所を一眸の下に俯瞰すべき景勝の地に建設せられ、昨年十一月二十二日新嘗祭の佳節を卜して、花々しく建碑式が擧行せら

殆ど知られざりし石器時代文化の一面が、始めて學界に紹介せらるゝに至つたのであつた。こゝに於て大山史前學研究所では、去る昭和四年四月、所長大山公爵以下、甲野、宮坂、外二君總出で發掘調査に赴かれ、自分も小金井博士、杉山壽榮男君と共に、其の發掘に立ち會つた事であつた。斯くて其の調査の結果は、すでに史前學雜誌に於て詳細發表せられ、自分も亦杉山君と共に更に數回の調査を重ねて、此の中居遺蹟出土品を主としたる、「日本石器時代植物性遺物圖錄」を編纂し昨年一月すでに其の出版を了へたのであるが、其の後續々新事實の發見があり、又其の他種々の事故が繼續發生して、爲に是に添附すべき研究論文が纏らず、今に是が頒布をさし控えて居るの狀態にあるを遺憾として居る。

所謂新發見の一つは、是も中居遺蹟の東北に隣接せる字堀田の地に於て、昨年五月道路開鑿工事に際し、中居及び一王寺とは全く系統を異にして、むしろ關東式土器とも謂ふべき別種の遺物を包藏する石器時代遺蹟が發見せられ、そこの竪穴から宋錢景德元寶が發掘せられた事である。之を聞いた自分は直ちに杉山君を促して、まだ遺蹟が其のまゝに保存せられ、發掘者の記憶の新なる際に於て實地に臨み、親しく其の出土狀態を調査した結果によると、たとひそれが竪穴住居者自身の遺失品にあらずとするも、決して後世の攙入にあらざることを十分認知し得たのであつた。而してそれは實に我が石器時代實年代考定の上に、最も貴重なる資料を提供したものであると謂はねばならぬ。

我が本山翁が夙に考古學に甚大の興味を有せられて、一方に御自身多數の遺物を蒐集せられ、惜氣もなく學者の研究に委ねられたと同時に、一方にはしばしば資を投じて學者の研究を援助せられ、考古學界の一のパトロンにておはした事は學界周知のところである。嘗ては日本に於ける考古學的研究の發祥地たる大森貝塚に記念碑を建設して、之を永遠に傳ふることに努力

本山翁と「是川遺蹟」

喜田貞吉

本山翁の逝去はあらゆる方面から惜まれた。其の各方面からの追懐の文の全國の新聞雜誌に揭げられたものだけでも、恐らく千を超えたものであつたであらう自分も主として考古學の立場から、自分に關係のある方面の事を東日記者に話し、又歴史地理の二月號にも簡單に感想を披瀝して置いた事であつた。されば今度史前學雜誌に於て翁の追悼頁を設けられるに際し、自分も亦同翁辱知の一人として、翁に關する短文の寄稿を徵せられるの光榮に預つたに就いては、今更似た樣な事を繰り返すでもないので。特に史前學會と因緣の深い、又是は恐らく翁の絕筆であらうところの揮毫を遺された「是川遺蹟」の事を述べて、こゝに重ねて翁の考古學界に於ける功績を追憶したいと思ふ。

由來奥羽地方は石器時代の遺蹟に富み、考古學者の豊庫と謂ふべき地方であるが、中にも靑森縣三戸郡是川村の遺蹟は、多量の優秀なる遺物を包藏することによつて、夙くから學界に有名であつた。特に其の中居遺蹟は、地主の泉山岩次郎氏の丹誠によつて多年發掘が繼續せられ、現に同氏の藏する同所出土の龜岡式土器だけでも、二千に近い數に上つて居るのである。又是と西南に隣接せる一王寺遺蹟は、多量の圓筒式土器を出す場所として、是れ亦夙に學界に知られて居つた。然るに近年其の中居遺蹟の一部から泥炭地區が發見せられ、そこから諸種の植物性遺物の發掘があつて、從來

27101

二

私が本山翁に親しく接したのは、明治四十五年の秋宮崎縣西都原の古墳の發掘に參加した時であつた。此の時翁は東野君を同伴して西都原に赴かれ、兩三日間同じ宿屋に起臥したこともあつたが當時は翁としては未だ六十歳前後の壯齢であつて元氣中々盛んに發掘半ばにして他へ出かけられた。次いでは大正五六年の交、かの河內國府の石器時代遺跡の發掘に際して、我々と翁との交渉が生じたが、私共は先づ大學の費用を以て調査することゝなり、翁の同情ある申出に背いた爲め其後の發掘に關しては、本山氏の方と暫く手を斷つことゝなつたのを遺憾としたのであるが、最後の發掘に就いては矢張り翁の厚意を受けることゝなつた。とにかく此の國府遺跡の發掘は、我が國先史考古學界の一轉機をなした大事件であつて、本山翁は殆ど全國の斯學者を總動員して、小金井、鳥居、長谷部、清野、大串等の諸博士が之に從事する機會を與へられたのであり、翁の學術上の功績は、實に此の國府遺跡の名と共に、翁が題字の記念碑に勒せられて、永久に學界に忘れられぬ所であらう。

翁は國府遺跡の外、河內高井田の橫穴の研究、その他大森貝塚、是川遺跡の建碑などにも後援を與へられ、我が京都帝國大學の考古學研究報告の出版費に對しても、多大援助を吝まれなかつたことは、私としても特に感謝を禁じ得ない所である。それにしても翁の考古學界に於ける事業のうち、最も重要な價値を有する國府の發掘に關する詳細なる學術的出版が、未だ世に出でゝゐないと云ふことは、我々の最も遺憾とする所であるが、聞く處によれば翁を記念する事業の一として右の出版が計畫せられつゝあるとの事、それは何よりも我々に取つても嬉しいことであつて、其の實行完成の日の近からんことを切望する次第である。

本山彦一翁を憶ふ

濱田耕作

一

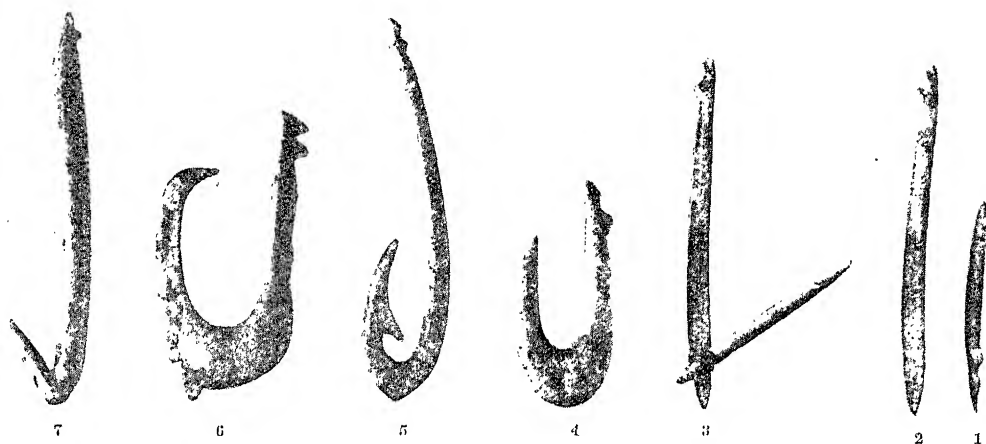
昨年の秋農業博物館の考古室の事に就いて、本山翁がわざ〳〵駕を枉げて京都帝國大學の私の研究室を訪ねられた時には、今から思へば多少平生よりは元氣がない様に見えたが、是はとにかく老いて益々盛んな此の考古學界のパトロンの姿に接することが出來た最後であつた。年齢の上から又た其の成し遂げた事業の上からしても、固より殆ど遺憾なきに庶幾い翁の一生でないのみならず、其の晩年の仕事として勢力を傾倒せられた富民協會の方も、其の博物館の建築は落成し、曾ては其の濱寺の邸宅で見せられた故神田男爵所藏の石器その他翁の多年蒐集せられた考古品も其の一室に納められたのであるから、先づ翁としては此の世の中に思ひ殘すことも無かつた程であると想像せられるのである。併しながら、我々は此の瑚らしい考古學界の同情者、學術的研究の了解者を永久に喪つた淋しさを痛感せざるを得ない。將來翁の如き同情と了解とを有する人は決して出ないことはなからうが、翁の如き社會的位置を併せ有する人の出ることは、必しも期し易いことではないと思ふ。

らるゝことなく、殆んど贅物の如き觀を呈してゐるに過ぎない。

鉤針に似て然らざる有鉤具も稀れにあり、插圖7（大洞）はその一例にして、糸懸け突起の反對面を殺いである。よつて桿に結縛固定すべく鉤針にあらざることが推定される。石器時代人の漁法に就いては尚不明なる點多多あり、例ば筌、魞の如き用ゐられた可否かを知る由もない。右の鉤の如き小なる筌を掻き上げるに足るものである。

刺具の變形にはこの他銛頭がある。これの一種たる燕形銛頭に就いては既に詳說せることある以て省略し、逆鉤を有する刺狀銛頭だけに就いて簡單に述べる。この種の銛頭には凡そ次ぎの種類がある。一、桿に挿入する莖を有し、且後者に黑褐色物質附着せるもの。莖の上方に缺刻を有するものあり。この類は矠としても用ゐられ、刺端の鈍磨破折する機會に富むと見え、身著しく短小となり鏃と見錯まらるゝことがある。二、前者に似たるも莖の一面を殺ぎ、その反對面に屢糸懸の小突起、溝を有し、黑褐色物質附着せず。三、第一の如く桿に挿入するに適するも黑褐色物質附着せず、莖の上方に缺刻を有するものあり。この類は投射したるとき桿より逸脫し易きを以て糸懸けは緊索を固縛するか或は桿に銛頭を固縛するか孰れかの用をなすものであらう。四、桿に挿入するに適せる莖を有し、その上方幅稍廣くしてこゝに穿孔あり。この類は疑もなく緊索を以てする投射具である。

以上の外骨角器には刺具と雖尚幾多の種類あり、用途を異にするものに至つては枚擧に遑がない。後日機を得て詳說したいと考へる。



かは明らかでないが、斯くして軸と小鉤とを以て一個の鉤針を構成し得ることを説明するには充分である。但しわが石器時代には既に專ら單一式鉤針に用ゐられ、斯る合成法による必要はなかつたから、會々折れた鉤針の軸を利用するが如き特殊の場合にはかゝる合成鉤針もつくられたと解釋してよからう

挿圖第三の結合部には主鉤の外に二個の小突起ができてゐる。わが石器時代の鉤針がかゝる合成式より發達したことはこの小突起に該當すべき殆んど贅物に類する小突起を具うる鉤針の多いので推定される。氣仙地方には挿圖4（獺澤）の如く軸と鉤との移行部圓滑に彎曲せるもの甚だ稀で、挿圖5（獺澤の如く尖れるか、挿圖6（細浦）の如く鉤の下方に當りて小突起を刻せるものが多い。故に單一式とはいうものゝ合成式の痕跡を多分に存してゐるのである。又鉤には更に逆鉤を有せざるを普通とし、只稀にこれを有するものがある。逆鉤は挿圖5の如く軸に向ひたる內方に存すること多く、且つ殆んど用を爲さゞるべしと思はるゝ程深く位するが常である。但しこれと反對側即ち外方に逆鉤の存する例もある。これらの逆鉤亦合成式より發達し、大なる合成鉤針にては効果大なりしならむも、單一式に進んで漸く小形となると共に遂に痕跡をとゞめざるに至つたのであらう。即ちこの進歩の過程に於いて逆鉤は單一式鉤針にも設けられたが、充分その効力を發揮するよう工夫せ

に固定し、側刺或は逆鉤とし刺入に兼ねて逸脱を遮へぎるに供することあり。かゝる鉤の用に供したりと察せらるゝ短針亦稀に發見される。獺澤發見品に長さ八粍、徑四粍にして兩端尖れる細長あり、中央より少しく一方に偏したる部分幅一粍程だけ全周に黒褐色物附着し、この部分より短き方は、長き方に對して極めて輕微なる屈曲を呈してゐる。若し斯る針の黒褐色附着に代うるにこゝに全周を繞る缺刻を施すものあらば予はこれを釣針に比するであらう。併し絲を固定するに必しも膠着を必要としないから右の針は釣に供したるものでは恐らくないであらう。或は猎に用ゐたのではないかとも考へるが、兩端方共横斷面圓形をなすはこれに疑を挿ましめる。孰れにしてもこの針が或角度に就いて軸に固定せられて鉤の用をなしたるは疑ひなきところである。又獺澤發見品中に長さ四粍の兩端尖り、横斷圓形をなす小針がある（挿圖1）。但しその一端の一面は殺ぎたる如く研究されて平らな面をなしその反對面には低き突地を設けこれの面を横に研磨し溝をつくつてある。本品こそは軸にこの平面部をあてゝ溝の部分を結縛し、以て鉤に供したること明らかである。但し斯る小なる鉤を以て猎の用に供したりとは認め難く、その用途を確め得ない（後條參看）。又針に似たる形狀をなして一端に近く横溝を有する小突地を刻みたるもの獺澤（挿圖2）及び大洞採集品中に各一個なり。前者は長さ七粍半、後者は同八粍強、孰れも少しく弓狀に彎曲し缺刻のあると反對の端は稍急に狹小となり尖れるも刺入には適せざるものゝ如く見える。獺澤發見品に於ては糸懸け突記のある面と九十度角をなす兩側面の一半即ち糸懸けあると反對方の一半は扁く、大洞發見品は反對端に近き小部分だけが同樣に扁くなつてゐる。察するに兩品は針にあらずしてこの扁平なる部分に鉤を固縛すべき軸なのであらう。今假りに前記獺澤發見の小鉤（挿圖1）と同發見の軸（挿圖2）とを兩者の平らな面に於いて鋭角をなして黒糸で結合すると挿圖3の如き釣針の形になる。勿論この小鉤がこの軸に附隨すべきものか否

缺刻を施せるも或は身狹長にして扁きもの等がある。

鏃の使用鈍磨せるものゝ如く一端尖り、他端鈍なる長針にして兩端共に黑褐色物の附着せざるものは之を柄に附することなく使用したる針、串の類と認められる。但しその中部或は基端に近く缺刻を有し、或は黑褐色物附着せる數は姑らく別箇の品類と看做すを適當とする。針の骨製なるものには往々基端方に髓腔海綿狀體の原形を存することあり、この種の針の基部は幅廣く貫通せしむるに適せざるもので、基端の斷面圓形に近く且つ體に比し多く太からざるものとは自ら用途異りしものであらう。前者の如く單に尖端部のみ刺入すれば足るものとしては基方部跟骨、掌蹠骨、小脛骨、上膊骨等の骨端部原形を存し、尖端方のみ鋭利にしたものがある。又氣仙地方の製作精巧なる長針には基端に近く包周を繞る缺刻を施せるもの稍稀れに存す。これらはこの端に糸紐を結びつけ、編識に使用したと推定される。かゝる針の稍細きもの稀れにあり、例へば獺澤發見品中長さ六糎余、最大徑五粍位にして基部に右の缺刻あるものは細き糸を透す針に用ゐられたのであらう。又門前貝塚には長さ七糎半にして扁く、尖端鋭利にして基方に向ひ漸次幅廣く、五粍余の基端に近く稍大なる孔を穿てるがあつた。これこそ疑もなき縫針と認められるが、一般に陸前の貝塚にはかゝる有孔針は稀れである。然るに是川村の圓筒土器遺蹟發見品中には有孔針數個あり、實に驚異に値する差異というべきである。蓋し編織の術進歩せると共にこの種の器品多く製作され自ら彼の異彩ある多種多樣の壓根を土器に與うるに至つたのであらう。山內淸男君の研究によれば圓筒土器の壓痕は必しも編織物ではない。併し斯る壓痕を案出するは編織術に長じ、係蹄の謎を解く經驗に富むものでなければこれを能せざることゝ考へられる。

刺器の用途を案ずるに刺器そのものを手或は弓を以て投じ或は把握して刺入するのみならず、これを他の物體

か知れぬ。かゝる孔は磨つて擴大したのである。從つて大なる砥石の他に手にして釣針、銛頭等の逆鉤をつくるに適する小砥石があつた筈である。かゝる磨切用の石器は不明である。

骨角器中最も多數を占むるは針狀の刺器である。これらの或ものは鏃に用ゐられ、他は穿刺用の針、錐等に使用せられたと認められる。鏃は專ら角製であり木或は竹の篦の一端に挿入し、これに固定する爲めの黑褐色膠着物質が附着してゐる。この膠着物附着方の尖端は可なり尖つてゐるのに、刺入すべき他端の却つて甚しく鈍磨せるものが甚だ多い。針には尖端鋭きもの少なくないが、鏃の尖端然るもの寧ろ稀なるは奇異に感ぜらるゝ位である。又篦に挿入すべき部分即ち莖の長さ二糎なるに、頭の長さ僅かに一糎にして且甚鈍圓なるものもある。察するに鏃は使用に從つて鈍磨すれば更に之を硏いで、尖鋭にし、斯くして頭の長さ縮小してこゝに至つたのであらう。鏃の長きものは長さ九糎を超ゆるものがあり、徒手を以て投射する矢に用ゐたるもあらう。中には全長七糎にして尖鋭なる一端方一糎半を除きたる他はその端に至るまで黑色物附着してゐる。即ち莖甚だ長くして尋常の鏃とは認められぬものもある。蓋し柄に固定する必要のある刺器にして逆鉤を有せず身長圓錐形をなすものは鏃に類すること當然であり、一々その用途を明らかにし得ないものもあるべきである。

鏃の異形なるものには矢筈の如く身の尖端部二嘴を有し、莖のみならず、この兩嘴の相對する面にも黑褐色物附着せる類が往々ある。燕形銛頭の尖端部に同樣なる構造を有するものあるに鑑みるも、兩嘴間に石鏃或は角鏃を挿入せんが爲めなるは明らかである。これが爲めの角鏃は側縁少しく凸彎せる長三角形をなし、獺澤より得たる一例ではその中央部に近く穿孔あり、孔の面及び底部に黑褐色物附着し、孔は糸を以て結博するに用ひられたことが推定される。又黑褐色物附着せる莖を有する角鏃にして身は柳葉形をなして扁く、兩側縁に無數の短綿狀

の骨の加工に好適な所以は之を直立せしめ上關節面を前後又は左右兩半に分つよう打割して容易に相當片を得るからである。從つて骨ヒ、長針等の材料として良く、又骨器の主なるものは即ちこれらの類である。然るに上膊骨や大腿骨、脛骨等はその骨端が斯る打割に適せず、貝塚に多量に存するその破片は貝殼狀の破摧線を有し、これによつて長針を得ること困難なるを思はしめる。尤も兎の脛骨上膊骨の下端を斜めに割り錐樣に尖端を磨つたもの是川より數個採集したことあり、これらの骨も亦骨器材料に供せられたことを否定する譯ではない。

鹿角は前額枝の出づる少しく上方より第二枝の出づる下方に至る幹部が最も多く用ゐられたであらう。その大ならざる枝はこれに幹の外面少部が附隨するようその岐部より打割し去り、以て燕形銛頭等を製したるものゝ如く、それに該當する原材が一個手許にある。枝は髓質少く比較的緻密質に富むを以て、その中部を磨り切つて尖端部を用ることもあると見え、これに該當する尖端片及び撥尖端を去りたる幹の破片等を見ること稀でない。大なる枝だけからも亦燕形銛頭等が作出せらるゝことありと見え、同品の側面に髓質の一部を存するものがある。幹の緻密質を以てこの種の銛頭を製し得るは著大角に限るであらう。鹿角製腰飾の大なるは枝と幹と亘りて取材してある。幹部は先づ縱に割斷し、細長板狀となし適宜これより必要片を採ることにしたと見える。これに該當する大小破片も手許にある。釣針などは概ねかゝる板片の一部を割斷し、その一端に釣針を刻み、然るのち母片よりこれを割離するのが普通であつたと見え、これに該當する半成品は二三手許にもある。母片の他端は加工の際把持に適し、かの大略釣針の輪廓を作り、その中央部に孔を穿ちて仕上げるが如き不便な方法は余り行はれなかつたらしい。但し細浦採集品中恰も大形釣針の輪廓に相當する大さの周圍を磨りたる楕圓形鹿角板一個あり、又同貝塚の別の地點から母片のない中央に孔ある釣針未成品一個發見されてゐるから、或はかゝる方法もあつた

間で見たことがある。親しく面晤の機を得なかつたからこの問題に關する氏の意見を窺ひ得ないが、公正な見地から學界の爲めに畫策されてゐた有德の士であると蔭ながら尊敬してゐた。予が氏の溫容に接したのは大森介墟建碑式の時只一回のみであるが、或は亡父を介し、或は仙臺通過の時東日支局員を介して兩三度挨拶を寄せられたこともあり、知遇を辱して居たと云つてよい。その本山翁の逝去に會し追悼文集刊行の擧あるに就いて、予にも寄稿せよと勸誘せられたが、予は正直の處氏を多く識らない。從つて故人の德を偲ぶようなことも書けない。そこで氏と始めて關接に交涉を持つに至つた細浦貝塚に因み、氣仙地方の骨角器に就いてそこはかとなく筆を執つて見たいと考へる。但し予は南洋旅行以來一時石器時代研究を中止してゐる姿にあり、やがて過年堀り散らした材料の整理精算もやり、又更めて發揚に從事したいと固く覺悟はしてゐるものゝ、今首尾整つた論文を草することは思ひもよらぬ。不用意の間に筆を執るなど故人に對して禮を失すること甚しきに想到れば忸怩たらざるを得ない。

二

さて氣仙地方の骨角器に使用せられた材料は主として鹿角と鹿の掌蹠骨とである。勿論掌蹠骨以外の骨もあるがそれは少數で、例へば鹿の跟骨及び下顎體、猪牙、鳥魚の諸骨等など一々これに言及する遑はない。從つて骨角器を研究するには、鹿角は兎も角完全な掌蹠骨を貝塚に求め、左右及び掌蹠孰れの骨に屬するかを判定し得るよう準備して置く必要がある。尤もこれらは骨器の主要材料なるだけに完全に保存さるゝものは滅他にない。こ

て珍奇なるものが比較的多數に見られるのである。例へば兎の脛骨上膊骨等の下端部を割いて作り上節端をその儘把握部とせる錐様のもの、鹿角製小針の基部に孔を穿てるもの、及び輪西發見の銛頭に類するもの等は毛利、遠藤兩氏の莫大なる蒐集品中にも其稀れに若しくは全く見當らぬ種類である。この差異が如何なる意義を有するかは充分に說明し得ないとしても、圓角土器文化の特異性を論する一根據として擧げらるゝには充分なりと信ぜざるを得ない。

目今予の手許にある骨角器は主として氣仙地方の產であるが、その中最も愉快なる回顧を伴うは細浦貝塚採集品である。蓋し予はこの貝塚に於いて始めて完全人骨を得たるのみならず、この人骨によつて先づ氣仙地方石器時代人に多き外聽道骨瘤を知り、上顎第二門齒拔去を認め、又頭骨その他四肢骨が現代日本人骨に前者の如く綜合現象としては殆んど見ることなしと稱して不可なき特異性を呈することを觀得した。この細浦貝塚發掘は鳥羽源藏氏の慫慂によつたのであるが、現地に達して始めて本山彥一氏が靑木禎太郎氏を東道としてこの貝塚を相し、大串菊太郎氏の發掘の擧あるに至つたことを知つた。同年八月予は京都帝國大學考古學敎室の國府遺蹟發掘に參加する幸を得たが、この發掘が本山氏の好意に出でたことは周知の如くである。この頃は人骨を目標とする遺蹟發掘の盛になつた際で、淸野博士はその著日本原人の硏究中に種々素破拔きをやり、予の如きも引合に出されてゐるが、惜しいかなこの次の國府發掘に關しては言及してゐない。予は濱田博士に質しても見なかつたが、淸野博士の筆によつて相當悶着のあつた揚句だつたことを知つた。して見ると本山氏の好意なるものはこの悶着の解決という點に於いて大なる意義を有し、單に租借地の一部を予等の發掘に任せたやうな尋常の好意ではなかつたことゝ察せられる。又その後氏は古代の埋藏物發掘に關し何か衆議院に建議することに盡力されたような事も新

骨角器漫談

長谷部言人

一

陸前の貝塚には夙に高島氏等の採集によつて學界の注意を惹いたように各種の骨角器が比較的多く埋藏されてゐる。二十年來毛利、遠藤兩氏が細心の注意を拂つて發掘しつゝある沼津境兩貝塚の如き當にその好例である。予等大正十四年八月大洞貝塚發掘の際には一日約四坪程の面積を敷に達するまで堀り上げ、隨分見逭しもあつたではあらうが、それでも毎日四十個前後の骨角器を發見した。平均一坪十個位に當り石器よりは遙にその數が多い。細浦、獺澤、中澤濱等氣仙地方の貝塚と沼津、境、宮戶島等石卷灣近傍の貝塚とその包含する骨角器には多少地方的差異も認められるやうだが、この點に就いては尙認識不充分なるを以て今姑らく言及を憚ることにする。併し兩地方とも角製品その半以上を占め、石卷灣地方には鹿角の骨（主として鹿の掌蹠骨である）に勝りて加工に適するを利用し製作の精巧なるものが尠なくないことを除けば、一般にその差異は顯著でない。これに反して陸奥是川の圓筒土器遺蹟の骨角器は曩に人類學雜誌上に述べた如く、陸前貝塚の骨角器に親しめる吾儕には極め

ものとして墳墓と關聯するであらう。最後にそれ等の年代に關しては到底想像を許さない。遺物中に一個の石器らしきものが存するとはいへ、これを以て直ちに石器時代の文化楷梯と考へる事は早計である。土器や貝輪及び小玉の示す如く、寧ろ所謂原史時代に比定すべきものであらう。

安房は太平洋に突出する半島の南端を占め、北部に清澄山脈が屏立するので、恰も島の如き位置を有してゐる。故にこの地に存在する古代文化は、その種子を海外より仰いだ事は當然の事であつて、之を考古學上から立證する事も不可能ではない。私は嘗て伊豆半島南部を踏査した際もその感を深うし且つその一端を述べた事があつた。古語拾遺の記する所によれば、往古天富命が阿波の齋部を率ゐて東國に來住し麻穀を播殖した折、隨從した阿波忌部の居住地を安房郡と名づけ、更にその地に祖神太玉命を奉齋した。安房神社は即ちそれであると傳へてゐる。この古傳は同書にのみ記載せらるゝもので、固より一の神話であるから直ちに以て事實とする事は出來ないが、上代西方より文化の東漸した事實の一反映として見る場合は相當重要視せらるゝものであるといふべきであらう。更に轉じて上述の洞窟遺跡を殘した人々やその文化か、之と何等かの關係を有するや否やに就いては極めて微妙な問題であつて、多言を憚るとはいへ、私は決して看過すべきものでないとひそかに思ひつゝあるのである。

私は以上の如く推定したが、從來發見の洞窟遺跡に徴しても之に類似した點を發見する場合が相當に存在するのである。又住居と墳墓との關係も上代人の思想に於ては決して矛盾する現象でなく、兩者相通ずる概念を有したと考へられるから右の想像は或點まで可能性を有するであらうと思ふのである。

次に遺物に於てはその主要物たる人骨に注意が向けられるであらう。殊にその中成人骨の大部分が抜歯の風を存し、且つその型式が全く同樣である事は頗る興味ある事實を示してゐる。果してこれが小金井博士の言はるゝ如く脊屬的關係を有するものであるか否かは遽かに決定し難いが、それよりも私は從來發見せられた數々の事例と比較研究して、その風習が如何なる文化要素を提示するものかに就いて研究して見たいと考へるのである。なほ之と關聯して伴出遺物が重要視せられる。就中土器はその尤なるものであらう。小金井博士も述べられた如く、土器の所屬が或點迄人骨の特質に重要な關係を有する事は否定出來ない。而して本洞窟發見のものは明かに彌生式土器を主體とする。殊に一個の完形品に就いて見ると、その形狀等から寧ろ相對的年代の下降するもので、所謂「土師器」と呼ぶ方が適切な感を有してゐる。次に最も數量の多い貝輪を見ると、タマキ貝製品とカサ貝製品とには自から用途上の差別が認められる。即ちタマキ貝製品は實用品であつて一種の庖厨具に充てられ、カサ貝製品は身體裝飾品として使用せられたであらうと考へる。殊に後者は古墳から發見せらるゝ石製及び青銅製の釧と形狀その他に於て明かに連鎖を認め得らるゝもので、その文化的素質に於て注意すべき遺品である。なほこれは三個の小玉と共に本遺跡を彩る尤品に屬する。

上述の如く遺物を通じて見ると、人工品には日常什器類と身體裝飾品とに限定せられる。それは又一面に於て前述の如く遺跡の性質にも示されてゐる。即ち日常什器は住居址を表現するもの、身體裝飾品は人骨に附隨する

以上で洞窟遺跡調査の概報は終るが、結語として些か自分の愚考を書き添へ讀者の參考に供したい。

結語 先づ遺跡に現はれた諸事實を歸納すると、種々な想定が試みられる。洞窟の形狀や發見遺物、又は焚火の跡及び木炭・灰の存在から、これが住居に使用せられたであらう事は恐らく否定する事が出來ないであらうと考へる。そしてその場合は入口から支窟附近迄が常住起臥に充てられ、その奥は寢室又は不時の避難所等に使用せられたと想像すべきであらう。然しながら單なる住居のみとすると他に一二の支障が生ずるのである。その一は多數人骨の埋沒する事であり、第二には遺物の包含狀態である。前者については此處を墳墓と考へれば一應の說明が出來る。殊に何れも不規則な發見狀態を呈してはゐるが、最初に發見された頭蓋骨の如きは、强ひて想像すれば故意に埋葬したかと思はれる理由が存在するのである。然らば第二の理由は如何、私はこれを洞窟に於ける自然的變化の結果と考定したい。卽ち同地が往古以來地質學的變化に富む地方であつて、土地の沈降が繰返された爲であらうと思ふのである。現に大正十二年の大震災の如きは顯著な一例を示してゐる。蓋し最初洞窟が住居に利用され、後墓穴に充てられてから、幾年かを經て附近の土地が一旦沈降した場合が考へられる。恐らく洞窟内に海水が浸入したに相違ない。波浪は種々の物質を運搬した。又内部の人骨類は攪亂され又絕えざる壓力によつて一個所に密集せしめられた。又遺物の中大形品は多く入口に沈澱し、小形品は奥部へと持ち運ばれ更に風力も加へられて奥壁近くに堆積したであらう。その後陸地の上昇加あつて現在の如くなり洞窟内が乾燥したので、曾て運搬遺棄せられた土砂を始め多數の有機物は腐植して黑土層を形成するに至つた。底部に砂礫層の存在するのは海水浸入の當時將來されたものがそのまゝ沈澱したものであり、海中に存した石塊その他の混在するのも同樣に遺されたものと見るべきであらう。

見受けられる。

次にカサ貝製のものは全部完形品で且つ形狀も整ひ製作も全體に研磨が加へられた精製品であつて、前者とは自らその用途を異にしたであらうと考へられる。(第三圖參照)

(4)小玉　三個を存し共に殆んど同形同大であり石質も全部滑石である。(第三圖參照)

次に人工品以外の自然遺物に就いて見ると大體左の種類が認められる。

(1)人骨　別稿小金井博士の御研究に見える通り、發見數は少くとも二十人分以上に達するが、完備したものは皆無である。たゞ成人骨中の顎骨十五例に拔齒の痕跡を認められる事がその最も特筆すべき點であらう。

(2)動物遺骨　當時食料に供せられたもの丶殘骸が主であらう。今判明するものは、獸類に鹿・猪・狸等、魚類に黑鯛その他、貝殼類に鮑・蛤・赤貝・タマキ貝・ヨメガカサ・サヾエ・マイ〳〵・芋貝・イシダヽミ・ヤツシロ貝・レイシ貝等である。その中鮑貝には頗る大形のものがあつて器物の代用に使用せられたであらうと推定する事が出來る。

(3)其他　鐘乳石數片、石塊等から木炭・灰・木葉類が存する。

Fig.3　貝輪及小玉

蓋骨附近に存した點と入口近い灰層附近に多數の貝輪が發見された事とは考慮すべき點であらうと思ふ。この外なほ附記すべき事は所々に焚火の跡らしい個所があり、火中した貝類・石塊・人骨を始め木炭灰の存在する事、又往々明かに海中に存在したと思はれる石塊その他が介在してゐた事實である。

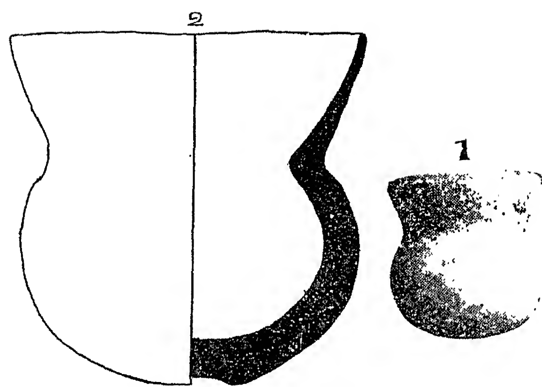


Fig.2 土器

發見遺物 先づ器具類から見る。

(1)土器 完形品一個破片二十八個。完形品は第二圖に示す如く小形坩と呼ぶべきもので廣義の彌生式土器に屬する。高さと口徑何れも三寸二分、腹徑三寸一分。黑褐色無文で、その他別に特徴は認められない。破片二十八個中二十六片は同じく無文褐色素燒土器片であるが、他の二片には明かに繩文土器の特徴が認められる。

(2)石器 長三寸四分を有する細長い自然石の一端に磨痕を認むるもの一個を發見した。石槌の一種とも呼ぶべきであらうか。

(3)貝輪 最も多量に發見された。貝の種類はタマキ貝・ヨメガカサ・赤貝・蛤の四種で、その中タマキ貝製のもの約百八十個（破片共）、ヨメガ貝製十個（完形品のみ）、赤貝製二個、蛤製一個を算する、卽ち全體の九分迄はタマキ貝製のものであり、更にその中の大部分が前述の如く入口に近い灰層附近から密集して發見せられてゐる。それ等は何れも製作を見ると頂殼から打裂を加へて孔を穿つた所謂粗製品に屬し、且つ破片が頗る多い。又仔細に見ると多くは表面又は殼緣に磨痕を存し、相當に磨り耗らされたものも

奧壁近くでは現在表面より約四尺五寸にして底部に達し、最初の試掘孔に於ては約六尺六寸となり、以下入口に近づくに從ひその高さを增す傾向が認められる。上述する所により本洞窟の形狀は各所に存する水蝕洞窟と同樣、入口に於て幅も高さも擴大され、奧部に近づくに及び漸次狹小となり上昇する事が認められるのである。(第一圖參照)

次にその內部は殆んど黑色土壤を以て充滿されてゐたが、奧壁附近に於ては僅かに上部に間隙を存してゐた。その土壤は恐らく有機質の腐蝕物と砂との混交から成り、加ふるに大小多數の落盤及び石塊等が夾雜されてゐる。而して大體に於ては殆んど一樣の狀態を呈するのではあるが、仔細に檢すると上部に於ては比較的砂を混する量が少なく、且つ落盤その他の石塊も減じてゐるが、底部に近づくに隨ひ多量の砂を含み落盤その他も增加する。尙ほ最初の試掘孔に於ては最下部に土を混じない厚さ約一尺二寸位の砂礫層がほゞ水平に存する事實を認め、更にこの砂層は岡島氏の發掘によれば入口近くまでも連續してゐた事が認められた。遺物の包含狀態に就いて見ると、全く遺物層と稱すべきものは存在せず、上下不規則に散在包含せられてゐた。殊に最も主要遺物たる人骨の如きも一として正しく埋葬されたまゝの狀態を殘存するものはない。例へば最初に發見されたほゞ完全な頭蓋骨は、それに附隨すべき下肢骨の狀態が不明であり、或は比較的上部から頭蓋骨が發見されそれと密接して脛骨が存し、又入口附近に於ては多數の人骨群に遭遇したが何れも支離滅裂の狀態を呈し、落盤に壓せられて悲慘な光景を現はしてゐた。たゞ注意すべき事はそれ等人骨が多くは洞窟の下底部殊に一方の岩壁に密接偏在してゐた事と、入口近くに於て特に夥しく發見せられた事、之に對して奧壁近くに於ては獸骨・魚骨・鳥骨類から、木炭・木葉類が多く包含されてゐた事である。その他の人工遺物類は所在に包含せられてゐたが、一個の完全土器が頭

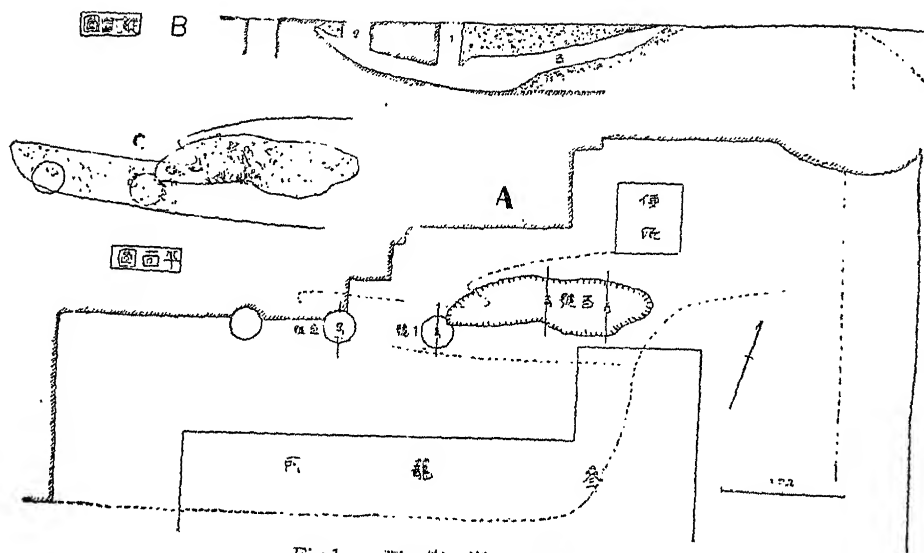


Fig.1 洞窟實測圖

然の水蝕に成つた事は容易に推察し得られる。殊に切斷面から見て上下の壁が同一方向に傾斜してゐるのは、母岩の有する層向に作ふ事が知り得られるから、恐らくは層向に沿ふて生じた罅裂に海水等が浸透して作られたものであらうと考へられる。なほその形狀が入口に廣く奥に到るに狹く且つ上昇する事も亦その事實を物語るものであらう。

次に形狀を說くと、主軸を西南から東北に置き、全長約三間余に達する狹長なもので、入口は東北端に開口してゐたらしい。奥壁から約三間余の東方に小支窟が存在する。幅員は空洞の上下壁が傾斜してゐるので甚しく狹く、小支窟の附近から西方は殆んど人類の起居に困難な狀態を呈してゐる。即ち奥壁近くに於ては岩壁の傾斜約四十度幅員約一尺、最初の發掘地點に於ては傾斜約四十七度幅一尺五寸二分を算する。然るに支窟から東方に至ると漸次廣大となり、支窟より約一間餘の個所に於ては傾斜約四十度幅三尺三寸となり、更にそれより一間を離ると傾斜約五十度幅五尺に達し、優に人類の居住にも適し得るに至るのである。次に縱斷面を見ると、入口から漸次上昇してあつて、

洞窟内に充滿する黑土層を東西に亙つて調査した結果、前と同樣人骨片多數と貝輪及び土器片、其他多數の獸骨貝類を發見した。かくして前回の試掘孔から東西に約四尺宛發掘したが、洞窟内は狹く且つ傾斜してゐるので、これ以上の作業は頗る困難であり危險を伴ふので、一先づ中止する事となつた。

第三回の發掘はそれより約七十日を經た五月十八日から二十一日迄再び自分の出張によつて繼續せらるゝに至つた。之より先神社職員と打合せて準備行爲として最初に開鑿した孔を中心に東西ほゞ一直線上に三個所試掘孔を穿つた。その中西方の第二孔は洞窟に觸れてゐないので、その調査を中止し、先づ中央孔に接する西方の第一孔から發掘に着手した。然るに約三尺餘にして奥壁に達するを得た。その地點から得た遺物は二個の貝輪をはじめ人骨片及び多數の鳥獸骨片・魚骨片・貝類と、木炭片・木葉片を混在した。次に中央孔より東方の試掘孔を發掘すると、洞窟も形狀が漸次廣くなつて入口に近きを思はしめると共に、包含遺物も益々豐富となり所々に人骨片の集團が認められ、無數の骨片を得たが、更に之と伴出して貝輪及び小玉を發見し、例によつて獸骨・貝類も亦夥しく夾在してゐた。なほ注意すべきは所々に灰・木炭及び火中したと考へられる岩塊・骨片・貝類等が認められた點であつた。

以上でほゞ大體の調査を了へ私は歸京したが、其後引續つゞき岡島禰宜が浚渫を行はれた。その結果は洞窟の形狀益々廣くなり明かに入口と思はるゝ點を究めるに到つた。且つ興味深い事實は黑土中底部に近い所に厚約二寸前後の灰層が存在し、その層中及び附近から夥しい貝輪を發見した事と土器片數個を得た事とである。その他例によつて人骨・獸骨・貝類等は相當多量に存在した。

洞窟の形狀と内部の狀態　洞窟の形狀を述べるに先立ちその成因を考慮すると、既に記した如くそれが全く自

の裾に發見せられた。附近の丘陵は何れも第三紀層凝灰岩質より成るので、容易に水蝕作用を受け諸所に洞窟が存在する。遺跡も亦その一に屬する。なほ現在の海岸は西方約一粁を隔てゝゐるが、上代に於て遺跡附近迄海波の浸入を見たであらう事は想像に難くない。

發見及び調査　曩に安房神社震災復舊工事として參籠所の改築が行はれたが、その附屬工事として新たに井戸の開鑿が試みられ、昨年二月下旬石工によつて母岩が掘り下げらるるに際し、現在の表面より約二尺六七寸にして洞窟内に黑土層に到着し、次で人骨片を發見するに至つた。これが最初の發見であり且つ今回の調査を遂行せしめた端緒となつたのである。かくして神社關係者の驚愕は延いて神社局内の問題となり、遂に學術的調査の必要を認められ、自分がその任に當る事となつた。

今發掘調査を便宜上四回に分けて記述しよう。第一回は前述の如く偶然の發掘に係り、關係者も亦岡島禰宜及び石工等であつたから完全な記錄が殘されてゐない。故にその聞書によつて大體を記すと、二月廿五日撰定された地點に井戸の開鑿が開始され、徑二尺七寸の圓形に掘り下げて翌廿六日に至り、表面より約二尺六七寸に達した時黑土層に達し、次でその中に一個の大腿骨片を發見した。不審を懷きつゝ作業を繼續する中、下部から多數の人骨片を出土するに及び、更に約四尺餘に至り中央より少し西方に於て一個の略ゝ完全な頭蓋骨（小金井博士腦蓋骨第一號）と、その傍に完全な土器（坩）一個及び砂を盛つた鮑貝が發見され、引續きその反對側中央より、東方に於て稍ゝ完全に近い頭蓋骨（小金井博士第十九號）が存し、なほ貝輪類と多數の獸骨・魚骨貝類等が發見せられた。

第二回の發掘は三月七日で自分は神社局から出張して之に當つた。先づ前回發掘の後を引續き繼續する事とし、

安房神社境內發見古代洞窟調査概報

大場磐雄

小金井博士の安房神社洞窟遺存人骨の研究に對照せらるべき同遺蹟の發掘調査報告は、大場氏が神社協會雜誌に發表されておられるが、同雜誌は多少特殊的のものであるがため、特に同氏に同遺蹟の調査研究の寄稿を依賴して小金井博士の人骨研究に對應せしむることゝしたが、同氏は協會雜誌發表のものを改訂して本編を草せられたのである。（編者）

安房神社境內洞窟より發見に係る古代人骨群は、別稿小金井博士の御研究によつて、近來に於ける這種遺物の一收穫とせらるゝに到つたが、その發見遺跡の狀況並に遺物の出土狀態及び伴出遺物等に關する考古學的調査に就いては、內容の性質上殆んど觸れておられない。幸ひ私は親しくその衝に當つた一人であるが爲に、その概略を附記して讀者の參考に供する樣にとの御勵めに些か蛇足を加へる事とした。しかし豫め御斷りしなければならぬ事は右の報告は昨年八月以降の神社協會雜誌上に掲載したので、現在に於てはそれ以上に加ふべき記事も新事實も發見し得ないので、本篇も亦右と同一の內容を省略した點であつて、偏へに讀者の御諒恕を希ふ次第である。

遺跡の位置　遺跡は千葉縣安房郡神戸村大字大神宮鎭座官幣大社安房神社の境內に存し、同社を圍繞する丘陵

に若しくはモンゴリヤ人種系統の固有日本人に關聯したものであるかといふ點である。然るに本人骨は上に述べた通り破碎混亂の狀態にあつてその特徵を見付け出すことが甚だ困難である。石器時代人若くはアイノに於いて特徵とせらるるところの腦蓋の三主縫合鋸齒の疏なること、尺骨の異性扁平なること、脛骨の扁平なること等は何れも輕度である。ただ腓骨の巨大なるは少しく著しい樣ではあるが、その他の骨は總體、殊に眉弓及び眉間隆起の發達弱き、鼻前頭縫合の引つ込み弱きこと等は彌生式遺跡の人骨若しくは固有日本人に近似してゐる。一號腦蓋骨の如きは全然同樣である。然らば問題は更に彌生式遺跡人と固有日本人との關係如何といふことになる。この問題は一にかかつて彌生式遺跡の本質を闡明するにあるのである。

剖學會記事大正十三年）は特に目立つてゐる。これは石器時代人及びアイノに屢見ることである。

膝　蓋　骨

完全なるもの三個。

足　　骨

完全なる距骨十二個、跟骨十三個、その他の足根骨三十個、中足骨趾骨九十一個。

結　　語

安房神社洞窟から發見せられた人骨は一體幾人に屬するものであるかといふに、脳蓋骨に就いては二十二個人を、顔面骨に就いては二十一個人を數へたが、尚ほ肢骨を參酌して見るとその最も多數の個人に屬するものは上膊骨の十九、腓骨の二十である、要するに本洞窟人骨は少くとも二十人以上に屬するものと推定して大なる誤はなからうと思ふ。

吾人の最も知りたいと思ふことはこの人骨が先住民族卽ちアイノ式遺跡に屬するものか、或はまた彌生式遺跡

十三號　左、中央部 20cm. 少し細、扁平でない、外側面殆んど平坦。

番號	最大長	最小周徑	長厚示數	中央周徑	中央最大徑	中央最小徑	中央横斷示數
1	—	—	—	49	16	12,5	78,1
2	—	—	—	51	18	12,5	69,4
3	—	—	—	53	20	10	50,0
4	—	—	—	42	14	10,5	75,0
5	—	—	—	50	17	13	76,5
6	—	—	—	48	16	11	68,8
7	—	—	—	48	17	10	58,8
8	—	—	—	48	16	11	68,8
9	31,0	38	12,3	44	16	9,5	59,4
10	—	—	—	53	20	10	50,0
11	—	—	—	50	17,5	11	62,9
12	—	—	—	44	15	10	66,7
13	—	—	—	43	14	11,5	82,1
14	—	—	—	40	13	10	76,9
15	—	—	—	45	15	10	66,7
16	—	—	—	45	16	10	62,5
17	—	—	—	40	14	9,5	67,9
平均				46,6	16,1	10,7	67,1
石器時代人 ♂	—	40,5(8)	—	48,1(15)	17,1(15)	11,1(15)	65,4(15)
石器時代人 ♀	—	33,5(2)	—	43,1(7)	15,0(7)	10,1(7)	67,9(7)
アイノ ♂	330,5	36,0	10,9	45,8	16,0	10,8	68,0
アイノ ♀	311,0	34,1	11,0	42,0	14,6	9,7	67,3
日本人 ♂	327,0	35,6	10,9	40,8	14,6	10,4	74,7
日本人 ♀	300,1	34,0	11,3	38,9	13,4	9,2	69,3

十四號　左、中央部 19cm. 細、扁平でない、外側面輕く溝狀。

十五號　左、中央部 18cm. 少し細、扁平でない、外側面平坦。

十六號　左、中央部 24cm. 中等大、扁平でない、外側面平坦。

十七號　左、遠側半分、外髁缺く、13.5cm. 細、輕度の扁平、外側面平坦。

一號と八號、三號と十號は對である、その他は對でないと思ふ。外に腓骨片五(近側部二、體部一、遠側部二)個ある。總體で約二十個人數へられる。腓骨に就いては扁平の程度もまた外側面の溝狀 (Ka nnelierung)も著しくないが、その甚しく太いこと卽ち予の巨大腓骨 Megaperonie （第三十一回日本解

一號と七號、二號と八號、四號と十號は對、他の五個は各個人のもの、されば八個人に屬する。脛骨中二三明かに扁平なるものあるも概して石時代人及びアイノ程著しくない、また日本人中にも往往扁平なるものがある。

腓骨

一號 右、稍完全、ただ小頭を缺く、34cm. 三邊形、骨間櫛中度、外側面輕く溝をなしてゐる、扁平でない。
二號 右、遠側半分 21cm. 强、外側面輕く溝をなしてゐる、少し扁平。
三號 右、小頭及び外髁を缺く、その他保存良、30cm. 强、外側面溝をなしてゐる、扁平。
四號 右、中央部 16,5cm. 細、外側面溝をなしてゐる、扁平でない。
五號 右、中央部 21cm. 中等大、三邊形、骨間櫛中度。
六號 右、中央部 23cm. 中等大、三邊形、骨間櫛弱、外側面平坦。
七號 右、中央部 15cm. 中等大、外側面輕く溝狀、少し扁平。
八號 左、小頭缺 32cm. 中等大、外側面殆んど平坦、扁平でない。
九號 左、完全、太さ中等、少し扁平、外側面平坦、眞直。
十號 左、小頭及び外髁缺、29cm. 强、扁平、外側面輕く溝狀。
十一號 左、體部 25cm. 强、少し扁平、外側面平坦。
十二號 左、中央部 22,5cm. 中等大、扁平でない、外側面平坦。

番號	全長	最小周徑	長厚示數	中央周徑	中央最大徑	中央最小徑	中央横断示數	營養孔部最大徑	營養孔部最小徑
1	—	—	—	86	33,5	20	59,7	36	22,5
2	—	—	—	90	32	23	71,9	—	—
3	—	—	—	78	27	19,5	72,2	29,5	20,5
4	345	73	21,2	83	30,5	24,5	80,3	34	21
5	—	—	—	81	29	20,5	70,7	—	—
6	—	—	—	77	28	19	67,9	31	21,5
7	—	—	—	90	34	20	58,8	36,5	22
8	—	—	—	89	32,5	22	67,7	35,5	24
9	—	—	—	81	30	19	63,3	33	21
10	—	—	—	84	30	20,5	68,3	33	20,5
11	—	—	—	74	26	19	73,1	28	18,5
平均				83,0	30,2	20,6	68,5	32,9	21,3
石器時代人 ♂	351,3(7)	77,1(29)	21,8(7)	83,1(31)	30,7(31)	20,3(31)	65,3(31)	34,0(32)	22,0(32)
石器時代人 ♀	—	70,8(13)	—	77,4(13)	28,6(13)	18,7(13)	65,6(13)	31,0(12)	20,1(12)
アイノ ♂	336,4	73,4	21,8	81,6	30,9*	19,4 *	62,8 *	34,3	20,9
アイノ ♀	313,1	66,2	21,1	73,4	27,5*	17,8 *	64,7 *	30,2	18,9
日本人 ♂	327,4	72,2	22,1	79,4	28,8	20,4	70,9	32,8	22,1
日本人 ♀	303,2	65,2	21,5	70,8	24,9	18,2*	73,2	29,1	20,3

二號　右、兩端缺 26cm. 稍强、扁平でない。

三號　右、兩端缺 24cm. 小形、扁平でない。

四號　右、稍完全、ただ内髁少し損するのみ、中等大、扁平でない。

五號　右、近側部缺 26cm. 中等大。扁平でない。

六號　右、兩端缺 23cm. 少し弱、扁平でない。

七號　左、遠側關節部缺、その他保存良、33cm. 强、扁平。

八號　左、兩端缺 30cm. 稍强、少し扁平。

九號　左、近側關節部缺 26,5cm. 少し細、弱扁平、後面强く穹窿してゐる。

十號　左、遠側關節部缺、その他保存良、28,5cm. 少し細、弱扁平。

十一號　左、遠側關節部缺、29,5cm. 細、弱扁平、骨間櫛强く突出してゐる。

脛骨全長は髁間隆起を除きたる長徑。

九　號　左、頭及び大轉子缺、37cm.少し纖弱、粗糙線中度。

十　號　左、兩端缺、31cm. 中等大、粗糙線强、粗糙線の外中央に近く骨隆起（長3幅1高0,5cm.）が縱に置かれてある。

十一號　左、遠側端及び大轉子缺、頭頸良く保存せらる 36cm. 大さ中等、粗糙線弱、輕度の Platymerie.

十二號　左、兩端缺 30cm. 細小、粗糙線中度。

十三號　左、兩端缺 25,5cm. 中等大、粗糙線弱。

十四號　左、兩端缺 30cm. 細、粗糙線甚だ弱。

二號と十一號は對である。その他は然らず又は疑はしい。外に左遠側端三個ある、中一個は炎症的に強く變形してゐる。小兒左大腿骨一個、近側端及び遠側端缺 24cm. 總體で十七個數へられる。大腿骨に就いて注見すべきことは粗糙線の發達は概して決して強くない寧ろ弱い方であるにもかかはらず中央示數の大なることである。敢て柱狀形 (Pilasterform) と稱すべきではないが横徑が矢狀徑に比して小なるがためである。第三轉子は一回も見ない。

營養孔部横斷示數
63,2
—
69,5
61,8
—
69,4
60,3
67,6
63,6
62,1
66,1
65,4
64,7(32) 65,0(12)
61,1 62,8
67,4 70,0

脛骨

一　號　右、遠側關節部破損、その他保存良、35cm. 稍强、扁平。

大腿骨

一號　右、體部21,5cm. 少し細、粗糙線弱、龍骨でない。

番號	自然位長	中央周徑	中央矢狀徑	中央横徑	中央横斷示數
1	—	77	25	23	108,7
2	—	89	29	27,5	105,5
3	—	85	28	25	112,0
4	—	91	30	27,5	109,1
5	—	84	26,5	26	101,9
6	—	91	30,5	26,5	115,1
7	—	91	30,5	27	113,0
8	—	90	31	25	124,0
9	—	85	29	24	120,8
10	—	91	31	26	119,2
11	—	89	28	28	100,0
12	—	78	24,5	24	102,1
13	—	84	28,5	25	114,0
14	—	81	25	25	100,0
平均	—	86,1	28,3	25,7	110,4
石器時代人 ♂ ♀	411,0(5) 382,0(2)	87,1(32) 80,2(11)	29,2(32) 26,7(11)	25,4(32) 23,6(11)	115,2(32) 113,7(11)
アイノ ♂ ♀	408,4 379,2	88,0 80,1	27,8 * 24,7 *	26,6 * 24,4 *	104,5 * 101,2 *
日本人 ♂ ♀	405,8 374,3	83,2 76,7	26,7 24,4	26,1 23,9	102,5 102,3

二號　右、遠側關節部を缺く外良く保存せられてゐる、中等大、粗糙線弱。

三號　右、近側端大轉子と共に及び遠側端缺、27,5cm. 中等大、粗糙線弱。

四號　右、兩端缺37,5cm. 中等大、粗糙線中度。

五號　右、遠側關節損、近側部缺、25cm. 中等大、粗糙線弱。

六號　右、兩端缺、27cm. 中等大、粗糙線中度。

七號　右、中央部22,5cm. 中等大、粗糙線突出してゐる。

八號　右、中央部21,5cm. 中等大、粗糙線比較的強く突出してゐる。

八　號　左、遠側端缺 16,5cm. 細、骨間櫛中度、眞性扁平。

九　號　左、近側部缺 16,5cm. 少し細、骨間櫛弱、最大徑は背側緣と骨間櫛との間。

長厚示數には生理的長徑でなく最大長を用ひた。九個の尺骨中對があるや否や甚だ不確である。

尺骨中央示數に就いていうて置きたいことは、その眞性扁平なるもの(三・四・五・八號)若しくは示數は大なるも最大徑が背側緣と骨間櫛との間にあるもの（一・九號）の多いことである。この眞性扁平（wahre Platykubitonie）性なる尺骨は石時代人及びアイノの一特徵と見做すべき形態であつて日本人には稀である（第三十一回日本解剖學會記事大正十三年）。外に尺骨近側部（12cm.）及び中央部（11cm.）がある。兩者共計測は出來ないが、眞性扁平である。尙ほ四個の尺骨片（近端遠端各二）あるけれども扁平性であるか否か明らでない。以上尺骨は總て對でないやうである。卽ち十五個人に屬するものであらう。

手　骨

完全なる手根骨七個、中手骨指骨八十六個。

髖　骨

一個の右髖骨の腸骨及び坐骨がある、耻骨を缺く、特に記すべきことはない。

なるものが多い。

尺骨

番號	最大長	最小周徑	長厚示數	中央周徑	中央最大徑	中央最小徑	中央橫斷示數
1	—	—	—	55	17,5	16	91,4
2	—	—	—	44	13,5	12	88,9
3	217	33	15,2	45	16	10,5	65,6
4	—	—	—	48	16	11,5	71,9
5	—	—	—	56	20,5	13	63,4
6	—	—	—	50	17	13	76,5
7	—	—	—	46	16	11	68,8
8	—	—	—	45	16	10,5	65,6
9	—	—	—	44	14	11,5	82,1
平均				48,1	16,3	12,1	74,9
石器時代人 ♂	249,0(3)	39,7(10)	16,3(3)	49,9(16)	17,7(17)	12,2(17)	69,4(17)
石器時代人 ♀	230,4(5)	36,2(8)	15,5(5)	43,8(10)	15,6(10)	11,4(10)	73,1(10)
アイノ ♂	243,2	37,0	14,9	49,2	17,2	12,3	71,8
アイノ ♀	232.3	35,0	15,1	44,6	15,4	11,0	71,7
日本人 ♂	239,2	37,4	15,6	48,2	16,8	12,1	72,7
日本人 ♀	217,8	34,1	15,7	42,2	14,2	10,6	74,8

一號　右、近側半分、16cm. 强、骨間櫛弱、最大徑は背側緣と骨間櫛との間にある。

二號　右、遠側端缺、20,5cm. 細長、骨間櫛弱、扁平でない。

三號　右、完全、弱小、廻後筋櫛比較的强、眞性扁平。

四號　右、近側半分 16cm. 中等大、骨間櫛弱、眞性扁平。

五號　右、近側半分 13,5cm. 强大、骨間櫛中度、强度の眞性扁平。

六號　右、近側半分 14cm. 風化してゐる中等大、骨間櫛弱、扁平でない。

七號　右、體中部 7,5cm. 少し細、扁平でない。

五　號　右、近側半分、13.5cm. 太さ中等、骨間櫛弱。

六　號　左、完全、彎曲甚だ弱、中等大、骨間櫛弱。

番號	最大長	最小周徑	長厚示數	中央周徑	中央最大徑	中央最小徑	中央橫斷示數
1	224	45	20,1	94	16,5	12	72,7
2	238	42	17,6	—	—	—	—
3	229	49	21,4	50	17	13	76,5
4	—	—	—	46	16	11	68,8
5	—	—	—	46	16.5	11	66,7
6	232	43	18,6	43	15	11,5	76,7
7	218	42	19,3	43	15	11	73,3
8	227	47	20,7	47	17	12	70,6
9	226	43	19,0	44	14,5	12	82,8
10	—	—	—	46	16	11	68,8
11	—	—	—	54	15	12	80,0
平均	227,7	44,4	19,5	45,9	15,9	11,7	73,7
石器時代人 ♂	230,9(8)	44,4(15)	20,0(8)	47,6,20)	17,0(20)	11,8(20)	69,5(20)
石器時代人 ♀	211,8(4)	38,3(10)	17,5(4)	40,4(10)	14,8(10)	9,9(10)	67,0(10)
アイノ ♂	231,4	43,5	18,8	46,6	16,9	11,5	68,3
アイノ ♀	212,1	39,0	18,4	42,4	15,2	10,2	67,5
日本人 ♂	221,4	43,0	19,4	44,1	15,6	11,2	72,0
日本人 ♀	201,0	37,4	18,6	39,5	14,1	9,6	68,3

七　號　左、完全、殆んど眞直、細小、骨間櫛弱、遠側端炎症性變形あり、その掌側面全く平坦。

八　號　左、完全、大さ中等、彎曲中度、骨間櫛强。

九　號　左、完全、大さ中等、殆んど眞直、骨間櫛弱。

十　號　左、近側半分 15cm. 細小、骨間櫛弱。

十一號　左、近側半分 13,5cm. 細小、骨間櫛弱。

予は從來橈骨の最小周徑を中央より近側に於いて測り來たつたからして、今回もそれに依つた。また長厚示數に於いては生理的長徑でなく從來通り最大長を採つた。

以上の外に尙ほ橈骨片四（遠側部二、體部一、青年遠側半分一）。個ある。橈骨は總て別個人のやうである、即ち十五個人と數へる。奇なることには他の骨に比して完全

八　號　右、體部12cm. 細、各粗糙比較的强、扁平。

九　號　左、殆んど完全、ただ頭の外側部缺、中等大、大結節櫛及び三角筋粗糙甚だ强。

十　號　左、殆んど完全、ただ小頭及び内上髁毀損、少し小形、大結節櫛及び三角筋粗糙甚强。

十一號　左、遠側端缺、その他保存良、24cm. 小形、大結節櫛甚だ强、三角筋粗糙中等。

十二號　左、體部 14cm. 纎弱、各粗糙甚だ弱。

十三號　左、近側部 19cm. 甚だ纎弱、各粗糙甚だ弱。

十四號　左、兩端缺、21cm. 小形、各粗糙弱、少し扁平。

十五號　左、體部 15cm. 細小、粗糙甚だ弱。

二號と十四號とは大方、六號と十一號とは確に對である。その他は皆不對。尙ほ外に遠側端六（右五左一）個あるが皆對でなく別個人に屬する。故に上膊骨に就いては十九個人を數へることが出來る。

橈　骨

一　號　右、完全、中等大、眞直、骨間櫛中等。

二　號　右、完全、細長、骨間櫛中央毀損、彎曲中度。

三　號　右、完全、中等大、彎曲弱、骨間櫛中等。

四　號　右、近側半分 15cm. 少し細、骨間櫛中等。

上膊骨、

一號　右、稍完、ただ遠側端少し損するのみ、中等大。

番號	最大長	最小周徑	長厚示數	中央周徑	中央最大徑	中央最小徑	中央横斷示數
1	293	65	23,2	68	23	18	78,3
2	—	—	—	65	22	16	72,7
3	—	—	—	66	22	18	81,8
4	—	—	—	67	22	18	81,8
5	—	—	—	71	24	17	70,8
6	—	—	—	63	23	16	69,6
7	—	—	—	65	22,5	15,5	68,9
8	—	—	—	66	22	15	68,2
9	278	66	23,7	72	24	18	75,0
10	263	63	24,0	70	23,5	17,5	74,5
11	—	—	—	68	23,5	18	76,6
12	—	—	—	61	21	15	71,4
13	—	—	—	60	19	15	78,9
14	—	—	—	67	23	16	69,6
15	—	—	—	67	22	18	81,8
平均	278,0	64,7	23,6	66,6	22,4	16,7	74,7
石器時代人 ♂	285,2(5)	64,0(24)	22,9(5)	68,2(24)	23,6(24)	16,6(24)	70,7(24)
石器時代人 ♀	269,2(4)	57,6(15)	20,8(4)	60,9(15)	21,0(15)	14,9(15)	71,3(15)
アイノ ♂	298,3	64,2	21,5	68,6	22,6*	17,3*	76,5*
アイノ ♀	278,6	58,8	21,1	62,9	21,0*	15,7*	74,8*
日本人 ♂	294,7	63,2	21,4	66,5	22,2	17,7	80,1
日本人 ♀	273,0	56,1	20,6	59,4	19,8	15,3	77,7

二號　右、近側端缺、23cm. 細小、大結節稜及び三角筋粗糙比較的强。

三號　右、兩端缺、17cm. 細小、粗糙弱。

四號　右、近側端缺、23cm. 小、粗糙弱。

五號　右、體部 14cm. 太さ中等、扁平。

六號　右、體部19cm. 細小、粗糙强、扁平。

七號　右、體部16cm. 細、三角筋粗糙弱、扁平。

二號　右、近側端欠、纖弱。

三號　右、完全、長い、太さ中等。

番號	最大長	中央周徑	長厚示數	中央矢狀徑	中央垂直徑	中央横斷示數
1	126	39	31,0	13	9,5	37,1
2	—	34	—	11,5	8	69,6
3	157	43	27,4	14	11	78,6
4	145	44	30,3	15	9,5	63,3
5	147	41	27,9	14	10	71,4
6	160	37	23,1	11,5	10	87,0
7	—	43	—	14,5	11	75,9
8	—	41	—	13	10,5	80,8
9	—	43	—	15	9	60,0
10	—	37	—	11	10	90,9
11	—	40	—	13	10	76,9
12	—	32	—	10	7,5	75,0
平均	147,0	39,5	27,9	13,0	9,7	75,2
石器時代人 ♂	146,7(7)	39,4(16)	26,5(7)	13,6(16)	9,8(16)	72,2(16)
石器時代人 ♀	137,0(2)	32,6(7)	23,2(2)	11,0(7)	8,1(7)	74,6(7)
アイノ ♂	146,8	38,8	26,4	13,6	9,6	71,4
アイノ ♀	132,4	33,7	25,5	11,4	8,2	72,0
日本人 ♂	144,7	40,0	27,6	13,6	10,2	75,4
日本人 ♀	129,9	34,3	27,2	11,1	8,8	80,7

四號　右、完全、中等大

五號　右、完全、中等大。

六號　右、完全、纖弱。

七號　右、近側端欠、中等大。

八號　右、近側端欠少し欠、中等大。

九號　左、近側端欠、中等大。扁平

十號　左、近側端欠、小形。

十二號　左、兩端欠、中等大。

十三號　左、近側端欠、甚纖弱。

比較的完全なるものが多い、五個ある、對と思はれるものはない、皆別別の個人らしい、即ち十二悉く矢狀徑が垂直徑よりも大きい。

肢　骨

肢骨に就いてはその完全なるものは甚だ少ない。中には對と思はれるものもあるが、多くは不明であるからして右左個別に取り扱つた。出來得るだけ計測した。但し骨中央といふのは不完全なるものに就いては大約である。見易きために表の形式として現はす。尙ほ試みに平均數を勘定して見た、但しこれは骨數が少ないからして價値は甚だ不充分である。また同じく試みた石器時代人、アイノ及び日本人の數を掲げて置く。石器時代人に關する數の傍に附した括弧內の數字は該當の骨數、アイノに關する＊印を附したる數は予のアイノ論文（Mitt. med. Fak. 2. Bd. 1893）に掲げてあるもの、無印の數は男女各二十五に就いて後に測りたるもの、日本人に關する數は男女各二十五の完全なる骨格右側に就いて計測せるものである。

肩　甲　骨

完全なるものはない、上外側部左右各三個あるのみ、對はないやうである。

鎖　骨

一號　右、完全、中等大。

に於いても將又種族に於いてもあまり相違のないものとするならば極めて著しい拔齒の風習が一は全部にこれがあり、他は全くないといふことになる、これは如何といふに、斯樣なことは或は單に眷族的の意義を示すものかもしれぬ。

椎骨

完全又はこれに近いもの五十個以上ある。

薦骨、稍完全なるもの一個、形細長、横線はまだ割れ目をなしてゐる。二三の測定數は弓長 (Bogenlänge) 121 mm. 前直長 (vordere gerade Länge) 111mm. 前上直幅 (vordere obere gerade Breite) 108mm. 長幅示數 (Längenbreiten-Index) 97,3 卽ち狹い (dolichohierisch), 弓弦示數 (Bogensehnen-Index) 91,7 彎曲弱い方である。

肋骨及び胸骨

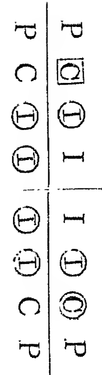
稍大なる肋骨片百以上、小片無數、完全なる第一肋骨數個。完全なる胸骨三個、不全なるもの數個。

上 I_2 は三叉に加工してある、右 I_1 は紛失、右 C 拔去、左 I_1 C の齒槽部缺損してゐるが右側に等しいものと推定する、下 I 及びその他の齒は總て無傷である。これはこれまでにないところの新らしい形式であつて宮坂氏の報告（人類學雜誌四十卷大正十四年）。に記載せられてある。これをこの機會に掲げて N 形式とする。安房神社人骨拔齒の形式もまた以上にないところの新しいものであるからしてこれを第十五郎ち O 形式とする。

拔齒の風習はまた彌生式遺跡の人骨にも往々ある。これまで確なる彌生式人骨にして考査せられたものは甚だ少ないが、名古屋市熱田高倉貝塚の二體に就いて佐藤氏の報告がある（人類學雜誌第三十三卷大正七年）。その一體には上顎兩犬齒が拔去せられてゐる。佐藤氏はこの人骨の特性はアイノに類する點も、また日本人に類せざる點もあるけれども、概して日本人に類同せる徴候が著しいというてゐる。また越中國氷見郡大境白山社洞窟遺跡の彌生式なる第五層の人骨中にも拔齒がある。齒の狀態を檢し得るものは十一人に屬するものであるが、その中五人のものに拔齒がある、上顎犬齒のみならず下顎犬齒を拔去したのがある。この大境人骨の形體的性質は熱田のものと異なるところはないやうである。

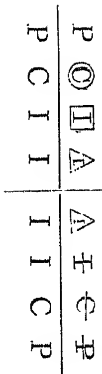
安房神社に程遠からぬ同じく神戸村地內佐野から大正十四年に人骨が澤山出た。この遺跡に就いては八幡氏の報告がある（人類學雜誌四十卷大正十四年）。この遺跡はやはり洞窟であらうといふことであるが、遺跡そのものの性質は闡明でない。土器類は全く伴はない、一個の貝製品と三個の石製の曲玉類のものがあつた。それが如何にも原始的文化級のものであると八幡氏はいうてゐる。人骨は總て千葉醫科大學解剖學教室に保存されてゐる。予は小池敎授の好意に依つてこれを瞥見することを得た。二十體以上のものである、上顎下顎も多數あるけれども拔齒せるものは一個もない、また大體に於いて神社洞窟の人骨と格別異なる點はないやうである。假りに兩者が時代

上顎下顎中確に組のものは一號と二號であつてその他は不確である、十六號以下の下顎は門歯の狀態を知ることは出來ないが上顎との組はやはり不明である。併しながらこの神社洞窟人骨の場合に於ては上下拔歯の形式は極めて畫一性であるからして間違なく次の通りであらう



ただ上に述べた五號上顎に於いては I_2 C の外に I_1 P_1 が、また九號下顎に於いては I 四本の外に C P_1 が缺亡してゐる、その跡の歯槽萎縮の狀態は拔歯された跡と全く一致してゐる、また五號に於いては右 P_1 根の、九號に於いては左 P_1 根の小片が殘つてゐることからして、これも力を以て打ち拔いたものであらうと想像されるが、併し斷言は留保して置く。また生理的に考へて見てもかく多數の前歯を即ち全數の半を除去するといふことはあまり多過ぎるやうに考へられる。この上顎下顎は骨質が甚だ似寄つてゐるからして或は同一組であるかもしれぬが、かかる缺損多き顎骨に就いては明言出來ない。

拔歯の風習は日本石器時代人に甚だ屢見ることである。拔歯形式は様様であつて、その種類は予の形式作成方によれば既に十三種(A—M形)ある。予は兩側對等形なるもののみを擧げたが若しも非對等形なるものを採るならば更に種類が多くなる(人類學雜誌三十三・三十四・大正七・八年・三八卷大正十二年、人類學研究、Mitt. med. Fak. 28. Bd. 1922. Zeitschr. f. Ethnol. 55 1923)。外に三河國渥美郡保美貝塚に於て大正十四年宮坂氏が發掘せる人骨中に次の形式のものがある。

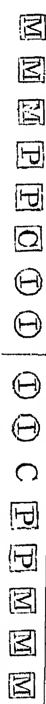


のがある。上 I_2 と下 I は一本もない。

要するに顏面の全形を知り得るものは一個もないが、その個別の骨に就て二三の點を擧げて見るならば、先づ二例の鼻骨は幅甚だ廣い。顴骨三例共後裂 (hintere Ritze) を有する、これは顴骨横縫合 (Sutura zygomatica transversa) の殘物にしてアイノ及び日本人に甚だ屢見ることである。梨子狀口下緣は四例に就て見るに皆鋭い。鼻前窩 (Fossa praenasalis) はない。犬齒窩の深さ中度。口蓋穹窿低又は中度。鼻下窩(上顎門齒に相當する予の Fossa subnasalis) 皆甚だ深い、これは日本人に多く見ることであるが、この場合に於ては I_2 C が拔去せられてその齒槽が萎縮してこの窩が一層深くなつたと思ふ、ただ五號には鼻下窩が無いがこれは I_1 及び P_1 をも同時に欠くがためであらう。上顎齒槽突起突出 (alveolare Prognathie) は三個共格別認められない。下顎は小又は中大であつて强大なるものはない。體並に頤の高さは一般に中等又は低い方、頤隆起は多くは甚だ鮮明である、頤結節は弱い。咀嚼筋の粗隆は中度又は弱度である、二腹筋窩は中度、舌下線窩弱度。齒は形の整ひたる、質の良き、一般に甚だ立派である、約百本中齲齒は三本あるのみ、磨耗は弱又は中度であつて强度のものはない。自然脫落と思はれる跡は二本（五號十二號）だけである。齒列の狀態は如何といふに、それは甚だ規則正しい、少しでも不整のものは一回もない。齒の狀態、腦蓋縫合の狀態等から見るに特に老年と思はれるもののないことを一寸注意しておく。

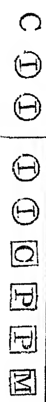
最も著しいことは齒列の毀損である。前齒の狀態を鑑別し得るものは上顎六個、下顎十一個あるが、上は悉く I_2 C. 下は悉く I 四本缺亡してゐる。而も閉鎖せる齒槽に於て炎症性徵候、骨質吸收等の跡を毫も認めない、齒槽緣は極めて輕く凹んでゐるか又は眞直である。この缺亡齒は疑もなく故意に拔除されたものである。以上の

二腹筋窩甚だ鮮明、舌下腺窩弱、頤棘中等。齒式



齒槽十二個ある、十一個空、左C坐す、用耗甚だ弱、右C齒槽小、I四本拔去、齒槽縁輕く凹んでゐる。

一五號　下顎骨中央部、少しく風化してゐる。頤高中等、頤隆起鮮明、頤結節弱、頤棘弱、二腹筋窩中度、舌下腺窩不鮮明。齒式



齒槽五個ある、四個空、右C用耗極めて少ない、C齒槽兩側共捻轉してゐる、I四本拔去、齒槽縁眞直である。

一六號　下顎骨數個の破片となつてゐる、右枝及び隣接體部、左體後部及び左枝上部、中等大、體中部を缺く。Iの狀態不明。

一七號　下顎骨體の右の後部、M三本ある、質良、用耗なし、$M_1 > M_2 > M_3$、但しその差極めて僅少。

一八號　下顎骨體の右の後部、風化强、M三本ある、用耗輕度、$M_1 > M_2 = M_3$

一九號　下顎骨體右半分及び左部の數片、M三本坐す、强大、用耗弱、$M_1 > M_2 > M_3$

二〇號　下顎骨體の右後部、小形、CPPMMM六個齒槽ある、五個空、M_1一本用耗極少。

二一號　下顎骨左小片、P_1とM_1ある、用耗稍强、M_1咀嚼面に輕度の齲蝕。

以上顏面骨に就いては二十一個人としたが、腦蓋骨と顏面骨殊に顎骨との關係は一號を除いては全く不明である。

外に四十六本の遊離せる齒がある。上I三本、C四本P一本、M三十八本。この中一本中度の齲蝕せるも

M [P] [P] [C] (I) (I) ｜ (I) (I) [C]

四本 I 拔齒、齒槽緣少しく損するも輕く凹んでゐる。M_1 强、用耗弱。

一一號　下顎骨體部、甚だ纎弱、基底風化、頤隆起弱、頤棘弱、舌下腺窩鮮明、齒式

[M] [P] [P] [C] (I) (I) ｜ (I) (I) C [P] [P] M

左 P_1 用耗弱、他の八個齒槽夻、C 齒槽少し捻轉してゐる、I 齒槽閉鎖、拔齒、I の齒槽緣少し凹んでゐる。右左顴骨及び上顎骨體あるも損してゐる。

一二號　下顎骨兩枝及び體の左端を缺く。青年、小形、頤高甚だ低、頤隆起及び結節弱、頤棘中等、二腹筋窩及び舌下腺窩不鮮明。齒式

[M] [P] [P] [C] (I) (I) ｜ (I) (I) C [P] [P] M

左 M_1 齒槽閉鎖して粗糙になつてゐる、これは自然脫落であらう。齒槽七個ある、六個夻、左犬齒一本あるのみ、用耗してゐない、I 齒槽閉鎖は拔齒、齒槽緣殆んど眞直。

十三號　下顎骨體、但し右大部分を缺く。中等大、頤高中等、頤隆起甚だ明、頤結節弱、頤棘中等、二腹筋窩鮮明、舌下腺窩中度。齒式

[C] (I) (I) ｜ (I) (I) [C] [P] [P] M [M] [M]

齒槽七個ある、六個夻、左 M_1 冠全部齲蝕して齒腔は廣く開かれてゐる。I 四本拔去せられてある、齒槽緣は凹んでゐる。

十四號　下顎骨、右枝及び隣接部並に左枝上部欠損、輕度の風化。小形、頤高低、頤隆起强、頤結節中等、

七號　下顎骨、完、ただ角部風化してゐるのみ、中等大、頤高中等、頤隆起鮮明、頤結節弱、二腹筋窩明瞭、舌下腺窩弱、頤棘中等、枝の幅中等、下顎截痕中度。齒式

M M M [P] P [C] Ⓘ Ⓘ | Ⓘ Ⓘ [C] [P] [P] M M M

齒槽十二個存す、齒七本坐す、五個空、I 四本の齒槽閉鎖す、これは拔齒、I 部齒槽緣輕く凹んでゐる。齒列甚だ規則正しい、齒質良、用耗中度、齲齒なし、M の大さの順序は右 $M_1 > M_2 > M_3$、左 $M_1 > M_2 = M_3$。

八號　下顎骨、保存狀態は兩側枝の上部欠損するのみ。稍强、頤高中等、頤隆起强、頤結節弱、二腹筋窩鮮明、舌下腺窩甚深、頤棘弱、咬筋粗隆中等、翼狀筋粗隆强、枝の幅中等。齒式

M M M P P [C] Ⓘ Ⓘ | Ⓘ Ⓘ [C] P P M M M

十二齒槽ある、齒一〇本坐す、兩犬齒槽空、この齒槽は少しく捻轉してゐる、これは石器時代人に於て拔去せられた齒の隣の齒に屢見ることである。四本の I 齒槽閉鎖、これは拔齒、相當齒槽緣輕く凹んでゐる。齒列甚だ規則正しい、齒質良、用耗弱、齲齒なし、$M_1 > M_2 = M_3$。

九號　下顎骨體の左半分あるのみ、小形、頤高低、頤隆起及び頤結節弱、頤棘小、舌下腺窩不鮮明。齒式

| Ⓘ Ⓘ Ⓒ Ⓟ [P] [M] [M]

齒は一本もない I の齒槽は閉鎖してゐる、これは無論拔齒である。C P_1 の齒槽も閉鎖してゐるがこれも同じく拔齒であるか、これは五號上顎に於けると全く同一の問題である。P_1 の位置に齒根の一小片固く嵌入してゐる、齒槽緣は凹んでゐない。

一〇號　下顎骨體の中央部、小形、頤高低、頤隆起弱、頤結節弱、頤棘中等、舌下腺窩鮮明。齒式

下窩深。齒式

[M] [M] [M] [P] [P] (C) (I) [I] |

齒一本もない、齒槽列規則正しい、I_2 C 齒槽萎縮相當する齒槽縁殆んど眞直。

五號　右左上顎骨齒槽突起及び口蓋突起存、その他の部分缺、口蓋骨地平部一部缺、口蓋幅廣い、穹窿弱低。鼻下窩淺、齒槽突起甚だ低、垂直。齒式

M [M] M P (P) (C) (I) (I) | (I) (I) (C) (P) P [M] [M] [M]

齒三本（$2P_2$ M_1）坐す、用耗中度、齒槽四個空、右 M_2 の齒槽萎縮閉鎖してゐるがその狀態からして自然に脫落したものと思はれる。I_1 I_2 C P_1 の齒槽は右左共閉鎖してゐる。右 P_1 の有るべき場所に齒根の小片が嵌入して殘つてゐる。ここに疑問とするところは、これが悉く拔去せられたものであるかといふことである。I_2 C は他の例に倣つて拔去と推定して間違なからうが、I_1 と P_1 もやはり拔去であるか、これは聊か疑がないでもない、右 P_1 根の小片が殘つてゐることは、これは强力を以て打ち拔いたことを暗示すると考へられるが、尙ほこのことは後に述べる。缺亡齒に相當する齒槽縁は奥齒の部と全く同一平面にあつて少しも凹んでゐない。

六號　右上顎門齒部の小片及び齒槽突起の後部片。甚だ貧弱なる骨片であるが次の如き齒式を知ることが出來る。

[M] M M P [P] (C) (I) [I] |

卽ち I_2 C は拔去せられて隣の I_1 と P_1 の齒槽は空である。齒槽縁は强く風化してゐる。二本の M は質良、用耗弱、鼻下窩深。

□ 紛失、歯槽空
| 脱落、歯槽萎縮
| 缺損

二號　上顎及び下顎骨、これは確かに組みである。上顎骨左側、體部缺損、鼻下窩深い、これは主として I_2 Cの缺亡による。口蓋廣く深い、歯槽突起低い、稍直立してゐる。下顎完全、中等大、頤高中等、枝幅中等、截痕右深左中度、頤隆起中等、頤結節弱、二腹筋窩鮮明、舌下腺窩不明瞭、頤棘右尖强左尖然らず、咬筋粗隆弱、翼狀筋粗隆中等。上下歯列の狀態は式を以て表はせば次の通り

M M P P (C) (I) [I] | [I] (I) (C) [P] P M M [M]
[M] M M [P] [P] C (I) (I) | (I) (I) [C] [P] [P] [M] M M

歯槽二十四個存、十一個空、歯十三本坐す、八本拔去せられてゐる。歯槽緣の上 I_2 C に相當する部分右は極めて輕く凹んでゐるが左は眞直である、下 I 四本に相當する部分も眞直である。歯列は甚だ規則正しい。歯質良、用耗中度、齲歯はない、上 $M_1 > M_2 = M_3$ 下 $M_1 > M_2 = M_3$

三號　右上顎骨歯槽突起及び口蓋突起口蓋骨地平部在、體及びその他の部分缺、鼻下窩深、口蓋穹窿弱及低。

歯式

[M] [M] M [P] [P] (C) (I) [I] |

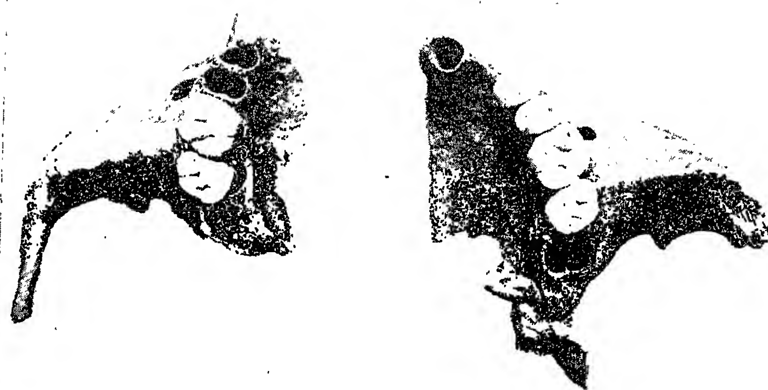
M_1 一本存するのみ、I_2 C に相當する歯槽緣風化してゐる。

四號　右上顎骨歯槽突起及び口蓋突起在、體及びその部缺亡、口蓋骨地平部の一部缺、口蓋低、穹窿弱。鼻

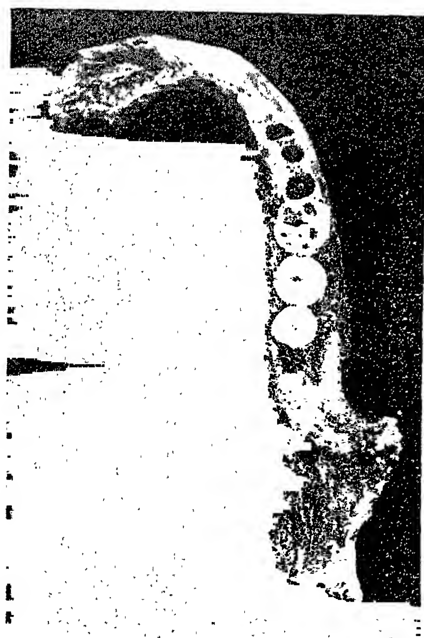
質の少しく現はれてゐるのも又全く現はれてゐないのもある位の輕度である。かく立派なる齒列に於て上 I_2C.下 I 四本が缺亡してゐるが、これは全く故意に拔去したものと斷定する。尚ほこれを齒式を以て表はせば次の通り

右		左
[M] M M [P] [P] (C) I I	[I] (I) (C) P P M M [M]	
M M M [P] [P] [C] (I) (I)	(I) (I) [C] P P M M M	

註 本論文中に用ふる齒の狀態に關する記號
I門齒 C犬齒 P小臼齒 M大臼齒
○ 拔齒
△ 加工



(イ) 顔面骨第一號
上. 右左 I_2C 拔除



(ロ) 顔面骨第一號
下. I 四本拔除

る三縫合は何れも鋸齒に乏しき方、殊に入狀縫合に於て然うである。彼の種種な人種に就いて見られるところの外聽道に於ける骨腫が日本石器時代人に多く現はれることは長谷部氏によつて始めて唱へられた、今回の人骨中顳顬骨が割合に多數殘存してゐるからしてこの骨腫に注意して見たが十九個の成人顳顬骨（小兒のものは除く）中一回も見なかつた。

顏面骨及びその破片殊に上顎下顎

一號　これは腦蓋骨一號に屬するもの。鼻骨上半分及び前頭骨鼻部がある。鼻骨は比較的廣い（最小幅12mm.）鼻前頭縫合の引つ込み弱い。右左上顎骨は各顴骨と接合して存する。右顴骨には立派なる後裂がある。左不明。鼻下窩甚だ深、梨子狀口の下緣鋭、犬齒窩深さ中等。右左上顎骨は互に組み合せることは出來ない。下顎頤高は低い、頤隆起鮮明、頤結節弱、二腹筋窩弱、舌下腺窩弱、頤棘中等、咀嚼筋粗隆中等。上齒列左 I_1 齒槽空、I_2 C 齒槽萎縮閉鎖してその齒槽緣は殆んど直線をなしてゐる。P_1 P_2 M_1 M_2 在、M_3 齒槽空。右 I_1 I_2 C 齒槽部缺損、但し C 齒槽が萎縮してゐることはその唇側壁と舌側壁とが融合してゐることによつて推定することが出來る。P_1 P_2 齒槽空、M_1 M_2 在、M_3 齒槽缺損、但しその近側齒槽壁が殘存してゐるからして M_3 は在つた。下顎は左側 P_1 より以後部缺損、但し C の齒槽舌側壁を明かに見るを以て C は確かにあつた。右左 I_1 I_2 齒槽閉鎖、その相當齒槽緣は輕く凹んでゐる。右側 C P_1 P_2 齒槽空 M_3 本在、$M_1 > M_2 > M_3$ 殘存する齒の形態は誠に整うてゐる。齒質は極めて良好である、また齒列は齒槽の位置からして極めて規則正しいことを知る。齒の咬耗は象牙

十二號　後頭骨片及び二三の骨片。
十三號　右顳顬骨及び左岩様部。右外聽道骨腫なし（左不明）。
十四號　成人　前頭骨左眼窠上緣部、右顱頂骨及び後頭骨の破片。
十五號　左顳顬骨、稍完、右岩様部、兩側共外聽道骨腫なし。
十六號　右顳顬骨岩様部、小形、骨腫なし。
十七號　左顳顬骨、缺損ある、骨腫なし、その他數個の腦蓋骨片。
十八號　右顳顬骨、缺損ある、骨腫なし。
十九號　小兒　前頭骨左眼窠上部、右顱頂骨完、左少し缺損。
二十號　小兒　數個の頭骨破片、左額骨完、後裂を有する。
二十一號　小兒　右顳顬骨及び數個の破片。
二十二號　小兒　左顳顬骨岩様部あるのみ。
以上二十二個人のものとして數へ擧げたけれどもその中に一顳顬骨又は一岩様部を以て一個人を代表してゐるものもあつて、腦蓋骨斷片中に同一個人に屬するものを別個人とした様な誤は無いかといふに、これは保し難いからして實數は或は上の數よりも少ないかもしれぬ。

要するに腦蓋骨の形態に就いて特に言ひ得ることは甚だ少ない。その全形を知り得るものはただ一個（一號）のみで他の人類園との比較は誠に意義少ないことではあるが、その長幅示數は現代日本人の如く廣頭に近い。小數の例に就いて見たところでは眉弓及び眉間隆起の發達は甚だ弱い、從つて鼻前頭縫合の引つ込みが弱い。主な

二號　成人　前頭骨、右左顱頂骨及び右左顳顬骨在、その一部は小破片に碎けてゐる。骨質甚だ脆い、組み立てることは出來ない。腦蓋稍大、厚、前頭骨の穹窿良。眉弓及び眉間隆起の發達中等。鼻骨の上端在るが幅甚だ廣い、鼻前頭縫合の長 15mm. その引つ込み弱い。兩側外聽道骨腫なし。冠狀、矢狀、入狀縫合化骨なし、鋸齒甚だ乏し、鱗狀縫合右化骨す、左不明。縫合骨なし、入狀縫合にもない。横後頭縫合の殘餘 18mm. 兩側にある。

三號　成人　腦蓋諸骨は多數の小片となつてゐて組み立てることは出來ない。骨は厚い、甚だ脆い。前頭骨右眼窠上部に於ては眉弓の甚だ弱いことを見る。右左外聽道骨腫なし。冠狀、矢狀、入狀縫合開いてゐる。

四號　成人　多數の小片となつてゐる。骨厚さ中等、甚だ脆い。前頭骨下半分在るが眉弓及び眉間隆起甚弱、鼻前頭縫合の引つ込み甚だ弱い。左觀骨に後裂がある。冠狀、矢狀縫合開いてゐる、入狀縫合不明。

五號　成人　一土塊となつてゐたもの、破碎して多數の小片となつてゐる。左前頭骨片に於て眉弓の甚だ弱いことを知る。右外聽道骨腫なし。冠狀、矢狀、入狀縫合皆化骨なし。

六號　成人　前頭、兩顱頂骨あるも拾數個の破片に碎けてゐる。骨質は厚く脆く腐朽してゐる。冠狀、矢狀入狀縫合開いてゐる。

七號　成人　左前頭骨、顱頂骨、後頭骨何れも斷片。骨質堅、薄。

八號　成人　左顳顬骨、右岩様部、兩側共外聽道骨腫なし。左顱頂骨片その他多數の骨片ある。

九號　成人　多數の斷片、冠狀、矢狀、入狀縫合開。

十號　成人　不完全なる兩顳顬骨、外聽道骨腫なし、その他數片。

十一號　顳顬骨の兩側岩様部、外聽道骨腫なし。

腦蓋骨及びその破片

一號　成人　多分男、これが腦蓋骨中唯一の稍完全なものである。これに屬する顏面骨一號があるけれども接合することは出來ない。後頭骨左側部及び左顳顬骨乳樣部を缺く。また大切なる眉間に損傷があつて頭蓋長徑は精確には計測出來ない。稍大きい方である。骨質堅、厚さ中等。顱頂觀に於ては卵圓形、廣さ中等、後頭は少し歪んでゐる。即ち後頭左半は右半より穹窿が強い。前頭穹窿良、顱頂及び前頭結節弱、顳顬坦面また穹窿す。眉弓及び眉間隆起は發達弱き方、右左外聽道骨腫なし。冠狀、矢狀縫合の鋸齒は大體に於て中等であるが入狀縫合鋸は齒甚だ乏しい、二個の豌豆大の縫合骨がある。

二三の計測數を擧れば次の通り（比較のため石器時代人、アイノ及び日本人の數を並べ揭ぐ）

註　石器時代人に附したる括弧內の數字は頭骨數、アイノに關する數は醫科大學紀要第二卷（一八九三）に揭ぐるもの、日本人の數は男女各二十五個の完全なる頭骨に就て計測せるもの。

	一號腦蓋骨	石器時代人	アイノ	日本人
地平周徑	520	♂ 527,4(10) ♀ 504,7(11)	522,5 501,7	513,0 494,0
最大長	約 183	♂ 188,1(13) ♀ 178,7(11)	185,8 177,2	180,6 172,6
最大幅	145	♂ 143,8(13) ♀ 137,2(11)	141,2 136,8	140,7 136,9
長幅示數	約 79,2	♂ 76,5(13) ♀ 76,8(11)	76,0 77,2	78,0 79,4
高徑	136	♂ 143,3(3) ♀ 136,0(3)	139,5 135,1	138,9 133,6
長高示數	約 74,3	♂ 76,3(3) ♀ 74,7(3)	75,1 76,2	77,0 77,5
幅高示數	93,8	♂ 100,0(3) ♀ 99,9(3)	98,8 98,8	98,9 97,7

最大幅は鱗狀縫合の上方顱頂骨部に位置する。この腦蓋は大體に於てアイノらしいところはない。

安房神社洞窟人骨

故本山彦一翁生前の知遇を感謝し謹んで本文を靈前に捧ぐ

小金井良精

安房國官幣大社安房神社境内洞窟から昭和七年の春多數の人骨が出た。この洞窟遺跡の性質、人骨出土の狀態及びその伴出物に就いては大場磐雄君が精しく報告せられた。主なる伴出物は彌生式土器、貝輪、小玉、骨、魚骨等である（神社協會雜誌第三十一年第八號第九號第三十二年第一號）。人骨の調査を予に一任せられたことを柴田常惠、大場磐雄兩君に深く感謝する。人骨は全部手許へ送附せられた。約 50×30×20 cm 箱十七個あつて、その數量は夥しいものである。併しながらこの多數の人骨は入り亂れてゐるのみならず、破碎して無數の大小片となつてゐるからして、これを各個人に從つて擇り分けることは到底不可能である。洞窟内に於て人骨發見の際既に散在又は混亂の狀態にあつたといふことである。それ故に各個人的に分けることを斷念して、以下各骨をその種類に從つて分類し、これを目錄樣に記載しそれに一々簡單なる記述を附し、場合によつては二三の計測數を加へることとする。

本山翁突然の訃は、單に私共、昵近者の驚き、且つ哀むに止まらず、私共史前學界、より廣く日本考古學界に於ける哀しみであると共に、學界としては、大きな損失である。翁自身が考古學者としての業績は、本號に於て多くを語る人もあらう。又間接に考古學界の了解者であり、愛好者であると共に、大きな後援者であつた、其事業に就ては、旣に周知のことであると同時に、これ亦其夫々に對しては、本號執筆の諸賢によつて畫かるゝことゝ信ずる。

私共史前學會の幹事として、翁生前の知遇に對し、哀悼を捧ぐると共に、翁を永遠に紀念すべく、本號の特輯を企圖したのであるが、一度この計畫を諮るや、期せずして諸家の相贊せらるゝ所となり、見らるゝ如く、斯界の泰斗を網羅し得たことは、如何に翁が本學界に盡されたかを、雄辯に物語ると共に、一面に於て本學界より如何に追悼し哀惜せられて居るかゞ、一目了解せらるゝ所と考へる。私は今更古い言葉の棺を覆ふて後云々と云ふことを目前親しく見るのであつて、今日社會の或る半面に於ては、往々其德に浴する時にこそ、笑顏もすれ、後に至つて恬然として恥なきものを見るに當り、我學界としては、翁生前の厚誼を忘るゝことなく、玆に其感謝を表し、且つ最後の訣別を告ぐるに、吝嗇かでない所を明にし得た所は、翁に對しても有終の美を完ふし得たことゝ信ずる。これ獨り翁をして永遠ならしむるに止まらず、翁なき今日、尙よく其志を繼承して、本學の前途に勇往する意氣の發露でもある。玆に謹んで本號を、翁の靈前に備へ、以て私共同學の哀悼を表すると共に、今後に於ても、益々本學に盡瘁して、以て翁に報いんと欲するものである。

大山柏

目次

史前學雜誌

第五卷 第一號

本山彦一翁追悼號

昭和八年三月

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル)

六　會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所內　**史前學會**
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇
　　　杉山壽榮男　田澤金吾
　　　池上啓介

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年三月二十五日印刷
昭和八年三月三十日發行

第五卷第一號
定價壹圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山柏
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內　**史前學會**
電話青山一二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　**岡書院**
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第五卷　第一號

史前學會

A 257(2)

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

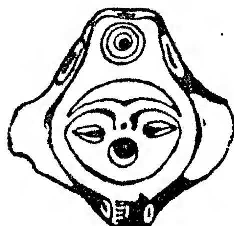
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



5. BAND 2. HEFT

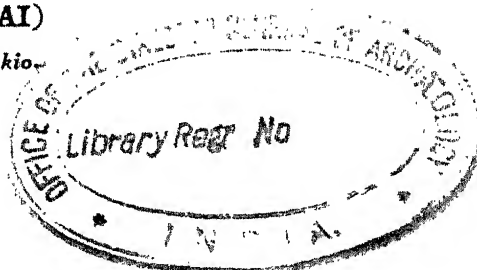
TOKIO

May 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama   Sueo Sugiyama
Isamu Kohno   Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

INHALT

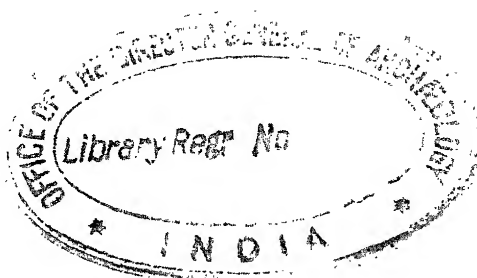
I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

III. BUECHER BESPRECHUNGEN

ANHANG

TAFEL



八木貞助	信州南佐久郡畑八產象齒化石と其地層に就いて　地學雜誌　第四十輯　昭和三年
小澤儀明	洪積世の大雨期に就きて　東洋學藝雜誌　第四十二卷　一九二六年
脇水鐵五郎	關東ロームの分布及其成因について　土壤肥料學雜誌 Vol. 1. No. 1　昭和二年
T. Seki	Chemical & Mineralogical Study of Japanese Volcanogenous Ash Loams. Proc.Jmp. Academy. Vol. II. No. 2 1926
中尾清藏	機械的組成分並に鑛物組成分より見たる所謂關東ローム　地質學雜誌　第三十六卷
大石三郎	鹽原化石湖產昆蟲の一新種　同誌第三十八卷　第四二六號　昭和六年
大塚彌之助	三浦半島北部の層序と神奈川縣南部の最新地質時代に於ける海岸線の變化に就て　同誌 第三十七卷 四四二號 昭和五年
〃	大磯層其の他に就いて　同誌　第三十八卷　四五一號　昭和六年
〃	大磯地塊を中心とする地域の層序に就て　同誌　第三十六卷　四三四號　昭和四年
〃	三浦半島北部の層序と最近地質時代の地史　地質學雜誌　第三十七卷　四四一號　昭和五年
植田房雄	房總半島北部の地質　同誌　同號
槇山次郎	關東南部の洪積層　同誌　同號
〃	遠州濱名湖畔の舊象と其の地層　地球　第一卷
田山利三郎	房總半島に於ける侵蝕面の對　同誌　同號
田山利三郎・新野弘	Outline of Geology of Idu Peninsula 齋藤報恩會學術報告 No. 7. 1931
佐伯四郎	千葉縣及栃木縣產の二化石象　地質學雜誌　第三十七卷　四四一號
〃	地下鐵工事中に發掘されたる象の齒に就いて　同誌　第三十七卷　四三六號　昭和一年
遠藤誠道	日本更新世の氣候に就いて　同誌　第三十八卷　四五七號　昭和六年
永澤讓次	土佐國長岡郡稻生村下田石灰岩裂罅中より發見せる鹿に就きて　同誌　三十八卷　四五六號　昭和六年
〃	洪積期以後に於ける日本鹿類の大臼齒の大いさの變異に就いて　同誌　第三十九卷　四六一號　昭和七年
〃	幡磨國より四不象化石の發見　同誌　第四拾卷　四七三號　昭和八年

〃　日本の珊瑚期　現代の科學　第一卷　大正二年
〃　Fossils from the Miura Peninsula and its Immediate North. Journ. Coll. Sci. Tokyo. Imp. Uni. XXXIX art 6 1920
〃　Fossils from the upper musashins of Kazusa and Shimôsa. Journ coll. Sci Tokyo. Imp. Uni XLIV. art 1 1922
〃　Mollusca from the coral-bed of Awa. Journ. Coll. Sci Tokyo Imp. Uni. XLV art 1 1924
〃　Mollusca fron the Tertiary Basin of chichibu 1925
〃　Mollusca from the upper Musashino of Tokyo and its Shurb 1927
〃　Mollusca from the upper Musashino of Western Simosa and Southern Musashi. 1928
〃　武藏野系上部の介化石地質學雜誌　第二十八卷　大正十年 (1921)
田中啓爾著　多摩御陵附近の地誌
淺井治平　多摩丘陵の地形　地理學評論　第一卷　第五號
清水三郎　東京下町地域竝びに其附近に於る洪積世　地學雜誌三七年　四三號
東木龍七　東京下町地域竝びに其附近に於る洪積世以後の地形發達史　地理學評論　第四卷
〃　東京山ノ手地域に於ける侵蝕面の發達史　同誌　同卷
〃　侵蝕面の發達史よりみたる霞ケ浦地方の地殼運動　同誌　同卷
〃　日本群島の洪積丘陵に於る侵蝕面の形態三種の型式　同誌　同卷
辻村太郎　地形學
小川琢治　中央日本氷河作用の遺跡と堆積物　地質學雜誌　第三十九卷　四六五號　昭和七年
〃　關東地震研究關東地質構造　地球第一卷
Brauns :　Geology of the Environs of Tokyo.
松本彥七郎　日本產化石象の種類　地質學雜誌　第三十一卷
〃　本邦產哺乳動物化石床表　同誌　第二十三卷　大正五年
〃　Evidences of the Post-Glacial Cycle of Climatic Change in North-Eastern Japan, based upon a study of the Marine Molluscs and Mammals from the Sites at Daigi, etc. Province of Rikuzen. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. Sendai, Japan. Sec. Ser. (Geol.), Vol. XIII, No. 3 1930

矢部長克	最近地質時代に於ける日本群島と亞細亞大陸との陸地接續　地質學雜誌　第三十六卷　四二九號　昭和四年
〃	本邦に於ける鮮新期と更新期との分界に就いて　日本學術協會報告　第五卷　昭和四年
〃	東京附近第三紀層及洪積層に就きて　地質學雜誌　十三卷　明治三十九年 (1906)
〃	A New Pleistocene Fauna from Tokyo. Geol. Mag. London. 1911
〃	プライストシン世に於ける日本の氣候について　現代の科學　第一卷　大正二年
〃	房總半島　現代の科學　第二卷　第四號　大正三年 (1914)
〃	日本洪積世氣候論東北帝大理地質古生物學教室邦文報告　三號　大正十一年
〃	The Great Kwantô Earthquake of Sept. 1. 1923 Saitô Hōon Kai annal Report of the Work 1925
〃	關東山地北東部の地質構造　地質學雜誌　二十七卷　大正九年 (1910)
矢部長克・野村七平	Fossil-localities in the environs of Kioroshi Guide Book (p. p. C.)
矢部長克・半澤正四郎	Foraminifera-Faunas from Tokyo-beds Jap. Journ. Geol. & Geogr. Vol. II. No. 4. 1923
〃　〃	Foraminifera from the shell. leds of Nojima. Jap Journ. Beol. & Geogr. Vol. II. No 2 1923
青木廉二郎	三浦半島の海岸に就きて　地球　第三卷　大正十四年 (1925)
鈴木敏	東京圖幅地質說明書　明治二十一年
藤本治義	關東山地東緣部の地質學的考察　地質學雜誌　大正十五年 (1926)
德永重康	東京以南三浦半島の地質　同誌第九卷
〃	Fossils from the Environs of Tokyo. Jour. Coll. Sci. Tokyo. Imp. Uni. 21. 9.
〃	Mammalian Fossils found in Limestone Caves in Korea. Proc. Imp. Acad. No. 3, 1929.
山崎直方	氷期に關する論爭　現代の科學　第二卷　大正三年
〃	房總半島東南部に於ける傾動地塊に就きて　地理學評論 第一卷
〃	Physiographical studies of the Southern Part of Bōsō Peninsula Journ. Facce. Sci. Tokyo Imp. Uni II, 1 2
〃	史前時代以來上總東南海岸の昇降に就きて　地球三卷　大正十四年
横山又次郎	Climatic changes in Japan Since the Pliocene Epoch Journ. coll. Sci. Tokyo. Imp. Uni. Vol. XXXII. art. 5, 1911
〃	東京附近の鮮新世洪積兩期の地層と氣候に就きて、地質學雜誌 XVIII. 明治四十四年

然れども洪積世の末期或は沖積世の初期に於ては氣候が今日よりも温暖であつた事を推測せしめる事實がある。その事實と云ふのは第一に、江戸橋、和歌山縣、美濃國、札幌、陸奥國三戸郡等の各所より印度象、Elephas indicus. の化石が發見されてゐる事で、松本博士は此の印度象の時代を最上部洪積世であると論ぜられた。次に沼の珊瑚層が横山博士に依りて最上部洪積世と說かれ又矢部博士に依りて沖積世下部と考へられてゐる事である。因みに、松本博士は貝塚の研究から陸前地方に於ける沖積世は下からダイギアン、タカラガミニアン、下部ミヤトニアン、上部ミヤトニアンに層別され、初めの二期は Arca granosa に富み、氣候は今日よりも温暖にして後の二期は Arca obtusa, Mactra sachalinensis, Pecten yessoensis. に富み、從つて氣候は寒冷であつたと述べられて居る。而して此の温暖の時期が北ヨーロッパのリトリナ期の前半に當り又寒冷の時期がその後に續いた時期に相當するものと想像せられた。

猶ほ爰に吾人の興味を惹く事は内地に於て馴鹿の角ならんと思はるるものの發見された事である。その一は最近新潟縣北蒲原郡笹岡村を流れる小川の川底三尺下の個所から馴鹿の角の破片と思はるゝものが出土した。これは德永博士の想像に依れば洪積世岩くは新しくとも文明人生活以前の沖積世に棲息せるものが河中に遺骸を殘したものであると謂はれる。他の一は明治二十六年若林勝邦氏が陸前國上北郡七戸の東なる貝塚村字貝盛の貝塚中から石器時代の遺物と共に多數の角、骨に混じて一種偉大なる偏平鹿角二個を採集せられた事である。同氏の記述に依ればこれは馴鹿の角なりと云ふ。馴鹿は現今樺太島以南の地には棲息せず、前記馴鹿が沖積世の初期或はその最末期に於て内地に棲息したるものとすれば當時内地の氣候は寒冷なりしとの想像が許される譯である。（昭和七年末）

文　獻

矢部長克・青木廉二郎　關東盆地周緣山地に沿へる段丘の地質時代　地理學評論　第三卷　第二號
〃　〃　日本近生代地層の對比　東北帝大地質學古生物學敎室邦文報告四號　大正十三年
〃　〃　A Sumary of the Stratigraphical and Palaeontological studies of the Cenozoic of Japan. 1923
〃　〃　大正十二年九月一日の關東大地震と地質構造との關係 (I. II. III.) 大正十四年 (1925)

異なるものと論ぜられた。然るに矢部博士は王子の介層（東京層）を洪積世、小柴の介層を第三紀の終末に近きもの、沼の珊瑚層を洪積世とし、此等三層の時代を上から沼の珊瑚層、王子の介層、小柴の介層の順とすれば歐洲に於ける氣候の變化と對照して恰も並行の事實あるに注目し得可しと述べられた。

抑も本邦に於ては明治の時代既に外國の學者にして立山、其他の高山を跋渉し氷河の存在を指適したる者もあるが、本邦人にては明治三十六年山崎直方博士は白馬嶽、立山方面を跋渉し、處々に地形上氷河作用を受けた形跡あるを發見され、其後大正二年に同博士は又飛驒山脈の中部地方の山々を調査し、處々にカールの發達の顯著なるを發見せられた。

又ハイデルベルヒ大學のヘツトナー氏は信濃松本より梓川の谿谷に沿ふて登られし際偶ま路傍の石塊に氷河の擦痕と思しきものあるを發見された、是れが今日ヘツトナー石と呼ばれるものである。又最近（昭和七年）に至り京都大學の小川博士は「中央日本氷河作用の遺跡と堆積物」と題して京都に於ける東京地質學會總會の席上で博士發見の氷河遺跡に關し講演を爲された。

博士の調査に依れば、信濃の仁科山脈なる木崎湖東南隅の道路及其上の鐵道との間の切割に於て白色粘土の湖氷成及褐色砂礫の河氷成岩層中より明瞭なる擦痕を有する轉礫を發見され又青木湖北岸の海頭丘陵は小圓丘の起伏する氷河地形たる事を認められ又中綱湖の西南に見える圈谷中より多數の明瞭なる擦痕ある堆石を發見されたのである。而して信濃北安曇郡仁科三湖は主として氷蝕の結果形成されたものとの推測を下された。南日本アルプスに於ては諏訪湖から韮崎に至る中央線沿道を踏査されて、處々に堆石丘列を發見された由である。以上紹介したる氷河遺跡の眞僞に關しては今此處に記述を爲さざれども兎に角山崎博士以後暫らく等閑に附せられたる氷河問題の復活せる事、此の問題の今後の成行に就ては大に注目に價する。一昨年（昭和六年）遠藤（誠道）理學士は鹽原の有名な木葉化石に就きて興味ある研究を發表せられた。同學士の研究に依れば鹽原の木葉化石を含む地層は一の湖水堆積層であつて、當時の鹽原湖附近の溫度は今日のそれよりも攝氏の五度乃至六度程低く而してその時代は洪積世初半に屬するものであると論ぜられてゐる。

以上述べた矢部、山崎、小川、遠藤諸氏の研究發見に由りて觀れば本邦に於ても洪積世の氣候は寒冷なりし事が想像される。

十五、後氷河期の問題

ものと想像せられる。又關東地帶は傾斜運動の爲めに盆地狀を作し、利根川はその中に蛇行流路を深く刻み込んだのであらう。浦賀水道は恐らく此頃房總三浦を連らぬる半島の沈下に依りて生じた海水の通路であらう。その後土地の沈降に依り河川の堆積狀況の異なる爲めに手賀沼、印幡沼、霞ケ浦等の湖沼が出來、沈降崖に貝塚が發達したのであるが、その後又土地の隆起した事は現存の貝塚の位置からしても推測し得らる。

十三、他地方の洪積層

東京附近以外の洪積層に就きては未だ學者の詳細なる研究が行はれて居らざるも著名なる個所二三を茲に擧ぐれば、彼の木葉石にて有名なる鹽原の湖成層は植物化石の研究に由り洪積世初半のものと推測される。濱名湖の東岸なる佐濱からは E. namadicus に近き象齒が發見せられた。此の化石包含層は埋藏介化石よりして半淡水成なる事が推測せられ又採集介化石の九五%は現棲種なるに因り該地層の洪積層なる事が分かる。田端、御茶の水、下末吉等の半淡水貝群が右の地層中の介化石群に相當する。

信州南佐久群畑八より象齒の化石が發見せられたるが横山博士は此の化石を E. trogontheri Pohlig. と斷定し、八木氏は其の化石の包含層を千曲層と命名し洪積統の最下部に屬せしめた。其他仙臺市青葉山の礫層や遠江の牧野原臺地を形つくる地層等は孰れも洪積層に屬せらる。猶ほ瀬戸内海の海底に存在する哺乳動物群は、松本博士に依ると、洪積世中部を示すものと謂はる。要するに、本邦に於ける洪積層は大體陸生層、湖成層、海成層等である。而して洪積層の多くが礫層なる事は陸地の隆起、河川の活動、氷河の影響、雨量の多大等を想像せしめるのである。

十四、氣候と氷河の問題

歐米に於ては氷河に襲はれた爲め洪積世の氣候は概ね寒冷であつた尙詳しく云へば寒冷の次ぎに溫暖來り冷暖の二時期が幾度か繰り返へされたと云はれてゐる。扨て本邦洪積世の氣候は如何と云ふに之に就いては夙に横山博士、矢部博士、山崎博士等の所論あり又最近には遠藤理學士に依る寒冷說、小川博士に依る氷河存在說等の發表あり。横山博士は暖海棲の動物群に富む沼の珊瑚層を洪積世に入れ、又北方種に富む貝化石包含の（矢部博士の）成田層、東京層等を鮮新世に入れた爲め洪積世の氣候は勢ひ歐米と

長沼層は戸塚、長沼附近に發達する含介砂岩層で基底に礫層が來る。矢部博士はこの長沼層を以て東京層の基底を爲すものとされたが大塚理學士は長沼層を獨立せる一の地質系統と爲し古東京灣地域から別の海灣に堆積せるものと見做した。長沼層より採集せられた介化石の中主要なるものの種名を擧げると左表の如くである。

長沼介層化石目錄（横山博士の記載より）

Dominant species 10. 及びその Geographical distribution

Cancellaria spengleriana, DESH.	中部及西部日本よりフイリッピンより濠洲に至る
Nassa siquijorensis, AD.=Nassa livescens of YOKOYAMA pars	中部日本よりマレイ群島に至る
Natica janthostoma, DESH.	北部及中部日本
Dentalium octogonum, LAM.	北, 中, 西部日本よりセイロン及濠洲にまで達す
Corbula venusta GOULD.	北部日本
Solecurtus albreviatus. GOULD.	中部日本
Chione thiara, DOL.=C isabellina of YOKOYAMA	中,西,南部日本
Venericardea ferruginea, AD.	北部日本
Pecten naganumana, YOK.	生死不明種
Arca of. zebuensis, RVE =A. symmetrica of YOKOYAMA	フイリッピン

十二、關東平野の沿革

前記諸層に就きての知識からして關東地方の地質學的沿革が略ぼ分明したのである。第三紀の終末に、三浦、房總兩半島及大磯地塊等は大體峯續きの一大半島を形成して居り此の半島の北部に方りて、鹿島灘に開口せる大なる古東京灣なるものがあり、東京層及成田層はこの灣内に堆積したものと想像される。而して是の層の堆積以前の下底岩層の表面は矢部博士の說に依れば西方亞細亞大陸の東岸まで當時陸續きであつた。此の時代が同教授に依れば鮮新世の最末期である。古東京灣は徐々に上昇して水は東方に退き、その際に關東周緣に二段のテラスを形成した。今日關東周緣の山地に沿ふて觀察される上下二段の段丘がそれで、上段は三〇〇米前後、下段は二〇〇米前後の高さを有する。當時利根川、鬼怒川、多摩川、相模川等の諸水は盛に砂礫を流出してデルタを形成し、今日見る所の加治、狹山、多摩等の臺地を形成した。此の淺海中にロームが堆積したものと想像される。その後處々に地塊運動起りこれに伴ふて斷層が生じた。房總、三浦兩半島の斷層、多摩丘陵周緣の斷層、狹山、加治の臺地周緣の斷層等は此期の

部日本

Potamides zonalis, BRUGTPP. multiformis, LKE 北，中，西部日本及其以南

P. fluviatilis, POT et MICH. 北，中，西及南部海岸

Minolia ornata, SOW=Trochus angulata, TOK. 中部日本

Ringicula musashinoensis, YOK=R. arctata of TOKUNAGA 中部日本

Dentalium weinkauffi, DKR. 中部日本

Solen krusensternii, SCHRENCK 北部日本

Panopaea generosa, GLD. 北部日本

Trapezium japonicum delicatum, PLISB=Saxicava arctica of TOKUNAGA. 中部日本

Myodora fluctuosa, GLD. 西部日本

Tresus nuttali, CONR. 北部及中部日本

Mactra sulcataria, DESH. 北，中，西部日本

Tellina nitidula, DKR. 中部日本

Macoma dissimilis, MARTENS=M. nasuta of TOKUNAGA. 中部日本

Saxidomus purpuratus, DESH. 北中西部日本より印度洋

Venus stimpsoni, GLD. 北部日本

Macrocallista chinensis, CHEM. 北部日本支那及濠洲

Dosinia japonica, RVE=D. exoleta of TOKUNAGA. 中部及西部日本

十一、長 沼 層

Cyclina chinensis, CHEM. 北部日本よりコーチンチャイナ

Tapes rigidus, GLD 北部日本

Cardium californiense, DESH. 北，中，西部日本(寧ろ北方性を示す)

C. muticum, RVE. 北部日本よりマレー群島

Diplodonta usta, GLD=Myapacifica, TOK. 北部及中部日本

Lucia contaria, DKR=Lasaea striata, TOK. 中部日本

Nucula insignis, GLD. 北部日本

Arca inflata, RVE. 北部日本よりマレー群島

A. granosa, L. 中部日本よりマレー群島

Pectunculus yessoensis, SOW=R. albolineatus of TOKUNAGA. 北部日本

Limopsis woodwardi, AD. 中部日本

Pecten laqueatus, SOW. 北，中，西部日本

P. laetus, GLD. 北，中，西部日本

P. Tokyoensis, TOK. 生死不明種

Anomia lischkei, DAUTZ=A. aff patelliformis of TOKUNAGA 北，中，西部日本

Ostrea gigas, THUNB. 北，中，西部日本

Ostrea denselamellosa, LKE. 中，西，南部日本

野村理學士は東京層から合計一三四種の介を採集せられ、その中生死不明種は二六種即ち全體との比は一一・一一%である。松本博士は霞ヶ浦出土の Euelephas trogontherii (Pohlig) 及田端、霞ヶ浦、印旛沼等出土の Loxodonta namadicus naumanni (Mak.) より東京層を下部洪積世と論斷せられた。東京層堆積當時に於ける海水の平均溫度が今日よりも低かりし事は次の事實に據りて推測せられる。即ち矢部博士が德永博士記述の王子、田端、品川より採集の介一六九種の中個數の多き種のみを選びてその分布を調べたるに左の如き結果を得られた故である。

生死不明	二種
北部——南部日本	七種
中部（西）日本	一六種
南部——中部（西）日本	四種
北部——中部（西）日本	一三種
北部日本	八種

東京層の介化石中主なるものを擧げると左表の如くなる。

東京介層化石目錄（德永博士記載より）

Dominant species その地理的分布

Fusus perplexus, Ad. 中部及西部日本

Siphonalia stearunsi, Plisb.= Buccinum undatum of Tokunaga. 中部及西部日本

Nassa japonica, Ad. 中部及西部日本

Nassa festiva, Pow.= N. livescens of Tokunaga. 北，中，西部日本

Olivella consolrina, Lke. 北，中，西部日本

Columbella martensi, Lke 北，中，西部日本

Cancellaria spenglerina, Desh. 中部日本よりフイリツピン及濠洲

Pleurotoma oxytropis, Sow. 中部及西部日本

P. (Drillia) fortilirata, Smith. 中部及西部日本

P. (Drillia) principalis, Plisb. 北，中，西部日本

P. (Mangilia) ojiensis, Tok. 生死不明種

Natica janthostoma, Desh= N. clausa of Tokunaga. 北部及中部日本

Polinices ampla, Phil. 中部日本及其以南

Odostomia hilgendorffi, Clesssin= O. planata of Tokunaga 北

野村理學士は成田層中より三七三種の介化石を採集せられ、その中個體數の多きもの四四種を選びその生存區域に從つて次の如く分類せられた。

生死不明種	三種
北日本―南日本	三種
中部（西）日本	一一種
南日本―中部（西）日本	三種
北日本―中部（西）日本	一七種
北日本	七種
合計	四四種

右合計に對する北日本種、同じく北日本―中部日本種、同じく南日本―中部日本種の比例を採るとそれぞれ一七%、五八%、七%で、明に北日本種の比例が大である。此の事實に依りて觀るも成田層堆積當時に於ける海水の平均溫度が今日のそれよりも低かりし事が推測せられる。橫山博士は上部武藏野系中の介化石中現棲種一八八種を採り、その中一三種が北部日本、一種が南日本、三九種が北―中部日本種なる事を發表せられた、此の事實に依り觀れば上部武藏野系の介化石は北方種に屬する事が分明する。

十、東京層

東京層は成田層の下位に來たり王子、品川、田端等、東京一帶の地下に廣く分布し、白色凝灰質含介砂層であつて成田層とは不整合を爲す。田端驛附近の東京層は木片及河口に棲息の介化石を含み、品川王子等の介層には相當深き場所に棲息する介化石を含有する。植物化石としては王子の含雲母粘土帶から Acer Hilgendorfii Nath. Phyllites sp. Fagus ferruginea. Zelkova keaki Sieb. が出土し、橫濱附近の地層中からは Fagus sylvatica Z. Acer cf. pictum Thunb. A. cf. palmatum Thunb. Carpinus cf. yedoensis. Quercus stuxberai Nath. 等が出土する。因みに、本邦洪積世の植物化石層は此の橫濱本牧の地層と鹽原の木葉石層とがその主たるものにして、ぶな、かへでの類を多く含み、絕滅種は尠い。

A. inflata, Roe. 北部日本よりフイリッピン

Pectunculus jessoensis, Sow. 北部日本

八、成田層の時代

明治時代スエーデンの古植物學者ナトホルスト氏は東京市外王子の介層に於てローム層下の褐色の砂礫層の下に發達せる含雲母粘土帶中より出でたる植物化石が肥前國長崎の南方茂木村の植物化石に等しく、而して此の茂木村の植物化石層が鮮新世なる故を以て王子の粘土帶より下部の層も鮮新世のものなりと論定せられた。又當時東京大學の地質學講師たりしブラウン氏は此の粘土帶中の化石に氣付かず、その下に存在する泥鐵鑛層をもつて時代的の地層の大なる境界と定め、此の泥鐵鑛層の上部を洪積層・下部を第三紀層とせられた。猶又同氏は王子及品川の青灰色凝灰質砂岩中より得たる介化石を英國の地層より出でたる化石に對比して是等の介層を鮮新世とし、その上部の砂礫層は下部洪積世、ロームは上部洪積世のものとせられた。鈴木敏氏の說に依ると含雲母粘土帶及それ以下は鮮新世、それ以上は洪積世と見做されてゐる。德永博士は成田層及其の下位の東京層を洪積世に包含せられた。その理由は東京層より出づる介類を、現棲種と生死不明種とに分つて其の比を看ると一五五種の現世種に對し生死不明種は僅に一〇種に過ぎず、此の地層を洪積世の前期たる鮮新世に入るゝには、歐羅巴に於けるものとの比較上餘りにその比が僅少に過ぐると云ふに在る。

横山博士は狹義の成田層即ち松崎帶より採集せられた介化石の中生死不明種は全體の二九・三%にして、此れが假にその半分の一四・六%に減少せりとも英國の鮮新世と爲さるる地層に於ては七%—一〇%と爲され居る故に松崎帶は少くとも最上部鮮新世より若いとは云へぬ即ち洪積世とは見做す事が出來ないと論ぜられた。而して同博士は成田層及東京層を含む上部武藏野系より三三五種の介類を採集せられ、その中の一〇三種は生死不明種なる故に全體の三〇%が生死不明種となり是を外國に於けるものと比較して上部武藏野系をば上部鮮新世なりと論斷せられた。野村理學士が發作に於て成田層中より採集せられた介化石二九六種中二六種は生死不明種にしてその比の割合は全體の一一・四%なる故横山博士のものよりも甚だしく此の減少せし事が認められる。

九、成田層堆積當時の氣候

成田層中に埋藏される介化石中比較的種の數の多きものを選ぶと左表の如くである。(第三表參照)

成田層介化石群目錄(野村理學士に依る)

Dominant Species 44. 及びその地理的分布

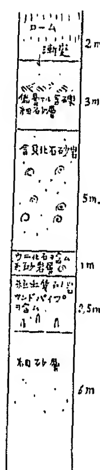
Ringicula musashinoensis, YOK. 中部日本
Chrysodomus arthriticus, VAL. 北部日本
Siphonalia stearnsi, PLISB. 中部及西部日本
S. cassidariaeformis, RVE. 北, 中, 西部日本
Olibella consobrina, LKE. 北, 中, 西部日本
Nsaas japonica, AD. 中, 西部日本
Volutharpa burchardi, DKR 中部日本
Columbella burchardi, DKR 中部日本
Dolium luteostomum, KÜST 北中, 西部より印度洋
Potamides cumingi, CROSSE 北中部日本
Cerithium kochii, PHIL 中南部日本
Natica janthostoma, DESH. 北, 中部日本(北方に主なり)
Polinices ampla, PHIL. 中部日本及其以南
Pyramdella virgo, AD. 西部日本
Umbonium costatum, LESSON. 北, 中, 西部日本
Helcioniscus pallidus, GLD. 北部及中部日本(北方に主なり)
Siphonodentalium edoense, TOK. 中, 西部日本
Corbula sp. indet. 生死不明種
Panopaea gednerosa, GLD. 北部日本
Mactra sulcataria, DESH. 北, 中, 西部日本
Mactra sachalinensis, SCHRENK. 北, 中部日本(北方に主なり)

Tresus nuttali, CONR. 北, 中部日本
Solen krusensternii, SCHRENK. 北部日本
Soletellina olivacea, JAY. 北, 中, 西部日本
Soletellina sp. indet. 中部日本
Tellina nitidula, DKR. 中部日本
Tellina venulosa, SCHRENCK. 北部日本
Sunetta excavata, HANLEY. 中, 西部日本
Gomphina melanaegis, ROEM. 北, 中, 西部日本
Venus stimpsoni, GLD. 北部日本
Tapes variegatus, HANLEY. 北, 中, 西部日本
Saxidomus purpuratus, DESH. 北, 中, 西部日本
Cardium braunsi, Tok. 生死不明種
Diplodonta usta, GLD. 北中部日本
Venericaridia cipangoanum, YOK. 中, 西部日本
V. ferruginea, AD. 北部日本
Myodora fluctuasa, GLD. 西部日本
Pecten laetus, GLD. 北, 中, 西部日本
P. laqueatus, SOW. 北, 中, 西部日本
P. Tokyoensis, TOK. 生死不明種
Ostrea gigas, THUNBERG. 北, 中, 西部日本
Arca subcrenata, LKE. 中, 西, 南部日本

ある。稀に最大徑二三粍の淡赤色圓形の珪岩、徑二〇粍の稍稜角を磨せる硬砂岩、一五粍の稍稜角ある安山岩、其他七乃至八粍以下の珪岩、硬砂岩、黒色粘板岩等が混在し、是等の岩石は遠く關東山地の古生層より運搬されたものと想像される。一般的に觀てロームの成分は大體石英、長石、玻璨、紫蘇輝石、角閃石、橄欖石、磁鐵鑛、黒雲母等より成る微細の砂である。中尾理學士はローム下の砂層及砂礫層の成分とロームの成分とを比較せるに可なり著しき差異を發見せられ是に依つてロームは下部の岩石の風化崩潰成生物にあらずと謂はれる。津屋理學士は江の島の上に存在するローム層を研究せられ、その成分は灰長石、輝石、紫蘇輝石、磁鐵鑛及褐色土狀物質より成りこの物は鐵鑛の小粒を含む不規則狀物質にして、火山玻璨の小片から生じたものでなく、ローム堆積前の岩石の崩潰に依つて生じた粘土でロームを作る物質は他より運搬せられたものではないと説かれた。斯くの如くロームの成因に關しても異論がある。

七、成田層

次に成田層と云ふのは成田附近に標式的に發達せる含介砂層に對して附せられた名で、横山博士の松崎帶に相當する、東京附近のローム層下の砂礫層は是れである。黄褐色を呈し僞層を有する事がその特徴の一である。曾て小藤及矢部博士は澁谷の恐らく成田層と思ぼしき砂礫層中から Cancellaria nodulifera. Neptunea despecta. なる二種の貝化石を採集せられた事がある。是によりて見ると此の附近の砂礫層は恐らく海汀堆積層なる事が分る。多摩丘陵に於てローム層下に發達せる砂礫層及東京の東北部に於て散見する粘土質、砂質の互層、砂礫層はデルタの堆積物で孰れも成田層に對比さる可きものである。成田層中に埋藏される貝類を觀るに、多くは三十米以上の深所に棲息するものでは無く、淺海性の特徴を示してゐる。而して貝類は南方の海に棲息するものよりも寧ろ北方種のもの多く、北方種の中では左のものが比較的多い。



Chrysodomus arthriticus Val. C. Schrencki Yok. Priene oregonensis. Trophon subclavatus Yok. Puncturella nolilis Ad. Panope generosa Gld. Corbula venusta Gld. C. amurensis Schrenck. Solen Krusensterni Schrenck. Macoma nipponica Tokunaga. Venus stimpsoni Gld. Diplodonta usta Gld. Venericardia toneana Yok. Astarte borealis Chem.

礫層、下末吉層、保土ケ谷層、長沼層（第一帶—第四帶）、大船層、小柴層、江の島凝灰岩層等の地層を區分せられ、長沼層を鮮新洪積統として、下末吉層を東京層の一部に對比されてゐる。又同學士の研究によれば大磯附近の第四紀層は上から現溪谷堆積層、下原層、ローム層、輕石層、土澤層、二宮層に層別され、その中土澤層を東京層に近き時代のものと思考せられて居る。

四、伊豆半島の地質

前表では房總、三浦の兩半島の洪積世の地層が略ぼ明確に爲されたるが最近又、山山、新野兩理學士に依りて伊豆半島の地質が研究された。此れに依ると伊豆半島の第四紀の地層は上からローム以後の段丘堆積層（砂礫層）、ローム層、武藏野及多摩段丘堆積層（礫層）、熱海層群（主として火山噴出物堆積層で一部は貝層）、城層群（上から凝灰岩及凝灰質頁岩、砂岩及頁岩及礫層、層理ある凝灰質頁岩、礫層）等で、この中熱海層群はダイアトムを、城層群はダイアトムの外に、植物破片や、海成貝化石をも含むで居る。大塚理學士に依れば城層群は東京層よりも稍々下位の地層に對比されてゐる。

五、沼の珊瑚層

前記の沼の珊瑚層は房州館山の沼（地名）に發達したる珊瑚礁にして、横山博士に依ると沼の貝化石一二四種中生死不明種は其の二三％に當り博士は其の時代を洪積世に包含されたが、野村理學士の研究に依ると生死不明種は二・一九％であるに因り矢部博士は之れを沖積層の下部に置かれた。併しながら此の地層の堆積した當時の海水平均溫度が今日のそれよりも高かりし事は珊瑚及南方種の貝化石に富む事に依りて等しく認められる所である。

六、ローム層

沼の珊瑚層の下部に來たるローム層は所謂「あかつち」と呼ばるゝものである。現在此のローム層は火山拋出物の淺海堆積層ならんとの想像が最もらしい。最近中尾理學士の研究に依るとロームは大體其の大半は粘土にして他は細砂及小礫である。而してその礫の大さも多くは徑四粍乃至三粍のもので、褐色多孔質酸化鐵の小粒で、熔岩片又は浮石片の風化土狀を呈せるものが殆ど總て

徳永博士の報告に依ると朝鮮の京城に近き keisei 及平安南道の石灰岩採掘中に象、犀、馬 (Equus caballus)、赤鹿 (Cervus elaphus) 等の齒牙化石が發見されて居り、佐伯學士に依ると栃木縣足利郡葛生町附近の二疊石炭紀石灰岩の洞窟、裂罅等から Stegodon orientalis orintalis が出て居り、前二列共德永佐伯兩氏に依れば孰れも洪積世初期のものと考へられてゐる。又土佐國長岡郡稻生村の石灰岩裂罅中から日本鹿に甚だ近い種の齒牙及肢骨破片が發見された。この標品は其の具備せる特徴及出土狀態より推して洪積世のものと筆者には考へられる。

二、關東地方の重要な地層區分

第二表

	房總半島	三浦半島	東京附近
現世	沼のサンゴ層	材木座介層	有樂町介層
洪積世	關東ローム層	關東ローム層	ローム層
	成田層	成田層	成田層
	清川層	戸塚層	東京層
	佐貫層	長沼標	長沼層
鮮新世	柿ノ木臺層	杉田層	三浦層

關東地方に於る洪積統の研究は本邦洪積層の地質學的研究の主たるものなる故左に其の概略を述べる事とする。

關東地方洪積層の區分及其の時代等に關しては尙學者の所說區々たるものあり、這は畢竟地質學上の研究至難なるが爲めにして未だ其の眞相に透徹せざる憾みあるは洵に已むを得ざる次第である。

矢部、淸水、靑木、野村、植田等の諸氏に依りて施行されたる地層區分及時代別を示せば左の如し (第二表參照) 表中波狀線は不整合を示す。

横山博士は前表の成田層 (同博士の松崎帶) を洪積世として、同地層以下の地層を武藏野系と稱し、第三紀鮮新世に包含せしめたるが、最近上部武藏野系の地層は下部洪積統をも包含するものとされた由である。松本博士は象化石の研究から前表の佐貫層を Carabrian 上部鮮新統、東京層を Cromerian 下部洪積統と爲された。

三、三浦半島北部及神奈川縣南部の地層

大塚理學士の三浦半島北部及神奈川縣南部の地質研究結果を觀るに同地方に於ては沖積統の下に上から段丘礫層、ローム層、砂

れに就いては猶ほ多くの考量が必要であらう。

Mammalian fauna of Tome-gun Aoshima-Kaizuka :

Artiodactyla

Sus nipponicus mikotonis.

Cervus (Sika) nippon matsumotoi.

Carnivora

Canis hodophylax.

Canis familiaris, Aoshima-breed.

Nyctereutes viverrinus genitor.

Meles anakuma aoshimensis.

Lutra lutra leptonyx.

Hominidae

Kitakami type=Homo sapiens kitakamiensis.

Aoshima type=H. s. aoshimensis.

Tome type=H. s. tomensis.

Mutsu type=H. s. ainu.

因みに本邦出土の哺乳動物化石は松本博士の表に記載のもの以外最近に於ては臺灣の新竹州竹東街の洪積世礫層中より鹿齒の化石が出土した。此の化石は日本鹿に類似して居る。又同州の大溪街洪積世礫層中から印度の洪積層より出土した Rhinoceros decanensis や印度の下部鮮新世の地層より出てたる R. sivalensis. 等に近い種の犀の齒牙化石が出土して居る。この化石は矢部博士に依り R. sp. 早坂博士に依り R. aff. sinensis. 筆者に依り R. taiwanus nov. sp. の名が與へられてゐる。但し此の鹿及犀の化石は洪積統の礫層中より出でたるか、或は其の下部の第三紀の地層中より出土したものか相當議論がある。犀化石は下顎大臼齒の形態から觀察して鮮新世より古からざる事又洪積世の犀齒の特徵を多分に備へてゐる事が認められる。又臺南の左鎭庄より Cervus sika の角破片や Bovidae に屬する動物の齒の化石が出土してゐる。

Middle Pleistocene of Japan.

From the vicinities of Shôdoshima in the Inland-Sea, the following fossil mammals are known :

Stegodon sinensis. Stegodon orientalis shodoensis.

Loxodonta (Palaeoloxodon) namadica Naumanni.

Loxodonta (Palaeoloxodon) namadica Yabei.

Cervus (Sika) nippon nippon.

C. (Sika) nippon matsumotoi.

Bison occidentalis.

From 陸前國，槻木：

Loxodonta (P.) namadica Yabei.

Sus nipponicus nipponicus.

Cerus (Sk.) nippon matsumotoi.

他に，石狩，空知，能登ノ半ノ浦，土佐ノ佐川町，などに M. Pleist. ありと認めらる.

越后，柏崎，長崎沖等より St. ori. Shod. らしきもの認めらる.

Cromerian of Japan.

Loxodonta (Palaeoloxodon) Namadica Naumanni. of Japan is rather an older type one.

Localities:

遠州佐濱，東京田端，横須賀白木山，三河國菱池，相州宮田村，大木根，下總國印幡沼，常陸國霞ケ浦，上總清川村

Parelephas trogontherii (Pohlig).

三河國幡豆郡菱池，霞ケ浦

即ち主として象化石の研究から洪積世を下部洪積世、中部洪積世、最上部洪積世の三期に分つて居る。而して上部洪積世出土の象化石は未だ發見されて居ない。シベリヤの洪積世に多い所謂マンモス Elephas primigenius が前表に見當らぬのは注意す可き事である。前表には略したが松本博士は陸前國登米郡青島貝塚を最上部洪積世に包含され左の如きフワウナを檢出して居られるが是

附録

日本の洪積時代

永澤譲次

本邦の新世代 Cenozoic Era に於ける重要なる地層の區分及此が各地方別の對比研究に就きては近年、著しき進歩を見るものありと雖も洪積層の詳細なる區分及其の性質に關しては矢部博士、青木、清水、野村、植田、田山等の諸氏の東京附近地層の研究、松本博士の哺乳動物化石の研究及横山博士、徳永博士の貝化石の研究が其主たるものにして未だ各地に散在分布せる洪積層の詳細なる對比及びこれが性質を窺ふに足るものなきは甚だ遺憾である。左に少しく前記諸學者及最近に於ける大塚、槇山、遠藤諸氏の研究を參酌し、本邦洪積世の概觀を記述して讀者の參考に資せん。

一、哺乳動物化石の研究

松本博士は哺乳動物化石の研究から本邦洪積世を左の如く區分せられた。（第一表參照）

第一表

Uppermost Pleistocene of Japan.
From Wakayama, Mino and Sapporo:
Elephas indicus Buski.

由來關東地方に於ける遺跡殊に繩紋式系統遺跡の發掘調査は、その大多數が遺物の採取を目的とせる一遺跡中の僅少なる一小地域の粗雜なる採掘に過ぎざる程度に類するもの多く、晩近に於ける斯學の發達と共に相當の規模ある組織的學術發掘が各地に試みられて、而かも幾多の業績を擧げつゝあるにかゝはらず、何故か關東地方の遺跡に於ては、上述の如き遠き過去の幼稚なりし頃の發掘と比較して幾何の進歩發達を見ざる底のもの、或は遺跡發掘調査の際豫備的になさるゝ試掘程度の發掘調査を試みて以て恰も遺跡の組織的學術發掘の如く曲解せるもの稀ならざる狀態を示せる際にあつては、本發掘の如き實に近年稀に見る此地方の學術發掘らしきものと云ふも不可なきである。今後この地方の各種の遺跡に對して相當なる規模と組織ある學術發掘が擧行されて、遺跡の本質を明かにし且つ遺物の研究に確實な基礎を開き、往々にして缺如せる遺物の全般に對する綜合的考察を深め、遺物製作手法上の一方法或は器物の意匠及び裝飾紋施行上の一小手法を目して、遺物或は一器物中の最も主要なる要素の如く誤りこれによつて全般を律せんとし、その他全貌を窺ふに價値乏しき殘片を完全なる資料の如く誤認してこれを偏重し、而かもこれ等によつて文化的內容價値を律する型式の設定を試みるが如き曲偏せる謬見に導かるゝことなく、又遺跡が遺物の出土採集地點たるに止まらず、遺跡遺物が不可分としてこれを綜括的に且つ正しき意義の層位的觀察を下し、その文化的內容の考察を究むるため、其他何等意義なき數字を羅列して恰も科學的研究法の如く、或は根幹を異にせる自然科學的研究法の充分なる知識と理解なくしてこれが直ちに文化科學の研究に適應さるゝものゝ如き認識不足に陷ることなく、又日本文化發達推移の大局より觀じて一地方一局地に偏重することなく、加ふるにその發達推移の過程が全く獨自の立場にあつて、これを歐米各地等の同種文化の發達推移と軌を一つにせざる點等に留意して、研究の正道をすゝめらるゝ學徒の出現を、敢えて本書紹介の機會を以つて希望する次第である。發賣所、丸善及岡書院・定價三圓二十五錢（田澤）

文　獻

下總姥山に於ける石器時代遺跡

貝塚と其の貝層下發見の住居址

松村瞭・八幡一郎・小金井良精

本書は東京帝大理學部の人類學教室研究報告第五編として刊行せられ、本文は總說（松村博士）遺跡及遺物（八幡一郎）并に姥山人骨（小金井博士）の三編と遺跡遺物の圖版二十五葉とより成る。總說は單に本遺跡の發掘調査を擧行するに至れる經過を叙述せるに止まれる一種の序文と看做すべきものであり、姥山人骨は本遺跡發掘の際出土せる人骨の個々を略記せるに過ぎずして人類學的研究の詳細なる記述を伴はない。即ち遺跡及遺物の項が本書の主體をなすもので、而かもその叙述は、本遺跡の同教室發掘の第一回に殆んど關係なく第二回の一半のみを調査擔當せられたる八幡氏の執筆にかゝれる結果、同氏の擔任地域に關する記載を主とせるものであつて、出土遺物等の如き殆んど同氏の調査せるものにより、第一回及び第二回の一半たる本書の所謂B地點即ち同教室發掘地域の大部分に於ける住居址其他遺跡の現狀遺物の出土狀態等は全く記載外にあつて結論されてゐる。然るに同地發掘計畫に際し筆者は當時その第一回調査に當つて松村助教授より特に發掘指導の爲め參加を請はれ、事情の許す限り同地に至つて發掘に關係せしものなるが、當時を回想して卒直に云はしむれば、同遺跡の全般を通觀する時果して同氏の結論が直ちに肯首し得るや否やは猶疑問の餘地を有するの感なき能はず、即ちこの發掘の第一回及び第二回の一半即ち大部分の發掘擔任者であり且つその出土遺物の整理攻究に當られたる宮坂光次氏が、後日同教室を去られし結果なりとは云へ、この報告に何等の關係なきは洵に本書のため惜むべきで、若し同氏の執筆或は又調査攻究の成果がこれに加はれるとするならば、本書をして本遺跡發掘記錄を正確ならしめ且つ遺跡の本質を究むるためによりよき業績を示し得て遺憾なく、光彩ある報告書たらしむを得たであらう。ともあれ本書は古く大森介墟篇・陸平介墟篇以來絕えて見ざりし關東地方に於ける纒まれる遺跡の發掘調査報告と目すべきで本書の刊行を欣ぶ次第であり、更に爾今この種報告書の出版を期待するものである。

遺　物

自然遺物。貝類を以て最多とし、鹿骨鳥骨魚骨の殘骸此に次ぐ。此中擧げ得べき貝類の重なるものは、左の如きである。

アカニシ	キサゴ
ハイガヒ	テングニシ
オキシジミ	シホフキ
スガヒ	カキ
イタヤガヒ	ツメタガヒ
カガミガヒ	アサリ
バイ	オホノガヒ
サルボウ	レイシ
ホタテガヒ	オニアサリ
イタボガキ	ハマグリ

以上の如くであるが、特にアサリ、ハマグリ、アカニシ多く發育極めて良好である。

人爲遺物。土器を以て最多とし、少量の土製品貝製品石器の若干と其他圓盤一個を擧げる事が出來る。

土器は縄紋を以つて主體とし、縄目斜線曲直線文孤文點列文の分子を有し（第一圖）其等の複合による諸文を案配する。概して縄文多きも、隆起の道程を探るもの亦少くない。色調は大體黒褐色或は赤褐色を成し、燒成稍々脆弱である。土器形態は、斷片的な資料より推する事が許されるならば、甕壺形を想起せしめる。

土製品として圖の如き鳥形品を見る。全體黒褐色、煩雜な說明的叙述を試みるには、餘りにも寫實的の効果を齎らす製作價値—其は同時に又製作者自身の心的動向の有象化だ—に吾々は大きな驚異を見張るであらう。嘴頭部眼部頸部の表現法に見出された、線と調法に力強きリズムを見のがしてはならない。恐らくは器物の把手であらうと思ふが、今長一〇・八糎、最大幅五・六糎、最大高五・四糎、厚一・五糎を測定する。

以上を以つて私の本貝塚に對する事實的描寫は終つた。此貧少なる資料から、横濱先史文化の主線と、そして其に對する批判を試みる事は、到底表的な觀念主義と、井底蛙式郷土主義になるかもしれない。然も亦遠く此地を去つた現在の私には、今は只近き過去となつた淡き思出と、限り無き哀惜への錯綜である。

式のもので石器を作はないらしい。

(34) 城址と傳へる山頂である。やはり繩紋式で加曾利退化式と稱せられるものや掘之內式のものが出てゐる。打石斧、石皿、石鏃も出た。何れも耕作中出土のもの。

(35) 土器は前記と同じ。

(36) 道路上にて採集されたもの恐らく附近の畑から投げ出されたものであらう。

横濱市中區山手貝塚調査概報

松 下 胤 信

遺 跡

横濱市の南部方面に連亘する。標高四十米乃至五十米の洪積層諸丘陵を侵刻する、主要なる河川の一なる大岡川は、其流域に多くの史前遺跡を分布して居る。

即ち本編は其等の中、最下流に屬する一貝塚を選定して、此に對する事實の姿相を描寫した、微やかな記錄である。

遺 跡

貝塚位置。 南方上大岡方面より走向する一大丘陵は、大岡川に丘側を侵彫せられつゝ、更に伸びて蒔田中村兩町の丘岡を合せ、蜒々龍蛇の如く長驅して末端を大岡川の流出口、即ち横濱港に沒入せしめ、對岸南太田西戸部野毛の諸丘岡と對向の位置を畫出して居る。今此丘陵末端部に近接し二貝塚の存在を見る。

即ち大岡川に面するを元町貝塚とし、東方に位して千代崎川溪谷の一派谷の終末部に形成されしもの本貝塚である。

貝塚狀態。 貝塚地域は、中區山手町百二番地住家及び其に續く道路より崖面に亘るのであるが、貝殼散布は稍廣汎なる區域に迄伸長して居る(山手町八十九番地セントジョセフカレッヂ附近)。

斯如き狀態であるが、遺跡は幾度かの自然的人爲的變革に依つて舊體を止めず、更に遡つて大正震火災は本地を遺憾なく破壞して、致命的傷害を與へて居るので、現狀は僅かに崖下なる天沼町の人家に向つて、崖上より落下せる貝殼の露出部と、多少の貝層を殘存するのみである。其故に調査視察の點に於いて、種々なる支障を來すを免れないが、幸ひにして百二番地住家に接する小路と崖端の境界附近を試掘した結果は、次の如き層位を知る事が出來た。

約九十糎の垂直的堀進の呈示する所は、上部道路面（約二十糎）次層大正震火災の燒層及殘骸層（約十五糎）以下黑色土層に混在して不規則なる貝層の走向有り、共に混在して燒灰の混雜、獸骨及土器片の包含を指摘するを得る。尚本層中屢々後代の殘物（燒化した鐵釘、其他瓦類）等の混入を見るので、所謂擬層の樣相を示現する場合が少くない。

(23)彌生式土器と磨石斧が出てゐる。遺蹟の大きさ不明。大したものではないらしいがこの邊の山頂は一帶に彌生式遺蹟らしい。

(24)猫池臺に續く山頂。近頃こんな名稱が出來て文化住宅地となつた。竪穴が方々にあるらしく土手に其の斷面の出てゐるところもある。見晴しは頗るよいが如何にも高いところにある。大昔の住居址に再び文化村が出來るなんてくすぐつたい氣持がする。

(25)極めて狹い遺蹟だが地下には貝塚があるらしく地表に貝殼も出てゐる。海から何里と離れたところに海產貝の貝塚がある。耕作の都合でまだ發掘出來ないが厚手式に屬する土器の他に打石斧、磨石斧、凹石、敲石、錘石が出てゐる。打石斧と石錘は頗る多い。まるで製造地かと思つた位だ。三浦半島附近は石が少い關係で石器が頗る少いから其の目で見たせいもあらうがとに角石器が多い。いづれ詳細な報告を書く。附近に彌生式土器も出る。

(26)三浦半島では相模灣岸には繩紋式遺蹟が殆んどないと思はれる位少いが鎌倉も亦彌生式遺蹟の分布圏內であると考へてゐたところ、校庭に井戸を掘つたら三米程下から鎌倉時代に屬するものが出、其下一米程から繩紋式薄手派の堀之內式土器が二個出た。掘り擴げればまだ出るに違ひない。

(27)彌生式遺蹟とも思はれない位土器片の散在すらない所から大きな甕の肩と思はれる破片が出た。刷毛目や飾の土玉をつけたところなど彌生式土器でなくてはならない。

(28)此處から石鏃の出た事が不思議な位だが現に角採集したのだ。土器は見られない。

(29)藤澤のゴルフ場が作られ其の上面が削られたゝめ、すつかり滅亡に導かれてしまつた。繩紋式薄手派堀之內式に屬する。石鏃の他黑曜石製の不明の石器も出てゐる。もとは廣い畑地に土器が廣い分布狀況を示してゐたが今は畑の形すらなくなつてゴルフ場の一端となつてしまつた。

(30)前記遺蹟西方、水田を離れた山畑。石皿の半缺を見た。

(31)目久尻川改修の際發見されたものが寒川神社に保存されてゐる。所謂厚手式の代表的なもの。

(32)小學校庭からも其の附近の畑からも一帶に彌生式土器が出る。磨石斧の見事なものも出てゐる。打石斧も相等ある。寒川小學校藏。

(33)稱名寺附近は一帶に先史時代遺蹟であるが總門附近から昭和塾前方にかけて廣く繩紋式土器を出す貝塚が埋れてゐる。海手に屬し堀之內式である。石鏃も相等ある樣であり無柄式の他に有柄式及柳葉式のものもある。石斧も發見されてゐる。昭和塾前から西方にかけては彌生式土器の散在地であるが新しい形

近くに沼田貝塚がある。

(8)三浦半島中最も有名な貝塚。從つて訪ふ者が多い。亂掘されたわけではないが土地の者が無理解で其の上に建築してしまつたから大半は失はれた。此處から石器時代曲玉が一個出た。表面採集である。前に棗玉が出た事は考古學雜誌第十七卷第四號に報じた。三浦半島唯一の發見品である。

(9)諸磯式土器の出るところ。貝塚であるが貝層は表面に出てゐない。あまりに有名な爲來訪者多く、近頃では土器片すら畑に見られない。石鏃數本が採集されてゐる。

(10)考古學雜誌第二〇卷第十一號參照。

(11)御用邸敷地内に入つたゝめ遺蹟の調査不能になつてしまつたが極めて珍らしい土器を出す。茅山式土器も伴出してゐるが附近の白須遺蹟で見ると此の土器は其の下に發見されるから我國最古の土器と考へられる。資料に乏しく其の全貌を明に出來ぬのを殘念に思ふが何れ詳しい報告は出すつもり。敲石が一個出たから追加する。考古學雜誌第十九卷第十一號參照。

(12)やはり御用邸敷地内。これは繩紋式薄手に屬す。内紋を有するものがある。加曾利B式。發掘出來ないが耕作者によつて投げ出された遺物中に土器片の外石皿片、凹石、敲石、錘石、石斧等がある。

(13)附近一帶に彌生式遺蹟。土器は彌生式でも新しい方。從つて石器を伴はないらしい。この石斧は單獨に三戸へ行く路にあつたもの三戸の長谷川氏所藏品。

(14)新しい彌生式を出す。竪穴群集地らしく時々土器がかたまつて發掘される。石劍の頭部が發見されてゐる。

(15)次第に崩されて埋立に使はれたので遺蹟は全滅の形となつた。彌生式土器に混じて磨石斧半缺が採集された。

(16)(17)大した遺蹟ではない。彌生式土器を出すといふに止る。新しい方。しかし埴器では勿論ない。

(18)繩紋式薄手派。堀之内式と加曾利B式とが出てゐる。附近には彌生式土器も出る。まだ發掘研究しないから如何なる垂直分布をなすかは不明である。石皿片、凹石、打石斧、磨石斧の他に完全な石棒が出てゐる。

(19)松輪といつても相當廣いが岩浦へ行く山頂の路の切通に露出する。厚手式に屬するらしい。

(20)彌生式土器の散在地。黑曜石片は見られるが石鏃はまだ發見しない。

(21)單獨出土。同所の島村氏所藏。

(22)纖維土器を出す小遺蹟。宅地内だから發掘出來ない。考古學雜誌第十六卷第十號參照。前記島村氏は此處で石斧を採集してゐる。石鏃もある。附近には彌生式遺蹟があるが石器を伴はない新しいもの。

23	同	同	猫池臺	土器(彌)磨石斧
24	同	同	鎌倉山住宅地	竪穴式住居地、土器(彌)
25	同	玉縄村平戸山		土器(繩)石斧、石錘、凹石、敲石
26	同	鎌倉町師範學校內		土器(繩)
27	同	同	淨明寺附近	土器(彌)
28	同	同	十二所大慈寺址附近	石鏃
29	高座郡藤澤町善行しようの上			土器(繩)石器、石鏃
30	同	同	善行西方臺畑	石皿
31	同	寒川村寒川神社附近		土器(繩)石斧
32	同	同	寒川小學校附近	土器(彌)石斧
33	久良岐郡金澤町稱名寺西方貝塚			土器(繩)石斧、石鏃
34	同	六浦莊村釜利谷西青ケ臺		土器(繩)石斧、石皿、石鏃
35	同	同	東青ケ臺	土器(繩)
36	同	同	同	赤坂	磨石斧

(1)横須賀中學校裏山と言つた方がわかり易いかも知れない。松林を切拓いて作つたかと思はれる急斜面の山畑だがこの頂上附近に土器の散布を見る。發掘して見ないから包含狀態はわからないが小遺跡である。細片ばかりが見える。繩紋式中所謂薄手式更に細別するなら堀之內式に屬するものらしい。足痕形に近い打石斧が一個伴出してゐる。

(2)今宅地となつてしまつたからもとの狀態は不明になつたがもとは此處は西斜面の山畑。其の上の方に黑曜石片を度々發見したが其の中に石鏃と石匙と採集したものである。石鏃は黑曜石製と燧石製とであるが石匙は燧石製で橫長い形。ところが此處には所謂彌生式土器も繩紋式土器も全く出ないのである。

(3)考古學雜誌第十八卷第十號參照。

(4)考古學雜誌第十九卷第九號參照。此處に打石斧が數本出てゐるがこの打石斧は頗る粗製である。

(5)地名表に浦賀町小學校敷地（貝塚）とあるものと高坂小學校敷地とあるものとは同一個所である。さして厚くない貝層はすつかり削り取られて失はれ貝層下の包含層が殘つてゐたがその上に校舍が建つたから全く全滅の形である。今土手に極めて薄い貝層が殘つて其の名殘を止めてゐるが、この貝層にま含れる土器は繩紋式薄手派で所謂堀之內式である。先年此處から石棒の頭部が發見せられた。

(6)山頂の畑。極めて注意深く探さねば發見出來ぬ程度の散布狀態であるが黑曜石片は時々見あたる。石鏃數本が採集されてゐる。何れも無柄。三浦半島の石鏃は殆無柄である。

(7)吉井の眞福寺境內に保存してある。半缺ながらなか〳〵大きい。長さ五十糎ばかり。附近の溝內から出たと傳へる。この

資料

相模地方の遺蹟と遺物

縄紋式

赤星直忠

第五版「石器時代遺跡遺物發見地名表」以後の神奈川縣下の新資料を示さう。其の或物は既に考古學雜誌に發表したものもあることを御承知ありたい。先づ地名表を示して後に解説を附する事とする。

	遺蹟	遺物　縄…縄紋式　彌…彌生式
1	横須賀市公郷町曹源寺裏山	土器(縄)打石斧
2	同　市同町宗源寺貴船坂附近畑地	石鏃、石匙
3	同　市不入斗町陸軍衛戍病院裏山	土器(縄)石鏃
4	三浦郡田浦町榎木臺(北側中腹)	打石斧(追加)
5	同　浦賀町高坂小學校敷地内貝塚	石棒、石斧(追加)
6	同　同　池田、大塚山	石鏃、土器(縄)
7	同　同　吉井	石棒
8	同　同　久比里、江戸坂貝塚	勾玉(追加)
9	同　三崎町諸磯、新堀(地名表に新川とあるは誤)	石鏃(追加)
10	同　同　同、白須	土器(縄)石鏃、打石斧
11	同　初聲村三戸、光照寺裏山	敲石(追加)
12	同　同　同、盤田畑	土器(縄)石皿、凹石、敲石、錘石、石斧
13	同　同　黒崎	石斧
14	同　同　和田臺地	石劍(追加)
15	同　長井村大木根臺地	土器(彌)磨石斧
16	同　西浦村佐島	土器(彌)砥石
17	同　同　子産石附近	土器(彌)
18	同　南下浦村上原	土器(縄)石皿、石斧、石棒、凹石
19	同　同　松輪(山頂)	土器(縄)
20	鎌倉郡川口村馬立山	土器(彌)石屑
21	同　腰越町津村神明谷戸	磨石斧
22	同　同　津村上ノ山	土器(縄)石斧、石鏃

北出土のものとしては普通のものである。岩版（插圖二ノ一及二）は拓本に示す如き形態にして同圖一は堅六糎五巾五糎八同圖二は堅六糎〇巾六糎〇共に凝灰岩であると推定する。土偶三個插圖一・二・五は石名舘發掘、同圖三・四は飯詰村小出出土のもので、小出出土の土偶、土版に關しては稿を改め報告する。

埼玉縣下に於ける丸木舟の發見

去る二月中旬頃高木長三郎氏から埼玉縣下綾瀬川改修工事の際、丸木舟様の物が發見されたとの通知があつたので、筆者は同二十八日高木氏東道のもとに竹下次作氏と共に現場に赴きこれに就て種々調査する事が出來た。この發見地は南埼玉郡小室村中島に屬し、蓮田驛の西南約一粁、綾瀬川沖積地にある。發掘者秋山義信氏の言によれば、此舟は舟腹を上にして、ほゞ東西の方向に水田下約一米の所に埋沒して居たとの事であつた。秋山氏によつて發掘されたのは丸木舟の一部で、殘餘の部分は工事の關係上そのまゝ川の東岸にのこされて居たので、當局者にこれが發掘の許可を得て後、ひとまづ旣掘の部分を保存されて居る田中茂七氏の宅に赴き實物を一見した、發掘當時これは完全であつたとの事であるが、現在では舟側の一方を失つて居た。午後から直ちに殘部の發掘に着手し、併せて埋沒地の地層の觀察を試みた。發掘の結果これも水田下一米の所に舟腹を上にし、東西の方向に横つて居る事が判明した。地表より舟腹の最上部に至る深さ一米の土壤は黑褐色の粘土であつて、舟の埋つて居る層は有機物―就中濶葉樹の葉―を多く含む黑色の粘土層で、流木の類も亦この中から見出された。斯る埋沒態態より推考すれば此舟は黑色粘土層堆積時代の終末期に近い頃に、何處からか漂流して來て埋つたものに相違なく、この層は內容より見て恐らく河川の淀んだ部分に堆積ものらしい。又上部の褐色粘土層は河川の氾濫に基く堆積層ではないかと思はれる節がある。扨、此の舟の年代に就ては文化期を決定する伴出遺物の皆無なため、その判定は舟自體の比較研究と地層の調査に頼るよりほかはない。筆者はその刳り方の精巧な點及び地層より見て、少くとも石器時代の物ではなく、更に年代の下る頃の作品ではないかと考へて居る。實物は史前學研究所に保管してある。全長五・四米幅〇・四米。形狀は普通の丸木舟と大差ない。精しい研究は他日何等かの形式を以て發表するつもりである。終りに調査の際便宜を計つて下さつた。田中育之、高木長三郎、重田定武等の諸氏及び工事當局者諸氏に深謝の意を表する。（甲野）

部の一部を傷け又全體朱を塗布せるも泥土を洗ふに際し朱の流失せるは甚だ遺憾とする處である。僅かに頭部眼部の周圍及腹部の下方窪みたる部分には朱の粉末殘存しあり、手の尖端は始めより缺損してある大さは寫眞に表示しある通りである。

土偶と周圍の遺物關係

土偶を中心として西南方一米位の處より木製のリンガ（史前學三卷四卷所載、武藤鐵城報）一個、其附近より石製のもの二個を發掘す。此に接近し壺一個を發掘す。此壺は發掘品中第三位の大形のものにして表面紋樣の部に朱を沈下しあり高さ二十五糎南方一米の處より岩版插圖二ノ一を發掘す但し發掘狀況は三尺位迄掘り下げたるも地下水高く僅かに土器破片數個を出土せるのみ發掘土を埋沒に際し除土中より發見す、從て包含の層位的位置判明せず、縱十糎橫五糎五厚さ一糎五、裏面は拓本の如き數線を刻すあり未成品と認む石質堅し。插圖二ノ二岩版は土偶より南方約四米の田地地表下六寸位遺物包含層最上位より發掘す、大さ縱四糎橫六糎二厚さ一糎八凝灰岩にして一見土版の如き觀あり、五年十一月十八日最初の發掘物なり、他に土版一個を土偶の東方二米の地點地表下一尺位の遺物包含層より發掘す、大さ等は破片なるが故に記入せず。前二個と關係對照せられたし。此外凝灰岩の岩版三個土偶二個を發掘す、此等土偶を中心に東南方に約四米の半圓經內に包含せられあり、此他壺類は此半圓內より發掘せられたるもの多き點より考察する時は住居址か或は祭祀用に使用せられしものか唯墳墓と推定せらるゝが如き骨片或は納骨に使用せし如き大型の土器は破片の類も發掘せず以上は土偶土版岩版等の出土の狀況である。

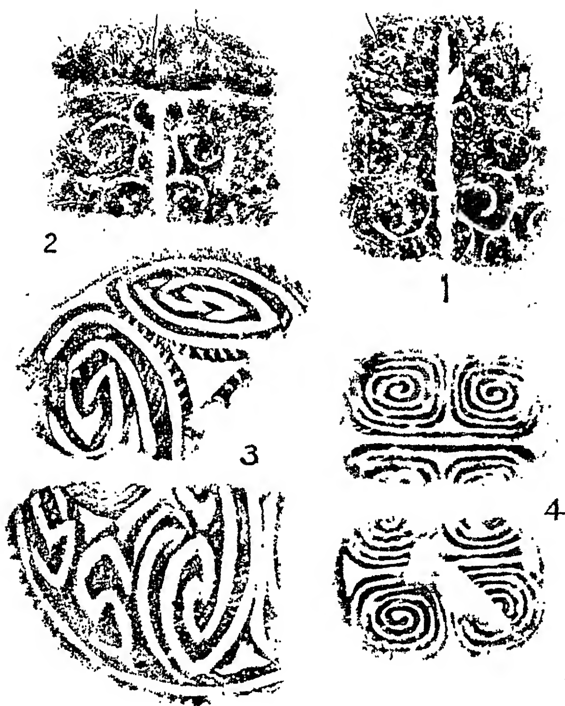


Fig. 2

土偶は東北特有の所謂遮光器式眼の表現法を表示せる龜ヶ岡式で特に取り立てゝ申述べることが無い。唯土版や岩版は人の顏を渦卷紋を以て極度に模樣化したものとされてゐる。岩版（插圖一ノ六）土版（插圖一ノ七）は方形圓形のものとして渦卷紋を以て極度に模樣化せるものとの學說と一致せるものにして東

是等の遺跡に比較し時代の遅れて居る事卽ち新しいと云ふことを意味するものであらうか、遺物の比較研究が必要である、此黑色の層は一二寸位より二尺位で所に依て非常に厚薄の差があり厚ければ厚い程遺物が豐富であり而も完全なものが多い。

此遺物包含層の下層は泥岩層或は礫質壤土或は粘土で所によりて異なる。泥炭層は全般に亘つて見るなら或る深さで無い所とある所がある。此層は大抵三尺以上の深處にある現在では石名舘の六十番地と小安門の一部とより發掘されてゐる。此層には主として植物性遺物が包含され卽ち木製の器具や食料品と推定さるゝトチ・クルミ等を發掘されてある。層位を表に示すと次の様である。

地	質	厚サ	摘要
黑色	腐蝕質壤土	五寸—一尺	耕地
黑色朱末	礫質壤土	一寸—二尺	遺物包含
黑褐	砂質粘土	一寸—二尺	同上
青褐	泥炭層（或は粘土）	三尺以上の深さ	植物性遺物包含或は底土

土偶、土版、岩版出土の狀況　土偶の出土の狀況は先に層位の所に於て述べしが如く遺物包含層の最下位約三尺位（表面より）の處に倒に二本の足を上向にしダリアの小球根の狀態に立てゐた斯く深層（此遺跡としては）に而も倒に位置せる狀態を推定するに地表下三尺位は堅穴の最下位を表示し特別に土中に埋沒せるものにあらざるべしと推量す。又倒の位置は頭部の先端は扁平なるが故に直立するも是に反し足部にては直立する

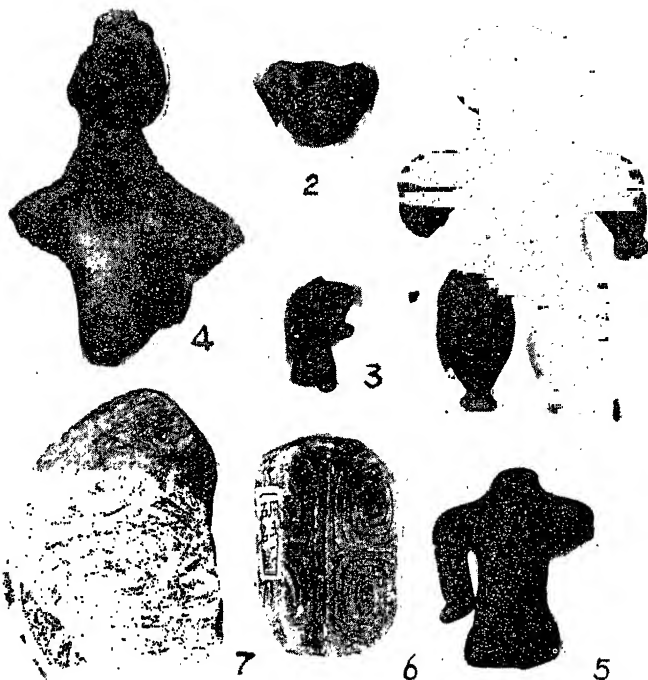


Fig. 1

こと能はず（但し空胴式なれば頭部より股間にある小孔五粍に小串を刺す時は直立す）出土の時期は昭和五年三年十七日にして未だ全く雪解けせず、雪解水の爲め地下水も高く是が爲め發掘の際頭

羽後國石名舘(イシナダテ)發掘の土偶土版等に就いて

小西宗吉

緒言　本遺跡は秋田縣仙北郡六郷町字石名舘にあり、明治二十八年頃より同三十五年頃に亘り田畑の耕作により自然出土せる縄紋土器數個石器數十個出土せるも先住民族の遺跡として登錄せられしことなかりしが、昭和五年十一月下旬より昭和七年八月に亘る發掘により土偶・土版・岩版・土器・石器・骨角器・植物質製品・同食料品等を發掘し本縣に於ける縄紋系統の遺跡として世に知らるゝこととなつた。

地勢　遺跡は奥羽線飯詰(イヒツメ)驛と六郷町に通ずる縣道の中間に位し、地勢平坦にして六郷町に源を發する臺蓮寺清水の流域に點在せる村落にして其周圍は凡て水田にて圍繞せらる。即ち二テコ清水と臺蓮寺清水の流域を中心とせる字石名舘字小安門字古舘等の諸字を包含せる方十町歩位の區域である。此内古舘は他の地區よりも標高五米位高き地位にある畑地なるも他は（宅地を除き）全部水田である。

遺跡の狀態　石名舘の遺跡の地表は耕作地にして黑色の腐殖質壤土である、而し田地は畑地より黑色の度薄く稍ゝ黑褐色を帶びた壤土である、此表土は五六寸より一尺位で其下層は遺物包含層である、土質は礫質壤土で礫の大さは拳大より豆粒大のものが多い其色は遺物を包含する程度に依り異なり、遺物の多い程黑色である是は生活必需品の動植物質有機分の腐殖せるものや爐に使用せる木炭末を混合せる爲めであり、それに朱の粉末等を混じ一見住居跡であらうと思考せられる。爐の關係なども發掘後爐と推定さるゝ處ありしも部分的發掘に止まり遺物を目的とせし爲め學術的に爐の研究を爲さゞることは遺憾である。此黑色層（遺物包含層）黑色の程度は隣村の千屋村一丈木（厚手縄紋系）同土崎（薄手）畑屋村外河原（薄手）飯詰村小出（薄手）强首村上方高臺（薄手及厚手）六郷町安樂寺（厚手）河邊郡御所野（薄手）の諸遺跡に比較し遙かに黑色の度は濃いのである。是は

把手は種々ありて前記急須形土器の如く付けて櫛齒形に並べたる紋樣あるあり、即ち此の把手は角味を帶ぶるあり、鼓に似たる圓形を二個連絡したるあり、或S字形を三個附着して僅に穴を付けたるが如きあり。又周圍に二條の線を廻したる紋樣あり三方に通ずる孔ありて三角形を四個集めて作りたるが如き形狀にして獨立したる一個即ち土版に近きものかと思へるものあり。

その他長さ約一寸五分の薄き把手の一部にして恰も人形の面の如き紋樣ありて、眉と鼻の孔及び口の如き所は沈み紋樣となれり。發見地は大野郡丹生川村大字桐山字廣殿なり。

底部は平底にして余の見たる破片より知りたる直經四寸五分三寸六分・三寸五分・二寸四分・一寸八分等のものあり。而して竹の編物及び木葉の跡あるもの等あり。

土版　長さ二寸巾一寸二分厚さは四分の所と六分の所とありて、第四圖の(一)に示すが如く表面には碇形の紋樣あり裏面は無紋にして周圍は少しく高くなりて圓形に近き輪となり、其の左右には耳の如き所あり其の上部には少しく凹みて溝の如き所あり。發見地は大野郡大名田町江名子にして褐色なり。

土偶　三個發見し其の内一個は考古學雜誌第二十一卷八號に笠原烏丸氏の飛驒第一發見の土偶として報告されたるものにして頭及び手足を欠損すれども、胸腹部の大略を知るべく

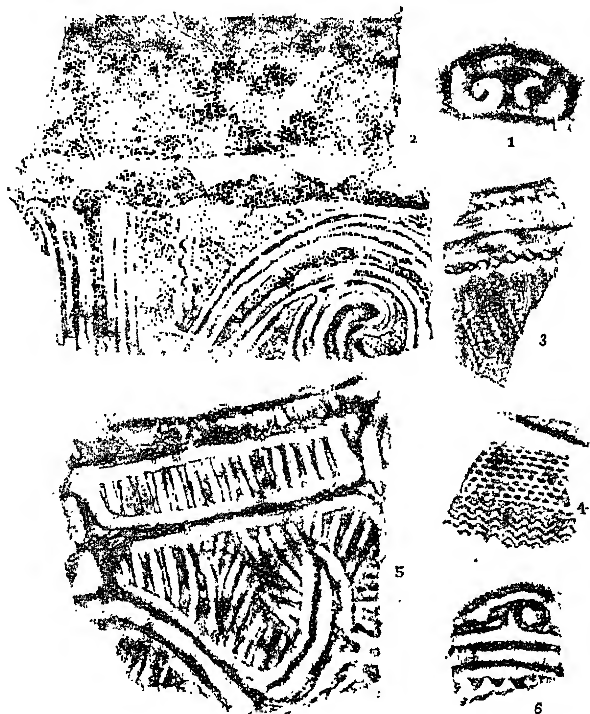
第三圖(23)は現在部高一寸七分巾廣き所にて二寸あり、厚さ七分乳は二個あり、其の中央に細き溝の如き線二本あり腹部には肋骨の如き線及び斜線を以て付けたる紋樣あり。背部にはX形と中央に縱線と横腹に接して數個の斜線との紋樣あり、發見地は大野郡丹生川村法力字東田なり。

同圖(24)は現在部長二寸五分巾二寸二分厚さ七分五厘あり頭手足を缺損し胸には乳を示す突起あり、腹部には(八)字形の彫りたる紋樣あり背部には八字形の線を二重に付け腰部には山形を二個付けたるを見るべく、色は褐色にして發見地は大野郡大八賀村上野字竹原なり。

第三は頭及び足を缺損すれども飛驒國發見の土偶中にては比較的に完全に近く、首と胴部は二つに折れ兩手の間三寸胴の長二寸四分現在首の上下一寸首の左右一寸二分、厚さは乳の上部にて六分腹部にて七分乳は比較的大にして經五分高さ二分あり。同圖(25)に示すが如く表面には乳の傍に二直線づゝの並行するあり其の間は恰も淺き溝の如き形狀をなし兩手には各一本づゝの斜線を付け腹部には肋骨の如き紋樣あり、背面は第四圖(チ)に示すが如く中央に二線を付け其の間は淺き溝となり、腹部の左右に山形二個を付け縱に曲線を付け色は褐色なり。發見地は大野郡淸見村牧ガ洞字上野なり。(昭和八年一月廿五日記之)

土　器

土器は皆縄紋土器にして容器と土版及び土偶の三種に區別すべしと雖も無紋と有紋とあり。先づ容器より述べんに、完全に近くして全部の形狀を知り得るもの稀にして殆んど皆破片となるを以て如何なる形狀多きかは明言し難きも、瓶(カメ)形急須形皿形等にして破片より考ふるも、瓶形土器には高さ一尺以上厚さ四分以上の厚手大土器もあり。小なるは徑一寸高一寸の無紋なるもあり。余の見たる破片口部の最も厚きは六分あり薄きは一分五厘なるもあり。其の質は粗にして砂及び小石を交ゆるもありて少量の雲母片を交ゆるもあり。色は褐色にして黒色を帶ぶるあり或は表面は褐色なるも內部は黒色なるあり。紋樣は蕨形渦卷波形櫛齒形爪跡形及び並行線よりなる山形等を篦又は木片等にて土器を製造して乾かぬ前に付けたる沈紋樣多く、或は土器を製造して更に粘土を附着して付けたる浮紋樣もあり或は土器の乾かぬ前に押し付けたるもの又は縄紋樣あり。或は刷毛目の如き細き線の紋樣あるあり。第四圖(2)・(3)・(4)・(5)・(6)を見るべし同圖(4)は質及び紋樣共に彌生式土器に似たる所あり。



圖版第一の(一)は急須形土器にして、今日使用する急須の形狀に似て大野郡丹生川村東田の遺跡より別所三之助氏の石棒破片磨製石斧三個及び土器破片と共に、地下三尺位の所より發見し口部と把手に僅の破損あれ共大體の形狀を知るべく、把手は恰も蔓草を卷きたる形狀をなし、現在高さ二寸五分口部徑一寸一分胴部の徑三寸三分注口部長二寸其の徑五分程あり底部は平底なるも少しく丸味を帶び、厚は上部にて一分五厘下部に到れば二分五厘程あり、色は褐色にして光澤を帶び少しく黒色を帶ぶる所もあり。

せり。其の傍に二個の孔を作らんとして止めたる凹みたる跡あり。曲玉と稱すれども其の形狀及び孔の存在する位置より見れば、石庖丁に似て刄なし發見地は飛驒國大野郡大八賀村大字上野字垣內なり。

同圖(13)は黑色の石を全部磨きて作り孔は玉の大さに比して割合に大にして、幾分か表裏兩面より穿ちたり。此の如き大なる孔を石の破損せざる樣に穿ちたるは細心に注意したるを知るべし。發見地は大野郡淸見村大字牧ガ洞小字上野なり。

同圖(14)は青色に白青の斑ある硬玉質にして半圓形の自然石を磨きて作り中央に近き所に一方より穿ちたる孔ありて、發見地は飛驒國益田郡馬瀨村大字川上なり。

同圖(15)は白色にして一部に黑色を帶ぶる所在る蠟石質の石にて作りたる玦狀耳飾と云ふべく、發見地は吉城郡古川町なり玦狀耳飾の二個に折れて曲玉となれるは美濃飛驒に其の例多しと雖も、此の如き完全なるは珍らしきものと云ふべし。

同圖(16)は薄青色に黑色の斑點ある幾分か微透明質の石を磨きて作り、蟬の幼蟲なる俗稱「シクジ」の如き形狀にして背部に八個の切れ目あり、孔は比較的大にして表裏兩面より穿てり全體の形狀より見れば曲玉形の自然石を磨きて製造したるものと思はるゝなり。發見地は大野郡淸見村大字牧ガ洞字上野なり。

同圖(17)は青瑪瑙の風化したるが如き薄青色を帶びて幾分か黑色を帶ぶる所ありて、蠟石質と思はる石にて作り孔は一方より穿ち頭部には四個の切り目ありて丁字形曲玉と云ふべく、形狀より考ふれば古墳曲玉に似たりと雖も石器發見地なる大野郡大八賀村大字松の木字上畑より發見せしに付き石器時代曲玉とせり。

同圖(18)に綠色の綠泥片岩質の石にて作り石の各所に角を付けて磨きたり孔は表裏兩方より穿ちたり。發見地は益田郡川西村大字西上田字神屋敷なり。

同圖(19)は長一寸一分あり青石を磨きて瓜形に作り徑一分五厘程の表裏兩面より穿ちたる孔あり。孔の下には深さ五厘程ある一直線の切り目を付けたり美濃飛彈地方にては此の如き切り目ある曲玉を發見せしを聞かず。發見地は大野郡大名田町江名子泉水なり。

同圖(20)は土製の如く見ゆるも質堅く灰色を帶び管玉の一種と云ふべきか。發見地は吉城郡小鷹利村なり。

同圖(21)は白褐色の自然石を磨きて作り中央に近き所に表裏兩面より穿ちたる孔あり、腹部には圖に示すが如く僅の切り目を付け發見地は大野郡大名町江名子字泉水なり。

同圖(22)は青色蠟石質の石を磨きて作り一方より漏斗形に近き孔を穿ち玦狀耳飾の破損せるものを修理せるが如きものなり。發見地は大野郡大名田町江名子字泉水なり。

り。

同圖(5)は上下兩端を缺損するも表裏兩面より穿ちたる孔の存在せしより、曲玉なるを知るべく黒色なる蠟石質の石にて作り

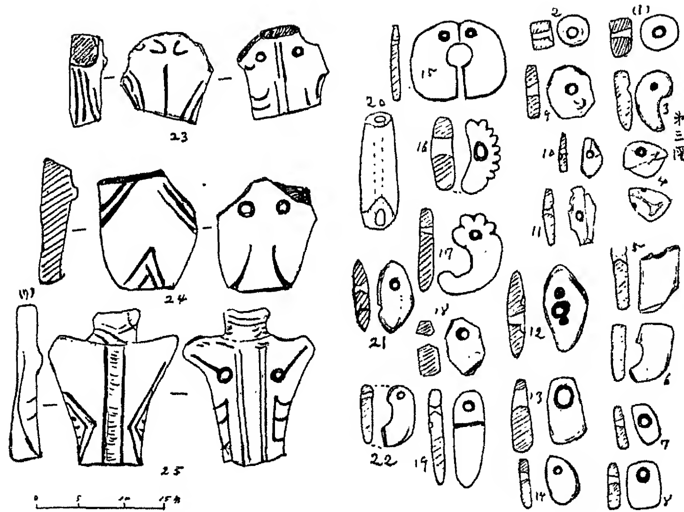


Fig. 3.

發見地は吉城郡上寶村古橋なり。

同圖(6)は光澤ある白色の石を磨きて曲玉形に作るも未だ孔を穿たざるものにして、長さ六分五厘發見地は大野郡久々野村小屋名なり。

同圖(7)は黒色蠟石質の石を全部磨きて作り中央に近き所に一方より穿ちたる孔あり、長五分爪形に似たり發見地は大野郡大八賀村上野なり。

同圖(8)は風化したる灰色の石にして兩面より穿ちたる孔あり、製作せし當時は全部磨きたるならんも現在は風化して表面甚だ粗なり、發見地は益田郡小坂町字落合なり。

同圖(9)は俗に油石と云ふ飴色の石を磨きて角味を帶ぶ平たき圓形に作り、中央に表裏兩面より穿ちたると思はるゝ孔あり發見地は吉城郡細江村數河なり。

同圖(10)は海青色に少しく白斑ある自然石を少しく磨きたる所もありて一方より穿ちたる孔あり、又孔の細き方の傍には僅に孔を作らんとして止めたる痕跡あるは斷面圖にて知るべし。發見地は吉城郡小鷹利村高野なり。

同圖(11)は青色にして黒及び褐色の班點ある自然石を少しく磨きて角あるも、中央には一方より穿ちて細き方の一面には少しく欠けたる跡ある孔あり。玉類は先づ孔を穿ちて後に形狀を正しくする方法にて製作せしとすれば是亦其の順序を示す一例と云ふべし。發見地は大野郡大八賀村上野字竹原なり。

同圖(12)は灰褐色の光澤ある石にて三角形の形狀にして能く磨き中央に近き所に一方より穿ちたる孔ありて、他の一面に貫通

世人より思はれたり。然るに飛騨に到れば其の數は存外に少なく今回の旅行中僅に二個を見たるのみにして一個は長さ二寸俗に云ふ刄部は丸く恰も楕圓形の石に柄を付けたるが如く、石質は砂岩なしにて吉城郡小鷹利村發見なり。第二圖(9)は長二寸五分高二寸二分あり形狀は普通の石冠にして刄部に少しく缺損あるも殆んど完全と云ふべく、中央に表裏兩方より貫通する徑五分程の孔ありて珍らしき物なり。高山近傍にて發見すれども發見地名不明なるは遺憾なり。同圖(10)は長約四寸高約二寸五分ある砂岩質の石の一部を磨きて刄を付け、底部は石冠の如く僅に凹みたるは其の側面にて知るべし石冠の一種と云ふべきか、發見地は飛騨國吉城郡小鷹和村字中野なり。

獨鈷石　二個を見たるに其の一は砂岩製長六寸二分中央にて巾一寸五分厚さ中央にて七分五厘發見地は吉城郡小鷹利村字黒内にして其の形狀は第二圖(4)の如し。

圖版第一の二に示せるは黒褐色を帶ぶる光澤ある石にて作り好く磨きて美麗なるものにして、長五寸二分中央幅一寸二分中央厚さ六分ありて飛騨發見獨鈷石中の精工なるものにして發見地は大野丹生村板殿なり。其の他長五寸五分徑一寸八分程の圓き棒形の自然石の兩端を打ち叩きたるが如き痕跡あるものを吉城郡細江村大字數河より發見せり。

玉類　從來飛騨より多少の玉類を發見するを聞きたれども實地に調査すれば存外多く發見し、自然石に孔を穿ちたるあり或は磨きたる石に孔を穿ちたるあり。或は僅に孔を穿たんとして止めたるあり其形狀及び石質は種々あり。古墳時代遺物と疑はしきものを除き、今回旅行中にて見聞したる二十二個の玉類に付きて大略を述ぶれば次の如し。

臼玉形三個　耳環形曲玉三個

普通曲玉十五個　內彫刻あるもの二個

管玉形一個

第三圖(1)は徑四分高三分五厘ある臼玉形にして孔は一方より穿ちたるは側面圖にて知るべく、青白き石にて作り發見地は大野郡大八賀村坊方字東田なり。

同圖(2)は徑三分高さ一分五厘より二分迄の間にして臼玉形にして孔は表裏共に殆んど同一なれども、一面に多年使用中に磨滅したるが如く凹みたる所あり。灰褐色の石を能く磨きて作り吉城郡小鷹利村高野發見なり。

同圖(3)は長約七分にして普通の曲玉形なるも孔は僅に穿ちて裏面へ通ぜず、恰も凹み石の孔の如くなりしは側面圖にて知るべし青白色の石にて作り、發見地は大野郡大八賀村大字松木小字上畑なり。

同圖(4)は長さ六分程ある青色の自然石の二面に少しく孔を穿ちて止めたるは、同圖(3)の如く發見地は吉城郡細江村字數河な

又小石棒あり第二圖(6)に示すが如く一部分を欠損すれども大體の形狀を知るべく、現存部長さ一寸九分太き所にて斷面の徑五分あり、頭部長さ五分にして頭部は少しく平たき事は斷面圖にて知るべく、又圖に示すが如き直線を以て付けたる紋樣あり、萬一石棒の一種を以て男根の形狀なりと說明するには好材料と云ふべし。發見地は飛驒國吉城郡阿曾布村石神なり。長さ一尺五寸巾下部にて七寸五分側面の厚さ下部にて四寸五分あり下部は欠損すれども重量九貫匁程ある粗製大石棒にして、頭部には少しく凹みたる所あり。其の下には眼の如き二點あり。更に其の下には首卷又は帶を卷きたるが如き所ありて、×形の彫刻したる沈紋樣あり之を二個連絡すれば恰も菱形となれり。更に首卷の如き下には前面のみに恰も吾人の衣服の合せ目の如き三角形の沈紋樣あるは寫眞にて知るべし。白色の石にて一見すれば粗製大石棒なれども好く見れば普通の石棒とは異にして人形に模したるかと思はるゝなり。(圖版第一の一參照)

御物石　卽ち異形石器は飛驒にて俗に石枕又は枕石と稱し、各地より發見すれども其數多からずして粗製多し、今回の旅行中に見たるは第二圖(8)の如く砂岩質にして長さ九寸五分巾廣き所五寸厚さ一寸六分ありて紋樣なく全部磨きて作り平面圖に示すが如く、下部には僅に凹みたる溝の如き所あり。此の如く下部に凹みし所あるは石冠にも其の例多し。又御物石卽ち枕石に付きては人類學雜誌四十五卷第八號第十號なる美濃國郡上郡東村及び奥明方村小川の遺物の記事及び人類學雜誌第四十七卷第十二號美濃發見御物石の二例の記事を參照ありたし。同圖(8)の發見地は吉城郡國府村下廣瀨なり。

大野郡中にて未だ世上に知れざる御物石發見地は左の如し。

莊川村黑谷　圓形紋樣あり

白川村平瀨　多少劍形に似たりと云ふ

圖版第一の四に示せるは吉城郡國府村天生發見にして、長さ五寸二分背の所にて高さ二寸二分中央にて厚さ一寸程ある横形の石器にして、頭には耳の如き突起二個あり全部磨きて作り寫眞にて僅に知り得る砥石にて磨きたる痕跡の如き長き線の附着するを見るべく、圖版に示せるが如く其の底部には僅に凹みあり。此の所は上述の御物石と石冠に似たり。從來石器中に動物を模したるは甚だ稀なりと聞き居るに、飛驒より此の如き動物を模したる磨製石器を發見したるは珍しくて研究上興味ありと云ふべし。或は後世の製作物ならんと思はるゝ點もあれとも、飛驒國益田郡川西村發見の御物石は水鳥の頭の如き形狀の所あり。美濃國郡上郡北濃村發見の御物石は魚形に似たるより考ふれば、此の石器は御物石に連絡あるものなるが如し。人類學雜誌四十五卷十號四十七卷十二號の寫眞を參照ありたし。

石冠　飛驒を思ひ出す位にて古來石冠は飛驒の名物の如く

石を稀に發見せり。

錘石、　大略砂岩及び黑色の自然の平圓石の長き兩端を打ち缺きて作りたると、又同樣の所に切り目を付けたるものとに區別し得ると雖も、又平圓石の短徑の方なる中央を磨きて作りたる溝を廻らしたるものあり。此の如き形狀のものには長徑三寸以上あるもあり、殆んど圓形に近き石にて作りたるもあり。

凹石　少しく平たきと思ふ圓石の一方に少しく穴を穿ち、其の形狀に大小種々あり、又其の孔は上下に貫通して恰も環石の如きものもあり。

石劍　頭部とも云ふべき球形の在るとなきとあり、頭部には×形及び横線を付けたる紋樣の在るあり、頭部のなきものには反(ソリ)ありて刄部は石庖丁の如く曲りたる內面にあるありて、第二圖(1)の如し、此の如き形狀なる石劍は美濃國にては飛驒に近き山多き地方より發見せり。石質は黑色なると青色を帶ぶるものとの二種あり。又同圖(5)の如く背部に一本の縱線を彫りたるもあり、同圖(1)は長さ五寸五分中央巾一寸二分厚さ三分ありて黑色の石にて作り大野郡大八賀村岩井發見なり。

同圖(7)は長九寸七分中央巾一寸厚さ八分あり青色にて作り大野郡莊川村赤谷發見なり。同圖(5)は黑色の石にて作り頭部に二個の横線を彫刻せり。缺損するも現在長五寸七分中央巾七分厚さ六分頭部は上下八分左右長さ九分あり發見地は大野郡丹生川村法力小字平野なり。

石棒　兩端に球あるものと一端に球あるものとの二種に大別すべく、石質は上述の石劍の質に似たりと雖も白色を帶べる石もあり。

第二圖(2)は飛驒國益田郡萩原町宮田にして、一部分は欠損すれども現在長七寸六分頭部長一寸二分ありて黑色の石なり。頭部には二本の横線を彫りて其の間に×形を彫刻したるは圖にて知るべし。同圖(3)は黑青色を帶ぶる石にて作り、兩頭にして粗製なれども全體の形狀を知り得るものにして長さ一尺一寸中央の徑一寸五分ありて、安永六年夏大野郡宮村宮峠北麓にて發見せり。

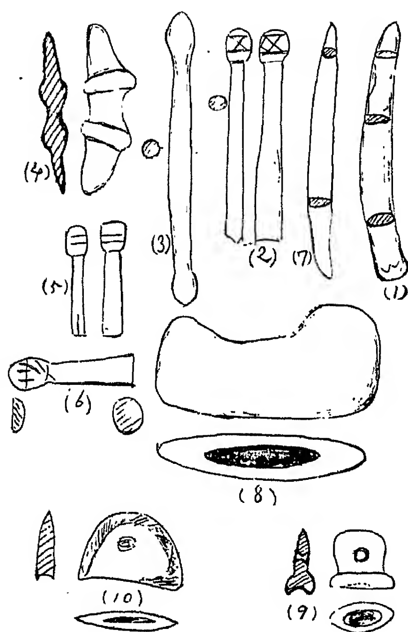


Fig. 2.

(12)は燧石製大野郡大八賀村山口發見
(13)は砂岩製飛驒大野郡丹生川村法力字東田發見
(16)は砂岩製石匙大野郡大八賀漆垣內發見

石匙　飛驒國より多く發見して採集家は皮剝と稱し、飛驒の石器發見地は何所にても石匙の發見し居ると云ふべく、石質は殆んど皆燧石及び砂岩にして稀に「スレート」質のものと黑曜石製のものとあり。形狀は第一圖(16)及び(18)より(24)にて知るべく三角形に近きもの足形に近きもの、錐形に近きもの細長きもの等其の形狀種々ありて柄の如き所あり。大なるは長二寸六分以上小なるは長七分位にして同圖(21)(22)の如く巧に作りたるもあり。同圖(24)の如く粗製なるもあり石匙發見地名次の如し。

(18)は燧石(19)は砂岩製二個共に小形にして飛驒國吉城郡小鷹利村字高野發見
(20)は砂岩製大野郡大名田町字糠塚發見
(21)は砂岩製飛彈國益田郡久々野村友保發見
(22)は砂岩製大野郡大名田町西ノ一色發見
(23)は燧石製大野郡大八賀村漆垣內發見
(24)は砂岩製にして大野郡大八賀村漆垣內發見なり

石鏃　鯰の頭の如き柄を有するもの多く石質は殆んど砂岩と燧石なり。中には細長き石鏃と區別し難きもあり、其形狀は第一圖(11)の如きもの多し。

打製石斧　各地より發見すれども地方人の注意すること少なきを以て世上に知れざるもの多く、其の石質は殆んど砂岩と「スレート」質の石にして形狀は短冊形に近きものと中央の少し狹くして幾分か分銅形に近きものと二種に大略區別し得べく稀に七圖(11)の如く小なる分銅形なる打製石斧と云ふべきものあり。又石鏃の未製品かと疑ふが如き「スレート」質の小打製石斧を各地より發見せり。或は製造の節に勞力を省くが爲に石の自然面を利用して製造したるも多し。飛驒國は美濃國に比して割合に多く磨製石斧を發見し、石質は綠泥片岩に似たる青白き石、砂岩及び黑褐色の石多く、又風化して白色を帶ぶる石、石灰岩に似たる石もあり。形狀は笏形爪の筍形多しと雖も、中央の横斷面は三味線の胴形卽ち長方形に近きもの多くして、中央の横斷面圓形に近き蛤刃(ハマグリ)の三河式石斧と云ふものは從來飛驒地方に多しと聞きたれども、今回の旅行中には僅に二三個を見たるのみなるは意外の感あり。長さ一寸五分以下のものは恰も爪を少しく大くしたるが如き形狀のものあり。何れも好く磨きて美麗なる光澤あり。飛驒地方より此の如き小磨製石斧を多く發見せり。以上に述べたるが如く、小石匙・小石鏃・小打製石斧と共に飛驒地方にては小石器を好みて作りたると思はるゝなり。此の如き小石器は如何にして實用に使ひしや記し以て讀者の高敎を乞はんとす。勿論美濃地方にても山地には此の如き小磨製

舊石器時代の石器に似て粗製なるあり、大體の形狀は第一圖(3)より(15)及(17)迄を見れば知るべし。然れども同圖(4)・(6)・(7)・(10)は製造方法より考ふれば石鏃に似たれども其の形狀より考ふれば果して石鏃として使用せしや否は今後研究を要すると思へり。

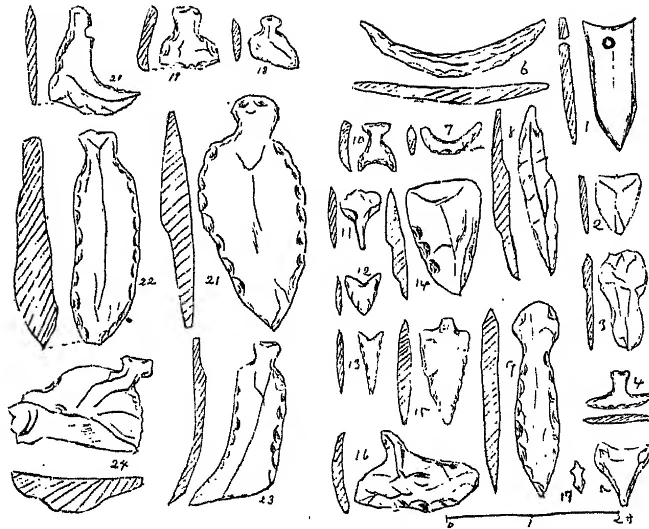


Fig. 1.

從來飛驒地方は石鏃を以て石器の代表物となして採集し奇形を喜ぶ風習多き爲に精巧なる石鏃を所有するもの多し。石鏃と限らず其他の石器類にても飛驒の藏石家中には精巧なる品を愛して粗製品を顧みざるの風あり。第一圖(17)は砂岩質精巧なる小石鏃にして吉城郡小鷹利村高野發見なり。磨製石鏃は比較的稀にして、余の見たるは四個なり。三個は美濃地より發見する普通の磨製石鏃にして、三個中の一個は長一寸五分巾七分ありて全部を磨きて作り、上部には表裏兩方より穿ちたる穴あり。同圖(1)にして飛驒國大野郡大八賀村岩井發見なり。他の一は同圖(2)に云ふものにして曲玉を作る青色の石にて作り、青銅色にして形狀は三角形にして穴なく長さ七分あり全部磨きたり。鳥取縣史蹟調査報告第一冊二十八頁二十九頁の圖に依れば、丹後因幡の兩國より發見したる銅鏃の形狀に似たり。其の發見地は飛驒國大野郡大八賀村字山口にして、美濃國にて十ケ所程より磨製石鏃を發見すと雖も、皆大賀村字岩井發見の形狀に似て此の如き三角形なる青石製を見ず。銅鏃と何かの關係はなきかと思はるゝなり。猶第一圖中の發見地名は前記する物の外左の如し。

(3)は赤色燧石製(6)(8)は砂岩製

皆飛驒國大野郡大名田町江名子字泉水發見

(9)は砂岩にして大名田町江名子字向畑發見

(7)は砂岩にして飛驒國大野郡大八賀村漆垣内發見

(4)(10)(14)は砂岩にして大八賀村大字松の木字上畑發見

(5)は燧石(15)は砂岩にして大名田町江名子字泉水發見

(11)は砂岩製石錐にして飛驒國大野郡清見村牧ケ洞發見

んど皆開墾して畑となり小石交りにして大部分は桑畑となり麥其他を植へたるもあり。此の台地を東より北に繞り更に西方に流れ居る溝(スナゴ)は砂子川水にして此の川水の界として坊方小字松尾の遺蹟に接せり。此の地よりは紋繩土器・土偶・打製石斧・磨製石斧・石匕石鏃・玉類を發見し、土器は完全に近き土瓶形のものと土偶の破片を發見し、其の形狀は下に述ぶるが如く笠原烏丸氏に依れば地下三尺五寸位の所より發見せしと云ふ。

(ニ)大野郡丹生村大字法力字馬場の遺蹟

坊方より約十二三町平湯街道を東行大谷より橋を北へ渡り、小八賀川より一町程北に高き山より南へ突出して現今の里道より約三十間程も高き小山あり。頂上は殆んど畑となり斜面地には雜木繁茂して山麓には人家あり、此の小山の頂上を俗に森ケ城の馬場と稱し、巾一町程ありて北方に至るに從ひ高くなり黒色を帶ぶる土質にして繩紋土器破片及び石匙・磨製石斧・打製石斧・石鏃等を發見せり。

(ホ)大野郡丹生川村法力小字平野の遺蹟

馬場遺蹟より三丁程西南にして丹生川小學校第二教場の南へ水田を一町程行けば、二三の人家及び畑あり、人家の西の畑より石鏃・磨製石斧・圓石・石劍・繩紋土器破片等を發見し、此の遺蹟

は南は小八賀川と云ふ溪流に臨み、北は森ケ城の馬場に續きたる山の聳ゆるも山と溪との間に在る比較的に低き土地なるも、終日日光を受け北風を防ぎ水利の便多き遺蹟と云ふべし。高山近傍には此の如き山下の地に在る比較的低き所の遺蹟は稀なり。飛驒國にて石器時代遺蹟を調査せんとする人は以上に述べたるが如き地形を調査すれば大抵は石器時代遺蹟の存在するを知るべし。

(三) 遺　物

石　器

石器は石鏃・石砕・石錐・石棒・石劍・打製石斧・磨製石斧・玉類・石冠・異形石器・獨鈷石・磨製石鏃其他名稱不明の石器ありて其の大略を示せば次の如し。

石鏃　殆んど到る處にて發見し、石質は燧石・砂岩尤も多く其他は黒曜石・スレート・半蛋白石あり。稀には瑪瑙もあり。

有柄、無柄何れもあれども無柄多く其の形狀は大小種々あり。大なるは長二寸七分以上ありて石鎗とも云ふべきあり、小なるは長さ五分以下なるあり、水澤瀉葉形、二等邊三角形、柳葉形、心臟形、三日月形等あり、或は雁股形あり或はアメリカ式石鏃に似たるあり、或は小石匙に似たるあり、或は第一圖(14)の如く

早起、小澤氏を訪ひ各種の石器及び土器破片を見て土器紋様の拓本及び土偶破片の寫生をなして同氏方を辭し、午前九時朝飯を食ひ、午前十時發の自動車にて荒川文男氏と共に萩原に到り更に汽車にて夕方太田に歸る。

（二）遺　蹟

遺蹟は山の尾の低くなりて水田又は小溪流に臨む台地の如き形狀をなし、朝夕能く日光の來りて水を汲むに便利好く數丁を距てたる前方より敵の來襲を早く望見し得べき要害の地に存在する事多し、然れども稀には河流に接して平地に近き所に存在する事もありて、余の實地に調査したる四五ヶ所の遺蹟に付きて大略を示せば左の如し。

（イ）大野郡大名田町江名子小字泉水

泉水は高山町より約一里程東にして江戸道即ち山口へ行く街道と村道と分るゝ所の東にある東西一町餘南北半町位の隨圓形の丘陵にして、大部分は畑となれども所々に松及び雜木の繁茂するあり。西北には高く錦山の聳ゆるあり、東南には美女峠の山を望見し南方は低くして水田となり、間洞川（アイダボラ）と云ふ小溪流の水田中を東より西へ流るゝあり。二丁餘を隔てゝ水田の南に山あれども終日日光を受け丘の麓には人家あり、此の遺蹟より一丁程東の小丘上に賀茂神社の森あり、表面の土質は赤土を交へたる壌土なり。發見遺物は大石棒・玉類・打製石斧・石鏃・石匕・土器等なり。

（ロ）大野郡大八賀村山口

山口は泉水の北方にして、東南は城山と稱して元八幡神社あり。少しく高くして小山の如き形狀をなし、南及び西は段々と低くなりて畑及び水田となり、南に山口川の流るゝあり。元八幡神社の西に了心寺あり。又人家あり其の附近を字森下と稱し、石交りの黑色土にし畑より繩紋土器の破片及び石鏃其他の石器を發見せり。

（ハ）大野郡丹生川村坊方字東田

坊方は高山の東北二里半縣道平湯街道に沿ひたる小部落にして、小字東田は東方に山あり其の山の尾と云ふべき土地の段々と低くなりて台地の如き所なり、北方には約三十間下の所を小八賀川の東より西に流るゝを隔てゝ、低地の字法力近傍の人家を脚下に望見し、眺望好き所にして西は水田に臨む。此台地は東西百三十間程あり。其の一部を昭和二年に道路改修の爲に高き所は約一丈程掘下げたり。道路より北は南北約四十間あり、殆

北より流れ來りて南方を流るゝ益田川に落つるあり。四美溪より十間程高く面積は一見したる所にては一町歩餘ありて二三の板屋あれども水田及畑にして朝夕能く日光を受くる地なり。此の如く調査中午後七時となりしを以て急ぎて渡船場に至る、兩岸の岩に針金を引きて水夫は針金を持ち換へて舟を動かす渡船にして渡守は若き婦人なるに驚けり。益田川を渡れば日は暮れ、自動車は來らず、已を得ず一里餘の道を徒歩にて小坂町に至り朝日屋に宿す時に午後九時なり。

六月七日晴

早起朝日屋を出發。徒歩各所にて土俗及古跡を聞きて久々野村渚に至り、地名表に在る石器類發見地を聞けども、不明にして小字内垣外よりは數年以前に電氣工事中に縣道の西なる小高き畑を約三尺程掘りたるに、兩頭の石棒石鑓と縄紋土器破片を發見したるも、石棒は他へ賣却土器は捨てたるに依り石鏃のみを所有する人あり、後に至り又昭和七年の春此の近傍より鐵道工事中土器及び磨製石斧を發見したるも他日報告する事として省けり。

同村字長淀にて二三の支度所を尋ぬるも飯なく、暫くして稗飯と蕨山路の貧物のみ在る家にて晝飯を食ひ、同村無數河に至り石器發見地を人家にて聞けども要領を得ず。數年以前に石劔を掘り出したるも村中には所有者なしと答へたり。幸に高山行自動車の來るを以て之に乘り、午後五時高山町に着、先づ荒川櫻堤氏を訪ひて後に安川町白川旅館に宿す。夕食後荒川氏を訪ふ、笠原烏丸氏の來會あり、明日の打合をなし、又荒川氏所有の石器時代遺物古墳物等を見て殊に奇形石鏃多きを知れり。

八日午前小雨後晴

午前八時、荒川氏の子息文雄氏の案内にて大名田町に行き、大字江名子字泉水字鷹の巣等の遺跡を調査して谷口善五郎氏方を訪ひ、磨製石鏃曲玉土版及び珍石鏃等を見て、某民家に在る大石棒を一見したり。

更に大八賀村山口に行き、了心寺附近の遺跡を調査して午前十一時に高山に歸り、晝食後幸に雨晴れしを以て、午後一時より丹生川村坊方近傍へ荒川父子笠原氏と共に自動車にて行き、小字東田の遺跡を調査し、小八賀川を渡り大字法力字馬場及び字平野の遺跡を調査し、丹生川小學校第二分教場にて磨製石斧石棒石鏃圓石等を見て大木曾、町方等を經て夕方高山に着。

夜は笠原氏を訪ふ。氏は昨年頃よりの採集家なるも石冠土偶破片其他多數の石器時代遺物を所有せらるゝを以て、石器の寫生土器紋樣の拓本を取りて午後十二時宿所に歸る。

九日晴

午前中荒川氏方にて玉類及び石器の寫生をなし或は土器紋樣の拓本を取り、午後より荒川父子及び笠原氏と共に大八賀村三福寺の石器時代遺跡を見て、三四年以前發堀の古墳石槨内に保存する骨の破片數個を貰ひ受けて京都大學の清野博士に贈る事となし、又婆太中學の北方なる山の中腹に在る横穴を實見して高山に歸る。時に午後三時なり。直に小澤忠一郎氏を訪へども不在にて已を得ず宿所に歸り、夕食後杉山吉三郎氏を訪ひ獨鈷石御物石石棒其他の石器を一覽し、更に岡本爲吉氏を訪ひて數個の石器を買求して宿所に歸る。

十日晴

飛驒高山附近の石器時代遺物及び遺蹟

林　魁一

飛驒高山地方は山間なるも古來學者の漫遊するもの多く、舊幕時代に二木長右衛門・福島滄州の兩氏及び西の坊、即ち神通寺住職朝戸高山氏等の石器類を愛翫され、殊に二木長右衛門氏は俊恭と號し諸國を旅行して石棒石冠子持曲玉其他の珍石器を寫生したる神代石圖卷あり、又木內石亭翁の像を畫かれ、又相互に書狀を往復されたり。爲に雲根志を著はして有名なる江州の木內石亭氏の高山に來遊されし事もあり。又明治年間に森本彌一氏・山崎茂助氏及び國府村の岡村利右衛門氏等石器を蒐集に盡力され、又田中正太郎氏・押上中將・岡村利平氏等の雜誌又は著書にて高山近傍の石器を世上に紹介され、或は大野雲外氏及び柴田常惠氏の數度飛驒に來りて石器時代遺物を調査され、又近來加藤鐐次・大塚行藏・小澤忠一郎・杉山吉三郎・荒川櫻堤・笠原烏丸等の人々は頻に石器土器を採集され、其の他同好者多く京都大學の濱田耕作先生も高山に遊びて二木氏の遺品を調査され、將來は汽車の開通と共に石器時代遺蹟遺物の研究に付き興味ある土地と云ふべく、今これ等を旅行日誌、遺蹟、遺物の順序に依りて記述すべし。

遺物を分ちて(イ)石器　(ロ)土器とす

(一) 日誌

豫て高山町荒川櫻堤氏に書狀を出し置きて、昭和六年六月六日晴。午後一時發の汽車にて美濃國太田町を出發、上麻生より以北は汽車と飛驒川と並行して北に進み、山水の風景宜しく車窓より各所にて以前に調査せし山麓に近き所の石器時代遺跡を望見して、飛驒萩原に着せしは午後四時なり。直に自動車にて字上呂の橋場に至り、下車徒歩橋を渡りて川西村大字四美に至り、某寺院に在る石器を一覽するに、石鏃石匙磨製石斧等にして石鏃最も多し。又石器發見地なる字横倉を見るに、山麓の臺地の如き高き地にして西方に四美溪の

者の間に存在する時的差異がもたらした、社會、經濟等の機構の相異に對して無條件で行はれる可きものではないが、しかし、生業が地理的景觀によつてその聚落が必然的に規定されて行く事實は古い時代に於ては大體動かない原則であると想はれる。然りとすれば、本遺蹟の如き占位狀態はその中にその生業樣式の暗示を含むものに外ならない。未だ本地方に於てはその生業樣式を明示する遺物は出土しないが、その遺物に著しく weapons を少く有してその大部分が單なる implements に屬するものであつた事實は、本遺蹟が沖積平野の展開を必須とした事實と共に未だ沖積平原上にまでもその聚落が進出しない前の農業を主とした生業の一種の存在を示すものではなからうか。この考察は他地方他種類の遺蹟の同樣な研究がよりよく行はれる時により一層明確になり得るものと考へられる。

本地方の遺蹟より出土する遺物の持つ特性は先にも暗示した如く、當地方に於てはむしろ豐後水道を挾んで日向豐後のあるものに類似するものが多かつた、しかも南伊豫に存在してゐる最も重要な遺蹟である南宇和郡御荘村平城貝塚等よりも、北方の松山附近のものに種々の點に於て類似して居り、かつこの兩者は同一の「中豫斜面」の中に包括されてゐる。未だ充分な確然率(プロバビリティ)を以て明言することは出來ないが、この豐後水道を挾んだ日向、中豫、及び豐後の一部はあるひは同一の考古學的地域を構成してゐるものと云ひ得るのではないかと考へられ、將來の研究は一層この事實を裏書きするものと想はれる。昭和七年十月十三日稿

ヘルベルト・キユン博士の講演會

四月十四日午後六時より、獨逸亞細亞協會に於て同協會及び本會の主催に依つて、ヘルベルトキユン博士の講演會を開催した。當日は「古代に於ける東西文化交渉」と題されてスキーテン文化を中心とした文化交渉を時餘に亘つて論ぜられた。尙木下祝夫氏の御好意により通釋を行はれ、頗る場所柄だけに異色ある會であつた。キユン博士は獨逸ケルン大學の教授で史前藝術の研究家であり、雜誌イペックの主幹として著名である。又 Kunst und de Kultur der Voryeit の著がある。當日は期日の關係上東京市內の會員諸君に限り御通知した所、多數の參會者を得て甚だ盛會であつた事は喜ばしい次第であつた。(池上)

三

本文に於て自分が述べんと欲した大洲地方の石器時代についての事實の概要は右に於て盡されたのであつて、それについては更に附加すべきものなく、又この一報告の範圍を脱した論究を蛇足することは自分としても望ましくは考へないところであるが、本文に記載してゐるところの事實に對する認識をより便にする目的のため最後になほ一二のことを述べて置きたいと考へる。

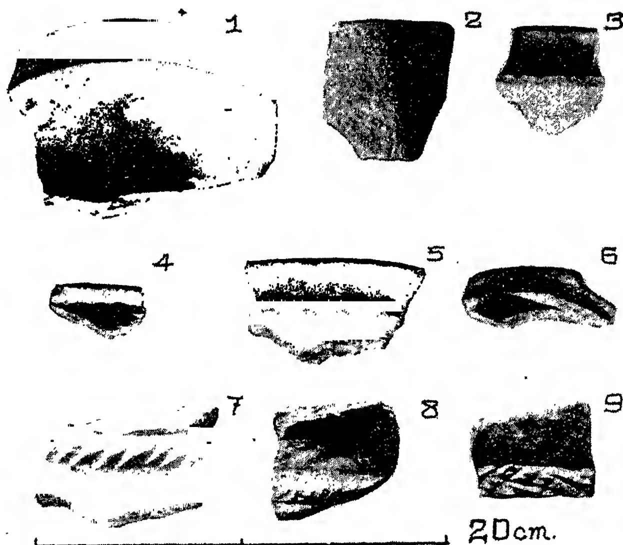
遺蹟景觀の事實についてはすでに記述注意したところであるが、本地方の如き、沖積平野に接する洪積丘上の遺蹟の示す意義についてはその注意を新たにせられなければならない。彌生式土器遺蹟は沖積低地上に存在することを以てその特色の最も大なるものであるとなす考へは必ずしも現今に於ては力弱いものではない。事實に於て吾人等も西日本又は中部日本等に於て枚擧にいとまのない位の多數の例を存知して居るし、それが普通（數的に多いと云ふ意味での）の現象でもある。が同時にこの低地遺蹟にあらざる景觀的事實を示す彌生式遺蹟も少からず之を認めることが出來、且つこの低地遺蹟との間に文化特色の差も認めることが出來る場合が存在してゐる（大和考古學第二年第四號拙稿参照）。この遺蹟景觀の問題はそれより編年的根據の如き物を導き出すことは必ずしも容易ではなく、又試みてもいづれの場合に於ても必ずしも成功するものとは限らず、又或程度奏効し得ても全く相對的な結果より期待し得ないものであることは喋々の説明を要しないところである。が少くとも自分が今の場合にこの景觀問題をとつて問題とするのは右の如き事を期待するためではなく、一の生業樣式（生活樣式の中の一である）の差を聚落景觀が必然的に導くものとする考へ方に根據を置いてゐる。從つて、本地方の如く、沖積層上にまでは未だ進出し得ないが、なほ沖積層周邊にそれに最も接近して存在する遺蹟の持つ特徴を、他の山岳地帶の物や低地沖積層上の物に對比して注意せんとするのである。試みに吾人が今假りに、當地方に於て現在行はれつゝある現象に對して注意する時には、主として水田農業を以てその主生業となす聚落は低地沖積層上にその位置を占居し出來得るだけの耕地を有する必要よりその中央を避けて沖積層周邊に近く群集してゐるに對し、商業聚落は交通の最も便利な沖積平野中央にその占居位置を進めて物資の集散に當つて居り、更に此等に對して、山岳地に於て標高百米乃至二百米の間に存在する散村聚落は極く簡單な畠地農業を添へた山林關係の生業をその主生業としてゐる。かゝる土俗學的事實と本文に於て取り扱かひつゝあるが如き考古學的事實との比較は、兩

發達した口緣部を有してゐることが想像せられる。底面に木葉其他の紋樣を有するものは存在しない。脚は33に示すが如き高坏形の物數箇を見得られるが、いづれも精巧均齊のとれたものである。

紋樣　紋樣は概して少い。ほとんど全部が口緣部肩部に施こされて居つて、立體的表現の物と平面的表現の二種が存してゐる。鋸齒紋・格子目紋・平行線紋・點線紋が平面的な沈紋として口緣、肩に存し、繩狀凸帶紋が頸部に、又別に35の如き短い隆起帶を竪に口唇に附してゐるが如き物も見受けられる。平面的な沈紋は38の如き場合には點線・平行線・鋸齒紋等が平行配合して存在してゐる。紋樣の發達は不良であるとは云へ、これが一樣式の土器に限つて存在してゐるのは注意すべきである。

其他　右の外彌生式土器破片の周邊を丸く打ち缺いた玩具樣の物が存在してゐる。用途等不明であるが、所謂廢物利用の一器具である。

右のべ來つたところは當地方發見の土器についてのその概要であるが、先述の如く此等は何等層序關係其他遺跡内に於ける存在樣式を異にして存するのではなく全く混在して居つたか、又は散布狀態に於て發見されたのであつた。がしかし、その中に繩紋式土器と、彌生式土器との二樣式の手法の差を認めることを得た。繩紋式はその數微量であつたがその示現する特色と意義は可成り重要なものであつて、特にそれが、南伊豫御莊の貝塚の例よりも、松山附近の物に似、又、豐後、日向附近の物



第十三圖　有紋土器片

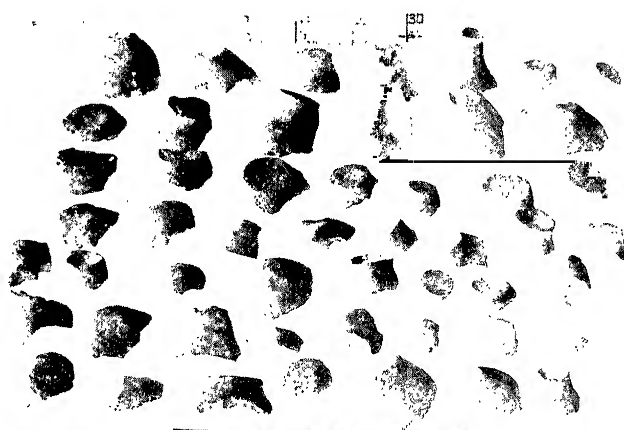
にも近似例は求め得るのは注意すべき事實であつた。彌生式土器中その紋樣少く特色少くて單化された樣式の物は、假りに古く派生したものとしてもその終末は一般に相當時間的には下り得るものと考へられてゐるのに相當してゐる。

有し、底部の絲底の著大な一類との二類となし得る樣であるが、しかし發掘に於ては兩者混合出土して、共にいづれの遺蹟にも認められてゐる。

完全形　僅かに一箇だけ鉢形の物が德之森敷地神社裏の包含層から出土してゐる。第九圖32に示す如く口徑十五糎、高さ八糎を算し、薄手であつて上げ底、口唇は輕く外方に反轉してゐる。紅褐色吸水性大にして先述の二類中の初の方の物に屬してゐる。

土錘　德之森、梁瀨、北只大元神社等より出土して居つて四――六糎の長さと一――一・五糎の徑を有し、中央に竪の貫通孔を有してゐる。色は紅灰色、極めて堅く、粘土は精良である。

口緣部　第九圖32の如く輕く外方に反轉するもの、又は今少し強く反轉するが單調な坩形土器が存在するが、最も特色あるものは34――38の如きものである。すなはち、34の如く一度強く緊つた頸部が上緣に近づいて擴がり、之が口唇部に於ては上に向つて直立して、この直立唇部外面に鋸齒紋を有してゐるもの、35の如く弛くしかし力強く反轉した口唇部の外方に面したところに一の竪の突起を有してゐるもの、36の如く頸部が急に強くくびれて勢良く口緣が外面に放出してその先端輕く外方に折り曲りかつその頸部に隆起帶を有してゐるもの、37の如きはむしろ特殊な物であつて直立した緣を有し、これは唇部と頸部の境に一の著しい鍔樣の凸起帶を有してゐる、38は直立した緣で椀形土器の一種と考へられ、全面紋樣を有してその口緣に近く二箇の孔を並べ有してゐる。要するに外方に反轉する事著しき物、又は直立緣の如き物は大形坩形土器に多き事多く、先述の二類中後者の方に屬する方に著しい。

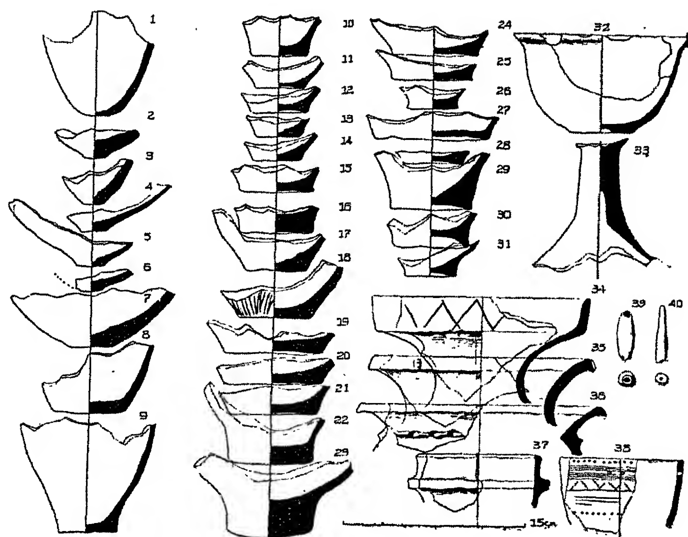


第十二圖　土器底部其他

底脚部　凡底・平底・上げ底の三種が底としては存在するが、平底の如きもその中には底面のやゝ少し下方に丸味を帶びて突出して極めて不安定な變形が存在してゐる。完全に尖つた底と稱する物は存在しないが、1の如きは丸味を帶びてゐるとは云へむしろ尖つた樣な物であつて、かゝる型式の物は著しく

に比較して極めて稀少であつて僅かに五片を數へるのみである。第二圖6——10に示すが如き物であつて、その焼成は堅密、色は褐灰色乃至は灰紅色を呈し、粘土は比較的精良であつて、所々に二三粍の石英粒子を含有してゐる、吸濕性はあまり大ではない。破片のみで完全形は明かでないが、紋樣は、曲線帶を各〻二本の平行線で作り、その內部に數種の斜平行波線樣の物を充塡した6の如き物、又曲線に限られた圖形の內部を繩紋で充塡した7の如き物が存在してゐる、其他紋樣らしい物は見當らず、いづれも細かい目の繩紋である。繩紋はその目良く接近し、その大さ整一であつて比較的精巧な織物である、但し平織ではないこと明かである。この繩紋式土器は、愛媛縣南宇和郡御荘村平城貝塚の土器とは著しくその特色を異にし(本誌第三卷第一號、拙稿　大分縣西國東郡河內村森貝塚の研究參照)、かへつて大分縣森貝塚C類土器と自分が呼び最も新らしかる可きを推考した一類の土器(同上文參照)と一致し、これは又愛媛縣に於ては松山市附近の溫泉郡久米村鷹ノ子出土の土器中に見出されてゐる(考古學雜誌十六卷二號拙稿「伊豫に於けるアイヌ式土器發見の二遺蹟」參照)。要するに大洲地方に存在する繩紋式土器は著しく彌生式土器に近い繩紋式土器の特徴を有してゐる。

(二)彌生式土器　　彌生式土器の發見はほどんどの遺蹟に於ても認められて、その數は破片であるが數百千の多きに達してゐる。全體に焼成は堅密、吸濕性大であつて、色は灰白色、灰紅色、黄紅色等を呈し、數粍の大さの石英粒子を含有してゐる。全體を大別すれば、之を薄手小形にして吸濕性大に焼弱く、往

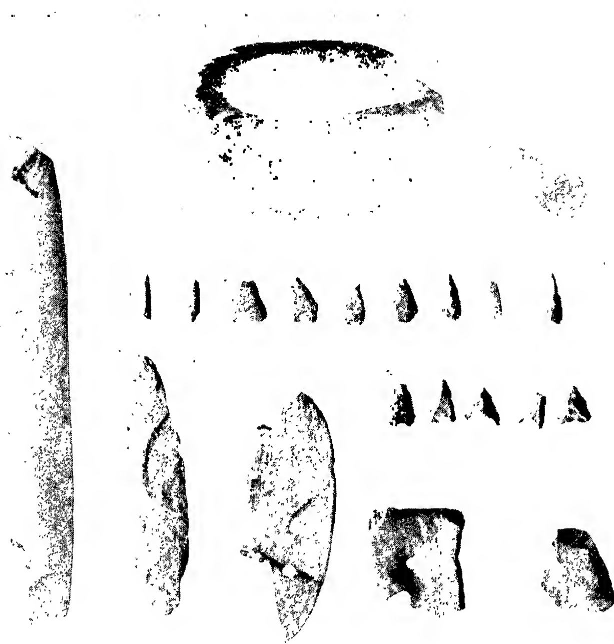


第十一圖　彌生式土器實測圖

々にして內外面に刷毛目を有し平滑、底は凡底多く、器形の變化少い一類と、比較的厚手大形の物、特に頸の緊つた坩形多く、焼堅にして吸濕性比較的少く、口緣、又は肩部、頸部に紋樣を

多く、發見地も德ノ森、宮ノ首が主である。

(九)石庖丁　石庖丁は二箇宮ノ首遺蹟から出土したに過ぎない。圖示の如く半楕圓形及び直邊に双を有し双双、端平にして双圓



第十圖　石庖丁、石槍、石鏃、磨石斧等

錐孔を有し、磨製は精良。類品が多く出土しないからこれのみで比較は危險であるが、松山附近から出土する楕圓形にしてほゞその中央に二孔を有する式等とはいさゝか趣を異にしてゐる。

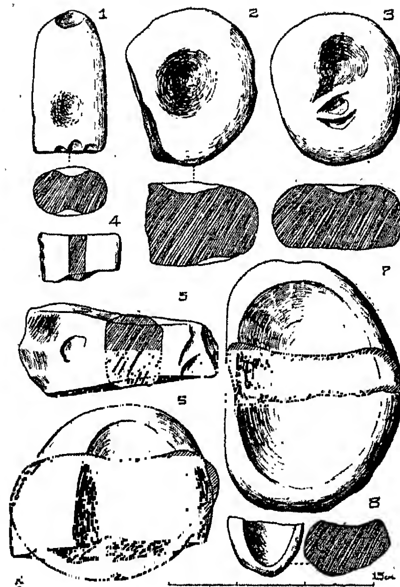
右にのべ來つたところは當地方發見の石器についての概要であつたが、その石質は多くは綠泥片岩、硅岩砂岩、粘板岩、安山岩質の物であつて、此等は遺蹟の部に於てのべたが如く、いづれも當地方に多數産出し、その採取も極めて容易なものであつて、敢へて遠路の運搬を要しないものである。かつ、その未成品、半成品の類が多數發見され、加工具が出で、かつ製造場も存在した事實は明かに、當地方に於て原料を採集し、かつ製造した事を示すものである。全體を通じて最も注意に價する現象は彌生式土器を主體とする文化特色の遺蹟であるにかゝはらず、近畿等に於ては容易に見られない打製石斧が多數に存在してゐる事實であつて、これは豐後水道を距てた對岸日向の遺蹟に良く類似して居るが、なほ日向に於て見るが如き打石斧形式のヴアラエテイや、又それに伴ふ著しい磨製石鏃の存在等は認められない。石槍、石庖丁、石皿、砥石各〻その特徴を有してゐる點は特に注意すべきところであつた。

土器

(一)繩紋式土器　南久米村北只大元神社境內及び隣接畠地より表面採集によつて彌生式土器等と混じて發見されたので、その層位等については一切不明であるのみならず、その數も他の物

もその凹みの大きい物は他の石器にも含ませ得る可能性を有してゐる。第八圖１２３の如き物が凹石の一例であつて、砂岩が最も多く緑泥片岩製の物も存在してゐる。凹みは徑二糎位より四糎位の大さで、石の表裏に共に存在する場合と、一面のみに存する場合がある。３の如きはその底面平らに磨かれてゐる。

(七)石皿　　凹石の凹みの大きい様な物に石皿と稱せられてゐる物が存在する。當地方からはこの發見非常に多くその形も大小種々である。凹みも多くは磨かれて石の表面僅かに凹むのみであるが、中には寫眞に示す如く全く石臼式に深く凹み、明かに何物かをこの中で搗くための用に供せられたものと考へることの出來るものが存在する。石質は硬砂岩がほとんどその全部である。大部分は安定な形をなし、端平で、凹みは一面のみに施されてゐる。關東等の例の如き脚のあるものとか、又その周邊を加工された物等は見當らない。石皿は德ノ森、宮ノ首等から主として出土してゐる。


第八圖　凹石、砥石、石皿

(八)砥石　　石皿と砥石との判別も必ずしも明瞭ではない。大形の物の如きはその表面良く磨かれて僅かに凹みそのいづれに屬するか明かでないものが見られる。しかし、この大形の物以外に比較的小形な物には明瞭に砥石としての質と、使用の跟跡とを有してゐる物が存在する。第八圖４５の如きはその一例であるが、４の如きは平面に磨かれて居つて、むしろ一種の金屬の研磨を想はせる、５もや〻４に近く磨面は比較的平滑である。共にその質黃色粘板岩であるが、大形の物は多くは砂岩である。砥石の數も石皿同樣

第九圖　石皿、砥石、槌石等

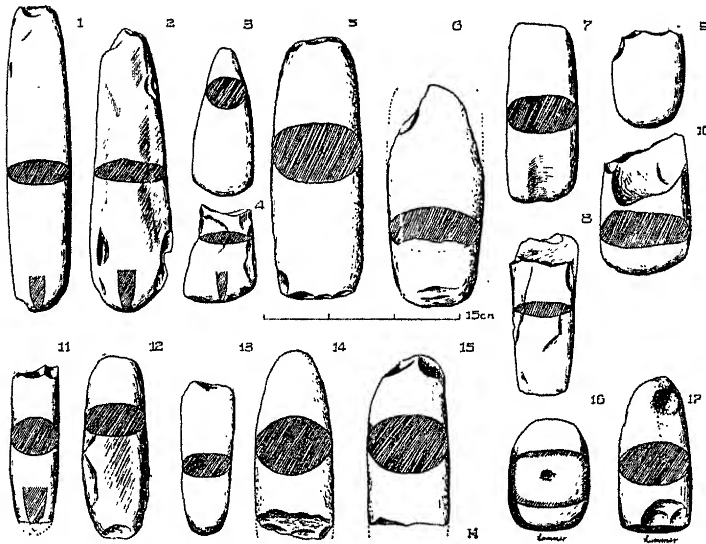
模造器具を想はせる様なものである。この形式の物はその發見例多しとはしないが、しかし最も注意すべきもの丶一である。發見地は宮ノ首遺蹟のみである。

この磨製石斧の中に於て右にのべたが如き物と區別して特に取り出して注意すべき一箇の磨製石斧が存在する。すなはち第七圖3に示すものがそれであつて、南久米村北只大元神社境內より繩紋式土器と混じて發見されたものである。長さ一一・五糎刄巾四・六糎厚さ中央で二・五糎を算し、灰綠色を呈する安山岩質のものであつて、相當風化はして居るが、その磨製は精良である。この形は圖によつても明かな如く、その頭部は尖つて胴部丸く、刄部に近くその幅廣くなつて、刄は蛤刄双刄である。か丶る形式の物は上揭の各石斧中未だ見ざるところのものであるのみでなく、又、伊豫國に於ても彌生式土器と伴出してか丶る形式の物の出でたるを知らず、又西日本彌生式土器には一般に伴はない形式であつて、かつ、關東、東北等に於て、繩紋式土器と普通に伴出すること多き形式の所謂遠州式石斧の一に屬して居る。假りに、先の敲製の短冊形に近き石斧が、彌生式土器文化所産品を代表するものとすれば、それに對して、本石斧を以て繩紋式土器文化を意味するものと解して差し支へ無き存在であらうと考へられる。然りとせば、本石斧發見の遺蹟より繩紋式土器の伴出せし事實は、相互必然的に相關連せる事實を示現せるものとして本遺蹟のみならず、亦本地方石器時代文化を彩る上に重要なる存在であると稱することが出來る。

(五)石槌　槌石として明瞭に認められるものはその數少しとしないが、第七圖16 17に示す二箇の如きはその代表的な物である。石質はやはり綠泥片岩を主とし、砂岩粘板岩の數例をそれに混じてゐる。圖の16の如きはほゞ角の取れた矩形に近いものであつて、表裏面及び周邊は精良に磨かれて居り、斷面はほゞ矩形を呈して一面中央に僅かに凹石樣の凹みが存在してゐる。下邊はハムマーとしての實用に供せられた跟を有してゐる。圖の17は石斧の刄部の破損した物を利用したと考へられる頭の少し尖つた細長い丁度握り頃の大さと形を呈してゐる。底邊、すなはち破損面と考へられるところは良く磨かれて居り、上端には各〻異つた一側方へ片倚つた凹みを有して居つて掌握には至極便利に出來てゐる。この凹みは凹石のものと同樣敲いて窪ませて居るが、しかし凹石の用に使用するためではなくやはり指を加へる凹みとして作つたと解釋する方が適當である。其他自然の河原石の一部に使用の跟を有する物や、又、自然の細長い乳棒狀の石の一端に槌石同樣の使用の跟を有する物も二三存在してゐる。

(六)凹石　凹石は一般に石槌とか、敲製石斧の一部等に凹みを有する物が存在してこれのみ單獨に存する物は少く、又存して

B敲製品　所謂磨製に至る加工段階として、打裂、敲の兩法が存在することは自分が茲に改めて述べるまでもなく明かなところであるが、本地方に於てはこの敲製のみで利器として使



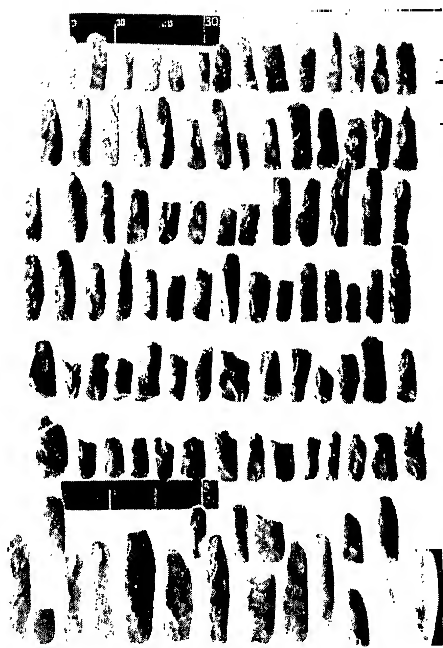
第七圖　磨石斧敲石斧槌石實測圖

用されて居つて未だそれに磨製の加はらないもの、又は加はつて居つても單にその刄の一部のみを磨いてゐる物が存在し、かつ、その手法が磨製と稱するものと異るのみならず、その型態

の著しく趣を異にするものが存在してゐる。之を特に敲製品、又は敲製石斧と自分は呼ぶことにしてゐる。第七圖に示す5 6 7 9 10 14 15の如き物であつて、その型態は所謂彌生式の石斧と云はれる、頭の尖らない全體蛤刄の短冊形に近い形をなしてその斷面は著しく厚くて楕圓形、時には圓形に近い形の物であつて、重量は著しく重く、刄は至極鈍重、むしろ切る利器よりも打ち割る利器を想はせる樣な物である。敲跟は表裏周邊に精密に施こされ、長さ二一糎より一〇糎に至り、著しく小形の物は見られない。これは菅田群、新谷群共に發見され、他の打石斧や磨石斧と共存してゐる。

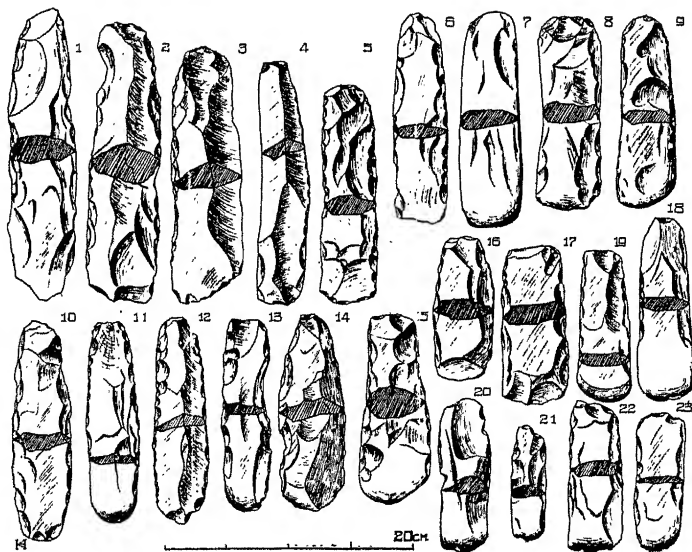
C磨製品　敲製品と區別して云ふところの磨製品はいづれも端平精整鋭利であつて、打製石斧とその型式を一にし、その間に著しい差を認め得られない。むしろ、打製品、半磨製品、磨製品が一類に包括されて敲製品に對するが如き觀を呈してゐる。現在發見されてゐるものについて見るに第七圖1 2 4 8の如く、その存する特色からは、未だ打製の上に敲製の加工段階を通過したとは考へ得られないむしろ相當細かく注意深くなされた打製の上へ直接磨製が加へられたと認められる跟蹟を有してゐる。第七圖1の如きはこの種の物の中に於ける最優秀品であつて、長さ二四糎幅五糎厚さ二糎に及び、その加工並びに型態は精良整美を極めて居つて、一種の磨製石斧又は古墳の石製

たものであつて、先の石鏃等の如くチッピングによらずにブロッキングによつてゐるためその打裂面も大小形容位置不整であるのは自然の結果であらうと思はれる。形は明瞭に分けられないとは云へ、短冊形、足形等とすることが出來るが、未だ分銅形や、匙形の物の存在を見ないのが一特色である。その斷面



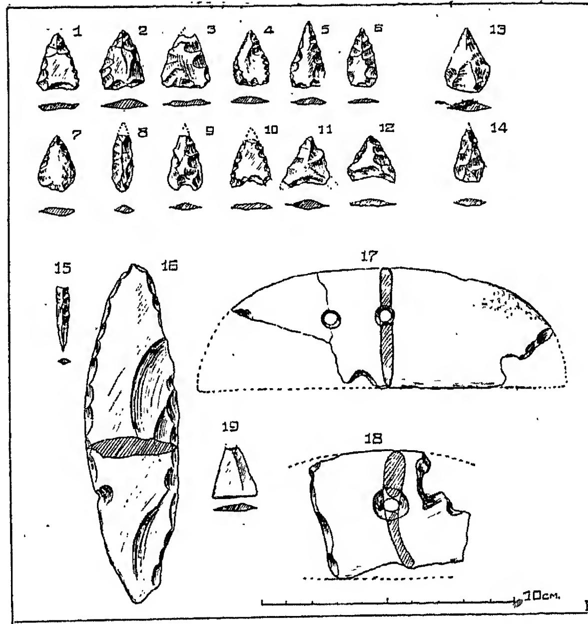
第五圖　石　斧

は端平であり、周邊は鋭利であつて、側稜波線は比較的整美小形である。この種の物の刃部は往々にして磨かれて居り、中にはその磨製が刃部以外の部分にまでも及んで磨製石斧とは嚴密に區別することは出來ないが、この半磨製の物と單なる打製の物とは手法様式共に何等區別し得るところなく單にその一部が磨かれてゐるに過ぎないと云ふ程度である。刃部のみの磨製は、理論的な考へとして成立する全磨製への推移の過渡形と見做す考へ方よりも、本地方等の物に於ては最も勞力の少い加工で磨製の利器としての効果を有せしめる經濟的な目的を有してなされた一方法と見做す方がより安當であると想はれる。打石斧の大さは長さ二三糎より九糎に至る大小種々であつて、各遺蹟より出土してゐる。



第六圖
打石斧實測圖

あるひはなほ多くの遺跡より發見されるに至るものと考へられる。下村島宮ノ首に存在した製造遺蹟は主として硅岩製石鏃の製造場であつて、未成品破片が多數存在するからその遺蹟自身發見の物は勿論當遺蹟に於て製造されたものと考へられ、時に



第四圖　石鏃、石錐、石庖丁、石槍

は他遺蹟に對しても移出し得たであらう可能性を想像することが出來る。磨製石鏃は大洲町花瀬山より一箇しかも先端部の破片が發見されてゐるに過ぎない。黒色粘板岩（スレート）製であつて、磨製はやゝ粗で未成品の觀、あるひは他の大形石器先端部破片の觀

無きにしもあらずである。（第四圖19）

(二)石錐　石錐の明瞭なものは僅かに宮ノ首より一箇發見されたに過ぎない。石鏃と同じく肉色硅岩製であつて、打裂は精良、斷面菱形を呈してその稜は明瞭である。錐身部より存在しないので果して有頭であるか、又は無頭であるか明かでない。

(三)石槍　第四圖16に示す如く全體柳葉形を呈し、端平にして、小打裂をその周邊より注意深く施こしたものであつて、綠泥片岩製。宮ノ首より發見されたものである。かゝる型式の石槍は、當伊豫國に於ては未だ充分その存在を知られないところであつて、鐵劍形、二等邊三角形等の型式に一新形式を加へ得たことになるのである。

(四)石斧　石斧は當地方遺物中最もその數量の多いものであつて、數百點にも達せんとしてゐる、その質はいづれも綠泥片岩製（中に各々一箇づゝの粘板岩製と、安山岩製とが存在する）であつて、製法は打製最も多く、敲製之に次ぎ磨製は最も少い、所謂半磨製品と稱せられる局部を磨いた打製石斧も可成り多數存在するが、本文に於ては假りに之を打製石斧に含めて次に概説しやうと思ふ。

A打製品　加工は關東等の物に比して精巧丁寧であると云ふ事が出來る。綠泥片岩の層狀に破碎し得る性質を利用して作つた端平にして細長い裂片の周邊より大小の打裂を加へて作つ

菅田村阿部金丸城址も亦南面した標高百米位の神南山南麓の丘であつて、脚下は僅かに存在する沖積平原を距てゝ肱川に接し、今日までに發見された遺蹟として肱川最川上のものに屬する。本遺蹟も未だ遺物散布地の程度であつて、將來の精査によらなければ果して包含層が存するや否や明かでない。

以上記述した新谷群及び菅田群の各遺蹟は、一は肱川支流矢落川溪谷に存する一群であり、他は肱川本流の溪谷に存するものであると云ふ地形的の區別を兩群は有したのみならず、又、前者は河岸堆積丘上に、後者は山麓扇狀地上に存すると云ふ占位樣式をも異にし、その遺物に於ても菅田群の一よりは繩紋式土器、及びその文化特色を著明に有する石器を出し、石器に於ても菅田群には充分な打製石器の盛行を見、かつ製造遺蹟の如きものすら發見されてゐるが如き相互間の差異は存在した。がしかし、一方こゝに共通の現象であり、又最も興味深い事實は、いづれもは洪積沖積層境界線附近に、しかも洪積丘上百米內至はそれ以下の所に存在した遺蹟であり、從つて、その一方內至三方には肥沃な沖積平原と、同時にそれを作つた川を控へてゐると云ふ重要な景觀的事實である。この事實は、他地方の遺蹟と、その文化特色の差異を條件として比較される時に重要なファクトを暗示する役目を演じるものと考へられる。

二

遺物は石器と土器に分たれ石器は石鏃、石錐、石槍、石斧、槌石、石皿、砥石、石庖丁、凹石及び原料未成品の類を含みその製法には打製、磨製、敲製の手法を有して居り、土器は彌生式土器と繩紋式土器との二種類が存在してゐる。

石　器

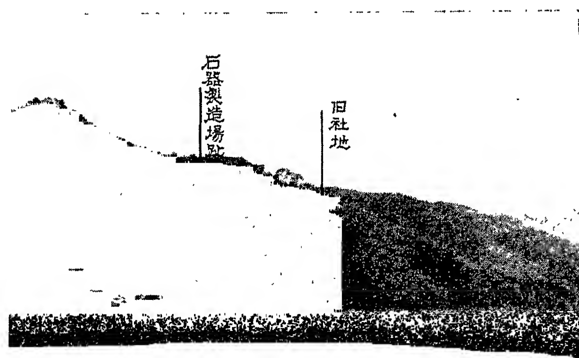
(一)石鏃　石鏃は圖示の如く打製と磨製とが存在してゐる。打製石鏃はいづれも硅岩製であつて、所謂肉色を呈し、その加工は比較的精巧ではないが、打裂法（チッピング）はその表裏の周邊より施こされて、形容整美でないとは云へ薄肉鋭利に出來てゐる。形態は二等邊三角形の物を主とし、それが底邊のやゝ內方に凹んだ凹底式の物、及び、それが底邊直線をなさずに丸味を帶び、時には著しく底邊突出して柳葉形に近い形を成したもの等の各ヴァラエテイが存在する。打製石鏃の發見された遺蹟は、先述の如く菅田群中の北只大元神社附近より繩紋式土器彌生式土器に混じて出たものと、下村島宮ノ首より多數出土したものとの二例に過ぎないがその未成品樣の物は他に於ても見られるから將來

在して居るのみならず、その一部には石器製造遺蹟も認められて當地方としては最も興味深い且重要な遺蹟である。丁度宮ノ首は、肱川が根太山に衝突する前に數次の川筋の變更を行つた時に生じた平野（假りに菅田平野と呼ぶ）に對し、僅かではあるが半島狀に突出した扇狀地の上を指すのであつて、從つて、本遺蹟は東西北の三方豁然とひらけて、脚下に菅田平野の展開を距てゝ肱川の流に對し、又西には根太山を、北には神南山を控へて風光眺望絕佳の地としておそらく大洲地方遺蹟の第一に位するものであらうと考へられる、而してそれは單に風光の美なるのみならず、肱川を距てゝ北泉德寺遺蹟に對し、要害の地としても亦その要件を備へて一種の堡寨(チャシ)としても役立ち得たものと想はれる。遺物は百米標高線以下の部分に發見され、先の花瀨山の例と同樣麓に近づく程遺物は少くなり、五〇米標高線附近がその中心と考へられる。又この宮の首の字名のよつて生ずるに至つた神社の存在した附近、卽ち舊社地を圍ひ西南東の各方に遺物は主として散布し、又包含層も存在し又はした樣である。この扇狀地は花瀨山等と同樣砂利混りの粘土質の赤褐色の土壤をその基盤として居るもので、遺物は表土に露出してゐるところが多いが、未開墾の部分では、表土下一尺乃至一尺五寸位より二尺五寸乃至三尺位の所に發見される由、同遺蹟の所有者であり發見者でありかつ熱心な蒐集家である有友不覊太郎氏より承ることを得た。遺物を包含してゐる土壤は自分等の實見したところによると灰黑色を呈する砂利混りの粘土質のものであつて、中には紅赤色の砂利に混じても打製石斧等を發見することを得た。この包含層からは木炭、灰の類をも發見してゐる。石器製造場と考へるところは舊社地よりやゝ東南に倚つたところであつて、すでに開墾され耕作されてゐるが、その一部極くゆるやかに傾斜したところに、ほゞ十八、九米平方の地域に硅岩原料片・硅岩製石鏃・石錐及びその未成半成品の類か無數に散布して居る場所が存在するのであるが、これは單にその表面のみならず、この土壤中に多數同樣の物を含んで居るのであつて、大體に於て舊包含層中に存在した一種の加工遺蹟の跟蹟を示すものと考へることが出來る。此所からは他の遺蹟に見られない位多數かつ大小各種の石皿砥石の類が發見されてゐるのは注意すべき事實である。

菅田村泉德寺遺蹟は、菅田村字東小字中東に存在し、標高約百米、南面して居つて、丁度宮ノ首遺蹟の北に當り、德ノ森遺蹟とは堀割りの如き觀ある舊肱川々筋の跡の溪谷によつて連絡されてゐる。寺ノ首と反對にその南方脚下に菅田平野を控へ、肱川に接し風光佳良の地である。此所からは單に表面採集によつて石器類が僅少發見されたのみで果して包含層が存するや否や明かでない。

の）質の土壌より成り、遺物はその上部より發見されて、未だ側面傾斜面より出づるを聞かない。包含層は精査すればおそらく存するのであらうと考へられるが充分な發掘等をなすには至つてゐない。こゝからは一箇の磨製石鏃が發見されて居るのは注意すべきである。

南久米村北只大元神社の遺蹟は、肱川本流より南方へ約二粁程距たつて居つて、肱川支流の作つた細い溪谷の中央に、川より東側に西に延びた一の小さい扇狀地上に存在して居る。大元神社の境內及びその東側の畠地が遺蹟である。この大元神社は實に巨大な石の上に神殿を設けたものであつて、後世にまで及んで遺存して居る一の巨石崇拜の事實を示して居るものであつて、沖積層よりは僅かに十米足らずの高さに存する。この扇狀地はその南西側に肱川の支流及びそれが作つた沖積平地を控へて居つて、東方は徐々に高くなつて紅葉山に續いてゐる。眺望は必ずしも豁然たるものではないが、近くにさへぎるものがないため通風彩光が良好である。遺物包含層はその存在を明確にはし難いが、尾崎繁年氏の談によれば畠地に於ては表土下一尺乃至一尺五寸位より土器片等が出土する由であるから、あるひは將來の精査によつてその存在が確認されるかも知れない。遺物は多くは表面採集によつて得られたのであるが、その中に細紋式土器の數片を彌生式土器に混じて出し、又彌生式土器には一般に伴はないで繩紋式土器に伴ふことの普通である頭の尖つて蛤双刀の所謂遠州式石斧が一箇發見されて居る事實は注意すべく、又當地方遺物の中に於て最も重要なるもの丶一であると云ふことが出來る。



第三圖　菅田平野より宮ノ首遺蹟を望む

菅田村粱瀨の遺蹟は單に遺物發見地と稱す可き程度のものである。すなち菅田村最西端大洲町との境界附近に相當する、粱瀨ミコガヨケと稱する肱川岸突角のすぐ西側沖積地に於て煉瓦を作るため粘土を採掘中にその土中より沖積土に混じて彌生式土器及び土錘を發見したのであつて、勿論包含層等稱す可き性質のものではない。あるひはすぐ南側の臺地か、又は河上の遺蹟より流れて來たのではないかと想はれる。

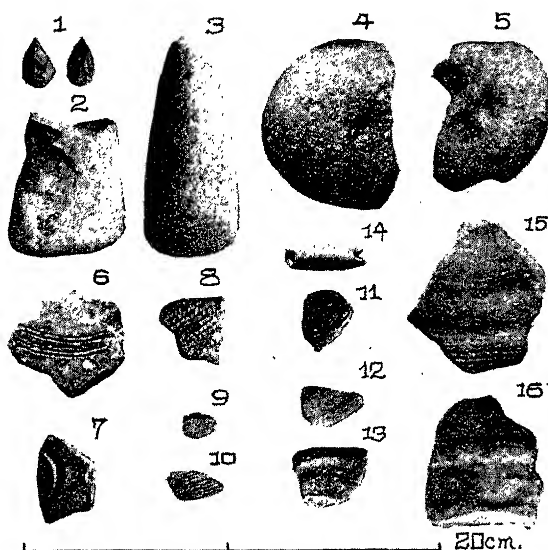
菅田村下村嶋宮の遺蹟は最も多くの遺物を出し、包含層も存

と呼んで居つて脊矢落川筋の跟であつて深い沖積土の堆積があり、表面より廿五尺程下の青灰色の砂利混りの層（おそらく一米位のものと思はれる）に土器等が破片となつて混入して居る。この遺物を有する層の上には幾層かの性質を異にした砂利粘土の層があり、中には三四尺の木片木葉より成る泥炭層をも介在して居る。かゝる深位より出る遺物はいづれも皆破片であつて、中には磨滅作用を受けたものもあつて、おそらく附近の高臺地にあつた包含層が矢落川によつて流出沈積したのが本層であらうと考へられる。この沖積土の水田の南側に接して存する傾斜地、すなはち洪積層上の遺物は先述の如くいづれも破片となつて居り、その數も少くて到底包含層等の存在は認められないし、又遺物も著しく風化を受けて居る、あるひははるか以前に包含層は破壊したのかも知れない。斜面はいづれも北面してゐる。

二　菅田群

菅田群六遺跡は肱川本流の蛇曲に從つてその細長い溪谷の左右に東西に細長く並んで存在し、僅かに神南山（カンナン）西麓の菅川筋の跡の細い谷を挾んで泉徳寺遺蹟が新谷群の徳之森遺蹟と最も近くに存在し、又、大洲町の南方に於て南久米村北只の遺蹟が、肱川溪谷より南方に凹んでその支流の作る溪谷に存在して居る外は、いづれも肱川本流と極めて近く接して存して居る。前述の如くいづれも一種の山麓扇狀地の上に存在し、下村島、泉徳寺以外は大きい沖積地をその前面に擴げてゐない。

大洲町花瀬山の遺蹟は、肱川が如法寺山々麓に於ける其の基盤岩に衝突して複雑にして著しい蛇曲をなして作つた廣い河原の上に出來た大洲町聚落の南方に接する百米足らずの扇狀丘であつて、その北側には肱川、東側にはその支流が各々その脚を洗つて居る。丘陵自體は、砂利（可成り大形の礫塊を混へるところ



第二圖　北只遺蹟出土品

の坩であるが、附近に大小種々の形態と、時代との坩の破片（こゝでは坩を奉納することはなく次第に神體の坩が破損した時に新らしい物と取り換へて、この古い物をその附近に捨る由土地の人から聞かされた）が散亂して居るが、その中に發掘の結果、大形の祝部式土器の坩と共に、大形の彌生式土器の坩も發見された、勿論破片となつて居るもので、果してこの奇しき傳說と如何なる關係にあるか、單なる先史考古學の範圍に於ては說明を與へ得ない問題ではあるが、しかし興味深き出土樣式として注意に値するものである。

德之森遺蹟は前述の如く、丁度都谷の正南に存在し、大洲村（舊平村）に屬して居る。あたかも新谷溪谷はその出口に於て一の高さ廿米位の流水作用によつて堆積した丘陵を半嶋狀に西方に突出して居る。德之森遺蹟はこの半島狀突出の中央斜面より頂上にかけて存在し、少彥名命を祀る敷地神社の裏邊より西方にかけて次第に遺物も包含層も顯著になつてゐる、單なる遺物の散布はこの丘陵全面に認められるが、その最も顯著な中心とも云ふ可きところは中央北斜面であつて、自分等もこの部分を發掘した。發掘の地點——即ち最も顯著な包含層の存在するところ——は丘陵が一部分灣入して小さい谷樣になつたところで頂上よりは三米位も低い部分から始まつたゆるやかなスロープの上に存在してゐる。このスロープは南北約五十米、東西約四十米位の扇狀形を呈したものであつて、その中に於ても包含層は高い部分に厚く遺物も豐富であつて、低い部分程薄く遺物も少い傾向を有して居る。被覆土としては現在耕作されてゐる有機物を混有した砂混りの粘性强き灰褐色の土であつて、遺物を有する層は被覆土と甚だしい差は認められないが、しかし、幾分黑色を强く含んで居る。被覆土は大體その厚さ四〇——六〇糎、包含層は八〇糎乃至一米位であつた。包含層中には遺物、主として土器片が極めて多數に混在して居り、中にはほとんど完全な鉢形土器や、高坏の如き物も認められ、又木炭の類も少からず認めることが出來た。要するに攪亂もしくは移動されない處女狀態の包含層の存在は否定し得ないところである。但しこの包含層が、近畿地方や其他各地で見られるが如き眞黑色の粘性强き土壤とは趣を異にしてゐる點は、注意されなければならない。包含層下は砂利層、もしくは礫塊を有する粘土層である。

和田、伏折の各遺蹟は、やゝ特殊な性質のものである。これは山麓洪積丘陵上表面に散布してゐるものと、その下の沖積層下深く埋沒してゐるものと二樣の遺物發見狀態が存在するが、共に包含層ではなくて散布もしくは埋沒の名を以て呼ばる可きものである。この一帶の散布地の中央に北に向つて半島狀に突出する丘陵が存在することによつて和田(東)と伏折(西)が分けられる。この半島狀丘陵の西方一帶の沖積地を俗に「底無し田」

破壊してその遺物が沖積層中に發見されるのであつて、決して包含層を沖積層上に有して居るが如き性質の物ではない。此等全體の遺蹟分布は、いづれも肱川、もしくはその支流の比較的廣からざる溪谷の兩岸、河川に近く接して存在して居つて、大洲町北方に擴がつて居る比較的廣い大洲平野周邊にはその存在を見ないのは注意すべき事實である。概して一――四の物は肱川の支流矢落川が作る新谷溪谷（あるひは盆地と云つても良いかも知れない）に屬して居るためこれを新谷群と假りに稱し、南方に存在する五――一〇の遺蹟は肱川本流の作る細長い溪谷の左右に存在してその大部分が菅田村に屬するからこれを假りに菅田群と稱し度いと思ふ。この新谷群と菅田群の兩者の間に存在する最も著しい遺蹟としての差は、前者は河岸丘陵上に存するに後者は山麓扇狀地上に存すると云ふ點であつて、遺物に於ても僅少ではあるが差を認めることが出來る。各遺蹟の詳細は次を參照され度い。

一　新　谷　群

新谷群に含めた遺蹟は四ケ所であつたが、和田、伏折の二遺蹟は連續して居つて二分することは出來ないからあるひは三ケ所であると稱しても必ずしも不可ではない。都谷と大洲村徳之森の二遺蹟が、この矢落川の作る新谷溪谷の入口の南北に河を挾んで對峙して居る。

都谷は、南方が大洲平野に向つて開いた比較的淺い谷であつて、これを挾む東西兩山塊も百米以下の低いものであるため谷間と云ふ感のしない通風彩光共に平坦部と甚だしくは異らない狀態を呈してゐる。谷の中間には南流して矢落川に注ぐ湯尻川と稱する小流が流れ、その名稱の示す如く谷の底には阿蘇火山系に屬する一の枯渇した温泉が存在して居つて、これは極く近年に至るまで活動して居つたと云はれて居る。この湯尻川を挾んで現在數十の民家が存在して居るが、遺物の出土した所は、この西側の民家の最南端の民家の數間西南に存する舊民家が存した地點の一部であつて、從つて、その表面は平にされて居つて必ずしも原狀のまゝではない。しかし、その出土狀態より、古くこの地點に遺物包含層が明瞭に存して居つたであらうことは容易に想像され得るし、發掘によつて土器片等を見出すことが出來る、磨製石斧等は附近に集められてあつた小石の中から檢出したものであつてその出土地點、地位は明かでないが、しかしその小石がいづれも開墾の時出たのを集めたのであるから、この部分に最も近いとこから出土した事は明かである。都谷にはこの外に、古來坩神と稱して、土地の人達が少彦名命の藥坩を奉祀したと稱してゐる小祠があつて、現今もその神體は一箇

灘底を通る阿蘇火山脈の影響の一部が存することを知ることが出來る。肱川及びその支流は著しい水の供給源であるが、其他に山腹及び山麓には所々に涌泉が存在して居る、渓流・涌泉は現在に於ても地方民の主要な飲用水供給源である。山麓に發達する丘陵は、山塊の霹靂による拳大の石を混じた砂利、粘土より成り、沖積層は細砂及び粘土より成つて有機物を多量に含有し、現今多くは耕作地となり人文發達の基底である。現今の聚落はその大部分は沖積層上又は山麓に存在するがなほ標高百米乃至二百米の間に汎り標式的な散村聚落としての部落が存して居る、兩者の間に存する經濟生活、生業樣成の差は單に地理學の問題としてのみではなく、考古學の上にも一種の比較土俗學的事實を示すものとして注意しなければならない。この肱川流域喜多郡地方は盆地の常としてやゝ濕氣を多く有するものであるが（七五・七％）全體的に見て氣温地形共に人文發達の條件に適して居ると云ふことが出來る。

右の如き環境の中に存在する遺蹟は、今日までの發見を以てすれば左の十ケ所に及び、いづれも昭和四年以來の新發見に屬するものである。

(一)新谷村都谷　磨製石斧・打製石斧・燧石未成石器・彌生式土器

(二)〃　和田　彌生式土器

(三)〃　伏折（底無し田及びその附近）　打製石斧・磨製石斧・硅岩石器原料・彌生式土器

(四)大洲村德之森　打製石斧・磨製石斧・石槌・砥石・石皿・硅岩原料・土錘・彌生式土器・木炭（明確な包含層存在す）

(五)大洲町花瀨（ハナセ）山　打製石斧・磨製石斧・石槌・砥石・乳棒・磨製石鏃・硅岩製原料・彌生式土器

(六)南久米村北只（キタタダ）大元神社附近　打製石斧・磨製石斧・石槌・凹石・打製石鏃・硅岩未成石器・土錘・繩紋式土器・彌生式土器

(七)菅田村梁瀨　土錘・彌生式土器

(八)〃　泉德寺　半磨製石斧・砥石

(九)〃　下村嶋宮の首　打製石斧・磨製石斧・打製石槍・打製石鏃・石錐・石庖丁・石槌・凹石・砥石・石皿・原料未製石器類・彌生式土器・木炭（明確な包含層、石器製造遺蹟址存在す）

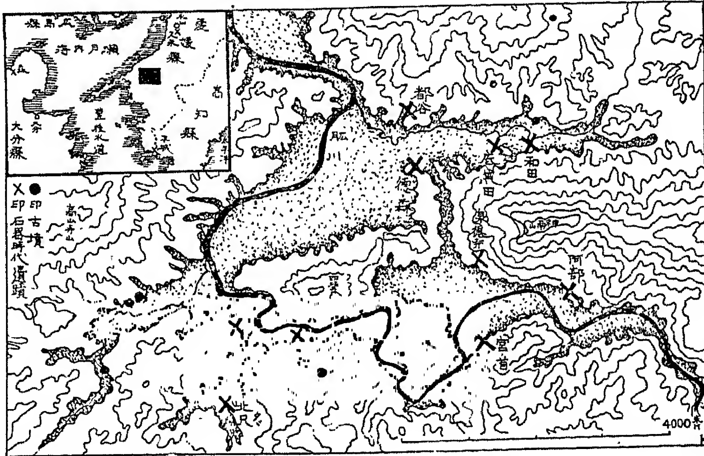
(一〇)〃　阿部金丸城址　打製石斧・半磨製石斧・硅岩原料・砥石

遺蹟はいづれも圖示の如く原則として沖積層上には存在せずして沖積層の周邊、洪積層との接觸線に洪積土壤上に存在し、山麓の一種の扇狀地、又は、流水作用により山麓に作られた丘陵上に存在してゐる。勿論例外的な例として二・三・七の如きものが存在するが、これはいづれもこの洪積層上の包含層が流出

一

四國島はその地形上之を數箇の斜面に分つ事が可能である。その瀬戸内海に面する斜面中最西端のものを普通呼ぶに「中豫斜面」なる名を以てし、東は高繩半島、西は三崎半島を以て限られ、伊豫灘の出入少き弓狀内曲海岸線の長く單調なる連續を抱く山勝ちの地帶を指してゐる。從つてこれは西九州大分縣の一部とは三崎半島の長き突出によつて速明海峡を距てゝ相接し、伊豫灘に續く周防灘を距てゝ山口縣南部、廣島縣西部と接して居る。この中豫斜面の弓狀海岸線の單調は、三崎半島の基部に於て、肱川と稱する伊豫第一の長流の河口によつて僅かに破れて居る。この肱川流域一帶を愛媛縣喜多郡と稱し、本文記載の遺蹟いづれもこの肱川の流域に存するものである。

肱川は壯年期に屬する四國の山の間を縫ふ關係上比較的その蛇曲は少いのであるが、急に喜多郡に入つて大洲平野に達するや著しい蛇曲作用（メアンダーリング）を行つてその流域に肥沃な沖積平原を發達せしめて居る。插入圖に示すところの散點を以てしたところが卽ちそれであつて、以前はこの肱川がこの沖積層上に於てなほ多くの蛇曲の波を有して居つた事實が、平野四圍の丘陵の性質によつて知り得られるが、しかしこの平坦部全部がこの肱川流行以前に存在した一種の盆地湖々底であつて、この沖積土壤はその時の沈澱に成る物であるため、その上を流行するに當つてその蛇曲は次第に波を減じて、第三次形である今の狀態に移つた事が推知され得る。この肱川流域の沖積層の終るところ、すなはち山脚と接する附近は、肱川の運般に成つた洪積土壤丘が所々に存在し、又發達は極めて不良であるが山脚の扇狀（ファン）丘陵も各所に存在して居つて、遺蹟はいづれもこの洪積丘上に存在してゐる。この平野を圍み、又はその中に聳立する山塊はいづれも秩父古成層露頭を中心にしたものであつて、急峻を極めて居るもの多く、圓錐形に近い形の物も稀には存在する。山塊は壯年期に屬するため褶は鋭くその數亦少くはない。岩石は蛇紋岩及び綠泥片岩が主で又硅岩も稀には介存して著しい露頭となつて地上に露れ、又峡谷、河川の散石として分布して居る。此等の山塊自身は比較的保水性少くその表面を被覆して居る洪積砂利粘土層に松杉等松柏科植物の植林を見て居る。又山塊の一部——例へば新谷村都谷、久米村仙樂——には溫鑛泉が湧出した事實の明かな所もあつて、伊豫



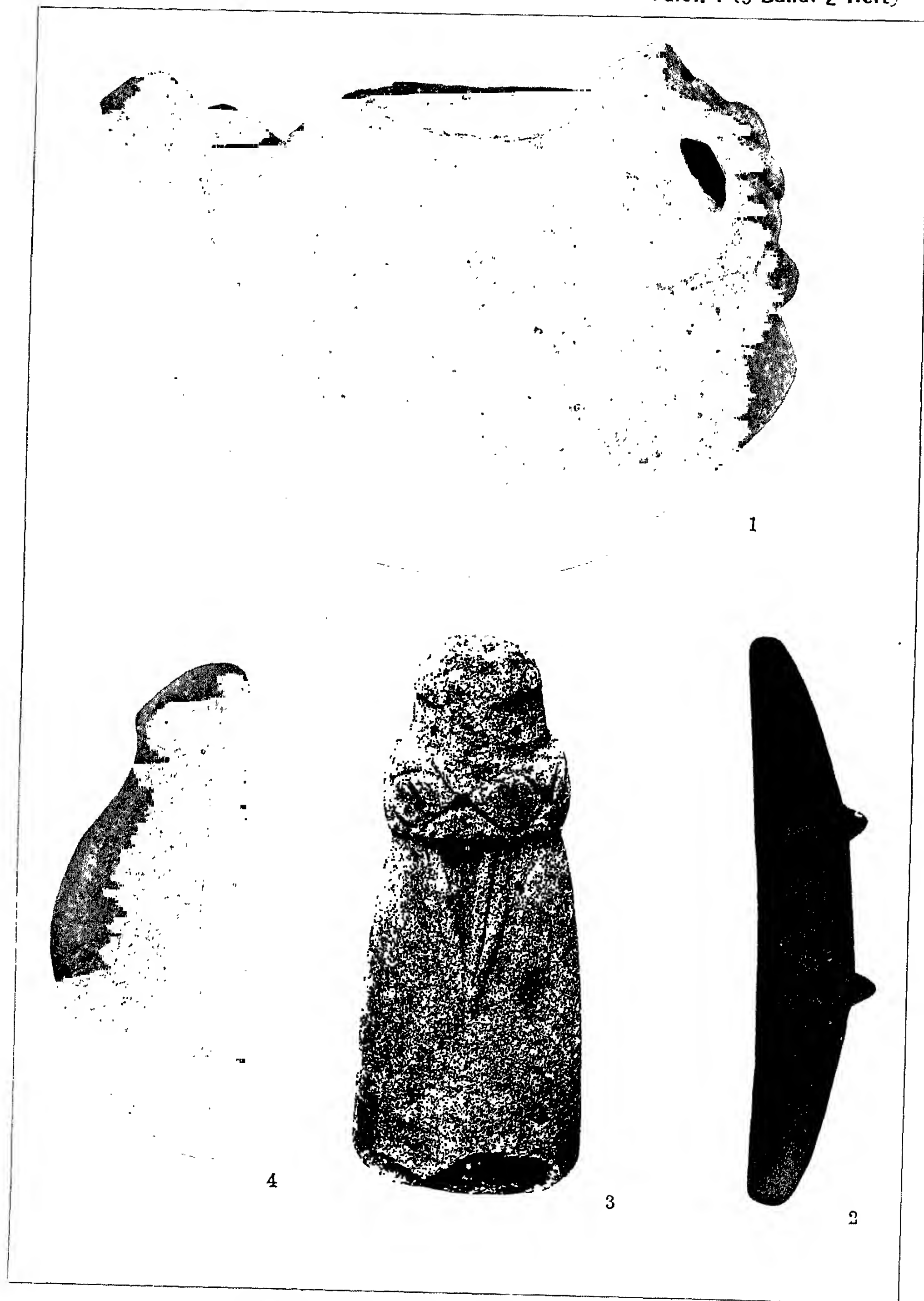
第一圖　喜多郡地方遺蹟分布圖

伊豫國喜多郡地方遺蹟概說

樋口清之

はしがき

愛媛縣喜多郡はその地形上九州と四國との接觸點とも稱す可き位置に位し、種々の意味に於てその有する關係は考古學上重要であるにかゝはらず、近年に至つてもその遺蹟遺物に對する發見報告が無く、あたかも一の白地圖地帶の如き觀を呈して來たのであつた。然るに極く近年に至つて急に勃興して來た同地方の所謂史蹟研究の氣運に乘じて種々の考古學的遺蹟が發見されるに至つた。そのいづれも未だ學術雜誌に研究結果を報告されたことなく又地名表にも記載がないため新發見の遺蹟として呼んで差支へないものと考へる。此等の遺蹟は種々のものを含んで居るが自分が今本文に於て記述せんとするのはそのうち石器時代に屬するものゝみに限り、他の諸種遺蹟の記載は別の機會に行ひ度ひと考へる。この石器時代遺蹟の探索はすでに數年前自分等が提唱するところであつたが、しかしその實際の勞に當られたのは當地方の熱心な鄕土研究家である城戶通德・有友不覊太郎・澤井周丸・尾崎繁年氏等であつて、今日に於てはその石器時代遺物出土地も十指に滿ち、遺物も數百點以上にも及んで居る。此等は今日に於ては城戶氏の手によつて少彥名神社々務所に集められてその散失を防ぎ、又遺蹟にはその保存法が考慮されてその破壞を防がんとされて居る。共に學術のため喜ぶ可き事であり、感謝すべきことでもある。自分は幸にも此等遺蹟の探査にも從がひ、それが發掘も行ふ機會を得、かつ又、遺物の自由な觀察もなし得られる事が出來たので、此等を綜合記載してとり敢へず之を學界に報じ、その遺物の特殊性を注意し、白地圖を塗ることによつて、將來の研究比較に便せんがためこの報告を草するのである。



飛驒高山地方發見の遺物（林魁一氏文參照）

Fundgegenstände aus der Umgebung von Takayama. (Hayashi)

目次

史前學會々則

一 本會ヲ史前學會ト名付ケル

二 本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三 本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレットノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四 會員

本會ノ趣旨ニ賛成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五 本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六 會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七 本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八 本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穏田町九
大山史前學研究所内
史前學會 電話青山一二五番

幹事 大山柏 甲野勇 杉山壽榮男 田澤金吾

會計 池上啓介 岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年五月一日印刷
昭和八年五月十日發行

第五巻第二號
定價 一圓

編輯者 東京市澁谷區穏田一丁目九番地 大山柏

發行者 東京市澁谷區穏田一丁目九番地 岡田義一

印刷者 東京市神田區表猿樂町二 株式會社開明堂東京營業所 中村修二

發行所 東京市澁谷區穏田一丁目九大山史前學研究所内 史前學會 電話青山一二五番 振替東京五八九六九番

發賣所 東京市神田區駿河臺町一ノ八 岡書院 電話神田二七七五番 振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第五卷　第二號

史前學會

/1377/37.

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

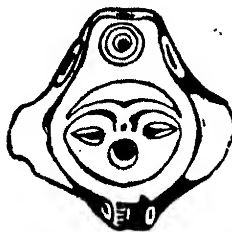
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



5. BAND 3. HEFT

TOKIO

May 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama
Isamu Kohno
Keisuke Ikegami
Sueo Sugiyama
Kingo Tazawa

INHALT

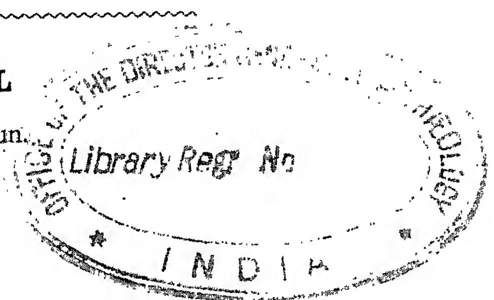
I. ABHANDLUNGEN (Japanisch)

II. KLEINE MITTEILUNGEN (Japanisch)

III. BUECHER BESPRECHUNGEN

ANHANG (Deutsch)

TAFEL



HERRN PROF. DR. HUBERT SCHMIDT ZUM GEDAECHTNIS

Am 3 April habe ich von Deutschland die Trauernachricht vom Tode Prof. Dr. Hubert Schmidt erhalten, die ich mit herzlicher Trauer gelesen habe. Ich habe die letzten Briefe von Prof. Schmidt unter dem Datum 14. Feb. erst Anfang März bekommen, und damals als ich diesen Briefe emfing, war er schon tot. Darin schrieb er wenig über seine Krankheit, aber viel über die Wissenschaft. Besonders über die Herausgabe des Cucuteni-Buchs, über die bald druckfertige Arbeit am Tell Halaf (Nord-Mesopotamien) und auch über den Vortrag von Van Stein Callenfels, den unsere Zeitschrift neulich veröffentlicht hat. Seine Interesse reichte bis nach dem weit entfernten Ostasien und er verlangte oft die Veröffentlichungen über unsere steinzeitlichen Forschungen, besonders über die Jomon-Kultur der japanischen Inseln. Einst wünschte er nach Japan kommen, wenn er irgend eine Stellung fände, aber damals konnten wir leider keine für ihn finden.

Ich habe 1923—24 in der Praehistorischen Abteilung des Staatlichen Museums zu Berlin unter ihm als Schüler über die europäischen Praehistorie arbeitet. So möchte ich bei dieser traurigen Gelegenheit meiner herzlichsten Dankbarkeit als letzten Abschied Ausdruck geben.

Fürst Kashiwa Ohyama

會報

シュミツト博士の訃

ドイツ史前學界の重鎮、フーベルト・シュミット博士は、數年前より中氣で半身不隨となられたが、これにも屈せず、學業に勇往せられたものゝ、終に本年三月一日他界せられたことは、遺憾に耐へない。

博士は一八六四年に誕生、一八九一年に國立博物館に入られてこのかた、シユリーマン博士の大遺業であるトロヤの發掘に參加し、後これが發掘遺物を整理して、大著をなし、シユリーマンをして永遠ならしめ、更にパンペレー中亞探檢隊に加はつて、アナウに彩色土器系遺跡を調査報告し、其後にトルドス、ミケーネ、カテア等主として東歐方面の史前文化の研究に沒頭し、終に一九一一年にはルーマニアの彩色土器系遺跡の發掘を行はるゝ等、近東、東歐、中歐等の方面に對する史前文化、特に新石文化研究の第一者とて、重きをなされたものである。最近には同博士は南露方面の彩色土器系のトリポリジエー文化は申すまでもなく、歐露シベリアに亙る櫛目土器系文化にも著目せらるゝと共に、遙に我縄紋式文化にまで興味を引かるゝ有樣であつたが、終に遠逝せられたことは、遺憾に耐へない。我史前文化に對する理解者であり研究者でもある博士を失ふたことは、我學界としても、恨事である。茲に博士の生前業跡の一端を紹介すると共に、追悼の意を表するものである。（八・五・三〇、大山）

入會者

東京市目黒區下目黒四丁目九七四　森　貞成
東京市目黒區下目黒四丁目九七四　松本芳夫
東京市本郷區駒込林町一〇五　大給　尹

退會者

水谷泰夫　田村壯次郎　筑波藤麿
宮島貞亮　大平喜間多　高橋直一
宮内悦藏　祝　宮靜　福島義一
石川文彦　遠山淺雄　武藤留之助

轉居

大分縣由布院溫泉龜井別莊　中谷治宇二郎
奈良縣高市郡鴨公小學校内　吉田宇太郎
朝鮮京城府東崇洞二〇一藥水臺　藤田亮策
新潟縣小千谷町旅屋町　齋藤秀平
静岡縣見付町西川原三九九一　小原一夫
京都市左京區下鴨松ノ木町五六西野國太郎方　村田義夫

文獻

還暦記念六十年之回顧　喜田貞吉博士著

昨春四月、京大に於て盛大なる祝賀會の催しを受けられた、博士は其感謝の爲めに、本書をものせられ、これを知友間に分配せられた。評者にもわざ〳〵來駕の上、一本を寄せらるゝの光榮に浴したのみならず、所々其要所を讀下して戴き、特に感興深きものがあつた。勿論、本書は表題の如く、博士御自身の回顧であり、又自叙傳でもあるから、必ずしも學術的內容のみではない。又世間一般に見る樣な、博士の論文集でもない。內容は、博士の誕生より今日までを順序を追ふて、書きつられてある。只其中に、史前學關係の叙述があり、特に最後の尨大な論文著作年譜中に、博士の斯學關係の概目が窺はれる。但しこれで拜見すると、博士に對し私共にも可なりの認識不足があつた。この表中にも亦、現實に本誌上其高著に於ても、博士は史前學者であり、又國史學者であるとのみ思ふて居つたが、其年譜を一見して、甚だ失禮な申分かも知れないが、より該博な諸方面に亘られて居ることは、敬服の一語に盡きる。且つ評者も博士が筆まめの方であることは、承知して居つたが、これ程多數の述作が御有りとも思はなかつた。然し何んと云ふても、最近の高著には、著しく史前學關係、特に東北方面研究の多い所は、見逃せない。それ故、本書は、博士に昵近の人々が、博士に親む讀物と云ふ外、博士の研究上の傾向が、本書から明に窺知せられ、又史前學方面に寄せられた論文見出ともなる。只本書を見て望蜀の念深きものは、中に色々な新聞雜誌等に發表せられた諸文は、拜見してないものが多いから、此次には、論文集に一纏めにして戴くのである。妄言多謝。（非賣品）（大山）

飛驒考古學會々報（飛驒考古學會發行）

本誌は今回結成せられた飛驒考古學會々報第一號にして地方專門雜誌の一つとして生れたもので、菊判三十二頁ほどの小雜誌であるが、內容は頗る豐富にして、力作を以つて埋められてあるのは心強い。福田夕咲氏の「人面石」發掘調査報告、單石「黑岩」に就いての論說及び江馬修氏の「大八賀村上野垣內に於ける石器時代の巨石構築」なる力作は一讀に價するものであらう。會報は必要に應じて發行する由にて現今不定期とみなければならないのは甚だ遺憾である。（會費月額三十錢入會申込みは、飛驒高山町左京町江馬方飛驒考古學會事務所）（池上）

鯨骨を出土せる石器時代遺跡

池上啓介

我國石器時代遺蹟特に貝塚から鯨骨を出土する例が可成りに多い。當時に於ける生物群並に漁撈方法の一端を考定する一資料であり、又當時にありて、鯨骨を材料とする骨製具をも出土してゐる。特に面白く見らるゝのは、今日奥深く陸地內にある、東京灣內の諸貝塚或は霞浦等に發見せらるゝことで、鯨が灣內深く入り込んでくることも、入り込めるだけの深さがなくてはならない。又發見地數も多いことであるから、死骸の遺骨を採集したとも思はれない。何等かの方法を以て、捕獲したものとすれば、其捕獲方法も將來に遺された研究課題である。今回は本研究所々藏のもの丶出土遺蹟を例擧して取り敢へず研究の端緒とする。

北海道北見國網走町モヨリ　貝塚
北海道　釧路テンネル　貝塚
青森縣三戶郡是川村　一王寺
同　中居
宮城縣牡鹿郡稻井村　沼津　貝塚
茨城縣行方郡麻生町　大宮臺　貝塚
同　稻敷郡古渡村飯出廣畑　貝塚
同　安中村馬掛陸平　貝塚
千葉縣香取郡良文村貝塚　貝塚
同　東葛飾郡明村上本鄉　貝塚
同　塚田村前貝塚　貝塚
同　梅鄉村山崎　貝塚
埼玉縣南埼玉郡豐春村花積　貝塚
同　柏崎村眞福寺　貝塚
神奈川縣橫濱市靑木町三ツ澤　貝塚
愛知縣渥美郡福江町保美平城　貝塚
鹿兒嶋縣日置郡市來町西市來川上貝塚

みな爪形の構圖と、圓狀を成す文様の配列が面白いと思ふ。

二　同國津久井郡内郷村追加資料

前報で二三の提示をしたが、改めて追加して置きたい。石器類に關しては他日に讓る。4・5・6は同村關口出土、7・8は同村、若柳は增原土出である。此等に對する附隨的説明は、斯うした小編では成し得ないが、次の如き一般的概説は許されると信じて居る。卽ち相摸川溪谷を一單位とする厚手式文化圏は、同質内包に含有され溪谷の上流と下流との地域に、甚しき差異を認められないのである。私の視察が一つの抽象論であつて、嚴密な科學性に立脚して居ないとしても、甲信山嶽地帶より本溪谷に一つの文化線を畫く事は、否定出來ないと思ふ。斯うした意味から、相摸川の中流地帶たる一域の遺物を次に紹介しよう。

三　同國中郡比々多村三ノ宮宮上

此に就いても旣に前報で觸れたし、學界に於ける余りにも知名の士を迎へた地である。圖10は宮上出土の厚手土器片である赤褐色を呈し、隆起波狀の描出と、紐帶とが畫れて居る。玆で私が愚論をふりまくより、賢名なる讀者の推察に委したい。

四　同國三戸の石棒其他

昨夏桑山龍進氏の此方面研究旅行の收獲であつて、掲載した第二圖は、共に氏の私に惠贈された寫眞である。厚い友情に此紙面を通じ感謝し、合せて報告を許された氏の厚意に敬意を捧げたい。

相摸三戸は赤星氏の報告以來、學界に喧傳されて居る。寫眞に示された石棒石製品は、俗稱稲荷ボコラと稱する一小祠に祭られた共である。私の樣な專門外のものが、とやかく論ずる事は避けなければならないが、民間崇拜の一提示として、重要なる價値性をもつて居ると信じて居る。

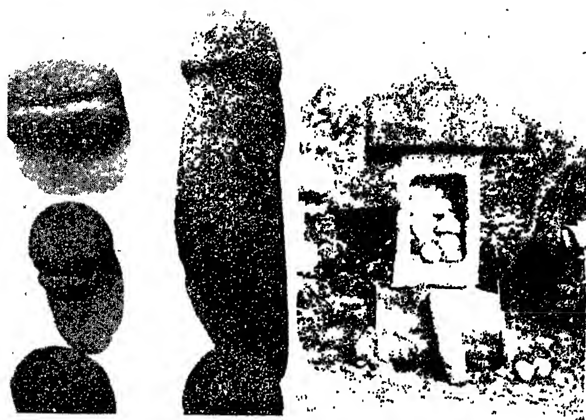
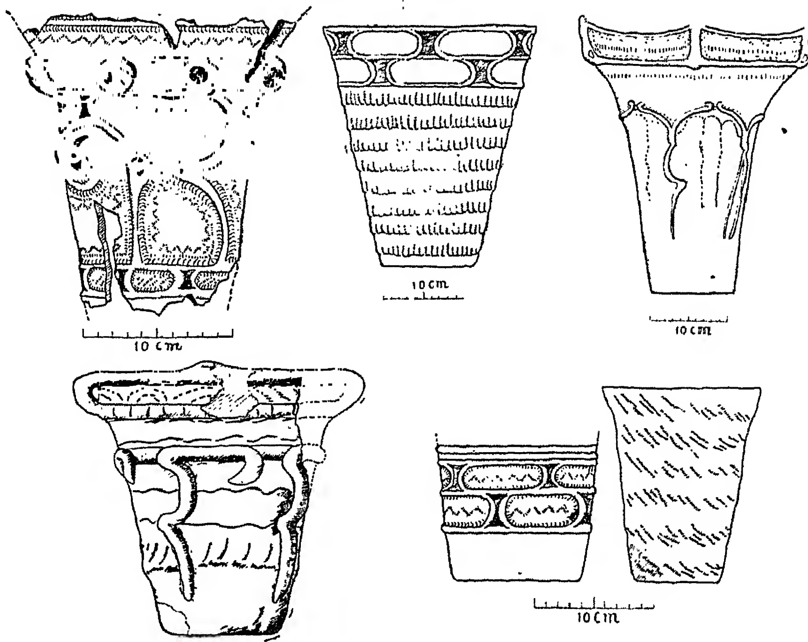


Fig. 2

（昭和八、一、五）

刀)、骨角器(骨角、釣針)、玉類(棗玉、勾玉)、魚獸骨、等。



續考古雜録

松下胤信

一　相摸國吉井貝塚及江戸坂貝塚土器片

神奈川縣浦賀町吉井貝塚及久比里江戸坂貝塚は、學界周知の

Fig. 1

遺跡であるが、最近畏友桑山龍進氏より與へられた資料の紹介を兼ね、一二の報告をしたいと思ふ。圖1・2は共に吉井貝塚で、擬爪形大の配列に吾々の注意を惹く。3は江戸坂貝塚。巧

同	北足立郡木崎村北袋		土器、打石斧
同	北足立郡木崎村上木崎		土器
同	北足立郡片柳村中川八幡耕地貝塚		土器、打石斧、磨石斧
同	北足立郡原市町陣屋		土器
下總	東葛飾郡柏町テンヨシ貝塚		土器、打石斧、磨石斧、石皿、凹石、圓石
同	東葛飾郡柏町豐四季字道灌堀		土器、圓石
同	東葛飾郡柏町豐四季字篠原貝塚		土器、輕石製浮
同	東葛飾郡風早村大井字新船渡		土器、石斧、石鏃
同	東葛飾郡手賀村岩井貝塚	○	土製耳飾、凹石
同	東葛飾郡流山町三輪野山貝塚	○	土器、半磨石斧
同	結城郡大花羽村大輪字築地	○	石劔、小玉
同	結城郡菅原村大生郷字馬場東		土器
同	北相馬郡布川町山王臺		土器
同	北相馬郡文村早尾字塙貝塚		土器
同	北相馬郡文村太平大平神社附近		土器、凹石
同	北相馬郡文間村立木字上臺		土器、叩石

同（遺物）

相摸江戸坂貝塚の土器資料

赤星直忠

神奈川縣三浦郡浦賀町久比里なる江戸坂貝塚の土器資料中破片をつぎ合せて復原し得たもの數個を左に示す。本貝塚は諸先輩に依つて度々調査されたが故榊原政職氏の報告が大正十年に考古學雜誌上に出てゐる。當時から自分もしば〳〵これを訪うて資料を得てゐるが尚それをまとめる機會を得ない。本貝塚出土土器の種類は諸磯式、阿玉臺式、加曾利E式、加曾利退化式、堀之內式等があり表土中には須惠器もある。諸磯式、阿玉臺式は貝層下より出、其他は貝層中より出るらしい。しかし自分は尚充分な發掘を經てゐないからこの點は他日にゆづることとする。こゝに示すものは故榊原氏發掘の地點の北方十數米の地點で地表下一米程のところである。筆のついでに今までに本貝塚出土の遺物を列記して置かう。土器（繩紋式土器、須惠器）石器（磨石斧、打石斧、凹石、敲石、石杵、石鏃、石槍、石小

史前學雜誌　第五卷　第三號

資　料

縄紋式系統（遺跡）
武藏及下總に於ける石器時代遺跡遺物發見地追加錄

簡野　啓

二十五六年前二條家の銅駝坊陳列館に居た頃の、史前學界を回顧すれば、當時では遺物の探集も多くは、趣味的蒐集と云ふに止まり、之れが研究發表等も學術的と云ふより寧ろ、發見された遺物の單なる報告と云ふ域を脫せず、頗る幼稚なものであつて、今日の如く科學的にあらゆる方面から、檢討精査されて發表される所の、研究報告に接する時、私は隔世の感に打たれる程、斯學に對する研究態度の、進步發達して居るのに驚くのである、從つて二十年近くも內地に於ける考古界と絕緣して居た、返り新參の私には未だ斯界の資料として發表する程の、材料と智識を持たぬのであるから、茲には貧弱ながら昨冬來踏査の上、新たに發見した所の石器時代遺物並に第五版日本石器時代地名表所載の遺跡に於ける、未發表の遺物にして親しく採集又は實見せるものを地名表本の形式に倣つて左に報告したい。

（地名下部の〇印は第五版地名表所載の遺跡）

遺跡	遺物
東京市本鄕區動坂町　〇	曲玉
同　下谷區上野博物館ト兩大師ノ間	打石斧
同　小石川區指ケ谷町　〇	磨石斧
武藏國北豐島郡赤塚村上赤塚字出石	土器、打石斧、蜂巢石
同　南多摩郡多摩村連光寺八幡祠附近	土器、打石斧
同　南埼玉郡和土村木曾良貝塚　〇	石鏃、凹石
同　南埼玉郡黑濱村黑濱炭釜屋敷貝塚　〇	土器、打石斧、磨石斧、凹石
同　南埼玉郡慈恩寺村古ケ場服部山貝塚	土器、打石斧
同　北足立郡芝村小谷場貝殼坂貝塚〇	土器、土版、石鏃
同　北足立郡與野町上峯諏訪祠附近	土器、打石斧、叩石、彌生式土器

器よりも強く外曲して片鐵刄の石器を發掘し剰へその機能が植物繊維を切斷する上に於て効果顯著なことを知つて驚いたことがある。卽ち發掘した該石器を附近の農家の椽に置いて休んでゐたら傍で下駄鼻緒を結んでゐた若者が、私の知らぬ間にそれを取つて痲緒を一挽きで切り、その切れ味に驚きの叫びを擧げたのであつた。又敎室で雜履の鼻緒を結んでゐる學生へナイフがないと云ふので同じその石器を貸して驚かしたことがある。全く黎明期の金屬器では到底望み得ないと思ふ切れ味である。

最後に石小刀の刄と、その石小刀全體の形狀、例へば有柄・無柄・縱型・橫型や又力を入れるため特に設けられたか、或は自然のものを利用したソケット、掌や指腹を損はぬ樣に留意して利用し殘した自然の平滑面などの關係は頗る密接且つ重要であるが、その說明に就いては他日機會を得て發表し度い心組である故、本稿では主に刄の部分のみに就いて述べ擱筆する次第である。

ブラックチエンバー

先頃止むを得ない必要があつて露文の調査報告を入手した。勿論皆目讀めない。僅少な石器、土器等の挿圖があつて、報告には間違がない。さて讀みたいが、今からアー・ベー・ウエー・ゲーの泥繩では間に合はない。それならと、思い付いたのが、ブラックチエンバー。先づ序論と覺しき最初の二三項をやつて行くと、解讀第一節の文字が出てゝき、續いて第二節以降二三が出來た。そこに丁度幸にも外語の露語出身の者が、來合せたから、讀んでもらつたら、第一節は「石」であつた。第二節に「土器」「時代」等が出てきた。こうして行くと、立派には讀めなくとも、或るヒントだけは出てくることを體驗した。勿論これを根氣よく續けることもなく、其時は皆んな讀んでもらつたが、兎に角、窮作ではあるが、狙いがついた。

（大山）（八・五・三〇）

これに依るとグラトア・カレネ型の鑢刃を片面周圍に有する、圓盤石の用途が判然する樣に思はれてならない。卽ち遺跡から出た木椀の如き物の內面が、この石器に依つて根氣よく鑢かけられたものではないかと考へられるのである。彼の埃及古代石製壺內部が砂で擴げられた樣に、その柾目の木器內部は刃ワタリの圓に近い片面鑢刃の道具で耗り擴げられたものではなかつたか。且つ又この石器は被加工品の外面の整理、仕上げに今日の細工師の紙鑢を使用すると同じ意味に効果あつたに違ないと思ふ。

　次に私が撰んだ四種の石小刀の刃の能力を試驗した結果を揭載してみんに、(イ)相當銳利な金屬ナイフで四十秒を要する幅五分五厘厚さ四分の、乾燥した杉柾を切斷するに、硅質岩の

一、外曲兩平面刃　一分　多少刃こぼれず。
二、內曲兩鑢刃　一分　刃こぼれなし。
三、外曲片鑢刃　五分を經過しても切れず斜行す。
四、內曲兩平面刃　一分二十秒。

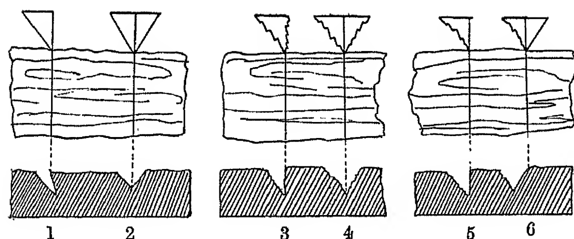
(ロ)銳利な金屬ナイフで十五秒を要する、徑二分八厘、身の厚さ八厘五毛の乾燥した竹管を切斷するに、石質同一着刃も同樣の石小刀では

一、三十秒　多少刃こぼれあり。
二、一分　刃こぼれなし。
三、一分二十秒　刃こぼれなし。
四、一分三十五秒　多少刃こぼれあり。

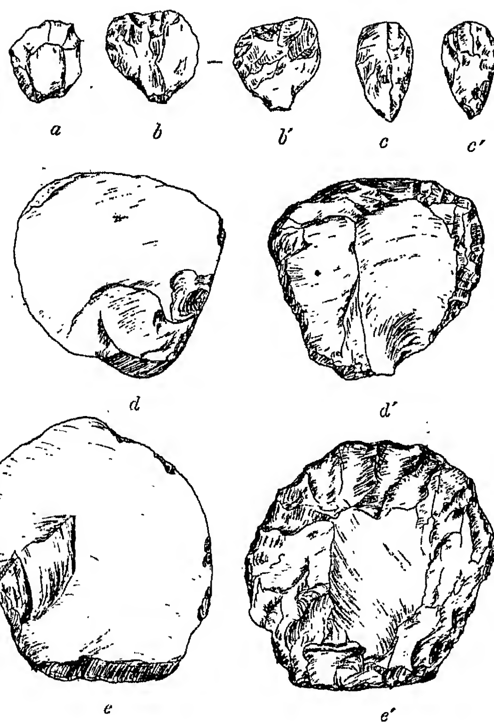
　右に依ると外曲兩平面刃は最も時間を要せぬようであるが、然も平面刃の性質上太い材料或は厚い物に對しては或る深さまで達すればそれ以上に進めることは絕對不可能となる。且つそれを動かす手を少しでも左右に搖れさす樣なことがあれば忽ち先が折れて刃こぼれを生ずる。その點に於て片面或は兩面鑢刃のものは、鑢の樣に、鋸の樣に何處までも深く進めることが出來而も殆んど刃こぼれのしない點に於て遙かに有効である。又刃ワタリに就いてみても平面の被加工品へは內曲のもの、丸味を帶びた物には外曲刃が都合よい。猶ほ有刃石器は斯かる形狀、斯かる刃を有するが故に斯かる材料の加工に都合良いと云ふより寧ろ逆に斯かる刃を有する物で加工しなければ都合惡いと云ふ心持で用意されたものと思ふ。草木土石の外に皮・肉・骨・齒・角其他の被加工品が想像され得るのであるが、夫々への加工に都合良かつた石小刀が遺物の有刃石器の中から見出される筈である。埃及古代壁畫に見る割禮用の石小刀も、現在中央オーストレリア土人の使用してゐる割禮の石小刀も、內曲刃なる點で一致してゐるは興味あることである。又同じ埃及古代壁畫の植物を刈る人物の手にせる鋸刃石齒を植ゑた鎌に就いて Pfeiffer 氏は共著に日本の石器の例まで擧げてあるが、私は曾てその石

竹篦では到底望み得ないことである。この擦消の方法を私は素燒面に、此の丸刄で試みて非常に工合よいことを知つた。

機能　所謂「細かく打・削・剝・裂取られた刄」が鑢の作用をするものであることは先に述べた通りであるが、其心持で觀察すると從來有刄石器に對して與へられた名稱の當らないと思ふ物が非常に多い樣である。石屑或は未製品として棄てゝ顧みられなかつた物に、その使用目的に於て頗る優品と見る可き物は勿論、皮剝きと云ふ名稱を負ひ乍ら皮を剝くに不適當な刄や形を有する物、又石鏃と稱されてゐる物が案外、石皿・石棒などの鑿形に必要な突欠石であつたり、或は有孔被加工品の孔を擴張する鑢棒であつたり、石鏃と認めて何人も疑はなかつた物が、纖細な加工に必要な優秀な石小刀であつたりする。殊に遺跡から發掘される木製品材料に柾目のものゝ多いことは宛も石器製作に一律に欠けてゆくフリント質の原料石が撰まれると同様に、鑢目が常に任意の方向に正しく進むことを知つてゐたことを物語ると思ふ。第五圖は刄の進み行く方向の實驗圖であるが



Fig, 5　刄ノ進ム方向
1. 2. 兩　平　面　刄
3. 4, 兩　　鑢　　刄
5. 6. 片鑢刄(或ハ片平面刄)

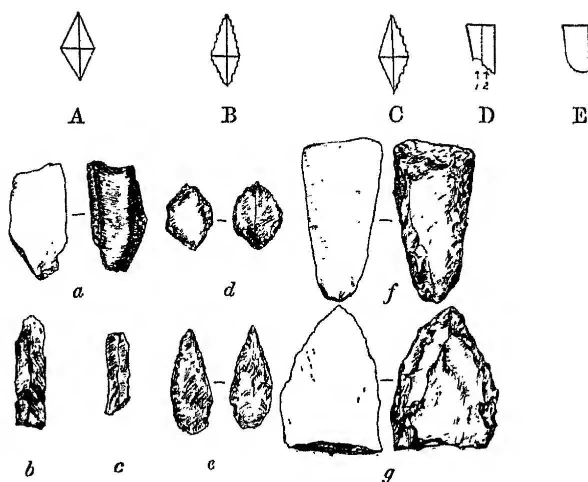


Fig, 6　圓盤形鑢刄
a. (羽後、カンバ澤)
b. (陸前、金剛寺)
c. (羽後、　椿　)
d. (羽後、熊　堂)
e. (同　　　上)

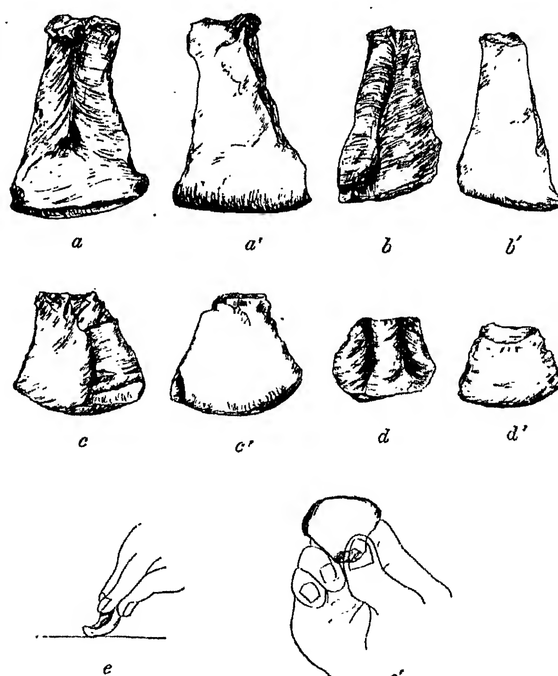
特　例

(イ)二段刃　これが普通の一枚だけの厚さの刃に比較して、堅牢なことは言を俟たない。(第三圖D)第一段目を大きく欠いて第二段を更に細かく鑢刃としたもので、常に一定の方向に搔き寄せる使用性を持つ凹抉搔刀の刃に、この構造を見るは理の當然である。

(ロ)丸刃　第一圖Cの内曲刃を目して、丸刃と稱する人もあるが、刃ワタリの名稱とその鋭利性の名稱とは、自ら區別す可き



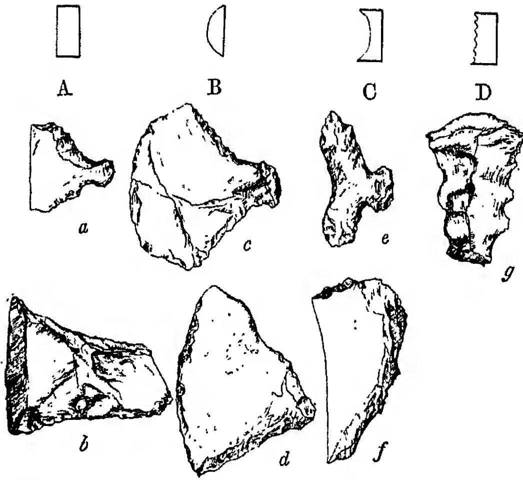
Fig, 3　着刃位置及び實例



Fig, 4　丸刃(附、使用法)
a. 羽　後、若　神　子
b. 羽　後、水　尻　澤
c. 羽　後、若　神　子
d. 羽　後、檀　ノ　上
e. e, (d) ノ　使　用　法

ものと思ふ。丸刃と云へば當然ナイフなどを研ぎ損つて丸刃にしてしまつたと云ふ様な場合で、刃の鋭利性を失ひ刃先の捲くれ上つた場合を指す可きものである。此の場合も矢張りその種の刃を意味する。然し石小刀の丸刃と云ふことは頗る不自然である故寧ろ Ruffer と稱する方が妥當かも知れない。形式に柄の長いものと殆んど無柄に近いものと二種ある。(第三圖E、第四圖)皮毛の内面を平滑にする時、或は土器燒成後の艶出しに使用されたものと思ふ。殊に後者の場合、燒成前ならいざ知らず

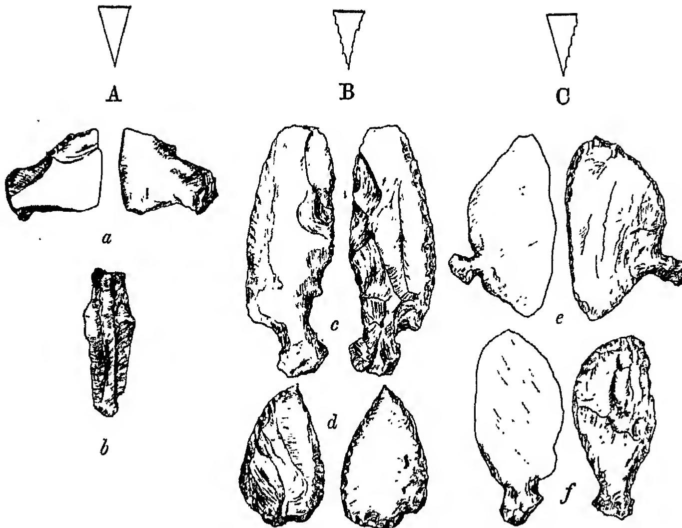
に依つて得る刄と、及び兩刄兼有のものとの三通ある。（第二圖上段）但し右の『數回の加工に依つて得る刄』は、その作成方法に依つて、打欠刄・側刄・剝刄・裂刄或はそれ等の組合せの名稱例へば打剝刄・打裂刄などの名稱を與へることが出來るであらうが、然もそれ等はどれも構成の手段方法に與へられたもの



Fig, 1 刄ワタリ及び實例

A	直線刄	a. b.	羽後郷ノ八卦
B	外曲刄	c. d.	羽後雲然
C	内曲刄	e. f.	羽後川三市
D	鋸刄	g.	羽後若神子

でその刄の使用目的或は作用に附與された名稱ではない。私は種々の方法の實驗に依つて、其の類の刄が全く物を擦り減らす役目、即ち鑢の作用をするため作られたものであることを知る故に、特に鑢刄と呼稱してゐる。それに依つて第二圖Aを兩平面刄・Bを兩鑢刄・Cを片鑢刄或は片平面刄と稱する所以である。この類の刄の實例を示すと、第二圖の樣なものがある。



Fig, 2 着刄及び實例

A	兩平面刄	a	羽後、城廻	b	羽後、水尻澤
B	兩鑢刄	c	羽後、日三市	d	羽後、武藏野
C	片鑢刄	e	羽後、潟尻	f	羽後、若神子

着刄位置　前條の着刄は、その位置に依つて更に三通に區別し得る。（第三圖上段）實例としては、第三圖の如きものを擧げることが出來る。

石小刀の刄に就いて

武藤鐵城

最近石器時代遺蹟から各種植物性被加工品の出土したことは、同時に人々をして遺物のうちから金屬器を探索せしむる傾向を生ぜしめたかの觀がある。我國繩紋式石器時代の隆盛期或はその衰退期に、既に鐵器の使用が一部に始まつてゐたと想像することは頗る自然である。然しそれが若し遺物中に金屬利器なくしては到底加工し得ない物が存在する故、當時必然的に金屬器が存在したと考へることは如何と思ふ。何故ならば私共は其等の遺物が果して石器の持つ刄では加工し得ないものであるか、換言すれば石器にそれだけの細工をする機能がないものであるか否かを充分吟味する必要があるからである。剩へ金屬器出現以前に、其等と同じ被加工品が存在しなかつたか、又若し存在しても金屬器に依つた程仕上げが纎細でなく、又美麗でなかつただけであつたかも考慮しなければならない。とにかく一部石器時代遺跡から鐵の勾玉乃至は、鐵製利器の出たことは嚴然たる事實の樣ではあるが、然し何もかも精巧な細工をした物は金屬器に依つたと解釋する前に、一應石器の持つ刄の構造機能を顧みる必要があるではないだらうか。

本稿に於て私は先づ所謂有刄石器中細工小刀とも稱す可き小刀の刄に就いて述べてみ度いと思ふ。

刄ワタリ　これは大體四種類を數へることが出來る。即ち直線・内曲・外曲及び鋸の四刄である。（第一圖上段）實際の遺物例に依れば第一圖の如きものであるが、外曲刄と鋸刄は近緣で、彼の編物材料或は矢柄などを圓滑にするため搔いたと思はれるラーム・エトラングレー型の凹抉搔刀の刄ワタリもこの類に入る可きものである。つまり凹抉搔刀の持つ外曲刄の連續が鋸刄を形成する。

着刄　次に刄の構成を見るに、バルヴのストライキング・プラツトフオームを一回の打撃で得る平面刄と數回の細かい加工

器認識に對する傍證たり得るし、釣魚其の他漁法との比較研究を行ふ必要もあるから、中々容易には、本器對象の魚類等は探究し得られないとしても、漸次これに向ふ可きことゝ考へる。切角此の様な刺突漁具を有したことが解つても、本文の如く單に其存在を報ずるに止まる様では、內容が貧弱に過ぎる。私も今後研究を進めるが、諸賢に於ても、着眼を怠らないで戴き度い。特に我國石器時代の漁撈の如きは、資料豐富なるに拘はらず、單に貝塚の名のみが世界的であつて、其內容研究が果して充實して居るのか、省みたいものがあり、名實これに伴はない様にも思はれる。それには獨り本器の様な、刺突漁具の研究に止まらず、漁撈全般に向つて研究せねばならないことは、勿論ではあるが、今回は單に本様式の存在を報ずる機會に、史前文化研究上、特に我國としては、研究せねばならないことを併せ述べて、末葉ではあるが將來漁撈研究の一動火線にでもと思ふ心持ちで、かく草したものである。（昭、八、四、九、記）

掛値

吾人等が眞面目に研究して居る石器時代の遺物も、不幸にして往々骨董屋の手に渡り、全く一骨董品として取り扱はれて居る。これも數多い出土遺物中若干のものが流出するのは、已むを得ないことではあるが、むざ〳〵出所も不明となり、學的對象物が其對象として存す可きに存せずして、店頭の一隅に飾らるゝことは、をしむ可きことである。それのみならまだよいが、時々法外な掛値には、全く一驚する。或る地方から出土した土器には、驚く勿れ、一個の價金三千圓也とか聞いた。勿論これが實賣價？を漏れ聞いた所では、其百分の一か二とかのことで、支那の骨董屋さんの掛値よりも大きい。又或る店では石器一組を數百圓と號するとかとも聞いて居る。これが吾人等の耳目に入つた時、學に對する悲哀を感ずると共に聊か義憤をも催さゞるを得ない。最初から賣買をのみ目的として、發掘するものがあるとかの話もあり、誠に遺憾であると共に、こんなものには、何等か制裁の方法が無いものだらうか。特に外國へ賣り出す如きは、更に云ふを要せない。これ等も元々石器時代の遺物中には、所謂骨董價値とも云ふべき或るものが存するから、これより生ずる一現象とも考へられ、吾人等これを對象として研究して居るものは、此の點に就ても、一顧して置く必要があり、不心得な人々と間違はれない様に取り扱ふ可きことゝ考へる。（XYZ）

これ等の一部が或は、この副銛として利用せらるゝのではないかと、思はれもするが、何分にも確證を得て居らない故、積極的には申し得ない。

さてそれなら、何に用達つものかと云へば、申す迄もなく、刺突漁撈具と認むるに躊躇しない。特に東北地方の所謂龜岡式土器を出土する貝塚の多くよりは、各種の漁撈具の出土を見、單に本器を含む刺突漁撈具に於ても單なる尖頭器、夫々多種の様式を有し、且つ精良な有齒有拘骨銛の外、所謂燕尾骨銛と稱せらるゝ脱落式の骨銛まで存在する樣な發育した漁撈生活に於ては、夫々分業分課を見て居る以上、本器の如き様式を、その中に一分課として加へても、肯て異とするには足らない。發育した漁者たる當時の住民等は、恐らく日々の體驗から、其漁獲對象の魚類等の習性を知悉した結果、夫々に適應した漁具を考出したに由るものでもあらうし、又一部には漁者各個の個性に基く得手もあつたであらうから、かく色々の様式も生れたものと考へる。其一つの現れが、本器として生れ出でたものではあるまいか。

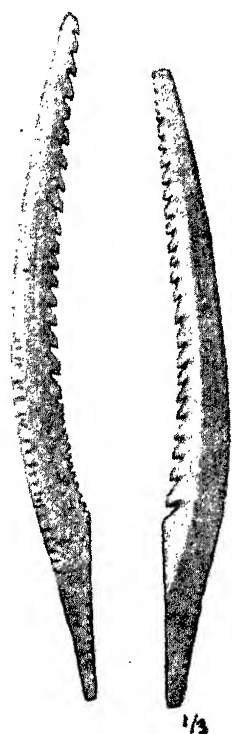


Fig. 3. スエーデン雙頭骨銛
(nach O. Montelius)

只とうして研究してくると、更に一歩を進め、本器の如きが、果して如何なる種の魚類等に對し、最も多く使用せられたものかゞ知り度くなる。それには根本問題として研究せねばならない諸條件がある。第一には直接本問題を解決し得るか如何は暫く第二の問題としても、本器出土の貝塚から、果して如何なる魚類骨が出土して居るのかが、先決問題である。勿論沼津貝塚の如きは、獨り本器の樣な刺突漁具に止まらず、多くの釣針も出土し、更に他の漁獲法の有無も併せ考へねばならないから、よし魚類等を檢出したからとて、單純に本器との關係を結合せしむることは出來ない。然しながら、史前民が獲得した以上には、必ず何等かの手段が無くてはならない。それ故魚骨の鑑別は、これ等解決の基礎的意義が存する。話が横道に入る樣であるが、魚骨の多くは、其發掘出土に際し、通常多くが、捨てゝ顧みられない。而して捕獲具のみを搜出するのは、如何にも片手落の樣に考へらるゝ。更に本器の研究としては、今日の現用品及び諸民族例に則り、果して如何なる種類の魚等に使用せらるゝものかを、知るのも、本

のAが、例出した中では最も典形的であり、Bこれに次ぎ、C、DはABより類推せられ得る程度にあり、これ等は曲形少ないから、第一圖Bの様式に近くなる。尚このC、D程度のものなら、この沼津集品中に更に數例を見、且つ他の東北出土中にも容易に見得ることゝ考へる。又廣く、我が國以外の石器時代文化中に、此の如き類例が存するや否やを調べた所、漸くスエーデン出土の有歯骨銛（Fishgabel）中に、其一例を發見したが、（第三圖）勿論甚だ稀なもので、他には未だ見出しては居らない。

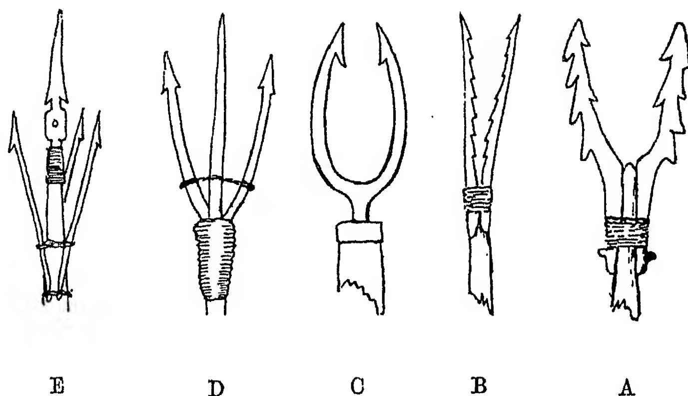


Fig. 1. 各種骨銛樣式例
A. 雙頭銛復原想定
B. エスキモー骨銛
C. 現用鐵銛（著者使用品）
D. 三頭銛（木製） (Nutkasund)
E. 多頭銛（副銛を附したる例）
B. D. E. nach E. Krause, Zeitschr. f. Fischerei. 1914)

こゝに注意を要す可きことは、本例を以て直に雙頭と斷じて居るけれども、果して雙頭に限つたものか、或は更に複雜な構成を有する、二つ以上の頭を組み合せた、多頭骨銛に屬するかに就ては、現物出土を見ないのであるから、明言し得ないが、少なくとも雙頭以上ではあるからかく云ふた次第である。現用未開民俗例を以てすれば、複雜多岐なる諸例を存し、最も簡單なる多頭例としても、三頭例（第一圖D）四頭例（同E）の如きがある。特にEの如きは、主銛と副銛とに分れ、副銛としては小形單拘の如きがある。石器時代遺物中にも、小形骨銛を見、

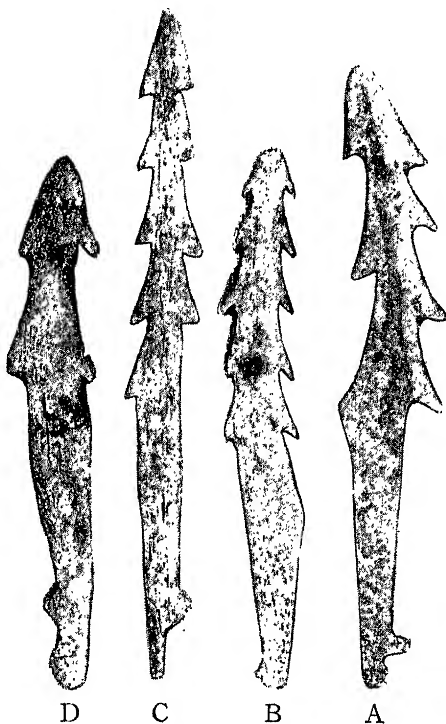


Fig. 2. 沼津貝塚出土雙頭銛

雙頭有拘骨銛

大山柏

普遍的な有拘骨銛 (Harpun) は、我が縄紋式文化特に東北地方より多出することは、周知の事實で何んの目新しきこともなく、且つ古くより知られても居る。處がこれ等豐富な研究資料がありながら、一向にこれ等の細部研究がない。然しながら、これを調べて行くと、形態學的に色々な様式も存し、多分の研究内容を藏して居る。今これが總てに亙つて開陳するには、餘りに尨大に失する故、其内の特異の一例として、從來殆んど氣付かれて居らなかつた、雙頭を有する有拘骨銛の存在を報じ、これ等研究の端緒を造つて置く。

この私の雙頭有拘骨銛 (Fischgabel mit Wiederhaken) と稱するものは、二個の有拘骨銛を叉狀に組み合せた様式の銛を指す（第一圖A）のであつて、丁度洋食のフヲーク (Gabel) 狀をなすもので、此の如き様式を備ふる類例は、未開民族にも幾多を見、（第一圖B）これが鐵製のものは、今日我が國現用品中にも多數を存し、（第一圖C）決して珍奇な様式ではない。銛としては寧ろ普遍化せる一様式と見る可きものではあるが、これが文化上、遡つて新石時代にも、存在することが價値づけらるるのである。又本名の如く長々と云はないで叉とでも云へるかも知れないが、有拘骨銛の一變形とも見らるゝから、これと連關上、この稱呼を採用した。

茲に本様式例として揭出したのは、何れも宮城縣沼津貝塚出土、遠藤、毛利兩氏の發掘所藏に掛るもので、先年展覽會に出品せられたのを、御預りした際氣付いたのである。最初有拘骨銛の中で、普遍化せる直軸類以外に、斜軸や曲軸のものが無いかと、捜索した際、計らずも發見したもので、其内でも最も大きく曲形を取り、其内側と認めらるゝ部分を垂直にして見ると、有拘部が外曲し且つ尾端の着装を堅確にする爲に突起したものをこれを装着突起と云ひ亦外側にもある。（第二圖A）即ちこ

は、現在も所々にある川の名殘の谷地で說明さるべく又檜木內川の東に走つた時代のあることは、西明寺村堂村の知形、上荒井（上洗ひならん）小滑野などゝ稱する地名、並にそれ等の道筋から掘あげられる花崗岩質の石礫により大體推斷出來るのであつた。然るに最近富木家で企劃した山葵畑の掘上工事において、圖らずも刎ケ臺遺跡の底を形成する石礫層が遺憾なく暴露されたのであるが、そのうちは明かに綠泥岩質の玉川石礫もあり（先に述べた石斧原料もそれである）黑雲母を多量含有する大石嶽の花崗岩卽ち檜木內川石礫も認め得るのである。然してその石礫層は、勿論中村谷地遺跡と同性質であれば兩者のロームを形成してゐる層が同位にあり、且つ連續してゐることが推斷出來る。今のところ該層の深度は全く不明の程厚いのであり、その範圍も斯く廣汎なところを見ると、到底それが一河のよく形成し得たものでないこと一目瞭然のことである。ロームの一近は兩遺跡の關係を知る上において、又年代を考證する上において一のハンデキヤツプたり得べく、誠に都合よい。なほ私は刎ケ臺遺跡から表面採集（矢張り畑を作る際掘つた土の中から）で、大和民族の製作使用せるといふ陶土器破片を一箇得たことを附言する。

（以上の報告は秋田魁新報に昨年末連載したものを一部訂正增補したのである）。

留守隊長

この頃兵隊さんの友人がきて、盛に滿洲國の調査を勸められた。これに對し、色々の學者が、盛んに同地に活動することを話した上、大切な我內地の研究が、動もすれば閑却せらるゝ有り樣であるから、ガンバるのだと說明するけれども、通じない。やつと思い付いて「留守隊だよ」と云うたら、兵隊さんやつと理解してはくれた樣だが、「なーんだ、留守隊長か！」と。

（〇生・八・五・三〇）

けてその點から繩幅だけ上段を走る樣にし、美的價値を高め樣と努力してあるが、大型土器口邊に押された太繩は一定の間隔を保つて規則正しく平行せしめ寧ろその全體の律から快感を得やうとしてゐる。

第三の粘土紐は圓筒土器に多く見るものであるが、この遺蹟の土器にも多く利用されてある。突起部のものはそれを絡む樣に付けてあり、その上を篦で刻むか或は細繩で刻みをつけてある。又口唇部の外緣と頸部浮紋帶を結んだ泥繩に、如何にも絞く懸けたといふ風に兩繩の間隔を開いて土器の素地を覗かしたものもある。猶この種類のうち突起部に、往々土偶腹部に見る樣な大きな疣を附し、それに竹管を以て蜂巣狀の孔を穿ちその下を圍んで兩側に矢張り竹管連點紋を附した粘土紐をモール式に懸垂したものも見受ける。次に胴部紋樣を見るに唯一例、小型土器にピラミツト形の連續紋あることゝ、無紋土器を除く外は全部繩蓆に懸垂繩紋の應用である。然も簡單な材料ながら、そのうちに變化を望むだらしく種々にそれを取り合せてある。そのうち一は、繩蓆面に頸部から絡らみ繩を二本極接近させ並行を保ち一見一本繩を絡らむだ樣に見せたもの、第二は同じく繩蓆面に、二本の絡らみ繩を廣い間隔で下げたもの、第三、繩蓆面に絡み繩を二本連鎖的に下げ、その中を擦消したもの、第四は第一のものゝ兩繩間を擦消したもの。第五、繩蓆の耳の線を左方に縱行せしめ、それと少し離して右に絡み繩を一本下げてその間を擦消したもの、更に第六のものは羽狀紋の折返し部分を太繩で絡み、兩翼端にその耳を縱行せしめたもの等である。

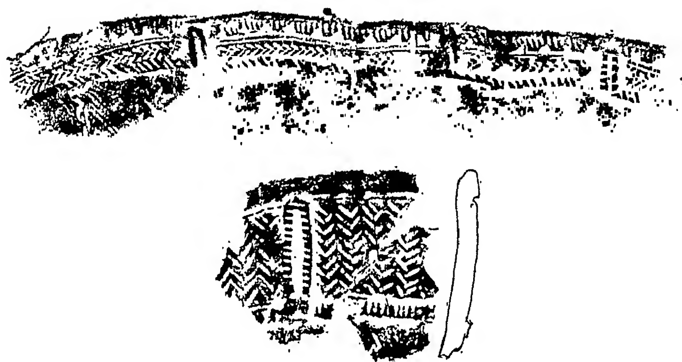
遺跡の全般的考察——をする上において見逃すことの出來ないのは該地點から南、縣道を越して約二百五十米ばかり隔つた中村谷地遺跡である。その名の如く谷地であつたものを富木家で、昭和二年に開墾事業進行中、土石器が數多出たこと、同家のアツ子孃から教示され踏査することが出來たがそこは刎ケ臺とは相違して全く龜ケ岡式系統の土器を出す遺跡であつて、剩さへ龜ケ岡式土器のうちでもその衰退期の所産とされてゐる工字紋、或は工字紋がかつてゐる土器ばかりを出すのである。そして全面が篦磨きで、繩蓆を素地としたものは甚だ少い。必然使用粘土も刎ケ臺の場合のやうに、砂或は小石を含まず全くの青粘土の燒成である。その粘土がその遺跡の西方に豐富に存在することは合せて考慮すべきと思ふ。兩遺跡は僅か隔てゝそのやうに全然別系統の土器を出すことは勿論更に地形、地質の變化と遺跡編年調査上研究價値あるものと思ふ。秋田鑛山專門學校の大橋教授の御說によると、曾て田澤湖で抱きあつたことのある檜木内川と玉川の兩川は、その後この地點でも合流したことがあるといふ。玉川がその邊によつて流れた時代のあること

果して有双石器のよくなし得る仕事であるか。一部學者の説の樣に、圓筒土器使用當時一方に高級文化の存在が思はしめられる。なほ長谷部博士が嘗て圓筒土器遺蹟に特有であるかといはれた、石冠形自然石も一箇出たがこの遺蹟では、そうした證左を見出し得なかつた。

土器――本遺蹟出土の土器は全く圓筒系統で、龜ケ岡式のものは一箇も混じてない伴出土器は厚手式の色彩が濃い。

土質は赤粘土へ故意に大粒の砂礫を打ち込んである。大形土器の口邊約五分位の厚さの、表裏へ顔を出してゐる樣な石塊まで混じつてゐた形態は壺形は殆んどなく、若し多少似通ふたものがあつても大きく口を開いてゐる。一體に小型圓筒とも稱すべき深鉢が多い。そして陸奥式のものより厚味なことは勿論、底部は殆んど全部厚い水平底で甚だしきに至つては平直底梯平形のものさへある。

紋樣について見るに口唇部は大概無裝でその外側へ粘土を打紐狀に附着けて厚く見せるか、或はその下の紋樣面を心持低く見せる樣膨らみを附けたものが多い。頸部には定まつた樣に浮紋帶を高く廻し、それに篦で刻目、或は繩で連點紋を附けてあることは諸磯土器に類似點を多く見出す。口緣部紋は大體土器面へ直ちに描きつけたもの、或は押付けたもの、更に粘土紐を付けその上に刻みを付け又は繩紋を附したもの〻三種に區別することが出來る。更にこれを詳述すると第一のものは、竹篦柄頭で上から下へ網代に波紋を描いて並列し、或はその紋を横行させたものと、彼の諸磯式土器の特徴である節足紋を描くに使用したと同じ割竹の二股を節足とすることなしに引つ張り廻して蒲鉾型浮紋を表現したものである。後者は口唇部直下と頸部に平行して、同じ道具を以て浮紋か或は單に一本の波線を描き、その間に宛も簾を立てたる如く矢張りその二股竹を以て、縱に浮紋を並列したもので所謂素麵充塡紋である。そして更にその上に、道具の性質上稍硬化した波狀線を一筋廻してある。



第二は實體紋で繩紋（繩蓆紋とは別）である。小さい土器には小さいなりに細繩を使用してあるが大型土器には、徑三分五厘位の太繩まで使用してある。細繩のものは比較的疎らに横行させ、途中二三度よりをか

から出た。この頃は砂層を通して水の浸入甚だしく、排水も急はしく發掘は非常に困難であつた。そうして水溜から殆んど二尺と隔たらぬところまで達した時、植物性層の直下に大型土器の口邊を見出したが掘り出して見ると大體口邊を北に開き底部を南下にして傾いてゐる圓筒土器であつた。その附近では他に別々の土器の碎けた破片が數個出た。それからは水中の發掘を覺悟で水際から逆に西に接續した部分を掘つてみた。ところが僅か五、六寸も進まないうち黑土と植物性層の間に稍長い自然石があつてその上に小型の深鉢型土器が据えられてあり、それと殆んど接して奥に小型圓筒土器が伏せてあつた。然るに兩土器はあまり淺く埋藏してあつたので耕作の際、前者は口邊を、後者は底部を鍬先に削り取られてあつた。外に石の下に粗雜な石小刀、又その傍に無數の小形土器破片を認め更に西に少し離れて同じ層に優秀な石小刀を得た。それから又少し進んだが全く遺物の混在なく、發掘はそれで中止した。

以上によりこの地點の南北縱斷面を作つて見るならば、まづ層全體が北に傾いてゐることがわかる。

遺物も大體その傾斜の角度に隨つて埋藏してゐた。然しその方向に垂直の線上、石の上に置かれ又意識的に伏せられた土器があり、又或は傾斜の方向に倒れた土器があり、更に北の低い方に別々の土器の破片のたまつてゐた事實はその北端が最近まで水を湛へてゐた沼地に續いてゐる事實と相俟つて高い部分は現在掘下げられてある水溜の部分を含めて、當時の住居地の續きであつたことを物語るやうである。

石製品――について見るに、石片を剝取したバルプをはじめ石鏃があり、又左利き、或は右利きの石小刀が多くある。後者は直線刄、片刄打痕、兩打痕刄とあり型式も樣々である。又丸形叩潰石や磨潰平石は普通の遺跡の樣に相當量出た。しかし外に橫形叩潰石ともいふべき物の出土は、この種遺蹟の遺物として注目すべきものと思ふ。それには鋭刄と鈍刄と二樣ある。發火石も出てゐるが、これは形狀から判斷して掌に握つて棒の上を抑えたものらしい。叩潰石の臺石のうち、山葵畑附近から出た偉大な平石がある。（富木家藏）石皿の代用もしたことはいふまでもない。磨製石斧は二個出土してゐるが、いづれも挽劍痕を示してゐるは面白い。共に石質綠泥岩の美麗なものである。一個は兩側から挽割をしたが、あまり早い目に折らうとしたため失敗してかたちを損じたものである。他の一は山葵畑から掘上げた土壤を、道路に敷く時出たもので、長さ七寸、幅一寸四分といふ長大な物である。（富木家藏）裏面には挽き殘した部分恰も凸形の斷面を見せ隆起してゐる。これははじめ朝鮮や樺太邊から出る樣な厚味の物を作つてそれを更に二枚に挽き割つたもので、製作者の根氣には驚歎せざるを得ない。これが

羽後國仙北郡神代村刎ヶ臺遺跡

圓筒土器遺跡

武藤鐵城

遺蹟は角館町から生保内街道を一里ばかり進んだ地點、道路の北側にある。臺とはいふもの丶全く平野の中で一番近い南方、田中山の裾まで五六百米はある。そこら一帶は富木庄氏の開墾地となつてゐるが一部に山葵畑掘下げの際、土石器の出たこと同家の庄二郎君から御教示を受けた。昭和七年六月十九日同家の快諾を得、山葵畑の第二計畫のため掘られた水溜から北側を小發掘したが見込み通り遺物の濃密な部分に當つて、遺蹟の性質を顯明し得たことは嬉しかつた。

層位と包含狀態――を見るに最初一尺ばかりは稻田であつた時攪亂された軟かい黑土で、その下方に薄いところで二寸、厚くて三四寸の水藻、水邊草、樹根などの腐蝕したものが壓されて準泥炭層を形成してゐる。その下一尺位は褐色土で上方は黑土の浸潤を受けて黑ずんでゐる。褐色土に續いて砂層が一尺五六寸あるが、それが黃粘土を含んで非常に粘々する。然してその底ロームは全くの石礫層で舊河床の推積物である。隣の山葵畑は六尺以上も掘り下げてゐるのに、依然として石礫の盡きないところを見ると、どこまでそれが續いてゐるものか今のところ判斷は出來ない。

當初遺物は多く砂層の石礫層に近い邊から出た。土器破片が最も多く、石鏃、石小刀、石冠形自然石なども出たが南に進むに從つて褐色土にもそれがまじつて出るやうになつた。埋藏狀態は亂雜で別々の土器のものが多く、後で僅かの部分を多くの破片で接合し得たものでも一箇所に纒まつてゐることなく四散してゐたのである。そのうち砂層が次第に高まつて行き遺物の上層に現はれるやうになつたのは、明らかに層が北に傾いてゐることを證明してゐた。石小刀の多くや發火石などもその地點

私は前にも述べた通り、本遺蹟に於けるC類土器の層位的確定は本遺蹟の主體をなすA類、B類土器と他樣式土器との關係を明にする上に非常に重要な問題であり、又大きく所謂茅山式土器究明の上にも必要なる手懸である。それにも不拘、本遺蹟にあつては、そのC類土器が僅少なる爲、私はそれ等の仕事が相當困難である事を思ふものである。

然し、又殘された一つの手懸として、A類、B類土器實體と他樣式土器のそれとの形態學上に於ける相對的觀察による研究法も、又さして至難なる事と思へないのである。まして今日の樣なそれ等土器の資料の增加は益々その感を深くせしめるものである。

又それ等の研究法に於いても、唯C類土器との關係を究明するに止まらず、もつと多種土器とのそれが必要であり、地理的に見ても、更に視野をひろめる必要を痛感するのである。

現在は既に諸研究者により、所謂纎維土器追究の仕事が進められて居るのであるから、それ等私の希望する如き研究の實現の日も必ずや近き日に到來するものと信ずる。よつて今回に於いては唯第一回報告後に於ける資料の報告幷に補正に止める。

最後に再び發掘の御許可を戴いた植草氏及び第一回報告發表に對し種々御叱正を給つた先輩諸兄に感謝の意を表し擱筆する事とする。

（昭和八年端午節句の日）

第四卷　第三・四號
下總飛の臺貝塚調査概報補正表

(一) 二〇頁　上段一八行目「新石斧」を「打石斧」と改む。
(二) 二〇頁　第一圖「遺蹟附近の要目」を「——要圖」を改む。
(三) 二一頁　第三圖を二二頁第四圖を轉置する。
(四) 二一頁　下段一〇行目「遺蹟」を削除する。
(五) 二四頁　下段五行目「第七圖參照」を「第五圖參照」に改む。
(六) 二四頁　第六圖を二九頁第九圖を轉置する。
(七) 二六頁　上段一〇行目「第九一・二・三」を削除する。
(八) 二九頁　上段一一行目「A類土のの」を「A類土器の」に改む。
(九) 二九頁　下段一七行目「何れあれも」を「あれ何れも」に改む。
(十) 三一頁　下段註(一)を削除す。

存しなかつた。此は今回出土した土器に對して、その文化決定によりよき暗示を與へるであらう。

第三圖は所謂B類に當るものであるが、土器の內外面倶に條

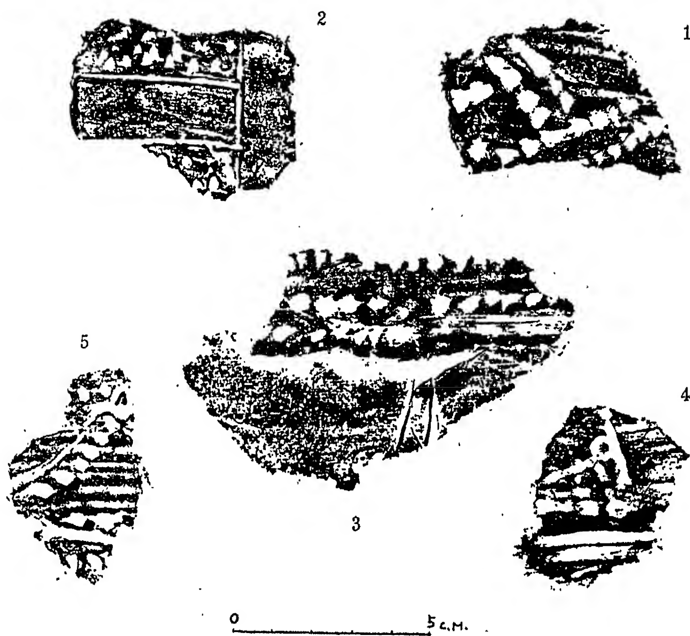


Fig. 2

痕を有さない特長を、いづれも示して居る。本類土器に半裁竹管紋が盛行する事を前期報告に述べて置いたが、今又、同圖(一)の如き好資料を報告する事が出來る。(二)、(三)或ひは(一)の下部に於いても網目紋が見られ、此の種の紋樣が又本類土器に伴ふ事も察せられるのである。然して一般に本類土器に於ける施紋が雄健氣風に富む樣に思はれるのであるが、果して偶然の事であらうか、此は今後、資料の增すにつれ、當然氷解するものと思ふから、此處ではその結論を急がない事とする。

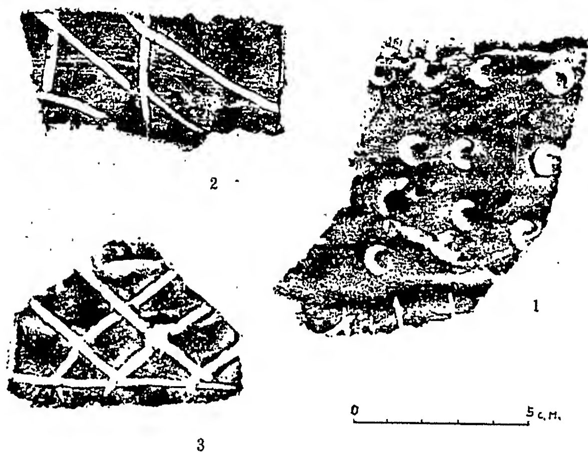


Fig. 3

以上で大體遺物の報告を終るが、前期報告に述べたるA類下層土器に紋樣の少い事は今回の發掘に於いて否定され、それ等はやがて上層土器に到る力强い趣能性を感ぜしめる樣になつた。又A類上層と深い關係があると思はれた、B類土器が既に同類下層と共存する事は又新しい思索を必要とする樣になつた。此等はいづれも本回の發掘に於ける、新しい收獲である。

包含され、又皆同一文化層中に存したとも見られるので、その樣式に、A類、B類の差こそあれそれ等土器は殆ど同一期に於ける所產と見る事を餘儀無くされるのである。又此度出土のA類土器は、前回報告中の下層にあつたものであり、それ等とB類が共存した事は亦新な事實と云はなければならない。

第一圖に示したのは、卽ちA類下層に屬すべきものであり、その完形を想像し得る物として、我々に種々の資料を提供してくれるであらう。

本圖中、(一)、(二)、(三)、(四)悉くその器面に條痕を有する事、又(一)に見られる口邊に押捺文を有する事が本樣式土器の特長である事は、前回に既に述べて於いた所である。尙又、今此等の資料を通觀すると、(一)、(二)、(三)まで紋樣帶を二段にして居る事が明瞭であり、此も亦本樣式土器の一特長として見る新事實であらう。

紋樣は、いづれも木竹の先端による連點紋であるが(一)、(二)、(四)に見られる樣に、その紋樣單元が幾筋もの平行線より成つて居る所からして、此等は竹管と云ふよりも、莖に平行脈のある禾本科の植物によつたものと思考される。

又、その紋樣の構成を見ると(二)、(三)は所謂、懸垂紋であり、(一)、(四)は例に見ない、變化に富んだ、自由な描寫法を見せて居る。又それ等は直線や弧線の交點に於いて(一)、(三)は竹管を捺し、(二)はハイ貝の背を捺した手法が窺はれる。

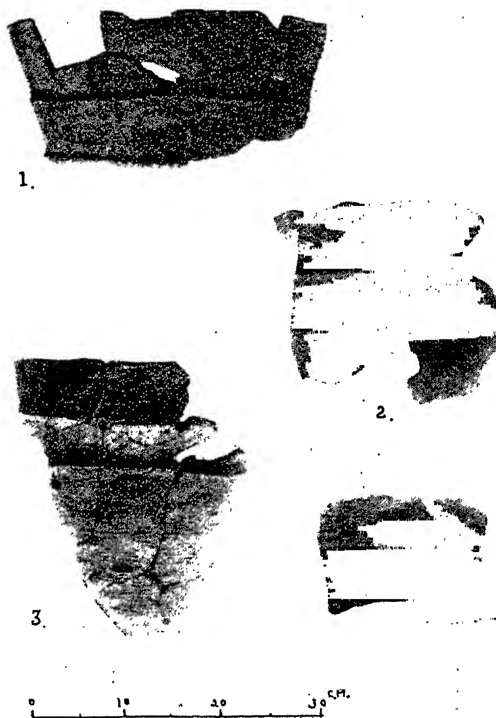


Fig. 1

次に、その器形を見ると、いづれも鉢形ではあるが、(一)は楕圓形の口形をなすものとして特異性を示す。尙又此等器形の大きさに就ては縮尺を參考にして戴く事として、その詳細は避る事とする。

第二圖に示したるは同じくA類下層に屬するものであるが、同時に出土したものとして參考までに集成して見たものである。

尙、本發掘に於いては、本A類の上層に當るものは一片だに

下總飛の臺貝塚調査概報　補遺

杉原荘介

昭和七年春、本遺蹟の發掘を終了して後、私は未だ此の調査に不備、不足の點、尠からざるを慮つて居たのであるが、就中該遺蹟C類に屬する土器の層位的確定はその主なるものであつた。其の後、此等の缺を補ほうと思ひ、時機を待つて居たのであるが、幸ひにして同年九月初旬、再度本遺蹟地の植草氏より發掘の御許可を得たので、同月廿三日を期しその調査を行つたのであつた。然るに、此の發掘に於いて、私はそれ等の事實を確め得なかつたばかりでなく、そのC類に屬する土器を一片だに採集する事が出來なかつたのである。

此等の不成功は發掘位置を誤つたものとして、當然筆者がその責を負ふものであるが、私は僥倖にも、此の發掘に於いて、前期發掘に於いて得られなかつた樣なA類、B類に屬する絶好の資料を得る事が出來たのであつた。然し此の時は既に原稿を本會の方へ送附した後であつたので、尚よく此等遺物の整理に意を留めて、發表は次回に讓る事にしたのであつたが、近日、どうにかその運びになつたし、又前回に於ける報告中補足訂正の點もある故、同時に補ほふと思ひ再び筆を執つた次第である。

今回の發掘位置は前回のA發掘地區より南方約十米の地點であり、卽ち非常に水田に接近して居る位置にあるが、未だ斜面に到つて居ない。本發掘地點を前回に於ける報告に倣ひC發掘地區とする。

本發掘地區に於いては、表土下五〇糎にして、完全なる貝層に達し、此の貝層は四〇糎內外の平均を保ち、此の貝層下に四〇糎許りの有機土層、介在して始めて壚母層に達して居る。本地區に於いては如上が大體序の事實であり、又A發掘地區に於ける樣な變化は見られなかつた。

出土遺物は土器のみであつたが、此等の土器は主に貝層中に

カーレンフエルス氏近信

ジアワの史前學者として、昨春來朝した氏は、學者としてよりも六尺偉大な巨軀の方がより有名でもあつた。日本を去つて八月、ロンドンの國際史前學會に其雄姿を見せ、紀念寫眞を見ても、體は斷然、超特作として光つても居つた。只其後氏の消足を斷つこと、茲に半歳、色々のデマが飛んだ。其確實と思はるゝ筋からの話では、『日本の歸り名古屋神戸方面で遊興に多大な失費をなし、これに災されて、現職を失ふた』乃至は『これが爲、南米ウエチツウラに走つた』等を聞いて居り、本年一月に同氏と約束した如く送つた、小包等も本人不在で還送せられたりしたので、デマを信じて居つた所、去る三月にジアワの同氏より來信、相變らずの元氣に安心した。曰く研究所のツワイテ組は相變らずギンザに花遊（ブンメルン）するか等々。又これを裏書きすることは、過日歸國せられた、和蘭公使館のスチルレン氏よりカ氏にバタビアで會談したとの、デマ打消し通信もあつた。

それはそれでよい。而してカ氏は今マレー方面に發掘に出掛けたとのことであるから、更に活動を開始して居る。あの巨軀でマレー人を威壓叱咤せられて居ることであらう。遙に健在を望みたい。（大 山）

（八・五・三〇）

て擧げる事が出來る。

これ等四文化を代表する遺物の出土率を考へるに、北方文化、本島文化、南方文化、南千島文化の順序である。此の事實から徴しても、兩島の文化の中心が、東北方に存在した事を知り得るのである。押紐紋土器は、禮文島香深井及樺太西海岸の大穂泊附近に掛けて流行したもので、其の一部は南千島に及んでゐる。又北海道本島の西南部に於て發見さるゝ樣子土師及須惠系統の土器や大陸及樺太西海岸から出土する尖底土器、又北千島を本據とし、樺太及北海道の東北部にも出土する內耳付土器等は、今回の調査に於ては發見されなかつた。今回の調査は限られた日數の間に兩島を歴巡一覽したに過ぎない故、これ等の問題は將來の研究に委ねて擱筆する。

文獻

一、北見國禮文島發掘の石器及土器、　代田龜次郎、　人類五ノ二三二（明治二二）
二、禮文島の骨器、　坪井正五郎、　人類六ノ六一（明治二三）
三、北海道利尻島發見の石器及び其の碎屑の石質、　佐藤傳藏、　人類一五ノ一三六（明治三二）
四、北海道利尻貝塚發見の海獸牙製の人形、　坪井正五郎、　人類一六ノ一二五（明治三三）
五、禮文島の石器時代遺跡、　原忠五郎、　人類二〇ノ四一三（明治三七）
六、北海道北見國禮文島の石器時代遺物、　八幡一郎、　人類三七ノ四四五（大正一一）、三八ノ一〇六（大正一二）
七、一個の禮文島土器に就て、　鳥居龍藏、　人類三八ノ二四九（大正一二）
八、禮文島發見の土石器、　八幡一郎、　人類四〇ノ三三（大正一四）
九、日本原人の研究、　清野謙次著、（大正一四）
一〇、禮文樺太土器日本原始工藝、　杉山壽榮男編、（大正一五）
一一、北海道歴史館陳列品解說、　河野常吉編、（大正一五）

綜　括

偖て上述の如く筆者は利尻、禮文兩島の遺跡遺物を親しく踏査實見して思ふに、兩島文化は、鴛泊香深井、船泊等の東北面に於て著しく發達してゐた。此の理由として考へられるものに二つある。(一)兩島の東北面は河川良港に惠まれ、鮭鱒料魚類の豐漁を見、今尙海馬鯨骨の累々として横はり、魚撈關係の遺物が多い事等は、豐富な海獸の棲息地であつた事を思はしめる。交通機關の幼稚な時代に於て、彼等民衆の安住地としての第一條件である衣食の料を極めて豐富に供給し得たに依るものであらう。(二)一方對外關係、卽北海道本島及樺太西海岸との交通上より見るも、地理的位置の關係から、東北面を以つて要地となすべきである。小樽增毛方面との交通にしても、海岸傳ひに北上し、天鹽乃至宗谷より渡島するを便とするのである。

以上の事柄は遺物の系統並びに出土率の上からも考へられるのである。筆者は兩島の文化を構成する系統を分つて四文化とする。卽ち(1)北方文化(2)南方文化(3)南千島文化(4)本島文化であるは。(1)大陸より樺太を經て南下したもので押型紋土器、舟形刻紋土器はこれを代表してゐる。(2)は本土より西南部北海道を經て北上した文化である。彌生式土器、龜ヶ岡式土器及圓筒土器は此の文化を代表する。(3)は南千島を流行の中心とするもので、北見國の沿海傳ひに北上し、宗谷海峽より西下してゐる文化である。これは素麵紋土器に依つて代表されてゐる。(4)は主として北海道本島に於て流行したと見るべき文化で孤線紋土器、矢來紋土器、雲様紋土器等を其の代表とし

出土（第七圖の20 21）。

3管玉　長さ一糎、幅八粍、孔徑五粍、白色磨製である。禮文島船泊村出土（第七圖の23）。

三　青　玉

高さ五粍、幅一・三粍、孔徑三粍、アイヌのタマサイの中に普通に見る青色のものであるが、これ等は相當古くアイヌ文化に輸入されてゐたと考へられる例が多い。利尻島オタトマリ出土（第七圖の22）。

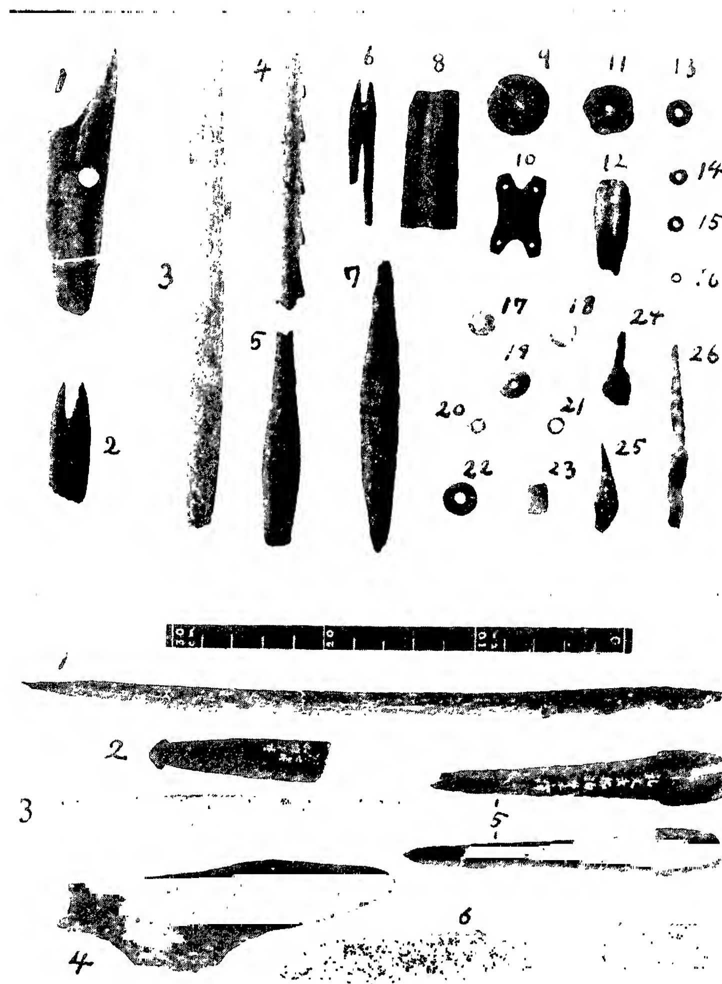
四　土製品

高さ五糎、幅一糎、孔徑一粍、一面は平たく他面は隆起する。燒きは粗で脆い。禮文島船泊村出土（第七圖の19）。

石　器

石斧の肉厚磨製のものを稀に見る。これは樺太系統のものである。八幡氏によつて報導せられた北海道の石斧の一型式なる半磨製で稍彎曲したものを見た。普通の石斧には兩刃多く片刃は極めて稀である。船泊村に産する大形打製石匙は同地に於ける大形海獸の處理を對照として特異な發達をなしたものではあるまいか。石錐はa.長さ二糎の燧石製數十個、b.棒狀にて六糎の長さを有するものが一個ある。何れも禮文島船泊村に多い（a. b.は第八圖の24 25 26）。

の自然面を殘し全體に稍彎曲する。孔は兩抉りで長軸に平行（第七圖の8）。c.長さ三・五糎、幅一糎、厚さ二粍、孔



第七圖　a利尻禮文島出土　A1—7 及A 8—16貝製品　17—18琥珀製小玉　16土製小玉　20—21蠟石製小玉　23石製小玉　22青玉　24. 25. 26石錐　b.禮文島出土骨器

徑一・五粍、楔形。一面は貝殼の自然面にて中軸に平行に溝を有する。孔は片抉りであり何れも禮文島船泊村出土（第七圖の12）。

二　石製品

1琥珀小玉　直徑一糎——八粍、厚さ三粍、孔徑二粍、磨製。類品二個、禮文島船泊村出土（第七圖の17 18）。

2青石小玉　長さ五——四粍、幅六——七粍、孔徑二——三粍、磨製にて孔は兩抉り。類品二個禮文島船泊村

17長さ六糎、巾二糎、厚さ一・五糎、切斷面三角形に近い骨器で兩端は周圍より瑕を入れて折り切つた跡が歴然として存してゐるが、他に加工なく其の用途を推量するに苦しむ。禮文島船泊村出土。

裝身具

一 貝製品

1有孔小圓板 直徑二糎——一糎、厚さ四粍——七粍、孔徑三粍位、北寄貝を材料とし多く兩面は貝殼の自然面を利用したと考へられるも、稀には一面を剝離したものがある。總て打ちかいて造り、孔は兩抉りである。類品は未製品とも十數個。禮文島船泊村に多い（第七圖の9.11）。

2小玉 直徑八粍、厚さ一・五粍、孔徑三粍貝の外側自然面は打ちかかれ、緣は磨製である。孔は片抉り、前述の有孔小圓板より一般にデリケートである。禮文島船泊村出土（第七圖の13）。

3小玉 a.直徑五粍、厚さ二粍、孔徑一・五粍磨製で孔は兩抉り。b.直徑三粍、厚さ一粍、孔徑一・五粍磨製で孔は兩抉り。禮文島船泊村出土（第七圖の15 16）。

4小玉 直徑六粍、厚さ四粍、孔徑二・五粍磨製にして孔は兩抉り、胴部隆起し算盤玉樣。禮文島船泊村出土（第七圖の14）。

5特異形 a.長さ二・五糎、巾一七糎、厚さ二粍、孔徑各一・五粍。四個の突出部を有し其の各に孔を穿つ。孔は兩抉り。貝殼の自然の曲りにより稍彎曲する。未製品ともで二個を存する恐らく腕或は頸飾又は腰飾等の用に供したものであらう（第七圖の10）。b.長さ四糎、巾一・五糎で略矩形である。孔徑五糎、厚さ四粍にて一面は貝殼

に用ひられたと思はれる鋭利な双部は無い。禮文島船泊村出土（第八圖の4）。

10 高さ十糎、巾七糎であるが、巾の廣い骨斧の半分で實物に於ては十五糎内外の巾を有した事が明である。双部は鈍く片双である。骨斧の一面は削つた跡が歴然としてゐるが、他面は明でない。肩部は双物の跡を殘し、上部の突起は高さ二糎、巾一・三糎なるも完形ではない。利尻島オタトマリ出土。

11 長さ二十八糎、巾五糎、厚さ二糎で鯨骨を材料とし一面は自然の儘で平滑、他面は加工の跡があつて溝を有する。握りの部分を除いて上下に峭を作り、短刀の双部に當る部分は鋭利な双物で刻んだ鋸歯狀の突起を有する。切つ先は片双で稍鋭い。禮文島船泊村出土（第八圖の6）。

12 骨刀の基部片。長さ十一糎、最大巾三糎、鯨骨を材料とする。後端は兩側より削つて山形をなし、後端より一糎の箇所にて左右から刻みを入れ、後端に頭部を形造る。握りの部分の一面はかまぼこ形に隆起し他面は凹んで溝をなす。禮文島船泊村出土（第八圖の2）。

13 長さ十二糎、巾四・五糎、厚さ三糎、斷面は二等邊三角形の庖丁様骨器である。兩端の切斷され双は兩双で鋭い。禮文島船泊村出土。

14 長さ二十四糎、最大巾二・五糎、厚さ一糎、鯨骨製で一面は平であるが他面は隆起する。箒篦狀の骨器類品。五點。禮文島船泊村出土（第八圖の3）。

15 一端を缺く。長さ二十二糎、最大巾六糎、厚さ二糎、鯨骨製。一端に近く稍窪みを造つて握りとし他端は楔狀に狹まり双部は鋭くない。禮文島船泊村出土。

16 長さ四十七糎、直徑二・五糎の骨棒で兩端は兩側より削つて劍先をなす。（第八圖の1）。

部に進むに從つて狹くなつてゐる。基部から五糎の箇所に於て、長經に直角の面に從ひ二粍の切り下げを作り、之より先端に行くに從つて銛身の太さを減ずる。基部から十四糎の箇所から二部分品の接合面を左右に削つて、基部に於て厚さ四粍、先端に於て一・五糎の抉りを作り鏃を挾むに便ならしめてゐる。材料は鯨骨である。禮文島船泊村出土（第八圖の5）。

3 長さ四糎徑一糎、砲彈形の先端に長さ一糎の鐖を作る。中柄を嵌める孔は徑七糎、深さ一・四糎である。類品三個。禮文島船泊村出土（第七圖の2）。

4 細長い有鐖銛の先端部。一面は平、他面はカマボコ狀に隆起。平面部が左右に突出して長軸に對し双對的に鉅を生ずる。厚さ四粍、類品二個。禮文島船泊村出土（第七圖の4）。

5 (4)の大形なものであるが、先端部を缺く。銛身は略徑六粍の棒狀、基部稍細く、基部より九糎の箇所に於て高さ三糎の最初の鉅を生じ、互生的に第二の鉅を作り、鉅頭から鉅頭迄の距離は約一・五糎である。禮文島船泊村出土（第七圖の3）。

6 長さ四・五糎、巾八粍、厚さ五粍、一端に長さ八粍の二叉、他端に三糎位の二叉を有す。禮文島船泊村出土（第七圖の6）。

7 長さ七糎、徑一・二糎の紡錘形。基部の稍太い部分は八角に削られ、基部の末端は楔形をなしてゐる。細端部は矢羽形に削る。類似品二個。禮文島船泊村出土（第七圖の5）。

8 長さ九糎、巾一・三糎、厚さ八粍の略紡錘形の粗製品である。類品四個。禮文島船泊村出土（第七圖の7）。

9 基部破損。長さ二十一糎、巾七糎。扁平な鯨骨を利用し圖示した形態を作つたもので、何れの部分にも切斷

四　素紋土器片

a　暗黒色にて焼度高からず、擦紋がある。口縁上に、僅かに帯紋様期の名殘として波狀突起を有することもある。

b　厚さ四粍内外、焼きは堅緻、小砂を混じ赤褐色にて無紋。概して器形小なるを思はせる。所謂土師器系統に類似し前出鳥居博士によつて、大陸系のものとされてゐるものである。

c　暗黒色にして、前者に比し焼度高からず無紋である。オタトマリに特に多い。焼成上2のa群に屬するものより紋様を取り去りたるものに酷似する。

骨　器

1長さ六糎巾二・五糎、厚さ一・二糎にて末端に鍵形の鉦を備へ、中柄を嵌める孔は直經七粍深さ一糎の圓錐形で、胴部に索綱孔があり直經六粍の圓形兩抉りである。先端は片側を削つて鏃を附加するに便ならしめ、他の側には先端から一・八糎の所に長軸に直角に帯狀の隆起を浮かして、紐を以つて鏃を附加する仕掛となつてゐる。類品は福井隆則氏採集、八幡一郎氏紹介の禮文島出土のもの、更に松本博士報文に樺太本斗郡藻白貝塚からも出土してゐる事が明にされてゐるが、此處に記載したものは先端に特徴がある。他に腐蝕した類品一個を採集した。禮文島船泊村出土（第七圖の1）。

2長さ二十二糎、基部の長徑四糎、短徑三糎の大形骨銛である。左右に双對の二部分品を合して一つの銛を形成させるものである。基部先端は兩側から山形に削り、中柄を嵌める孔は長經二糎、短經一糎、深さ三糎で、内

c　主として暗褐色乃至赤褐色を呈し、燒き稍堅く口緣部に縱或は斜に刻紋を連ね胴部に細紋を施す。

d　口緣部は特に隆起する傾向があり、砂礫を含み、燒度高く堅緻である。口緣部に大形の舟形刻紋、頸部に雲樣紋を有し蓆紋を伴ふ。神崎に於て僅かにこれを見る。

e　暗黑色乃至暗褐色にして燒成度高くなく、概して大形土器を形成し、頸部に雲樣紋を施し、胴部には細紋を有する。船泊村に最も多い。

f　色調は黃褐色系統で小砂を混じ、隆起線で懸垂紋を造り、口緣部に細紋を配する。

二　刻紋土器片

a　多く黑褐色にて燒きは堅くなく、舟形刻紋を有し平行線を伴ふ。この種は鴛泊、オタトマリ、オトントマリ等に見るが數は多くない。

b　多く黑色系統の色調を有し、燒きは堅くなく、一定の紋樣型を押して紋樣を造る。船泊村及オタトマリに僅かに存する。

c　燒度中等にて小砂を混じ灰白色系の色調にて、主として頸部に斜格子紋があり、口緣部に舟形刻紋を伴ふ事が多い。

三　浮紋土器片

a　燒度高からず、小砂を混じ、黑色系の色調にて素麵狀の浮紋を置く。香深村及ペシ岬に極僅かに存する。

b　燒度高からず、暗褐色系統の色調を有し、口緣部隆起し點々之を押へて鎖狀となし、頸部は之と平行な箆痕がある。

の連續せる船形刻紋を附する。小砂を含む（第六圖2のa）。

b　黑色にして頸部稍縊れ中央に一條の隆起帶があり、船形刻線からなる波狀紋を置く。口緣部に石器で穿つた二個の小孔を存し、小砂を含む（第六圖2のb）。

c　灰褐色と黑褐色の斑を存し、口緣部隆起して一條の隆起帶をなし連續波狀紋がある。其の口緣部に近い側には大形の舟形刻紋を置く。擦紋を地紋としてゐる。小砂を含む（第六圖2のc）。

d　燒成及色調全くcと同樣である。壺形土器の口緣部の一片で肩部に三條の巾の廣い篦痕を平行に繞らしてゐる。（第六圖2のd）。

三　素紋土器片

a　燒成色調共に2のc及dと同樣で口緣部開く。（第五圖3のa）。

第二類　土　器

一　繩紋土器片

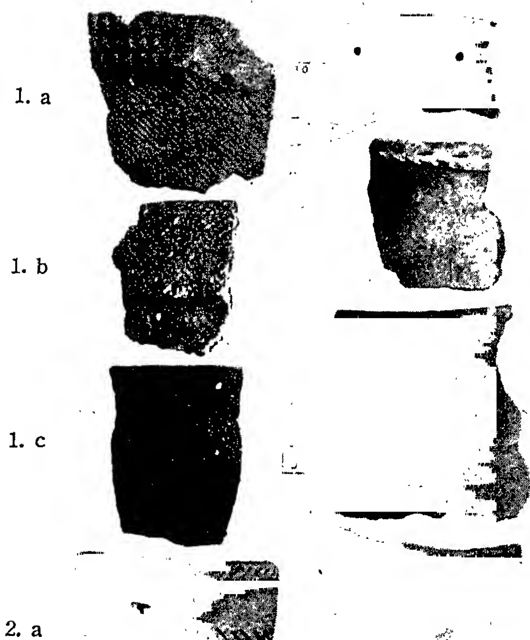
a　一般に赤褐色を呈し、砂を混じ燒きは堅くなく繩を以つて各種の形狀を造り、これを押すのは此種土器片の特徵である。又稀に有孔把手を見るが利尻、禮文島には極めて稀有なものである。尙(e)群に見る雲樣紋を、繩を押して造つたものが此の種土器片に見出される事はこれ等兩者の脈絡を示すものではあるまいか。而して禮文島香深井に於て發見さるゝことが極めて多い。

b　小砂を混じ主として赤褐色にして、巾の廣い篦を用ひて孤線紋を描き、これに繩紋を添へ點紋を配してゐる禮文島香深井に僅かに之を見る。

紋様――底面及口緣部に無紋帶を殘し、主體部は細かい繩紋を施し、頸部に一條の爪形紋帶がある。奥羽薄手式の系統に屬し類品の出土極めて稀である。

第一類土器

一 繩紋土器片



第六圖　利尻、禮文島出土の土器片。

a　暗黑色にして燒き粗、口緣部肥厚し半圓形の押紋を施し、頸部に圓形の小孔を環らし二條の曲線紋を有する。地紋は斜の蓆紋である。礫と纖維を含む（第六圖1のa）。

b　灰褐色にて燒き粗、口緣部肥厚し蓆絞を有し。頸部には石器で穿つた小孔及蓆絞を存する礫を含む（第六圖1のb）。

c　黑褐色或は黄褐色の部分から成る。燒きは粗にして斜の蓆紋を有し、口緣部に連續s字紋を置き、肩部に工字紋を附する。石英質の小砂を含む（第六圖1のc）。

二 刻紋土器片

a　赤褐色と暗褐色の斑部から成り、燒きは粗で形は土管の口部に酷似する。擦紋を地紋となし口緣部に二條

紋樣――胴部及口緣部に僅かに繩紋を殘し、口緣上には斜に押した繩紋を置き底部には擦紋がある。

四號（圖版第二の4）

出土地――禮文島船泊村字神崎第一の澤

大さ――口徑三十糎

器形――深鉢形土器の上半部。口緣部は外開きで緣は大きく波狀を呈してゐる。

燒成――小砂を混じ燒き硬からず、暗黑色と黃褐色の斑部を有し、腐蝕有機質の黑斑を見る。內面の色調は稍明るい。

紋樣――胴部は斜行繩紋でその頸部に近く雲樣紋を施し、口緣部に繩紋を地紋として直に紋を附し、其の上下に幅廣い無紋帶を殘し底部には擦紋がある。

五號（第一回調査の際採集）

出土地――禮文島香深村

大さ――高さ十一糎、口徑十一糎、底徑六糎

器形――深鉢形にして口緣部の開き大。

燒成――小砂を混じ、燒きは稍堅い。底部は甚しく厚く手揑である。灰黃色と暗黑色の斑を有し、內面は黑色にして全面に腐蝕した有機質の固着せるものがある。

紋樣――擦紋を地紋とし頸胴部には矢來狀刻紋を附し條線を以つて胴部と境する。底部には指紋を存し底面は粗製である。

六號（第一回調査の際採集）（圖版第二の5）

出土地――禮文島香深村

大さ――高さ約六糎、口徑約四糎、底徑四・五糎

器形――壺形の口緣部を缺いたもので肩部張り底部は厚い。

燒成――漆黑色にて光澤があり、燒成は稍堅緻である。

紋樣――頸胴部に素麵狀の浮紋を橫に繞し、其の下方に波狀浮紋を添へ、更にその下方でこれと接して七個の圓圈紋がある。

七號（第一回調査の際採集）（圖版第二の6）

出土地――禮文島香深村

大さ――高さ九糎、口徑凡九糎

器形――丸底にして巾着形。

燒成――燒きは堅緻で內外面とも黃褐色を呈し暗黑色の斑がある。

G 上泊

上泊小學校の東北の畑地に土器小破片、石器破片が散布してゐた。土器片は繩紋のものである。

主要遺物

土器

一號（圖版第二の1）

出土地――禮文島船泊村字神崎

大さ――高さ二十二糎、口徑十七糎、底徑六糎

器形――深鉢形にて頸部稍縊れ、口緣部は四個波狀緣を呈し、器體各部の厚さは略均一にして平底である。

燒成――小砂を含み、燒硬からず、內外面とも暗褐色と黃褐色の斑部を有し、漆黑の有機質の固着せる部分がある。

紋樣――主體部及び口緣部の內外は斜行繩を施し、底部には幽かに擦紋を見る。

二號（圖版第二の2）

出土地――禮文島船泊村字神崎第一の澤

大さ――高さ十八糎、口徑十糎、底徑七糎

器形――壺形にて平底、肩部張り口緣部稍開く。

燒成――小砂を含み燒硬からず、暗褐色と黃褐色の斑を有し內面は黑色である。

紋樣――胴部には斜行繩紋を、口緣部には擦紋を存し、頸部の條線によつてその境としてゐる。底部は口緣部に等しい擦紋がある。

三號（圖版第二の3）

出土地――禮文島香深村字香深井墓地

大さ――高さ十七糎、口徑十九糎、底徑八糎

器形――深鉢形にて口緣部稍開く。

燒成――小砂を含み燒硬からず、內外面とも赤褐色にて腐蝕した有機質の黑斑がある。

六十糎、巾三糎、厚さ七粍で少しく反りを有してゐる。腐蝕は輕度である。尙船泊小學校には當地出土の頭蓋骨一個を藏してゐる。完品で歯牙もよく揃ひ、咬耗は殆んど無く大後頭孔は稍〻擴大されてゐる。此の丘陵の麓に當る所で土器片一個を採集したが、土器の口縁部に當る所に舟形刻紋を施してゐる。

E　神崎（船泊村字神埼）　神崎小學校の南に當り、街道を越へた畑地で、テフネフへ通ふ小徑の分岐點である。此の畑地には、表面にも遺物が散在し又地下にも埋れてゐる。更に街道を西すれば、海岸の畑地にも其の散在を見る。小學校南の畑地の發掘を行ひし處、表土には土器小破片石器片等があつて、其の下の赤褐色の土砂を經て更に海砂の中、地下四十種の所に大き更に其の隣一米位隔つた所を發掘せるに、再び大きな土器片を得た。器を形成し得た。深鉢形で主體部に繩紋を有するものである。燒成施紋共に第一の澤で得た壺形、廣口深鉢形及臺附土器底部のものと同じである。尙之等の土器片は大小の自然石、骨器片、肉厚石斧の双部、石錐片、獸骨（海馬）を伴出した。此の砂は堀り返された形跡はない。表面では厚手及薄手の土器片を得、刻紋、紐紋、擦紋及無紋のものである。更に黑曜石製石鏃三個、石匙二個、砥石片一個、石錐片一個（石英製で第一の澤のと同じ）等を得てゐる。此の丘は遺物に富む事第一の澤に亞ぐ。

尙神崎小學校の東隣りの砂丘を切り崩して、校庭の一部を造つた時、多數の人骨を出したと云ふ。

F　テフネフ　禮文島西岩の小灣に臨む入江の南端に、丘陵が海中に突出し突角をなす所がある。北、西、南の三方は絶壁で、東方は馬の脊となつて丘陵に續く。此の突角の頂きは東西に長く相當の廣さを持つてゐる。天嶮を利用した砦址である。此の附近に土器片を出す由。尙此の岬はアイヌがイナホを立てゝ、神を祭つた事からイナホ崎の名稱がある。灣の北部の海濱で石槍片、土器片、骨器片等を採集したが至つて僅少である。

器片は無紋のものと縄紋及口縁部に刻紋を有する淺鉢形土器の破片と思はれるものである。貝製品小玉一個を得たのみで、一般に遺物の量は第一の澤に比較すると遙かに貧弱である。

C 第三の澤　遊廓の北方、街道と海岸の間殆んど道路と相接し、第一の澤の西に當つて位する。第一の澤の樣に深くも無く、又遺物の散布も極めて尠い。土器片は縄紋を有してゐる。貝製玉類二個骨器片、石錐片を小數採集した。

D オシヨンナイ　船泊郵便局傍の小砂丘を發掘した。海濱に沿ふた砂丘の續きと見られるもので、現在は市街の中に僅かに其の形を殘す。其の高さ道路面から約一米五十糎である。上層は砂で下層は褐色土、更に其の下は河原石、最下層は川砂利である。層の深さは一定しない。遺物包含層は上層の砂と褐色土と玉石の部分である。

遺物は骨器が其の大部分を占める。八幡氏の報告した「石鏃を附加する骨銛」の類品一個、短刀樣のもの數個、其の他骨針等である。鯨の脊椎骨の臼樣のものにして、直徑四十糎程のものも存在してゐた。土器片は主體部に縄紋、頸部に雲樣紋及これ等を畫する爪形紋を施した大形土器を思はせるものであつた。稍堅緻な燒で紋樣等は龜ヶ岡式と一脈の類縁を有するかと思はれる。此の種の土器片は兩島中他に見ないものである。河原石の層から黑耀石製有柄石鏃一個を得、表面採集に依つては琥珀製小玉二個、貝製小玉二個の外に土器片を得てゐるが附近には鯨骨の散布が甚だしい。尚船泊郵便局前の熊谷氏の井戸を掘る際、地下一丈三尺位の所より人骨一體、刀一振を出した。人骨は伸展葬で頭部を東に向けてあつた。此の人骨は先年グブラー氏に依つて當大學にもたらされた。刀は破壞されてゐる爲全形を想像する事は出來ないが、柄は銅製鍍金で紋樣は菊花と桐である。刀身は長さ

を造つたものである。遺物は澤の全面に散列し、所々山積してゐる所もある。打製石匙が最も多く骨器、土器片、獸骨等も實に多い。遺跡の表土は、砂丘を造つてゐる砂である。約二十糎位の所より黑土となり、同じく遺物を含み、こゝから壺形、廣口深鉢形及臺附土器の底部等を得た。これ等は復原に依つて略全形を知るに足るに至つたもので全部繩紋がある。此の他大形土器の口緣部に、雲樣紋を施したものの上半部を得た。此の層は約六十糎で赤土に達し、遺物を見ない。澤の西端卽西側の壁の基部に當る黑土層を發掘した所、小兒頭大の自然石十數個を不規則に集積し、中に木炭を存し傍に粘土の塊を存するのを發見した。澤の表面にも所々同樣の自然石の集積を見る。石匙の多い所には其の石屑も多く、貝殼の多い所には貝製品が多く、石錐ある。土器片は主として平行線紋或は雲樣紋を施したもので、稀に薄手の彌生式風の小破片を見る。又黑色にして繩紋のみのものもある。石器中最も多いものは大形打製石匙で水成岩製である。石鏃は菱形式大形のもの(水成岩製)及黑耀石或は綠色の石の有柄小形のものである。石錐も多量に存し多くは石英製である。石槍は角岩或は黑燿石製である。砥石は砂岩製で相當大形のものがある。骨器は紡錘形の十糎位のもの三個、貝製裝飾品が多數ある。猶管玉一個及小玉二個を得てゐる。

B　第二の澤　第一の澤を有する砂丘の連りである。第一の澤の東に當り、澤は東西に長い。澤の北側卽海岸沿の砂丘壁は稍低く、南側の砂丘壁は十數米ある。遺跡は澤の底の部分全體で、此處には骨器が最も多く大形銛を得た。尙此の骨銛と殆んど同一場所に人骨の上顎及下顎を發見した。齒は咬耗甚だしく殆んど齒冠部を失ひ、下顎齒の中、臼齒二個は齒髓腔を表はしてゐるが、變形した形跡は無く、拔齒したと認められる齒槽も無い。(生體アイヌの齒牙に於ても約22%の咬耗症を發見する)。石鏃は黑燿石の無柄一個及び其他破片。土器片も少々散在する。土

月氏は當地イコキナイの海岸に面した急斜面に於て電光形に攀路を造つてある所から刀を得てゐる。鞘は桑製で片面は銀で模樣を有し、他面は鰐の皮で張られてゐる。鐔は目方三十匁、良質の銅、刀身は發掘當時幅八分長さ四寸である。

二　香深

禮文小學校に頭蓋骨一個を保存してゐる。これは海岸から五百間程西方、水源地から百間程隔つた所のオンコ（いちい）の樹を掘つた際、樺の皮で覆はれてあつたものである。香深村々役場にも頭蓋骨一個を保存してゐる。當役場建築の際地均しの時に出土したものである。香深村嚴島神社の東の畑地に石器片の散布せるを見たが極めて稀である。

尙當部落には現在一人のアイヌ老婆が殘存してゐる。前出福井隆則氏は旣に故人となり同遺族は船泊より當部落に移住し多數の土器、石器、骨器、珠類等を所藏してゐる、これ等は旣に八幡氏に依つて紹介されたものである。

三　船泊

久種湖と海濱との間にある現在移動してゐる砂丘は、久種湖から流出する小流を渡つて更に北に連なる。此の小流以北の地域は殆んど現在のオションナイ市街となつてゐる。遺物は主として、此の小流の西方に續く丘陵の、風の爲に中斷された所に露出し、市街內にも散在してゐる。市街の入口に當り街道と平行に北に伸びてゐる山の先端は堀によつて區畫された砦址をなしてゐる。

A　十兵衞澤（第一の譯）

これは船泊村字オションナイ部落（俗に船泊と云ふ）の西南に當り、現在の遊廓の傍で、道路と海岸との間の澤である。澤は南北に長く東及西は高さ十五米餘の砂丘の斷面を壁としてゐる。これは東西に連る砂丘の一部に、二十年程前には方一間位の小穴を生じてゐたものが、風蝕に依つて漸次擴大され現在の澤

部は現在の墓地、他は畑地となつてゐる。此の斜面が遺跡である。墓地區域内の稍窪んだ所を發掘を試みたが、包含層は地表より約三、四十糎の間であつて、これより多數の土器片を出した。これ等は復原して略完形となつたが、幽かに縄紋を有する深鉢形である。更に畑地の表面採集に依つて得た土器片を見るに、技巧に富んだ押組紋を有するものが大多數であり、厚手縄紋土器片も少々混じてゐる。石器は主として石匙であり、大小の破片は非常に多く角岩、石英が大多數で黑燿石は尠ない。

Fig 5　説明　增毛軍の據つたと言ふチャシウシ附近の丘陵。傳説共ニ參照。

チャシウシのチャシ　部落の南方、見内神社の西南、見内神社前の突出と更にその南にある突出との間にあつて、此の二つの突出より稍小さく、從つて海岸を去る事も多い。各突出を區切る小さな澤は奥に這入るにつれて狹く且淺くなつてゐる。チャシの幅は海岸に近く廣く奥に這入るに從つて狹い。上部に堀様のものがあるが一部は畑の爲めに埋つてゐる。此の邊一帶はかつて增毛軍が立籠つた丘陵で此のチャシも共の時に築かれたと云ひ傳へられてゐる。チャシの上から石鎗一個及び土器片小數を拾得した。

尚香深井小學校に當地出土の頭蓋骨が一個保存されてゐる。下顎は無く。大後頭孔は擴大されてゐる。中村明

たのである。「安産乳貰ひの神」「悪疫退散の神」として、香深井の一角に今尚其の靈驗を謳はれてゐる。

其　二

天鹽、宗谷方面の荒波を乗り切つて、近海漁撈をなしてゐた増毛アイヌが、突然な暴風に遭遇して、香深井灣に漂着した。所が、破船の船頭は香深井アイヌ酋長とは、増毛時代からの仇敵であつた。船頭は捕へて牢獄に封じ、他は悉く船と共に逆卷く怒濤の中に突き放された。

當時香深井アイヌは増毛アイヌに隷屬し、年貢を献じて居たが、或種の不滿から久しく怠納を續けてゐた。其の矢先の仕打とて、増毛方の激昂は一方ではなかつた。直ちに使を派して其の罪を問ふたが、却つて香深井アイヌの爲に慘殺された。茲に於て重なる恨の數々を晴さんものと、増毛軍は大擧して香深井に襲來し、チャシウシ附近に本據を置き、戰の火蓋は切られた。香深井方の狼狽は一方ではなかつた。急據大澤コタンに據つて、必死の抗戰を續けたが、事の余りに唐突な爲め戰遂に利あらず、コタンを捨て濃霧に乗じて、溪を攀ぢ嶺を辿つて、桃岩の天嶮に立籠つた。精悍なる増毛軍は、伐木して階段を造り、潮の如く押し寄せて此の天嶮を屠つた。桃岩陷落の祝宴は頂に張られ、増毛軍の歡聲と共に島内は再び平和に復つた。

因に増毛軍退島に際し、香深井コタンの寶物の一部を、土瓶七箇に封じ、見内神社の後丘、海岸から百間許りの所、乾の方向に埋沒したと云はれてゐる。

註——これ等傳說の骨子は、禮文島の史家中村明月氏の近著「禮文山水と趣味の傳說」に依つたものであるが「其一」に於ては之と全く異つた筋書のものが、宮坂光次氏に依つて人類學雜誌に發表された事がある。筆者は今之等の眞疑を語る用意を持たない。尚傳說中人物の名は中村氏の創成に係るものである。

一　**香深井**　香深井は香深アイヌの本據と稱せられてゐる所である。當部落の中村明月氏の談に依れば、此の香深井を流れてゐる小流は、奧一粁にして二分するが、其處の左岸に見える丘陵（第四圖參照）が、傳說に於ける香深井アイヌと増毛軍を對戰した時の、香深軍の本陣大澤で、チャシウシのチャシ卽増毛軍の據城（第五圖參照）と相對するものであると。

部落のある澤の中央を流れる川の左岸で、部落の北に當り、南向の稍緩傾斜をなしてゐる丘陵がある。其の西

く、殆んど交通は杜絶されてゐる。島内交通の要路は、香深と船泊を連ねる東岸の道路である。河川として見るべきものは南より香深井川、起登臼川、内路川、オションナイ川、及濱中川等で就中濱中川は長大であり、オションナイ川は久種湖に連る。更にスコトン岬の北方には海馬(トド)島を控へてゐる。海洋氣象の狀態は、利尻島と大同小異な事は勿論である。現在の文化は香深、香深井等の南方に於て高く、北方船泊地方に於ては未だに電燈もなく、ランプを使用してゐる有樣である。全島殆んど安山岩及玄武岩から成つてゐるが、金田岬の一角は秩父古生層であり、船泊村を中心とする帶は第三系に屬するものである。

禮文島は利尻島に比し良港河川に惠まれ、從つて先住民族の遺跡遺物も豐富である。尚此の島と北海道本道とに絡まる傳說も尠くはない。これ等は禮文島の史前と切つても切れない關係にあり又北海道本島との交渉を知るよすがともなるものであらうから、紹介の價値があると思ふ。

アイヌの傳說

其一

禮文及利尻アイヌが、天鹽アイヌに隷屬してゐた頃の事である。天鹽アイヌは仇敵宗谷アイヌとの間に續けられてゐた葛藤を一擧に清算すべく、禮文アイヌに應援を求めた。忽ち勇敢な壯者を以つて、應援部隊は編成された。一夜の送別の宴は張られた。出發の朝となつた。その中に比ひない猛者として、自他共に許してゐた一隊の長カルアシと呼ぶ壯年アイヌがあつた。彼は同棲間もない新妻セレナと、切な別れをおしんだ。軈て救援部隊を載せた船影は次第に波間にかくれて行く。セレナは千々に悶え悲んだ。せめていとしい夫の勇姿をと、岬頭高く岩に凭れて消え行く船影に武運を祈つてゐたが、あれは夕闇の幕と共に忽然として一塊の岩と化してしまつた。

爾來此の岩を見るものには不幸が伴ふと云はれたので、附近を通るものは顏をそむけたと云ふ、卽「見ないで通る」が見内神社の緣起となつ

禮文島は利尻島の西北十粁、樺太の西南端である西能登呂岬を去る八十粁の地點に位し、南北に長く周廻凡そ六十粁の小島で、アイヌ名レブンシリは沖の島の義である。利尻島が高山的な地形であるに反し、僅か四百九十米の禮文岳を最高峯とし、一帶に高原性な地形を有してゐる。北端の金田岬及スコトン岬は、船泊灣を抱き、更に西北部にはアワビコタン及テフネフの灣を有してゐる。北、東、南の海岸は難所を有しないが、西岸のメシクニから元地に至る海岸は、懸崖絶壁で今だに道らしい道もな

Fig. 3 スコトン岬より船泊灣及船泊村を望む。沿岸は島中最大の遺跡にして豐富な遺物を出す。殊に骨器、裝身具、大型打製石匙及雲樣紋土器に富む。

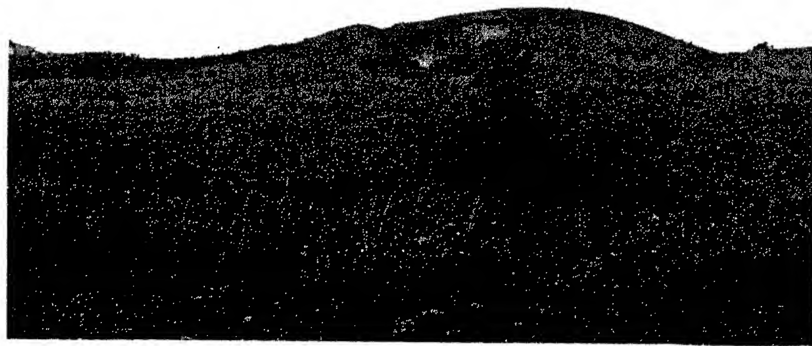


Fig. 4 香深井軍の據つたと言ふ大澤コタン。傳説其二參照。

寺裏畑地に土石器出土。

四 オトントマリ　鴛泊部落の西一里、街道と海岸との間に現在移動しつゝある砂丘がある。砂丘の連りは所々風に依つて遮斷されて、下層の黑土を出し、黑土は更に風蝕され赤黃褐色土を見せてゐる。遺物は主として此の黑土及褐色土の上に散在する。然し砂丘が動いてゐるのと、風蝕が甚だしいのとで、遺物の包含層を確める事が出來ないが、恐らく黑土並に褐色土であらうと思はれる。

部落民の談に依れば、當地からは以前次の樣なものが出土した。1.横臥した人骨。2.人骨と共に鐵刀一振。3.漆器、圓形の蓋樣のもので中央に圓を描き其の中に曲線模樣があつた。之等は黑土の邊から出土したと云はれてゐる。

表面採集に依つて得た土器片は、厚手縄紋のものが大部分で、小數の薄手刻紋を混じてゐる。尙石器に於ては角岩製の石匙、石斧片、大形石錘（側面に溝を掘つたもの）及砥石であり、打製石器の製作場であつたらうと思はれる所が散布地の各所にあつた、角岩、石英岩（稀に黑曜石）の石屑を多量に出す。此の地の漁夫の採集した石鏃を見るに、有柄、無柄、柳葉狀何れも存在するが有柄が多く無柄が尠い。然し赤堀氏の石鏃型式Bの3に該當するものもある。此の部落には現在舊土人と和人との雜種の一家が殘存してゐる。

が未だ出來なかつた頃和人を此の麓へ葬つた事がある。それを村人がアイヌの墓地と呼んでゐるとの事であつた。

三　**鴛泊**　海岸に北面した市街の東北に、鴛泊港の一畫をなすペシ岬がある。海中に突出する事五百米、其の高さは五萬分の一地圖の示す所に依ると、最高九十三米で突端には現在燈臺が置かれてある。遺物の分布はこのペシ岬及その渚、突角に近い街道附近、村役所から更に南方に坂を登つた附近及び西本願寺説教所にかけての一帶である。ペシ岬の突角は天嶮を利用した砦址であつて、現在の燈臺附近にも遺物を出す。岬の中腹には二間に三間位の竪穴様の窪地を存し、土石器片を出す。西本願寺説教所前の道路に散分する土器片は、厚手縄紋で甚だしく破損磨滅してゐる。石器としては黒曜石製石槍一個を得た。役場裏の地ならしの所から厚手縄紋の圓筒形土器片一を得、役場裏の坂を上つた所より土器小破片（縄紋）を發見した。税關附近の表面採集及斷層發掘に於て得たものは、薄手で無紋、擦紋、刻紋の土器片及角岩製の石槍一個である。尙此の税關下の道路開鑿の際、多數の土器、頭蓋骨等を出したと云はれてゐる。

ペシ岬に於ては厚手薄手兩様の土器片を得たが、薄手多く無紋、擦紋、押紐紋及浮紋等であつた。尙ペシ岬の海に面する渚の部分（俗に又一番屋）に、シジミ貝を主とする貝塚があつたと云ふも現在は地ならしの爲存しない。此處から當地の高瀬淸七氏の採集した土器片を見るに、厚手は無紋、薄手は舟形刻紋を有する。尙同氏は、サッカウイシの丘上（現在畑地）より出土した、◇═◇形偏平の黒曜石製大形石器を所有してゐる。尙高瀬氏より次の談を聞いた。1又一番屋の隣の稚内築港事務所の傍から土器出土、2本淨寺裏の地ならしの際頭蓋骨一個出土（之は鴛泊小學校保存のものを鈴木校長の御好意により博物館に讓り受く。熟年の女性アイヌらしく、大後頭孔は甚だしく左後方に擴大されてゐる）。3小學校裏に竪穴らしい凹地があつて、土器石器を出す。4大法

全部破壞して盆地の埋立をなした。又砂丘の中に貝塚が二ヶ所あつた。一つは現在十七號魚場の前方、他は稻荷神社の前の又一魚場の網小屋の傍。之等の貝塚も地ならしの際平地に運ばれてしまつた。
遺物は主として砂丘にあつて、地下二尺以内の所から出土した。石川氏が地ならしの際發見したものは、壺形土器二三個、石斧二個、銀耳輪一個、青色飾玉數十個及刀一振であつた（此の內石斧二、飾玉一は讓り受く）。
沼の南方、道路の東側は遺物の散列地である。表面採集に依つて有柄石鏃二個、柳葉形石鏃一個と土器片若干を得た。厚手は尠く薄手が多く、舟形刻紋、押型紋、擦紋及無紋等である。十七號魚場前乾場の一部を發掘した所、表面より二十五糎で不規則な貝殼の層となり、それより更に二十糎にして黑土となり、玉石を多量に混ずる。貝殼は前記地ならしの際切り崩された貝塚のものである。出土した土器、石器片は散列地のものと同樣である。外に骨器片、獸骨（頭部）を出し貝はアワビが大多數で小數のエゾボラとフジツボを混ずる。
尙部落の西、丘陵の麓にアイヌの墓地と云はれるものがある。約三米の墓標が腐朽して倒れてゐた。墓標の地下に埋沒してゐる部分は、約六十糎である。墓標は丸太を四角に削つたもので、二十糎角をなしてゐる。直徑約五十糎、深さ六十糎の墓壙の中央に樹立したものである。此の墓標の立つてゐる所は盆地の西側の境をなす丘陵の麓の傾斜面で、丈餘の草に隱蔽されてゐる。下から墓標を圍む石の端まで二米四十糎、高低六十糎で、此の墓からは小骨片一を出したのみである。
其の傍に更に細い墓標が一本倒れてゐた。墓壙には、現今使用されてゐる釉（上藥り）のかゝつたを用ひた甕に入れた骨が埋沒され、骨は火葬にされたもの丶如く小片にして、炭化した部分を混じ、その中に寬永通寶一個を發見した。恐らくは和人の墓であらう。石川老の言に依れば老が此の地に來た當時（明治十六年）現在の墓地

一　鬼脇　鬼脇小學校のグランドを造る爲、同校の地續きで南方海に面し緩傾斜をなす、丘陵を切り掘つた時多數の人骨を出した。尙鬼脇小學校長の談によれば、人骨は地下二尺以内の所に箱に入れてあり、頭蓋骨は南に向け髮を存するものもあつたが、副葬品らしいものは見當らなかつたと云ふ。上部には石又は木を置いた形跡があつたが、木はアイヌの墓標ではないらしい。現在にても頭蓋片、肢骨、肋骨等の散分するものがあるが、附近に土石器もなく極めて新らしい年代に屬するものである。

二　オタトマリ　東、北、西の三方は利尻富士の麓をなす丘陵に取圍まれ、南の一方は開いて海に面する。此の入江形の平地の東端には、汚水をたゝへた沼があつて、沼の西岸から盆地の西側の丘陵迄の間には、濕潤の爲發育不良の針葉樹が密生してゐる。此の沼並びに濕潤地と海濱の間が、現在のオタトマリの部落である。當地の古老石川寅吉氏(明治十六年渡島現在に及ぶ。六十七歲、昭和七年)の談に依れば、かつて此處には海濱に沿つて砂丘があり、盆地に向つて緩かな傾斜をなし、海沿ひの斜面はむしろ急傾斜であつた。現在、又一(個有名詞)漁場の裏に殘つてゐるのがその砂丘の續きである由。

盆地側の緩傾斜の砂丘面から、平地にかけて數個の竪穴があつた。十七號魚場から石川氏宅迄の間に四五個、又一魚場の方に離れて一個あつた。穴は方形で二間四方位、深さは三尺位。之等の穴は砂丘取除きの工事の際、

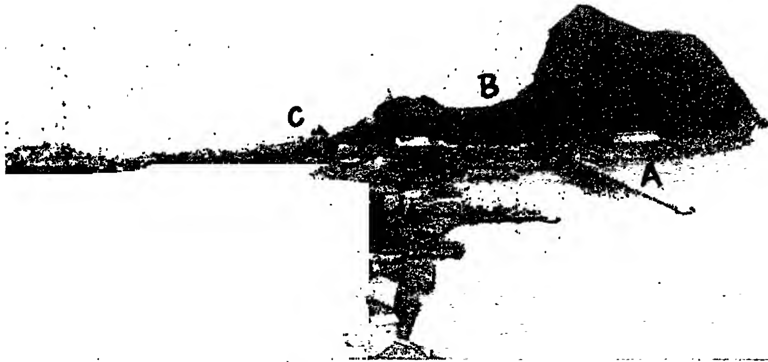


Fig. 2. 利尻島鴛泊市街地の一部とペシ岬の遠望。ペシ岬は天嶮を利用せる砦址である。A點、貝塚。B點、竪穴。C點、道路開鑿の際多數の人骨と土器を出す。

の宗谷との最短距離は二十粁である。廻周凡そ五十八粁の小島にて、南にオタトマリ沼、北に姫沼を有するのみで、河川らしきものはない。然し清冷な飲料水は隨所に得られ、島內密林等もなく、海岸は自然の地形よりして不拔の難所と見るべきものなく、現今では立派な道路が全島を繞つてゐる。全島玄武岩及安山岩より成る。

天然の灣港に乏しく、僅かに鴛泊、鬼脇、仙法志及沓形を數へる事が出來る。就中鴛泊港は地形的には最も惠まれ禮文、宗谷方面との交通の要路である。鬼脇、仙法志、沓形は小樽增毛方面との交通に便利であり、鬼脇は島內文化の關門である。島內に於て消費せられる日用品の大部分は、四十粁を隔てる稚內より供給せられるのではなく、二百粁を隔てる小樽より供給せられてゐるのである。宗谷海峽から此の方面一帶にかけて、有名な濃霧地帶であつて、冬期は宗谷海峽を通過して來る冷風に晒され、海は山瀨多く平穩の日は僅少で、氣候はむしろ日本海側が良好である。現在の島內文化は鬼脇、沓形等の日本海側に於て高く、宗谷樺太側に於て低い感がある。

一二）。此の他鳥居龍藏博士は「有史以前の日本」に於て（162—167頁）沿海州の土器は彌生系に屬するを說き、禮文島出土の薄手派土器（彌生系）を以つて大陸系統のものとなし、之は東北地方の西海岸沿ひに轉々分布し、更に東海道沿岸に入り、九州より沖繩に連るを述べてをられる（文獻一五）。

上述の如く利尻、禮文兩島の先史遺跡及遺物は、發見歷史が相當に古い關係上、公表された立派な報告及論文も決して尠くないが、これ等の多くは實際の調査を伴はず、又調査したものも斷片的な記錄に留つてゐたのは、同地が交通不便な北海の離島の事とて已むを得ぬ事であつた。然し乍ら北海道を中心とする樺太、千島の考古學研究も漸く其の緖につき史前文化の系統的研究に思ひを致すに至り、沿海州より樺太更に北海道への文化交涉を究める爲には、禮文島及利尻島の地理的位置の重要性から、是非とも其の綜合的な調査を必要とするに至つたのである。

先づ第一に利尻島の地誌的概要と遺跡遺物の關係、第二に禮文島の地誌的概要と遺跡遺物の關係、第三に兩島の主要遺物の記載、最後に總括的考察をなし之等二離島の有史以前を假想しようと思ふ。

二 利尻島

利尻島はアイヌ名リイシリであつて、突出せる島の義である。一七一九米の利尻富士は卽利尻島を形造り、海岸に沿ふて僅かの平地を殘してゐるに過ぎない。禮文島を僅か十粁の禮文水道を隔てゝ西北に控へ、北海道本島

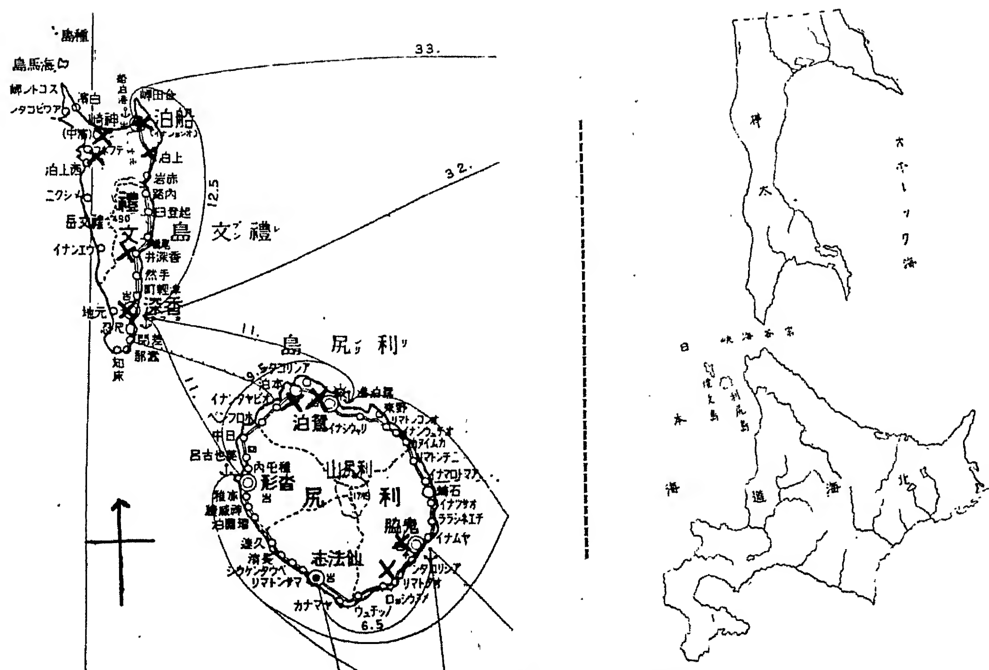


Fig. 1. 利尻及び禮文島一般圖

四)。 三十七年には原忠五郎氏が、禮文島石器時代遺跡に就て言及して居る（文獻五）。 これから暫くの間重要な記事は表れなかつたが、大正十一年十月二十六日に、禮文島船泊村の開拓者福井隆則氏が、三十年來の採集品を携へて鳥居龍藏博士を訪れ、その結果十一年及十二年の二回に亘つて八幡一郎氏の福井氏採集品の紹介があり（文獻六）、石器の系統上北海道本島との連絡を說いてゐる。同年鳥居博士も一個の禮文島土器について書かれた（文獻七）。更に十三年には八幡一郎氏が、禮文島發見の石鏃を附加する骨銛の報告をなし（文獻八）、其の翌年禮文島皆見政春氏より寄贈された土器石器及玉について書いてゐる（文獻九）。 十五年に杉山氏が「日本原始工藝」に於て禮文樺太土器として記載してゐる（文獻一一）。 同年河野常吉氏に依つて、大村氏所藏の利尻島オタトマリ出土の甕形無紋土器が其の著「北海道歷史館陳列品解說」中に載せられてゐる（文獻

利尻、禮文兩島に於ける考古學的調査報告

名取武光

一 緒言

北海道北見國利尻禮文兩島の史前學的調査は、北海道大學博物館としては、其の第一回は明治二十年に小寺助教授其他學生に依つて行はれ、次いで八田三郎博士及當時學生であつた柳川秀興氏は明治四十一年七月に同島を訪れた。昭和七年七月より八月に亘つて行はれたのは第三回に屬するものである。筆者は今回の調査の結果を茲に報告して、諸賢の御教示に預り度い考へである。

尙第三回目の調査に關しては、博物館主任犬飼哲男博士より種々御便宜を忝ふし、又同行後藤壽一氏の御努力に負ふ所が多い。茲に滿腔の謝意を表する次第である。

抑も明治二十二年に代田龜次郎氏が、禮文島發掘の石器及土器について報告したのが、此等北海の離島に於ける先住民族の足跡を學界に紹介した最初のものである（文獻一）。次いで翌年故坪井正五郎博士に依つて同島の骨器が記載され（文獻二）、越へて三十二年には利尻島の石器及其碎屑の石質に就て佐藤傳藏氏の報告がある（文獻三）。其翌年更に坪井博士は、利尻島貝塚發見の獸牙製人形の紹介をなし、エスキモーとの連絡を說き（文獻

1　$^1/_4$

2　$^1/_4$

3　$^1/_4$

4　$^1/_5$

5　$^1/_2$

6　$^1/_2$

禮文島出土土器(名取附圖)

Tongefässe von Insel Rebun. (Natori)

文　獻

餘　白　錄

會　報

目次

資料

史前學雜誌

第五卷 第三號

史前學會々則

一 本會ヲ史前學會ト名付ケル

二 本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三 本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレツトノ發行

史前學雜誌（年六回隔月發行）及年報ノ發行

調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四 會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五 本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル（但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル）

六 會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ共研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七 本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル（將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル）

八 本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所内
史前學會 電話青山一二二五番

幹事 大山柏 甲野勇 杉山壽榮男 田澤金吾

會計 池上啓介 岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年五月二十五日印刷
昭和八年五月三十日發行
第五卷第三號
定價 一圓

編輯者 東京市澁谷區穩田一丁目九番地 大山柏
發行者 東京市澁谷區穩田一丁目九番地 岡田義一
印刷者 東京市神田區表猿樂町二 株式會社開明堂東京營業所 中村修二

發行所 東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内 史前學會 電話青山一二二五番 振替東京五八九六九番

發賣所 東京市神田區駿河臺町一ノ八 岡書院 電話神田二七七五番 振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第五卷　第三號

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

HERAUSGEGEBEN

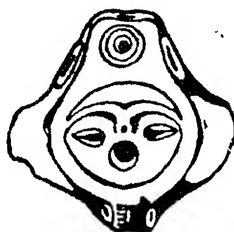
von

KASHIWA OHYAMA

AUSGRABUNGSBERICHT UEBER DEN MUSCHELHAUFEN TÔSANDÔ AUF DER INSEL MAKI-NO-SHIMA, SUED-KOREA.

von

Dr. SHOSABURO YOKOYAMA



5. BAND 4. HEFT

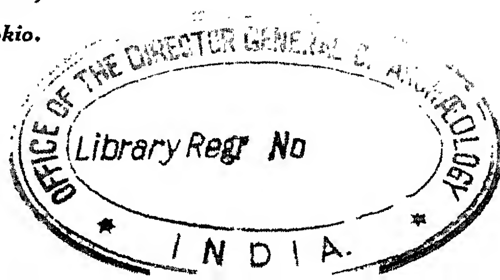
TOKIO

Augst 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama   Sueo Sugiyama
Isamu Kohno   Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

RESUME DES AUSGRABUNGSBERICHTS UEBER DEN MUSCHELHAUFEN TÔSANDÔ AUF DER INSEL MAKI-NO-SHIMA, SUED-KOREA.

von

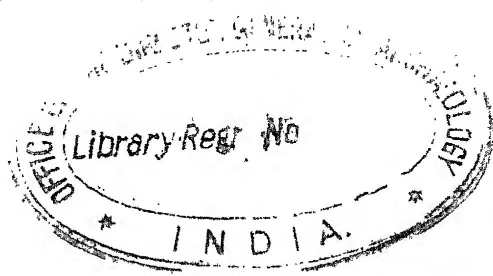
Dr. SHÔSABURÔ YOKOYAMA

I. ALLGEMEINES

Die Steinzeit von Korea ist in unserer Fach-Welt ziemlich bekannt. Aber da darüder meist nur auf japanisch geschrieben ist, ist über sie im Ausland nur sehr wenig bekannt. So werde ich hier etwas ausführlicher über die Steinzeit Kereas und über ihnen interessanten Inhalt berichten.

In Korea fanden sich bisher nur Neolithikum und es fehlen Palaeolithikum sowie Mesolithikum, trotzdem fast im ganzen Land neolithische und noch spätere Funde gemacht wurden.

Das Neolithikum von Korea teile ich in zwei grosse Kulturgruppen, von denen die erste der Yayoi-Kultur der japanischen Inseln ziemlich nahe steht, so dass ich sie bei dieser Gelegenheit übergehe. Die zweite hat andere Kultur-Zusammenhänge, ich teile sie in drei Lokalgruppen. Die erste ist die Nord-Ost Gruppe und in Nord-Ost Korea verbreitet, nähmlich in der Prov. Kankyô-hoku-dô bis nach der Nord-Ostgrenze zwischen der Manchürei und der russischen Küsten Provinz entlang. Die zweite Lokalgruppe findet sich in dem Westküstengebiet von Korea, und hat besonders in der Prov. Kôkai-dô ein Kulturzentrum. Die dritte ist eine kleine Gruppe und findet sich an der Süd Küste und in der Umgebung der Stadt Fuzan ziemlich dicht verbreitet. Der Muschelhaufen Tôsandô gehört auch zu dieser Gruppe (Fig. 1).



Tôsandô liegt auf der Insel Maki-no-shima, unweit der Stadt Fusan. Und auf der Insel Maki-no-shima fanden wir noch mehrere Fundstätten, von denen besonders die Muschelhaufen Seikaku-dô und Eisen wichtig sind.

II. AUSGRABUNG

April 1930 erhielte ich von meinen Freunde Oikawa einen Brief, er habe einen neuen Muschelhaufen auf der Insel Maki-no-shima entdeckt. Am 3. Mai desselben Jahres versuchte ich mit seiner Hilfe nur zur Probe auszngraben. Von 23. bis zum 25. Juli machte ich zum ersten Male eine grössere Grabung mit Hilfe des Herrn Dr. Wakiya und der Herrn Sayama, Hamada und Oikawa. Diesen Herren möchte ich hier mienen herzlichsten Dank aussprechen.

Leider können wir hier die Bodenbeschaffenheit in der Umgebung des Muschelhaufens nicht angeben, weil sie sich innerhalb der Festungszone befindet. Ich zeige nur Schichtungs-Karte (Fig. 2) und andere (Siehe Fig 3—5).

III. 1. Naturreste

Die Arten der in dem Muschelhaufen Tôsandô enthaltenen Muscheln sind wie folgt:

1. *Cardiuui muticum*
2. *Chlorostoma besilirata*
3. *Cyclina sinensis*
4. *Haliotis japonica*
5. *Mitilus grayana*
6. *Ostrea denselamellosa*
7. *Ostrea mullistriata*
8. *Paphia philipinarum*
9. *Pecten laquetus*

10. *Thais broni*

11. *Thais distinquenda*

12. *Turbo conutuks*

Es finden sich viele Knochen von Säugetieren und Fischen, aber nur die folgenden Arten sind sicher feststellbar:

Cervus mandschuricus Swinhoe

Cervus xanthopygus Milne-Edwards

Phoca vitulina largha Pallas.

Pagrosomus major (T. & S.)

Schomberomorus nipho nius Cuvier & Valenciennes.

Pflanzenreste wurden nicht gefunden.

III. 2. Kulturreste aus dem Muschelhaufen Tôsandô.

1) **Steingeräte:** Wohlerhaltene sind selten.

A) Der Produktionsart fanden wir zwei Arten :

(a) polierte.

(b) abgeschlagene, die in Süd-Korea sehr selten sind.

B) Der Form nach

(1) Ovalgeschlagene Steinbeile (Fig. 7 no. 3)

(2) Halbmondmesser (Taf. III. no. 8. 9)

(3) Steinbeile, wie Taf. III. no. 1—7.

(4) Steinlote als Fischfanggerät

(5) Steinerne Pfeilspitze? (Fig. 9)

(6) Speerspitzen (Taf. III. no. 10. 11. 13)

(7) Sägeartige Klinge von Obsidian. (Taf. III. no. 18)

N. B. Nur in der "Geijitsu-Bucht und auf der "Saishûtô Insel findet man Obsidian, sonst nirgends in der Nähe.

2) **Muschelgeräte:**

Küchenmesser (?) aus Austerschale. (Fig. 7 no. 5. 6. 11)

Armling aus *cardium muticum.* (Fig. 7. no. 7—10)

3) **Knochengeräte:**

(1) Spitzen. (Taf. IV, no. 11. 12. 17—19)

(2) Spatel. (Taf. IV, 13—16)

(3) Angelhaken. (Taf. IV, 3. 4)

(4) Röhrenförmig bearbeiteter Vogelknochen als Schmuck. (Taf. IV, no. 9)

(5) Ein Angelhaken aus Zahn. (Taf. IV, no. 1)

(6) Ein halbdurchbohrter Eckzahn als Hängeschmuck. (Taf. IV, no. 8)

4) **Keramik:**

Der Ton mit beigemengten Stein- und Muschel hat Porösität. Die Farben der Oberfläche sind rot, braun, gelb, grau usw. Der Gebrauch der Drehscheibe ist noch unbekannt.

A) Die Formen der Tongefässe:

mit kleiner Variation, meistens tiegelförmig, manchmal auch kugel- oder kürbisförmig. (Taf. V, u. Fig. 13)

Der Boden ist meistens konvex, oft auch ebene, immer aber ohne Fuss. (Fig. 13, 14, 16, 23)

Der Henkel ist halbkreis- oder ohrenförmig. (Fig 17 u. 23)

B) Das Ornament:

mit Zinnoberfarbe ($F_2 O_3$) bemalt oder mit Eindrücken vorsehen. Letzteres lässt sich in drei Gruppen einteilen, Linienmuster, Bandmuster, Verzielung über die ganze Fläche.

(1) Die Linienmuster finden sich wie in der meisten alten Keramik auf der Erde, so auch in der „Jômon-Keramik" in Japan. (Fig. 15, u. a.)

(2) Unter der mit Bandmuster verzierten Keramik findet sich auch eine Art Kamm-Keramik, so genannt weil sie stemmpelartige, regelmässige Eindrücke hat, die nur von den Zälnen eines kammartigen Instrumentes herrühren können.

Diese sog. Kammkeramik ist, wie Prof. R. Fijita mit Recht behauptet, derjenigen verwandt, welche in der neolithischen Zeit in Nordeuropa, Sibirien, in der Küsten-Provinz und in Korea verbreitet ist. (Fig. 26, u. a.)

(3) Die Keramik mit Verzielung über die ganze Fläche findet man in der „älteren Jômon-Kultur" im Kwantô, Mitteljapan. (Fig. 19)

In allgemeinen lässt sich sagen, dass das Ornament der beiden letzten Gruppen wie das der „Jômon-Keramik" sin Vorbild in einen Korbflechtwerk gehabt zu haben scheint; trotzdem fehlen in Korea echte Mattenabdrücke (Jômon).

IV. SCHLUSSBETRACHTUNG

Die schematische Uebersicht unserer Ergebnisse ist wie folgt:

Schematische Übersicht unserer Ergebnisse.

Fundorte / Fundgegenstände	KOREA		JAPAN	
	Nordkorea	Südkorea	Westjapan	Ostjapan
Steingeräte	Klinge I.	Klinge I. Klinge II.	Klinge I. Klinge II.	?
Keramik	Keramik I.	Keramik I. Keramik II.	?	Keramik II.

Klinge I —— Klinge vom Obsidian. (Fig. 24)
Klinge II—— sägeartige Klinge.

Keramik I —— sog. Kammkeramik.
Keramik II—— vollständigverzierte Keramik.

Die Maki-no-shima Kultur der Süd koreanischen Gruppe spielt wahrscheinlich, was allerdings vorerst nur Hypotese ist, eine Vermittler-Rolle zwischen der koreanischen und der japanischen Jômon-Kultur. Es ist aber auch möglich zu denken, die Maki-no-shima Kultur sei einst ein ursprunglicher gleicher Kultur-

Stamm gewesen, und habe sich in die getrennte Jômon- und Süd koreanische Kultur geteilt, sodass also diese beiden Kulturen sich näherstehende verwandte Kulturen wären. Dies ist aber nur meine vorläufige Vermutung, die noch gesichert werden muss.

Für die Mithilfe bei der Ausarbeitung und für die Verbesserung der Uebersetzung danke ich Fürst K. Ohyama und Herrn Dr. C. von Weegmann Tokio.

× × × × × × × ×

ILLUSTRATION

TAFELN

ABBILDUNGEN

<— warme Strömungen

<— kalte Strömungen

<----- untertauchende karte Strömungen

::::::: Seeminen-Fundstellen

に系統關係なきを說き、關東、東北縄紋式文化群に其系統的傳搬を求めた。

四、內地石器時代は朝鮮のそれよりも遲れてゐるため兩者の對比を關東、東北縄紋式文化群前期に求め、なほ將來發見さるべき祖型に期待をかけた。（七・一一・三）

（1）　金海貝塚發掘調査報告、朝鮮總督府大正九年度古蹟調査報告。

（2）　松村博士・琉球荻堂貝塚、人類學教室研究報告第三編三九頁。

（3）（5）　大山公爵・神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告史前研究會小報第一號　二八頁。一八頁。

（4）　鳥居博士・有史以前の日本、三五一頁。

（6）　Pfeiffer, L.: Die Werkzeuge des Steinzeit-Menschen. 140S.

（7）　大野雲外・土中の日本、一五六頁。

（8）（9）　杉山壽榮男・日本原始工藝概說一、二六頁。

（10）　Pfeiffer: Die Werkzeige. 313S.

（11）（12）　大山公爵・土器製作基礎的研究。

（13）　大山公爵・櫛目土器集成、史前學雜誌第一卷一、二、三號、第二卷三號、第四卷三・四號。

（14）　藤田教授・櫛目文樣土器の分布に就きて、靑丘學叢第二卷、一〇七頁。

（15）　Schneider: Die Urkeramiker, Entstehung elnes mesolithischen Volkes und seiner Kultur. 88S.

（16）　小林行雄・彌生式土器に於ける櫛目式文樣の研究、考古學第一卷第五、六號、第二卷第五、六號、第三卷第一號。

（17）　鳥居博士・有史以前の日本、三六五頁。

（18）　藤田教授・朝鮮古蹟及遺物(朝鮮史大系)。

（19）　森教授・朝鮮馬の系統(日本畜產學會報四卷二號)。

（20）　京大考古學研究報告第十冊。

（21）　大原利武氏の研究(近日發表ノ筈)。

（22）　Akhmatov: The Probable Tracks of bottles, thrown for the investigation of currents (The Pacific Russian Scientific Investigations. 1926).

（23）　Oyama: Vorläufiger Bericht über die Chronologie der Jomon-Kultur der Steinzeit.

筒形を想起せしめる。

朝鮮及內地の史前遺蹟より檢出される家犬に狆犬に類する小形種と狆犬に類する中形種とがあつて、內地では石器時代繩紋式遺蹟出土なるに朝鮮では金石時代第一式遺蹟からである(24)。中形種は矮馬と同樣に南支那より渡來し內地を經て朝鮮に來たかも分らないが小形種は確かに朝鮮より內地に渡りしものである。依つて朝鮮が既に金石時代であつて有紋土器は姿を沒してゐた頃內地繩紋式文化階梯はなほ石器時代に停滯してゐたものの如くである。されば北鮮にて第二式土器が金石時代文化階梯に入つて退化乃至消滅したるに、內地に於てはなほ盛に繩紋土器が製作されてゐたのである。此の間に所謂後期繩紋土器の發達を見たものではあるまいか。故に之を第二式文化系統に屬せしめるならば繩紋は地方文化相の甚だ大なる特異性と認むべきであらう。なほ繩席紋出現の初期に於ては羽狀式繩紋が現はれるのは羽狀帶狀紋の名殘を留めるものであつて、繩席紋の發生は點列紋(朝鮮では疑似繩紋に發達す)の機械化と見るべきではあるまいか。

然し此等の問題の解決は內地繩紋式土器の祖型の發見されし將來に待つべきものである。

× × × ×

以上述べしことを總括して結言に代へる。

一、朝鮮史前遺蹟を二文化系統に區別し、東三洞は第二式に屬する。

二、南鮮第二式文化の文化階梯をば(u)→T(o)→E→(金石時代)。其移動を北鮮→(關東、東北)→南鮮→西鮮と認定した。

三、其第二式文化移動の動向規定を海流に求め、九州文化群

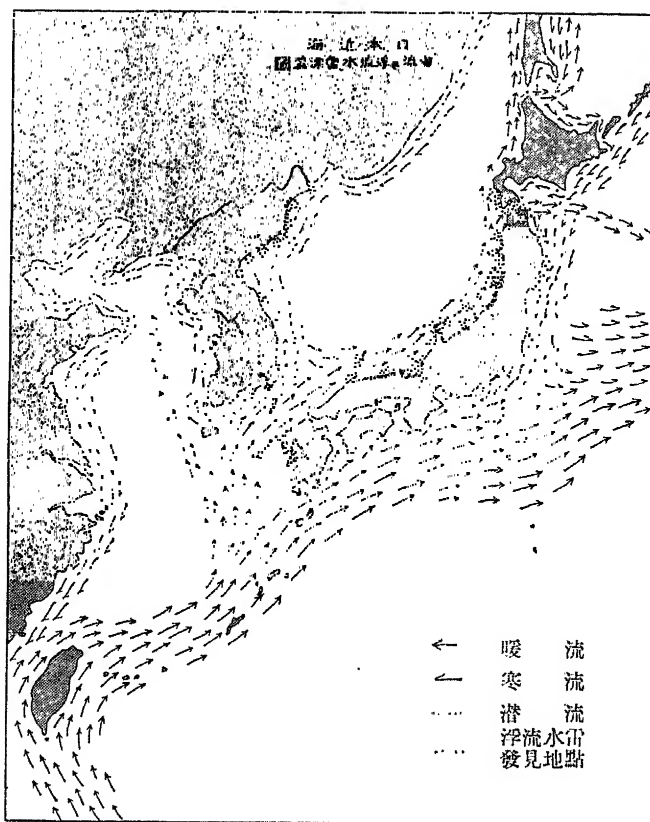


Fig. 43　日本近海々流及浮流水雷發見地點圖(大原氏ニヨル)

て之は裏日本海岸に沿ふて北上してゐる。リマン海流の一部は欝陵島附近にて分離してこの對馬暖流の北側に之と併行して北上し遂に合流する。(大原利武氏の研究に據る)。

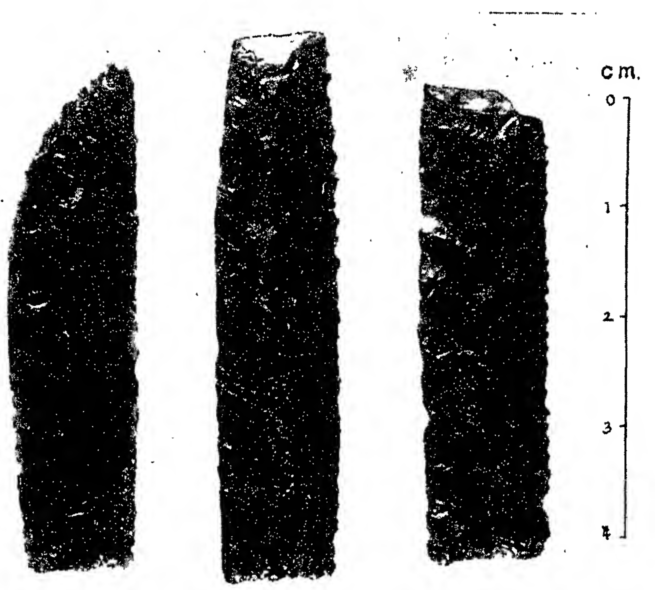


Fig. 42　茂山出土石鋸

故に第二式文化が海流によつて傳搬されたとすれば九州に將來されなかつたのは當然であつて決して不自然ではない。故に空間的には却つて遠隔にある內地中部以北に傳搬された可能性がある。日露戰爭に於て浦鹽斯德港外に沈置した機械水雷が後に多數の浮流水雷となり本邦に漂着又は發見されたが其地點を觀察すれば其可能性はよほど大となる。(第四三圖は大原氏の厚意による)。又、アクマトフの示す日本海に於ける多年の研究になる潮流表もまた充分なる參考となる(22)。

されば朝鮮第一式文化が內地彌生式に系統的連絡があるものと認むるとすれば同時に朝鮮第二式文化と內地繩紋式とに系統的關係を承認しなければならぬ。然しそれが九州に於て失敗したるは以上の理由に基くが故に、私等は之を九州文化群に求めずして關東、東北文化群に於て求むべきである。

北鮮乃至南鮮第二式文化群と關東乃至東北繩紋式文化群とは打石器、黑耀石利用、土器に於ける編物等の工藝意匠紋への發展に於て一致するけれども前者には繩席紋なく、後者にはそれが存在することは一の難關と云はねばならぬ。

然し次に述べる如き理由によつて第二文化群は內地繩紋式文化群の文化階梯前期と對比さるべきである。然る時には關東文化階梯前期指扇式に就いて其文化相を見るに繩席紋は甚だ稀であつて、線列、平行集線（櫛目様）の不規則なる施紋を認め、土器形態は簡單であつて尖底（拋物線狀?）多く、厚手粗雜である(23)。この徵表(メルクマール)は東三洞遺蹟〔T(u)〕と甚だ類似する。又東北文化階梯前期の圓筒土器は北鮮文化群の一般的特徴たる圓

（汎と稱す）と日本海流の存在(21)は南支那と九州との關係を全く無視し得ないからである。

次に石鋸の特殊形式に於ける著しき一致は東三洞と五島との間の交通を肯定せねばならないが、なほ直接的か間接的かが疑問である。故に此の一事を以て文化系統を探ぬることは寧ろ危險である。元來石鋸は比較的大型のものは骨角器製作、細工用に使ひられたでもあらうが其細小なるものはドウ・モルガンが說ける如く、之を一列に彎曲せる木片等に植込みて鎌となしたことも承認さるべきであらう。（第四〇、四一圖）。若し然りとすれば咸北茂山に於て私が之を數個一緒に發見したる事實は頗る意味のあることと思ふ。（第四二圖擴大）。故にかゝる精巧なる細小石鋸の存在は一般に農耕文化の存在を表示するものではあるが文化移動傳播を語るものとは見ることが出來ない。

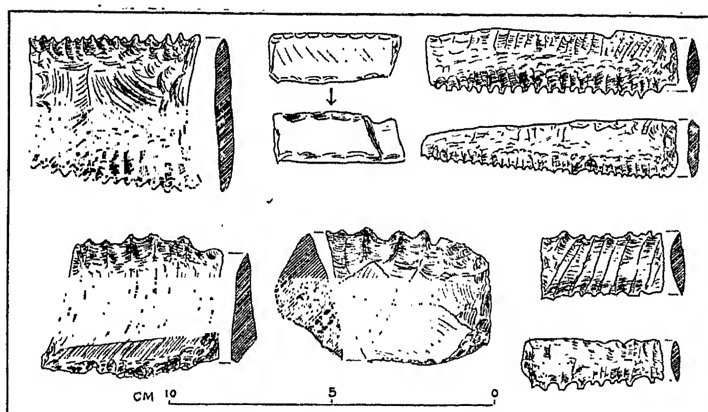


Fig. 41　油坂出土石器實測圖

要之、現在に於ては北九州地方には第二式文化の傳播を認むることが出來ない。一般に此地方には彌生式と繩紋式との二大文化群の對立があり、朝鮮にもまた第一式第二式との二大文化群の對立があつて而も第一式は彌生式に系統的聯絡があると認めらるるに拘らず、其對立の他の一方の第二式と繩紋式とが系統的關係を有しないことは不自然な感があり、一の謎と云はなければならぬ。この謎を解く鍵は第二式文化移動の方向と之を傳搬した自然力の動向とに求むべきである。

朝鮮に於ける第二式文化が海によつて北鮮より南鮮を經て西鮮に移動したことを先に述べたが、此の文化傳搬に役立つた海の自然力は海流に求むべきである。風力の利用も考へられないではないが季節風の如く定期的か偶然的であつて文化群の移動には不適當である。天文に關する觀察を經驗しない自然民族には先づ不可能とみるべきであらう。

朝鮮沿岸に於ける海流は沿海州海岸に沿ふて流れ來たリマン海流であつて北鮮海岸を洗ふて南下し對馬海峽より潛流となつて南鮮を迂廻して濟州島西方に至つて浮出して西鮮海岸に沿ふて北流してゐる。然るに九州北岸を洗ふものは對馬暖流であつ

手、精巧なるに西鮮は粗雜、厚手である。南鮮はその中間にある。

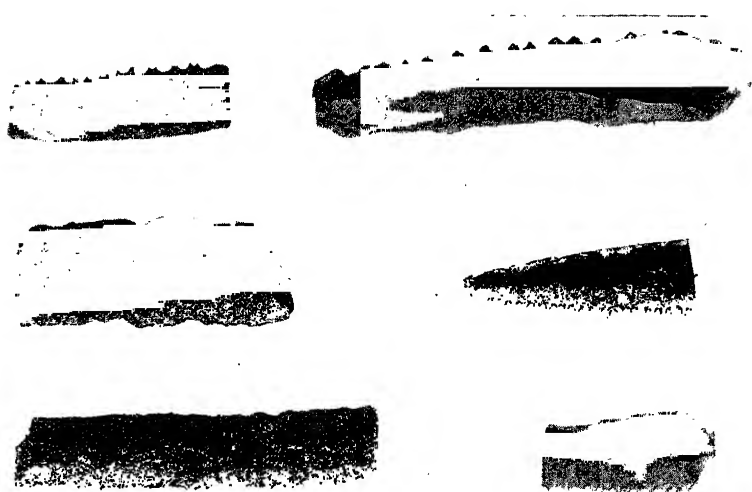


Fig. 40 雄基出土石器（朝鮮總督府博物館所藏）

此の二の事實は第二式文化が海によつて北鮮より南鮮を迂廻して西鮮に移動傳播して行つたことを示すものである。北鮮に於て富豐な打製石器と黑耀石利用がなほ南鮮に僅かに其痕跡を留めてゐること、北鮮にて最も發育したる打製土掻の祖型ともみるべき杓子形石斧を南鮮〔T（o）〕に發見すること、なほ西鮮に於てはもはやこの痕跡を認められぬことは之を裏書するものである。

內地諸文化群 北九州文化群と南鮮第二式文化群とを對照するに全くその系統を異にしてゐるが、ただ遠賀川畔立屋敷出土土器と五島産の石鋸とが私等の注意を喚起する。前者に就いては中山博士の高說あり、後者には八重津氏の蒐集がある。

中山博士の銅鐸、細線鋸齒紋鏡の紋樣と遠賀川遺蹟出土土器紋樣との對比研究には誠に敬服すべきものであるが其遠賀川土器と朝鮮第二式土器との關係に就いては遽かに肯定し難きものがある。遠賀川遺蹟の文化相に就いては田中幸夫、山本博等の諸兄の報告があるが、それによつて明示された如く金石時代の彌生式であつて把手、石庖丁を出してゐる。若し之が中山博士の說の如く朝鮮第二式系統だとすれば混合型遺蹟でなくてはならぬ。然る場合には關門地方の小島嶼に其純粹型第二式遺蹟が發見せらるべきことが豫想されるが、その發見なき限り、土器紋樣の抽象的比較よりして朝鮮第二式に其系統を求むることは無理であるまいか。又遠賀川土器紋樣が銅鐸と聯絡あるものとすれば鳥居博士の南支那說にも一應は考慮を拂はるべきものであらう。內地石器時代遺蹟出土の矮馬は支那四川省地方より渡來せること(19)、日本及南鮮出土の硬玉も南支那から將來されたこと(20)、關釜海峽と南支那とを結合する春秋二季の北東風

岩寺里遺蹟につきては近く報告する豫定であるがその文化相を要約すれば廣範なる河段丘上の遺蹟にして貝塚の痕跡を認める。漁撈、狩獵と共に農耕も盛であつたらしい(石皿、粗打製石斧、而も其特型を出土す)。蒙古馬の檢出と人骨の發見があつた。玉質及滑石製耳飾は比較的種類多し。石器は種類に富み且つ多量である。磨製有勢にして打製稀である。砂粒含有の無紋土器と少數の石庖丁は混合型なることを想はしめるものであるが、其大多數の土器は雲母、乃至滑石、石綿を含有し、成坏技術の一大進歩を示してゐる。紋樣は變化と種類に富み、精巧にして洗練されたものには疑似繩紋と思はれるもの多し。(第三八、三九圖)。

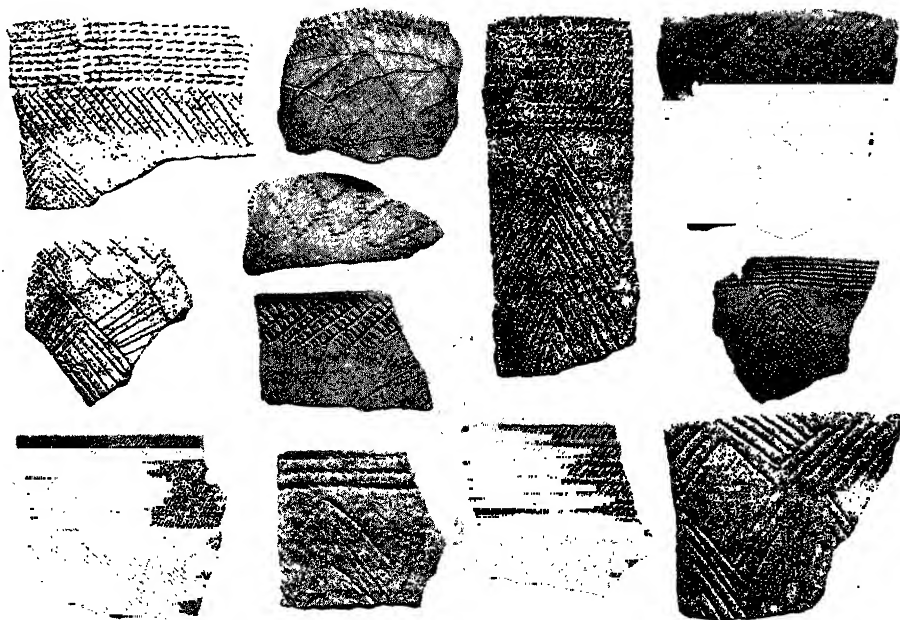


Fig. 39　岩寺里出土土器(朝鮮總督府博物館寫眞ニヨル)

然し黝色陶質土器、赤色素燒土器の出現と共に有紋土器は其姿を沒し去つてゐる。なほ銅鏃、鐵器等の出土がある。

以上を概括するに、(一)遺蹟については純粹型は島嶼に多く、海岸砂丘、河段丘、河の奧地に移るに從ひ文化階梯が高まると共に混合型が多くなる。特に西鮮文化群に於て混合型遺蹟が多いものの如くである。(二)第二式文化の標式たる有紋土器に就いて云へば金石時代乃至之に近い時代の文化階梯に於ては北鮮文化群にては退化を示せるに反し、西鮮文化群には却つて著しき發展を見せてゐる。南鮮文化群に於ては硬化の過程を辿つてゐる。然るに石器時代の文化階梯にあつては反對の現象を見るのである。即ち北鮮は薄

をも兼ねてゐた。黒耀石の利用盛なるも石器の種類少く、土器製作は薄手、精巧なるも形態に變化少し。其紋様は變化に富み洗練されてゐる。

之を南鮮文化群に對比するに全體としてはＴ（ｏ）と餘り距離を有せざる文化階梯にある。

雄基貝塚については藤田教授の詳細なる研究報告が發表せらるる筈であるが、教授並に博物館諸兄の厚意によつて其文化相を概觀するに、海岸砂丘上の廣範なる遺蹟であつて、狩獵、漁撈を營むと共に農耕も盛であつたらしい。北鮮に最も發育した打製土搔出土す。金海貝塚、岩寺里遺蹟と同種の蒙古馬が檢出され、埋葬された人骨が出土した。多量の而も多種多様の貝輪と玉質曲玉あり、石器は種類と變化に富み、鐵器を伴ひ、土器形態は有頸壺形、盌形、鉢形、圓筒形等の種類多し。有紋土器以外に精緻なる彩色土器がある。然し、瘤狀把手ある無紋土器並に石庖丁の出土は此遺蹟が混合型なることを示すものである。

斯くの如く文化内容は甚だ富豐であるが有紋土器そのものに就いては却つて紋様の口邊部に退化萎縮するのをみる。

西鮮文化群 に於ては平安道龍磻里貝塚と漢江河畔岩寺里遺蹟に就いてみる。前者は石器時代純粹型第二式遺蹟であり、後者は金石時代に觸れたる混合型遺蹟である。

龍磻里貝塚の文化相は島嶼の丘陵に居住し、漁撈狩獵を營んでゐた。石器は種類に乏しく、發見量も僅少である。土器は其製作粗大であつて紋樣も粗笨である。（鳥居博士大正五年度古蹟調査報告に據る）。この遺蹟が如何なる文化階梯にあつたかは遽に決定し難いが、此の文化群に於ける純粹型石器時代遺蹟の土器は一般に厚手であつて紋樣も比較的まづいことが認められる。第二式土器をば薄手、精巧と規定せらるゝ藤田教授が此の文化群は例外として厚手であるとされたのもこの事實を指示するものと云はねばならぬ。

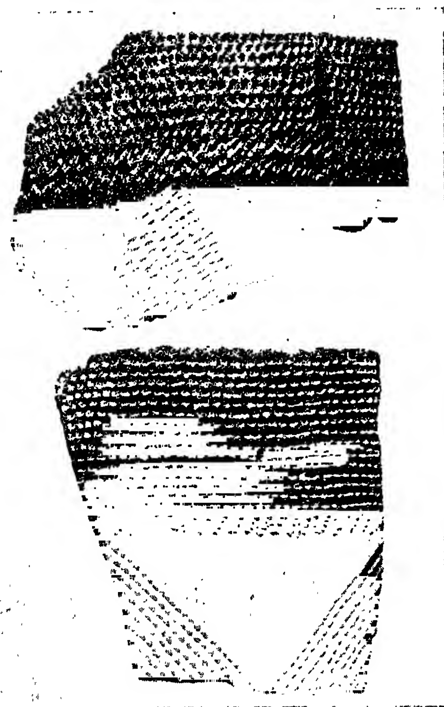


Fig. 38 岩寺里出土土器

此等の地方の文化群と東三洞貝塚との關係につき考察を進めることにする。

北鮮文化群 朝鮮史前遺蹟に於ける編年・文化階梯等の全稱的調査研究は未だその緒に就いてゐない。故に止むなく文化階梯を異にする標式的遺蹟によつて其文化相を視ふことにする。先づ北鮮文化群に於ては油坂貝塚と雄基貝塚とを撰ぶことにす

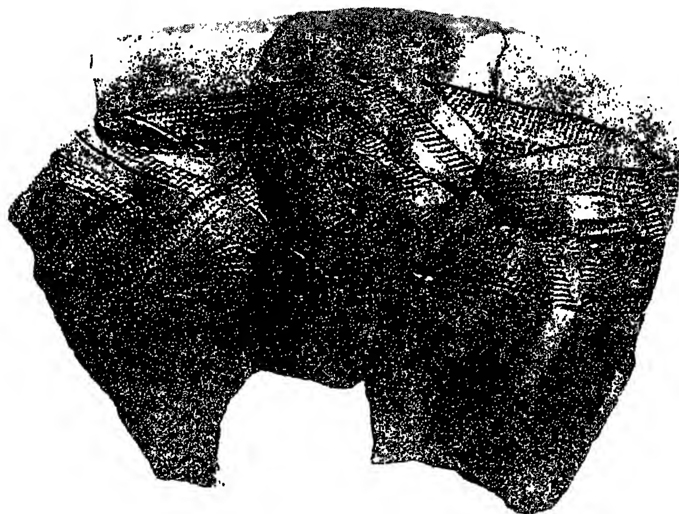


Fig. 37 油坂出土土器

る。前者は純粋型石器時代第二式遺蹟であり、後者は混合型石時代遺蹟である。

油坂遺蹟は現在、輸城川、羅北川の堆積せる沖積層中の丘陵上にあるが貝塚成立當時には清津、輸城、羅南を結びたる灣口にある一孤島であつたことが想像出來る。

自然遺物は猪、鹿、犬類である。人工遺物に就いては動物性品不明である。石器は利器として磨製に石斧、石鏃あり、打製に黑耀石製品多數あるも種類に乏し。粗製打石斧も採集されたと聞く。其他に凹石、舟型砥石がある。

土器は其製作精巧薄手にして〇・五糎が普通である。之を反射檢微鏡下にて檢するに龜裂を有せず。砂粒を含有するも雲母を混入するもの稀である。朝鮮總督府中央試驗所報告（第二回）によれば此地方（特に生氣領）に於ては良質の粘土を產し氣乾並に燒成收縮が少いと云ふ。其形態は圓筒形最も多く、椀形、鉢形も少くはない。小形のものは胴部に緊迫部を有し、口邊やゝ外反となつてゐる。然し全體として變化に乏しい。底に數個の孔ある甑が認められた（羅南小學校所藏）。農耕の存在を想像せしめる。底部は平底又は上げ底にして丸底は認められない。其紋樣は總て沈紋にて、櫛樣の篦の使用が認められる。集點列、集線列II、平行集線IIIAの帶狀紋が有勢であり、充塡紋IVも認めれる。但し此の場合の充塡紋は極めて洗練されたもので編物等の工藝意匠を巧に表現し、疑似繩紋とも云ふべきものを認める。組線紋は劣勢である。（第二十九―三十一、三十七圖）。

油坂貝塚文化相は島に往居する漁者であつて狩獵と共に農耕

散布地點は遺蹟の周邊部貝層が開墾によつて攪散されたものと思はれるが故に、此散布地域の遺物はA地點下層遺物よりも新しきものの如くである。此の點を吞み込んで釜山考古會採集品及表面採集品を取扱ふことにした。

さて茲に瀛仙町、東三洞上層、下層の遺物の對比を簡略にするため表示すれば前頁の如くなる。(表中△印は釜山考古會採集を示す)

右の表に示す如く動物性遺物の欄に缺くる所ありて其異同を比較し得ないのみならず、兩貝塚構成の貝類の種別に就いても其比較を試み得ないことは誠に遺憾である。

T(u)は一般に遺物が粗雜にして變化に乏しきもEは精巧にして洗練されてゐるが故にEはT(u)よりも甚だ高き文化階梯に到達してゐると云ひ得る。而してT(o)はEとT(u)との中間的位置にあることを對比表が明示してゐる。及川氏がC地點發掘の際T(o)がEに近いとの印象を得られたのもこのためである。故に茲に南鮮文化群に於て次の如き文化階梯を想定することが出來る。

(金石時代)↑E ←— T(o) ←— T(u)

要之、東三洞貝塚下層遺物は南鮮文化群の文化階梯に於て相當に低い位置を占め、其上層は瀛仙町文化階梯を經て金石時代に接してゐるのである。

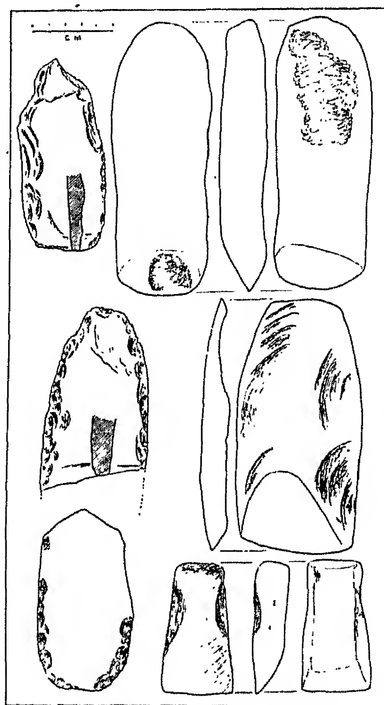


Fig. 36　瀛仙町出土石器實測圖

(三)東三洞貝塚と他文化群との關係

朝鮮東海岸に於ては第二式遺蹟の發見例頗る僅少であるが西海岸に於ては黄海道を中心として一の濃厚な分布地域がある。而して北部地方特に咸北にもまた其分布が濃厚であることは先に述べた。依つて黄海に面して西鮮文化群があり、日本海に面して北鮮文化群があつて、其各に第二式文化中樞があるものとみなければならない。然るに南方朝鮮海峽を隔てては北九州の彌生式文化群と天草灣を中心とする縄紋式文化群とがあつて未だ此の地方に第二式文化群の存在を認め得ない。(この事實は史前學に於ける一の興味ある謎であつて、その解決は內地縄紋式文化の系統を究明する鍵となる)。

被覆土は精密なる發掘手續によつてなされたために正確に記錄されてあり、又被覆土包含遺物と貝層包含遺物とは明瞭に區別せられ得るが故に便宜上貝層と被覆土中の黑色腐蝕土層とを區別し、茲に假りに界線を想定して前者を下層、後者を上層と呼ぶことにする。(東三洞貝塚を表現するにTなる記號を用ひ、其上層をT(o)、下層をT(u)と略記する。瀛仙町貝塚はEなる記號を用ふることにする)。

下層は西方に奥に進めば消失して黑色腐蝕土層と化し上層に絡つてゐる。故に私等の發掘したA地點は遺蹟の中樞部に近い所であつたと思はれる。當時丘陵端の傾斜面に沿ふて貝殼が捨てられて貝塚が形成されて行つたものと考へられるが、それが時間の經過と共に貝塚の幅が廣くなり遺蹟が擴大するにつれて當時の住民が斜面に貝殼を捨てるのには其の既成貝塚の上を踏み越えて行かねばならない。かくして中樞部に近い貝層の上に黑色腐蝕土の被覆を生じたものと思はれる。若し然りとすれば其黑色被覆土層は貝塚が營まれてゐた當時既に形成されたものにして、其下位にある貝層よりも遲れて形成された周邊部の貝層とは大約其時期を同じくすると認めてよい。斯く認める時には遺蹟の周邊部C地點に於けるA層、B層はA地點の下層よりも新しきものとなる。同樣に又遺蹟の南隅の

遺物＼遺蹟		瀛仙町E	東三洞上層T(O)	東三洞下層T(u)
動物性品	實用品	?	△有孔骨針 △釣針	貝庖丁、骨斧、尖頭器 釣針、骨篦、釣手(?)
	裝飾品	?	貝輪	貝輪、有孔獸牙
石器	磨製	石斧	△石鏃、石斧	ナシ
	半磨製	石斧	石斧、半月形品	石斧(薄刄)
	打製	土搔	石斧、土搔、石槍、	石斧、皮剝、石槍
	黑耀石	ナシ	石鋸、刄器	△刄器
	其他	?	砥石(舟型)	砥石(粗面)
土器	形態	椀形、深鉢形、	椀形、深鉢形、	椀形、深鉢形、抛物體狀、
	製作	雲母、滑石含有セズ	△滑石、雲母含有、稀	砂粒、貝殼含有。雲母滑石ナシ
		薄手、精巧	薄手精巧モアリ、	厚手粗雜多シ、
	紋樣	羽狀帶狀紋有勢、	帶狀紋有勢	無紋、IIIA′有勢
		紐線紋、稀	紐線紋アリ	紐線紋アリ
			△全面紋僅少	全面紋アリ
	陶質	アリ、(把手)	ナシ	ナシ

燒土器が混じて發見されてゐる。又此種土器に附屬する角形把手も採集されてゐる。此等の土器は金海貝塚出土品と共性質を同じくしてゐる。金石時代のものである。石器は打製石斧が數個採集されてゐるが黑耀石の出土は聞かない。磨製には棒狀の自然石を利用して一端に磨研により兩刄を付したものがある。中央部は心持ち窪みて柄を付するの用意に出てゐる。別に濱田氏が精巧に磨研せる灰白色粘板岩質の片刄撥型石斧を採集された。横斷面は梯形にして兩側に輕度の抉入あり。之と同樣のものが金海より出土せりと云ふ。(第三十六圖) 此等遺物の層位的關係は全く不明であつて及川氏は其下層部に帶狀紋土器の存在を確認されてゐるが兩種土器が同時的に存在せるものか、或は陶質、素燒土器が後に現はれたものかは今日之を決定する直接的資料を缺いてゐる。間接的に次の如き推測が可能である。この陶質、素燒土器と其本質を同じくする土器を出土する金海貝塚にも東萊貝塚にも、第二式土器の存在が認められない。故に瀛仙町の有紋土器は此の陶質土器出現と共にまもなく其姿を消したと見ることが妥當である。私は之と同樣の事實を、空間的には少し隔てゐるが漢江河畔岩寺里遺蹟に於て認めた。卽ち陶質、素燒土器の出現と共に第二式有紋土器が全く其姿を沒することを層位的關係に於て認識した。而して金海貝塚は金石時代であつて貨泉の出土によつて西暦一、二世紀頃と推定されてゐる。依て瀛仙町貝塚の有紋土器の消滅は石器時代末、おそくも金石時代初頭であつて、西暦紀元前後頃とみるも差支ないであらう。

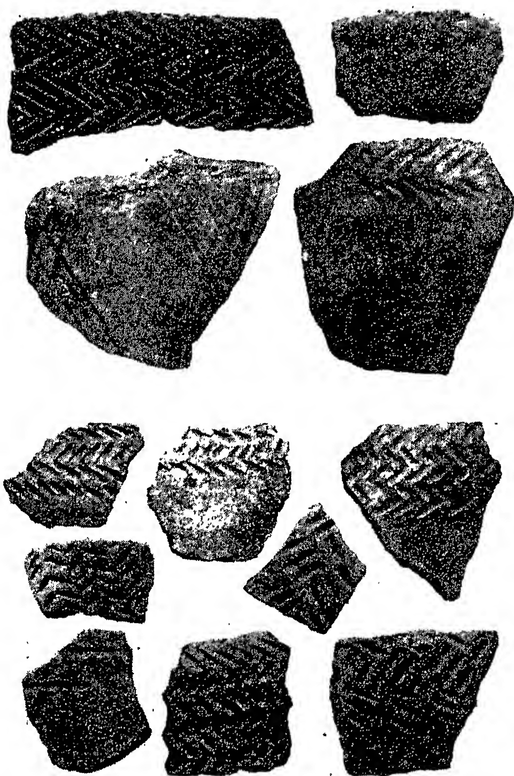


Fig. 35　瀛仙町出土土器

　ここに瀛仙町遺物と東三洞遺蹟とを對比すべきであるがそれに先立ちて、東三洞遺蹟の層位關係と表面採集遺物の處置に就き豫め述べておかなければならないことがある。

　東三洞遺物が、前後二期に識別せられることを既に述べたのであるが、その界線を遺蹟の何所に置くべきかは說明しなかつた。想ふにこの前期から後期への推移はおそらく漸進的なものであつて劃然たる界線を以て區別することは或は困難かも知れない。然し、發掘の際、

群とが認められる。之を假りに北鮮文化群、西鮮文化群、南鮮文化群と稱す。

（二）東三洞貝塚の南鮮文化群に於ける文化階梯上の位置

南鮮に於ては東三洞貝塚の所在する牧の島に靑鶴洞貝塚、瀛仙町貝塚が存在することは既に述べた。牧の島の東方に當つて南に突出したる半島の東岸に岩南洞貝塚がある。鳥居博士によつて發掘され現在では全滅し、而もその遺物を見るの機會を得てゐないが故に遺憾である。然し幸にして日本石器時代地名表(昭和版)には此遺蹟のみ何故か有紋土器と記されてあり、亦大西、宮川兩氏によつて僅かに得られた數個の土器端片によつて點列紋、線列紋の存在が認められた。依て第二式遺蹟であることは確かであるが其文化內容は不明である。鳥居博士は濟州島にも有紋土器出土遺蹟のあることを述べてゐられるけれども之に就いてもまた何等其內容を知る由がない。

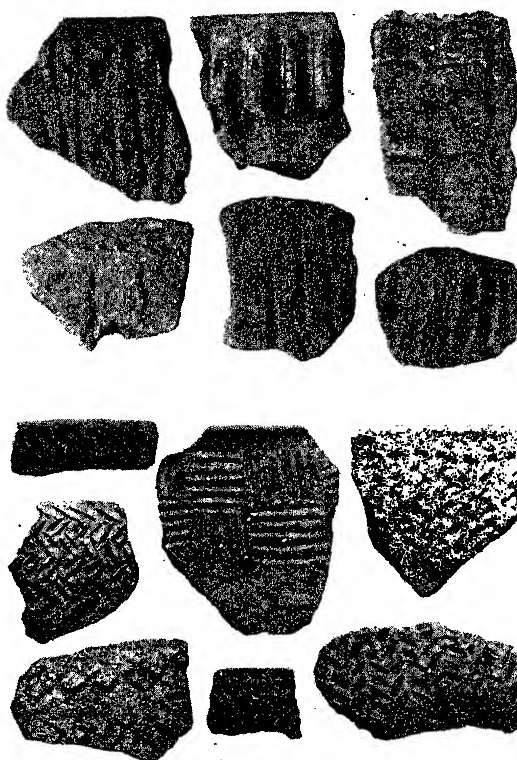


Fig. 34　瀛仙町出土土器

斯の如き事情によつて私は今日知り得る文化內容は瀛仙町貝塚のみである。之は全く釜山考古學會員特に大曲、濱田兩氏の獻身的努力の賜物である。

そこで先づこの瀛仙町遺物に就き概說し、東三洞遺物と對比して南鮮文化群の文化階梯を想定しやうと思ふ。

瀛仙町貝塚　土器形態は椀形、深鉢形、最も多く、なほ頸を有するもの數個あり、丸底多きことも亦特異とする。土器紋樣は口唇部に刻目IA'''を伴ふ羽狀集線II、最も有勢にして平行集線IIIA、斜交集線IIIB、線束組合(網代)IIICもある。しかし紐線紋としては點列IA、細紐狀太隆式線點列Ie'が僅かに認められる。(第三四—三五圖)。なほ之とは全然異る黝色陶質土器、赤色素燒土器に薄手の布席の押印ある栗色素

者ではない。

次に朝鮮の遺蹟に第一式と第二式とが存在する所以を考察するに、人種的差違、生業樣式の相違、文化來着の先後等の説が提唱されてゐる。朝鮮史前遺蹟からは人骨の出土例極めて少く、將來にも期待し難いから人種的差違説の確率は甚だ少い。故に現在では人種問題には觸れない方が危險を伴はない。次に第一式は山の手の狩獵生活、第二式は海岸の漁撈生活と決定することもまた困難である。何者、生活樣式は其文化により其環境により必しも一樣ではあるまい。諸種の文化階梯の遺蹟が常に一樣に狩獵又は漁撈のみを生業としてゐたとは決定し得ない。されば先づ二型式は文化系統を違にするものと解釋することが最も穩當である。然しこの二系統の文化がその根幹を同じくする姉妹文化であるか、或は異種文化であるかは此等文化の始原を究明し得て後に始めて確答さるべきもので、大陸の一角朝鮮半島の調査研究の結果からでは歸納し難き問題である。故に文化の悠久なる淵源問題には觸るることなく玆には簡單に相違する二系統の文化とするより他はない。なほ第一式文化が先着し、稍々遲れて第二式文化が渡來したと豫斷することも愼まねばなるまい。それは兩系統の文化圏、文化中樞、文化階梯等が闡明されたる後に於て解決さるべきものであるからである。

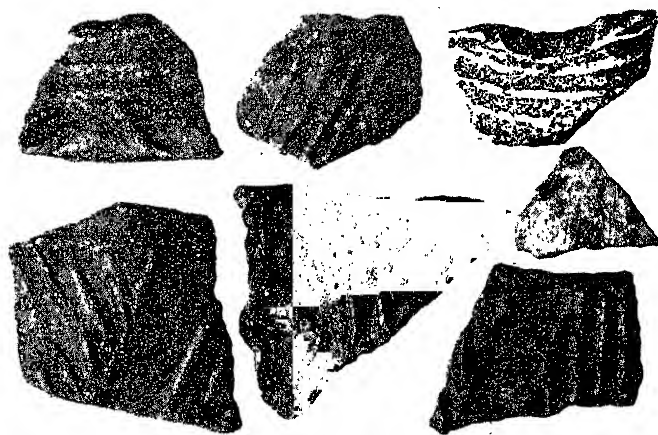


Fig. 33　東三洞出土土器

要之、朝鮮史前遺蹟の二型式は文化系統を違にするものであつて第一式は彌生式文化系統に關係するものと認めてよい。

最後に第二式遺蹟の朝鮮に於ける分布狀態を管見するに、藤田教授によつて其發見地名表が作製され、漸次增補されつゝある。其結果によれば西海岸に於ては平安道、黃海道、京畿道にわたつて相當に濃厚に分布し、日本海岸に於ては咸境北道に豐富である。又南鮮に於ては少數ながら存在する。將來發見さるべきことを豫想し又期待しなければならないが現在に於ては大體に咸北と黃海道を中心とした二大文化群と釜山地方の小文化

である。私の見るところを忌憚なく云へば土器の厚薄、土質の精粗、製作の巧拙等は其土器の所屬する文化階梯の高低に依存するのが一般的現象であつて必しも土器が指示する文化系統に基因するものではない。されば朝鮮史前遺蹟は土器の紋樣及諸種把手の有無によつて二型式に識別されることになる。今玆に行文省路の便宜上、第一式第二式と云ふ語にて區別する時は無紋土器と把手の出土する遺蹟は第一式となり、有紋土器は第二式遺蹟の標式となる。若し無紋土器、把手及有紋土器を出土する場合には混合型遺蹟である。之に對して標式土器のみの遺蹟を純粹型とする。

純粹型第一式遺蹟からは厦、石庖丁、抉入石斧の伴出を見るが

Fig. 32　東三洞出土土器

第二式遺蹟からは其發見例を聞かない。內地の彌生式遺蹟からはこれと同樣の石器を伴出するのみならず、第一式後期の金石時代遺蹟から出土する黝色陶質土器が內地祝部土器と其本質を同じくする點から此の祝部土器、所謂朝鮮土器の先驅たる彌生式土器と第一式土器とが同一系統であることが一般に唱へられてゐる。第一式文化階梯編年等に就いては全く調査研究が進められてゐないが內地の彌生式に就いても同樣に之を缺いてゐる。故に兩者を精確に比較對照することは今日不可能な情態にあるから私等は朝鮮第一式が內地彌生式と系統を同じくすることの普遍妥當性と必然性とを證することは望み難い。さりとて之を否疑する理由を發見しない限りこの說を承認するに躊躇する

い。装身具として確實なものは貝輪と有孔獸牙が認められるのみである。

遺物は生硬稚拙にして充分なる發達をとげてゐないものが多量である。而て遺蹟の存在狀態より前後二期に識別し得られ、その前期遺物は特に著しく古拙の感を懷かしめる。

四 東三洞貝塚の朝鮮石器時代に於ける位置

（一）朝鮮に於ける石器時代遺蹟の二型式

朝鮮に於ける石器時代遺蹟に就いて鳥居博士はその出土土器の型式より二種に識別せられてゐる(17)。城大の藤田教授は其土器型式の認識に於ける徴表（メルクマール）に於て鳥居博士と多少見解を異にされてゐるとは雖もこの二型式の存在を認むる點に於ては異論がない(18)。即ち兩氏は無紋土器と有紋土器とに區別し、前者は諸種の把手を有するに對し後者は把手を有するもの稀なることを認めてゐる。又有紋土器が、海岸及河の流域に分布してゐる事實も、それが意味把握に至つては一致を見ないけれども、その事實は共に認むるところである。

然し鳥居博士が有紋土器の紋樣を幾何學的となせるに對し濱田博士は條線紋となし、藤田教授は櫛目紋とされてゐるが之は着眼點の相違に基くものにして根本的なものではなく問題とするには及ばない。次に鳥居博士は無紋土器を砂粒含有の薄手、有紋土器を雲母含有の厚手とされたるに反して藤田教授は前者を質粗にして厚手、後者を製作、精巧にして薄手とされ、且つ雲母含有は有紋土器の特質ではないと斥けられてゐる。なるほど雲母片を含有するのは自然に混入したものであつて敢て有紋土器に限つた特徴ではないが、それと同様に厚手薄手も何れかの型式に歸着せしめねばならぬと限られたことは誠に惜しむべきこと

Fig. 31 油坂出土土器

は地形上自然と貝塚の限界をなしてゐるものの如くである。故にC地點は貝塚の周縁部に該當し、A地點よりも遲れて貝殼積成が行はれたことを推定し得る。されば櫛目紋土器製作が盛になつたのは本貝塚の後期に屬することと見るべきである。而してC地點B層がA地點の貝層上の黑色腐蝕土層に相當するものとすればそこには何等かの變化を豫想しなければならない。C地點發掘の當時及川氏は瀛仙町貝塚に近似するとの印象を報ぜられたが理由なきにはあらざるも、それは後に讓りて茲には保留する。

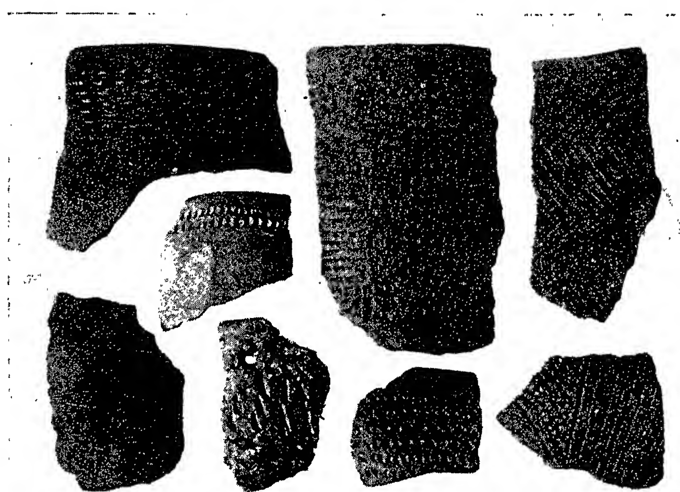


Fig. 29　油坂出土土器

× × × × ×

本貝塚出土遺物に就き以上縷々叙述したるところを要約すれば、土器は形態の變化にとぼしく僅かに椀形、深鉢形が收約によつて頸乃至腰を形成するのみであつて、其紋樣とても多種多樣と云ふ方ではなく、量から云へば無紋が最も多數である。石器は磨製よりも打製多く、石斧、石鏃等の利器以外に石棒石皿等の存在が認められず、骨角器類も少數認められるけれども釣針、銛等の著しく發達したるものを見な

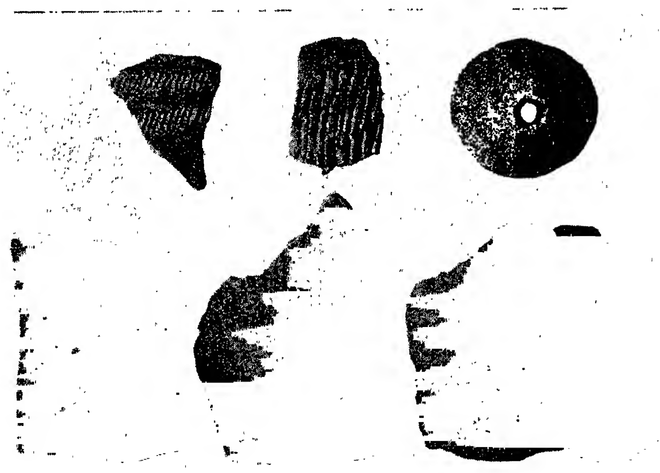


Fig. 30　油坂出土土器

等の發掘したるA地點に於ては貝層下の粘土層に於てすらも有紋土器端片を僅少ながらも發見してゐることは既に述べたところである（遺物出土表參照）。この二つの事實によつて本貝塚に

Fig. 27　東三洞出土土器

於てはその若き頃には有紋土器が甚だ盛ではなかつたことを示すものではあるが、初期に於ても有紋土器の存在を全く否認するわけにはゆかない。

更にC地點B層では櫛目紋土器が多數に出土し、而も地表より四十糎の地點に口邊部に櫛目紋を有して口脣部に刻目ある完形椀型土器（第十四圖下）の斜上向きに保存されてゐたほどであるに反して、A地點では櫛目紋の出土は前述の如く多數と云ふほどではなかつた。この事實は種々なる原因に基き、簡單に解釋し去るべきではないであらうけれども、A地點が貝塚の中心に近くあるに反し、C地點がその末端に近いためであることは看過し難き理

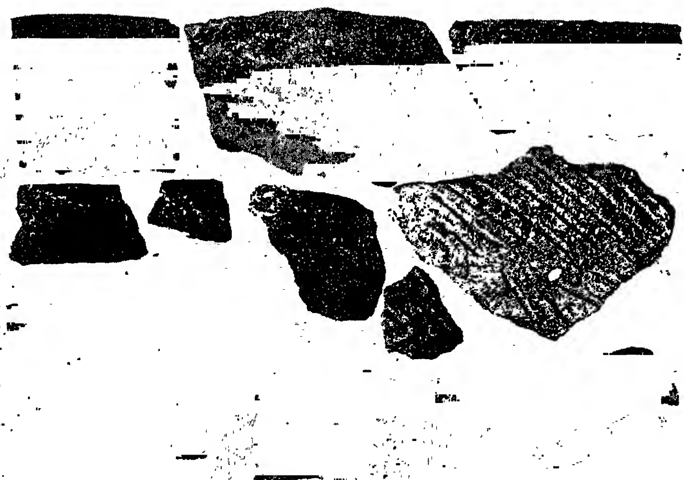


Fig. 28　東三洞出土土器

由である。と云ふのは、A地點は貝層の厚さのみでも約一米突あつたがC地點は遺物包含層全體で約一米突であつて純然たる貝層は約三十糎にすぎない。A地點は奥に西方へ進めば貝層が盡きて黑色腐蝕層となるに反してC地點では奥に西方へ進むにつれて遺物包含の量を增大してゐる。なほ且つC地點が存在する丘陵

が頗る優勢である。その次に紐線紋たる線點列Ie、Ie'が盛であるが多くは充塡紋と結合してゐることは注意に値する。所謂、櫛目紋としての集線列IIは未だ盛ではなく、概して云へば垂直口又は上斜外曲口（椀形）の如く口邊部が自然と胴部に移行するもので其區劃が判然せざる形態に加へられるのが例である。而して羽状をなすものは口唇部に刻目IA'''を有するを常とする。

紋樣群 / 形態	O	I A	I A'	I A''	I A'''	I B	I b	I C	I D	I D'	I d'	I E	I e	I e'	II	III A	III A'	III a	III B	III C	IV	計
垂直口	54	1	1		3		?						11	23	8		35	3	4	3	8	154
上外曲斜口	17				1										2		4					24
上内曲斜口					1	1				1			4	1								8
下内曲斜口	8	1			1								1		1							12
胴部	195	5	4			1	6	6	1	1		3	7	3	?	8	48	12	2	?	53	355
計	274	7	5		6	2	6	6	1	2		3	23	27	11	8	87	15	6	3	61	553

長形櫛目紋としての沈刻式平行集線IIIAは口邊部に未だその施紋の例を見ない。口邊部と胴部とを識別し難き形態には口邊部の集線列紋と結合して現はれる。

以上を概括するに、全體としては幾何學紋に屬し、就中、紐線紋、平行線を好んで使用して、編物、籠細工の工藝意匠を示すと雖も、無紋最も多く、次に甚だ古拙なる鈍厚式平行集線IIIA'多く出土し、紋樣的價値よりも成坏上の實際的効果大なるものである。茲に見る櫛目紋は之の洗練されたものとも見做すことが出來る。更になほ櫛目紋の範疇に屬せず而もそれとは別系統のものとは認め難き充塡紋IVが亦相當に多く存在する。

最後に紋樣と共出土層との關係を一言せむ。

釜山考古會がC地點を發掘したる際には純貝層たる最底層Cからは無紋の比較的厚手にして粗雜なる手法の土器破片のみにて、有紋土器端片を全く發見しなかつた事實がある。然るに私

全般は如何なるものか、更に其地方差、年代差は如何になつてゐるか、猶之に近縁關係ある他系文化との連繫等に就いては今後の問題であつて、茲に遽に決定し難いところである。けれども其櫛目紋が牧ノ島に現はれるやうになつては上に述べたる如く編物細工の意匠を呈示し、而も櫛樣の器具にて施紋したものを未だ一個だに發見してゐない。また長形櫛目紋及び其硬化した羽狀平行集線紋が存在する。此等の事實に徵して本貝塚土器が既に本來の櫛目紋の意味からは遠去かつてゐるものであり、櫛目土器系文化に屬するとしても又バルチック系新石器文化乃至藤田教授の所謂北方系文化につながるとしても末梢的上層部に位するものであり、また不純なるを免れないものとみなければならぬ。從つてまた小林行雄氏の尊敬すべき研究たる彌生式土器に於ける櫛目式紋樣とも極めて疎遠であることを斷つておかなければならない。と云ふのは小林氏は櫛目式紋樣を嚴密に櫛齒狀器具にて施紋したることを條件としてゐるからである(16)。

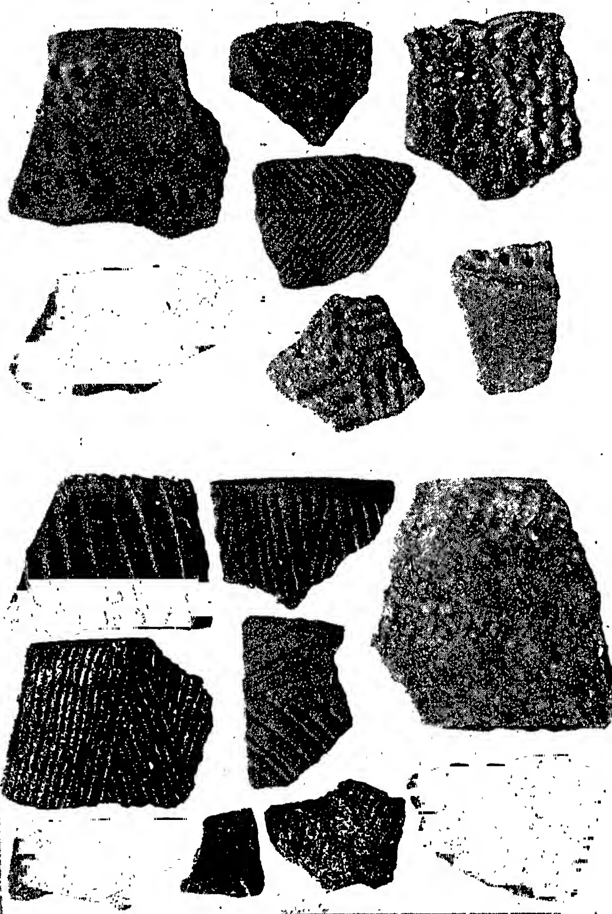


Fig. 26　東三洞出土土器

次に紋樣の量的關係並に形態との關係を明かにするために之を表示すれば次頁の如し。

この表は手元にある資料に就いて作製したものであるから、猶總督府博物館、釜山考古會所藏のものをも加ふれば多少の變異を生じ、又此の表に缺除した部分も補足されるであらうけれども大局には變化なきものと見做し得るであらう。

無紋のもの最も多く、次に鈍厚式平行集線紋IIIA′及び充塡紋IV

が少くない（第二十四圖三段）。

要之、横位を占むる紋樣が多く縱位のものは僅少である。横位帶狀をなすものは第二群紋及びIIIaを除きたる第三群紋がある。

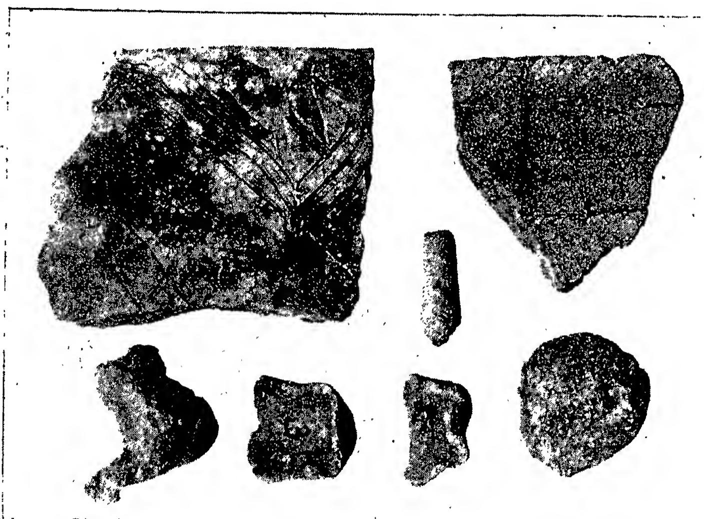


Fig. 25　東三洞出土土器

帶狀をなさずして土器全面を充塡するものに細隆式集平行線紋IIIa及び充塡紋がある。依つてこの觀點より紋樣を區分して前者を帶狀紋 Bandverzierhrung 後者を全面紋 Vollständigverziehrung となすことが出來る。之に對して第一群紋を紐線紋 Schnurverziehrung と呼ぶことにすれば別個の紋樣分類の範疇として紐線、帶狀及び全面の三類を得。

次に器面を占める位置を要約すれば、口邊部のみに施紋されるものは第二群紋、線束組合紋であつて、胴部のみを占領するものは斜方向の第一群紋、沈刻式平行集線紋である。更に口邊部胴部を通じて全面に施紋されたるものには鈍厚式平行集線紋、細隆式集平行線紋及び充塡紋である。

斯の如く紋樣を全體として總括的に觀る時には、それが統一體として現はす意味は編物、籠細工の意匠に發せることを自然と何人にも感得せしめずにはおかない。故にこの點に於て帶狀紋と全面紋とは共に同一意味を有し別系統のものとして考ふることは困難である。ではあるが觀察の角度を轉じて私等の視野を變ずれば別個の問題となる。即ち帶狀紋に對して系統的見地より他の範疇が適用される。藤田敎授は之を北方文化系の櫛目紋と呼んでゐられる。誠に卓見と稱すべきである。

元來、櫛目紋なる概念は櫛樣の箆等で彫紋を施したるために其名を負ひ、芬蘭を中心として東は北氷洋沿岸から西比利亞にまで分布するバルチック系新石文化の土器紋樣を言表することになつてゐる(13)。然し櫛目紋のみに就いて云へば既に獨乙中石器文化に於て出現してゐる(15)。藤田敎授も獨乙の櫛目紋土器との關係は省略して考慮の外に置かれてゐる(14)。故にこの櫛目紋は本來如何なる意味のものであるか、又櫛目土器系文化

層出土と云ふから特別の考慮がはらはれなければならぬものである。

第三群に於ては沈刻式平行集線紋は胴部に横位帯狀をなす。稀に縦位帯狀を連續的に併立せしめたるものがあるがその意味に於ては異るものではない。恐らく器形が筒形土器の如く縦長のものであるがためであらう。而して底部にまで施紋されてゐるものをも見る。第二十六圖中三段は卽ちそれである。總督府博物館、釜山考古會にも各一個を藏してゐる。何れも編物作工の編み始めの意匠を表現し、數條の纖維を石だたみに組みたる狀を示してゐる。

鈍厚式平行集線紋は口緣から胴部にかけて横位帯狀に加へられるを常とする。これは他の紋樣を伴ひたるものを見ない。同樣に細隆式集平行線紋もまた土器全面を充塡してゐて他の紋樣を伴はないものの如くである。

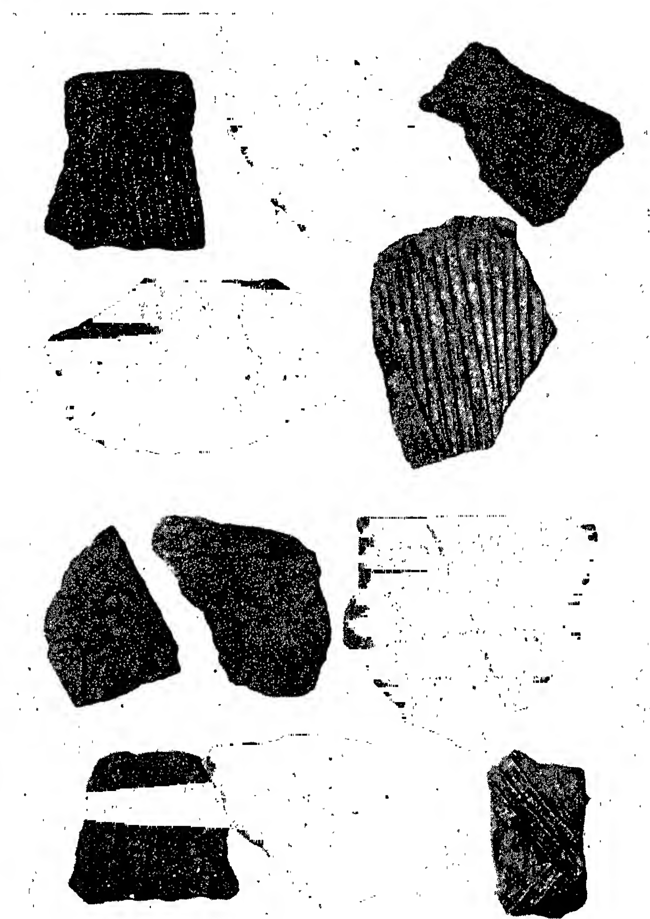


Fig. 24 東三洞出土土器

斜交集線紋は主として口邊部に横位帯狀に加へられてゐるが時に他の紋樣を伴つて縦位に(第二十五圖左上)、或は胴の若干部分を占有することがある。

線束組合紋は口邊部に横位帯狀をなす。

最後に第四群に於ては複線鋸齒紋は口邊部又は頸部に横位に加へられた事例のみである。充塡紋は口緣に若干の無紋帯を殘して胴部全面に施され、常に界線を設けて無紋帯と區劃する。而して共界線は細隆式直線又は太隆式線點であつて、時に此等の細線を二乃至三條加へてゐるもの

內を平行集線にて充塡したるものを發見してゐない。前者は所謂複線鋸齒紋と稱せられるものであつて、沈刻式と細隆式とがあるが、その出土量は極めて僅少である。後者は複集折線充塡紋とも呼ぶべきものであらうが省略して單に充塡紋と呼ぶことにする。之にもまた同樣に沈刻式と細隆式とがある。而してなほ複集折線のみが細隆式であつて、充塡する平行線は沈刻式のものがある。

複集折線の間隔は相當に廣い幅を有し、往々これに朱塗をなしたものが見出される。私等の採集したものの中にて確實なるもの二個あり、釜山考古會の採集品中にも三個ありて、其內の一個は內面にも着色してゐる。(第二十六圖下中、第二十四圖左下、第十八圖、第三十三圖) 第三十三圖39は及川氏採集の肩部端片である。

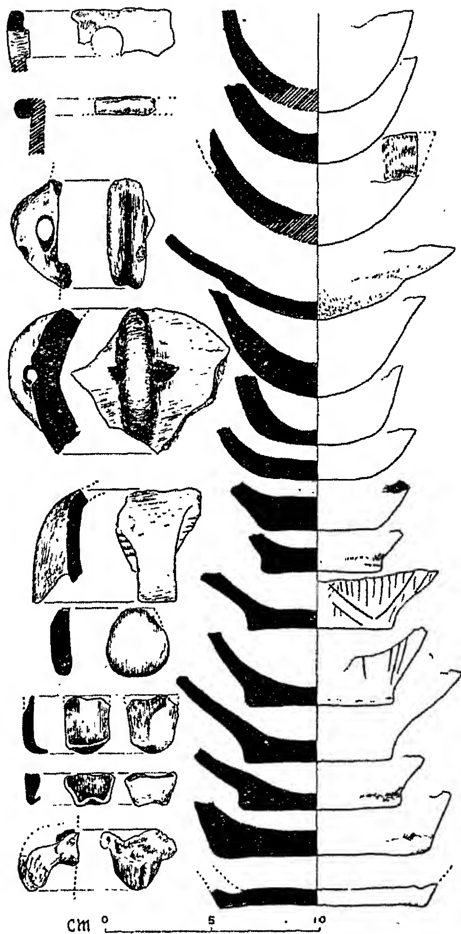


Fig. 23 東三洞出土土器實測圖

さて此等紋樣が土器面の如何なる位置に施されるかを見るに、第一群紋は一般に口邊部乃至胴部に横位に一條又は二條加へられ、就中頸、肩、腰等の緊迫部に施されることが多い。特に細隆式連弧紋は細隆式平行線紋と結合して頸部にのみ施されてゐる。かゝる事實は第一群紋の有する意味が然らしめるものと思惟される。內地の厚手式繩紋式土器の初期の紋樣に同じ意味のものを見ることは相互の文化關係は別として面白い。第一群紋が斜方向の位置を取る際は胴部に數條使用されるを常とする(第二十七圖上段)。縦位の場合は極めて少く僅かに一例のみであつた。

次に第二群紋は主として口邊部に横位帶狀に施され、未だ胴部にのみ施されたる確證を得てゐない。これまたこの紋樣の有する編物としての意味に據るものであらう。尤も口唇部に刻目を有し、口邊部やゝ外反りとなり、その外反りの部分を無紋に殘して第二群紋を施したるものが釜山考古會の手によつて採集されてゐる(第二十二圖右下)。がA

き、その印刻甚だ鈍厚にして鮮明ならず、なほ成坏後修整磨研せず、如何にも古拙な感を有するものを殊に名稱は甚だ變であるが鈍厚式として沈刻式のものと區別しIIIA′となす。紋様として

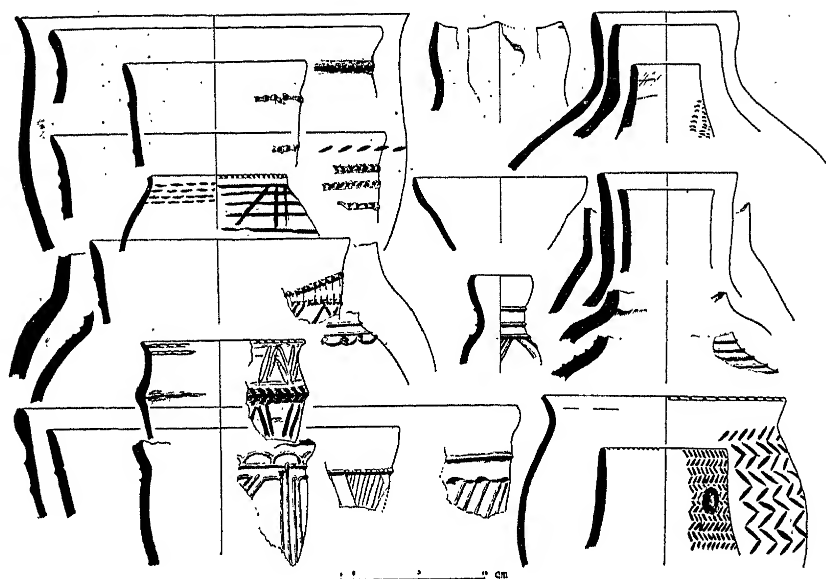


Fig. 22　東三洞出土土器實測圖

の價値よりも成坏上の實際的効果が遙かに大であることが認められる。(第二十六圖右三段、第十九圖)。

IIIa、細隆式集平行線（第三十二圖左側、第二十四圖右下）數條の細い粘土紐を加着したる細線隆起の平行直線を種々の方向に結合したるものであつて全體として平行線間に三角形の空隙を殘し、紋様的効果を大ならしめてゐる。土器端片が小なる時には之をIbと識別すること頗る困難である場合が多い。及川氏採集品中に一個特異なものがある。卽ち第三十三圖下段中央に示すが如きもので平行線間に三個の三角形を縦に山形に配列してゐる。これは何を意味するかは全く不明である。

IIIB、斜交集線（第二十六圖左下）平行直線の上にそれとは反對の方向を有する平行直線を重ねたるもので斜格紋とか格子目紋とか呼ばれてゐるものである。沈刻紋のみである。

IIIC、線束組合（第二十六圖中四段、左三段、右下）平行線分を種々に組合せたるものでこの内所謂網代紋が最も普通であるが特異なものとしては三角形の連續したる鋸齒狀の空隙を列べたる如く平行線分を配置してゐる（第二十六圖右下）。

第四群は集折線又は複集折線を平行集線を以て充塡したるものである。集折線の場合には連續せる三角形を充塡し（第二十四圖右上、第二十五圖左上）、複集折線の場合には複線以外の部分を充塡してゐる。然し未だ成北油坂貝塚に多く見る如き複線

に於て相互に變換したる羽狀のものがある。亦線分と線分とが非常に接近して押捺されたるために紋様面が沈下して各段階の間の空隙部が浮出して恰も細線隆起の界線を施したるが如き感を與へるものが多い。次に之とは反對に線分と線分との距離が大となり、却つて上下段階の線分の距離が接近して其線分が接觸、連續して横位帶狀の感を失つて縦位となり、複合鋸齒線狀を呈するものがある（第二十六圖右上）。

Fig. 20　東三洞出土土器

第三群は平行直線の集合又は複合せるものであつて、その際帶狀に横位又は縦位に合成せるものと、數條の平行直線にそれと異る方向の平行直線を結合せるものとがある。前者は沈刻式で後者は細隆式である。

IIIA、IIIA′、沈刻式平行集線、鈍厚式平行集線。斜方向の平行直線を集合して帶狀となし、それを數段繼ぎ合せたるものであるがその各段の平行直線の方向を相互に轉換して羽狀となせるものあるは集線列の場合と同様である（第二十六圖中二段、五段、第二十八圖右中）。

Fig. 21　東三洞出土土器

さてこの平行直線を、指頭又はそれに類する太きものにて引

せる隆起細線があつたものかも知れない。それは何れにもせよ

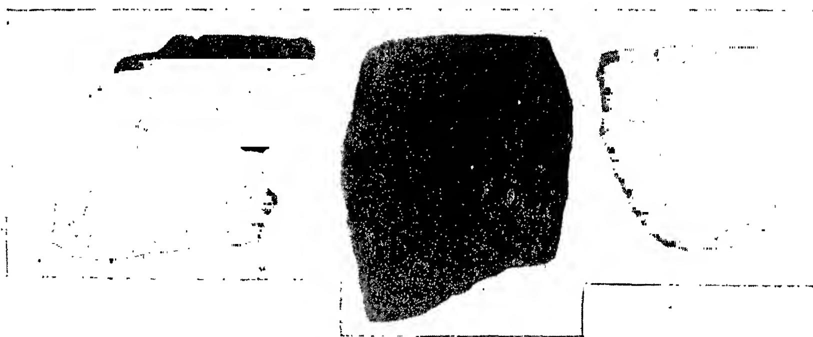


Fig. 19 東三洞出土土器

細き粘土紐を水平に加着し、その兩側を深く押壓したるため谷を生じ、太い溝に細い線が隆起せる如き感じを與へてゐる。

IC、連弧、波線（第二十四圖三段中央、第二十八圖中央）弧を連續したるものであるがその弧の結合具合によつて所謂連弧紋とも波線紋ともなる。而して連弧紋には界線を伴ふを常としてゐる。細線隆起のものしか發見されてゐない。

ID、ID′、集折線、複集折線折線を連續して電光形となし所謂鋸歯狀線をなしたものをIDとなし、それを複線にしたものをID′としたのである。之の類例は極めて少い。

IE、Ie、Ie′、線點列（第二十七圖、第十五圖、第二十八圖上中央）點、線兩要素の複合であつて線上に點列を加へたものである。假りに線點例と呼ぶ。線が沈刻の場合と隆起せる場合とがあり、後者には細線と太線とがある。太線隆起式——之を簡單に太隆式と略して呼ぶことにする——の場合には粘土紐を指頭にて順次に押壓し陰影の關係から繩狀を呈するが故に繩目紋と稱せられるところのものである。之をIeとなす。細線隆起式——之を簡略に細隆式と呼ぶ——のものをIe′とする。

第二群は點列、線列の複合紋樣であつて何れも沈紋である。この名稱を集點列、集線列と呼ぶことにする。集點列には櫛歯狀をなせる篦樣器具を以て施紋したものが多く、その場合には印刻による點列の線分を以て集線列と同樣の構成をなしたる紋樣も可能である。（第二十九圖左下、第三十圖中央、第三十一圖右下）。けれども本貝塚に於ては何れの種類の集點列の事例も未だ發見されてゐない。

次に集線列は理論的には次に述ぶる平行集線との區別が困難であるが實際上には集線列はその線分頗る短く且つ一般に幅のある篦樣器具にて連續的に押捺したるものである（第二十六圖左二段、第二十八圖左下）。之に對し平行集線はその線分が比較的長く、又篦、棒等の尖頭を曳きて描きたるものを云ふ。

さてこの集線列に於ては紋樣構成の平行線分の方向を各段階

IA　點例（第二十六圖左上）先頭の尖れるものにて突きて點線を表はしたものである。從つて凡て沈紋である。その方向は直線のみではなく弧線又は波線をなす場合も可能である。而して一列のものは少く數列平行に使用するのが一般であつて、點列と點列との距離が極めて接近して集點列と稱するを適切とする場合も可能であるが茲にはその發見例がないから觸れないで置く。

表面採集の一例ではあるが口邊部の內面に二列施紋したるものを發見してゐる（第二十二圖左側五段、七段）。

IA′、IA″　線列（第二十七圖右、第二十八圖左上、第二十五圖右上）先端に若干の幅ある篦樣のものを連續的に押捺して施紋したものである。故に凡て沈紋である。線列なる名稱は適切ではないが止むなく斯く名付くることにした。線分の有する方向と線列の方向とが同一なるものと異るものとがある。後者をIA′、前者をIA″とする。然し前者は極めて少く釜山考古會採集品中に胴部に一條施したるもの一例を見るのみであつて後者が一般的である。而して一列のものが極めて少く二列のものが多く二列以上のものも少くはない。而して數列使用するものは實際上第二群との區別が困難なる場合があるが大體に於て線列と線列との距離が接近せざるものを茲に取扱ふ事にする。更にその列を構成する線分が直線の場合が多いけれどもまた弧線、折線の存在も可能であつて、なほその施紋に際し、篦の幅が狹い場合にはそれを強く引きながら線分を印刻してさながら溝の中に切目を付したる如き感を與へるものなどあつて兎に角此の種類の紋樣は變異性に豐んでゐる。

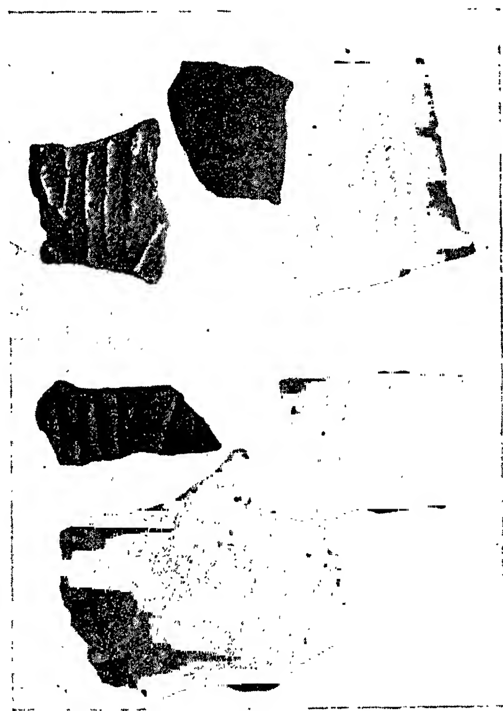


Fig. 18　東三洞出土土器

次にこの線分が口唇部に施されて刻目となせるものをIA‴となす。

IB、Ib、直線　直線は單獨にて使用されること極めて稀である。他の要素と併用されて界線となるか、さなくば數條の平行線として使用されるを常とする。單獨使用の沈紋の例は檢出し得なかつたが浮紋としては第二十八圖右下に示す如きものが一例あるがこれは口唇部を失つてゐるから更にこの上に一條の平行

を絲にて緊縛して一時的補修の目的を有するものもある（第二十圖左下）。

（五）　紋　樣

土器には其全面に朱を施したるものと紋樣の帶狀間に朱塗したるものとが見出される。これらは總て裝飾的意圖に出でたるものか、或は其他宗教的意味等の如きものであるかは今日のところ決定不可能である。これに使用せる顏料は化學分析の結果、辰砂ではなく、紅殼（F_2O_3）であつた。反射檢微鏡下にて觀察するに網狀の無數の龜裂があつて剝落磨滅し易きを想はせる。故に燒成後に塗りたるものにして賦彩の厚さは〇・六粍以上のものを見なかつた。完形なく總て端片なれども全面に朱塗せるものは多く椀形にして九個あつた。

次に紋樣を施すに使用されたと思はれる器具は最も自然的なる成坏者の指と、骨製又は植物性の箆とである。骨製のものは骨器のところで述べた如きものが殘つてゐるが植物性のものは全く殘存してゐない。

紋樣は一般に幾何學紋に屬し、紋樣構成の要素は點、線分、弧、直線及び折線である。此等の要素の單一又は其複合が一定の方向に集合して紋樣を構成する。之を便宜上第一群と稱することにする。

次にこの點乃至線分構成の紋樣が合成して一紋樣帶にまで發展してゐる。之を第二群と名付く。

更に平行線の集合、組合せによつて紋樣が構成されてゐる。而してその合成樣式によつて第三群と第四群とに分つ。第三群は紋樣構成の平行線の方向轉換を行ひ、或は三角形乃至は其連續たる鋸齒狀形の空隙を紋樣間に殘すやうに合成されてゐるに對して、第四群は一紋樣の間隙を平行線を以て充塡してゐる。

此等の紋樣群に對して無紋のものを第零群として取扱ふことにする。

さて茲に此等の紋樣の個々に就いて說明を加へたる後全體としてそれを總括して觀察し、それの意味するところを求め、更に紋樣と形態との關係に及ぼうと思ふ。

先づ紋樣の說明に入るに當つてそれを徵表する記號につき斷つておきたいことがある。同一要素の紋樣でもその表現方法に沈刻式と隆起式とがある。特に後者には細い粘土線を加着したる特殊手法としての細線隆起式がある。そこで沈紋をアルファベットの花文字にて、浮紋をその小文字にて表はすことにし、紋樣の群を表示するアラビヤ數字の右に並記する。更に同一種類にてもその間に區別を要する場合にはその文字にダッシュを附して表はすことにする。さすれば例へば第一群は點A、線分B、弧C、直線D、折線Eに應じてIA、IB、Ib、IC、ID、Id、IE、Ie、の如く表示することが出來る。

の梯形、抛物狀をなせる、藤田教授の所謂楕實形及び有頸壺形の三種である。

そこで口邊部端片につきその形態を檢するに垂直口が絕對的優勢であつて上斜外曲口、下斜內曲口乃至頸を有するものが之に次ぎ上斜內曲口の存在は認められるが下斜外曲口は認められない。

口唇部は變化極めて少く僅かに外反りになつたもの及びやゝ厚くして破損を防ぐべき意圖に出たものが注意に上るのみである(第二十四圖中段右、第二十二圖左下)。口唇部の外側に加着し口邊部を堅固にした粘土紐の剝脫したものと思はれるものの端片を貝層中より採集したるも餘り小さきために確實ではない。(第二十五圖中央、第二十三圖左二段)。

次に胴部端片に就いてみるに垂直並に外曲の存在が一般であるが中央部に縊れがあつて瓢箪形を聯想せしめるものがある(第二十二圖中央、第十三圖右下)。

底部は丸底最も優勢にして平底も存在するが臺を有する物は遂に見出し得なかつた。但し臺かと疑はれる端片を貝層中より得たるも小さきため確かならず。然し高杯の類が全く認められないのは注目に値する事實である。(第十六圖、第二十三圖右側)

終りに土器の副體としての把手を觀察するに彌生式系に見る天狗鼻形把手は全く發見されてゐない。把手としては半月形の環狀のものである(第十七圖中、左、第二十三圖左側三段、四段)。然し玆に異形の耳狀把手が四種見出されてゐる(第二十五圖下段、第二十三圖左側下)。把手の位置は一般に胴の對照的位置に一對あるを常とすれども異形のものにあつてはその類例を見ざるため果して土器の如何なる形態の何所にありしものかは全く推定し難い。猶、單に口邊部に孔を穿ちて釣手の用に供したと想像し得るものがある。成坏の際に既に孔を設けたるもの(第二十三圖左上)と燒成後に穿孔したるものとがある。但し後者には釣手の目的以外に罅の生じたる土器

Fig 17.　東三洞出土土器(把手及端片)

悪なる感じを與へてゐる。（第十九圖）。（骨篦及び紋様IIIA′項參照）

折衷法　巻上法と輪積法との折衷ともみるべき方法が檢出される。即ち粘土紐を輪狀となし、その上部周邊を指頭にて撮み上げて薄くなし斜面を與へ、その上に更に輪狀の粘土紐を積み重ねて其下部をその斜面に密着せしめその上部を前と同樣の手續きにて斜面となし、更にまたその上に輪狀粘土紐を積み重ね、斯の如き手續を反復し、內外より篦にて修整加工して以て成形する。而してその斜面を交互に外向と內向とになす故にその縱斷面に於て其繼目は電光形をなし、輪狀粘紐の斷面は土器の外面又は內面を一邊（一・五糎乃至二糎）とする三角形をなしてゐる。（第二十圖上段左）。

此の方法は巻上法の缺點を輪積法によつて補ひ以て巻上法の特長を充分に發揮せしめることが出來るから、巻上法にて成形困難なる緊迫せる屈曲部の成形に適用されてゐるのを見る。例へば頸部を有する土器（第十二圖右上、第二一圖、第二十二圖右上）にはこの方法が併用されてゐる。然し未だ內地の彌生式土器に見る如き巧妙なる輪積法は檢出することが出來ないのは注意すべき事實である。

最後に底部の成形について注意すべき點を見るに、底部のみ丸く拔け落ちたものが濱田氏によつて採集されてはゐる（第二十三圖右下）。けれどもこれは先づ底部を作つてその上に輪積又は巻上による成坏が行はれたと想はれるものであつて、後より底盤を鎭入したものではないやうである。大山公が既に注意されてゐる如く、底盤が薄弱であつたために底の內面に歪を生じてゐるものを檢出し得ると共に之を堅固にするために補修した形跡の明瞭なるものをも見出し得る（第十六圖左上、右下）。

Fig 16.　東三洞出土土器（底部）

（四）形　態

完形土器の項にて述べたる如く全形態を知り得るものは大小

る。之を顯微鏡下にて檢する時は粒子均一なる石英砂粒と粘土とが殆ど等量に混在し、所謂砂交粘土である。而して其砂粒の大さは平均〇・〇一六粍である。他の一は薄く朱を塗りたる研琢せる土器であつて含有砂粒の大さは平均〇・〇二粍である。思

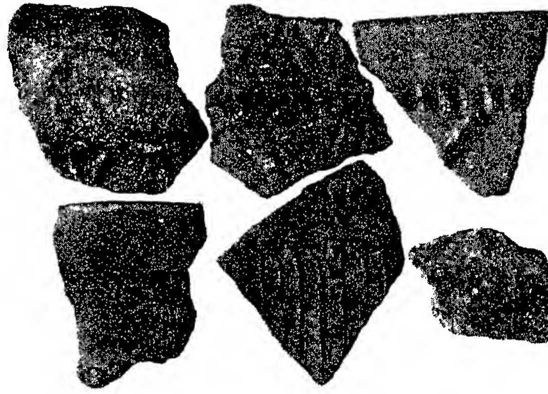


Fig 15.　東三洞出土土器

ふに此の種の龜裂なき土器使用の粘土は氣乾並に燒成收縮に於ける其收縮が僅少なると共に燒成度比較的高きも其含有砂粒の微細均一なるため熱による石英の膨脹收縮の影響良好なるによるものであらう。此種良質粘土は水簸土の使用が考へられないから其原料採取地點の相違に基因するものと見なければならぬ。

（三）成　形

成形法には卷上げ、輪積の手法によるものが主であるが手づくねと思はれるものも若干あるが未だ縱繼ぎ、轆轤並に型の使用は認められない。

手揑法　最も原始的にして且つ普般的な成形法たる手づくねは原始土器に於て一般に見る現象であつて本貝塚出土の小さい椀形土器に於てもまた認められるところである(十六圖左下)。

卷上法　紐狀に粘土を作つて次第に螺線狀に卷き上げて成形するこの方法によるものはかなりに多數であつてその粘土紐の太さは一糎乃至二糎が一般である。拋物體狀完形土器が此の方法によることは既に述べたるところである。私等は其繼目の判明せるもの、或は離脱したる端片を多數に檢出することが出來る（第十八圖下）。

輪積法　輪狀の粘土帶を次第に積み上げて成形するこの方法もまた盛に使用されてゐて、其粘土帶の幅員は其形態に從ひまた同一土器にあつてもその部分に從つて異つてゐる。けれども一般に圓筒形土器の如く土壁の曲折の少ないものはその幅員廣く、四糎乃至六糎が普通である。而してその繼目は其縱斷面に於て水平を示すものもあるが多くは下斜内向を示し深く重り合ふものと淺いものとがある。之はその土壁のなす屈曲度によつて制約されてゐる。其繼目は多くの場合箆にて整形、補修を加へらるゝことなく、ただ指頭又はそれに類するものを以て壓し付けて密着を計り、太き斜平行集線の跡を殘してゐる。ために甚だ粗

入してゐるものがある。例へば内外面に朱塗をしたる〇・四糎の端片に砂粒並に貝殼を含有してゐるものが認識される。なほ因に斯く減粘劑としての使用以外に石英は熱する時は徐々に膨脹するけれども温度攝氏五百七拾度以上に至れば反對に收縮するがため比較的高温度にて燒成されたものには砂粒混入の事實が燒成收縮の際好結果をもたらすが故に金海貝塚等の高度燒成土器に就てはこの點もまた充分に考慮さるべきである。

次に微細なる貝殼片を含有するものがある。砂粒の場合と同様に原土が所謂海底沈澱粘土であつて始めから混在してゐたか或は偶然に砂と共に混入したものもあらうけれども、また故意に混入して減粘劑とせるものも認められる。Pfeiffer 氏は貝殼等の石灰物質を含有する粘土は攝氏八百度以上に加熱される時には破壊されることを注意してゐる(10)。蓋し貝殼等の主成分炭酸カルシウムは一般に煆燒する時、生石灰と炭酸瓦斯とに解離する。而して温度が八百度以上になる時にはその炭酸瓦斯の壓力が一氣壓以上になり速かに空氣中に散逸して生石灰成生が急速となる。殊に土器の土壁中に含有されてゐる場合には炭酸瓦斯の土壁外に脱逸するには更に高い壓力を必要とする。故に實際上には生石灰成生には少くとも八百度以上煆燒するを要する。さてその生じたる生石灰が空氣中の水分を吸收して容積を増し消石灰と化さうとする。そのため土器は龜裂を生じて破損する。然るに本貝塚土器片には貝殼片は共儘に殘存してゐるが故に、本貝塚の土器燒成は八百度以下であつたことを物語つてゐる。けれどもまた久しく土中に埋沒してゐる間にその貝殼片の一部は風化して消失し去り空虚な形のみを殘して土器面が痘痕となり、土壁は輕石狀をなしてゐるものがある。

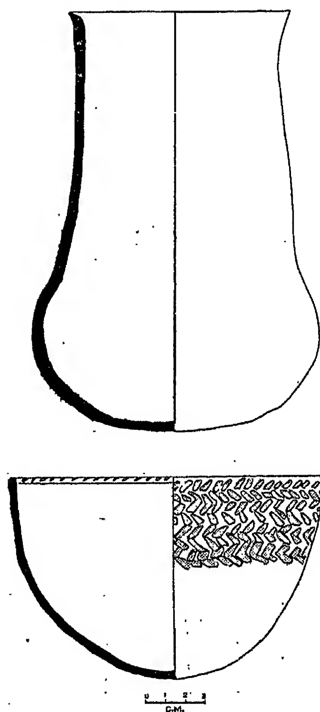


Fig 14.
東三洞C地點出土土器實測圖

更に反射檢微鏡下に於て觀察するに、土器面粗雑なるものは單に凸凹あるのみならず、無數の龜裂を有し、恰も水田沼地が旱魃に干上つた時と同様の狀態となつてゐる。肉眼觀察では堅緻なるものも矢張検鏡すれば龜裂を有しその幅員を測定すれば〇・〇〇三糎乃至〇・〇〇四糎である。然るにその龜裂を有せざる土器片が二種ある。その一は赭褐色にして指頭にて觸れたる後、觸覺に訴へる時なほ指頭に微細なる砂粒を殘留する感があ

頸壺型の特殊なものであるが他は何れも丸底の椀型土器である。その中の一個は有紋であつて口徑約十七糎、高さ一〇・五糎、底の厚さ〇・九糎、口唇部厚さ〇・五糎である。口邊部に互にその方向を異にせる八段の羽狀平行集線が沈刻されてゐる。表面は灰白色で土壁の中味が黒く頗るよい感じを與へると云ふ。地表下四十糎のA層とB層との間に發見さる（第十四圖下）。他の無紋の二個は共に赭褐色であつて一は口徑七・五糎、高さ七・二糎、底部厚さ〇・九糎。他は口徑一一・五糎、高さ五・四糎、底部厚さ一・五糎である。地表下約五十乃至六十糎のB層にて發見さる。長頸壺型土器は黒褐色にて無紋、口徑一一糎乃至一二・五糎、高さ二二・二糎、腰部直徑一六糎、口邊部厚さ〇・七糎である。C層最下部にて鯨骨脊椎と同時に出土したと云ふ。

斯の如く完形土器は僅少であつて其出土土器の大部分は端片である。されば次に此等の土器端片につき一般的考察をなすことにする。

（二）土　質

先づ表面の肉眼觀察から始める。

その色澤は黝黑色、灰黑色が多數を占め、次に赭褐色、茶褐色、黄褐色等が優勢で、灰白色は之に次ぐとは云へ、此等が交班し、又内外面その色澤を異にせることを認められる。

次に土壁の厚さは部分により多少の厚薄ありて一樣ではないが大體〇・六糎乃至一糎のものが普通であるが〇・三糎乃至〇・五糎の薄手並に一・五糎ほどの厚手のものも存在する。

その構成分子は一般に粗惡であつて砂粒を混在してゐる。雲母を混じてゐるものは極めて稀にして表面採集品に厚さ〇・五糎の口邊部一個あるのみである。（第二十二圖左側七段、第十五圖上段中）。雲母及び滑石末を混入するもの僅かに一個釜山考古會によりC地點A層にて採集されてゐる（第二十二圖左側五段）。滑石混入に就ては後に述ぶるところあるを以て茲には雲母、石英に就て注意する。

元來、雲母は微細なる粉末狀の場合には可塑性を有するを以て粘土が之を含有するも其可塑性に影響するところ極めて少いけれども、石英は極微細なる粉末狀にあつても粘土が之を混在する場合には其可塑性を減じ、一般に陶工上減粘劑として使用される。本貝塚土器の含有する砂粒は原土に於て既に混在した所謂砂交粘土を使用したるによるものであらうけれども、また土壁厚き大形のものにあつては意識的に粘土使用の際に混入したものと認むべきものも少くはない。是は明かに粘土の粘着並に乾燥による收縮を減少し、且つ土壁の壓力に對する耐久力を增大せしめて大形土器の成形を容易ならしめる意圖に出でたるものであることは想像に難くはない。尤も薄手のものであつても粘着力大なる材料を使用せる場合には減粘劑として砂粒を混

(圖版五下)。全體灰褐色で所々に使用による煤煙にて黒色を呈した部分がある。回轉抛物線體又は回轉二葉双曲線體(Rotationsparpoloid oder Zweischalige Rotationshyperboloid)——自動車のヘッドライトの形態にして、以下行文簡潔のために抛物體狀と云ふことにする——に近似せる形態を呈し丸底である。高さ二十糎、口徑十八糎、土壁の厚さは約一糎、口唇部は〇・五糎である。約三糎幅の粘土帶を卷き上げて成形し無紋であるが、面の內外を箆にて引搔きたる粗雜な感を與へる。

　他の一個は大形にして其底部を缺損してゐる。貝層中の發見にて復原したるものである(圖版五上)灰黑色である。口徑三六糎、土壁の厚さ平均一・二糎。約四糎幅の粘土帶の輪積による成形であつて指頭又はそれに類する太い箆にてを異にすることにより、二段平行斜線を施し、輪積の繼ぎ目を離れざるやう密着せしめ、且つ紋樣としての効果をも現はしてゐる。此の平行斜線は其方向をなしてゐるが寫眞に於ては下の段はよく現れてゐない。(第十一圖左下)。之は二段の平行斜線が同時に施されなかつたことを意味してゐる。つまり下段を形成して若干の時間を經過し、やゝ乾燥してよく土壁が更に加はる土壓に堪え得るに至れる後、更に最後の二段の輪積をなし施紋してその固着を計りたるものの如くである。

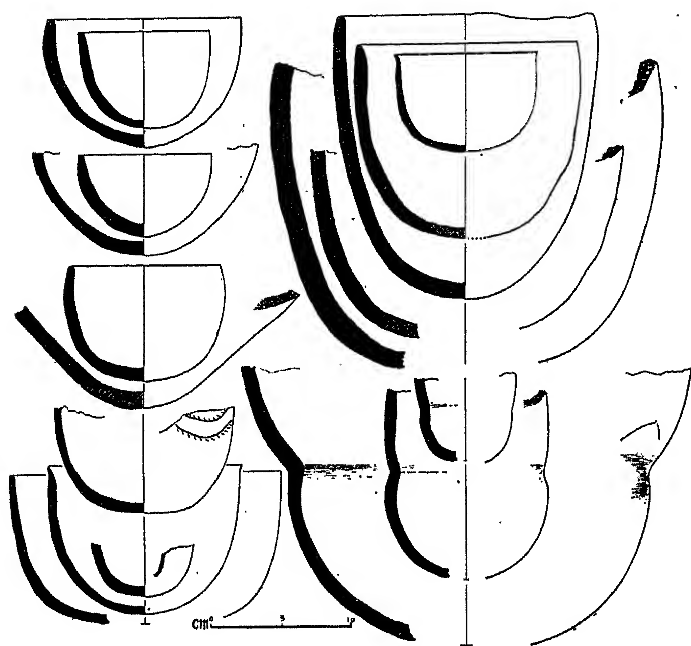


Fig 13. 東三洞出土土器實測圖

　原形に近い他の二個は丸底の大小の椀型土器で茶褐色無紋である。(第十二圖)。大きい方は口徑十三糎、高さ九糎、土壁の厚さ平均〇・八糎、口唇〇・四糎、である。約二糎幅の粘土帶の卷上成形である。貝層より採集。小さい方は口徑九糎、高さ四・五糎、土壁の厚さ平均〇・八糎、口唇部は丸味をおびて〇・三糎である。濱田氏第四層出土。(第十三圖上段)。

　C地點出土の土器は第十四圖の如くである。一個は無紋、長

（八）砥石　五個

何れも砂岩である。(圖版第三14 15 16 17、第七圖4)。咸北地方に一般に見る其兩端が踵の如く上りたるものの端片がある（圖版第三14)。次に二條の細い溝のほれてゐる砥石がある（第七圖4)。第十圖はゴムにて陽取り型をて擴大撮影したものである。之によつて明かに知られる如く溝にて研磨したる品は管狀の硬質物にて或は管玉製作に使用したものかも知れない。昭和六年八月一日、表土下一。二米の所より出土せるものと云ふ。

以上の石器を概括するに打製石器の稀有なる南鮮に於ける本貝塚出土の石製利器はその出土石器總數僅かに十四個なれども其内打製品九個ありて過半數を占めてゐる事實は注意に價する。特に砂岩、頁岩を用ひたる打製石器の存在するは慶尚南道鑛床調査報告（九頁、五二頁）によれば當地方には接觸變質作用を受けて頁岩、又は砂岩が燧石狀岩石となれるを利用せるためにして之また特異とするところであらう。なほ慶尚南道に産出せない黒耀石、燧石端片の存在は忘るべからざることである。而も貝層中からは其形式甚だ古拙なるものを發見するは本貝塚遺蹟の甚だ古きを物語るものである。

III　土　器

Fig 12.　東三洞出土土器

本遺蹟發見の土製品は總て土器にして他の種類のものを見ない。紡錘車、土錘の發見なきは奇と云ふべく、偶然的のことかも知れぬが若し必然的事實とすれば考慮を要するものである。だが之は他日に待つべきものである。

土器端片は頗る多量に、殊に貝層から出土したが復原し得るものは僅かに一個、やゝ原形に近いものが三個あつたが、その後釜山考古會の手によつてC地點から大略完全なもの四個採集された。

（一）完形土器

復原し得たる土器は試掘の際貝層中より得たるものである

杉山壽榮男氏が八重津輝勝氏蒐集品の一部と其形式とを紹介されてゐるが(9)、その杉山氏所引第十五圖右下のものを本貝塚出土品と對照すれば何人もその手法、形式等の一致に驚くであらう。依て此の點に非常なる關心をもち長崎市の津田繁二氏を煩はしてその出土地を確めたるに、小西元氏の調査によれば五島富江町字女龜の畑尻に於て大部分發見され約三百個あり、同町輿吉の山に於て一個、三井樂村波沙間百軒竈包含層に於て一個發見されたと云ふ。何れも繩紋土器を伴出す。之が釜山との聯絡關係に就いては最後に說くところあらむ。

(六)刃器

黒耀石の打裂によつて自然に生じた鋭利な刃を利用してゐる。刃が潰れて使用痕跡顯著であるもの一個貝層中にて發見。刃渡り三糎ある。B地點包含層にても發見されしがまた釜山考古會によつてC地點より第九圖の如きものが採集されてゐる。南鮮には之の類例を聞かないが九州と咸北とに多數存在する。その關係に就いては亦最後に於て述べるところあらむ。

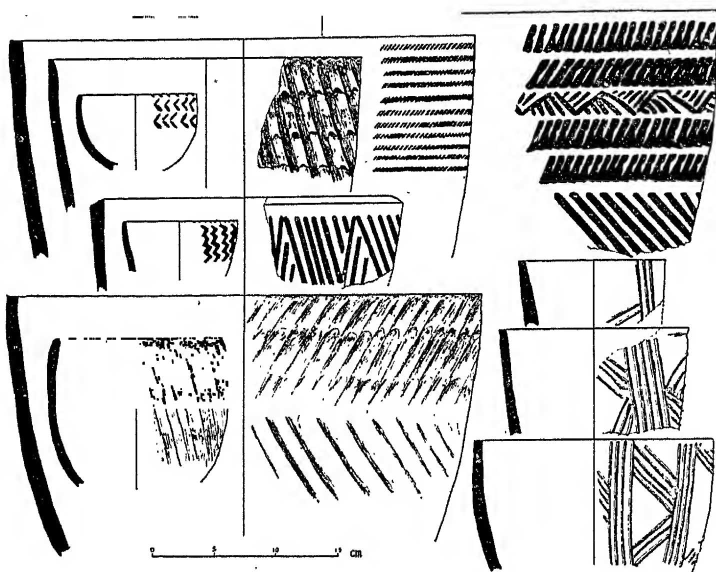


Fig 11. 東三洞出土土器實測圖

(七)石錘 一個

長さ五糎の棒狀石器にして其斷面やゝ半圓形をなし、先が幾分細くなり太い部分は剝れて輕く縊れてゐる。絲を縛り付けるのに便利である。其重量十瓦。頁岩である。貝層中より出土す。其太さ、其重さ、其形等より推定するに釣の錘りに使用せるものらしいが確かではない。(圖版第三13)。普通に見る形式の網の錘は遂に發見されなかつた。

釜山考古會がC地點より得たる石器中、長さ三・六糎、の扁平棒狀にしてその一端に二段の刻目ある灰白色のものがある(第九圖)。之また釣の錘石と思はれる。粘板岩質である。

難いであらう。故に石庖丁の類に入れることは妥當ではない。歐羅巴にその例を求むるならば鸚鵡嘴狀皮剝（Papageischnabelartige Kratzer）とでも稱すべきものであらう。

次に後者は端片にして全形を窺ふことが出來ない。が前者に類するものであらう。粘板岩にして鋭い刄が研磨によつて付いてゐるが直線部は厚く脊を形成して刄を有してゐないところは前者と違つてゐる（圖版第三8）。濱田氏第三層より採集す。

（三）石槍　二個

何れも打製である。一は僅かにその尖頭部の端片である。砂岩であつて貝層より採集。（圖版第三10）。他は完全形なれども頗る粗雜であつて原始的な感があり、側面の一方には刄があるけれども他方にはない。その長さ十糎、最大幅二糎である。硫紋岩にして昭和六年十二月十一日採集とある。（圖版第三11）。

（四）石鏃　二個

一は粘板岩磨製、他は黑耀石（Obsidian）打製である。兩者共に根の部分を缺き箆代の有無が判明しない。前者は扁平なる柳葉形にして及川氏昭和五年七月廿一日C地點にて採集す。（圖版第三12）。なほ同地點にて釜山考古會も類品端片一個を得てゐる。（第九圖左端）。

後者は三角形にして濱田氏昭和七年五月採集す。之は假りに石鏃として取扱つてはおいたが或は石槍の尖端部であつたかも知れない。（第九圖右端）。前者は南鮮に普通にみる形式であるが後者は既に述べたる如く稀有である。

（五）石鋸　一個

從來石鋸と云ふ名稱を負ふ石器に二種ありて一は擦切石斧等を製作する時使用する石器であつて石を挽き切る目的を有するものを云ひ（6）、他は鋸齒狀の刄部を有するものである。卽ち其命名が其用途によるものと其形狀によるものとがあつて、例へば大野雲外氏（7）は前者に、杉山壽榮男氏（8）は後者に使用されてゐる。今茲に私が石鋸と呼ぶ石器はその形狀によるものであつて鋸齒狀刄は刻目を有するものを云ふのである。

梯形の底邊に鋸齒狀の加工をなしたものであつて底邊の長さ二・六糎、それに對する邊は一・二糎、高さ一糎、厚さ約〇・一糎である。黑耀石にして及川氏第四層出土である（圖版第三18）。兩面より微細なる剝取によつて加工され齒部はやゝ毀れてゐる。これを仔細に觀察するに齒は九本ありて三本目の切目は他よりも深く切込まれて特殊形式を備へたる精巧なる製品である。

此種の石鋸は南鮮では全く發見例を聞かないところであるが咸北地方には後に述べるが如く存在はするが其形式に於て異つてゐるに反し、長崎縣五島に於ては此の特殊形式と同一物が發見されてゐる。

刄であることだけは決定的である。粘板岩（Tonschiefer）であつて昭和五年七月廿一日採集とある（圖版第三2）。之と類似の形式は咸北に於ては敢て珍らしきものではないが南鮮に於ては僅かに慶州附近にて大坂金太郎氏採集の一例を見るに過ぎない。此の石斧の使用目的は刄が鋭利でなく且つ彎曲してゐる點より土掻きとみるべきものかも知れない。

次に杓文字形のものは内地の所謂撥形に類すれども又頗る趣きを異にするところありて片刄である。却て咸北地方に類例を多く見る。其長さ十四糎、最大幅五糎半である。刄は頗る鋭利ではなく、かなり久しく使用されたるが如き感を留めてゐる。硫紋岩にて昭和五年六月廿三日採集とある。（圖版第三3）。此の形式の類例は咸北には甚だ多いが南鮮には寡聞にして未だその發見を知らない。その使用目的はその刄が鋭利ならず且つその握手に該當する部分が方形をなしてゐる點など考へ合す時亦土掻きと見るべきものである。

最後に尖楕圓形のものは歐洲舊石器時代の握り槌（Faust-keil）の形を思はせるものである。其長軸十四糎、短軸八・五糎である。粗面岩（Trachyt）である。貝層中發見にて類例甚だ少きものである。

Fig 10.

砥石ニ於ケル溝（ゴムニテ陽型ヲ取リテ示ス）

（二）半月形石器　二個

尖楕圓形を其長軸に沿ひて半切したる如き形をなしてゐる。打製と半磨製とある。前者は其曲線的部分に剝取を加へて附刄し、その曲率の大なる部分は兩面より剝取加工を行つてゐる。又その反對側の直線的部分は小さき打裂と剝取とを加へて刻目を與へ、やゝ鋸齒狀を呈してゐる。全體としての形態は鸚鵡嘴狀をなし、その嘴に當る尖頭部を僅かに缺損してゐる。その長さ十三・五糎、最大幅七糎である。粗面岩にして試掘の際貝層より得たり。（圖版第三9）。その使用目的は物を掻いたり割いたりするに用ひられたものであらうが其尖頭部を使用しなかつたとは誰しも保證し

程の價値があつたものである。北鮮國境地方を遺跡行脚した時の案内者に黒耀石片を「クロダイヤ」と云つてしきりと採集して與れた人があつたが南鮮に於ける黒耀石も今ではこれと似た

Fig 9. 東三洞出土石器

やうなナンセンスとなるであらう。

卽ち、このダイヤ乃至クロダイヤ程の價値ある黒耀石片が本貝塚に於ては散布地帶からも、また發掘の際にも貝層中からは勿論、分層からも、なほB地點遺物包含黒色腐蝕土層からも容易に採集することが出來た。とは云へ黒耀石製品は僅かに三個にして及川氏第四層にて發見せる石鋸一個、B地點包含層に一個、及び濱田氏採集の石鏃一個である。

次に記述する石器の石質は阿部廣吉氏に請ひて肉眼鑑定によつたものである。

(一)石　斧

完全形のものは打製品のみにて磨製は何れも端片である。磨製一個、半磨製三個、打製四個である。

磨製品　刃部端片一個、之は長方形の蛤刃石斧の頭部を欠損せる端片である。横斷面は三味線胴形をなし、石質は砂岩(Sandstein) である。昭和五年七月廿一日採集とある (圖版第三7)。

半磨製品　三個。一は頭部を他は刃部を欠いてゐる。前者は薄刃の鋭利なもの二個で刃部のみ研磨してゐる。砂質頁岩 (Sandiger Schieferton) と粘板岩質 (Tonchiefer) とにて試掘に於て貝層中發見。(圖版第三5、6)。

他は頗る粗雜なる製作にて刃部を失ひたる後、敲石に利用せる形跡がある。横斷面は楕圓形にして硫紋岩(角礫狀)[Rhyolith (aus Breccia bestehend)] である。昭和五年七月廿一日採集とある。(圖版第三1)。

打製品　四個、此の中の一個は刃部を欠き薄手であつて或は刃部は研磨した半磨製品であつたかも分らない。けれども南鮮には見ざる形式にて寧ろ北鮮咸鏡北道地方 (以後簡單に咸北と呼ぶことにする) に一般に見る半磨製石斧に似てゐる。硫紋岩であつて表面採集品である (圖版第三4)。

他の三個は完全形である。三者各其形式を異にし、長方形、杓文字形、尖楕圓形の三種である。先づ長方形のものは嚴密に云へばやゝ彎曲してゐる。而てその横斷面もまた長方形である。其長さ十二糎、幅五糎である。刃は兩面鑿形とみるべきか或は蛤刃となすべきかはその判定容易でないが何れにもせよ兩

て共刻目はまた緊縛に便ならしめるためである。(圖版第三5、6、7、12)。數個一緒に緊縛したるものは錨狀を呈し、魚を釣ると云ふよりもしやくり引掛けるの用をなすものと云ふべきである。(第八圖左端參照)。

Fig 8. アメリカ土人ノ釣針（英國博物館案内記ニヨル）

(三)牙製品　獸の牙を裂いてその彎曲せる形狀を利用して釣針とせるもの一個(圖版第四1)と共長さ三・五糎の獸牙に孔を穿けかけて中止したもの一個(圖版第四8)がある。兩者共に貝府中發見。後者はもとより裝身具に製作せんとする意圖に出でたるものであるが前者もまた始めは同樣裝身具に製作せんとせるも破損せるため釣針に利用したるものの如く、ために其根元に近く孔を穿ちたる跡あり。

要之、動物性人工遺物に就てはその量に於て漁具が最も優勢ではあるが其種類に至ては甚だ貧弱であつて未だ充分發達したるものと見ることは出來ぬ。普通に見る銛の發見なきもそのためかも知れぬ。貝庖丁發見は既に琉球荻堂貝塚よりも出土してゐて敢て本貝塚の特色とは云ひ得ないがその形式に於て幾分の特異性を有すと云ひ得べきである。しかしその器具の種類に至てはまた綿密なる注意を怠らなかつたにも拘らず貝小刀、貝皿、貝匙等の出土を見なかつた。このことは當地に適當なる貝殼を得られなかつたためでもあらうけれどもまた矢張なほ文化程度低きため器具の種類の貧弱なるを免れないのであらう。最後に裝飾品については何等の發展も特殊性も認め得ないが骨篦はその形狀に於てやゝ我等の注意に値するものがある。

II　石　器

南鮮遺蹟からは黒耀石打製品の出土は殆ど全く無く、偶に慶尚北道の大邱及び慶州附近から二、三個發見された事實は全く萬綠叢中紅一點とか曉天の星とか云ふすばらしい言葉によつて喧傳されたのである。鳥居博士はこの寧ろ例外的事實を以て大邱附近と北九州とを洛東江を逆上ることによつて結び付けやうとされたほどである(4)。斯くも南鮮に於ける黒耀石はダイヤ

し管玉と同樣の意味に裝飾として使用せるものと想像される。C地點にて及川氏昭和五年七月廿一日採集(圖版第四9)。

獸骨に就ては其記述を先づ大形より始め小形に及ぶことにする。

鯨骨製品　二個、一は骨斧の頭部とも思はれるものにして現存する最大長十糎、最大幅七糎、最大厚さ三・五糎の扁平な形狀を呈し頭部の近くに横に孔を穿てゐる。その一方の直徑約一・三糎、他方の直徑一・八糎程である。穿孔の方向より判定して土掻きの如き農具とせず、骨斧と推定したのである(3)、(第七圖2)。他は尖頭器の頭部を失へるものらしく現存する長さ二十糎、最大幅四糎、全體として反(ソリ)を有し、その斷面に於て山形を呈し、先端は丸味を帶びてゐる(第七圖1)。前者は貝層中より、後者は試掘の際同じく貝層中より得。

釣手　一個、長さ十二糎の弓狀を呈する骨の一端に紐を縛るに便宜なるやう二段の切込みがある。他端にも同樣の切込みのあつた形跡を殘してゐるが欠損せるため明かではない。太さ一糎程にして扁平である。使用目的は不明なるも或は物を釣り下げる時の握手として用ひられたものかも知れぬ。貝層中發見。(第七圖12)。

尖頭器　三個　獸類の肢骨の一端を錐の如く尖らせるもの(圖版第四17)と骨片を削つて尖らせたものとがある。後者には太いのと細いのとがあつて太い方は長さ十糎にてよく磨研し、その尖端が焦げてゐるが細い方は長さ六糎にして削つて尖らせた儘である。皆貝層にて發見。(圖版第四18、19)。

箆　四個　其長さは各四糎、五糎、六糎、七糎にして骨片の一方を圓く扁平に加工し最短者を除き何れも磨研してゐる。皆貝層中發見。(圖版第四13、14、15、16)。

釣針　鈎のあるものと無いものと二種あり。前者は三個、後者は五個、其長さは三糎乃至八糎である。總て貝層中にて得。

有鈎者にもその彎曲に對して鈎の内向きと外向きとがある(圖版第四3、4)。一個は鈎を缺損してゐるため不明である(圖版第三2)。此等は何れもその根元に刻目がある。釣針として使用する時には此の根元に更に木片を緊縛したものであることは未開人の例に徴して明かであるがその緊縛を容易ならしめるために刻目を設けられたものであらう。第八圖はアメリカ西北岸に住む土人の釣針の例である。(British Museum: Handbook to the Ethnographical Collections. P. 258 所引)。

次に無鈎者には丸く細い釣針のものと扁平のものとがあつて何れも兩端を尖らせて其一方に刻目を附してゐる。前者の刻目なきものは骨針との區別が困難であるから釣針と斷定するわけにはゆかぬ。(圖版第四11)。此の無鈎釣針もまた有鈎者と同様に木片等に一個乃至數個緊縛して始めて使用し得るものであつ

取りて刃を附け而して貝の內面の凹凸を側り取つて平面としてゐる(第七圖5)。他はへの字形に錐狀をなしその錐の刃部に該當する部分に附刃してゐる(第七圖6)。なほ破損してその形式を決定し難きもの一個あり(第七圖11)。三者共に貝層中にて採集。

貝輪 トリガヒを其殼の中央部を打缺いて周邊部を幅一糎ほど圓形に殘し磨いたものである、貝殼の端を其儘に殘せるものと更に打ちかいて加工せるものとがある。從つてその斷面に於て三角形(第七圖8・9)、四邊形(第七圖10)を呈す。完全なるものはなく、それに近きもの一個貝層中にて發見(第七圖8)。端片二個の中第七圖9は濱田氏第四層採集にてやゝ風化してゐる。他の第七圖10は及川氏所藏昭和六年十二月十一日採集とある。更に一個、中央部を打ちかいたまゝのものがある(第七圖7)。未完成品となすよりもなほ別途の使用目的があつたのかも知れない。雄基貝塚からは此の類の貝輪が多數に重て出土してゐる事實は考慮に値する。

(二)骨製品

大部分は獸骨にて製作され、魚骨鳥骨によるものは僅かに裝飾品各一個である。

魚骨を使用したるものに唯一個軟骨類の脊椎に加工したるものがあるが風化せるため確實ではない。僅かに椎體の臼狀凹みに直徑〇・五糎の孔を穿ち、更に側面を刻抉して窄め・やゝ皷狀を呈してゐるのを認め得。琉球荻堂貝塚(2)に見る如く其孔竅も著大ではなく赤色顏料をも施したる形跡がないが裝飾品であることだけは想像し得る(圖版第四10)。

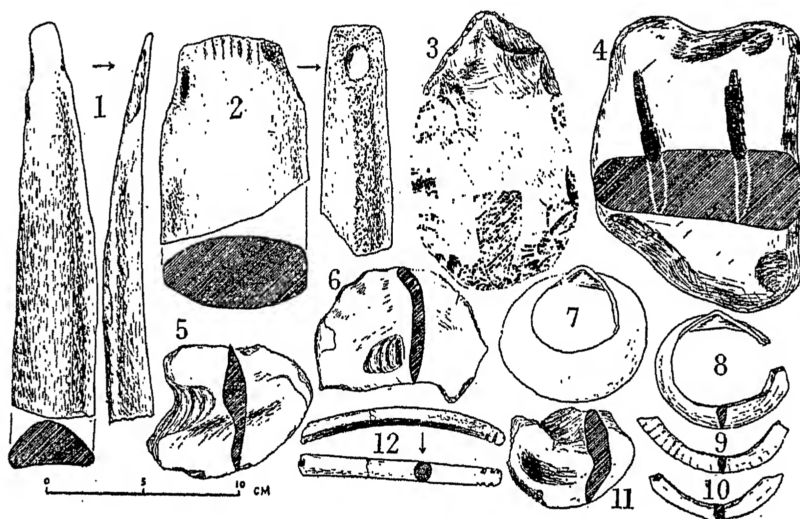


Fig 7. 東三洞出土骨器、貝器及石器

鳥骨としては鳥の肢骨を三・五糎の長さに切斷して管狀とな

ところのものであつたが村人の語るところによれば網小家を建てる時に貝層を掘り取りしに頗る大なる鯨骨露はれ彼等を驚かしたと云ふ。この他に猛獸の乳齒、鳥類の骨等ありしもその種類を明かにすることが出來なかつた。

要之、此等の遺物の示すところによつて東三洞貝塚住民は漁撈によつて貝類魚類を食膳に上せ或は山野に狩獵し、又冬期寒流に沿ふて南下せる海豹等を捕獲して生活資料を得てゐたことは説明するまでもない。然し彼等は捕鯨術に就いては全く知るところはなかつたであらう。彼等が鯨を捕獲し得たのは偶然的のことであつたに相違ない。茲に私は宮武辰夫氏がアラスカで見た「鯨の坐礁」と云ふ珍奇な事實の聯想を禁じ得ないのである。また後に述ぶる杓子形石斧の存在は彼等が土に親しみを有することを暗示するとは云へ、未だ農耕文化が存在したと云ふ積極的證據は全く得られなかつた。

B　人工遺物

Fig 6.　東三洞出土鹿角、海豹下顎骨

人工遺物に於ても自然遺物の場合と同様に植物性製品を發見し得なかつたから人工遺物としては動物性品と石器及び土器とである。之等につき項を分ちて記述せむ。

I　動物性品

(一)貝製品

貝殼を使用して製作したるものに實用的に使用したものと裝飾の目的を有したものとがある。本貝塚から出土したものにて前者に貝庖丁、後者に貝輪がある。

貝庖丁　牡蠣殼にて製作したものであるがその形式より二種に區別せられる。その一は庖丁の先端部の如き形に貝殼を切り

は鹹度高き所に棲息する貝類であつて、淡水産貝類は勿論蛤の類を全く見ないことである。是は本貝塚が河口又は溺谷の丘陵、臺地に形成された内貝塚又は奥貝塚ではなくて外貝塚であるがためであつて東萊、金海貝塚等に對照して本貝塚の特異とするところである。

（二）魚　類

その種類の判明せるものは次の如し、

Pagrosomus major (T & S)　マダイ

Scomberomorus niphonius Cuvier & Valenciennes　サハラ

鯛はその顎の大さより推定するに四十乃至五十八糎の身長のものが普通であつてその臼齒のよく發育せる點より年齒を加へたるものが多く、鮫類の如き軟骨類の椎骨も發見した。釜山考古會ではイルカの骨をも得た。

（三）獸　類

獸骨は多數に存在したが種類の判明せるもの次の如し、

Cervus mantschuricus Swinhoe　マンシユウシカ

Cervus xanthopygus Milne-Edwards　マンシユウアカシカ

Phoca vitulina largha Pallas　アザラシ

抑滿洲赤鹿は頗る大型であつて朝鮮では北部蓋馬高臺地方に棲息し南部朝鮮には現存せないけれども當時には此地方にも棲息してゐたものと想像される。海豹の下顎骨は及川氏の採集にして鹿角は貝層中にて採集す。滿洲鹿の角は頭骨に付着せるに反し滿洲赤鹿の方は脱落したものである。而してその角の一部

Fig 5. （鎭海要塞司令部許可濟）
第四層ニ於ケル鯨骨(A) 土器(B) 出土狀態

に切斷された跡がある(第六圖)。滿洲赤鹿に就いては金海貝塚よりは檢出されてゐない(1)けれども東萊貝塚からは及川氏蒐集品中に檢出し得る。

なほまた既に述べたる如く鯨骨の發見は私等の注意を惹いた

個（第七圖3）に過ぎなかつた。猶試掘の際貝層中より出土確實なるもの三個（第十七圖8、第十九圖）あり。次に鯨骨に出遇つたのは一再ではなかつた。第五圖（A）は及川氏第四層に於けるその一例である。然し出土狀態に就いては前述の釜山考古會發掘の場合の如き特異性を見出し得なかつた。

Fig 4. （鎭海要塞司令部許可濟）
A 地點貝層露出狀態

A 自然遺物

自然遺物としては動物性のもののみにて植物性のものは發見されなかつた。貝類は脇谷博士に、其他は森教授にその鑑定を煩はしたものである。

(一) 貝類

Cardium muticum	トリガヒ	1
Chlorostoma basilirata	クボガヒ	11
Cyclina sinensis	オキシジミ	2
Haliotis japonica	トコブシ	4
Mitilus grayana	イガヒ(セトガヒ)	8
Ostrea denselamellosa	イタボガキ	1
Ostrea mullistriata	イワガキ	16
Paphia philipinarum	アサリ	2
Pecten laquaetus	イタヤガヒ(ホタテ)	1
Thais broni	レイシ	3
Thais distinguenda	テツレイシ	1
Turbo cornutus	サザエ	5

甲殼類

Balanus	フジツボ	

貝の種名の下に記入したる數字は最も少き種類を單位とした場合の貝塚に於ける存在量を表示す。

本貝塚構成の貝殼は岩牡蠣最も多く、クボガヒ、イガヒ之に次ぎ、蠑螺もまた少くはない。玆に注意すべきは岩牡蠣、蠑螺

第一層の約五糎の長さの錆針金と共に明かに後世の混入と思惟せられる。

さて表に就いて少しく説明すれば第一層に遺物を包含し第二層に於ては殆ど之を見ない。この事實の妥當なる解釋は第一層は開墾地均によつて形成され、その包含する遺物は開墾によつて破壊されたものが土砂と共に運搬されて來たものとすべきであらう。從つて地表の品に散布狀態となれるものと同一性質であるとみるべきであらう。第二層第三層は耕作の際に攪亂されずとは保證し難いが第四層以下はその憂ひなく全くの處女層であると解すべきである。

三　遺　物

前述の處女層から出土せる遺物は其大部分が土器であつて骨器貝器また少い方ではなかつた。之に比して石器は僅かに黒耀製石鏃一個（第廿三圖）と打製石器一

層位／擔當者	灰色表土 第一層	灰色表土 第二層	黒色腐蝕土 第三層	黒色腐蝕土 第四層	貝層	粘土層	地山
佐山氏	魚骨獸骨 無文土器 帶狀文土器 全面文土器 土器把手 錆タル針金		黒耀石片 無文土器 細線文土器 帶狀文土器	貝殼 魚骨鯨骨 無文土器 帶狀文土器 朱塗土器	貝殼 魚骨、獸骨 鯨骨、鹿角 黒耀石片 貝製品 骨器、牙器 打製石器 無文土器 細線文土器 帶狀文土器 全面文土器 朱塗土器 土器把手	貝殼 魚骨 無文土器 細線文土器 帶狀文土器 全面文土器	ナシ
濱田氏	無文土器	黒耀石片 粘板岩片	石器端片 無文土器 帶狀文土器	魚骨獸骨 片輪片 無文土器 細線文土器 帶狀文土器 土器把手			
及川氏	黒耀石片 無文土器 朱塗土器 土錘		貝殼 獸骨 黒耀石片 無文土器 朱塗土器 陶質土器	鯨骨 石錘			
中野氏	無文土器		貝殼 無文土器 土錘	貝殼 無文土器 朱塗土器			

第一日は地主との交渉、發掘地點の物色等にて終つた。歸途、釜山港南防波堤に至る約二粁手前、靑鶴洞の海岸に嘗て製肥工場のあつた近くに貝塚があると立寄つてみたが極めて狹少にて且つ破壞されて屋敷の下になつて僅かにその名殘を留めるのみにて遺物とては全く發見し得なかつた。

第二日は及川氏、佐山氏、濱田氏の外に試驗場の中野氏の應援があつた。發掘地はA地點の貝層が斷層狀態となつて露はれてゐる所を汀線に沿ふて二坪程行ふことにした。佐山氏、濱田氏、及川氏、中野氏の四名が汀線にそふて相並んで各一米幅を分擔し、横山は全體を視ることにした。被覆土は約二十糎づゝの層として剝ぎ取つて行つた。大略第三層にて灰色の表土は終り黑色腐蝕土が始まり第五層に至つて貝層に達した。貝層部は先の試掘に於て層位的關係を發見しなかつたため被覆土と同一手續を行はなかつた。斯くて貝層の中程に至つて作業を中止して第二日は引上げることにした。

第三日は引續き貝層を發掘した。この日大曲氏の來援ありて大いに能率を上げ早く作業を完了し得たことを嬉んだ。貝層下は腐蝕土と赤褐色粘土とが混在しなほ遺物を包含してゐた。所によつて多少の高低はあつたが大約三十糎にして地山に達した。（第二圖、第三圖、第四圖）。

私等の發掘した地域は極めて狹少ではあつた。然し自然力並に人間力によつて久しからずして壞滅せんとしてゐるとは云へ、史前の寶庫を遠久に廢趾と化する其發掘には眞摯敬虔の念なき能はず。この心よりすれば決して僅少だとは云はれまい。

その後、昭和七年八月二十八日と九月十一日との二回にわたり釜山考古會の諸氏によつてC地點が發掘され、その小報が會員に配布され考古學第四卷第五號に紹介された。同地點は嘗て昭和五年七月二十一日に及川氏が試掘されたことがあり、その際に管玉狀の鳥類肢骨製品、粘板岩質磨製石鏃等（第二十圖14）を出土せしが、其小報によれば今回の發掘に於ても骨製釣針、磨石鏃、黑耀石片等（第九圖）の出土あり又完形土器數個（第十四圖）、土器端片多數採集され、其出土狀態に就ては同地點が厚さ約三十糎の三層よりなり表土A層は攪亂されたるも黑色腐蝕土と貝殼混在のB層及び純貝層たるC層は移動せる形跡なく、そのB層に於て遺物包含量最も多くC層にては有紋土器の發見なしと云ふ。

さて茲に私等の發掘せる遺物の層位的關係を表示すれば次表の如くである。但し及川氏第一層及び中野氏第三層より各一個出土せる土錘は何れも赤色素燒にして其土質形式燒成等より察して後世のものと思はれる。又及川氏第三層出土の陶質土器（炻器）端片は二個にして極めて小さくそれの屬せし原形は全く不明であるが何れも紫黑色を呈し釉藥を有す。故に之また佐山氏

行は道視學池田正義氏、佐山右左吉氏と四名であつた。

先づ牧ノ島渡船場を上つてまもなく町端に瀛仙町貝塚がある故そこに立寄つた。新しく出來た道路のために貝層は全く取去られて僅かに貝殼が地表に散つてゐるのみである。其所は第四期層に屬するらしい。土器端片が朝鮮民家の隅に積み上げられてあつた。が何れも金海、東萊貝塚に見るものと同一物であり角形把手も見出された。

ここからや〻險しき山路を經て東南約五粁にして一寒村に達した。牧ノ島の東海岸にある漁村であつて前方に朝島を控えてゐる。東三洞と云ふ。此所に目的の貝塚がある。この貝塚の地形に就いては遺憾ながら要塞地帶なるため詳細なる説明をなし得ない。

貝塚の位置は現在の漁村民家に接續し、表面は開墾されて畠となり、白く貝殼が散布し遺物もまたその間に散在してゐる。(第一圖)。然し幸に汀線に沿ふて僅かながら貝層が露出し、その厚さ約一米にして其上に約八十糎の被覆土がある。其所は網小家を建てるため土を深く掘り取られて其兩側に貝層が殘り、北側は草原となり南側は南北面と東南・西北面との兩方面が斷層狀態となつて貝層が露出してゐる。貝層は餘り奥には續かずして消失してゐるがなほ黑色腐蝕土の層が奥に續いてゐる。貝塚中心部が取殘されたものであらう。この南北面貝層露出部をA地點、東南・西北面黑色腐蝕土のみの所をB地點、北側の草原をC地點と呼ぶことにする(第二圖)。

Fig 3. (鎭海要塞司令部許可濟)

東 三 洞 貝 塚 遠 望

先づ表面採集をなし、次に貝層の一部を試掘した。割合に多くの遺物が包含されてゐた。歸途は舟にて釜山棧橋に着き、濱田俊象氏の所藏品を拜見して歸城した。

第二回の調査は同年七月二十三日より三日間である。先の經驗にて遺蹟地への往復は舟が便利であることを知つた。そこで水産試驗場のモーターボートを出して頂くことになつた。

悲しませた。鳥居博士は慶尙南道の釜山附近及全羅南道の濟州島に有紋土器出土遺跡のあることを述べられてはゐるがその報告書は無く、又その遺物を見る機會は與へられず、全く旱魃の時の雨雲を見失つた如き感であつた。

處が翌年の四月に入つて及川氏から來信ありて牧ノ島に於て更に新らしき貝塚を發見し、土器紋樣は岩寺里出土のものに近似し、而も種々變化あることを知らされた。晴天の霹靂。待望久しき慈雨にも喩へむ。早速五月に許しを得て現地踏査に赴いた。其時、大曲美太郎、佐山右左吉、濱田俊象の諸氏を識るの機會を得た。更に七月二十三日より三日間に亙り、此等諸氏及び水產試驗場の援助のもとに同遺跡の發掘を行つた。その際なほ總督府博物館、道廳學務局、釜山警察署等の方々の直接間接の援助又は便宜を賜つた。この方々に對して玆に深甚の感謝の意を表する。

玆に記述する報告はその結果である。若し學界に何らかの裨益するところありとすれば之全く上の諸氏の賜物である。

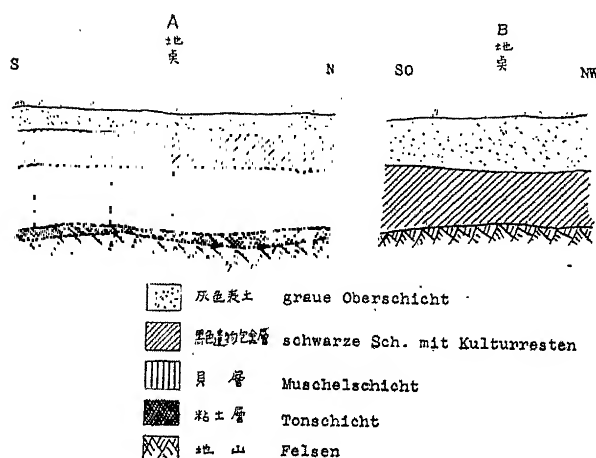


Fig 2. (鎭海要塞司令部許可濟)
A 地點及 B 地點發掘圖

此の稿を草するに當り當時激勵をたまはりし水產試驗場長脇谷博士が最近病魔の犯す處となり誠に殘念に思ふと共に自己の怠慢を悲しまざるを得ない。なほ森教授には常に多大の援助と助言を賜はりしこと、又考證に際して北咸地方の資料に就いては松野紋治氏、九州地方の材料に對しては津田繁二氏、更に內地の資料に於ては史前學研究所に其助力を仰ぐこと多大であつたこと、猶、釜山考古會が其採集遺物を自由に使用することを快く許されたことを特に附記して感謝する。

二　遺蹟の位置、狀態及發掘經過

第一回の調査は昭和五年五月三日及川民次郎氏の案內にて一

一 序言

それは昭和四年晩夏のことであつた。今は亡くなられた淺川巧様の勸めによつて慶尚南道東萊貝塚を踏査した際、當時東萊高等普通學校の敎諭及川民次郎氏を訪れて蒐集遺物の拜見を請うた。其時、偶然南鮮に珍らしき所謂櫛目紋様ある土器端片を其所藏品中に於て發見した。其出土地を質したるに釜山府牧ノ島（絶影島）瀛仙町貝塚たることを敎へられた。其時には日程の餘裕なきため後日を約して歸つた。

然るにその後、間もなく其貝塚は道路敷地となり破壞されて殆ど其跡を絶つたことを聞かされた。

當時、久しく私は京城郊外の漢江河段丘の岩寺里出土遺物の整理調査を行つてゐたが其土器の大部分は所謂櫛目紋であつて頗る多種多様、富豐であるために、私の非常なる關心事となり其系統問題に腐心してゐた際とて其湮滅の報は少なからず私を

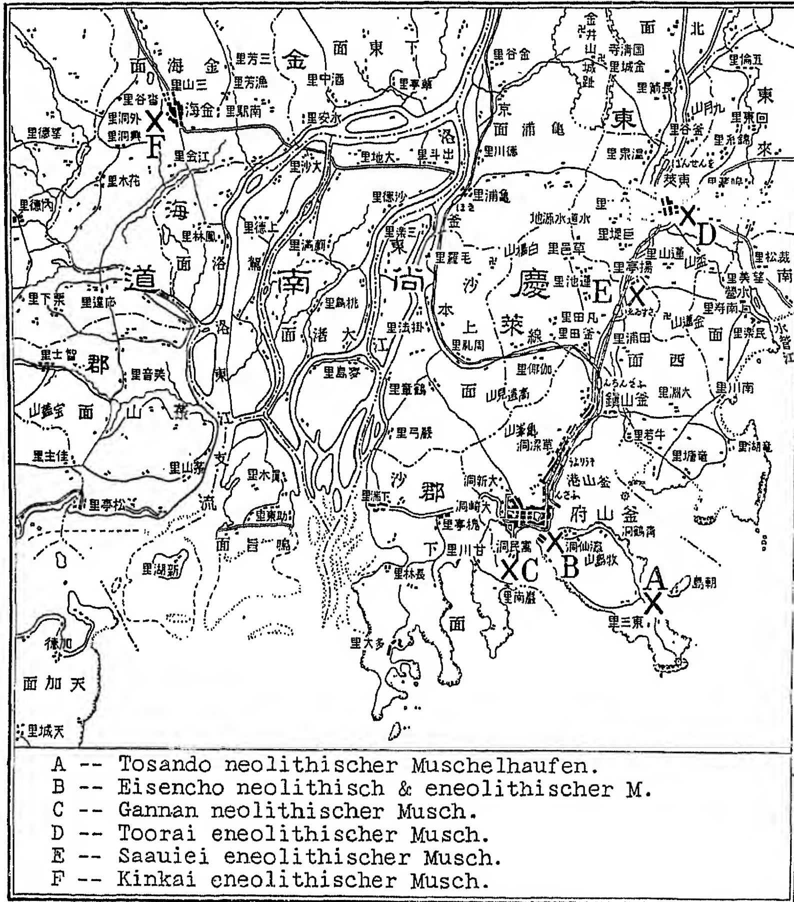
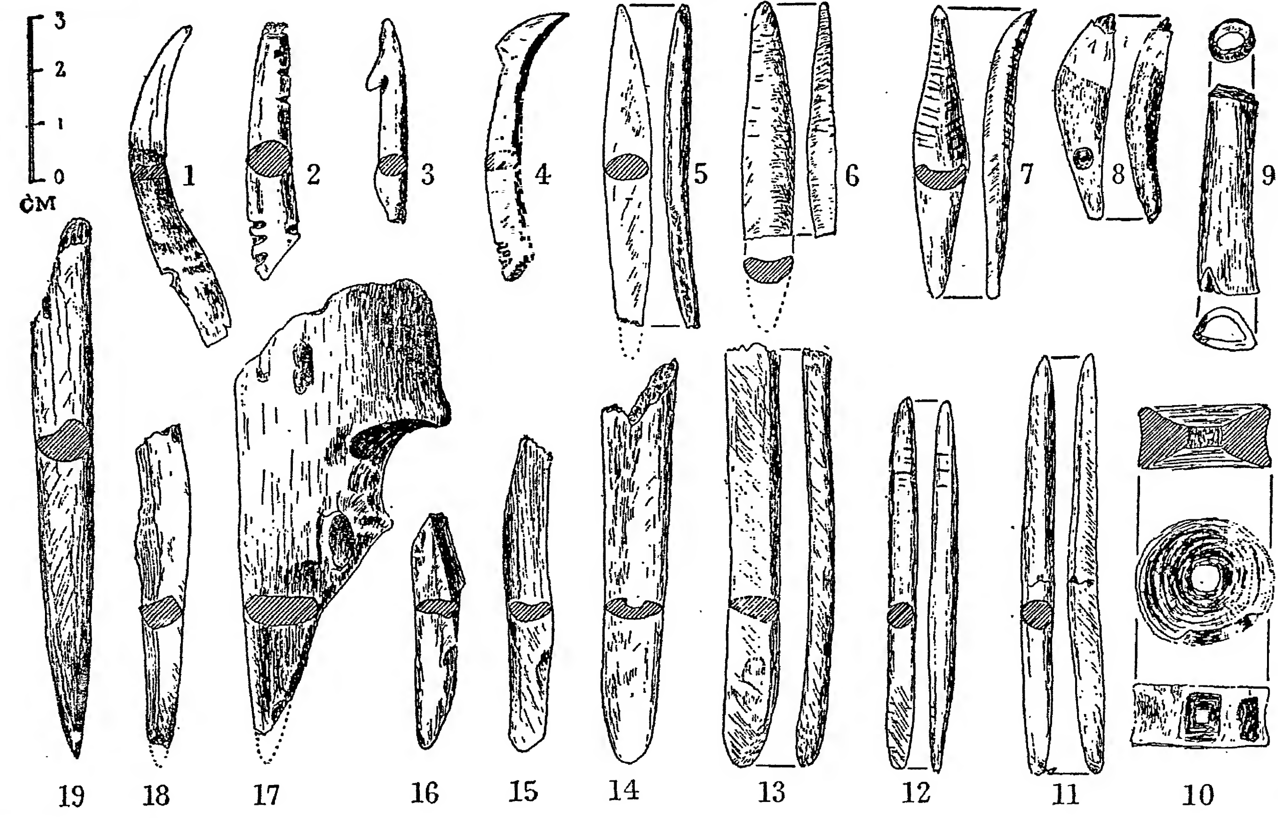
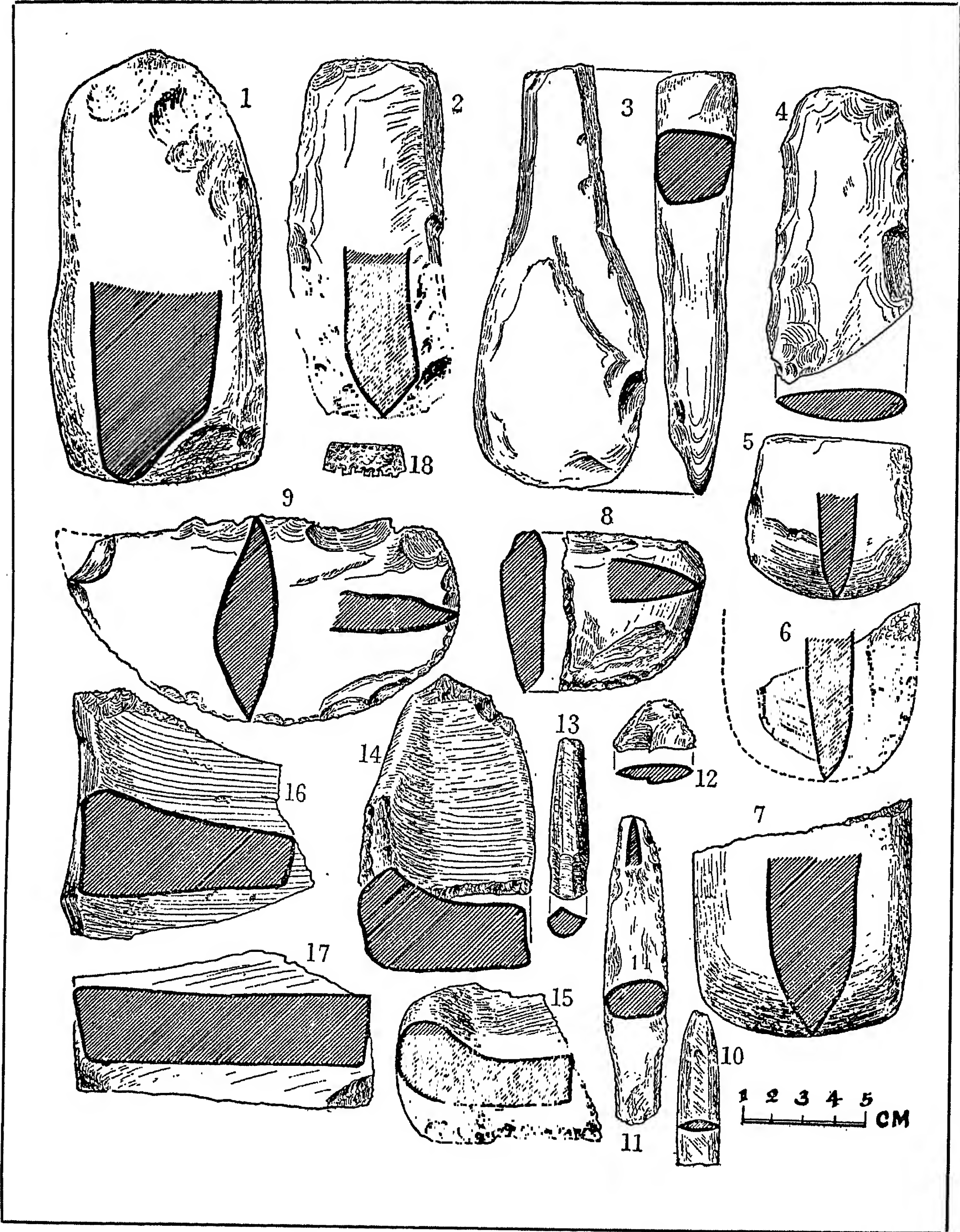


Fig 1.　釜山附近地圖（陸地測量部二十萬分一圖ニ據ル）

東山洞貝塚出土土器



東 山 洞 貝 塚 出 土 骨 角 牙 器



東 山 洞 貝 塚 出 土 石 器

（二）東三洞貝塚の南鮮文化郡に於ける文化階梯上の位置

（三）東三洞貝塚と他文化郡との關係

總　括

目次

釜山府絶影島東三洞貝塚報告

――繩紋式系統の朝鮮大陸との關係――

横山將三郎

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所內　**史前學會**　電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　杉山壽榮男　田澤金吾
會計　池上啓介　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年八月十五日印刷
昭和八年八月二十日發行
第五卷第四號　定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山柏
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內　**史前學會**　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番
發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　**岡書院**　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第五巻　第四號

昭和八年八月發行

釜山府絶景島東三洞貝塚調査報告

横山將三郎

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

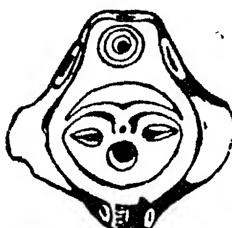
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

ORGAN DER JAPANISCHEN PRAEHISTORISCHEN GESELLSCHAFT

HERAUSGEGEBEN

von

KASHIWA OHYAMA



5. BAND 5. HEFT

TOKIO

September 1933

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   - A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   - B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   - C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   - D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder

   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder

   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen

   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden

   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

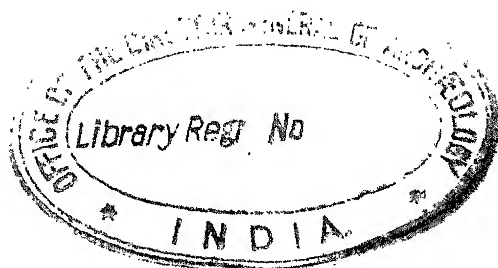
Fürst Kashiwa Ohyama	Sueo Sugiyama
Isamu Kohno	Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami	

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

TAFELN



會報・雜報

入會者

東京市世田ケ谷區代田一丁目六五二ノ二　山口隆一
北海道廳札幌市帝國大學附屬博物館　名取武光
長野縣埴科郡坂城町　高橋文男
東京市四谷區簞笥町四〇　神尾明正

轉居

東京市大森區北千束町六四四　森潤三郎
京都市京都帝國大學醫學部病理學教室　三宅宗悅
大阪府中河内郡高井田村新喜多一〇　船越章
新潟縣佐渡郡相川町　原田廣作
兵庫縣加古郡阿閇村本莊長谷川方　栗山一夫
東京市中野區江古田町一丁目二〇五九　直良信夫
東京市四谷區大久保百人町二丁目三〇藤田嗣章方　藤田嗣治
東京市赤坂區青山南町二ノ一九　海法成一
東京市芝區高輪南町三〇　佐野又治
東京市目黒區鷹番町八六若木寮內　下村正信
滿洲國新京城內東三馬路大滿蒙新聞社內　菅崎三文

雜報

本號は會員諸氏より多數の玉稿を頂載致し、頁數が多數に上りましたので、原稿到着順に掲載致しました。資料、新著紹介等は次號に讓りました。又豫て御約束致した史前學研究所の一研究として長年努力してまいりました「東京灣に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的豫報」を目下校正中で御座いますから近々適宜の方法により配本致す豫定で御座います。

尙石野瑛、堀野、松下、前田諸氏の興味深き玉稿を寄せられて居りますから、此れも年內に第六卷第一號として能率を上げ、本年の最初に御約束致した如く雜誌發行に關し、會員諸氏の御期待に具ふべく努力致します所存故、會員諸氏にをかれても本誌を益々發展せしめる意味に置いて奮つて御寄稿並に御鞭達を願つて置きます。

「東北史綱」

第一卷「古代之東北」

今回の滿洲事變が我々にとつて感激深いものであると同樣、相手方の支那人にとつても痛烈なる感慨があつてよいわけである。其の悲憤が種々な形で現れたものゝ中で、我々に殊に興味深く思はれるのは、現今、中華民國第一流の歴史家達の共同撰述に成る「東北史綱」である。東北とは（恐らく我國の「東北地方の例に依つたものであらう）、我々が滿洲と呼ぶ地域を指す新しい名稱である。此の書の目的は、申す迄も無く、滿洲が古來支那の領土の一部であるといふ事を、歴史的に證明しようとするのである。しかも、此の書が北平の國立中央研究院歴史語言研究所から發行されてゐることは注意に價する。

昨年十月に出版された其の第一卷「古代之東北」は傅斯年氏の撰述にかゝはり、石器時代より六朝末に至る「東北」史であつて、菊版一三八頁、博引旁証に努めてをられる。其の序文を見ると「日本が「大陸政策」とか「滿蒙生命線」とか言ふのは、日本の中國に對する「露骨的な進攻の口號」であつて、近頃日本人が「滿蒙は歴史上支那の領土に非ず」と言つてゐるのは「鹿を指して馬と爲すの言」である。二三千年來の歴史を見るに、此の地方が中國に屬してゐることは、江蘇、福建などが中國であると全く同じである。……近來、日本學人の東北に關する研究は功績頗る見る可きものがある。日本の歴史學者は「東北」史をもつて中國學の一部、卽ち中國史の一部と認めてゐる。公正なる彼等は、白を黑と言ひ、鹿を指して馬と爲すやうなことは敢へてしない。それ故、彼等は東北は歴史上中國に非ず等とは言ひ得ないのである。云々」と言つてゐる。

其の第一章「渤海岸及其聯屬內地上文化之黎明」第一節「東北與中國北衞在遠古爲同種」の中では、日本の公正なる學人の代表として東京帝國大學濱田耕作教授、京都帝國大學醫學部清野謙次教授の「貔子窩」中の所說を引用してゐる。そして「貔子窩」の報告書のことを「其の工作の細密、印刷の精工、頗る歎服に堪えたり」と第一流の讃辭を呈してゐるが、內容の引用に至つてはちと見當ちがいのやうに思はれる。

第二卷以後は未だ出版されてゐないが、その標目を見ると、第二卷「隋より元末に至る間の東北」（方壯猷）、第三卷「明淸の東北」（徐中舒）、第四卷「淸代東北の官制及び移民」（蕭一山）、第五卷「東北の外交」（蔣廷黻）となつてゐる。いづれも國立研究所關係者と思はれる。

我國の學人諸公、果して「滿洲非中國領土說」編述の氣概ありやなしや。（山口）　（昭和八、六、一五）

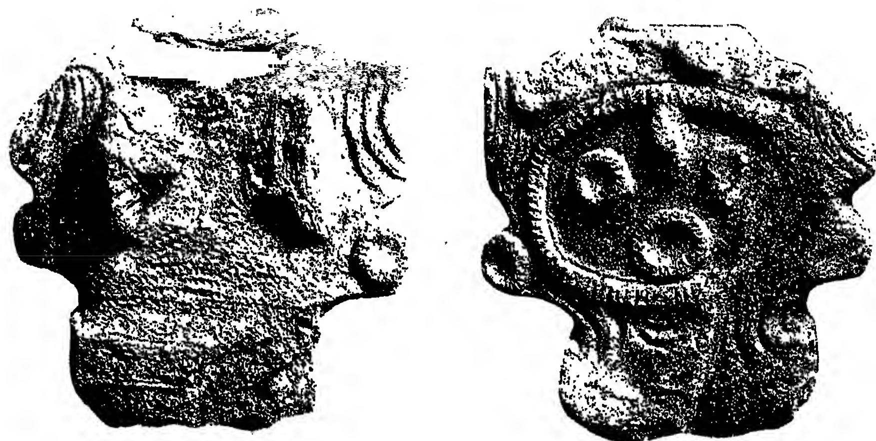
千葉縣印旛郡手賀村岩井貝塚發見の土偶

池上啓介

岩井貝塚は從來より遺物の豐富にして而も精巧なるものを出土する事は、武藏の眞福寺貝塚の狀態と必敵する。即ち土器、土偶、土版、磨石斧、石棒、骨錐、貝輪等が多數報告せられてゐる。貝塚の貝層は鹹水産貝類の所と淡水産のもののみの所がある。土器の性質から云へば、大森式にして關東後期繩文式土器に屬す。

私は去る五月國學院大學上代文化研究會の同人と共に手賀沼方面の見學を行つた、偶々本貝塚を久振りに訪れ、貝塚表面で下圖の如き土偶の頭部を發見したから報告致し度い。

即ち圖に見られる如く、所謂木兎土偶と稱せらるもので、顏面の陵起線による表現、目、鼻、口の手法に見る可きものあり、後頭部の二つの突起等此種の土偶の特徴をよく表現してゐる。特に本土偶の最も深く興味を以て見られるのは、耳の部位にして一方の耳は缺損するも所謂耳飾りを附した如く觀られる點である。即ち土製耳飾りの身體裝飾品としての位置を考察せしめるものであらう。色調は赤褐色を呈し燒成は良く、雲母質を多量に含む、縱九糎、横九糎、最大幅二糎にして頗る扁平である。而して私の今迄に見た此種の土偶では最大のものである。



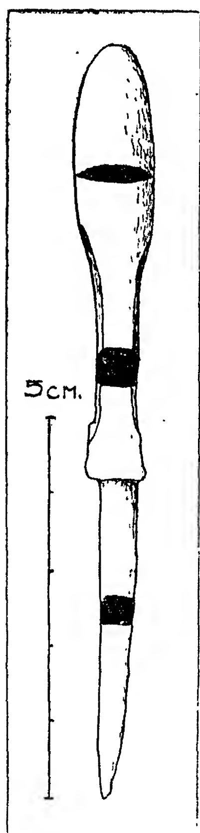
岩井貝塚發見土偶

ゝ端平にして鋅狀を呈し、頭部に一孔を有する點に於て兩者は共通してゐる。おそらくその頭部の一孔によつて懸垂して使用されたものであらうことは容易に想像され得るが、他の類品を自分は知らないため、單に、或種の興味を强くひくと云ふことを述べ得る以外に、今日に於ては、果して如何なる意義を有するかを說明することが出來ない。

石器時代包含層中發見の鐵鏃

樋口清之

かつて昭和六年度夏自分は岩手縣立一戸高等女學校教諭梅垣鼎三氏を訪問して圖示の如き一本の鐵鏃を見せられた。大さは十糎、鏃身部五・七糎の柳葉狀のものであつて、甚だしく銹化しては居つたが、なほ、莖及び鏃身基部は斷面方形を呈し、鏃身部兩側には銳利な刄が存在してゐる事が知られる。この型式は申すまでもなく、我國古墳時代の終頃より存在してはゐるが、最も盛に用ひられたのは鎌倉時代以降であつて、江戸時代に入つてもなほ一部には殘存して居る。たゞこれだけであるならば別にこの遺物は大した意義を持たない單なる平凡な一箇の鐵鏃に過ぎないのであるが、この鐵鏃は梅垣教諭によつて、岩手縣二戸郡浪打村大字鳥越字林なる繩紋式土器包含層中しかも數尺の深さに於て、何等二次的變化、又は混入の痕跡なくして存在して居つたのを發掘された由である。もし然りとすれば、本鐵鏃の有する意義は甚だしく重大な性質を帶びることになると考へられる。しかもその伴出土器は圓筒土器の一類である由、同教諭は語られた。



發見の鐵鏃

從來の石器時代の概念を以てしては、右の如き事實は甚だしく奇異な現象であつて、人によつては、今日に於てもなほ一笑に附して顧みないかも知れない。しかし、自分等は、近時、熱心な東北地方研究の諸先輩が提示される事實や、又、每日取り扱つてゐる諸種の文獻を通じて、か〻る現象を無視する勇氣を有しない。否むしろそこにこそ、東北地方石器時代究明の新らしい鍵の一が存在するのではないかとすら想はれるが、たゞ今日に於てはなほ資料が僅少である。

資料

鐸狀土製品

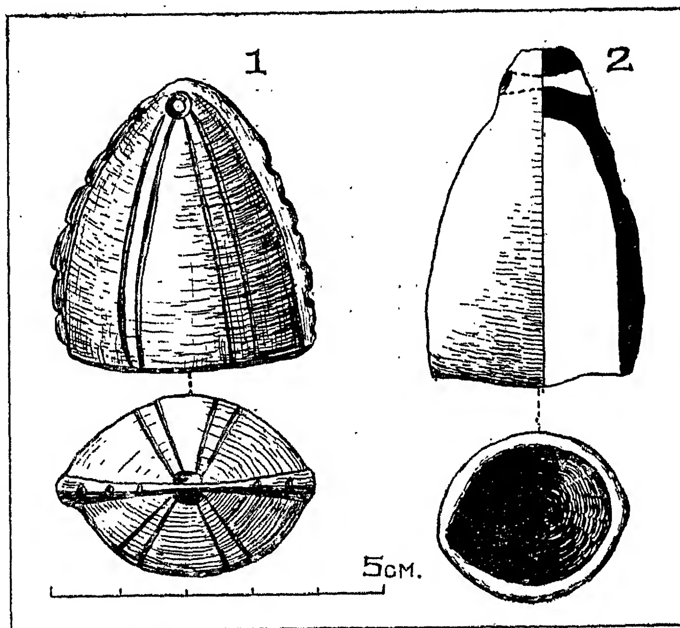
樋口清之

東北地方に於て所謂陸奥式土器と伴出する小形土製品には、その複雜なヴァラエテイに混じて、往々奇異な感や、特殊な連想を起させる様なものが少くはない。玆に示した二箇の小形鐸狀土製品、亦その一である。出土地は、

(1)秋田縣河邊郡荒巻村後山（東北帝大國史研究室藏）

(2)青森縣西津輕郡裾野村十腰内（青森市佐藤蔀氏藏）

で、前者は灰紅色を呈し、表面滑澤を帶び、薄手に出來て居つて、頭の尖つた鐸狀を呈し、頭部に一孔を有して中空、全體はあたかも銅鐸の如く端平になつて居つて、その稜には一の小さき凸帶を周らし、その上が鋸齒狀刻目がつけられてゐる。主體部には表裏共に、頭孔より始つて口唇に續く各々四本の直線(二本づゝ平行)が陰刻されてゐる。約高さは四・三糎。後者の方は、やはり薄手であつて、黑褐色を呈し、土質燒成は共に精良である。(1)と同様中空にして頭に一孔を有し、極く僅かではあるが、銅鐸の如く端平になる傾向見られる。たゞ(1)と異るところは、頭部が尖らず、かつ表面に紋様を有してゐない點である。



鐸狀土製品

右の二土製品は、大體に於て四五糎の大さを有して、中空、や

ところの壺や甕（即ち伴出した土器）は之れを打ち碎き、貝殼と共に搗込むのが普通であつて之れが爲め砂利や砂を買ふ必要もなく、建築に當つて尠からぬ便利を蒙つてゐると、盛んに貝塚の功罪を述べ、以上のやうな次第であるから、この土地には遺物等を所持して居る者はありませんと、話してゐたが、其の理解のないのには、全く呆れざるを得なかつたのみならず、都村の例と共に、單なる貝殼の利用と云ふ點で、遺跡を壞滅荒廢せしめられることは、誠に遺憾至極であつて、何とか之の暴擧とも云ふ可き行爲を、取締る方法は無いものかと思ふのである。

× × ×

終りに貝塚の貝を養鷄飼料に利用する例も到る所に於て見聞するか、武藏南埼玉郡慈恩寺村表慈恩寺荒久貝塚の如きは、之れが爲めに遺跡全體が破壞し盡されて、今日では貝塚としての面目は全く失はれ、その遺跡なりや否やを認めるすら、容易でない狀態で殆んど、發掘調査の價値なきものとなつてゐる。次ぎに家屋其他の建造物に貝殼並に土器を、利用するのも早尾貝塚以外に、其の類例は頗る多いやうである、私の親しく實見したのでも、流山町鰭ケ崎貝塚、及び、下總北相馬郡文間村立木貝塚傍の神社等がある、之等は何人でも其の社殿の床下や、柱の基礎となつてゐる部分を見るなれば、直ちに首肯する事が出來ると思はれる、之の外に道路工事に砂利の代用として貝殼や土器が使用される、實例も相當多いものの如く私の屢々耳にする所である、尙之等の事柄を遺跡所在の各地に亘つて、調査したなれば相當に面白い事例が現はれるものと思はれるのである。

見たいと思ふ。

× × ×

古い昔話しであるが、現在の千葉市が未だ町であつた頃、ある日寒川の海岸を散歩した事がある、其の時波打ち際に、繩紋土器の破片が點々と散亂してゐる上に、錘石まで轉がつて居るのを發見採集したが、之の海岸は最も近い洪積層からも約六七町も離れて居り、且つあらゆる狀態から推察しても、遺跡の存在する理由が認められないので、不思議に思ひ、附近一帶を注意して見ると、砂丘の上に一の石灰製造所があり、其の傍に土器片の混在する貝殼が山の如く積まれてゐるのを見出したのである、依つて種々と貝殼の出所を調べたところ、之の工場では町から十數町離れた所にある、都村大字貝塚字貝殼邊田の大貝塚から、其の貝層を掘り出し、馬力で之の海岸に搬出し、石灰の原料とするのであつて、彼の土器片は之の工場で邪魔物扱ひを受け投棄されてゐたものである事が判明し、漸く其の疑問を解いた事があるが、是れ等も學問上貴重である遺跡が、徒に荒廢せしめられる一例として、茲に擧げた次第であるが、之れを興味本位として見るなれば、現代人が史前人の遺存物に着目して、之れを工業材料に利用すること、並に埋藏されてゐた遺物が、其の遺跡から他の地點に移動するのが、一寸面白くも感じられるが、然し吾々考古ファンの眼には誠に痛ましき事實としか、映らないのである。

× × ×

次ぎは昨冬茨城縣北相馬郡文村早尾貝塚に赴いた時のこと、折柄傍の畑で仕事をしてゐた農夫を捉へて、遺跡の事や遺物所有者の有無等に就き、質問したところ其の百姓の話しに、村の連中は海から遠く離れてゐる、この土地に斯樣に澤山の貝殼があるのを不思議に考へてゐたのであるが、最近各地から之の土地を調べに來る人が多くなり、夫れ等の人々の話しに依つて、村の者も大昔、此所にアイヌ人が住んで居たと云ふことを、合點するやうになつた、然し一年中忙がしい仕事に追はれてゐる、吾々百姓には之れを調べて見るといふ、興味と暇がないので、遺跡に就いては何等の注意も拂つて居ない、只遺跡に就いての關心と云へば、貝殼や燒物の破片があるので夫れが耕作の邪魔となる上に、作物の成積にも關係し、他の土地に比較すれば幾分劣るやうに思ふ、然し耕作に不利益である反面には、養鷄を副業とするものは、遺跡から貝殼を篩ひ出して之れを搗き碎き、飼料と共に混食させるために鷄卵の品質は向上し、且つ石灰分飼料を購求して飼育しつゝある、地方の養鷄家から見るときは、之の貝塚のお蔭で相當の成績と利益を擧げてゐる、尙この村では家の普請をするときは、必ず貝層を掘り採つて家の土臺となる所に搗込み、地形固めをするが、其の際貝殼と共に出てくる

貝塚雜記

簡野啓

二十餘年前東京附近に於て、吾々が活躍した遺跡を、今日歴訪して見ると、都市の大發展に伴ひ市街地と化して、其の面影さへ見出す事の出來ぬものや、又は地形の變化、即ち田圃の埋立に依り遺跡が掘り取られ、既に湮滅したものも相當にあるので、之等の遺跡に逢着した場合、私は昔しを思ひ出しては少なからぬ幻滅を感じるのである、今少しの例を擧げて見ても、前者に屬するものでは、米人モールス氏に依つて、始めて日本石器時代研究の扉を開かれた大森貝塚、彌生式土器名稱の發祥地である本郷彌生町貝塚や、沖積層の眞只中にポツンと浮かんでゐた瀧野川中里貝塚、はては西ケ原昌林寺貝塚、池袋氷川裏貝塚、馬込貝塚等があり、又後者に屬するものには、日暮里延命院貝塚、大井權現臺貝塚等がある、之の延命院貝塚は、日暮里田圃の埋立に依り消滅し、大井權現臺貝塚は品川の埋立の際、遺跡のあつた山全體が掘り取られ、其の跡は鐵道省の工場敷地となつて仕舞つてゐる、之の兩遺跡の如きは、日本石器時代地名表に其の名稱を止めて居るのと、幾多先輩諸氏の活躍された、語り草が殘されてゐるだけで、今日では地名表所載地に於て遺物の發見は到底不可能であるばかりでなく、遺跡の痕跡さへ認められぬ程の大變化を來たしてゐるのである。

私の乏しき踏査に依りても以上の如くであるから、斯くの如き事例を全國的に見るなれば、相當の數に上るものと考へられるから、私は甚だ妙な言葉であるかも知れないが、今の中に湮滅した、遺跡の行衞と云ふやうな事柄を、出來得る限り詳細に調査して置く、必要があるものと考へるのである、サモない時は將來思ひも懸けぬ所から、遺物が發見された場合、夫れが甲の遺跡系統に屬するものか、又は乙の遺跡系統に編入せらるべきものか、其の決定に幾多の困難と疑問とを生ずるのみならず地下の史前人をして微苦笑せしめるやうな、論爭や問題も惹起される場合が、當然起り得るものと信ずるので、茲に石器時代の遺跡が、無意味に攪拌破壞されて行く、一二の實例を述べて

在するとは信じられない。

從來に於ける高田地方の彌生式文化は全く稀薄であつた。河内より大和に否大和全體への交通路として認識する時、かの往年石器時代遺蹟として彌生式土器及び石器類を出だせる竹の内が本年に入つて繩文式文化が發見せらるゝに至つて一躍價値を高潮しつゝあるあたりより考へて、有井が當然交通路の一ポイントとして見逃し難い地であつた點に於て、今次の發見は甚し遲きに失する感がある。

我々は今次の發見を契機として此地方に於ける彌生式文化の示相を探究したことを念願する。右に就ては先學吉田宇太郎氏より示教せられたる點の多いにとを感謝するものである。

昭八、五、二三、稿

學問のスポーツ化

世は非常時と叫ばれる一面、ベースボールだ、テニスだ、ボクシングだと誠にスポーツ日本萬歳の世の中である。そこで學生時代に一時はバットを振り、ラケットを握つた私共には、何うして默止する事が出來よう。毎日ペンを走らせたり、土器いぢりばかりして居る事が出來よう。斯くして生れ出たのが史前學會野球團である。最初は職業柄頗る原始的に烏合の集團であつたが、蠻勇と蠻技で幸ひ連戰連勝今や天下無敵の狀態である。今その發達過程を顧るに、技術上には飛躍的進歩が見られ、又服裝上から見れば、最初の素足が足袋になりスパイックシューズに變り素裸は襦袢となり、ユニフオームと云つた樣に文化的發達を見、現今では總ての點から、アメリカンチームにも必適するものと思つてゐる。

然し斯の如く技術的、文化的に進歩發達を遂げこそすれ、經濟的には相變らずの原始時代で、寧ろ、濫觴期の方が望ましい狀態である事は貧棒考古學徒の我々の目には、皮肉に感ぜられる。此の非常時難局に際し、鳩首熟考、唯一の我々に與へられた財源は原稿料稼ぎである。從來方々から依賴されてゐたものを今後は事情の許す限り應ずる事として得た幾何はバットにボールにと念變する。又取らぬ狸の皮算用式にバット、グローブの借錢もある。そこで考へだされた新語が「學問のスポーツ化」。（池戸軟鐵）

形式は大體二種で、一は壺形、二は甕形であつて、文樣は、有文と無文とがある、無文と云つても刷毛目を施して居り單なる作爲である。

一の壺形は可成大きく、高さ二十糎から三十糎、胴部二十糎から二十五糎ある。燒成堅緻で黑褐色を呈し、胴部の中程以下には煤が附着して土鍋の用途を爲したかと考へられる。之等は皆完全形で六、七個も出土し、工事中としては念入に發掘せられた結果であり注意さに敬服する。文樣は前記の刷毛目を有するものばかりである。厚さは極めて薄い。

次に壺形に屬するもの丶內小形のものが二、三個あるけれ共、全く無文に屬し、色彩は赤褐色である。厚さは可成厚い。

二の甕形は高さ十四糎、腹部直徑十四糎四、厚さ〇、七糎であつて尻座二糎を有し、黑味を帶びた褐色、燒成緻密である。口緣部の片側缺失は惜しい。

文樣は、口緣部施文部は口唇部垂直面に竹管文を配してゐる。頸部には一條の凸帶を有し、く字型文樣を置き縛緊の趾を濃厚にして文樣化の示現を考察することが出來る。體部には斜平行に櫛齒文列點文を施文してゐる。此等の一類は個數に於て甚だ少量であるけれ共この型態はかの熱田貝塚出土の土器に類例を求めることが出來る。卽ち近畿の彌生式文化圏は中國の文化圏より吸收率巧緻にして承繼したのであつて、更に東海への延長地點でもあつた。從つて東海の文化圏は「パレース」式として賞讃を承けたものである。

從來近畿の文化圏に於ける代表遺蹟に於ては、大和の新澤・唐古・平等坊・三輪であり、攝津の安滿・東山篠原、河內の國府を擧げることが出來、之等の遺物の精査に俟てば彌生式文化の中樞であつた譯であるが、東海の文化圏に於ける出土遺物が、傳承し接觸せられたものであるとするならば、甚しい文化相違を來すことなくむしろ類似點を多分に示現せるものであることは不思議ではない。然し乍ら、熱田式土器が、近畿の文化圏殊に大和に於て發見せられたにとは誠に喜悅に堪へない次第である。

他に、完形を有せず、唯、口緣部の破片に過ぎないけれ共、文樣研究上に於て見逃す事の出來ないものであるが爲に略述して置く。

口唇部垂直面は長さ二糎七を有し、下方に發達して竹管文複線波狀文を列置し、口緣部內側にも同樣複線波狀文を施文してゐる。頸部及び體部には如何なる文樣があつたは判明しない。

餘說

有井池改修に際しての出土品は單なる土器類に止まるものであつて、石器類は未發見に屬する。然し土器類の發見に忠實であつたが爲石器類は見逃されたかも知れない。が一面又當然存

大和有井池出土彌生式土器

島本一

遺跡

大和平野の西部に緩やかな南北に長い單獨なる馬見丘陵の南部その極くる處が小都高田町であり、標高約五十米、大和河内の分水嶺たる葛城山脈の水地に發する小流は大低この高田町を過ぎて、馬見丘陵の裾を包みつゝ大和川に合流する。中にも葛城川は大きくしてかの新澤の有名なる石器時代遺跡を抱してゐる。先年、木棺を檢出して、五鈴鏡を秀出した三倉堂池は高田町の南部に近く位し、馬見丘陵は大小無數の有名無名の古墳を持ち、わけても特筆すべきは巣山、佐味田、新木山、新山の古墳である。

遺蹟地は高田町の西北眞近く大軌高田驛附近に於て合流して高田川となるその支流の西邊、北葛城郡磐園村大字有井川水池にして改修工事中出土したものであつて遺物の一切は高田警察署に保存されてゐるものである。

遺蹟を一考するに、地下約二尺を採土して明治二十九年溜池と爲したものであつて沖積層であることは明白である。遺物の出土狀態は左の通りである。

祝部式土器　地表下四、五尺
土師部土器　同　五、六尺
彌生式土器　同　六、七尺

含有層は全く有機層であり黑色化し全く處女性を保有してゐる點注意を要する。

遺物

警察署に保存せられてゐる一部を實測したのみで日沒となつた爲、たゞ概記に止めて置く。

（一）祝部式土器
杯、䃈、壺、等

（二）土師部土器
杯、高杯、蓋付壺、壺等

（三）彌生式土器

は前述の通りであるが、高さ六十五糎、對照突起間三十二糎、これまで本遺跡から出た土器中最大なものである。この形態のものは先に三箇出てゐる。然し燒成、紋樣、厚さなどが、人骨を容れてあつた圓筒と非常によく似てゐることは注意すべきであらう。然も本遺跡出土の土器中、自然的に入り込んだ土壤でなく當時意識して容れられたと思ふ內容物を有するものは、人骨入りの土器と此の土器ばかりである。前者は人骨以外、小動物の骨及び木炭、黄褐色土を藏してゐたのであるが此の土器は木炭を含む燒土を二十糎の高さまで入れてあつた。

中に白色の粒も見えるが骨質か否かは、あまり小さくそして脆くて檢出し難い。矢張り底部十二糎程まで火熱に突込んだらしく別段に燒けてあり、その內側はその線を中心として下方は奇麗であるに不拘、上方には何物かを煮沸したらしい黑色殘滓が泡立つてコビリ付いてゐる。

考察　これまでの發掘面積は、全部で三十坪以上を算してゐるのであるが、それを通觀すると大型圓筒破片と共に小型土器の直立して出る褐色土層は、當時の地表と思へる。若しそうだとすればその又下層の黑土層から出る大型圓筒は當時に於て埋められたものとも解されるが、然しそれ等が傾斜なりに倒れてゐたものとも解されるが未だそれらしい證差に遭遇しない。

唯、淺層から出る圓筒以外の器形のものも、深層の圓筒と同じ系統の人達に依つて造られたものであることは兩器形のものを通じて底部十二糎程が火熱に突込まれた痕跡のあることゝ、及び假令淺鉢であつても（淺層出土の）圓筒突起の如く規則的に突起部を對照して四箇有すること、それから又深層出土の圓筒型の小さいものが淺層から注口土器に容れられて出た事實などで證明出來ることゝ思ふ。（龜岡系の薄手は一破片も出ない）

從つて本遺跡に於ては、他の圓筒系遺跡に見る如く上層から出る薄手或は厚手式、下層からの圓筒など、區別され得る狀態もなく、各層から出る土器は皆脈絡を有してゐる。それ故圓筒の伴出土器、或は圓筒が伴出したなど〻云ふ言葉も、本遺跡に於ては今日までのところ不必要である。

D土器 口徑と高さ共に等しく十七糎、小型の割に頗る厚く出來てゐる。從來これに似た形式のものは本遺跡から出土したことはない。

思ひきり開いた口唇外縁に土紐を蛇行せしめ細で刻目を附してある。そして對照に四突起を下垂し、その部分に同じ紋を飛鳥形に附してある。洞部全體には特別に吟味したと思はれる縄蓆紋を地紋とし、その上に胴下半部まで低い土紐を絡らげ、それに平行して箆の柄頭で押したと思はれる四角な連點を添へてある。然して各突起下にはその紋を縦行せしめ、土器の肩を四等分してあるのである。

此の土器は使用粘土の吟味と云ひ、形態施紋等から考へて相當の關心を以て作られた藝術品の様である。内部は綺麗で何物も容れた形跡がない。

E土器 注口土器であるが本遺跡として始めての出土である。高さ十五糎、口徑二十二糎、今日の田舎で使用する口瀬戸といふものとよく似てゐる。注口は口縁の膨らみに附してある。(寫眞は不判明だが右側に黒く見える黒い孔がそれである)。下唇少しく脱落してゐる。

裝飾としては、口緣に波線を一本繞ぐらしてあるだけ。胴部には二本縒縄を材料とする荒目の縄蓆が押されてある。

G　F　E

Fig. 3.　圓　筒　土　器

F土器 E土器の中に横になつて入つてゐたものである。高さ僅かに七糎、口徑も同様、器形に比較して荒い縄蓆を地紋とし、平行する三波線を以て縦に四等分し、各線をまた平行する二線でモール式に絡らんである。又縦行する三線の終はる口唇部分は、波状に盛り上つて四突起を形成してゐることは土器系統を知る上に於て見逃し出來ぬことである。

G土器 地表下一米半程の深部に横倒れに埋藏しあつたこと

と思ふ。

二、四月二十九日の發掘

別段發掘地點選定に心構えもなかつたが、傾斜面上方との連鎖が判かることがあればと思つて、前回發掘した點から斜面の途中を上方向けて（西—東）約二坪掘り進んだ。

埋藏狀態

矢張露天掘で十六日の地點から約一米進んだ時、黑色表土下約四十五糎で乾いた茶褐色土層となり、そのうちに含む石小刀及び數多の大型圓筒土器破片中に、第二圖のD土器が直立した儘あつたのである。

Fig. 2. D土器

更に上方へ進むに該地點から約二米の邊、全く同じ層位に拳骨二つ合はし注程の大きさの自然石が三箇、稍カーヴして並らべてあるので、よく注意して掘つたら石から五十糎北の地點に相當大な土器口緣部が顏を出した。

或は爐にいけた土器かと思つたがそうでもないし、又圓筒の直立したものかとも考へたが、掘り出して見たらそれは口瀨戸型の注口土器で（第三圖E）然もその中に一個のコツプ型の小土器が横になつて入つてゐた。（同圖F）

是等土器を包含してゐた褐色土層は、厚さ三十糎程であるが其の下層は叉濕氣を含む黑土層となり深さも一米以上ある。然もそのうち多量の木炭と大型圓筒破片を混じてゐる。そして前記石列と注口土器の据えてあつた部分の下層には、約四十糎の高さの圓筒土器が大體その形を見せて、北から南へ傾いて埋まつてあつたが形態の割に甚だ薄く、取出しの際細かく崩れてしまつたのは遺憾であつた。

然るに更にその下層稍西方に、東から西と傾斜なりに大型圓筒土器（第三圖G）が倒れてゐたのであつた。

猶ほ發掘最後の頃、その點から少し離れて褐色土層から頗る薄い管狀土製品（如何なる目的に作られたものか判からない）と原質不明の炭化物（第一回發掘の際その近くから同品二個出たが、杤の果肉の炭化したものらしくもある）及び琥珀化した松脂粒が一摘かみ程出た。

後者は火中に投ずれば、松脂特有の臭氣を發し黑煙を上げて盛んに燃える。

土器

なつてゐた。

土　器

A土器　高さ三十四糎、口徑二十糎、燒成比較的弱く全體赫

Fig. 1.　圓　筒　土　器

味を呈してゐる。著しい外曲口を持ち、口唇の一條の波線紋と、頸部に二本平行して走る浮紋帶との間に向背せる曲線浮紋を描き、口緣周圍を四等分してゐる。

胴部一帶には縄蓆紋を施してあるが、下膨くれと稱すべき形態である。

B土器　高さ十四糎、口唇內圓二十二糎、比較的厚味の淺鉢で燒成强く、殊に內面の箆目が利いて硬質である。口緣に四箇の對照大突起あり、それ等突起の中央一段下つて小突起あり、相互を浮紋帶で稜取りしてある。

大突起下には、別に菱形に浮紋を吊りその美的價値を高め樣としてゐる。胴部は左下へ走る粒の縄蓆を押付けてあり、底部は徑僅かに三糎で頗る狹く出來てゐる。

C土器　高さ十八糎、口徑十二糎、稍下膨くれの土器で、燒成さきの二者に比して弱く黑褐色を呈してゐる底高のものである。胴部紋はBと等し。

口唇部は外下に拘狀に張り出し、胴部と同じ施紋の上へ更に波狀浮紋を繞ぐらしてある。

考察　つら〳〵考へてみるに、是等三箇の土器が一所に寄つてあり、然も四邊一坪程に土石器の混在を見なかつたことは特異である。その上、土器の形態そのものも從來上方或は斜面途中から出たものと別種である。

それ等の點を考へると、確かにこの三つが或目的の爲め特に選まれて其處に安置されたものゝ樣である。

然も配置の工合から見ると、明かに西向きとして据えたもの

史前學雜誌　第五卷　第五號

圓筒土器埋藏二例

武藤鐵城

秋田縣仙北郡神代村道心坊淸水（しず）遺跡は、昨夏私が其の附近にある道心坊塚と吉利支丹關係を調査の歸途、偶然發見したものであるが、爾來今日に至るまで十回の發掘をなし、人骨の上膊骨及び小動物の骨の入つてゐたものを始め、完形に復源し得た圓筒土器は大小十數箇に達してゐる。そのうち最近の二發掘で觀察し得た特異な埋藏狀態を二例報告して大方諸賢の御參考に供し度いと思ふ。

一、昭和八年四月十六日の發掘

本遺跡は大體東から西へ緩傾斜をなしてゐるのであるが、昨冬立てゝ置いたプラン通り斜面の裾、即ち平地面との接觸點を發堀することにした。

これは從來發掘した部分は、主として斜面の途中で、小型品は稀に當時の地表と思惟さるゝ線上に直立してゐるが、大型の物は殆んど横に倒ほれ押潰ぶされてゐることを思ひその平坦に近い地點では、若しや石器時代其處に置かれた儘の狀態を觀察し得るではないかと考へた爲めであつた。

然るに豫想的中して、次の如き埋藏例に接し得たことは嬉しかつた。

埋藏狀態　西から東へかけて約一坪半を露天式に掘つたが、黑色表土を約四十糎程取り去つたら最早木炭を混ずる層となり、其處に直立した土器の口緣部が現はれたのである。掘りゆくに從つて、それが著しい外曲口を持つ下膨くれの土器であることが判かつた。（第一圖のA）注意すべきことに、その土器の胴腹南側に燒土が約四十立方糎程あつた。そして該土器底近く前方に、淺鉢が一箇自然の平石の凹みに寄せかける態に据えてあつた（第一圖B）。更に其等の北側に接して矢張り口の開いた下腹に膨くらみを持つ小型土器があつたのである。

第一圖はその埋藏狀態を示す寫眞であるが、三箇共同一平面上に置かれてあつたことは言ふ迄もない。

然して其等三箇の土器群の安置されてある床土は、僅か六糎程の厚さの黑土であり、その下は非常に鮮明な黃色土の地盤と

海に出ずることは非常に困難である、單に山の幸に依つて生活して居たものであらう、又洞窟内の多種類の石質は當時可なり遠方までの交通を示してゐると思ふ、此附近の遺跡から洞窟の直線浮紋樣に類似する土器は一片さへ發見されなかつた、此の地方の石器時代遺跡の研究が進んでゐない爲めに、洞窟の系統を明らかになし得なかつた。

大正七年富山縣大境洞窟が發掘調査せられた、當時は洞窟住居に就いては可なりの議論があつた、其後、關東地方、東北、四國に於ても洞窟遺跡は發見せられ、洞窟住居も一般に認められる樣になつて來た、從來は主として海岸近くに發見せられて來てゐた、東北地方に於ては可なり海より距つた所に發見せられて居るが殆ど洞窟住居に就ては報ぜられて居ない。柵村洞窟遺跡の存在は海邊のみならず山奥に於ても石器時代の當時洞窟住居の事實の存在を示して居る。

大場磐雄氏は土器其他の洞窟遺物が精巧でないことよりして住居人は階級の低き賤民族ではなからうかと云はれたけれど、此の柵村洞窟の遺物は附近の遺跡遺物に比して一層精巧であることより考へたなら精巧の點より見れば文化の優れた人種なりと云はなければならない、精巧でない點より賤民族と云ふことは一般的には認められないと云はなければならない。

洞窟住居は廣い範圍に於て行はれてゐる、又時間的には現代より石器時代に迄溯つて居る、我國に於て舊石器文化存否が問題にせられてゐるが舊石器時代が存在してゐたとすれば其時代に於てはより以上洞窟住居も行はれたと考へられるから洞窟に其等遺物の存在も多いに違ひない、今後多數の洞窟遺跡が發見され其發掘研究により舊石器時代存否問題に對しても、或程度の斷定を下し得ることになると思ふ。又日本考古學に於て今だ解決せざる諸問題に對しても洞窟と云ふ特種の遺跡は何等かの解決の鍵を與へるかも知れない、洞窟、住居阯の研究も興味あると同時に重要なるものであると思ふ。（昭八、七、二〇）

探集に依つたものである。（第一圖參照）

(1) 棚村田頭（繩紋土器、石鏃、石錐、石匙、石槍、磨石斧打石斧）

田頭は荷取洞窟より山越で約一〇町程の所である、其散布地は非常に廣く石鏃が非常に多く發見される、品中に石匙の如き石片は夥しく存在する、此處の石鏃は大部分が有柄である、洞窟の無柄なるに比し興味ある對照をなしてゐる。又其石質としても殆ど同種石質のものを見ない、土器は繩紋土器にして厚手のもの多し、中には極めて薄い、厚さ三粍乃至五粍の繩紋を附せる精巧なるもの小量ながら出てゐる。

(2) 棚村志垣（繩紋土器、石鏃、石匙、打石斧、磨石斧）

Fig. 6.　發見土器片

遺物は裾花川に楠川の注ぐ三角地の高臺に廣く散在してゐる、厚手の繩紋土器多し田頭遺跡に比して石鏃等石器類少く土器が多く散布してゐる、土器に薄きものあれど極めて少ない紋様は田頭も同樣總て沈紋である、志垣の厚手の繩紋土器は鬼無里出土のものと殆ど同一なものが多い。

(3) 棚村追通（繩紋土器、磨石斧、黑曜石片）

(4) 棚村栃原八幡神社東麓（祝部土器）

(5) 同　同　大昌寺附近（石斧、石小刀）

(6) 戸隠村上野（繩紋土器、祝部土器、石鏃）

(7) 同　南原（繩紋土器、彌生式土器、石鏃）

(8) 鬼無里村保科旅館附近（繩紋土器、磨石斧打石斧、石鏃）

(9) 同　四角面（繩紋土器）

(10) 同　松原（石鏃）

(11) 同　根上内裏屋敷（繩紋土器、彌生土器、石鏃、磨石斧、玉類）

七、結　語

厚き灰層の存在、石屑、土器、石鏃、其他鳥獸骨等の存在は明らかに石器時代に此洞窟に於て、生活の營なまれし事を示して居る、日本海には十里餘距てゝ居るに過ぎないが其間に戸隠妙高等の群山が聳え、西南方も大小の山々で圍繞せられて居り

の如く果實に穴を穿づ事が行はれたのは明らかであるが單に食用に用ひたのみであるが何にか他に利用せるものか解らない。

E 鳥獸骨 余り大なるものは發見されてゐない、灰層中に

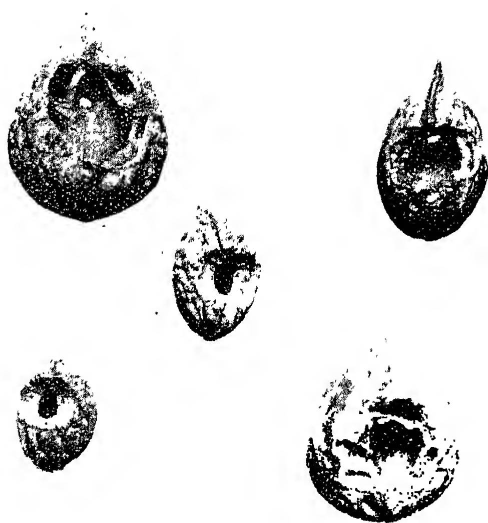


Fig. 5. 果 實

多く見出される、食物殘骸なりと考へられる。

F 土器 破片五〇余内有紋土器片十一、其中一〇片は砂土中より接近して出た、紋様より見て同一土器の破片なりと思ふ。

他の有紋土器破片は灰層中諸所より發見された、總て土器は薄手のもので厚さ七粍を超へるものは無い、有紋土器、最大片(第六圖參照)は縱八糎、橫五・五糎厚さ、五粍口徑約三〇糎なり、紋樣は口緣外側に襞の如き凸凹が周らされてゐる、內面は無紋であるが煤が厚く附着してゐる、外面には直線平行浮紋が施されてゐる、外面の左上部に四粍位の穴が開けられてゐる、八幡一郎氏著「南佐久郡の考古學的調査」中前史時代土器、第一群第一類中に平行直線浮紋が報ぜられてゐるけれど紋樣を附する手法に於ても異なり全般的の紋樣に於ても類似してゐない、又鳥居龍藏博士の「諏訪史」に於ても此と類似品は見ない、此と類似のものは北海道釧路のもので口緣浮紋狀態殆ど同樣である、他の土器で外面に繩紋を施されてゐるものは全くない事より考へて、單に前の浮紋土器に口緣に繩紋式紋樣の施されて居る事を以て此の洞窟が繩紋系統に屬すると見るのは危險と云はなければならない。

六、附近遺跡

荷取洞窟附近には多數の洞窟が散在して居る(地圖參照)此洞窟の直ぐ附近の座禪岩洞窟より土師器の破片を得た、又鬼女紅葉で名高い洞窟附近にある、猿岩洞窟より石斧石鏃、土器を出したと聞いた、洞窟以外の遺跡地は可なり發見された、今だ知られて居ないと思はれる地名と共出土物を揭げる、此等は地上

比較數を示す。

其他紅色岩、泥灰岩、流紋岩、松脂岩の小破片、石鏃の原料と思はれる長さ六糎、幅三・五糎、厚さ二糎の chalcedony impure が發見されて居る、又火中せる石屑も間々發見される、洞窟の可なり奥深い所に多量の石屑の存在は住居人が可なりの奥で石鏃石槍等の工作を想像せしめる。

Fig. 4.　出土せる石鏃

D　果實

胡桃、桃、杏の實等が出てゐる、第一層の右端殆ど地表近く多く發見された第三層からも胡桃が出た、又奥壁の間隙にあつたものもある。胡桃は約三〇個、桃、杏の實は約二〇個發見されて居る、胡桃は殼厚く頑丈である、現在此附近に自生せるものと何等變つてゐない樣である、胡桃の殼の接合部分の高くなつてゐる箇所より同き孔を穿つてある、(第五圖參照) 桃杏も同樣であるが胡桃は全部に兩方より孔を穿つてゐる、桃杏の實は一方のものと兩方のものとある、此と類似の胡桃は青森縣下是川泥炭層石器時代遺物(史前學雜誌第二卷第四號參照) と眞福寺泥炭層中遺跡より發見されてゐる、胡桃の殼に孔を穿つたのは中の實を取る爲めと考へられるが桃杏の實に兩邊に孔を穿つたのは何の爲めか解らない。

是川泥炭層の胡桃は其地方で鬼胡桃と稱せられてゐるものであるが柵村のに比して極めて殼は薄い、此泥炭層に於ては打ち割られたものが厚い層をなし、兩側に孔を穿たれしものは小量である、此二種の胡桃を比較して見ると打ち割られた殼には可なり裂が入つて居る、然るに孔を穿たれたるものには少しの裂も見えず打擊を受けた跡も見ない、之は洞窟の胡桃に就ても云ひ得るのである。

洞窟の胡桃の如き殼が厚き堅いものに裂を入らせずに穴を穿つたことは不可能である。此は打擊によらず他の方法に依りしものと考へられる、石小刀の如きもので堅き殼に孔を穿つことも困難である、其穿かれた面には搔傷か或は萎びた後の條痕の如きものがあるが、此は今だ熟しきらぬ柔かい時に石小刀の類で削つた事を意味してゐるものではなからうか、石器時代に斯

に類するもの多い、三角形の兩邊に幾分圓味を帶て其底邊が內方に屈曲せるもの多く外方に向へるものあれど少し、又二等邊三角形にして底邊の眞直のものあり、石鏃の大さは最長四糎、最短一・五糎、なり二・五糎前後普通なり、石質により分類すれば黑曜石一〇、粘板岩一〇、蛋白石四、硅石一八である。此の

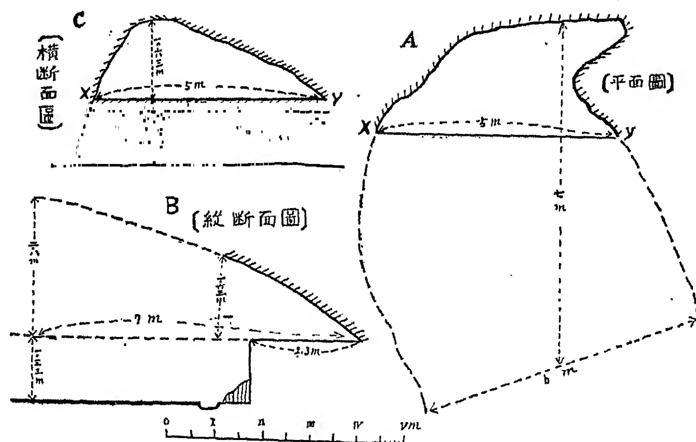


Fig. 2. 追通洞窟測定圖

遺跡に於て柳葉型を除き他は總て無柄なり其製作は非常に精巧なるは注意すべきである。（第四圖參照）

B 石槍 完形品一個長さ十・五糎幅二・五糎、粘板岩製にして精巧なり、破片一個長さ五糎幅二糎黑褐色硅石製、

C 石屑 石屑は第二層より第四層に至る總ての層中に含まれて居る、自分は石屑と石鏃とを均等に採集して見た、其等の

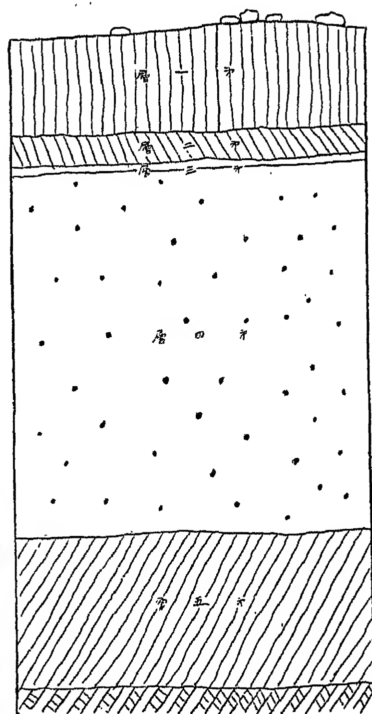


Fig. 3. 層位圖

石器名 / 石質	石屑數	石鏃數
黑曜石	六九	四
粘板岩	三七	四
蛋白石	二四	三
硅石	四七	三

三、層位及遺物包含狀態

縣道開鑿の際洞窟底面を厚さ一・三三米平均に削り取つた爲其層位狀態は非常によく現はれてゐる（第二圖參照）層位圖を揭げれば、上層より第一層、第二層と數へ第六層にて終る、第一層より順を追ふて說明する。第一層は落磐による石塊の下約、十五糎にして淡褐色の土壤乾燥して輕く粘土に近いものであり右端に於て胡桃・桃の實等殆んど地表に露出して出た。

第二層は約五糎油蠟質を帶び粘氣がある、遺物は、石槍、石鏃、石屑、土器が出る、第三層は一種の褐鐵鑛の薄板で出來てゐる、此層の上下は落磐による石塊、石鏃、石屑、土器片等が多く褐鐵鑛板の兩面に包含膠着してゐる、第四層は灰まぢりの灰層で中軸附近の上層部に灰は多く含まれてゐる、灰層の厚さ一定せず最も厚い部分は六六糎を算する落磐による石塊は少い、石鏃、石屑、土器片、骨片、胡桃等出土した、以上の第二、第三第四層の遺物は何れも主軸に近い部分に多い。

第五層は砂土層にして石塊を混在する所あり、石屑、土器片等も少量ながら見る、第四層の灰層と可なり複雜に入込んでゐる所あり、第五層下の軟砂岩の基盤であるが第五層との境は余り判然としてゐない。

Fig. 1.　遺　跡　附　近　地　圖

四、發見遺物

A　石鏃　合計四二個發見された、第三層主軸近い部分より多く發見された、其形狀は柳葉型、雁又狀のもの少なく三角形

長野縣上水内郡柵村追通石器時代洞窟住居阯

金　子　富　雄

石器時代住居跡にして報ぜられて居るものは少なく越中氷見郡大境洞窟位のもので東北地方には發見せられてはゐるが報告せられてゐるものは殆んどない。

昭和八年四月自分は長野縣に於て此種遺跡を發見することを得た、既に信濃郷土會の手で發掘され月刊誌信濃第二卷第二號に報告せられてゐる。

此附近の石器時代遺跡の紹介を兼ね此洞窟に就て述べて見る、該報告に依りし所多く重複する箇所もあるが御寛恕を希ふ次第です。

一、位　置

長野縣上水内野柵村字追通荷取（第一圖參照）に存し、標高六百五十米の地點裾花峽谷の北岸、裾花川に迫る斷崖絶壁の中腹にあり、河床から約二五米の高處にある、河床附近は凝灰岩、洞窟附近は安山岩様の岩石である。

二、洞窟の形狀と内部の狀態

縣道開鑿の際洞窟の大部分は破壞され現在は僅かに其約三分の一を殘存してゐる、洞窟の形狀を復原すれば次の如し主軸は東南より西北に向ひ、洞口を東南端に置く、高さ二・八米奥まるに從ひ下降してゐる、間口約六米、奥行約七米底床面は略水平であつたらしい。（第二圖參照）

洞窟附近は安山岩様の岩石である板狀節理に似て不規則なものであり、現在河床より約二五米の高所に存し洞窟は水蝕作用により形成されたとは認め難い、恐らく自然風化により形成されたものであらう。

現在洞窟は入口に於て高一・六三米、間口約五米、奥行二・三米天井は奥まるに從ひ下降し底床面は略水平であるが奥壁及向つて右側壁附近は落磐による石塊の爲に稍上昇してゐる、奥壁より左側壁にかけて間隙多く石塊が故意に挿入せられし如く思はれるものあり、乾燥して居り、現在水の滲透等は少しも認められない。

行して、本文化の一特徵を示し、同時に南暖的な傾向をも物語

Fig. 7.　出土土器底部

つて居る。土器に於ては、茲に伊波、荻堂を總括した伊波式土器として、幾何學的紋様を主體とし、且つ其要素こそ、爪形紋及びこれが類形、平行集線紋等單純であるものゝ、口胴に亘つて重複配合を見、器形變化に乏しく、僅かに口片に形態的特徵を見、土質は赤褐色を帶ぶるものが、比較的多い等の特色を備へた、一群樣式を出土して居る。而してこれ等は、繩紋系統の一南端文化として、出水、市來等の九州に於ける繩紋式文化に連繼し、關東、東北等繩紋式中樞文化とは、著しい地方色を示して居ることも、狹長なる日本群島の地形還境上から生じ得た一歸締とも考へらるゝ。特に南島の如き風波多く交通不便の群島に於て、比較的他の刺戟少なき所に於て、各自の特色を發揮した文化、即ち地方色濃厚な文化を見るのも、當然と云へば當然である。

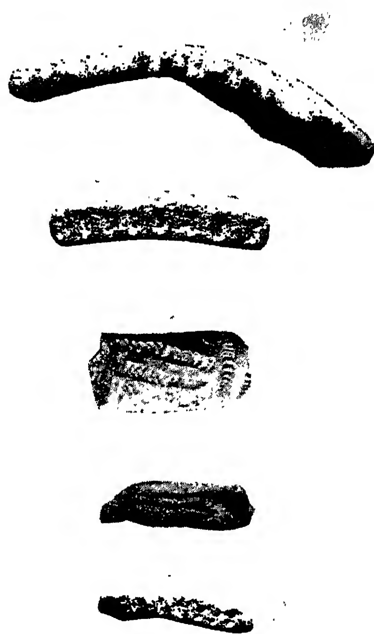


Fig. 8.　出土土器口片上緣

それにしても伊波、荻堂、面縄第二と三者の文化内容の一致は、夫々の間に密接な文化交渉を物語り、反つて交通不便の現象を裏切るが如くにさへ考へらるゝ程である。何れにせよ、奄美群島に於ける本式土器の出土は、沖繩群島と九州との中繼をなす上に於ても、意義あることであり、更に將來、附近に於ける搜索發見に一根底を與へ得たことを悅ぶものである。

のとしても、甚しい地方色濃厚さがあるものと見る可きものと考へる。而してこれ等を綜合して大觀すると、繩紋式土器、特に關東地方に於ける勝坂式や大森式などとは、著しい相違を示し、寧ろ朝鮮石器時代の或一群に近似する様にも見られもする。然しながら、更に西南九州を見ると、市來貝塚、出水貝塚等の土器に於ては、本土器により近似相を呈するものがある。今これ等に對する詳細なる比較研究は、後日に讓るも決して無關係とは考へられない。この兩貝塚等の中繼によつて、本土器が繩紋系統に於ける、西南端に於ける一地方色と見る可きである。

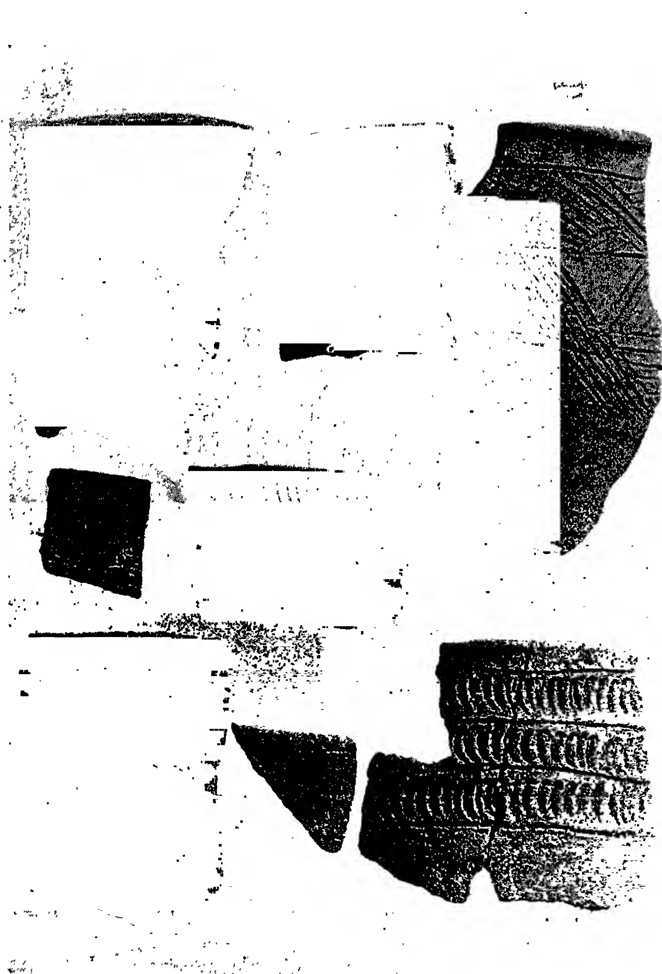


Fig. 6.　出土土器片（其四）

此意味に於て、本貝塚、伊波、荻堂の三者全く一致した一群を、茲に伊波式土器なる稱呼を提唱するものである。即ち繩紋式土器を中心として見れば、其典形は文化中樞である關東と東北によつて代表せられ、畿內中國等は西南文化延長地方であり、九州は南方文化外周地方と見らるゝ。この南方文化外周地方に於ける一支文化として、更に南方に於ける南端文化として、此伊波式土器の文化が存在するものと見て行けば、典形文化の土器と甚しい相違を見ても、あへて違とするには當るまい。

5. 結　論

本貝塚に於ける遺物を綜合すれば、石器に於ては、出土量僅少で未だ特徵を摑み得ないが、貝器の發達は、伊波、荻堂と平

片中徑から見ると、底徑が比較的大きいと云ふ位で、他に特徴を見出し得ない（第七圖）。

C. 製　作。

土器片全般を見ると、其殆んどが薄手である。土質に於ても特筆するものなく、色は赤褐色乃至は黑褐色等が多い。これは薄手の關係上、よく火がまはつた結果であるまいか。それにしては、もろいものが多い。これは土質の撰擇配合に起因する樣にも思はれる、成形方法に就ては、明確に知り得る土器片が見當らない。

Fig. 5.　出土土器片（其三）

D. 土器綜合。

本土器片に就て見ると、土器の高さは全く知り得ないが、施紋部が胴部にまで亘つたものゝ多い點は、紋樣要素が爪形や平行線の樣な單純なものであつても、決して退化的直化に伴ふ單純さとのみは見られない。退化的である場合には、獨り紋樣要素の單純化、直化に伴ふて施紋部の縮少をも併せ見得ることゝ考へらるゝ。これが本土器には未だ見られない。且つ本土器の二三に於ては、口脣上面にも點線等を以て、センチな施紋を行ふが如き、技巧さもある。（第八圖）。これも退化傾向として見る可きものはない。寧ろこの土器の一特色として見る可きであり、伊波荻堂にも多數例を見得る。

此の如き有り様であるから、本土器は縄紋式系統に屬するも

の配合に斜行し多く二條の平行鋸歯狀紋により外甚が形造られ、其中に、爪形紋、平行集線紋が充塡せらるゝ。只これ等配合法により、或は爪形の變化により、全般的に變化も見らるゝのであるが、總括すれば單純であり、これ等の手法は全く、伊波、狄堂と共軌を一つにして居る。

B. 形　態

形態は前述の如く、破片のみであり全形を充分に知ることは出來ないが、出土破片に於ては、甚だ變化に乏しい。又甚しい大小の開きもなく、所謂中形の大さが多い。全形は多く鉢形であり、頸に緊迫部を有する所謂壺形のものすら見られない。部分的に觀察するに、口片に於ては、僅に波狀をなして、曲走するもの（第五圖）があつて、形の變化を見せても居るが、中には變化なく平なものも亦尠なくない（第六圖）口脣は一般に厚いが、これは土器として殆んどがそれであり、獨り本土器に限つた現象ではない。然し唯一例であり、小破片で全貌を知り得ないが、第九圖最上のものは、甚だ厚く太く、此の如き例は、伊波狄堂にも見られない、一特例がある。面白いことは、本土器に於ても口縁に於て、把手樣の突起を有するものが、比較的多いことで（第三圖右上、第五圖上列二個下列左端）凸起に小さなきざみを入れて居る所は、これ亦伊波、狄堂と全く一致して居る。胴部に於ては、全く變化を認められない。底に於ても同樣、唯殆んどが平底であり、土器口

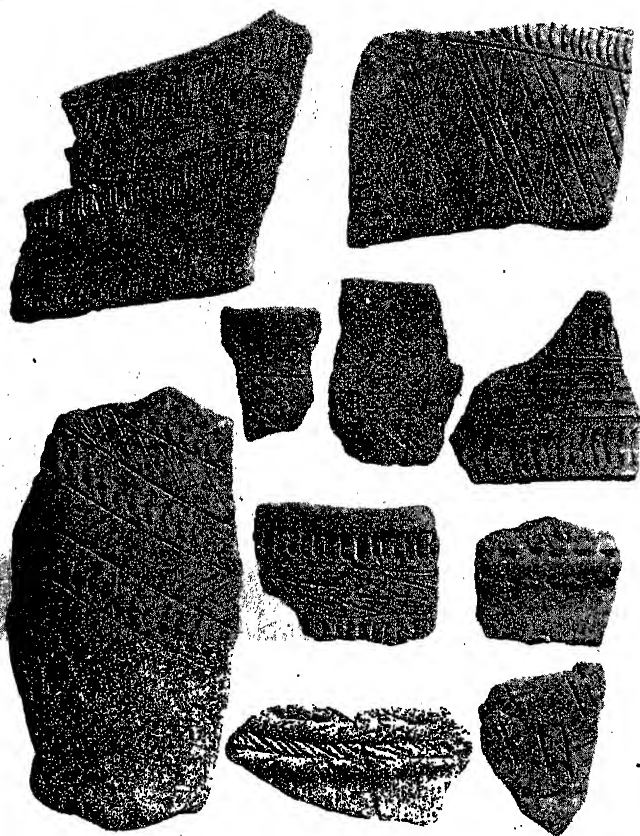


Fig. 4.　出土土器片（其二）

づけ、魔除けとして、家々の入口正面の軒、或は石垣等に掛け、又は家の四隅みにつるして置く外、豚小屋等にも掛けて多産のマジックとして用ひられて居る。それ故、こうした事實から考へると、獨り實用的な利器の外、或は精神的の一部を加味したものかも知れない。何れにせよ、かゝる貝器は、從來獨り我國と云はず、世界に於て全く出土して居らない、特異な出土例であると思ふ故、今後類例の増加に伴ふて、本器の性質も明になつて行くことを、期待するものである。

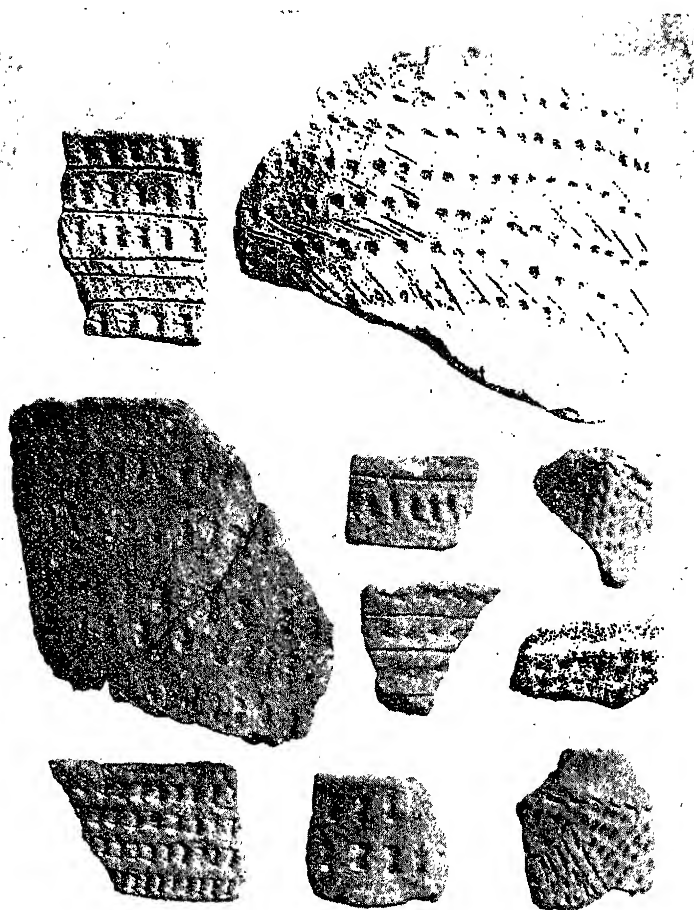


Fig. 3. 出土土器片（其一）

（3） 松村瞭氏、琉球荻堂貝塚。東大、人類學教室研究報告、第三編 大正九年、第三圖版、參照。以下、松村氏、荻堂と略稱。

4. 土器（第三―第八圖）

土器はこれを概言すれば、伊波、荻堂と全く同一形式である。只本貝塚に於ても、其多くが小形破片であり、全形を復原し得る程の大形土器の出土を見なかつたことは遺憾である。又これが紋様、形態、製作に就て其一通りを解說する。

A. 紋様

紋様の主體は、幾何學的紋様であり、全く曲線紋様は見られない。其施紋法も彫紋であり沈紋が主である。浮紋は皆無ではないが、其殆んどが紐線の如き單純な部分に見るのみである。紋様要素として主體をなすものは、所謂爪形紋と稱せらるゝ縱列弧形の帶狀紋と、銳利な尖端で彫つた、平行集線紋とであり、これ等

A. 貝　輪

貝輪は一般内地出土のものと大差がない。本貝塚出土は第二圖に掲出した未成二個と、破片二個とであり、共に全貌は知るを得ないが、特筆すべき點もない。これ亦獨り本貝塚に止まらず、伊波（大山、圖版第十九、第二十のMV15等）荻堂（第二圖版7—9）共に普遍化して居る。

Fig. 2.　出　土　貝　器

B. 貝　匙

貝匙の出土も多い、其形態の一般は第二圖で知ることを得よう。細分すれば、柄を有するもの、即ち第二圖の左端の如きものと、然らざるものとに區分し得、前者の一例は荻堂（第三圖版5）にもあり、後者はより多く伊波、荻堂共に數例ある。これ等は主として巨大なる夜光貝（Turbo marmoratus）の美しい殼を以て製したもので、今日尚縁邊頗る美麗であり、所々に摩研した部分を存して居る。

C. 異形貝器〔圖版第六〕

本貝器は大きな「すいじがい」(Lambis (Hapago) chioga) を利用し其背狀突起の尖端を鋭利に摩研附刄して居る。又其胴部には直徑二・五糎程の穴が穿たれ、本器以外加工不明瞭な他の一例に於ても、全く同樣な穿孔が見らるゝ。即ち獲得當初に肉を得る爲と思はれるが、或は尚此外の目的もあるか無いか、注目に價する。要するに本器はこれを掌中に握つて見ると、管狀突起の摩研刄が、都合よく掌外に突出し、これを利用して打突の樣にも供し得る樣にも思はるゝが、それのみを以て、單に利器とのみ過早に決定し得ない。更に面白き事實は、今日南島一帶に亘つて、この「すいじがい」を「マブール」（守る）と名

既報の如く、本貝塚は既に地形の關係上、大約其舊形を失はれたものと判斷せられ、且つ其主要部分は最早や壊滅し去つたものと認めらるゝ關係上、これが處女發掘であるに拘はらず、

Fig. 1.　面繩第二貝塚出土石斧

人工遺物の中心を藏する部分とは考へられない、卽ち貝塚の外周に近い部分の發掘であつたし、且つは發掘地積も僅少であつたから、其出土人工遺物も必然的に、其種にしても、其量に於ても僅少たるを免れない。然しながら一通り其特徴を摑み得る土器破片と、二個の石斧、十餘個の貝器とを採集し得たことはこの小發掘に對し欣幸すべき結果と云はねばならない。今これ等の個々に就て、夫々要示する。

2. 石　斧（第一圖）

石器として其主要なるものは、完形に近い大約十糎程の二個にある。兩者共に磨製ではあるが共に缺損部、打缺部を有しては居るが、略全形は窺い得る。これ等は共に兩刄で特徴顯著なものがない。强いて云へば、乙（第一圖左）が、稍々刄部廣く所謂撥形に近い所にあるが、直軸であり大山、伊波に述べた曲軸（同書S.B 2圖版第十四）の樣なものは無いが、伊波には單なる撥形に近い（S.B —、S.B 5圖版第十四）を存し、荻堂よりも撥形とは稱し得ざるも、下方卽ち刄部の廣さ石斧を見て居る所は[3]、よし一特徵とまで稱し得ざるにせよ、注目に價する所と考へる。

3. 貝　器（第二圖）

貝器としては、貝輪、貝匙及び貝皿とでも稱す可きものと、後述して居る異形貝器とである。これ等は本貝塚位置の我國としては南暖的であり、自然大形貝類の多産する關係上、原料に於て惠まれた結果は、かく器具として利用を見たのであり、他の伊波、荻堂等とも其軌を一つにし、琉球に於ける一特色とも云ふことが出來る。

奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物（第一回）

＝面縄第二貝塚＝伊波式土器の研究＝

大山柏
小原一夫

一、緒言

本研究は昨年本誌四〇三・四號に報告した、表記貝塚研究の姉妹編であつて、同報告に總てを略した、出土遺物に對し、夫々の貝塚に就て、記載し且つ研究を開陳したいと考へる。元々、小原一個としては、其人工遺物に就て既に一通りの研究し一部は既に發表もして居るのであるが、前報告に於て述べた如く、大山研究所に於て詳細な研究を希望せられた結果、今回の如く、大山と共同して研究することにしたのであり、從つて表題の如く、責任上、兩者の共同としたものである。

大山一個として、小原氏に對し、特に詳報を要求した所以のものは、以下開陳して居る如く、面縄第二貝塚と他の面縄第一貝塚及び本河貝塚とは、其出土土器の性質全く相異り、前者は嘗て大山の發掘報告した、琉球伊波貝塚(1)のそれと、全く系統性質の一致するものがあるに對し、後の二貝塚のそれは、近く同一島内に存在するに拘はらず、前者に比し著しき相違を見るに止まらず、嘗てこの後者に屬する面縄第一貝塚を發掘調査せられた、山崎五十麿氏(2)とは、其所見を異にするものがある等、こゝに研究を要す可き多くが存する外、土器以外の人工遺物に就ても、特異形態を有する出土を見る等の結果、かく小原氏にこれが詳報を要求した次第である。

（1） 大山柏、琉球伊波貝塚發掘報告（大正十一年）以下、大山、伊波と略稱。

（2） 山崎五十麿氏、鹿兒島縣大島郡徳之島面縄貝塚に就て。考雜、二〇の十（昭和五年）

二、面縄第二貝塚の遺物

1、一般

を持つてゐる。

（12）葬法ばかりでは無く、食人の風習が日本石器時代人の間に行はれてゐたかどうかも考へて見ねばならぬ。然し、食人が同族間に行はれるのは、飢饉といふ特種の場合に起るのであつて、常に相食んだとは考へられぬ。それ故、葬法に留意する方が妥當のやうに思はれる。

（13）歐洲新石器時代末期には、ドルメン、メンヒル等の巨石構築が行はれてゐる。日本に於て、巨大な石を動かして土木工事を起すやうになつたのは原史時代に入つた後のことである。それ故、構築術工については、日本の新石器時代は、彼に一段と遲れてゐるものと思はれる。

（14）石器時代人が、或る場合、死者を取扱うことを忌むといふことは有り得る。住居に死者を殘して、其の住居を捨てゝしまうことも考へ得る（下總國姥山貝塚の住居址の如く）。しかし、從來の例を見ると、かうした事も普遍的なものとは考へられない。卽ち、今のところ、死者と住居址との關係を離して考へねばなるまい。

（15）朝鮮、臺灣に於ける考古學的調査が、日本內地ほどに行きとゞいてゐないことにも依らうが、同方面に於て、未だに石器時代人骨の發見を見ぬことは、特に注意を要する。

栃の實の食料

史前學者ではないが、K氏の御話によれば、アメリカ、インデアンの一部は、今日でも栃や栗の實を搗いて團子として、これを食料に供するのを、目視したとのことである。最近同氏は計らずも青森縣に旅行せられ、是川泥炭層を見て歸られ、筆者に、あの食料殘骸はインデアンと全く同一ですねと語られた。（大　山）

（4） 清野謙次博士「日本原人の研究」（大正一四年）第一三頁參照。

（5） 同氏同書卷末「人骨發見地名表」參照。

（6） 此の表に掲げた數字は、地名表第五版凡例中の遺跡發見箇所數表中に示されてゐる貝塚の數と必しも一致してゐない。それは同書追補第一と、清野博士の發見されたものを（同博士の「日本原人の研究」及び「日本石器時代人研究」に依つて）增補した結果を表示して置いたからである。地名表に現れた遺跡、遺物發見の多少を數的に取扱ふ際には、それ〴〵の地方に於ける考古學者、好事家の多寡を考慮の裡に容れて置かねばならぬことは筆者も承知してゐるが、今は素直に地名表の示す數字に賴つた。

（7） 本州、四國、九州を以て、此の小篇中、私は全國と呼んでゐる。それ故、北海道、千島、樺太、臺灣、朝鮮等は、この中に含まれてゐない。北海道を除外したことは、同地の石器時代なるものが私には、本州、四國、九州などのそれに比して著しく實年代的に新しいものであり、今日のところ、特種のものと見た方がよからうと思はれるからである。

（8） 小金井良精博士「人類學研究」所載「日本石器時代の埋葬狀態」參照。

（9） 住居址や竪穴が、多數相集つて一群を爲して發見されるところを見ると、日本石器時代の或る種族は、集團生活を營んでゐたことが想像される。たとへ、それが人數に於て僅かな集團であつても、それは一つの社會生活ではある。しかるに、社會生活を思はせるに充分な形を持つた石器時代の墓地とも呼び得る遺跡は、河内國國府の遺跡を除けば、他は幾つかの貝塚（多數の人骨を發見した）に限られてゐて、私の言ふ山間地方には、未ださうした遺跡の發見が報じられてゐない。この點は特に今後注意すべきことである。

（10） 日本石器時代に於ける海岸線に近い平地文化と、山間文化との比較研究は、今後の最も興味ある問題の一つであらう。平地と山地と、石器時代に於て、いづれが早く開けたかといふ事も、早晩、明確に闡明されるものと思ふが、今日のところ、平地の方が早く開けた、換言すれば平地文化が時間的に先立つものと解するのが穩當のやうに私には思はれる。

（11） 此の比較は漠然としてゐて、其の基準を何處に置くかに就いて、或は誤解を招くことがあるかもしれぬが、筆者は、他日、世界各地方に現在生存してゐる蠻民の葬法に就いて、彼等の生業別、文化階梯別より見て、文獻上より爲した研究を發表する用意

多い。今日迄に發見されてをらぬからと言つて、今後、石器時代人骨が海岸線から遠くへだたつた地方から發見されぬとは豫斷し難い。或は、その發見の結果、山地に於ける石器時代人の葬法が、河内國國府に於けるが如く、貝塚に見る幾種かの葬法と殆ど異るところの無いものであるかもしれぬ。それ故、日本石器時代に於ける山地住民と海岸に近い平地住民との間に於ける葬法の相異なるものも全く日本先史時代研究の現狀からしての想像に止るものに過ぎない。考古學というものが遺跡、遺物の發見報告が其の全部では無く、事實事物に則して古の文化を考へるものであるならば、かうした疑問を持ち、かうした想像を試みることも許されることゝ思う。決して斷定を下さうとするのでは無く、謹んで今後の解決を期待するものである。(15)

此の小篇を草するに當つても、私は種々のヒントと御指示とを大山柏先生に仰ぎ得たことを、厚き感謝の念をもつて此處に記して置く。（昭八、七、二）

〔註〕

（1） 東京帝國大學編纂「日本石器時代遺物發見地名表」第五版（昭和三年）並びに同書「追補第一」（昭和五年）を含めて、私の便宜上、單に「地名表」と略稱する。それ故、此の小篇に於て地名表とある場合は追補第一をも含めたものと諒解されたい。

（2） 試みにヨーロッパ大陸新石器時代の人骨發見の例を見るに、遺物、遺跡發見の多數なるに比して、必しも多いとは言はれぬまでも、相當の數に達してゐる。地質、風土の相異からして其の保存條件も異るのであらうが、その人骨の發見は、日本に於けるが如く、殆ど貝塚にのみ限られてはをらず、各種の遺跡から發見されてゐて既にその埋葬法も明かにされてゐる。
George Grant Mac Curdy: Human Origin; London & New York, 1924. Vol. II. p. 103—129 參照。

（3） 埋葬の季節も、人骨腐朽の遲速に大きな關係がある。

生活を營んでゐた者と、山間地方に住んで別な生業を持つてゐた者との間に、彼等の葬法に於て何等かの相異があつたのではあるまいかと、一應、考慮の余地を殘して置くことは、論理的に言つても、何等差支へないものと思へる。

日本石器時代人骨の發見が、今日までのところ、殆ど貝塚のみに限られてをり、山間地方から未だ發見されてをらぬという事實は、人骨の迅速なる腐朽消失という點ばかりから見ずに、海岸と山間との生業上の相異からして、其の間に文化の相異、ひいては葬法の相異もあつたのではあるまいかという疑問を念頭に置いて考へてみることも決して無駄なことでは無からう。(12)

三

日本石器時代には、山國に住んだ人々が無かつたというならば話は簡單である。が、事實は之に反して、山國からも隨分多くの遺物が發見される。しかも、人骨は發見されない。日本原史時代の遺構たる古墳、或は横穴からは山國、平地の別なく、我々は多くの原史時代人骨を得てゐる。(13) これより以前の石器時代人骨に關しては、その發見は殆ど貝塚からのみに限られた觀がある。卽ち、石器時代の貝塚と、原史時代古墳との間には、人骨の上から見てブランクが存在してゐる。一體、石器時代に山國に住んだ人々は、彼等の骨を何處に殘してゐるのであらうか。彼等は、彼等の死體をどう處分したのであらうか。(14) 彼等の骨は、總べて朽ち果てゝ仕舞つて求むべくも無いのであらうか。かうした事實を今更の如く不思議に思う私が間違つてゐるのかもしれぬ。

日本の先史時代研究は此の半世紀間に、可成の發達を見たとは言へ、今後の研究に待たねばならぬ問題は隨分

考へられない。時間的空間的差異は有つたにもせよ、日本の石器時代が原史時代に入る以前には、貝塚を離れた石器時代が存在したものと思はれる。信濃、甲斐、飛彈等の山國からも石器時代遺物は發見される。それ故、少くとも、貝塚を離れた石器時代文化は確實に存在してゐたのであるから、其の文化を持つてゐた石器時代人も生存してゐたわけである。一體、彼等は、彼等の屍體を如何に處理したのであらうか。まさか、甲斐の山奥から武藏の貝塚まで、死體を捨てに來たと想像する人も無からう。(9)

生業上から見て、日本石器時代の貝塚を形成した人々は、既に幼稚な農耕を始めてゐたかどうか、今のところ明確に斷言し得ぬが、彼等が魚撈生活を營んでゐたことは明かである。又、貝塚から獸骨を發見するところから見ると彼等は狩獵も心得てゐたやうである。が、何と言つても彼等が其の日常の食物を得てゐたのは、主として魚撈に依つたものと考へられる。これに反して、時間的差異は有つたにもせよ、無かつたにもせよ、同じ日本石器時代の人間ではあるが、海から遠く離れた山間に住んでゐた人々は、魚撈に依つて生活は出來ぬ。必ずや、狩獵に依るか、農耕に依るかして生活の資を得てゐたであらう。卽ち、一概に石器時代人とは言つても、海線岸近くの平地に住んでゐた者と、其れから遠く離れた山間地方に住んでゐた者との間には、彼等の生業上に相異が有つたと考へられる。(10)

生業が異れば、必ず其の死體埋葬法を異にするとは言ひ得ない。然し、一應その點に注意を向けてみる必要があらう。世界各地に散存する現今の野蠻人の風習を見ると、甲乙、生業を異にしても葬法は同一のものもある。又、これとは反對に、生業は同じ魚撈を營みながら、葬法を異にする者も多い。又、生業を異にするにつれて、死體の處分法を異にする場合も決して少くない。(11)それ故、日本石器時代に於ても、海岸に近い平地に住んで魚撈

東北地方（羽後、羽前、岩代、磐城、）
關東地方（上總、上野、下野）
中部地方（駿河、美濃、飛彈、甲斐、信濃、越後、加賀、能登、越前）
關西地方（近江、山城、丹後、丹波、大和、伊賀、志摩、紀伊、和泉、攝津、但馬、播磨、淡路）
中國地方（四國を含む）（美作、周防、長門、出雲、石見、隱岐、因幡、伯耆、阿波、伊豫、土佐）
九州地方（筑前、豐前、豐後、大隅、壹岐、對馬、琉球）

以上列擧してみると、岩代、上野、下野、美濃、飛彈、信濃、近江、山城、丹波、大和、伊賀、美作、等海岸線を持たぬ諸國から石器時代人骨發見の報告が無いことは、私には著しく不思議に思はれる。此等の山國は、全體から見て、必しも石器時代遺物、遺跡の發見が少い國々ではない。信濃の如きは、其の發見に於て、全國に冠たるものがある。しかも、人骨の發見は報ぜられて居ない。かうした事實を、腐朽して消失して仕舞つたのだらう、といふ理由ばかりで、簡單に、解釋し得たものとして捨てゝ置いてよいものであらうか。私には、其處に今少しく考へてみる餘地があるやうに思はれる。

成る程、貝塚或は其の附近からは、石器時代の人骨を發見し、又、石器時代の墓地と覺しい遺跡も發見されてゐる。そして貝塚に於ける石器時代人の埋葬法も其の幾種類かを知ることが出來た。(8) 然し、これは主として貝塚に關する限りのことである。日本の貝塚は、日本の石器時代の性質上、必しも其の石器時代初期に於てのみ形成されたものではない。さうかと言つて、日本の石器時代は、時間的に見て、貝塚時代と始終を一致するものとは

筑後	2			2	4		61
豐前							23
豐後					1		32
肥前	2			2	3		45
肥後	8			8	18		72
日向	1			1	5		145
大隅					1		100
薩摩	3			3	4		33
壹岐							3
對馬							5
琉球					5		33
	72	6	8	86	617	30	10876

卽ち、琉球を含む全國合計(ア)一〇八七六ヶ處の石器時代遺跡及び遺物發見地の內、人骨を發見した遺跡は八六ヶ處であつて、その內の七二ヶ處が貝塚である。洞窟から石器時代の遺物が發見されたのは全國で三〇ヶ處あつて、人骨が其の中に殘存してゐたのは六ヶ處である。地名表では明確に爲し得ないが、貝塚、洞窟以外の遺跡から人骨を發見したのは全國で八ヶ處にしか過ぎない。

右の表でも明かな如く、今日迄（地名表追補第一の出版を見た昭和五年迄）のところ、未だに石器時代人骨の發見を報じられてゐない國々は、以下例擧の如きものである。

但馬							11
播磨							39
淡路						1	8
美作							5
備前	1		1	2	11		21
備中	6			6	14		97
備後	1			1	2		26
安藝	2			2	4		13
周防					1		23
長門							10
出雲					2		157
石見							12
隱岐							6
因幡							19
伯耆							73
阿波							45
讃岐			1	1			135
伊豫					2		48
土佐					1		5
筑前							100

甲斐							1445
信濃							199
越後					4		167
佐渡	1			1			145
越中	1	1		2		1	83
加賀			1	1			32
能登							39
越前							22
近江							44
山城							23
丹後							24
丹波							6
大和							147
伊賀							16
伊勢	1			1	1		53
志摩					3		24
紀伊					1		9
河內			1	1	1		13
和泉							14
攝津							49

羽　前							225
陸　中	4	1		5	13	19	612
陸　前	16	2		18	53	7	177
岩　代							779
磐　城					22		182
武　藏	4		1	5	152		1223
相　模	2	1		3	12	1	205
下　總	3			3	119		322
上　總					14	1	146
安　房		1	1	2	2		23
上　野					1		434
下　野					2		314
常　陸	3			3	92		377
駿　河							66
遠　江	2			2	10		77
伊　豆			1	1			103
三　河	6			6	16		135
尾　張	2			2	5		34
美　濃					2		380
飛　彈							153

記載に依つては、果して其れが粘土質の有機層中或は砂層中から發見されたものか否か、明瞭にはわからぬが、本州、四國、九州の貝塚、洞窟以外の遺跡から人骨を得た例は、八ヶ處程、擧げ得られる。此の中には、唯一の例ではあるが、恐らく百體以上の石器時代人骨が發見されたと思はれる河内國道明寺村國府の遺跡も含めてある。又、清野博士所藏の人骨標本番號第一五〇號は、備前國御津郡伊島村上伊福の彌生式土器包含層中より發見されたものと記されてゐる。(5) 貝塚からの發見ほど、多數では無いにしろ、日本石器時代人骨が貝塚、洞窟以外の遺跡から發見される例も皆無ではない。十指に滿たぬ程有る。しかし、今までに發見されてゐる日本石器時代人骨の全體からみると、事實上、その發見は殆ど貝塚に限られてゐる觀がある。貝塚のみが人骨の保存に好條件を具へてをり、他の場合に於ては、人骨は腐朽し盡して仕舞つたのだと考へてよからうか。此の事實を、人骨の腐朽消滅の一點ばかりで片付けてしまうには、尙少しく心殘りの有ることを自分は感じてゐる。

二

私は試みに、地名表に依つて日本石器時代人骨發見地名表を作製してみた。今、之に基いて、國別、遺跡種類別に依る石器時代人骨發見地の箇所數を表示してみると次の如き結果を得る。(6)

國別	人骨を出せる遺跡				石器時代遺跡		
	貝塚	洞窟	其他	合計	貝塚	洞窟	合計
陸奥	1		1	2	11		361
羽後					3		569

日本石器時代人に關する一疑問

山口隆一

一

「日本石器時代遺物發見地名表」第五版[1]を通覽して私の最も不思議に思うことは、遺物、遺跡の發見が、かくも多數なるに比して、其等の遺物、遺跡を殘した日本石器時代人の骨の發見が極めて少い點である。しかも、日本石器時代人骨の發見は、殆ど貝塚に限られてをり、洞窟、或は遺物包含層、同散布地等から發見された例は、貝塚からの發見に比べると、比較にならぬほど、少數である。[2]

これは人骨が、其の所在する地點の地質によつては、可成速かに腐朽するものであり、又、日本の濕潤な氣候が此の傾向を助長する爲めでもある。[3]それ故、迅速なる朽滅を免れて、石器時代人骨が今日までも殘存するには餘程の好條件の許に存在してゐるので無い限り、非常に難しいことである。然し、淸野謙次博士も言つてをられる如く、[4]人骨が粘土質の有機層中に埋沒せられて、水と空氣の流通の惡い場合は、人骨が貝塚の貝層中に在つて、石灰質の溶解が妨げられてゐる場合と同樣、案外ながく保存されるとのことである。大山柏先生の御經驗によれば人骨は砂層中に於て最も完全に保存されてゐると承はつた。さうして見れば、理論上、石器時代人骨は、貝塚及び其の附近からばかりではなく、粘土質の有機層中からも、砂層中からも、發見され得るわけである。地名表の

には本貝塚が石器時代の長い經過に於て、比較的後期に初まりその繩紋式土器文化の終末期に一部が屬するものなることを知らしめると共に、少なくとも此の廣畑貝塚の文化相は霞浦沿岸地方に於ける貝塚研究に重要なる考古學的意義を有するものと信ずる。

ピテカントルツプス頭蓋の實見者

ジアヴハのトリニールでオランダ軍醫ジユボアーによつて、一八九一年に發見せられたピテカントルツプス、エレクトスは、我國に於ても直立猿人として、普遍化して居り何んの新しみもない、只この頭蓋の本物は何處にあるか、と云へば發見者ジユボア個人の篋底深く藏せられ、博物館にも學校等にもない。又決して人には見せない。其發見後本國に携行してから、何人が見たのか、殆んど見た人がない。かの闊達精悍な自然人類學者、ハー・クラーチすら、見られなかつた。クラーチの如き、執拗にジユボアに迫り、一端は落城させ、終に明日見せると云ふ所まで、漕ぎつけたが、其夜ジユボアの逃亡的旅行によつて、見ることが出來ずスゴ／＼ドイツに歸らざるを得なかつた、とは物語りに聞く所である。かように他人に見せないので、一入ピテカントルツプスの噂は高かつた。又これが爲、否定的な議論も疑惑を深めるものも生じた。所が最近、我國動物學の權威I博士の雜談中、この話が出て、同博士がドイツの自然人類學者、ハンス、ワイナルトが見たそうだと、耳よりの話を承つた、早速一九三〇年の同氏著「史前の人類」を開いて見たが、勿論、ジユボアとの會見記などありよう筈もない。又實見したともないが、只ジユボアに同情的である點が、この談を聞いて讀んで見ると、うなづかれる、それでも頭蓋實見者が出來たと云ふニユースをこゝに御傳へして置く。

ついでにワイナルトの記事中に面白いことがあるから述べて置く。このピテカントルツプスの名は、ジユボアのトリニール發見以前に、ヘツケルの想定したものでこれにジユボアが豫定した稱呼のものを發見附名したものであると。（大山）

層の文化層には、彌生式土器の混在を見る事で明かに彌生式土器と繩紋式土器との或種の層位的關係のある關東の一新形式の貝塚たる事である。

此の如き形式の遺跡は、武藏南加瀨貝塚に於いて、繩紋式土器の包含する貝層の上層に彌生式の出土例を見、又本鄉區彌生町貝塚に於けるが如く其の層位的關係は明かでないが、繩紋式と彌生式土器を伴つて居た事實がある。此等は尙調査を要する點であるが、唯單に遺跡の重復の結果であると解するに止めず繩紋式文化の終末問題に關聯して今後の探究に待たなければならない。卽ち後期繩紋式土器として考へられて來た所謂龜ヶ岡式土器や眞福寺式或ひは安行式土器と稱せられて來たものが、余りにも發展して、而して忽然としてその文化が消滅せるが如き感を呈す。此等の事實は文化消滅と見るか、文化飛躍と見るべきか頗る興味深き問題である。又彌生式文化が完全に繩紋式文化から受けついだと見るべき遺蹟はない。繩紋人が彌生式文化の一部を受け入れたと解すべき確かな遺跡も判明してゐない今日に於ては、今後吾人に與へられた重大な研究題目である。

要之、廣畑貝塚は其の地勢及び發見遺物から推すと、少なくとも霞浦沿岸に於ける貝塚人としての重要なる聚落にして狩獵漁撈を生業とするに最も自然環境に惠まれたと云はねばならぬ。丘陵を廻る沿岸の干潟からは豐富なる魚貝類を供給し、時には鹿を追ひ、水禽を狩り、陸上交通は愚か、波浪穩かな水上の交通は原始的船舶によつて、寧ろ陸上のそれよりも選ばれたであらう。其の遺物の如きは精巧なる利器あり、又美術的作品たる器具あり、特に土偶の如きは秀でた藝術的な造詣を示すばかりでなく、原始社會に於る或種の原始宗教的な生活を反映する。

而も彌生式土器の存在を見た事は、本遺跡の存續時期の長きと、その文化的變化を思はしめるものがあり一面

上久保貝塚	薄手式土善	石斧、石棒、骨角器	鹹水產貝類
龍貝貝塚	薄手式土器	磨製石斧、凹石、土偶、骨製品、鹿角製曲玉	同
石神下貝塚	薄手式土器	土偶、人骨	同
大室貝塚	厚手式土器（阿玉臺式）薄手式土器モアリ	磨製石斧、打製石斧、骨製銛、人骨	同
所作貝塚	諸磯式土器	磨製石斧、凹石、石砧、貝器、貝輪	同
大門貝塚	厚手式(阿玉臺式)多、薄手式土器、中 諸磯式土器、少	鹿骨製銛	同
阿波南貝塚	薄手式土器	同	同
貝ケ窪貝塚(浮島)	諸磯式土器	打石斧、凹石、獸骨、魚骨	同
陸平貝塚	厚手式土器、薄手式少量	土偶、石劍、石斧、骨角器	同
福田貝塚	薄手式土器、厚手式若干	土偶、土版、石斧、石棒、石皿、獸魚骨、凹石	同
推塚貝塚	薄手式土器	土偶、石斧、凹石、石棒、石皿、砥石、獸魚骨	同

此等の諸貝塚の遺物の研究或は層位的關係が確認せらるるにあらざれば明言する事能はずと雖も、以上の貝塚は各々文化的、或は年代的に差異のある事を知ると共に霞浦沿岸は石器時代の存續期の長い事、或は文化的差異の甚だしい事を知る。而して諸貝塚の間に立ちて本貝塚が如何なる位置を保ちしかを遺物の內容より考察すれば、福田、椎塚、上久保、龍貝、石神下等の貝塚と同一若しくは、それに接近したものとすべきである。而して他に例を求むれば武藏大森貝塚、下總立木、掘之內貝塚等の一部が擧げられる。

此等の所謂薄手式土器の遺蹟は、關東貝塚に於ける後期繩紋式文化に屬し、その一部が關東石器時代一般の終末期に屬し、最も文化的に發達せる所產である。

然し廣畑貝塚の最も重要なる考古學的意義は、三つの文化層に區別した如く一種の文化階梯があり、而も最上

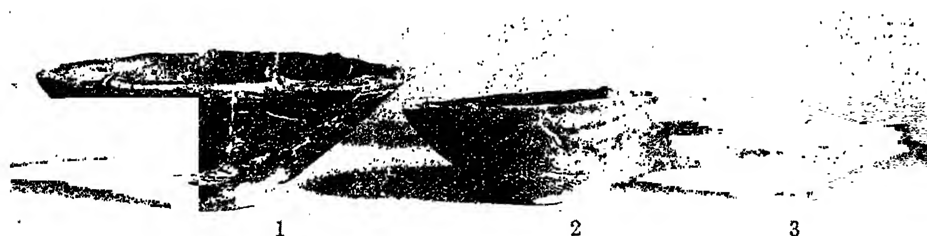


Fig. 22.　鉢　形　土　器

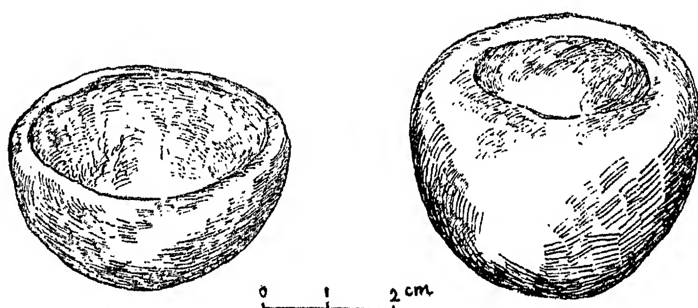


Fig. 23.　小　形　土　器

期縄紋式土器にして、其の一部が終末期に屬するものと考へる。

第四章　結　　言

以上私は廣畑貝塚に就て發掘の結果を記述したが、此の貝塚は低地にある遺跡にして而も貝層は比較的厚く、貝層下部は水準面に達し、貝塚を構成する貝殼及び獸魚骨の種類の多い事等は其の特徴とすべく、土器に於ては關東後期縄紋式土器にして、貝塚附近の他の貝塚發見品と同性質しものがあると共に、それに近似するもの等が存在する事は最も注意すべき點である。今この主要土器の性質を以て本貝塚の文化的位置を考察してみやう。遺跡附近の貝塚は前述の如く多數の分布が見られるが、主なる遺物を實地調査並に文献により判明せるものを列擧して、本貝塚との比較を先ず試みるならば、

より出土せる所謂遮光器紋樣の土器片や、第三文化層に於ける眞福寺式、安行式と稱せらる土器片は形態學的に

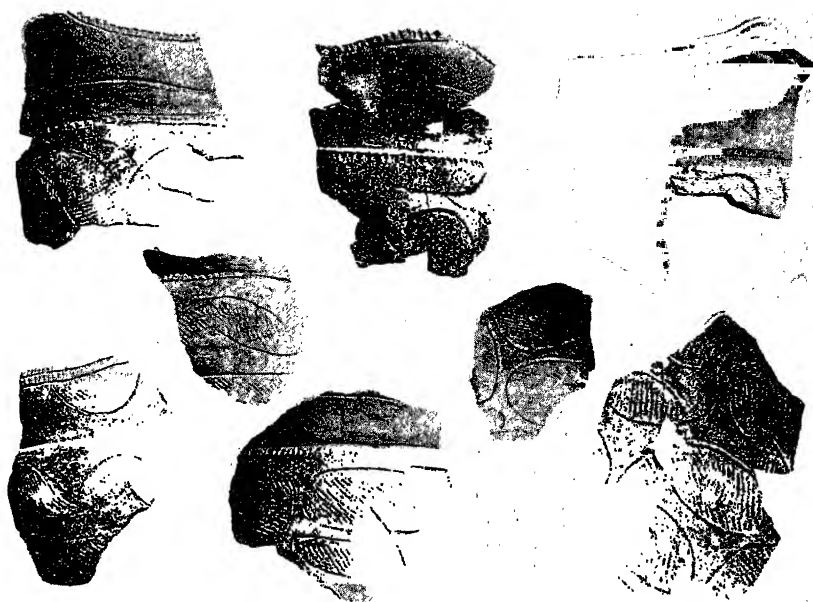


Fig. 20. 第三文化層 第一類土器

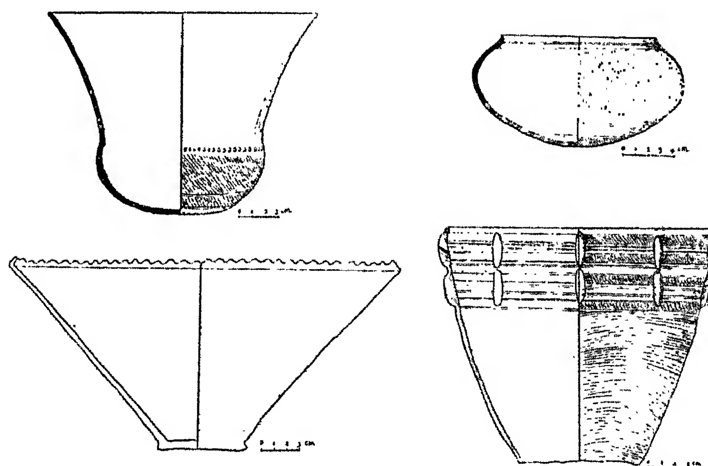


Fig. 21. 土　器

見て前者に次ぐ關東石器時代一般の終末期に屬するものと見倣すべきであると思ふ。卽ち本貝塚の土器は關東後

は後世除去せられた所であるので、貝塚上層に多く發見せられた譯である。淸野博士によれば本地點の彌生式土器は赤褐色乃至黑色の壺形、無花果形、高杯等の破片にして形狀は彌生式土器として割合に新しい普通見る所のもの丶由で、底部に本業の壓し跡のあるものが少ない事を記述せられてゐる。

繩紋式土器

本土器群の繩紋式器を觀察するに、形態分類に於ては前述の第二文化層の土器群と相類似するも、紋樣意匠上に變化が見られる。卽ち所謂眞福寺式土器或は安行式土器の紋樣に類似するものを相當に發見す。（第二十一圖參照）出土量は第二文化層に次で第二位を占む。而して、本土器群に於て第一類より類五類まで五種類に區分す。今此等の精細な記述は重復するから省略する。唯貝層上部は後世の攪亂を受けた事が明白で、土器片も小破片が多く從つて孤立するものが多い。僅かに發見せられた完形土器に就て述べれば、第二十二圖の3のものは僅か十糎の深さの所から發見せられた土器で、頗る異形なる小土器ある。卽ち口部の三角形は淺鉢を呈し、口緣部の一部に小孔を貫く。口部の最長幅二十糎、高さ五糎。

第二十二圖の2は同じく小鉢形土器にして口緣の一部缺去せるものである。口緣部は二條の沈線を附し、其の下方に六個の二條孤粮を描き粒子の細い繩紋を塡む。底部に近く一條の沈線を廻し、此の繩紋を塡めて意匠す。卽ち第二文化層及び本文化層に於ける第三類土器に相當す。口徑二十糎、高さ六糎を有す。

以上各文化層に於ける土器形式を標準として區分した五種類と、他の數少ない異形式の土器は、關東地方石器時代に於て如何なる位置を占むるかと云ふに、第一第三類の土器は所謂手にして、編年的に言へば後期繩紋式土器にして、關東地方の貝塚、特に霞浦方面に最も廣く分布するものである。而して第四類五類、及び類二文化層

小片五十片を出土した。

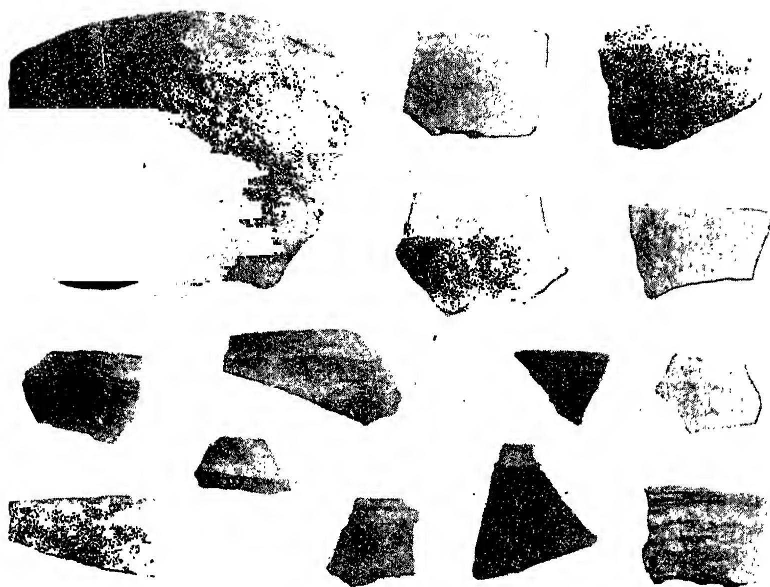


Fig. 18.　第五類土器

彌生式土器

Fig. 19.　遮光器文樣土器片

我々の發見した彌生式土器は何れも小破片で其の器形を正確に知る事は出來ない。何れも赤褐色乃至黜色を呈するもの多數を占め、比較的薄い破片にして土質は細密なるものと稍々粗大なるものとの二種があり、土器の吸水度は一般に甚だしい。清野博士が指摘された如く、貝塚上層の黑色有機層中又、貝塚上層に繩紋式土器と混在すと、層位的區別を述べられてゐるが、私達の發掘地點は前述の如く、貝塚上層の黑色有機質土層

第五類

本類に屬する土器片は最も少量にして、接合の結果稍々完形なる大形なる鉢形土器一個及び破片八點を算す。即ち口緣部破片にて考察すれば、口徑の廣い比較的淺い器形を有し、口緣部は稍々內曲するを特徴とし全くの無紋にして、色調黑漆色を呈するのが普通である。

其他異形土器

其他僅か二片であるが、口緣部及び胴部の各一部の破片にして、主體部二段にくびれ、各々に相向孤線を引き繩紋を塡めしものあり。而して弧の接合部に疣狀突起を貼けるものにして、所謂遮光器紋樣とでも云ふ本貝塚には特種な紋樣の土器片である。（第十九圖參照）燒成の度は頗る良好にして赤褐色を呈し、質は極めて堅牢である。此種の例品は下總立本貝塚に出土してゐる。又椀形小土器破片、皿形土器破片數個出土す。

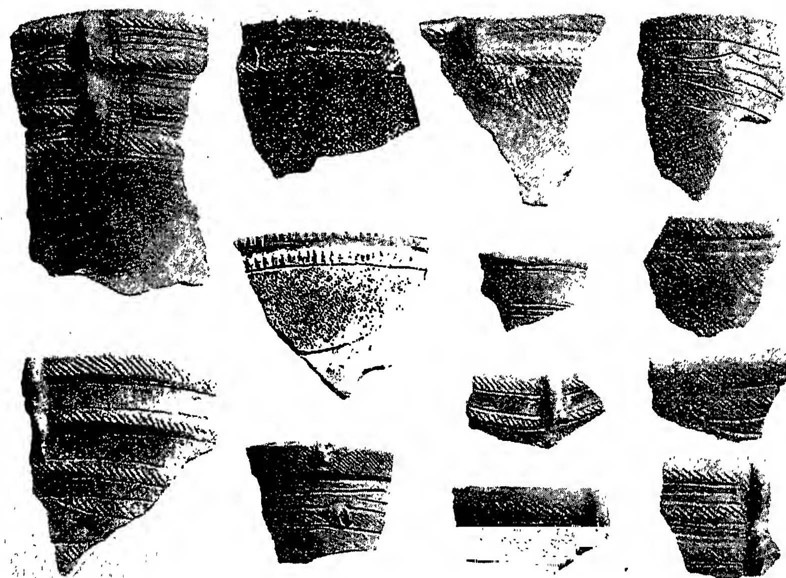


Fig. 17. 第四類土器

第三文化層土器群

本土器群の土器は繩紋式の完全土器二個、口緣部破片七十七個、底部九個、胴部破片五百有余點と彌生式土器

占める。

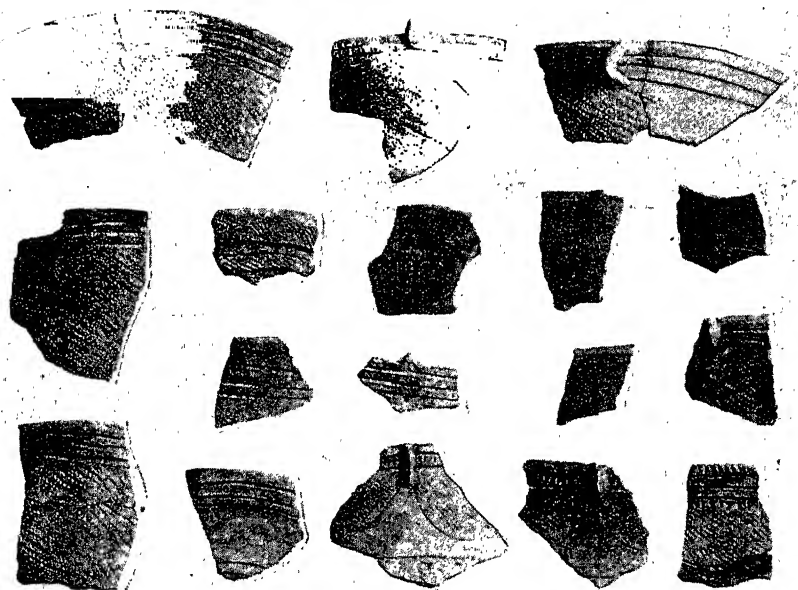


Fig. 16.　第三類土器

第三類

前二者には全く別な器形に屬するもので、第一文化層土器群に皆無の土器片である。卽ち深鉢形の土器にて、口邊に二條內至四條の直線を廻し而して、口邊部直上に數個の小突起狀の意匠を有する他に特別の裝飾紋は見られない。土器口邊部の上半の大破片一個破片二十二個を有し、本土器群中數量的に第三位を占る。

第四類

本類に屬する土器は胴部下半より底部の缺損せる朝顏鉢狀大形土器（接合の結果）と口緣部破片十片を算するのみである。口緣部に發達せる紋樣帶は所謂陵起帶狀繩紋にして、紋樣帶以外の部分を削剝する爲紋樣は稍々立體化する。而して此の繩紋の結節部には二個のつまみ狀の突起を置いてゐる。胴部から底部にかけて横に櫛目紋によりて意匠せられてゐる。此の種の土器は他の土器に比して更に薄手である。

底部

底部破片は僅かに九個發見したに過ぎない。其の中五個の底面の直徑は四糎内外にして、底面と側緣のなす角度は四十五度內外にして甚だ不安定のものである。他の三個は稍々安定性を帶びたもので底面の直徑七糎余りある。底面は全く無紋である。

第二文化層土器群

本土器群の土器片を擧げれば、完形土器は出土せず、接合によい全形を偲ばれるもの四個、口緣部破片百三十余個、(接合せられたものは一個に計算す)底部十三個、胴部大小破片七百余點である。此れを第一文化層土器群の破片數と比較すると、約二倍の多量になる。然し前者の土器群は比較的破片に纒りがあり孤立するものが少なかつたに反し、本文化層には個々の破片が多い。而して、土器の器形、紋樣、及び製作等の方面から見るに、種類極めて多く、前者が大約二種類に分類されたに反し、五種類に大別して見る事が出來る。

第一類

前文化層の第一類土器に相當するものであるか、前階梯に於ては破片の大部分を占めたに反し、本文化層に於ては數量的に甚だ少量である。而して紋樣上に多少の變化あり。卽ち前者の紋樣は櫛目紋が主となつて意匠せられしに反し、胴體部の意匠は沈線にて縄蓆紋を區劃した所謂縄蓆紋が種々の曲線を描いて施紋せられてゐる。卽ち同一形內にあつて、上と下との層によつて異常な紋樣の變化があるは、注意すべき事である。

第二類

第二類土器は前第一文化層土器群の第二類に全く相等するもので、本階梯にあつては數量的に云へば第一位を

を一層大ならしめてゐる。本土器には地紋とも云べき繩紋を何れの部分にも見られず、全體黑色にして質は堅い。高さ三十糎、口緣部の直徑二十四糎ある。

甕　形　（圖版第七ノ3）

前二者の如く口緣部に其の特徴を見られないが、口緣部から底部に微かな線を描くこれを整美なる土器である。口緣部及び頸部を廻る隆起線上に指頭又は器具を以て連續的壓痕を附したる紐狀紋樣があり、又口緣部から頸部にかけて橫に稍々孤狀を呈せる平行せる櫛目紋が充愼せられ、胴部には左から斜に同じく櫛目紋を施し底部の近くで終つてゐる。全體繩紋なく黑色と赤褐色との班な色調を呈す。高さ二十八糎、口部の徑二十二糎、質は堅い。

甕　形　（圖版第七ノ2）

背の高き細長い甕形土器である。裝飾意匠としては、頸部に二條の沈線を描き、櫛目紋が底部の近くより口緣部にかけて斜に走つてゐるのは、甚だ面白い施紋法と云はなければならない。卽ち多くの場合は口緣部から下方に斜向してゐるのが普通に見られるものであるが、本土器は細長い形態を呈する上に、施紋に當つて直立せしめるには底部を上方にした方が都合よいところから斯くされたものであらう。色調赤褐色を呈し、質は比較的堅い。高さ三十五糎、口徑二十一糎あり。卽ち（1・4）は第一類土器に屬し、（2・3）は第二類土器に相當する。數量的に云へば後者に屬する破片が最も多い。

胴　部

胴部破片は甚だ多數であるが何れも薄手で紋樣製作燒成等總て單調にして變化なく櫛目紋が最も多く、繩蓆紋が甚だ少ない。此等の破片はその殆んどが、上述の口緣部破片と接合せれるものが多い。

れる。（第十五圖參照）他の形態に屬するものは頗る少なく、僅かに三個にして小破片である。此れを完全土器に就いて見れば、

Fig. 15.　第　二　類　土　器

甕　形　（圖版第七ノ1）

形態の頗る優美な土器にして、口縁部は五つの花辨狀を呈し、頸部胴部底部にかけて曲線の美しい甕形土器である。胴部に櫛目紋が横に施され、口縁部より胴への移行部には無紋平滑帶があり、其のすぐ下の頸部に一連の刺突痕が施紋されてゐる。繩紋は口縁部上方と胴部下方に見られる。全體の色調黑色にして、燒成よく質は堅牢である。高さ三十一糎、底部甚だしく狹まり直徑四糎あり。

甕　形　（圖版第七ノ4）

本土器も前者と同じく形態の整美なる大形土器にして、口縁に甚しき張出しが見られる。前者の如く花辨狀の波狀はないが、口縁部直上に半月形の刻み痕が一連し、五個の小隆起によつて裝飾されてゐる。頸部に前者の如き刺突痕あり胴部に櫛目紋が横に施されてゐる上に、更に縱に二條の平行線によつて紋樣の効果

今此等の土器の出土位置によつて區分して概括的記載を試みる事とする。即ち第一文化層の土器群を第一文化層土器群とし、それにならつて第二文化層土器群、第三文化層土器群とす。

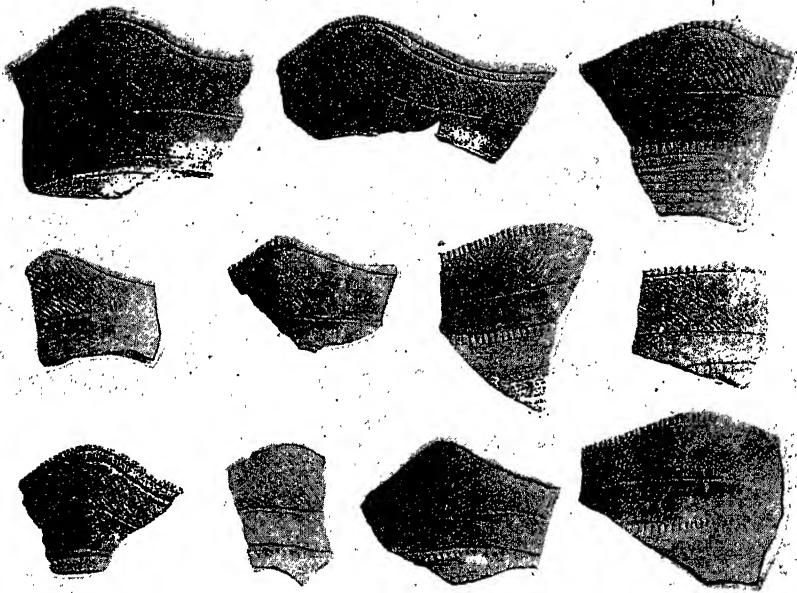


Fig. 14.　第　一　類　土　器

第一文化層土器群

本土器群に屬するものを擧げれば、完全土器四、口縁部破片五十五、底部九、他に胴部破片五百余點である。而して此等の破片は比較的縮りのあるもの多く、接合せられて大破片となるものが多く、孤立するものが少ない。本土器群の土器片は第十四、十五圖に見られるが如く大略二種類の形態に分けられる。

第一類土器

即ち第十四圖の如く口縁部は、大きな波狀を呈し頸部より口縁部にかけて外曲して甚だしく張出した一種の口廣の瓶である。

第二類土器

所謂直口にして口縁部の稍内曲し、且つ口縁部と頸部の間隔短きものにして、胴部は長く、底部の小さい土器である。而して兩者間には紋樣意匠上からも相違が見ら

如く、文化的の該方面に於ける位置を考察せられるものである。即ち以上の土偶相を明かにすることによりて、本貝塚の文化層を尙鮮明にするものである。

耳　飾　(二點)

二個共に長さ一、五糎の極めて小さい鼓形土製耳飾りにして、第二文化層より出土す。(第十三圖參照)

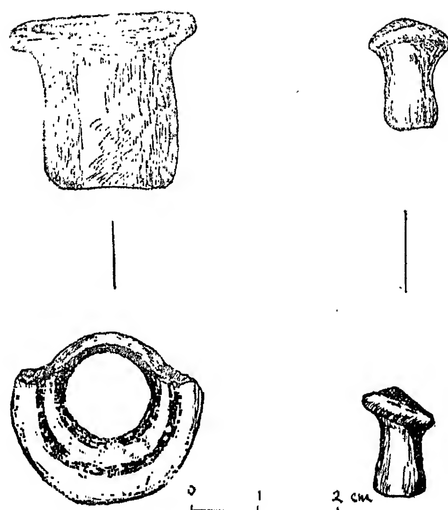


Fig. 13.　耳飾りの類

浮袋口狀土製品　(一點)

土製にして往々貝塚より發見する鹿角製の浮袋の口と稱する遺物に極めて類似す。黑塗色を呈し燒成は好し。(竪二、五糎、徑二、五糎) 第十三圖(左方)參照

土製圓板　(二點)

何れも土器破片を利用して、圓板狀に加工せしもので極めて粗雜なものである。(徑三糎―四糎)

土製品

土器

土器は總て關東後期繩紋式土器に屬し遺物中最も多量にして、鉢、瓶、皿等所謂日常使用に供すべき土器最も多し。而して上層に彌生式土器の混在を見た。繩紋式土器は完全土器六個、稍々全形の窺へるもの五個、他に大形土器破片、小破片總數二千余點を出土した。此等の土器は上層の混土貝層中のものを除く他、その器形又び紋様は比較的單純にして、特別に他の異形式の土器の繁雜な混合が見られない。

同　同　安井村陸平貝塚
同　同　手賀村岩井貝塚
下總國海上郡海上村余山貝塚
同　北相馬郡稻戸村米野井
同　同　高井村上高井貝塚
同　東葛飾郡川間村東金野井貝塚
同　同　新川村上新宿貝塚
同　同　上貝塚
同　同　葛飾村古作貝塚
同　同　國分村堀之內貝塚
同　千葉郡都賀村園生貝塚
同　同　平山村主理臺貝塚
武藏國荏原郡調布村下沼邊貝塚
同　北足郡春岡村小深村貝塚
同　同　新郷村清水貝塚
同　南埼玉郡柏崎村眞福寺貝塚

以上本貝塚の發見品によつて二系式の土偶を出土した。而も之れは何れも霞浦方面に最も多く發達したもの丶

同　東葛飾郡國分村堀之內貝塚

同　北相馬郡文間村立木貝塚

同　海上郡海上村余山貝塚

Fig. 12.　木兎土偶（江見水蔭氏發見）

東北地方

陸前國桃生郡前谷地寶ヶ峯

等に分布する。

尚淸野博士の發見せらた土偶は未だ拜見する機會に接しないが恐らく此種のものと考へる。又江見水蔭氏發見の所謂木兎土偶の頭部殘缺は私達の發見したものとは異形式のものである。卽ち第十二圖に示す如き顏面部が平盤上に現れ、顏面の輪廓は其上に隆起線に依つて作られた圓形を以て區劃される。目は圓形を呈し宛も木兎の如き容貌を呈するものにして、此の形式のものは下總、常陸、武藏の一部に比較的狹く分布するのみである。其の發見地を擧げれば、

常陸國眞壁郡伊讃村女方

同　稻敷郡高田村椎塚

同　同　飯出村廣畑

第十一圖（２）は胴體部と左脚を有する破片である。垂れ下つた乳部、異常に膨れた腹、腰に流れる線は何れも女性を表徴するに頗る成功してゐる。

同圖（３）は同じく胴部殘缺にして全面赤褐色を呈し、裝飾なく頗る粗雜なるものである。僅かに二つの突起によつて乳部を表現し、肩から腰に流れる線は宛もウイレンドルフのヴイナスを偲ばしめるものがある。（全長七糎）

其他土偶脚部殘缺五個あり、其の最大なるものは長さ十糎あり、丸味を帶び平行線紋を有しその足部の大さよりして原形の全體は相當大形の土偶なる事が想像される。又右脚破片にして連點紋の施してあるものもある。（第十一圖參照）

さて之等の土偶は大體に於て何れも同一形式のものと見て差支へはあるよい。此種のものは霞浦沿岸地方に最も多く分布して遠く陸前にまで及んでゐる。卽ちその主なる發見地を擧げれば、

常陸國稻敷郡飯出村廣畑貝塚
同　同　高田村椎塚貝塚
同　同　大須賀村福田貝塚
同　同　阿波村四箇貝塚
同　同　田村堀村貝塚
同　行方郡津澄村鬼越貝塚
下總國香取郡香取町

部、豊滿なる腰部は當時の女性の型を物語るが如く感ぜられる。又この土偶には何等の装飾なく頗る粗雑である。（全長十三糎）

Fig. 11.　土偶殘缺

第十圖（1）は上半身の殘缺にして、三角形の頭部、圓形にして凹める口部は、所謂木兎土偶に通ずるものあり、後頭部に半圓球の突起あり、これに線紋を施す。耳の部位は貫通せざる孔にて表現せられてゐる。

同圖（3・4）は頭部破片にして扁平なり、後頭部に突起あり、之れに二條の線と點列紋とにより突起部を中心として縦横十文字に意匠せられてある。（4）は比較的大型なるものにして前者に頗る近似す。

同圖（2）は同じく頭部破片にして、而も眉目鼻は剝落して僅かにその痕跡によりて判ぜられる。顔面に左右三條の線が描かれ、顎部に於いて陵起線によつて區切られてゐる。耳の部位は半形突起によりて知らる。

須知の例は刺突漁獵具の一たりしことは疑なき事であらう。

貝製品（二個）

僅に二個を發見したのみで何れも破片にして貝輪と見るべきものである。一はサルボウを以て作られ極めて粗雜なものである。他の一片はミルクヒかと思はれる大きな二枚貝によつて製作せられしものであるが小片にして其の全形を知る事が出來ない。

土偶

今回發掘した土偶は完全品一個と上半身の殘缺一個があり、その他は頭部の殘片四個、胴部二個、足部五個及び手部一個の十四個で、これからの殘缺は各個、體を異にしてゐる故に總數十四個となる。

此等の土偶は何れも内部充實し、寧ろ小型に屬するもの多く後背は大低扁平なり、而して裝飾に乏しく且つ不均整なる程に頭部大きく、手足の發達を見す。製作技術上から云へば頗る粗雜にして、顏面、腹、乳等に異常なる特徵が見らるる。卽ち顏面の輪廓は楕圓形或は三角形を爲し、眉は上り氣味にて左右聯結する一線によりて表現せられ、鼻の上端は眉間部に於いて眉と接合して丁字形を呈する。目は眉に接して楕圓形の土を置きて表し、耳の部位は其部に小孔（貫通せるものもあり）、又は圓形突起によりて表現す。顏面の輪廓、眉、目、口等の配列から見て頗るきつい面相である。後頭部は此種の特徵としての半球形突起を有するものあり、體部は乳、腹突出する他、粗雜なる線と刺突痕によつて僅かに裝飾を見るに過ぎない。

圖版第六の土偶は左腕を缺く殆んど完全なるものにして、全體としてのプロポーション、顏面、乳、腰等にその特徵が見られる。顏面は頗るきつい面相を呈するも、所謂撫で肩にしてよく女性の特徵を摑み、而も大きな乳

した一部より切斷して他の一部を研磨して尖らせたもの等あり、或るものには釣針の未製品かとも思はれるものもある。

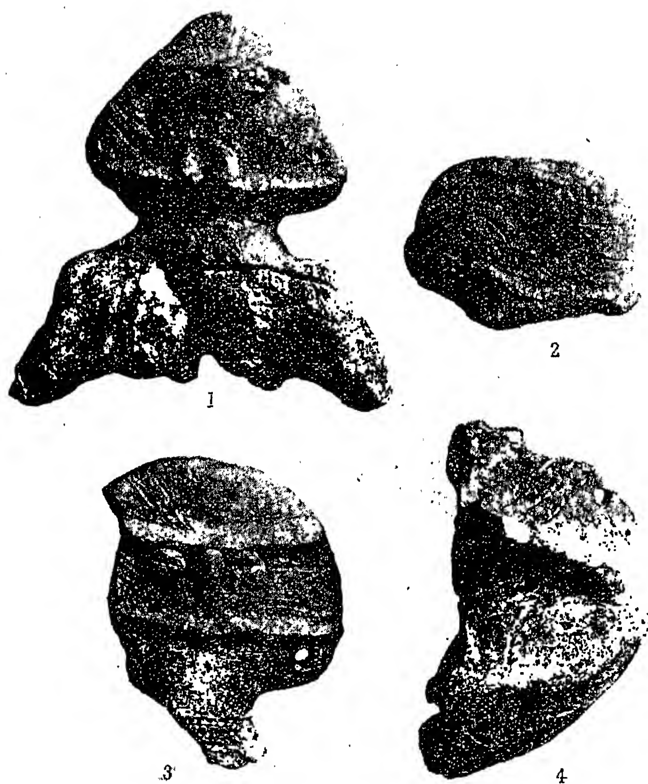


Fig. 10. 土偶頭部

尙此他鹿角の單なる人工による切斷片、及び鹿の掌蹠骨の下端のみ切除された完全骨、或は滑車狀關節髁を有する切斷片等多數に出土した。此等は淸野博士も「日本石器時代の骨角器の製法に就いて」と題されて東京人類學雜誌第十卷第九號に細述せられてゐる他、長谷部言人博士の「骨角匕の研究」（人類學雜誌四十の十二）ある如く、骨角器製作方法を攻究する上に見逃す事の出來ぬ遺物である。本貝塚よりは前述の如く魚骨が多數發見せられ、又骨角器製作の一材料である鹿の遺骸が他の獸骨に比して多い點等からして、骨銛、骨鏃其の他は Fisher としての貝塚人の漁具である事が想像せらる。而して推積貝塚より八木奘三郎が發見せられた鯛の頭骨に此の種の骨器の尖端が折れ刺さりたる儘發掘せられたと云ふ

而して最も長きものは三十糎あり、幅一・二糎あり、直針狀をなす。普通のもので十糎内外のもの最も多く、全體精巧に研磨され極めて光澤に富み、且つ又體の横斷面は不整圓形にして凹みあるものが多い。又全面よく研磨され横斷面圓形にして頗る鋭利なるもの四點、横斷面矩形を呈し幾分粗製のもの若干を發見す。而して本貝塚の骨銛の特色は、其の一部に骨自然面を現し他の一面は骨髓面を存し、而も下端に當つて關節部の海面質様の面を一部に殘存する事實にして、頗る注目すべき事と思考する。

鹿角製鏃（二點）

何れも鹿角を縱割して製作し、頗る扁平にして、身と柄の部よりなり頗る異色あるものなり。二個とも第一文化層より發見す。

第九圖（6）は長さ八糎、幅下部に於いて一・六糎あり、體は稍々灣曲するも先端は鋭利である。同圖(7)は前者に稍々小形なるものにして、形態、様式共に同一である。

此等は或種の柄に緊縛し、これを以て擊刺し、又は投射せしものであらう。

鹿角製裝飾品

第九圖（1）に見られるが如き、鹿角を縱割して彫刻を施したものであつて兩端の缺損せるものである。全長十二糎、最大幅一、四糎あり、切斷面は扁平にして體稍々灣曲し、彫刻ある面の裏面は縱割したまゝの粗雜である。私は此種の遺物は未だ聞知しない。恐らく一種の裝飾品であらう。

鹿角利用未製品（六點）

鹿角の周圍に切目を附して切斷したもの、或は鹿角を縱割して之れを研磨したものがあり、又鹿角の枝狀をな

骨銛（三十點）

鹿の掌蹠骨、又は骨蹠を縦割して製作し、其の完全なるものは灰層下の第二文化層より最も多く出土した。尚清野博士は本貝塚に於いて、完製骨角器四百餘個の他、數多の未製骨角器を得られた。骨銛百一個に就きて分類を試みられ、兩端尖り（但し尖りは兩端略々同様に鋭いものと一端鋭く尖り他端は鈍く尖つてゐるものもある）たるもの（八十七個）と、一端尖り他端は丸きか又は他端平かにすり切られてゐるもの（十二個）の二種に分けられ報告せられてゐるが、私達の發見したもは同博士の第一種に屬するもの最も多く、卽ち兩端細く中央部稍々太く且つ一端は鋭利に尖らされ、他の一端は稍々丸味を帶べるものが多い。

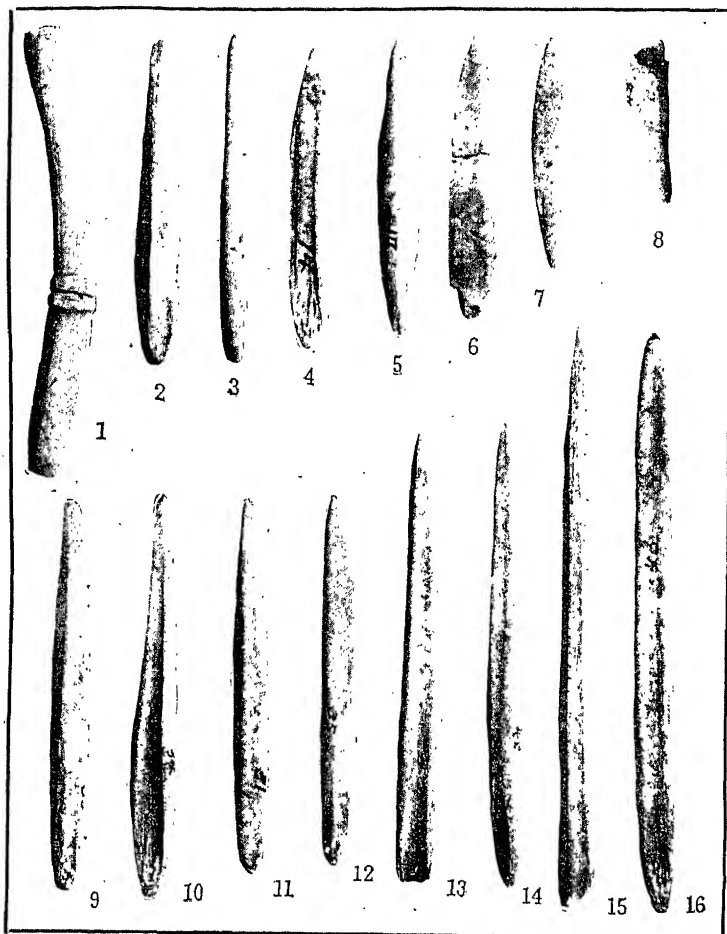


Fig. 9. 骨角製品

第八圖（1・4）は磨製石斧の刄部を缺くものにして、砂岩質にして、一面はよく研磨してある、厚さ約四糎ありて頗る厚味のものである。他の二個は何れも研磨せる一部を殘す小さい殘缺である。

敲　石

第八圖（3）は楕圓形の敲石にして、全體よく磨かれ、兩面の中央に圓形の凹みあり、質は玄武石である。長さ八糎。

第八圖（2）は圓形叩石にして兩面に殆んど同大の凹みあり質は砂岩質なり。徑五糎。

以上の如く私達の石器の發見は甚だ貧弱であつた。私は不幸にして淸野博士や江見氏の發見石器を拜見して居らないが、何れも土製品に比して甚だ少數である事は事實である。一般に貝塚の貝層中より石器類の出土は他の遺物に比して甚だ少ない。調査に當つてその大部分は表面採集や土地人から讓り受けるものが多い。

福田、椎塚、或は陸平等の諸貝塚の報告を見ても石器は甚だ貧弱である。然らば必然、何故關東の貝塚には石器が尠ないのであらうか。竪穴とか貝塚以外の狹義の遺物包含遺蹟には比較的多いのは如何なる理由であらうか。又貝塚にしても如何なる性質（文化的編年的）の貝塚に多いか少いか。又石器の性質は如何なるものであるか。と云つた程な以上の疑問が起るのである。關東貝塚研究は土器研究が主なるものであるが、石器に就いても常に以上の考察を拂ふべきものと思考する。

骨角貝製品

本貝塚で發見した骨角器の類は頗る多い。即ち骨銛の完全品十三點、同じく缺損せるもの大小十七點、骨鏃二點、鹿角未製品六點及び鹿角製裝飾品一點、他に鳥骨製管狀骨器一點、總計四十點の多きに達した。

藏せられて居る。即ち京都帝國大學の清野博士を始めとして、東京帝國大學人類學教室、及び江見氏の發掘品の一部は杉山壽榮男氏が所藏せられ、又大場磐雄氏の發掘品は國學院大學考古學標本室に保管せらるゝ由で、遺物の大部は各々完全に仕末されてある事は、誠に望ましい事である。

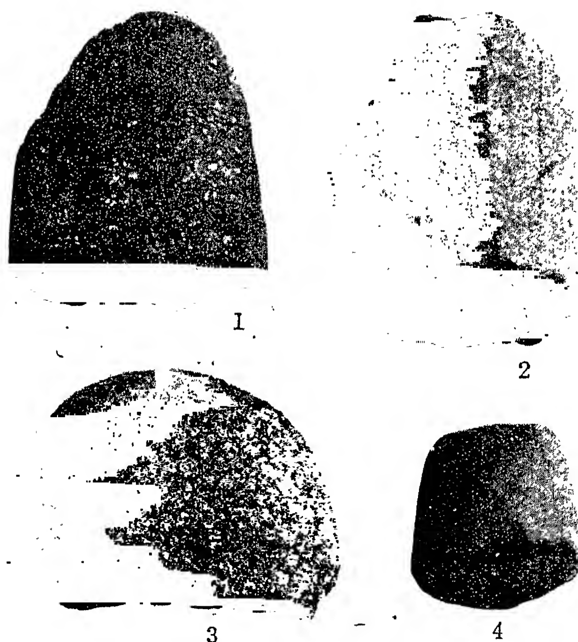


Fig. 8.　石　器　類

第二表は從來より報告せられてゐるものと、私達の今回のものを表示したもので、本貝塚の多種多樣の而も豐富な文化內容を有する事に一驚するのであらう。

右の表によれば彌生式土器を何れの發掘者も採集せられて居り、縄紋式土器類は勿論として土偶の豐富なる事、石製品は種類に富むも量に於いては比較的少ない事、而し骨角器類の非常に豐富なる事を知る。次に今回の私達の發見遺物に就いて記載を試みやう。

石製品

今回發見した石器は僅かに磨製石斧殘缺四個、敲石二個に過ぎない。此等は貝塚底部の砂土に接する百九十糎前後の深さより發見したものである。

磨製石斧

第二表　廣畑貝塚發見遺物

遺物		清野博士	江見水蔭氏	大野雲外氏	今回のもの	計
石製品	打製石斧	一				[illegible]
	磨製石斧	四	二	一	四	[illegible]
	石棒	一				[illegible]
	石劍	三	一			[illegible]
	石皿	一				[illegible]
	石錘	一				[illegible]
	凹石（敲石）	（數十個）	三		七	（數十個）
	石鏃			三		[illegible]
土製品	縄紋式	（有）	（有）	（有）	（有）	（有）
	彌生式	（有）	（有）	（有）	（有）	（有）
	（朱塗土器）	（若干）			二	（若干）
	土偶	八	二		一四	二[illegible]
	耳飾	四			一	[illegible]
	浮袋狀土製品	一			一	[illegible]
骨器類	骨角器	四〇〇	九		四〇	四四[illegible]
	貝製品	二〇	三		三	二[illegible]

備考

一、以上は大略の數字である。清野博士は骨盤（鹿又は猪の）に三個の穴のある土版類似のものを一個出土す。

二、甲野勇、中谷治宇郎兩氏は石斧十數個を同地の農家より寄贈を受けし出なり。

而して本貝塚は前述の如く古き歴史を有し、且つ多數の訪問者があり、從つて發掘に依る遺物も亦、所々に所

以上の自然的遺物によつて見る本貝塚は霞浦沿岸地方の他の諸貝塚と若干の差異こそあれ一般鹹水産貝塚の内容と異らない。此等の貝塚に於ける自然的遺物の性質及び習性分布等によつて、當時に於ける海岸線の狀態及び氣候等自然環境の復原は或る程度まで可能の事であらうし、貝塚人の環境に應化せんとする文化構成の一要素を究明する一方法でもあらう。

卽ち先づ貝塚に就いて見るに其の多くが淺海にして、砂泥の海底に棲息し而も波浪穩かな內灣を條件として更に魚類に就いて見るなら、同樣の條件を具備するもの多く、沖魚とか深海等の特異な習性あるものを發見しない所から、特別な魚撈方法を考へさせられる樣なものはない。又鹿、猪の類は筑波稻敷の此の地方の丘陵地帶には非常な繁殖を見たものゝ如く、常陸風土記にも記されて居り、又附近の遺跡にも此等の遺骸を見る事によつて想像に難くない。元來猪と鹿は所謂森林系動物群 (Wald fauna) の代表的のものであるから、當時鬱蒼たる森林の存した事が傍證せらる。從つて當時貝塚附近は海の幸、陸の幸に最も惠まれた自然環境にあつたことが想起せられ、貝塚人は單なる漁撈生活に止まらず狩獵をも亦、兼ね營んだ事が考へらるる。

人工遺物

今回の發掘により採集せる遺物は總て史前學研究所に藏む。而して其の量は甚だ多量にして其整理に多大の日數を費した。今此等の遺物を大別すれば次表及び第一表の如し。

スヽキ Lateolabrax japonicas.

タイ Pagrus sp.

フグ Tetraodon sp.

イカ Loligo japonica Hogle.

魚骨は獸骨に比して甚しく多量出土した。以上は顎骨を主として檢出したもので、背椎骨その他を精査すれば更に增すことと思ふ。

IIII 鳥骨

水禽と思はる骨を比較的多く出土せしも專門家に委ねなければならない。

V 自然石

楕圓形、球形及び棒狀の自然石を主として混土貝層中より屢々出土した。其の中には人工的打裂の痕跡を留むるものあり、明かに自然石利用の跡を窺へる。又少量であるが燧石及び黑曜石の小破片を發見した。此等は恐らく石器製造の際の石屑とも見らるべきものであらう。石片中には石鏃の未製品を二三發見した。黑曜石を材料とする石器及び其の破片は本邦諸貝塚からも往々出土するも、此れが原產地は關東地方にありては、秩父地方及び甲信方面に求めなければならない。此の事實から先住民の相互の接觸關係が窺へ得る。

VI 灰炭

混土貝層及び純貝層上より、前述の如く不連續なる層狀を呈して存在するのみで、住居跡、爐跡等の如きものでない。炭中には今後該方面の研究により日本石器時代の植物群の鮮明にされる日も來らん。

マイマイ　Ganesella sp.
キセルガヒ　Landes sp.

以上の如く貝類は二十六種の他、種不名のもの五種類あり。貝塚の主體を爲す貝殼はシホツキ、ハマグリ及びアカニシである。又シホツキ、アカニシが一團となつて推積する點は前述の如くである。又此等の貝殼は多分のカルシウム分を含み、二枚貝中には合貝になつたものが多かつた。貝類中アハビの如き深海の岩礁地に棲息する習性を有する如きものは此の地方の自然環境に相反するもので、海濱に打ち上げられたものか或は遠く捕獲又は交換したものであらうが、頗る異色あるものもある。此の積成する貝類の習性に基いて見れば鹹水産貝類よりなる主鹹貝塚である。これに若干の淡水及び陸産の貝類を混じてゐる。

II 獸骨

シカ　Sika nippon nippon (Temminck)
キノシシ　Sus leucomystax leucomystax Temminck.
イルカ　Cetacea
クジラ　Cetacea

以上の中鹿が最も多く、下顎骨、掌蹠骨片が主なるものにして、此が本貝塚の一特色とも云ふべく多量の出土せる骨角器の材料となつたものであらう。猪の骨は甚だ少なく、遺物整理に當つては最も顯著に區分せられる下顎骨の一片をも檢出し得ない程であつた。イルカの背推骨を若干出土したのが異色である。

III 魚骨

カヾミガヒ　Dosinia japonica Reeve.

オキシジミ　Cyclina sinensis Gmeliu.

アサリ　Paphia philiphinarum Adams & Reeve.

エゾクボガヒ　Tegula rugata sublaeris Pilsbrg.

マテガヒ　Solen gouldi Conrad.

バカガヒ　Mactra sulcataria Reeve.

ウバガヒ　Spisula sachalinensis Schrauk.

ミルクヒ　Schizothaerus nattalli Conrad.

オホノガヒ　Mya arenaria (linné) japonica Jay.

ツノガヒ　Dentaliam weinkauffi Duuker.

アハビ　Haliotis gigautea Gmelin.

クボガヒ　Tegula argyrostoma basilirata Pilsbrg.

エゾマスホガヒ　Gari (Gorbraeus) Californica Conrad.

ダンベイキサゴ　Umbonium giganteum Lesson.

カハニナ　Thiara libertina Gould.

カニモリガヒ　Clana kochi Philippi.

ツメタガヒ　Polinices (Nererita) didyma Bolten.

五、彌生式土器の包含層ありて此處に貝殼を出さぬ事
六、其處の最下部より貝塚の一片を出した事
七、貝層の最下部よりも彌生式を出した事
八、比較的骨角器類の多き事
九、貝層中に合貝少なからざる事
十、石器時代の遺物の種類に就いては他の貝塚と大差なき事

第三章　遺　物

自然遺物

今回の發掘によつて、本貝塚より檢出し得た自然遺物の種類は、大凡左の如くである。

I　貝類

ハマグリ　Meretrix meretrix linné
シホフキ　Mactra veneriformis Reeve.
アカニシ　Rapana thomasiana Grosse.
アカガヒ　Anadara inflata Reeve.
サルボウ　Anadara subcrenata Lishke.
カキ　Ostrea (Crassostrea) gigas Thunberg.
イタヤガヒ　Pecten yessoeusis Jay.

九個等第二文化層と同じく遺物の種類多く、殊に所謂南漸資料と稱せらるゝ土器片の出土を見た事は彌生式土器と共に見逃がせない資料である。

彌生式土器と繩紋式土器との遺存狀態は淸野博士が指摘されたやうに、備中津雲貝塚遺跡と極めて類似してゐる。又此等彌生式土器包藏地域と繩紋式土器包藏地域（繩紋土器の遺存する地域は貝層中のみでない）とは猶精査を要する點があつて適確に之れを指示する能はぬが、表面觀察によると彌生式土器がよりひろく散布して殊に貝殼の散布しない地區に於てこの傾向が著しいことは、遺跡の重復を觀ぜしむる點がないとは云ひ得ぬが、一方上部貝層中にこれを共存する事實によると、本遺跡の更により存續時期の長きとその文化的變化を思はしむるものがある。

以上の如く本貝塚は大體三文化層に細分せられる。卽ち舊霞浦灣の砂濱に近く形成せられた事に始まり、それが堅くなるまで破碎した貝殼の上に或る種の行動に基いて完全土器をそのまゝにして棄てられ、その後その上に又貝殼を約四十糎の高さにまで積み上げられ、附近に住居を營む事によつて生じた灰が捨てられると同時に、最初の時に比較してより文化的な各種の日用具が共に捨てられ、此の狀態が比較的長期間に亙り、更に彌生式土器の共存を見るに至つて關東貝塚に於ける特殊的な遺跡となつた事が想像せらる。

註。江間水蔭氏の「地底探險記」にある本貝塚の所見

一、遺跡の低地にある事
二、貝層の最下部は水田の表面下に達せる事
三、彌生式と貝塚土器との混交せる事
四、彌生式土器と貝塚土器との中間物とも見るべき土器片を出せし事

編年的位置を決定する一資料ともなるものであり、後述する第二文化層に比し特異な位置を占めるものと思考す。ともあれ土器の內容といひ特異な層狀を呈せる貝層の狀態等より又完形土器の一群は或種の行動に基く結果、殊更に完全品をそのまゝ投棄したものらしく、此が遺された個所は或期間に於ける地表面であつた事が想像せらる。

第二文化層

第一文化層の破碎層の上層に厚さ六十五糎の土混りの貝層を推積した個所、卽ち深さ約八十糎の不連續な灰層の下に土器の他、土偶、骨角器、其他の遺物を多量に包含した約四十五糎內外の厚さの遺物層がある。

土器は第一文化層のものと比較して器形及び紋樣上の變化に富む他、土偶十個、骨角器の完全なるもの二十個、同じく破片三個等前文化層に見られなかつた文化的內容が豐富である事は本文化層を設けた意義にして、尙灰層に就いて見る時、灰は他の場所から運搬せられて捨てられたものゝ如く、灰層附近には貝殼や土砂の少しも燒けた痕跡を止めない點に依つて明かである。少なくとも第一文化層に於ける生活面が、貝殼や其他の殘骸で或期間內に埋もれ、その後の生活營爲により以上の第二の遺物層が生じ、次いで灰を他から捨てられたものの如く。時間的にも文化的にも若干の隔りのある事が想像せられる。

第三文化層

最上層貝層の約六十糎內外の有機質を含む黑褐砂土を混する層の而も上部には繩紋式土器に彌生式土器の混存を見る遺物層を云ふ。

彌生式土器の他繩紋式土器の三角形小形完全土器一個、土偶完全なるもの一個、同じく破片三個、及び骨角器

第一表　各文化層に於ける遺物

遺物			第三文化層	第二文化層	第一文化層
土製品	關東縄文式後期土器	第一類土器	多	多	最多
		第二類土器	最多	最多	多
		第三類土器	中等	少	
		第四類土器	中等	少	
		第五類土器	少	少	
		其の他の土器	六片		厚手式土器片若干
	土偶		四	一〇	
	耳飾		二		
	彌生式土器		若干		
石製品	磨製石斧		一		二
	敲石		三	二	二
骨角貝製品	骨銛		九	三	
	骨鏃				二
	骨製裝飾品		一	一	
	貝器		二	二	
	鹿角未製品		四	二	

原してみると、その形態及び紋様は比較的單調で纏りのあるものが多い、石器二個、骨鏃二個の他、他の遺物を發見しなかつた層を第一文化層とする。

尚此の破砕せる貝層の下部は霞浦灣の浪打際に最も近かつたらしく、僅か數片の土器であるが、各面が甚しく磨滅して恰も今日海邊にて屢々目撃する陶土器の殘片と同一の狀態を呈してゐるものを發見した。該土器片に就いては後述するも、比較的厚手にして異色あるもので本貝塚の文化

異色があり、尙貝層及び後述の遺物の關係等より想像して最上層を除く他、後世の攪亂を受けた根跡がない。第三層の貝層、即ち最下部の貝層は特に破碎し踏み固められた樣な感を呈せるものは、上層の土壓によつて破碎せられたものと見るに余りにも第二貝層との判然たる區別があり、而も第二貝層は若干の土を混ずるに反し少しも混じない點、推積密度が他の遺跡に見る土壓によつたものと比較して、裕に大である點、遺物の出土狀態等によつて見れば、第二貝層の成立時期とは少なくとも或る時間的な差が見られる。第一第二の貝層の成立に於ても時間的の差が想像せられるが、決定的な時間的變異による證は見られなかつた。

遺物包含の狀態

次に遺物を主とした考古學的の層位的關係に就て述べる事にする。繩紋式土器と彌生式土器とは淸野博士の認められた如く明らかに層位的區別があつた。第一貝層の上部は繩紋式土器に彌生式土器がまぢつて居る。第二第三の貝層には後述して居る如く關東後期繩紋式土器のみであるが、同じ後期土器の中に於て形式內容及び土器以外の遺物の出土狀態や、前述の貝層の推積狀態等によつて各々が多少とも文化的な隔りを認めた。淸野博士は「層位的關係は本貝塚に於て、部位によつて各層の厚さに厚薄あるが連續して存在する」云々と述べられてゐるが、私は連續して存在する間の其の文化的變化、後期繩紋式文化內の變化を次の如く層位的關係により三つの文化層に細分する。

第一文化層

深さ約百五十糎の所、即ち第三貝層の細に破碎せられた貝殼の推積せる上部約三十糎の厚さにて、繩紋式完全土器や大形土器片が多數上部の壓力によつて破碎したまゝ遺存する遺物層がある。孤立する土器片は少量で、復

んだ黒色の砂土を混じ約八十糎の厚さを有す。第二の貝層はその下部に不連續な薄き（厚き所で十五糎）灰の層狀を呈せるものを區劃として、此下部の約六十五糎の厚さを有する黒褐色の砂土を若干混入せる貝層にして、前述の如き一種類の貝殼が一團となつて集積せる例を見る層である。

第三の貝層は第二貝層の直下にして、貝殼（主として二枚貝）が細かに破碎して堅く踏み固められたる如くなつた厚さ約四十五糎の貝層である。

因みに貝層下部は黒褐色の砂土層（約十糎）に續いて黃褐色を呈せる砂土の地盤に達す。蓋し水準面に相當し發掘の際は水を湧出せり。

Fig. 7. 第一文化層遺物出土狀態

以上の如く三つの貝層は、各々異つた推積狀態が見られる。即ち貝殼の破碎狀態、混土狀態、灰層の狀態等に

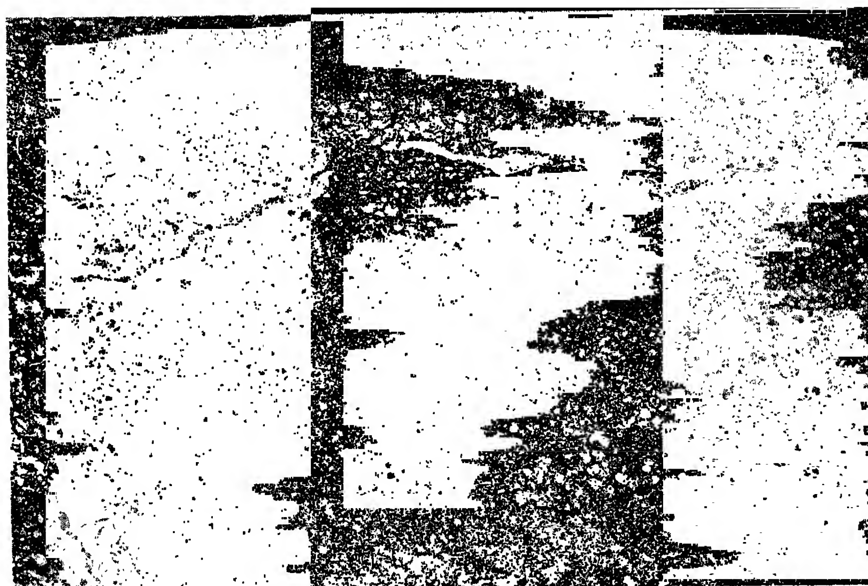


Fig. 6. 貝層の狀態（白く層狀をなすは灰層なり）

の邊であつたから作業には些程の困難を伴はなかつた。

發掘には日數の關係から僅か二日を費したのみで、而も天候に惠まれず、連日の炎著に加ふるに第二日の午後からは驟雨に惱まされた爲に精細に發掘調査を繼續することが出來なかつた事は甚だ遺憾であつた。

發掘の結果により貝塚の內部の狀態を說明すれば（第五圖參照）貝層は中央部に最も厚く約二米余の深さに達し、貝塚の西部、東方に至るに從つて其の厚さを減じて三十糎或ひはそれ以下になる。

貝層を形成する貝殼に就いては後述するも、其の大部が海水産貝にして種類に富み、密積して層狀を爲す。大人の拳大のニシ貝のみが大量に密積せる所があり、又シホフキ貝のみ一團となつて推積せる所も存す。此等は一時の又は或る期間内に投棄せられたものであらうが、此れに關聯して種々の憶測が行はれ得る。ともあれ貝層は其の狀態によつて三つの考古學的層狀を呈す。（第五圖參照）

上方より數へ第一の層は最上層にありて有機質を多分に含

貝塚は脇鷹（ワキタカ）明神社の西方にある丘陵の一つ東方に流れ明神社の處に達す。而して更に東方の低地に低く流れたる丘陵端に發達せる遺跡にして、舊霞浦灣の砂濱に接して形成せられてゐる。東西長さ約百米、南北社の東側より約五十米あり、標高約二米を算するに過ぎず。

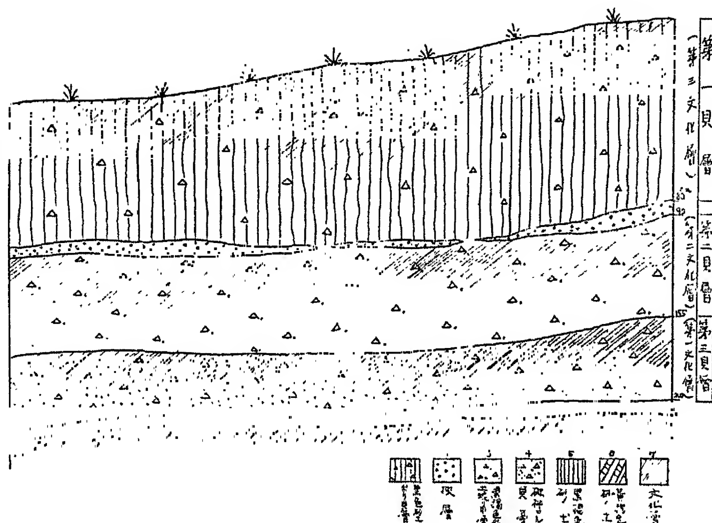


Fig. 5.　貝塚層位圖

此丘全面に亙り縄紋式土器並に彌生式土器片散布せり、貝殼は丘の北半部に散布し、北端附近を最多とす。貝殼の無き南方、社に近接する部分に彌生式土器片多く散布す。これより石製模造品を伴出する事ありしと云ふ。現今菜園桑畠にして雜草繁茂しこれを精査する能はず。此の地點は從來より注意されてゐるが、更に東方に近接する畑地にも小貝塚を伴ふ。（第四圖參照）遺跡があるが散布せる土器片は本地點と同一で彌生式土器を共存するこの兩者全く一つの遺跡の連りと見るべきである。

發　掘

貝殼の散布區域中、丘の中央北に偏して南北十米、東西二十米の荒地あり。此の大半（北の方）は清野博士の發掘地點である。（第四圖參照）その南方に幅四米長さ十五米の雜木のある地點あり。此の中央部を東西四米、南北二米の地域を發掘した。深さ二米三十糎に達し、江見氏等の經驗された様に二米の深さで水が湧出したが略々貝層の底部

浦と稱する所は現今の古渡の入江にして本貝塚附近に相當し頗る奇とすべきである。

降りて江戶時代に水戶烈公の運河工事あり、又利根川圖誌によりても偲ばれるが如く、霞浦、北浦の淡水湖となりしは凡そ四百年來の事にして、甚だ近き過去まで海水のたゞへる內灣を爲せし事は以上の古文獻によりても稍明かである。

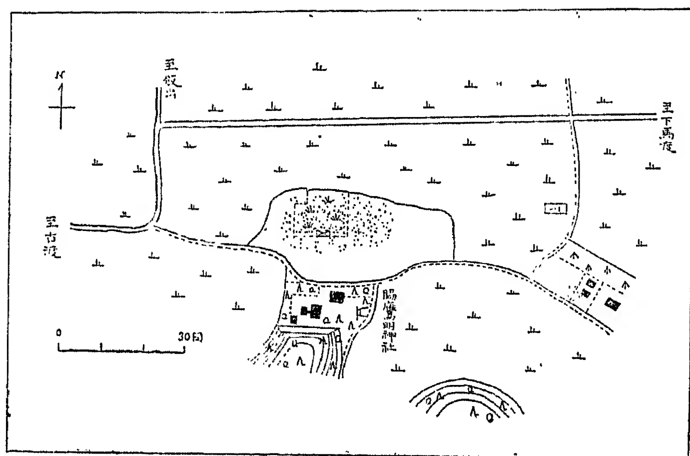


Fig. 4. 廣畑貝塚見取圖

以上によりて貝塚構成當時の霞浦は海水のたゞよへる內灣にして、貝塚附近は特に小內灣の交雜し、波浪穩かな最も自然環境に惠まれた地方にして、山海の利をほしいまゝにした所謂水陸の府藏、物產の膏腴にして彼等石器時代には全くの理想境であつた事が想像するに難くない。

從つて霞浦を中心とした所々に多くの貝塚が發達したものゝ如く、本遺跡の存する阿波丘陵上には、所作（トコロサク）、大室、上久保、龍貝、大門、石神下、福田、椎塚、柴崎等の諸貝塚を存し、古渡の入江を隔てゝ北方に陸平貝塚あり、小野川を隔てゝ大谷、興津、給分、江戶崎、村田の諸貝塚あり、浮島には前浦、貝ケ窪の貝塚の分布を見るに至り、此等の或るものに於ては相互に文化的交捗のあつた事が想像せられる。（第一圖參照）

貝塚の狀態

源頼信朝臣責平忠恒ニ語に

「三千騎軍を調へて鹿島の御社の前に出來會たり。衣河（キヌ）の尻やがて海の如し。鹿島梶取（カトリ）の前の渡の向で顔見えぬ程なり而るに彼の忠恒が栖は內海に遙に入たる向ひにあるなれば責に寄るに此の入海を廻て寄ならば七日許廻るべし直ぐに海を渡らば今日の內に責められぬべければ（中略）此の海には淺き道堤の如くにて廣さ一丈ばかりにて直ぐ渡りけり深さ馬の太腹になむ立つなる（中略）漭を一束從者に持せて打下して尻に漭を突恙々々渡りければ此を見て他の軍兵悉く渡りける游ぐ所二所ぞ有ける。」

人馬海を渡りし程に淺せたる處、一部に生じたる事が後一條天皇長元年中に見えてゐる。

萬葉抄　十四　仙覺（鎌倉中期）

「常陸なるなさかの海の云々（中略）常陸の鹿島の崎と下總のうなかみとのあはひより遠くいりたる海ありすゑはふたながれなり風土記にはこれを流海とかけり今の人はうちのうみとなん申すそのうみひとながれは北の方鹿島の郡南のかた行方の郡とのなかにいれりひとたがれは北の方行方の郡と下總の國のさかひをへて信太の郡茨城の郡までいれりしかるにかのうちうみの鹽のみつるときには浪殊にさかのぼるしかれば浪のさかのぼる義によりてなさかのうみといふべき也なり」

蓋し仙覺は北條經時、時頼が執權せし頃の人にして鎌倉の中頃に至りても尙海瀰なりし事が知らる。

神皇正統記

「同じ風のまぎれに東國さして常陸國なる內の海に着きたる船侍りき」

金勝院本太平記

「北畠大納言入道宗徒の船は常陸國東條浦へ吹さ寄せたりしかば」云々とあり。

延元三年九月北畠准后が伊勢より海路奥洲へ下向の時難風に遭ひて漂着せられしも霞浦にして而も內の海、東條

の水は常に濤を卷て丘麗を洗ひしもの丶如し。地理學者の説によれば霞浦方面は往古海なりしが海底數百年間に次第に隆起して現今の湖を形成せしものにして、現今に於ても此の附近の海岸は土地漸次隆起しつ丶ある由である。因みに現在霞浦の最深部は浪逆浦附近にして十米を算し、平均四、五米の深さに過ぎない。又史前學上より見て後述して居る如く、本貝塚の主要貝類は鹹水產であり、他の諸貝塚にして本貝塚と同樣なる鹹水貝類より成る貝塚も尠なくないことからも、貝塚成生時に尙海水の注入せられて居つたことが考へらる丶。かくの如く往古海水を通じたりしことは啻に地理學上乃至史前學上明かであるばかりでなく、更に降つて記錄口碑に徵すべきものの亦尠くない。今共の二三を摘出すれば、

常陸風土記（和銅五年）

「都西津濟。所レ謂行方之海。生二海松一及燒二鹽之藻一。
凡在レ海雜魚。不レ可二勝載一。但如二鯨鯢一。未二曾見聞一。」

以上に依れば海なりし事が想像せられ、特に鯨の如きものは未だ見聞せずと斷つてあるのは面白い。

常陸風土記（信太郡の條に）

「古老曰。倭武天皇巡二幸海邊一。行至二乘濱一。于時濱浦之上。多乾二海苔一。由レ是名二能理波麻之村一。」
「乘濱（ノリハマ）里東有二浮島村一。長二千步。廣四百步。四面絕海。山野交錯。戶一十五烟。里七八町余。所レ居百姓。火レ鹽爲レ業。」

乘濱は今の阿波村神宮寺附近にて和名抄の信太（シダ）郡乘濱鄕に相當し、又本貝塚附近でもある。海苔を生じ、浮島にて鹽を燒くとあれば海灣なりし事が偲ばれる。

舊本今昔物語　二十五（長元年中）

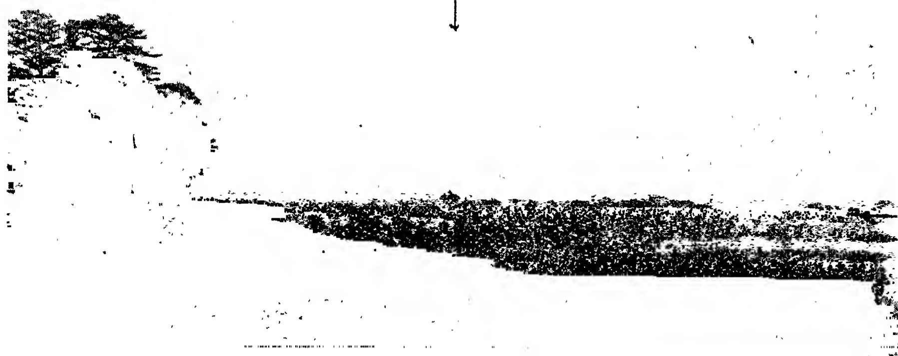


Fig. 3. 廣畑貝塚遠望

感がないでもない。此の意味に於て私の小報告が失はれんとする貝塚の一部の記錄ともならば幸である。

第二章 遺 跡

地 勢

今貝塚の狀態を說く前に先づ遺跡附近の大略の地勢に就て述べれば、霞浦西岸に發達する稻敷の丘陵は遠く北方筑波山地より發して東南に走り其の一支丘は更に分岐して象鼻の如く古渡阿波の際に至りて盡き、利根の大河と霞浦の巨浸を兩面に瞰下し遙かに湖面を隔て東は行方の丘陵に向ひ南は香取埴生の連岡に對す。即ち稻敷郡根本村附近にありて、小野川、羽賀沼の溪谷により更に分岐し狹少なる半島狀をなせる地形を呈す。今此の丘陵を便宜上阿波丘陵と假稱す。貝塚は此の阿波丘陵の北緣端に位し、古渡の入江及び小野川に北面せる位置に位す。即ち古渡村飯出廣畑にして所謂霞浦沿岸の水鄕にして浮島の東方に浮ぶ霞浦の水白き湖面の和やかな景觀を呈す。

而して古代に溯れば此等丘陵の間に挾まれる低地は渾渾渺平たる大江にして現今の湖沼は固よりその區別なく利根川は未だ其の形をなさず太平洋

福とする所である。私は調査に當つて發掘の御手傳ひをしたと云ふに過ぎなかつた。然るに今回兩氏の御好意により本文を草するに至つた事は全く望外とする所であり感謝の外はない。

Fig. 2. 廣畑貝塚附近

貝塚の歴史

本貝塚を初めて學界に紹介した人は若林勝邦氏である。其後大野雲外氏が明治卄九年に發掘を行ひ、比較的低地にある貝塚にして、貝層の厚い遺跡として東京人類學雜誌第十一卷第百二十一號に報告せられてゐる。又同年七月、江見水陰氏の一行が二個所を發掘せられ、同氏の「地底探險記」に面白く該記事が載せられてゐる。

明治三十七年には淸野謙次博士が表面採集に訪問せられ土器の他、凹石、打製石斧、磨製石斧、等を樂に採集せられた由である。其後明治四十一年三月同博士は六日間に亘り、大々的發掘を行ひ、貝塚の中央部を約三十坪究められその結果を「日本原人の研究」に發表せられ、關東貝塚に於ける繩紋式土器と彌生式土器との明らかな層位的區別のある遺跡として報告せられた。爾來層位的に一新型式な貝塚として學界に注目せられ、遺蹟が著明になるに從つて幾多の研究家や採集家が現はれ、度重なる發掘により今や遺跡の遺跡として顧られない

位置

廣畑貝塚は常陸國稻敷郡古渡村飯出廣畑にあり、即ち霞浦西岸に位し、湖水を隔てゝ行方半島と浮島の山影を望む位置にあり。

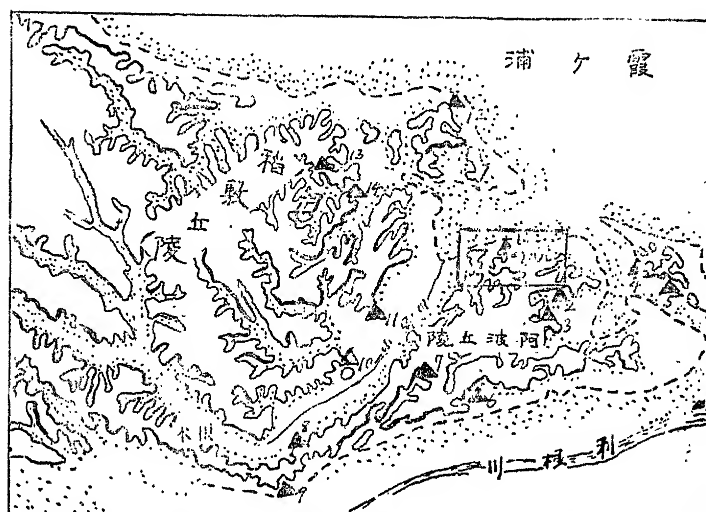


Fig. 1.　一般地形圖並に貝塚分布圖

1. 廣畑貝塚	2. 四箇貝塚	3. 阿波貝塚群	4. 貝ケ窪貝塚
5. 前浦貝塚	6. 福田貝塚	7. 椎塚貝塚	8. 寺内貝塚
9. 柴崎貝塚	10. 村田貝塚	11. 江戸崎貝塚	12. 陸平貝塚
13. 大谷貝塚	14. 給分貝塚	15. 興津貝塚	

發端

昭和六年八月、田澤金吾、甲野勇、竹下次作の諸氏と共に霞浦西岸阿波村附近の貝塚の調査を行つた際、偶々右の貝塚を發掘する機會を得た。蓋し此地方は石器時代の寶庫とまで云はれ、福田、椎塚等の著名な諸貝塚の存在する地方にして、その遺物の豐富にして種類の夥多なる事は斯學間に注目されてゐる所である。然れども此等の遺跡が文化的に如何なる内容を有するか、或は該樣式の遺跡の編年的文化的位置の研究には余りに等閑視せられ、その多くが出土遺物の各個の抽出的研究に止まり遺跡自體のもつ正確なる内容が明示せられて居らぬのは甚だ遺憾とする所であつた。此の意味に於て田澤甲野兩氏は調査に當り、特に層位的關係に留意せられた。その結果多數の遺物を發見し、從來の認識を增益するのみならず考古學上重要なる問題を取扱ふ機會を得た事は私達の最も幸

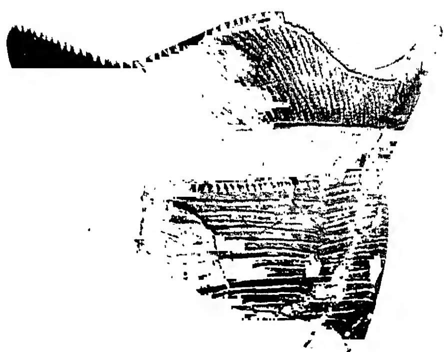
廣畑貝塚

池上啓介

第一章　序　　説

德之烏面繩貝塚遺物

Eine einzartige Muschelarbeit aus dem Muschelhaufen Omonawa No. 1.



廣畑貝塚出土土器
Keramik aus dem Muschelhaufen Hiroheta

廣 畑 貝 塚 出 土 土 偶

Tonfiguren ans dem Muschelhaufen Hirohata

會報

餘白錄

目次

資料

史前學雜誌

第五卷第五號

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレツトノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査竝ニ研究旅行、隨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所內　**史前學會**　電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　杉山壽榮男　田澤金吾　池上啓介

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年九月十五日印刷
昭和八年九月二十日發行

第五巻第五號
定價一圓

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山柏

發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所內　**史前學會**　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　**岡書院**　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第五卷　第五號

昭和八年九月發行

史前學會

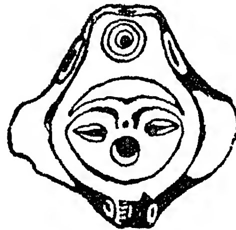
Jahresbericht

der

Japanischen Praehistorie

(SHIZENGAKU-NEMPO)

1933



5.Jahrgang

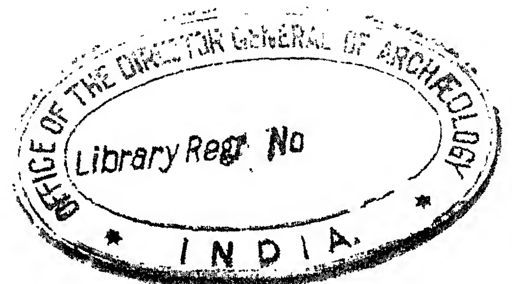
Tokio

Detzember 19343

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9. Onden Aoyama Tokio



Satzungen der Gesellschft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durchjährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen.Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders.verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit diè Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Rtech, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können dieseSatzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

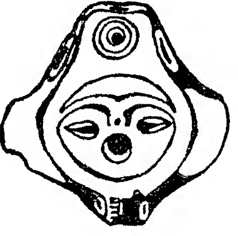
9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Sueo Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

史前學年報

昭和八年



史前學會

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
　研究小報及パンフレットノ發行
　史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
　調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
　本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
　特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典
　本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
　本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九　大山史前學研究所内
史前學會
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　杉山壽榮男　田澤金吾　池上啓介
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

第五卷附錄　定價十五錢

編輯者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　大山柏
發行者　東京市澁谷區穩田一丁目九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　株式會社開明堂東京營業所　中村修二

發行所　東京市澁谷區穩田一丁目九大山史前學研究所内　**史前學會**　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區駿河臺町一ノ八　**岡書院**　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學年報　昭和八年

昭和八年度史前學會事業報告（創立第五年）

一、序

本會は本年報を以て創立第五年を送り第六年の春を迎ふる事になつた事を會員諸氏と共にお喜び致し度い。

本年度は特に雜誌發行に留意した結果、豫定の刊行及び前年度の分をも刊行し得た事は、之れ全く會員諸氏の御寛容なる態度並に御援助に依るもので幹事一同深く感謝してゐる所であります。

本年報に於ては昭和八年度の史前學會事業を報告なし、一つに幹事の責を明かにすると共に、これに基き會員諸氏の忌憚なき御意向を伺ひ以つて昭和九年度に於ける會務を律し、史前學會々員相互の研究機關たる實を益々發揮して行き度いものと考へます。

二、會　員

現在會員　二七二名　本年度　退會者一八名
　　　　　　　　　　　　　　入會者一一名

卷尾ではあるが別記の死亡會員に對し會員諸氏と共に謹んで弔意を表し度い。

會員數に就ては幹事の責任の存する所であるが、本會をして充分發展せしめ其使命を發揮せしめる爲に會員諸氏に於かれても多數の新會員の御誘導をお願ひしたい。

三、幹　事

從來と變更ありません。然し學會發展と共に多數の幹事を凡ゆる意味からも必要とする所から將來增員致し度い考へを持つて居ります。

四、史前學雜誌に就いて

本年度は會員諸氏の御投稿により、有益なる問題を學會に提供し得た事は誠に喜ばしい事である。特に豫定の六冊と共に、前年度の分を無事刊行し得た事は九年度より益々諸氏の御期待に添ふ可く總ての方面に努力し得る事と存じます。又此の機會に本誌を益々發展せしめる意味で奮つて御寄稿を御願ひ致します。論說、資料何れにても結構なれど特に興味ある長論說の場合は特輯號又は單行本の形式をとつて發表し本誌の一特色と致し度いと考へて居ります。

五、遺物寄贈者

本年度に於いても姉妹關係にある大山史前學研究所に、本會

印度支那石斧

藤田　正次氏	岩手縣膽澤郡金崎町發見石鏃石錐
高田藤五郎氏	栃木縣那須郡狩野村發見石鏃石錐
大坊　善章氏	樺太地方發見石器及土器
丸茂　愼一氏	武藏國秋津村笹塚附近發見打石斧及び繩紋式土器

會員諸氏より多數遺物の寄贈に預つた事は誠に感謝の至りであります。

六、寄贈及交換雜誌

本年度に於ける本會への寄贈及び交換雜誌は左の如くであります。

人類學雜誌	東京人類學會
民　俗　學	民　俗　學　會
史　　　學	三田史學會
史　　　苑	立教大學史學會
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名勝天然紀念物保存會
上毛及び上毛人	上毛鄉土史研究會
科　學　知　識	科學知識普及會
考古學雜誌	考　古　學　會
雜　誌　索　引	雜誌索引發行社
大和考古學	大和上代文化研究會
歷史と鄉土	神奈川縣中等學校歷史研究會
吉　備　考　古	吉　備　考　古　會
上　代　文　化	國學院大學上代文化研究會
考　　古　　學	東京考古學會
飛驒考古學報	飛驒考古學
彌生式圖集第一輯	森　本　六　爾　氏
北見鄉土史話	米村喜男衞氏
陸　羽　年　表	大　坊　善　章
東　方　學　報	東方文化學院京都支所
ド　ル　メ　ン	岡　　書　　院
信　　　　濃	信濃鄉土研究會
佐　久　研　究	信濃佐久研究會
神社協會雜誌	大　場　磐　雄　氏

Mémoires de la Société Royale des Antiquaires du Nord

La Société Royale des Antiquaires du Nord.

Furasia Sepetentrionalis Antiqua.

La Société Finlandaise d'Archéologie.

七、昭和九年度の希望

本會を益々發展せしむる意味で、目下會則其他の改良を計畫致し、數度の幹事會を開き熟議して居ります、此の詳細は明年度第一號で委しく御報告致します。

史前學會昭和八年度會計假報告（昭和八年十二月十日締切）

收入之部

總　計　金一、七七五、四一錢也

內　譯

一、前年度より繰越殘金　金　一一八、四三錢也

一、昭和八年度中會費收入　金　九〇七、〇〇錢也

一、史前學研究所より補助金　金　七二二、〇〇錢也

內横山將三郎氏の史前學第五卷第四號に對し五〇、〇〇錢を含む

一、雜誌、小報、パンフレツト等賣上代金　金　二七、九八錢也

支出之部

總　計　金一、七七五、〇二錢也

內　譯

一、雜誌製作費　金一、二五七、七三錢也

內　譯

一、昭和七年度年報及目次索引　金　六一、五四錢也

一、第五卷第一號雜誌　金一七七、八九錢也

一、第五卷第二號雜誌　金一六〇、二一錢也

一、第五卷第三號雜誌　金一五六、六六錢也

一、第五卷第四號雜誌　金二二二、六七錢也

一、第五卷第五號雜誌　金二三八、四一錢也

一、第三卷第六號代册雜誌　金二五〇、三五錢也

一、史前學會に於て拔刷代金未受領の分　金　二六、四九錢也

一、諸印刷費等　金　九、五四錢也

一、雜誌發送料郵便切手購入及通信費　金　一七四、一六錢也

一、事務委託手當　金　二四〇、〇〇錢也

一、振替貯金諸手數料及用紙代金　金　三九、七〇錢也

一、諸雜費　金　二七、四〇錢也

差引殘額（次年度へ繰越殘金）　金　、三九錢也

史前學會々員名簿（昭和八年十二月一日）

A之部

阿部武義　東京市品川區大井水神町二一一六
相川之賀　群馬縣伊勢崎町西町
相川廣秋　東京市大森區入新井四ノ七四四
赤星直忠　横須賀市公郷町二七九六
明石國助　京都市山科町厨子奥若林三五
曉烏敏　石川縣石川郡出城村字北安田
新井正治　東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室
有賀智　東京市目黒區下目黒九六六
有光敎一　京都市左京區北白川平井町二二　岡村馬市方
有坂鉊藏　東京市世田谷區駒澤町大字上馬引澤八四
有坂與太郎　東京市品川區南品川町淺間臺
淺野長武　東京市本郷區向ヶ岡彌生町三
淺野隆　兵庫縣尼崎宮内町二丁目九番地

D之部

終身會員　大坊善章　盛岡市仁王小路三三
大連圖書館　關東州大連市

E之部

江上波夫　東京市小石川區小日向町二ノ五二
小日向ハウス内
遠藤源七　宮城縣石巻町裏町
Eugéne Pépin　51 rue de Lévis Paris (17e) France

F之部

藤井誠一　朝鮮京城府崇三洞九九　松下四郎方
藤森榮一　長野縣上諏訪町本町
藤田亮策　朝鮮京城府東崇洞二〇一藥水台
藤田嗣治　東京市四谷區大久保百人町
一丁目三〇　藤田嗣章方
福田正作　横濱市關東學院中學部
船越章　大阪市西成區南海道一ノ三五　船越政一郎方
布施安昌　東京市外吉祥寺一九〇一

G之部

後藤守一　東京市杉並區阿佐ヶ谷五丁目五二六

H之部

Haguenauer　c/o Ecole Nationale des Langues Orientales Viantes 2 Rue de Lille Paris France.
函館圖書館　北海道函館市

濱田耕作　京都市上京區田中野神町一八

原田博　大阪府堺市神明町西二丁一七

原田廣作　新潟縣佐渡郡河原田町

原田久太郎　橫濱市吉田町中區六二

橋本增吉　東京市杉並區下荻窪町三丁目四七

長谷部言人　仙臺市北六番一二三

服部清五郎　東京市品川區北品川町三丁目御殿山七八中村方

早川莊作　富山市淸水町五八

林田芳太郎　滋賀縣彥根町勘定人町

林魁一　岐阜縣加茂郡太田町

林禮　東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室

林良幹　愛知縣淸洲町

樋口清之　東京市澁谷區代々木富ケ谷町一五〇二

廣瀨祐良　鹿兒島縣大島郡伊仙村面縄

木田七郎　福島縣安積郡福良村中町

北條憲政　東京市神田區田代町二　中村方

堀野良之助　東京市中野區江古田九三五

細淵寅象　埼玉縣北足立郡六辻村大字沼影

細尾榮一　和歌山縣西牟婁郡三栖村

I 之 部

泉山岩次郎　青森縣三戸郡八戸町

池上啓介　東京市深川區冬木町一一

生沼豐彥　茨城縣西茨城郡笠間町

今井楢三　新潟縣長岡市殿町三丁目

今宮新　茨城縣新治郡美並村南根本

石淵三郎　富山市外稻荷三四

石川千代松　東京市四谷區大番町一九

石野瑛　橫濱市神奈川區岡野町一三一

石坂福治　長野縣埴科郡松代町六二九

伊丹信太郎　東京市麻布區龍土町五八

伊東信雄　仙臺市土樋一五四　渡邊方

伊藤富太郎　三重縣桑名郡七取村大字香取

岩井貞麿　東京市杉並區田端七二六

K 之 部

Dr. P. V. van Stein Callenfels　終身會員　Museum, Koningsplein, Batavia-Centrum Batavia, Java.

貝塚保存會　千葉縣香取郡良文村貝塚區豐玉姫神社社務所內

海法成一　東京市赤坂區青山南町二丁目一九

加藤要　北海道岩見澤町空知支廳內

賀古明　東京市神田區小川町五〇

神林淳雄　山形縣東田川郡手向村神林
神出德明　大阪府堺市三國ヶ丘四七〇反正帝陵前通東端
神尾明正　京都市左京區田中里之內町一二　牧嘉三郎方
神山美太郎　栃木縣足利郡御厨町福居五三三
神山能寶留　東京市芝區白金臺町一ノ四八
金關丈夫　京都市帝國大學醫學部解剖學教室
金高勘次　京都市木津屋橋通り堀川東入
簡野啓　東京市大森區入新井四ノ七四四
神崎正　青森縣弘前市弘前女學校
關東廳圖書館　關東廳旅順市松村町二〇
片野貞明　福島縣相馬郡原町日東製絲株式會社內
川合貞一　東京市品川區西大崎一丁目向原一一二
川村眞一　東京市牛込區拂方町一三
黍野藤二郎　石川縣金澤市高等工業學校機械工學科
菊池山哉　東京市深川區東平井町一
菊池三彌　宮城縣宮城郡多賀城村市川
喜田貞吉　仙臺市東二番町八六
桐生和夫　東京市江戸川區平井町三丁目七九九
北村嘉太郎　東京市目黑區三田二〇六
清野謙次　京都市上京區田中關田町一三一
Dr. Herbert Kühn　Institut für Vorgeschichte Köln, Ubierring 11. Deutschland.
小林胖正　東京市澁谷區永住町二七
小林行雄　神戸市湊區夢野清水一一番地
小堀治平　東京市豐島區巣鴨町二ノ二四
小金井一郎　東京市江戸川區小岩町下小岩四四八
小金井良精　東京市本郷區駒込曙町一六
小牧實繁　京都市左京區北白川小倉町五〇
小西宗吉　秋田縣六郷町
終身會員　小島勇之助　京都市上京區寺町廣小路上
國學院大學圖書館　東京市澁谷區若木町九番地
甲野勇　東京市牛込區横寺町五七
河野廣道　札幌市北十八條西六丁目
紅野芳雄　兵庫縣西宮市鞍掛町七
久米本幸種　東京市澁谷區若木町九國學院大學
倉本彦五郎　東京市品川區大井町五二八〇
栗山一夫　兵庫縣加古郡阿閇村本莊　長谷川方氣付
栗山邦二　富山縣上新川郡大久保町
九島勝太郎　東京市中野區沼袋南一丁目下沼袋一九三
忽那將愛　熊本縣熊本醫科大學解剖學教室
桑山龍進　東京市芝區三田豐岡町三〇

M之部

前原光雄	東京市芝區三田慶應義塾大學寄宿舍
九茂武重	東京市澁谷區若木町九國學院大學
丸山瓦全	栃木縣足利市通五丁目三一九五
正木直彦	東京市牛込區矢來町
增田	東京市麴町區有樂町東京日々新聞社
松田巘	東京市淺草區馬道町八ノ一
松倉鐵藏	臺灣臺北市臺灣博物館
松宮左京	東京市目黑區紅葉ヶ丘一、二七九
松本信廣	東京市芝區白金今里町三九
松本與三郎	埼玉縣北足立郡浦和町調ヶ窪
松本芳夫	東京市目黑區下目黑四ノ九七四
松村瞭	東京市本鄉區曙町一六
松承安道	富山縣立礪波中學校
松下胤信	大阪市東淀川區豐峰町南濱一ノ一七 松下別莊內
明治聖德記念學會	東京市小石川區丸山町一一
三木文雄	東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一五〇二有爲齋
三森定男	石川縣江沼郡大聖寺町寺町一
湊嘉平次	富山縣氷見郡氷見町上伊勢
宮川雄逸	兵庫縣川邊郡川西町加茂
三宅宗悅	京都市京都帝國大學醫學部病理學教室
宮坂光次	東京市杉並區大宮前五丁目二二六
Dr. Harbert Mueller	中華民國、北京東華門、丙、北河沿五六號
桃井秀治郎	東京市品川區下大崎二四九 藤田藤吉方
森潤三郎	東京市大森區馬込町原丸三八五〇
森本六爾	東京市澁谷區羽澤町九六
森成麟造	新潟縣高田市横町一四
森貞成	東京市品川區大井山中町四、三三七
森貞次郎	東京市澁谷區若木町九國學院大學
森俊雄	岐阜縣大垣市東長町一〇四一ノ一
守屋孝藏	京都市東洞院丸太町南入
兩角守一	長野縣諏訪郡上諏訪町
許山通麿	福岡市春吉三軒屋四三三
毛利總七郎	宮城縣石卷町住吉町
村田重義	横濱市中區南太田町一七五五
村田義夫	京都市左京區下鴨松ノ木町五六西 野國太郎方
武藤一郎	秋田縣河邊郡豐岩村
武藤鐵城	秋田縣仙北郡雲澤村下延

N之部

內藤政光	東京市世田ヶ谷區若林町一一
中川直亮	横濱市神奈川區青木町東輕井澤一、八五七
中川德治	東京市澁谷區櫻ヶ丘 澁谷會館內

東京市神田區三崎町二ノ九東京齒科專門學校　中井武一郎
奈良縣吉野郡下市町大字下市　中村幸之
東京市品川區大井町四七三八　中根君郎
東京市本郷區西片町一〇ろノ九號　中澤澄男
大阪市大阪每日新聞社　中島秀雄
長野縣埴科郡坂城町農蠶學校　中島惣左衛門
愛媛縣北宇和郡吉田町　長山源雄
福岡市荒戸町四　中山平次郎
東京市中野區江古田町一丁目二〇五九　直良信夫
北海道札幌市帝國大國附屬博物館　名取武光
東京市芝區田町二ノ一八　川崎鐵網工場內　那須章彌（アキヤ）
京都市室町通中立賣下ル　西村保太郎
東京市小石川區小日向臺町一ノ七五　新渡戸稲造
東京市赤坂區氷川町三四　額（ヌカ）田年（ミノル）

O之部

靜岡縣見付町西川原三、九九一　小原一夫
北海道上磯町　落合計策
横濱市神奈川區北幸町三四九七　尾形順一郎
岡山市醫科大學衛生學教室　緒方益雄
朝鮮釜山府釣山中學校　及川民次郎
神戸市楠町七丁目神戸日々新聞社　岡田定信
神戸市荒田町四ノ一七八　小野楠雄
東京市外武藏野町吉祥寺一七六ノ三號　大場磐雄
東京市小石川區小日向臺町二丁目一六　大口喜六
東京市本郷區駒込林町一〇五　大給尹
和歌山縣日高郡御坊町大字島一六九　大地原寛龍
京都市伏見桃山大谷邸三夜莊　大谷光瑞
東京市本郷區森川町七九　太田天洋
東京市麹町區有樂町東京日々新聞社　大塚虎雄
東京市豐島區長崎東町一ノ一二八五　大塚彌之助
岩手縣江刺郡岩谷堂町　小田島祿郎
神奈川縣小田原町本町　尾崎亮司
東京市澁谷區穩田町一丁目九　大山柏方　大山梓
東京市澁谷區穩田町一丁目九　特別會員　大山柏

S之部

東京市世田ケ谷區代田五〇七　齋田平太郎
京都市左京區田中樋ノ口町六二　大澤方　齋藤忠
東京市杉並區馬橋町二九八　齋藤房太郎
東京市世田ケ谷區代田鶴岡六三二　齋藤弘
東京市四谷區愛住町一六　齋藤庄太郎

新潟縣下千谷町旅屋町　齋藤秀平
東京市中野區住吉一七　片桐方　坂口保治
東京市小石川區高田老松町四三　酒井忠一
臺灣臺北市龍口町三ノ一八　坂元軍二
熊本縣菊池郡泗水村字住吉日吉神社　坂本·經堯
奈良縣高市郡眞菅村大字曾我　眞菅小學校內　崎山卯左衛門
Köln, Hansariug 32 a Deutschland　Dr. Alfred Salmony
兵庫縣津名郡廣石村　佐野淡一
東京市芝區高輪南町三〇　佐野又治
青森市榮町　佐々木新七
横濱市神奈川區青木町神奈川高等女學校　佐藤善治郎
北海道稚內町中通リ三　關　正
東京市板橋區練馬向山町四一　柴田常惠
東京市牛込區市ヶ谷仲之町三八　志賀三亥
東京市淀橋區柏木町三四八　鹿野忠雄
關東廳旅順博物館　島田貞彥
奈良縣高市郡八木町新道　島本一
東京市豐島區池袋四丁目五〇一　島村孝三郎
東京市世田ヶ谷區池尻一五五　下村作次郎
東京市目黑區鷹番町八六　若木寮內　下村正信
東京府北多摩郡小金井村一四二八　品川灦

三重縣宇治山田市古市町　篠田良二
山形縣酒田市山王臺　白崎良彌
仙臺市東北帝國大學理學部地質古生物學教室　曾根廣
東京市瀧谷區氷川町五三　阿部方　鈴木一
三重縣津市縣立女學校　鈴木敏雄
東京市四谷區南寺町五〇　菅沼秀助
滿洲國奉天浪速通三二　大滿蒙新聞社內　菅崎三文
東京市牛込區河田町一一　杉山壽榮男
東京市日本橋區小舟町三ノ一　杉原莊介
東京市外砧村喜多見一〇四六　角田文衞

T之部

横濱市鶴見區東寺尾町一五一二　多田純二
長野縣埴科郡坂城町　高橋文男
東京市四谷區仲町學習院初等科　高橋一凱
東京市大森區東調布町田園都市第八四號　高橋正人
群馬縣前橋市紅雲町　高橋照之助
熊本縣鹿本郡山東村　高群清太
茨城縣新治郡石岡實科高等女學校　高野修正
東京市淀橋區上落合四五六　高島德三郎
東京市四谷區花園町三五　竹下次作

田村文雄　神戸市西灘町上野八二
田邊孝次　東京市南葛飾區金町一〇七四
田中春雄　石川縣金澤市騎兵第九聯隊
谷敬一　北海道函館市谷地頭町八六
田澤金吾　東京市杉並區上荻窪町五八六
辰馬悅藏　兵庫縣西宮市鞍掛町七九
田原鎭雄　東京市澁谷區穩田町二丁目八
東北帝國大學附屬圖書館　仙臺市
鴇田忠雄　靜岡縣掛川町城內
德富武雄　東京市大森區山王二、八三二
富田省吾　臺灣臺北市東門町五條一一三
外山哲二郎　新潟縣高田市高田病院
塚越卯太郎　東京市牛込區市ヶ谷町一一二
塚本壽一　東京市芝區白金三光町一一九
恒松安夫　東京市赤坂區高樹町三　岡本方

U 之 部

梅原末治　京都市左京區下鴨中川原町三四
宇宿捷　東京市世田ヶ谷區羽根木町一七一五
上田恭輔　東京市大森區新井宿二丁目木原山一六一八
上原準一　香川縣香川郡安原村
上野精一　大阪市北區中之島三丁目　終身會員

W 之 部

和田千吉　東京市小石川區林町九五
和食和　京都市左京區高野清水町二六
渡部晴雄　福島縣相馬郡　山上小學校內
渡邊泰三　東京市麻布區富士見町二八
渡邊鶴松　東京市本鄉區駒込林町一　別所弘三方

Y 之 部

山田清　長崎市紺屋町一八
山口隆一　東京市世田谷區代田一丁目六五二ノ二
山本磐彥　横濱市中區本牧町箕輪下三九二
山本桝藏　仙臺市東二番町八六　虎岩方
山本行範　京都市中立賣通烏丸西入
山崎重長　長崎縣南高來郡加津佐村　山崎醫院
山內清男　仙臺市東北帝國大學解剖學教室
柳澤保承　東京市澁谷區代々木三谷町二八三
柳田國男　東京市外砧村成城學園前
鑓野目条藏　秋田市川口下裏町
矢崎源藏　長野縣諏訪區永明村

矢崎芳夫	東京市澁谷區代々木富ケ谷町一四五三
安間清	長野縣南安曇郡豐科高等女學校
八幡一郎	東京市王子區岩淵町下村一四三三
横山健堂	東京市赤坂區青山同潤會アパート(參宮表參道)三號館第三十三番
横山將三郎	朝鮮京城府東四軒町五〇
米村喜男衛	北海道北見國網走町
吉田宇太郎	奈良縣高市郡 鴨公小學校內
吉井太郎	兵庫縣西宮市社家町一〇
吉川菊藏	横濱市神奈川區神奈川通六丁目一八一
吉村鐵臣	福岡縣築上郡友枝村
吉成安親	大分縣西國東郡高田町宇佐神宮
吉澤正男	長野縣上伊那郡赤穗町下平
依田雄甫	東京市杉並區馬橋二丁目一九〇

合計　二七二名　（退會一八名 入會一一名）

雜誌名略稱一覽（再錄）

1 論文中に屢々引用せらるゝ雜誌名を、一々記載する煩を避け、或は本名未詳の略稱等を統一する爲、本覽を設けた。便利であるなれば御使用を願ふ。
2 雜誌の種類も、手近にあり、且つ比較的多く引用せらるゝものと考へらるゝ範圍に止めた。特に外國雜誌に於て然りである。
3 本覽は、本年度の試みに過ぎない。次年度に於て、改正增補も期して居る。

本名	略號
A	
American Anthropologist.	Americ. Anthr.
Aarböger for Nordisk Oldkyndighed og historie.	Aarbög. f. Nord. Old. o. His.
B	
Bulletiues ef Mémoires de la Société D'Anthropologie.	Bull. et. mém. Soc. d'anthr.
C	
地理學評論	地評
地質學雜誌	地質
中央史壇	中央
D	
動物學雜誌	動物
E	
Eurosia Septentrionalis Antipua.	Euras. Sept. Antip.
G	
現代の科學	現科
J	
上毛及上毛人	上毛
人類學雜誌	人類
上代文化	上文
人性	人性
Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Irland.	Jour. Anthr. Inst.
K	
考古學雜誌	考雜
國學院雜誌	國雜
考古學	考古學
科學知識	科知
考古學會雜誌	考會雜
考古界	考古界
考古學研究	考研
Korrespondenz Blatt der deutschen Gesellsochaft für Anthropologie, Ethnologie und Ugeschichte.	Korr-Blatt d. deutschen Ges. f. Anthr Ethnol. u. Urgeschichte.
L	
L'Anthropologie.	Anthr.
M	
民俗藝術	民藝
Man.	Man.
Mannus.	Mannus.
Memoires de la Société Royale des Antipuaires der Nord.	Men. d. l. Soc. Roy. d Antiq. d. Nord.

本名	略號
Mitteilungen der Anthropologie. Gesellschaft in Wien.	Mitt. d. Anthr. Ges. Wien.
民俗學	民俗學
民族	民族
N	
日本研究	日研
Natural History.	Nat. His.
P	
Praehistorische Zeitschrift.	Praehis. Zeitschr.
R	
歴史地理	歴地
歴史と地理	歴と地
Revue anthropologique.	Rev. d'anthr.
Revue mensuelle de l'Ecrle d'anthropologie de Paois.	Rev. mens. d. Ecol. anthr. d. Paris.
S	
社會學雜誌	社雜
宗教研究	宗研
史學	史學
信濃考古學會誌	信考
埼玉史談	埼史
史學雜誌	史雜
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名
史前學雜誌	史前雜
史苑	史苑
史林	史林
T	
東北文化研究	東文
東洋學藝雜誌	東學誌
東洋學報	東學報
Z	
Zeitschrift für Ethnologie.	Zeitschr. f. Ethnol.

遺跡記號例（再錄）

地上標式の一例

貝塚	鹹	水	▲
	淡	水	$\overline{\blacktriangle}$
	鹹淡		$\dot{\blacktriangle}$
	未調査		△
住居跡	竪穴		▼
	平地住居		⌂
	洞窟		⎍
單なる遺物發見地			×
繩紋式を示す場合			↑
彌生式を示す場合			+

備考

1 本標式は私共研究所で主として遺跡を標式する爲に作出したもので、會員諸君の御參考までに掲出したものであります。
今後私共ではこれによつて標式してまいりますから、本標式と御對照を御願します。

2 標式は猶不足のものもありますが、漸次増補を加へて行きたいと思ひます。

3 標式の樣式は必ずしも、本標式のみとも限らず、更に色々の考案もあることゝ思はれますから、これ等に對し、諸君の御考案を御知らせ下さい。

昭和八年　史前學關係論文並報告資料

(一) 縄文式關係

土器群より見る集式に二型あり	松本彦七郎	人類學雜誌	四八―九
多摩川沿岸東京南部に於ける古代遺跡及遺物	西岡秀雄	同	四八―一〇
我國發見石鏃の脚に就いて	喜多貞吉	考古學雜誌	二三―一二
玦狀耳飾考	樋口清之	同	同
有孔石劍の新資料	八幡一郎	同	二三―一
縄紋式土器の過去及び現在	大場磐雄	同	同
鹿兒島縣姶良郡帖佐村に於ける遺跡地	隈元靜哉	同	二三―五
東京市大森區久ケ原町庄仙の土器	齋藤武一 齋藤房太郎	同	二三―一〇
所謂楕圓捺型紋土器の發見例	八幡一郎	考古學	四―一
山梨縣石器時代概觀(中)	仁科義男	同	四―二
南九州に於ける縄文土器の一形式	木村幹夫	同	四―五
飛騨發見の特異型注口土器	笠原烏丸	同	四―六
所謂「御物石器」に關する一考察	喜田貞吉	同	四―七
豐川流域の石器時代	野澤正次	同	同
楕圓捺型紋土器資料	笠原烏丸	同	同
栅村進通石器時代洞窟の調査報告	神田五六 金井喜久一郎	信濃	二―七
北安曇郡北城村幸田遺跡及び出土器	江口善次	信濃	二―三
「人面石」發掘調査報告	福田夕咲	飛騨考古學會々報	一
單石「黒岩」に就いて	同	同	同
大八賀村上野垣内に於ける石器時代の巨石構築	江馬修	同	同
廻り洞丘上の巨石群	福田夕咲	同	二
飛騨出土石鏃の型式分類(一)	加藤輝次	同	同
飛騨の土偶	江馬修	同	同
武藏國橘樹郡宮前村梶ケ谷方貝塚調査報告	岡榮一	武藏野	二〇―二
西ケ原貝塚いづこ	服部清五郎	同	二〇―三
多摩川を中心としたる先史時代	黒田善次	同	二〇―四
石器時代に於ける住居址に就いて	上田三平	建築雜誌	四七―五六六
上毛石器時代遺跡概説	岩澤正作	毛野	四・五・六
磐城發見の籾殼附着の土製品と共遺蹟	八代義定 森本六爾	考古學增刊 日本原始農業	
骨角器漫談	長谷部言人	史前學雜誌	四―一
飛騨高山附近の石器時代遺物及び遺跡	林魁一	同	同
羽後國石名館發掘の土偶土版等に就いて	小西宗吉	同	同
相模地方の遺蹟と遺物	赤星直忠	同	同

横濱市中區山手貝塚調査概報	松下胤信	史前學雜誌	四—一
下總飛の臺貝塚調査概報(補遺)	杉原荘介	同	四—三
羽後國仙北郡神代村刎ケ臺遺跡	武藤鐵城	同	同
雙頭有抅骨銛	大山柏	同	同
石小刀の刄に就いて	武藤鐵城	同	同
武藏、下總に於ける石器時代遺跡遺物發見地追加錄	簡野啓	同	同
相模江戸坂貝塚の土器資料	赤星直忠	同	同
續考古雜錄	松下胤信	同	同
鯨骨を出土せる石器時代遺跡	池上啓介	同	同
廣畑貝塚	同	同	四—五
日本石器時代人に關する一疑問	山口隆一	同	同
長野縣上水内郡柵村追通石器時代洞窟住居跡	金子富雄	同	同
圓筒土器埋藏二例	武藤鐵城	同	同
貝塚雜記	簡野啓	同	同
鐸狀土製品	樋口清之	同	同
石器時代包含層中發見の鐵鏃	同	同	同
千葉縣印旛郡手賀村岩井貝塚發見の土偶	池上哲介	同	同
石器骨角器	八幡一郎	日本考古學圖錄大成、第十五	

(二) 彌生式關係

讃岐國女木島鷲ケ峰貝塚小報	新海巧	人類學雜誌	四八—一
攝津國加茂遺跡採集の一磨製石鏃	福島義一	人類學雜誌	四八—二
彌生式土器に於ける貝殼施文	小林行雄	同	四八—三
多摩川沿岸東京南部に於ける古代遺跡遺物	西岡秀雄	同	四八—一〇
長門國小濱山出土の陰刻石器について	山本博	考古學雜誌	二三—三
「銅鐸の研究」出版以後發見の銅鐸一覽表	梅原末治	同	二三—四
伯耆八橋町銅鐸出土遺跡	倉光清六	同	同
遠江新發見の銅鐸	船越勇三郎 山崎常磐	同	同
淡路國發見の銅鐸數について	鍛治利夫	同	同
銅鐸研究の一新資料	梅原末治	同	同
東京府西多摩郡増戸村網代西峯田の一遺跡に就いて	齋藤房太郎	同	二三—五
銅鐸の一異例	笠井新也	同	二三—六
尾張國名古屋市西志賀貝塚に就いて	吉田富夫	同	同
伯耆八橋町の銅劍發見遺跡と其遺品	倉光清六	同	二三—七
利根郡川場村發見竪穴に就て	山崎義男	上毛及上毛人	一九八
日吉臺住居趾發掘報告	橋本増吉	史學	一二—一
幾内彌生式土器の一二相	小林行雄	考古學	四—一
東日本繩文式時代に於ける彌生式並に祝部式系文化要素摘出の問題	森本六爾	同	同
南信濃發見の一種の抉入を有する石器類	藤森榮一	同	四—二
山梨縣石器時代概觀 中	仁科義男	同	同
武相考古雜記 一	石野瑛	同	同—二・三

最初の彌生式土器	森本 六爾	考古學	四—二・三
彌生式土器木葉狀文の一新例	同	同	同
伯耆新發見の銅鐸	倉光 清六	同	四—三
飛騨川上川右岸に發見せる彌生式土器	笠原 烏丸	同	同
神戸市東山遺蹟彌生式土器研究一	小林 行雄	同	四—四
銅鐸に於ける新事實	倉光 清六	同	同
銅鐸面の動物畫	直良 信夫	同	同
青銅器の鑄造	森本 六爾	同	同
揖北先史遺跡採集石器の二三に就いて	福島 義一	同	四—六
彌生式彩文土器	杉山壽榮男	同	同
大和竹之内遺物	森本 六爾	同	四—七
日本新石器時代家畜としての馬牛犬に就いて	直良 信夫	考古學增刊日本原始農業	
銅鐸面繪畫の原始農業的要素	藤森 榮一	同	
伯耆の打製石斧	倉光 清六	同	
筑前岩崎竪穴檢出の燒米 附 筑前竹下發見の燒米	中山平次郎	同	
筑前發見の磨製石鎌	森本 六爾	同	
尾張發見の籾痕ある土器	藤澤 一夫	同	
三河發見の籾痕ある彌生式土器	藤本 六爾	同	
甲斐國發見の籾痕ある彌生式土器片	仁科 義男	同	
籾のあとある二三の彌生式土器について	鈴木 尙	同	
飛騨の彌生式土器と共遺跡	笠原 烏丸	考古學	四—七
豐川流域の石器時代	野澤 正次	同	同
愛知縣下發生の有柄石劍	森本 六爾	考古學	四—七
有史以前の大和	乾 健治	考古の大和	五・六・七
大和岩尾の石器時代遺跡	同	同	六
三輪遺跡とその遺物の研究	樋口 清之	大和の考古學	三—五
多摩川を中心とした先史時代	黑田 善次	武藏野	二〇—四
安房神社洞窟人骨	小金井良精	史前學雜誌	四—一
安房神社洞窟發掘調査概報	大場 磐雄	同	同
伊豫國喜多郡地方遺跡概說	樋口 清之	同	四—二
大和有井池出土の彌生式土器	島本 一	同	四—五
葉紋を捺押せる手抉土器を出せる十二社遺跡	岩澤 正作	毛野	六
彌生式文化と原始農業問題	森本 六爾	考古學增刊日本原始農業	
低地性遺跡と農業	同	同	
穀類を出した竪穴	深澤 多市	同	

(三) 古墳關係

滑石製玉類の製造所趾	井上 欣二	考古學	四—七
駿河浮島村出土の小銅鐸	後藤 守一	考古學雜誌	二三—四
武藏國都築郡中里村市ケ尾横穴群調査報告	石野 瑛	同	二三—七
「桂林漫錄」記載の埴輪土偶に就て	相川 龍雄	上毛及び上毛人	一九三
提瓶考(原史時代土器の研究一)	同	同	一九五

小角田前古墳考	相川龍雄	上毛及上毛人	一九八
白石稻荷山古墳考	同	同	一九九
下野國眞岡町大塚古墳發掘の埴輪	佐藤行哉	史蹟名勝天然記念物	八—七
相模國中郡旭村根坂間横穴群調査報告	石野瑛	同	同
下總と播磨發見の埴輪	淺田芳郎	考古學	四—六
讃岐高松石清尾山石塚の研究	梅原末治	京都帝大文學部考古學研究報告第十二册	
上野國佐渡國赤堀村今井茶臼山古墳	後藤守一	單行本	
諏訪郡平野村今井區地獄澤に於ける一小古墳	兩角守一 小口榮藏	信濃	二—四
上高井郡南部地方の古墳の二三	内村生	同	二—七
大和に於ける陶棺出土遺跡	田村吉水	大和の考古學	三—五
島根山古墳出土の車輪石の眞相	森田常次郎	同	同
方形古墳に就いて	淺田芳郎	史觀	三
常陸國岡本町上野の古墳及發掘遺物	墻瑞比古	武藏野	二〇—三
再び上代に於ける鎌に就て	兩角守一	考古學增刊日本原始農業	
農夫埴輪土偶考	相川龍雄	同	
信濃善門寺の籾痕を有する土器片	藤森榮一	同	
神奈川縣鄕土史讀本	石野瑛	武相考古學會	

（四） 雜

京都府史蹟名勝天然記念物第十四册		京都府	
東京府史蹟保存物調査報告書第十册		東京府	
武相考古雜記（一）（二）	石野瑛	考古學	四—一 四—三
日本考古學に於ける航空機利用の問題	森本六爾	同	四—四

（五） 千島、北海道

利尻禮、文兩島に於ける考古學的調査報告	名取武光	史前學雜誌	五—五
發寒村遺跡發掘記	河野廣道	蝦夷往來	一〇
發寒村發掘の遺物に就いて	同	同	同

（六） 琉球

奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物	大山柏 小原一夫	史前學雜誌	五—五

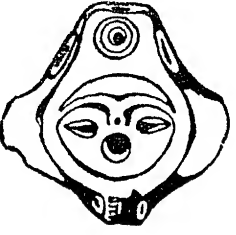
（七） 朝鮮

釜山府絶影島東三洞貝塚調査報告	横山將三郎	史前學雜誌	五—四

史前學雜誌

第五卷

總索引及目次



昭和八年

史前學會

史前學雜誌　第五卷總目次

論説

史前學雜誌　第五卷索引

附録

挿圖目錄

第一號

第二號

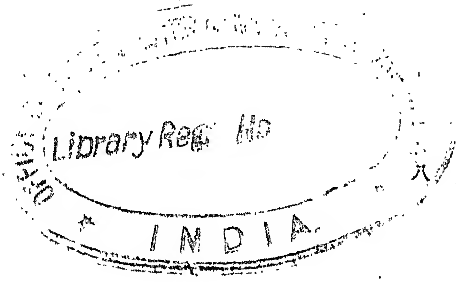
第 三 號

第 四 號

第五號

廣畑貝塚挿圖（池上）

CENTRAL ARCHAEOLOGICAL LIBRARY
New Delhi.



Library Reg. No
INDIA

"A book that is shut is but a block"

CENTRAL ARCHAEOLOGICAL LIBRARY
GOVT. OF INDIA
Department of Archaeology
NEW DELHI.

Please help us to keep the book clean and moving.

S. B., 148. N. DELHI.